319
160

Ⓜ

克肖なる神父埃及マカリイ全書

堀江復譯

明治二十八年十二月

正教會編輯局

020278-000-3

319-160

埃及マカリイ全書（克肖なる神父）

堀江　復（薩瓦）／訳

M39

ABI-0084

埃及マカリイ全書目錄

克肖なる神父

克肖なる埃及マカリイの傳……三十一

講話

第一講話　預言者イエゼキリが錄せる現象の譬解……四十四

第二講話　悪國即非の國の事及び神は獨り我等より罪を除きて我等を惡王の奴隷たるより救ひ得る事……四十九

第三講話　兄弟は正直と和平とにより互に誠實を以て生存して內部の思念と戰ふべし……五十四

第四講話　「パリステアニン」たる者は神と天使等より天の頌讃をうけんとせば謹愼と勤勉とを以て此世を進行せざるべからず……五十七

第五講話　「パリステアニン」と此世の人々との間の差異は大なり一は世の神を己れに有し心に於ても智に於ても地上の械繫に縛らるれど一は天父の愛を希ひ獨り彼を以て其惡くの願望の所歸と爲す……七十七

明治17
內務

第六講話　神に悦ばれんと欲する者は平安沈默温柔及び容智を以て祈禱を行ふべし高聲に祈禱して衆人の誘惑とならざらん爲なり此の講話には二問題を能む即寶座と榮冠は物質的製造なるか、イズライリの十二位とは如何なるものなるかとの二問題是なり……百〇一

第七講話　ハリストス人に寛容なる事此講話にも若干の問答を含む……百〇七

第八講話「ハリステアニン」は祈禱を行ふ時如何なるべきか、完全の程度即「ハリステアニン」は完全なる程度に達し得べきか……百十二

第九講話　神の約束と預言とは種々の試練と誘惑の時に應驗する事及び獨一の神に服從する者は惡者の誘惑より救はるゝ事……百十七

第十講話　神の恩寵の賜は謙遜と熱心とを以て守られて增殖すべく、高慢と怠惰とにより失はるべし……百二十六

第十一講話　聖神の力は人心に於て火に似たる事、また心に生ずる思念を區別するが爲に必要を有する者の事、モイセイが樹頭に釘してハリストスの象となせる死蛇の事此講話には二の問答を含む一はハリストスと惡なるサタナとの問答にして、一は罪人とサタナとの問答なり……百三十

第十二講話　アダムが神誡を犯しゝ以前の情況及び其後彼は自己の形儀をも天に屬する形像をもうしなひし事此講話には最も有益なる問答若干を含有す……百四十二

第十三講話　神は「ハリステアニン」よりいかなる結果を要求するか……百五十六

第十四講話　思と智とを神にさゝぐる者は心の目を照されんとの望と、神が此の如き者等を聖德と大なる清潔とにより機密に進ましめて、これに其恩寵を分與し給はんことの望みにより此を爲す事、又或る天の幸福をうけんを願ふ所の我等は何を爲さんを要する事、終に使徒及び預言者等は窓に入る太陽の光線に似たゝ事、且此講話はサタナの地と天使の地の如何なるものなるかを敎ふ、即二者は觸るゝ能はざるもの、又見るべからざるものなることを敎ふるなり……百五十七

第十五講話　此講話にはいかんせば靈魂が成聖と無玷と清潔とを以て其新郎の前に即イエスス、ハリストスの前に居るべきかといふに關する詳細なる敎旨を包含す、また或る最敎訓となるべき若干の問題を含有す、例へば復活に於て盡くの肢體は起るかといふに關する問題及び他の多くの問題即

惡の事、恩寵の事、自由なる行意の事及び人間の價値に關する問題是なり。……百六十三
第十六講話　神に屬する人々も原罪より流るゝ試惑と患難とに屬する事。……二百〇三
第十七講話「パリスチアニン」の靈神的傳音と光榮の事、パリストスなくんば救はれて永生に與かる者となる能はざる事。……二百十四
第十八講話「パリスチアニン」の實の事、即種々なる方法をもて「パリスチアニン」を完全に達せしむるパリストスの事及び聖神の事。……二百二十五
第十九講話　大に進歩して成長せんと欲する「パリスチアニン」は己を凡の善に强ふべし、その在るところの罪より救はれて聖神に滿てられんためなり。……二百三十三
第二十講話　內部の人の眞醫たるパリストスは獨り靈魂を愈し、恩寵の衣を以てこれを飾るを得るなり。……二百四十一
第二十一講話「パリスチアニン」には二樣の戰あり、即內部と外部の戰ありて、外部なる者は世の離散より己を遠ざくるにあり、されど內部の戰は凶惡の諸神を以て暗に入れらるゝ意念と心中に於て戰ふにあり。……二百四十六
第二十二講話　此の生命を去る者の二樣の狀態……二百五十
第二十三講話　高價なる王の眞珠は王種より生れたる者のみ戴くを得る如く、天の眞珠も神の子にのみ戴かしむるを得べし。……二百五十一
第二十四講話「パリスチアニン」の狀態は寶買と醱酵に似たるあり、商賈は地上の利益を集むる如く、「パリスチアニン」も此世に散亂したる思念を集めん。また醱酵はすべての混合物を酸氣あるものとする如く、罪なる醱酵もアダムの全族に透る、然れども「パリスチアニン」は天に屬する恩寵の醱酵を篤信なる靈魂に入るゝなり。……二百五十四
第二十五講話　此講話はパリストスを以て固められんずんば一人も惡者の誘に勝ち得べからざるを敎へ、神聖なる光榮を願ふ者の爲すべき所を示す、またアダムの破誡により肉慾の奴隷に陷りし我等は洗禮の機密を以て救はるべきを敎へ、終に涙と神聖なる火の力の大なるを示す。……二百五十九
第二十六講話　不死なる靈魂の價値、貴重、能力及び作用の事、彼がサタナに試みられ誘惑より救はるゝ事。此講話には最敎訓となるべき若干の問答を添

へたり。……二百六十七
第二十七講話　此講話は「ハリステアニン」たる人の價値と位置とにつきて說始めたる詳細の論說を終ふるなり、此講話は自由なる望に關して多くの最有益なることを敎へてこれに神聖なる智慧をみちみてる若干の問題を添ふ。……二百八十六
第二十八講話　此講話に於ては靈魂の不幸を說きわらはしてこれを哭す、即罪の故に主が靈魂に居らざること是なり、また婦人の生む所の者の中彼より大なるものあらずといはれたる授洗イオアンの事を言ふ。……三百〇五
第二十九講話　神は人間に恩寵の分配を成すに二樣の方法を以てして、義なる審判において結果を促す。……三百十
第三十講話　靈魂は神の國に入らんには聖神によりて生れざるべからずして、其狀態は如何なるか。……三百十六
第三十一講話　信者は己の智を變化し惡くの思を神に集中せんを要す、神に對するすべての勤は實にこれにあり。……三百二十四
第三十二講話　「ハリステアニン」の光榮は今は其靈魂にあり、されど復活の時には恩寵の量に準じ外にあらはれて身體を表揚せん。……三百二十九
第三十三講話　不斷熱心に神に祈るべし。……三百三十八
第三十四講話　復活に於て「ハリステアニン」の身體が靈魂と共に照されて受くる所の光榮の事。……三百四十一
第三十五講話　舊「スボタ」と新「スボタ」の事。……三百四十四
第三十六講話　靈魂と身體と二樣の復活及び復活せし者の光榮の不同なる事。……三百四十六
第三十七講話　樂園の事及び神的律法の事。……三百四十八
第三十八講話　眞の「ハリステアニン」と眞の「ハリステアニン」の如何なるとを試み知らんには我等に多くの注意と瞭解とを要す。……三百五十七
第三十九講話　神が我等に神聖なる書を與へたるは何の爲か。……三百六十一
第四十講話　すべての德行も又すべての惡行も互に關連すること環の鎖に於ける如くして、一は他に係る事。……三百六十二
第四十一講話　恩寵にも又惡習にも漸々生長する靈魂の奧底は甚だ深し。……三百六十七

第四十二講話　人を完全ばみちびき或はこれを害ふ者は外部に屬するものにあらずして、內部に屬するものなり、即或は恩寵の神なり、或は凶惡の神なり。……三百六十九
第四十三講話　「パリスチアニンたる人の進歩と其進歩のすべての力とは心に關係するを種々に描寫す。……三百七十二
第四十四講話　心の慾と病とを療するパリストスはパリスチアニンたる人に如何なる變化革新を成し給ふか。……三百七十九
第四十五講話　人を醫すを得るは或る藝術にあらず、又此世の富にも非ずして、たゞパリストスの來ることを是なり。此講話に於ては人と神との最大關係を示す。……三百八十七
第四十六講話　神の言と世の言と神の子と此世の子との間の差別。……三百九十三
第四十七講話　法下にありし事の譬解。……三百九十八
第四十八講話　神における完全なる信仰。……四百〇九
第四十九講話　人もし他の世の福樂に與かるを得ずんば此世の快樂を辭する充分の理由あらず。……四百十四
第五十講話　神はその諸聖人に於て奇跡を行ふ。……四百十八
克肖なる我等が父埃及マカリイの書翰。……四百廿三

說教

第一說教　心を守る事。……四百五十九
第二說教　靈神上の完全。……四百八十
第三說教　祈禱の事。……四百九十三
第四說教　忍耐と細心。……五百〇七
第五說教　智を高尙にする事。……五百三十三
第六說教　愛の事。……五百五十三
第七說教　智の自由の事。……五百八十五

目次終

克肖なる埃及マカリイの傳

マカリイは彼と同時なる他のアレキサンドリヤの苦行者マカリイとは同名異人にして埃及のマカリイと名づけられ、其聖德と賢明との爲に大マカリイと名づけられ、生涯三百年に生れたり。彼は少年の時を父母の家に送り、父の群を牧したりき。マカリイは何れの學校に教育をうけしや詳ならず、然れども其書する所によるに、彼には書籍上の教育もなくんばあらざりしこと明なり。*さりながらその道德上の教育は夙に始まりしこと疑なし。彼が最幼稚なる年に於て行爲の方正を心掛けしことは、彼の自から語りし如く、弱年に於ける一の事件はこれを證す。一日彼の同輩等無花果を取らんが爲に他の園に行きけるが却走する時、其一を落したるを、マカリイ拾ふて食盡しぬ。それ此の過失は彼の潔き心頭に重く掛りて、永く記憶にとゞまりしかば、マカリイの自からいひし如く、終生彼は此事を涙なくして憶出すことあたはざりしといふ。

*彼は世の博識の說を記載し（講話十四の七）アリストテリ、プリトン、ソクラトを知り（四十二の一）、文法家、修辭家、詩人、辯學者の事を知る（四十五の二）、又第十五講話には學校に於て

拙くる教課の順序は誦讀、羅甸語、文法、法學なるを示す（四十一。）入然より火は醫術より信れる許多の比喩は明に彼が博物學及び社會生活の狀態を熟識するを證すと信へて我等に至れる彼の書に依るに希臘語を知れるは既に彼が教育あることの證據と爲すに足るなり。

苦行の生活に向ふ强大なる趨勢は、第四世紀の初に當り、大アントニイの師表によりて埃及に起り、信者の多數の群を野に誘引しけるが、特別奥妙の途を以て被選者を其預定したる途にみちびける神の恩寵の作用は、マカリイをしてすべて地に屬する慮をすてゝ、その靈魂の救を專ら慮るに己を捧げしめたり。

マカリイは世を棄てんと決心しけるが、俄に野に移ることをなさず、荒野の苦行の難きを忍耐し得るや否や、自から己を試みんと欲して、先づ村里に近き所の小庵に移りぬ。大アントニイも其苦行の生活を此の如く始め、またアントニイの先に敬虔なる生活の多くの熱心者も、此の如く苦行したりき。

祈禱と、聖詠を唱ふと、思を神に集ぐるとはマカリイが小庵に於ける首なる業なりき。生計を求めんが爲に彼は籃を編めり。一の知己あり、彼に來りて其細工物を取り、これを賣りて得たる所の金にて彼に食を給せり。マカリイの德行の生活と敬虔賢明なる教訓とは一般の注意を彼に向はしめたりき、されば近きにある一村の住者等來り、彼の意に反し彼を以て己の教法師とはなしぬ。しかれども、マカリイは獨居を愛したるにより、他の更に遠隔なる地方に逃れしが、以前の知己は彼を其處に尋ね得て、すべての入用を彼に給したり。

マカリイは此處に於ても其心に甚だ願へる靜默を破られずして樂むこと久しからざりき。教訓を求むる者等は早くも彼に集ひ來りぬ。然のみならず、こゝに試惑に遭遇しけるが、彼はたゞ聖神の力を以て堅めらるゝ人のみ堪へ得る所のものを忍耐するを得たりき。近きにある所の村に一處女あり、懷姙し、マカリイを認て其罪の原因者となしぬ。マカリイは村の住民等よりうけたる汚辱と打擊とを溫柔に忍耐して不平を訴へざりき。剩へ彼は處女に養料を送るべき義務をさへ負はされければ、これが爲に甚しき勞働を以て己を疲らせり。しかれども神の攝理は奇跡を以て聖なる苦行者の無罪なるをあらはせり。不幸なる子を產ひべき期已に至りけるに、處女は恐ろしき苦悶にかゝり、分娩する能はずして、終にマカリイの無罪なるを衆人の前に告白し、其罪の眞の原因者を名いふに及べり。故なくして通世者に凌辱をからむらしめたるが爲に悔恨して自から懊惱せる村民等は赦免を願はんがため

に彼の許に集ひ來りしが、これをきゝてマカリイは最遠隔なる野に隱れたり、即ス
ケトの野に隱れたり。
礦石に富める湖(ニトリイの湖)を距る遠からざるリフィイの野には今に至る迄四の
修道院の存するあり。其一は聖マカリイの修道院と名づけ他の三はアブーマカル
(即父)マカリイの修道院といひ、マカリイの野の諸方はすべて修道院ならざるは
なかりき。墻垣及び星宇の遺址はむかし此處に多くの修道院のありしを證す。これ
埃及のマカリイが避けし所なること疑なし。ニトリイ山と其背後にある野とは既
に修士等の殖民する所となりて、此處は小庵の野となりぬ。修士の居住の爲にこゝ
に基をなしゝは大アントニイの祝福により克肖なるアムモニイといふ人なりき。
スキトの野は更にケルリヤの野より遠く一晝夜の行程にあり。空漠たる砂石の野の
にして、彼處には水を飲むが爲に僅に足る程なる泉の稀にあるのみなり。こゝには
通路あるなく、星の運行によりて途の方向を知るのみなりき。
さりながらマカリイが此處に移りし後幾ばくもなく、敬虔の熱心者は多くこゝに
あつまりて此の苦行者の誘導に己を托せり。其の高き苦行により、又其の完全に向
ふ不斷の進行によるに、彼等は人よりも寧天使に肖たりき。埃及の野に居る修道士

の隊は數十千の多きに至れり、しかれども スキトの修道士は生活の完全と其賢明
とにより衆人の間に稱讃せられたり。スキトの野の恐ろしき程はこゝに住む爲に
勇氣は更に要用なりしが、マカリイはたゞかくの如きの勇氣ある者のみを己にう
けたり。ソクラト書していへり、埃及のマカリイは自己の敬虔なるにかゝはらず、來
る所の者に對して甚だ嚴なりきと。
マカリイがスキトの野に移住したるは三十歲の時なりしが、其の苦行の生活の初
年に於て最早人々は彼を呼んで若老といひけり。マカリイの許に集まりし兄弟等
長老を有せざりしにより、埃及の主教はマカリイが年四十に至りて既に奇蹟と預
言の賜を有したる時、彼を按手して長老となせり。兄弟の數の增々加はるや、マカリ
イは彼等のために四の聖堂を建て、彼等おの〳〵特殊の長老を有したりき。すべて
通世者等は互に相別れて特殊の庵に居れり。マカリイは亦自から別に深きの野に居
りて、おのれにたゞ二人の門徒を有せり、一は來者に接し、他はマカリイの側にある
特殊の庵に居れり。マカリイは自己の庵より長さ半スタディヤ(希臘尺度の名、六百〇
六尺八寸一分)ある地下の行路を穿ちて、其終端に小なる洞窟ありき。來者あり彼を
安んせざらしむるや、彼は此行路によりて己の洞窟に避けたり、然るに誰も其の何

くに去りしを知らざりき。此の隧道のことを知れる門徒の一人はいへり、マカリイは洞窟に行きなから祈禱二十四を讀了り、歸途もまた同樣なりきと。

大マカリイの生活に關する報知の我等に達せしものは多からざるなり、而して此の多からざる報知も亦たゞきれ〴〵にて我等をして彼の內部の生活を僅に識るを得しむるのみなり。ハリストスの中に隱れたる彼の生活は我等のためにも隱れて存せり。彼の內部の生活を識らんが爲に最好き泉となるべきものは彼の書なり。彼は深き智慧をみちみてる自著の書に於て神的生活の奧義を述ぶるも理論によるにあらずして、實驗による、即ち自から經驗したる所のものを傳ふるなり。故に我等は彼が內部の人の生活をあらはせる章段に於て彼自己の生活の眞相を看破するを得べし。これらはマカリイの神的完全の階段に漸々昇進したるを眞實にあらはすが爲に不充分なること論を俟たず、しかれどももし我等は彼の內部の生活の眞相を少しなりともこれにより察知するを得ば我等の爲に足れり。

マカリイ言ふ人は道德に對する預始或は傾きを天然に有して、神はこれを尋ね給ふ、されば人の先づこれを理解するとゝ既に理解すれば意志を以て愛し且預始することを命ずるなり（講話三十七の十）。アダムの犯罪の時より心の意念は神を愛するより離れて、此世に散亂し、地に屬する物質的意念と混淆せり（講話二十四の二）。ゆゑに靈魂は罪によりて散らばりたる意念を集めて、これを鎭靜すること恰も好走戲兒の如くし、これを其身體の家にみちびき入れて不斷に禁食と愛とを以て主を待たしむべし。もし我等は懈らず、邪なる思に自から牧地をあたへずして思を主に向はしめつゝ、意志を以て智を誘引するならば主も其意旨を以て我等に來りて、實に我等を己に集中し給はんこと疑なし、何となれば神に悅ばるゝと勤むるとは意念にかゝればなり。汝が己の智を神を尋ぬるに集中する程神は其の自己の善心と仁慈とを以て汝に來りて、汝を慰安せん。彼は立ちて汝の智と思と意の發動とを檢し、いかに神を尋ぬるか、汝の全靈よりするか、緩慢を以てせざるか、等閑を以てせざるかを監視せん。而して汝の神を尋ぬるに勉勵するを認むる時は、汝にあらはれて其助をあたへ、汝を其敵より救ひて汝のために勝利を備へ給はん（講話三十一の二至四）。人は地に屬するものを偏愛するより脫せざらん間は其心中に他の戰と他の秘密なる抵抗と他の惡なる諸神よりする意念の爭のあると又他の苦行の臨んで其前に在るとを知るあたはざるなり。たゞ地に屬する物を偏愛するより脫して神に附く者は、獨り內部に起る所の情慾の戰と內部の爭と惡なる意念とを認識するを得べし（講話廿一の三、四）。智よりも下く、

思よりも深く、我等が靈魂の知るべからざる曲處に我が靈魂の首なる部分を殺傷する蛇の潜み居るあり。此の蛇を殺し、充分の潔きに達せんことはたゞ一のイイスハリストスに賴りて能くすべし（智を高尚にすること、の說教廿一）。靈魂は俄に淸潔に達するを得ず前以て患難を試み卑辱と困迫とを歷來らざるべからず（講話廿三の三）。もし人は苦なくして善に進歩することを得ばハリストス敎は躓石或は誘惑の石とならざるべく、信も不信もあるあらずして、苦行も戰鬪を爲すの機會もあらざるべし。神の言を聞く者は悔悟の心を生せん、而して其後神の照覽により人を益せんが爲に恩寵が人より遠ざかるにより、始めて人は練習して戰を學ばん（講話廿一、廿七の）。患難と不幸とを喜んでうけんこと要用なり、けだしこれ神が我等と共にするを證すればなり、世に不幸に逢ふて汝は始めて反省せん、曰く『我れ世にありて不幸なりいで世を離れて神に事へん』と此の意思に到り達して汝は誡命をきかん、曰く『汝の所有を賣れ』『マトフェイ十九の二十七』肉體の親與を避けて神に事ふべしと。其時汝は世にありて己の不幸の爲め、又此の不幸によりハリストスの誡命に從順なる者となるが爲に感謝するを始めん。世より遠ざかりて神を尋ぬるを始むるや、己が天性とも從前の品性とも祖先傳來の慣習とも戰はざるべからず。しかれども此の慣習と戰ふ時、汝は汝に抵抗して汝の智と戰ふの意念を發見すべくして、此意念は汝を引きて汝が逃れ避けんと欲する有形界中に汝を彷徨せしめん。其時に意念は意念と對抗し智は智と對抗し、靈は靈と對抗し、神は神と對抗し、起ちて戰ひ爭ふを始むるなり（講話三十二の七、九）。靈魂が罪の生活より遠ざかり、世の風習を忘れんとするや、魔鬼は患難と誘惑と見えざる戰とを以て靈魂を窘逐せん。是に於てか靈魂を罪惡の埃及より引出したる者に對する靈魂の愛は顯然としてあらはれん。靈魂は敵の力の襲ふて己を殺さんとするを悟るべく、亦その己の目前に慘怛たる苦みと患難と絕望との海を見んしかれども靈魂は準備したる敵を見て後に退かんことも前に進まんことも能はざるべし、何となれば死を畏るゝ畏れと四方を圍繞する種々の恐るべき患難とは死を其目前に見せしむればなり。神は靈魂が死を畏るゝ畏れの爲に落膽すると敵のこれを呑まんとするとを見る時は、徐々と靈魂に行爲して、靈魂が果して信に堅きか、神に愛を有するかを試みて、これに小なる助をあたへん。けだし生命にみちびく道の此の如くなること、即ち患難と困迫と多くの試練と最苦しき誘惑とを以てすることは、神を以て定められたるなり。されば靈魂はもし尙此世に於て死を目前に有して限りなき患難の中に此進行を成すならば其時は最早强き手と高き臂と聖神の

照明とを以て暗黒の力を破るべく、恐るべき場所を超ゆべく、暗黒の海と喰盡さゞる所無き火とを渡らん（講話四十七の十二、十三）。或者等は世より遠ざかり、福音經にいふ如く、此世を棄てゝ、大なる忍耐により祈禱、禁食、勉勵及び其他の德行に大に進歩を爲すといへども、神が恩寵と慰安と精神の喜とを直ちにあたへずして、其賜を遲延し、且はこれを止むるは、これ自由の意志を試みんが爲にして、願ふ者にあたへ、叩く者に生命の門を啓かんことを約したまひし神を果して信誠眞實なるものと思ふや否やを見んが爲なり。凡の德行は神の賜にあらざるなし。己の力を以て罪を根絶することは能はざるべく、人の力に及ばざるものとす。これと戰ひ、抵抗して傷をかうむらしめ、或はこれをうくることはこれ汝の力にあり、しかれども根絶することは神の所爲なり（講話三の四）。豪雄なる人の聖堂に建增するは爲したるによるにあらずして、望を起したるによる。けだし人を救ふは人の自己の行にあらずして、力をあたへし者なり（講話三十七の九）。汝が自から行爲して本來汝に屬するものは、たとへ美好にして神に喜ばるゝといへども、不潔なり。例へば汝は神を愛す、然れども不完全なり。汝の祈禱は心の飛躍とも又種々なる雜念とも自然に相合するなり。これに反して神は神と眞とを以て行はるゝ潔き祈禱を汝に賜はん。聖神は自から人の孱弱に助け、主は心の地に天の種を入れて、之を耕す。道德上の腐敗は天性に存するありといへども、たゞ其の己の爲に牧地を看着くる處に於てのみ勢力を有するなり。柔なる麥の莖は莠に荒さるべし、しかれども夏が來ると共に植物の枯るゝときは、莠は少しも麥を害せざらん。恩寵に於てもかくの如し、神の賜と恩寵の人に增殖して、人が主に於て富むときは、惡習は人に少しは存すといへども、人を害するあたはざるべし（講話廿一、廿六の二）。「ハリステアニン」はもし敵に襲はるゝならば、神性に於て避所を有す、されば彼等は能力と慰安とを衣せられて、戰は少しも彼等を驚かさゞるべし。潔き心を有するは容易すき事にあらず、良心と心を潔うしておのれに惡を全く根絶せんとせば、人の爲に戰と勞とは多く要用なり。或者に恩寵あれども心はなほ不潔なることあり。これにより陷りし者は陷りぬ、彼等は恩寵と共に己に烟と罪の存するあるを信せざりき（講話廿六の十、廿四、廿五）。或者は神の恩寵の盛に作用するにあたり、己を防守して、自己の肢體を既に聖にせられたりと思ひ、ハリストス教には最早肉慾の居るべき餘地あるなく、謙遜清潔なる心を自から求め得らるべく、內部の人は最早神聖なる天に屬するものに飛躍すべしと自から決定するに至る。さりながらかくの如きの人が完全の域に達したりと思ひ、己を安然なる港に入りたる者と爲して疑はざる時に、彼に

對し波起りて、彼は再び己が海中にありて、たゞ水と天と死の近づかんとする處に引去られたるを見ん……さりながら此の如き者は或る恩寵を再び賜はること、全海の深きより一小點滴をうけたる如くして、此により毎時毎日行はるゝ奇蹟を見ん……何故こはかくの如く、或は又然らざるか、智はいよ〳〵困まん。けだし善の嫉妬者たる「サタナ」が德行に大に進歩する者に惡を勸め入れて、これを覆さんを力むるによるなり（講話三十八の四）。

かくの如く聖マカリイは其講話に於て神の種々なる狀態を描寫して、神的戰鬪をあらはす、これ彼の自から實驗せしものなること論を俟たず。彼は人力に超越すと思はるゝ程の苦行を以て己を德行に固めたり。嚴重なる修道士等はスキトの野に在りて飽食せず、甘美を求めざりしも、如此にはあらざりき。しかれどもマカリイは其の天然の要求を滿たすを生命を支ゆるが爲に必用なる丈に止めて、それより多くせざりき。或時門徒のエヲグリイといふ者渴に苦みて、水を飲まんことの許を願ひしに、マカリイいへり、『日蔭に居るを以て滿足せよ、多くの者は此安慰をさへうばはるゝなり。余は食ひ且飲み且寢るに生命を支ゆるだけより多くせざること已に二十年なり』と。聖マカリイは食を嘗むること一週間にたゞ一回なりき。しかれども彼が身體の枯瘦は禁食と節制の結果にして、併て亦神を畏るゝの結果なりき。或る神父等マカリイに問へり、『汝は或は食ひ、或は禁食するも、汝の身體は常に枯瘦す、これ何故なるか、』マカリイ答ふ、『燃ゆる薪を搔廻す所の火棍は不斷火の爲に食まるゝなり、人もこれと同じ、もし人は神を畏るゝ心は其體を食まん。』たま〳〵彼は通世者等と食を僧にしたることありしが、こゝに彼に葡萄酒を薦めけるに、彼は辭せざりき、しかれども其後一杯の葡萄酒の爲に彼は終日水を飲まざりき。其門徒これを認めて、彼に復た葡萄酒を製せざらんことを兄弟に願へり、何となれば彼に慰をあたへんと欲して、新なる疲勞を來すの機會を與ふればなり。

マカリイは腹と舌とを制し、己の庵に止まりて、罪の爲に泣くを以て修道士の第一の本分となせり。一の兄弟あり、マカリイに問へり、『いかんして我は救はるべきか、』老人答ていふ、『人々を逃れ、庵中に坐して、己の罪の爲に泣くべし、しかれども殊に舌と腹とを制せよ』。マカリイ一日スキトに於て集會を散じたるとき、兄弟に告げていへり、兄弟よ逃れよと、一兄弟あり、曰く我等野よりいづくにか逃るべき、マカリイ指を口に置きていへり、これを逃れよと。其後己の庵に入りて自から戸を閉しぬ。

マカリイは自由なる貧と無所求とを以て修道士の爲に最高尚の事となせり。或時三の書籍を所有せる父、フェオドルフェルメイスキイ來りて、マカリイに問へり、視よ我に三書あり、我自からもこれによりて益を得、兄弟もこれを用ひて建德を得るなり、いかんせば我が爲に更に有益なるべき、自己の益の爲、又兄弟の益のためにこれを己に留むべきか、或はこれを賣却して得る所のものを貧者に頒つべきかと。老人答ふ、前者は善し、しかれども無所求は極て善し。マカリイは己の庵に於て二回賊に遇ひけるが、たゞにこれを遮止せざるのみならず、恰も其黨與の如く、自から彼等を助けて、物品を其庵より持ち去らしめたりき。

マカリイは神的完全に大に進歩すると共に、謙遜の情を己に固めんことを最も深く慮れり。彼は己を他人より區別することをいかんしても欲せざりき。兄弟あり、彼を聖にして大なる老人として訪來るときは、彼はこれと何も言はざりき、しかれども誰か詰責を以て彼に向ふあれば、たとへ不當の者なりとも、かくの如き者を樂んでうけたり。誘惑者が自からマカリイに驕傲の心を起さしめんと盡力したるは、無益に歸して、終にその謙遜の高きを認めざることあたはざりき。彼は神の役者にいへり、マカリイよ、凡そ汝が爲す所のものは我も亦これを爲す、汝は禁食すれども、我は全く食はず、汝は微醒すれども、我は全く寢ねず、たゞ一事を以て汝は我に勝つ、即ち謙遜なり。

マカリイの謙遜なる精神は道德上の完全につきて自から謙りて、他を己の上に立つる機會を常に見出せり。『我は未だ修道士に非ず、たゞ修道士を見たり』とはこれぞマカリイがニトリイの兄弟を敎訓するに於ていひし言なる、其後彼は野に居る兩人の修道士の事を兄弟に話說して左の如くいへり、彼等はすべての人類より遊さかりて居り、野獸の繞る所となりて、無言者と同じ食物を以て自からやしなへり、思を神に擧ぐることを只管練習しつゝ、互の愛を以て相與に四十年を送りぬ。マカリイ此二士に問ひけるは修道士とならんに我は何を爲すべきか。彼等答ていへ、もし凡そ世に屬するものを棄つること、我等の如くするあたはずんば、己の庵に行きて己の罪を哭せよと。マカリイは此の苦行者のことを想起し、反復していへり、『我はいまだ修道士にあらず、たゞ修道士を見たり』と。他日神の照管はマカリイを謙遜に固めんが爲に二の婦人を彼に指示せり、彼等は其良人と共に世に市に居りしかど、道德上の完全に於ては、マカリイより更に高尚なりき。老人は躊躇せず、野より市に來りて此の二婦人にいかなる生活を爲すを種々尋問しけるが、マカリイの願により

て彼等語ることと左の如くなりき、彼等は二人の兄弟に嫁してより既に十五年を經しが、其間互の愛と和合とを以て生活し、常に良人の意を遂成せり、修道院に入らんとの望を有したりしかど、良人のこれに同意なきにより、世に留まることに決心せり、しかれども己の心を儆醒して一の空言をも發せざらんことの約束を相共に定めたりとぞ。マカリイは野に居ること彼等が世に居る如くなるを賜はらんことを謙遜にして神に請願せり。

聖マカリイは修道士の生活を學ばんが爲に、行きて修道士の父なるアントニイを訪へり。アントニイ先づ彼の忍耐を試みんとして、彼を其住所に入るゝをゆるさゞりしが、其後彼のために戸を開き、欵接していへり、余は久しく汝を見んことを願へりと。愛を以て彼をうけて慰藉したりとぞ。彼等は棕櫚の葉を以て籠を編み、靈魂の救の談話にて日夕を送れり。克肖者マカリイは人々の前に於る謙遜の神に對する謙遜に基づくを認めて、凡そ恩寵をうけたる人に於る最も天性自然の情となせり。彼は其講話の一に於ていへり『恩寵をうけたる人は己を以て悉くの罪人よりも更に卑しきものと爲す。而してかゝる意思は人に植付きて天性自然なる意思の如くなるべし、されば彼は神を認識するにいよ〳〵深く入る程は、いよ〳〵己を無智なると思ひ、いよ〳〵學ぶ程は、殊に己を何も知らざる者と認むるなり。恩寵は靈魂に此を造生することと或る天性自然なるものゝ如くなるべし』（講話十六の十二）。

彼は又他の講話に於ていへり『眞に神を愛しハリストスを愛する靈魂は、主に對する飽かざる志望により、千百の義なる行をなすといへども、己を以て何も未だ爲さざるものと思ふ。禁食と儆醒とを以て己の體を疲らすといへども、德行の爲に勞するをいまだ始めずとの感情に止まる。主に對する限りなく飽かざる愛により種々なる靈神上の恩賜或は啓示及び天の奧義に達するを賜はるといへども、自から己に於ては、何も未だ得ずと思ふなり。反つて日々に飢ゑ且渴き、信と愛とを以て祈禱を務めて、恩寵の奧義をうくると凡の德行に己を建つるとに飽くあたはざるべし』（講話十の四）。恩寵の賜の盛なる時に於ける此謙遜の悟を、マカリイは美なる比喩を以て說明す。『ること次の如し、曰く、もし主は其寶を以て或る貧者に托するならば、うけて守る者は、此寶を以て自己の所有と思はず、何處にも己の貧しきを自から認めて、他人の寶を費すを敢てせざるべし、何となれば彼は常に自から思へらく此寶はたゞ我に屬せざるのみならず、更に有力なる王を以て我に托せられたるものにして、王は欲する時はこれを我より取らんと。神の恩寵を有する者も己をかくの如く思ふ

べし。もし彼等は高慢して、其心に自負するならば、主は其恩寵の賜を彼等よりうばうて、彼等は主より恩寵をうくる以前の如くして存せん」（路話十五の廿五）。

マカリイの謙遜は他の弱きを寛容するに於て特別にあらはれたり。スキトの老人等の證に依るにいへり、彼は恰も地上の神の如し、何となれば神の世を覆ふ如く、マカリイも罪をおほひ、これを見て見ざる如く、聞て聞かざる如くなるによる。或時彼は重罪を犯す兄弟を見ていへり、もし彼の神、造物主は火を以て燬くを能くするも、罪を忍耐し給ふならば、我は何人にして彼を罪するを得んやと。マカリイいふ「ハリステアニンは顯然たる淫行者をも、罪人をも、放蕩なる人々をも、誰をも罪すべからず、乃ち純直なる心と清き目とを以て衆人を見るべし。心の清きとは罪人若くは劣弱者を見て、これに同情を有し、憐憫なる者となるにあり（路話十五の八）。

マカリイは兄弟に互に相愛するを第一に勸めて、温柔を以てこれを治めたり、而して彼等に接するには總て特別の正直を以て卓越せり（沿三路話兄弟に對する教訓を見るべし）。人あり、彼にいへり、何故汝は己をかくの如く行ふか。マカリイ答ふ、われ吾が主に十二年事へたるは、主が此恩寵を我に賜はん爲なり、然るを汝等は我にこれを棄てんことを勸むるかと。マカリイは各人に勸めんことを心掛けたり。或時彼は一の遁世者に至り、其病めるを見て問へり、何物か食はんを欲せざるか。病者はいへり「パスチリを欲すと。老人は病者に其願ふ所のものを送らん爲に躊躇せずしてアレキサンドリヤに下行したりとぞ。

マカリイは兄弟を規責するを愛にて融和せんことを盡力せり。彼はいへり、もし汝は何人をか譴責して怒を發するならば、これ私情を飽かしむるなり。かくの如くならば、他を救はずして自己に害を招かん。彼が智と愛と温柔と寛容とを以て迷ふ者を眞實の途に向はしめたるは、他人の嚴重を以てしたるよりも更に速なりき。スキトに二人の兄弟あり、罪に陷りしに、市のマカリイ彼等を破門せり。埃及のマカリイ此事を聞知するやいへり、兄弟破門されたるに非ずして、マカリイ破門されたるなりと。破門の爲に此言をうけて、市のマカリイは去りて湖上に遠ざかりけるが、彼處の天然は悔者を淨めんが爲に最便利の地なるをあらはせり。大マカリイ來りて彼に就き、彼が蚤く蚊に嚙はれたるを認めていへり、汝兄弟を破門したるに、視よ彼等は村に退去せり、我汝を破門したるに、汝の此處に逃れたるは恰も處女が其奥室に逃れたる如しさりながら我陷りし兄弟を招きて、彼等を審問したるに、彼等はいへり毫も如此の事あらざりしと。兄弟よ、魔鬼は汝を笑はざるか、汝自から省みよ。汝は

自から何も見ざりき。己の罪の赦を願ふべしと。マカリイ答ていへり、もし欲せば、我に「エピテミヤ」を課せよ、老人いへり、行きて三週間禁食して、一週間にたゞ一回食をうくべし。

一の兄弟あり誘惑にかゝりけるをその誘惑したる者より直ちに聞知して、マカリイ自から此兄弟の庵に來り訪ひけるが、彼は己が不潔なる意念を告白するを恥づるのみならず、意念は我を誘はずとさへいひけるを、マカリイ謙遜を以て彼に實を吐かしめたり。マカリイいへり、視よ、我れ苦戦すること幾年なるか、しかるに淫慾の神は我老人をも安んせしめず。其時兄弟は告げていへり、父よ、信せよ、我をも亦同く安んせしめずと。老人は彼を誘はんとする他の意念をもいひ、かくの如くして彼を承伏せしめたり。遂に教訓をさづけて彼を置きけるが、其時より此兄弟は他の人々に勝れて奮闘したりとぞ。

マカリイはニトリイ山の途上に於て一偶像の祭司に遇ひ温柔を以てハリストスに歸せしめたりき。これより先マカリイの門徒此祭司に遇ひ、彼を呼んで魔鬼といひたるが爲に擊たれて半死半生に至りぬ。さりながらマカリイが彼と遇ふて、慇懃に彼と接するや、これに驚かされたる祭司はいへり、我汝は神の人なるを知る、其足を掴まへていへらく我を修道士となさゝらん間は汝を放さずと。而して彼は神父により兄弟の數にうけられ、彼によりて他の多くの異教人も「ハリストアニン」となれり。マカリイ此事件を指示していへり、惡言は善者をも惡者となし善言は惡者をも善者と爲す。

マカリイの賢明と聖德のことをきゝて、多くの人々は教訓をうけんが爲に遠方より來りて、彼に就けり。マカリイの教訓は温柔を以て卓越し、深き實驗的智慧に滿たされたり。其の教訓の目的は教訓せらるゝ者に己を省みると、思を神に擧ぐると、祈禱と謙遜とを勸め入るゝにありき、これを署言すれば彼が自から高尚に領有したる道德を勸め入るゝにありき。修道士とならんことを願ひし少年あり、一日問ふていへり、如何にせば余は救はるべきかと。マカリイ先づ彼を墓につかはして、死者を罵らしめ、其後稱讃せしめたり。少年のこれを實行するや、マカリイ彼に問ふていへり、死者はいかに答へしか。答ふ彼等は稱讃にも罵詈にも默然として答へざりき。老人いへり、もし救はれんことを欲せば汝もかくの如く死すべし、死者と同じく人々よりの侮辱も人間の名譽も思ふなかれ。もし汝の爲に毀は塵の如く、貧は富の如く、缺乏は有餘の如くならば、汝は死せしと。又マカリイは教訓を願ひし他の門徒に告

て曰く誰をも罪するなかれ、誰をも辱しむるなかれ、此を守るべし、然らば救はれん。マカリイいへり我等もし人々の我になしたる惡を記憶して忘れずんば、神を念ふ記憶は我等に弱らん、しかれども魔鬼より蹂らせらるゝ惡を記憶して忘れずんば、彼の箭より免れて安然ならん。

いかやうに祈禱すべきかとマカリイに問ひけるに彼答へていへり、汝等全心より左の如くしば〳〵反復するならば可なり、曰く主よ、汝の欲する如く、又知る如く我を矜めよ、もし誘惑に遇ふあらば主よ助け給へと。

マカリイ人に善を爲す天然の方法の不充分なりと認められたる處に於ては、奇蹟を行ふの賜に向へり。かくの如く彼は或時死者を復活せしめたるは靈魂の不死を異端者に證せんが爲なりき。他時又彼は死者を復活せしめたり、これその罪せらるゝ者は果して死者の死の原因者たるや否やを知らんが爲にして、これにより不當に罪せられたる者を救ひ、死者は墓中より明白なる聲を以て彼を無罪と認めたりき、又一日マカリイは七人の兄弟と共に刈取の爲に出でゝ刈りけるが、一婦あり、彼等が後にありて、穂を拾ひつゝ絶えず涕泣するを認めたり。マカリイは實に其の己を雇ふたる田主より、此婦人の夫が或人より貨物を請取り、これを何處に置きしをつげずして頓死したることを聞知せり。マカリイ該死者に問ひけるに、貨物を隠しある處をつげたりしかば、此により寡婦と其子とを奴隷より救ひ出せり。總じてマカリイは甚だ多く奇蹟を行へり。ゾクラトいへらくマカリイが病者を多く愈し、多くの者を惡神より免れしめたるは、これを書さん爲に全書を要すべしと。

アリイ教徒の主たる時に在りてマカリイは、アリイ教徒等とも已むを得ず戰はざるべからざりき。埃及の遁世者等はニケヤの信經の熱心なる保護者なりき、アレキサンドリヤの帝位に即きたるアリイ教徒ルナイは大アフアナシイの死後、三百七十三年其後任に充てられたる主教ペトルを遠ざけ、殘忍酷虐を以て埃及の遁世者等をアリイ教をうくるに强ひたりしも、効なかりければ、此の遁世者の父なる兩マカリイを流罪に發遣することに決定し、夜間密に彼等を捕へて、一の「ハリスチアニン」もあらざる埃及の一孤島に引去りぬ。さりながら主は此處に於ても其寵人を表揚し給へり。彼等祈禱を以て此島の祭司の女を愈しけるが、愈されし女の父と島の住民等は皆ハリストス教に歸し、洗禮をうけ、偶像を毀ち、祠堂を献じてハリストス教の殿堂となせり。此事アレキサンドリヤにきこえければ、ルナイは民の動亂を恐れて兩マカリイを野に歸すべきを命せり。

マカリイは此の地上の旅行者とし、世の爲に死せる者として、己の救のことゝ、己が誘導に托されたる兄弟等の救のことを不斷に慮りて、スキトの野に六十年を送れり。彼は地上の業務よりも神との談話に時を送り、心神大悦の情況にありしこと屢々なりき。此の恩寵をかうむれる靈魂の特別なる狀態をあらはせる貴重なる描寫は彼の書に於て守られたり。其の活ける描寫はマカリイが自から實驗したる所をあらはすを示す。（此の如き狀態の記事は第十八項話七節以下に見ゆ）彼は比喩を用ひていへり、成年者は嬰兒を欲する處に負去らん、かくの如く恩寵も心の深きに作用し、其靈魂を負ふて、天上完全の世界に永遠の安息に昇せんと（同話十六の十二）。その死する少しく以前の事なりき、マカリイはニトリイ山の遁世者等の願により彼等を訪問せり。此訪問は兄弟の爲に貴重なりき、されば彼等は教訓をあたへられんことを願ひしに、マカリイ其願を容れて言へること左の如し、兄弟よ泣かん、我等の涙の我等が體を燒かんとする處に去るに先だちて、我等が目は涙を流すべしと。是に於てみな〳〵泣き、其面を伏していひけるは、父よ、我等の爲に祈り給へと。マカリイは涙を流すを愛せり。彼いひけるは汝が天のイエルサリムの奇異なる福樂なる形狀を見るを賜はるは、他にあらず、たゞ日夜涙を流して左の如くいひし者に倣ふにあり、曰く「毎夜我が榻を濡ひ、我が涙にて我の褥を濡す」（聖詠六の七）。大なる憂愁と中心の困迫とにより流す所の涙は是れ即ち天の餅によりてあたへらるゝ靈魂の食なりと。（同話廿五の七、八）

聖マカリイは享年九十、降生三百九十年に於て福樂の生命に逝けり。

聖マカリイの著書

マカリイが神的智慧の貴重なる遺編として我等に存せしは、希臘語を以て書されたる講話五十篇なり。マカリイの講話の重なる目的は、大要靈魂が神と親密なる合一を爲すは人の目的にして、最上の幸福なりといふにあり。彼は信者の靈魂を此合一に招致す。彼は其講話に於て、此の合一は人の創造の時に於る最初の目的なるをあらはし、人を神より遠ざけたる原罪の滅亡的結果を證し、併せてイエスハリストによりて人と神の一致の回復せられたるを説明す、又此の合一にみちびくの途を示し、損傷せられたる人の天性と惡神の詭計とによりて人に反對する妨碍を示す。彼は此より生じ來れる內部の戰の困難をあらはして、我等が天性を聖にせん爲及び我等が意志を堅めんために神聖なる恩寵を必要とする感情を起さしむるなり。彼は神と合一する靈魂に作用する恩寵の奧密なる働を活寫す。彼は其講話を祈禱を以て中止することしば〳〵これあり。彼は其講話に於て、ハリストスの光に照されざる智識の爲には隱れて見えざれど、恩寵をうけたる靈魂の爲には明亮にして且は高尙なる神的生命の奧義をあらはして、たゞ其の己の實驗を以て試みたるものを言ふ。ゆゑに事の深遠なると奧妙なるとに拘はらず、老練なる師の敎訓は明白にして瞭解し易きなり。其の高尙なるが爲に理解し難きものは、マカリイによりて常に平易なる比喩と形容とを以て易すく曉り得らるゝなり。

聖マカリイの講話の內容は其の太だ古きを示す。此講話の著者は第二十七講話第十五條によるに表信者等と同時者なることあきらかなり。然のみならず、彼は『物質は始を有せずして神と同等の力なり』といへる異端者等の說に注目するあり。かくの如き異端者は四世紀以前にもあり、又四世紀中にもこれありき。シリヤの克肖者イサアクは聖マカリイに論及して、大なる聰明を以て著述せし人なりといひ、彼の書より引用したる處を見るに現にマカリイの講話より取れるなり、第九世紀の始にフォマ・マルシスキイは自著なる修道士の歷史といふ書中にエキペトマカリイの書より引用す。アシテオピヤの總主敎イオアン(第十一世紀)は『修道院の事』といふ自著中に、一般の使用の爲に敎會の嘉納する所となれる敎會牧者及び在野神父等の救靈の事に關する著書を數へて、スキトの苦行者聖マカリイの書をも其中に加へたり。且凡そ希臘の原本にしてアラビヤ及びシリヤの翻譯にかゝれるマカリイの講話は第九世紀或は第八世紀の抄本によれば埃及のマカリイに屬す。

五十篇の講話の外、世に知られたるものは、埃及マカリイの苦行的説教七篇にして、其内容は講話と同様なり。

已に久しく世に知られたるマカリイの講話と説教の外、マカリイの二の書翰も近頃フロッスによりて出版せられたり、一は希臘語にして、他はラテンの譯なり、後者は久しく抄本によりて世に知られたるものなり。ゲンナディは『教會の作者の事』といふ書中に此事を記載す。彼いふ、埃及のマカリイはその教訓する所の修道士に書をつかはしていへり、人はたゞ己を認識し、あらゆる勞苦を甘んじて任ひ、勇氣にして情慾と戰ひ、神の助を呼んで、元始の潔きに達するに進向する時は、眞の勤を成すことを得べしと。けだし此書翰はシリヤの聖イサアクにも知られしならん。彼は書していへり『諸聖人は如何なる高き階段にあり、いくばく大なる誘惑にかゝるか、汝はもし欲するならば、マカリイの一書翰によりて知ることを得べし。此書翰は内容左の如し、即ち父マカリイは其の最愛する諸子に書して、神が或は誘惑を以て、或は恩寵の代保を以て、如何に救濟の道を建て給ふかを明かに教ふ。即ち神の睿智が諸聖人を畢生德行に習はし給ふは、罪に對する戰を以てするに外ならずして、これ彼等何れの時にも其眼を高く擧げて神に向はんがためなり、又不斷眼を神に向けて神に對する聖なる愛に成長せんが爲なり、何となれば彼等は情慾と墜落に至らんを畏るゝの畏れとに壓せられ、不斷神に趨り就きて、神に對する信と望と愛とに大に進歩するによる。』

教會の使用となれる若干の祈禱文も亦埃及の聖マカリイに屬す。

眠に就く前に献ぐる祈禱文の中彼の名を題するものは第一祝文『永遠の神、萬物の王』及び第四祝文『大恩を賜ふ常生の王、寛仁にして人を愛する主よ、我何を以て爾に献げ何を以て爾に報いん』云々是なり。又朝の祈禱文の中彼の名を題するものは第一祝文『神よ我罪人を淨め給へ我未だ善を爾の前に爲さゞればなり』云々、第二祝文『救世主よ、我寤め興きて夜半の歌を爾に奉り』云々、第三祝文『人を愛する主よ、我覺め起きて爾に趨り附き、』及び第四祝文『主よ、爾は多くの慈と廣き惠とを以て我爾の僕に』云々是なり。グレナヤの抄本に依れば守護天使に献ぐる朝の第九祝文『聖なる天使、我が廢てられし靈に附き添ふ者よ』云々も亦埃及のマカリイに屬するなり。

克肖なる神父ゝ埃及マカリイの講話

第一講話

預言者イエヒエキリが錄せる現象の譬解

預言者イエヒエキリは神聖なる顯現と光榮なる現象を見て之を傳へ、それを記して言ひ難き奧秘を滿たせる現象となせり。彼は田間に於てヘルビムの車と、四の靈物を見たり。其靈物は各四面あり、一は獅面にして次は鷹面又犢面と人面となり、き前にして面には各々翼あり、汝に前面は何れにして、後面は何れなるを知ることに於て、も區別するを得ざりき。彼等の肩は偏く目なり、指も目をみち滿てゝ、目に滿たされざる所あらざりき、面に各三輪あり、輪中に輪ある如くして、輪に靈あり、また預言者は人の狀に似て其脚底は青玉の如くなるを見たり。此等の車即ちヘルビムと靈物はそれに坐する主宰を自ら戴けり。主宰の進行せんと欲する所は何處にも靈物は其面を向けたり。また預言者はヘルビムの下に人の手の如きものありて、彼等を支へ且捧ぐるを見たり。（イエヒエキリ一の五章廿八）

三八、預言者が大に驚きて見たる所のものは眞實にして疑なし、然れども此現象は
これと異なるものを示し、奥妙神聖にして諸族の爲に實に神秘なりしも、後來ハリ
ストスの來るによりて現出したる奥秘を前表せるなり。預言者は靈魂が主をうけ
て主の光榮の寶座とせらるゝ奥秘を直觀せり。けだし聖神が預備して己の坐位と
なし、及び居住となし、これに其光を受くるを賜ふて言ひ盡されざる光榮の美を以
て照されたる靈魂は、全く光となり、全く面となり、全く目とならん、されば彼には靈
界の光の目を以て滿たされざる一の部分もあらず、即彼には何の暗所もあらずし
て、全く殘る所なく光とせられ、神とせられ、悉く目に滿たされて何等の後方或は背
面もあらずして、何處にも面を以てあらはるゝなり、何となれば光、即ハリストスの
光榮の得も言はれざる美は、彼に降りて、かれに坐し給ふによる。たとへば彼は太陽
の如くなるべし、太陽は何處にも自己同一にして、一の後部も、或は缺たる部分もな
く、一樣の部分より成りて、殘らずみな光を以て輝きて、全く光ならん、或はまた火の
如く即火の光の如くなるべし、彼は全く自己同一にして、前後大小をおのれに有せ
ざらん、かくの如くハリストスの面より發する光榮の得も言はれざる美を以て全
く照され、聖神と全く親與するを爲して、神の住所となり、寶座となるを賜はりし靈

魂も全く目となり、全く光となり、全く面となり、全く榮となり、全く神となること、ハ
リストスの準備し齊整して靈界の美を以て飾りし如くなるべくして、ハリストス
は提携し、誘導し、且扶持して、これを高く擧げ、ゆゑに言へり。人の手はヘルビムの
下にありと（イエゼキリ一の七。ハリストスは自から靈魂に敎かれて、靈魂を誘導せ
ん。）

三九、車を疾く奔らず四の生物は靈魂の全體たる想像力の狀態をあらはせり。鷹は
禽鳥の王にして、獅子は野獸の王たり、牛は溫柔なる動物の王にして、人は萬物の王
たり、かくの如く靈魂にもこれに王たる想像力のあるあり、即自由と、良心と、才智と、
愛の力是なり。これらを以て靈車は御せられて神はこれらに安坐し給ふ。しかれ
ども又他の說明方によればこれ即諸聖者の天にある敎會を指すといふ。それ彼處
に預言者は生物に論及して、其高さは非常なりといひ、彼等は徧く目なりといひ、誰
も目の數或は高さを會得するあたはずといふ。何となればこれが爲の智識をあた
へられざればなり。たとへば天にある星は何人も見て驚嘆する所なれども、其數を
知するは一人も能するなけん。かくの如く諸聖者の天にある敎會に入り、彼に於
て樂ひことは凡の苦行せんと欲する者等にあたへらるしかれども諸聖者の敎を

知りてこれを會得することは、これ獨り神に屬するなり、偏目なる生物の車に、その寶座に坐する者或は寶座となり、目及び光となりたる各自の靈魂に坐する者は、これに坐して、靈礎を御し、自ら知る如くこれを指導して、進行せしめ、自ら行はんと欲する處に進行したるに非ずして、これに坐してこれを指導する者の知り、且欲する處に進行せり、かくの如く此處に於ても主は自ら己の神を以て途を示して、御し、且導かんかくの如くなれば靈魂は欲するあるや、己が意のまゝに自ら天に昇るに非ずして、神は靈魂を指導し、身體をすてゝ思を天に向はしむべく、又神が欲するときは靈魂は再び肉體に思念の中を來往せん、然れども神の旨によれば地の極に移るべくして、神はこれに天啓の奥義を示し給はんか、寶に極妙至善獨一眞實の執礎者なる哉かくの如くもし靈魂は今日預め頌揚せられて、神と親與するを得ば、身體も復活に於てその享くべき分を賜はらん。

四、しかれども義人等の靈魂が天の光とせらるゝ此事に關しては、主は自ら使徒等につげて左の如くの給へり、曰く『爾等は世の光なり』と（マトフェイ五の十四）主は自ら彼等を光となして、彼等により世の照されんことを命じていへり、曰く『人燈を燃して之れを斗の下に置かず、乃燈臺の上に置く、然らば凡そ家にある者に照る。是の如く爾等の光は人々の前に照るべし』（同上十五、十六）これ即我よりうけたる賜を隱さずして凡の願ふ者に傳へよとなり。またいへり『身の燈は目なり、故にもし爾の目淨からば、爾の全身明ならん、もし爾の目惡からば爾の全身暗からん、故にもし爾の中の光は暗たらば、則暗は如何にぞや』（マトフェイ六の二十二、二十三）それ目は身の爲に光なり、故に目若し健なるときは、全身照されん、されど物あり目に落ちて、目がくらまさるゝときは、全身暗黑にあらん、かくの如く使徒等は全世界の爲に立てゝ目とせられ、又光とせられたり。これにより主は彼等に誡命していへり『もし汝等世の爲に光となり、堅く立ちて迷はされずば、世の全體照されん。しかれども汝等、即世の光なる者暗くなるときは、暗即世はいかにぞや』と。ゆゑに使徒等は光となりて、信せし者の爲に光を以て勤め、自ら照されたる神の天上の光を以て彼等の心を照したりき。

五、しかれども彼等が鹽となりしや、凡そ信する者の靈魂を鎔解して、聖神の鹽を以てこれに鹽せり。げだし主は人々の靈魂を地と名づけ、使徒等に告げて『汝等は地の鹽なり』といへり（マトフェイ五の十三）何となれば使徒等は神の天上の鹽を以て人々の靈魂を鎔解して、腐敗せざるものとなし、大なる惡臭に感染せざるものとなし

て、彼等に勤めたればなり。肉は鹽なくんば腐敗し、大なる惡臭にみちみたされて、堪ふべからざる臭氣の故に人皆これを避けん、されば蛆は腐敗したる肉に蚊行きて、かしこに自ら食を求め、彼を食ふて、彼に巣を作らん、しかれどもし鹽を撒るならば、肉に培養せられたる蛆は滅されて盡き、厭ふべき惡臭は消えん、けだし鹽は蛆を滅し惡臭を絶つに適當なればなり、かくの如く聖神にて鹽せられず、天鹽、即神の能力をうけざるすべての靈魂も腐敗して、惡念の大なる惡臭にみちみてらる、故に神の顏は如此の靈魂に居る暗と慾との無益なる思の恐るべき臭穢を避けん、惡なる恐るべき蛆、即惡神と暗黑の力とは彼に蠢き、養はれて、巣をつくり、彼處に御飯し、彼を食ふて敗壞せしむるなり。けだしいふあり『我が傷腐れて且臭し』〔聖詠三十七の六〕。しかれどもし靈魂は神に趨り就き、篤く信じて生命の鹽たる、善にして人を愛する神をおのれに願ひ得るや、降る所の天鹽は靈魂に於て恐るべき蛆を盡し、有害なる惡臭を滅し、其能力の作用を以て靈魂を清めん。さてかくの如く眞實なる鹽が靈魂を健全無疵なるものとなすときは、彼は再び舉用せられて、天の主宰につかふるを得ん。ゆゑに律法にも此義を示して、神はすべての犧牲に鹽するを命じたまへり〔利未記二の十三〕。

六、ゆゑに先づ第一に司祭が牲を屠りて牲の死すること、其後牲の綱に割きて鹽漬にせらるゝこと、終に火上に置かるゝことゝは共に肝要なり。けだし司祭が先づ羊を屠りて死に付せずんば、彼は鹽を施されずして、豐祭に於て主宰に供へられざるべし。かくの如く我等が靈魂も眞實の司祭長たるハリストスに就き、彼により屠られて、其僞智の爲、又は其生活する惡生命の爲、即罪の爲に死せざるべからざるなり、而して犧牲の生命を棄つる如く、情慾の惡も生命を棄てんことを要す。靈魂が身體より出づるときは、身體は死して、其生活する生命を以て生存せず、聽かず、又行かざらん、かくの如く天の司祭長たるハリストスが其能力の恩寵を以て世の爲の生命を靈魂に於て屠殺するときは、靈魂は其生活する惡生命の爲に死して、最早聽かざるべく、言はざるべく、罪の暗黑に生活せざるべし、何となれば生命ともいふべき情慾の惡は恩寵によりて靈魂より出で去ればなり。ゆゑに使徒は呼んでいへり『世は我の爲に釘せられたり、我世に於ても亦然り』〔ガラティヤ六の十四〕。けだし靈魂は世と罪の暗黑に生活して、ハリストスを以て殺されず、惡習の靈魂を猶己に有し、即ち罪なる情慾の暗黑の働を己に有して、これを以て養はるゝ間は、ハリストスの體に屬せず、光の體に屬せずして、暗の體なり、されば今も猶暗の一方に居らん、これ

に反して光の靈魂即聖神の能力を己に有するものは光の一方に居るなり。

七、さりながら人あり言はん、靈魂は暗の產するものに非るに何故これを暗の體と名づくるかと。此事につきては愼重の注意をなして、正しく理會すべし。たとへば汝が用ひて身に被むる衣服の如し、彼は他人これを備へて、汝これを衣ん、家もこれに同じ、別人が造營建築して、汝これに住まん、かくの如くアダムも神の誡命を犯して、惡なる蛇にしたがひ己を賣りて魔鬼の所有物となせり、ゆゑに靈魂即神が已の像に依りて備へたる此の美なる造物を惡者は衣たり、ゆゑに使徒もいへり『首領權柄に脫衣せしめて』『十字架を以て彼等に勝てり』〔コロサイ二の十五〕。げだし主の來りしは彼等を逐ふて、己の家たり又殿たる人を己に取戻さんがためなり。これによりて靈魂は罪なる暗黑の彼に居る間は、惡なる暗黑の體と名づけらる、何となれば靈魂は惡なる暗黑の世のつゐく間は、彼處に居りて養はるればなり、ゆゑに使徒も罪なる身と死の體との事を審して『罪なる身の滅されん爲なり』といひ〔ロマ六の六〕又『誰か我を此の死の體より救はん』といへり〔ロマ七の二十四〕。これと相反して神を篤く信じて、罪より救はれ、暗黑なる生命の爲に死して、聖神の光を己にうけて、生命となし、これを以て更生したる靈魂は、同じく亦最早かしこに於て其生命を送らん、何となれば神性の光を以て彼處に止めらるればなり。げだし靈魂は神の本性より生せしにあらず、又惡なる暗の本性より生せしにも非ず、かへつて美麗をみちみてる大にして且奇異なる智慧ある造物にして、神の至美なる育たり、又像たるも犯罪の結果によりて暗黑なる情慾の惡は彼に入りぬ。

八、終りに靈魂は亦その願により體合一致する所の者に屬すべし。故に彼は或は神の光を己に有して、其中に生活し、諸の德行を以て飾られて、安息の光をうくべく、或は罪の暗黑を己に有して、定罪に服せん、げだし神と共に永遠の安息と光とに生活せんを願ふ靈魂は、前文に述べたる如く、眞實なる司祭長ハリストスに就きて、世の爲及び惡なる暗黑の以前の生活の爲に屠をうけ死して、神聖なる養育の爲に他の生活に移らんこと肝要なり。たとへばもし誰か市に死せば、彼處に居る者等の聲も談話も鬧噪もきかざるべくして、死するや否や其市の聲音も叫喚もあらざる處に移されん、かくの如く靈魂ももし住んで年月を送れる有害なる情慾の市に屠をうけて死するや、最早暗黑の談話の聲は聞くあらざるべく、暗黑の鬼の空しき談論及び擾亂の語聲と叫喚とは最早鳴渡らざるべく、仁慈と平安とをみちみてる市と、神聖なる光の市に移され、かしこに生活して、聞くべく、かしこの市民となりて談論

說話すべく、かしこに於て神に適當なる神的の行を成さん。

九、ゆゑに我等も神の力を以て暗黑の惡世の爲に居をうけて死せんが爲、また罪の神の我等に根絶せられんが爲、靈魂は天の神を己にうけて、彼を衣、罪の暗よりハリストスの光に移りて、世々生命に安息せんが爲に祈禱せん。たとへば競爭場裡に車の疾馳するが如し、乘越したる者は他を牽制して、其前進を攪し且妨げて、勝を占めん、かくの如く人にも眞實の思と罪の思の疾馳するあらんに、もし罪の思に先んせらるゝあらば、彼は靈魂を牽制し、神に近づきて罪に勝を奏するを攪し且妨げん。しかれども主の自ら乘りて靈魂を御する處に於ては主は巧みに且堅固に轡を御し、靈輪をみちびきて、天に屬する神聖なる思の狀態に向はしめつゝ、常に勝を奏するなり。彼は罪と戰ふをなさず、全能全權なる者として常に自ら勝を決するなり、ゆゑにヘルビムの馳するは、自ら行かんと欲する處に馳するに非ずして、彼等に乘りて彼等を御する者がみちびく所の方面に向つて馳す、彼が欲する處には彼等も進行して、彼は自ら彼等を奔馳せしむるなり、けだし言ふあり、人の手は彼等の下にありと。聖なる諸靈はこれを御するハリストスの神にみちびかれて、彼が欲する方に馳せん。ゆゑに彼が欲するときは、天上の思に馳するも、又欲するときは、體にも馳せん。彼の欲する處に於て彼につかへんとす。それ鳥は羽翼を以て足と爲す、かくの如く天に屬する神の光も靈魂の適當なる思の羽翼をうけて、これを其知る處にみちびき且御せんとす。

十、故に此事をきかば、汝の靈魂が實際實にこれを得有したるや否や、自ら己に注意すべし。けだしこれ單に口にいふ言にはあらずして、眞に靈中におこなはるゝ事實なればなり。ゆゑにもし汝はかくの如き靈界の幸福を受けずして、猶貧しくば、不斷に憂ひ悲み且傷むべし。天國の爲に猶死せるもの、又傷はれたるものとして、常に主を呼び、信仰を以て願ふべし、汝にも此の眞生活を賜はらんためなり、神は此身體を造りて、これが爲に生活と飲と食と衣と履とを其本性より借らしめず、却て身體は固より裸體につくりて、生命の爲に缺くべからざるすべてのものを外より借らんことを定めたまへり、されば身體の外に存するものなくんば、即食なく、飲なく、衣服なくんば身體は生活するあたはざるべし。もし身體は外より何も借るあらず、其性中にあるものを以て限らるゝならば、敗壞して亡びん。されば神の像により造られて、神の光をおのれに有たざる靈魂もかくの如く、(けだし靈魂をして永生を有せしめんが爲に、神はかくの如く攝理して、惠を垂れ給へり)靈魂の眞生活を成すとこ

ろの靈界の食と、靈界の飲と、天の衣服とを自己の本性より取らずして、神の性より、神自己の神より、神自己の光よりうけん。

十一、それ身體は生活を身體其物よりうけずして、身體の外にあるものよりうく、即地よりうくべくして、身體の外に存するものなくんば、生存するあたはざらんことは、前文にいひし如し、かくの如くもし靈魂も今日猶彼の生命ある者の地に更生せず、彼處に神的にやしなはれず、主の前に大に進歩し神的に成長せずして、神性は亦これに天の美麗の言盡されざる衣服を衣することあらずんば、靈魂は此の食物なしに自ら生存して樂み且安んずるあたはざるなり。けだし神の性は生命の餅を有す、いはゆる『我は生命の餅なり』『イオアン六の三十五』といふもの是なり、又『活ける水』『イオアン四の十』と『人の心を樂ましむる酒』『聖詠百三の十七』と『歡の膏』『聖詠四十四の八』と、天の神の種々樣々なる食物と、光を發する天の衣服の神を以て賜はるものとを有するなり。靈魂の天の生活はこれに存す。身體は己の天性に阻止せらるゝならば、禍なり、何となれば敗壞して死すればなり。靈魂も神聖なる神と親與するあらずして、たゞ己の天性に阻止せられ、たゞ己の行に依賴するならば、禍なり。何となれば神聖なる永遠の生命をうけずして、死すればなり。それ病者の身體は最早食をうくるあたはざるときは、凡て彼と親しき朋友、親戚及び病者の爲に愛せらるゝ者は、彼に望を絶ちて、彼の爲に涕泣せん、かくの如く神と聖なる天使等も神の天食を嘗めずして不朽に生活せざるべき靈魂を認めて、涕泣に値するものと爲すなり。我再び言はん、これ單に口にいふ言にあらずして、神的生活の事實なり、適當信誠なる靈魂の中におこなはるゝ眞事實なり。

十二、されば、もし汝は神の寶座となりて、天の御者が汝に乘り、汝の靈魂は全く神的の目となり全く光とならば、もし汝は彼の神的の食を以て飽かしめられ、活水を飲ませらるゝならば、もし得もいはれざる光の衣服を衣るならば、もし汝の內部の人は此のすべてを實驗上疑なく試みるならば、視よ汝は實に永遠の生命を以て活きて、汝の靈魂は今も主と共に安息せん、視よ汝は眞實の生命を以て活きんが爲に、實にこれを求めて、主より受けたるなり。しかれどももしかくの如きを一も己に認識せずんば、泣くべく、憂ふべく、嘆息すべし、何となれば今に至るまで汝は永遠なる靈界の富を未だ求め得ず、今に至る迄眞實の生命を未だ受けざればなり。是故に日夜主に祈りて、己の極貧の爲に傷み悲しむべし、何となれば恐るべき罪の極貧に居ればなり。されば、もし誰か己の極貧の爲に憂ふる此憂愁と雖も得るあらば、幸なり

もし我等は飽食せる者の如く、怠慢に時を送らずんば、幸なり。憂ひて尋ね、退かずして主に願ふ者は、救と天の富とを速に受けんこと、不義なる裁判官と寡婦との喩を結びて主のいひ給ひし如くなるべし、曰く神は『日夜彼に顧ふ者に援け給はん、我汝等に語ぐ、速に彼等を援けん』(ルカ十八の七、八)彼に光榮と權柄は世々に。アミン。

第二　講話

暗國、即罪の國の事、及び神は獨り我等より罪を除きて、我等を惡王の奴隷たるより救ひ得る事。

一、惡王――暗國は最初に人を捕へ、暗の權を以て靈魂に衣せしこと、人に衣せる如くなりき、これ人を王となして、すべて王たる衣服を彼にあたへんが爲にして、頭より足に至る迄人は王に屬するものを悉く身に着用せんが爲なり。かくの如く惡王は靈魂の實體にすべて罪を衣せて、すべてこれを汚し、すべてを己の國に捕へ、其の一肢も思慮も才智も身體も其權より自由なるものとして存せしめず、これに暗の衣服をかうむらしめたり。たとへば身體に於て苦しむは其の一部分に非ず、又は其の一肢體にも非ずして、全體すべて苦みにかゝる如く、靈魂も惡習と罪の病の爲にすべて苦しめり。惡者は人の此の緊要の部分と此の緊要の肢體たる靈魂にすべて其惡を着せたり、即罪を着せたり、されば かくの如くして、身體も苦をうけて敗壞するものとなれり。

二、使徒はいへり、『舊き人を脱ぐべし』(コロサイ三の九)と、かく言ふ時は、是れ完全の人を想像して、其目は目に相應し、其頭は頭に相應し、其耳は耳に、其手は手に相應して、其足は足に相應する者を示すなり。けだし惡者は靈魂も身體も全人を汚してこれを己に引誘し、人に衣するに汚穢不潔にして神に敵し、神の法に順はざる舊き人を以てする、即罪を以てするは、これ人の欲する如く見ずして、惡しく見、惡しく聞き、其足は惡行に急ぎて、手は不法を作し、心は惡事を思はしめんがためなり。故に我等は舊き人を己より脱がんことを神に祈らん、何となれば獨り神は我等より罪を除くを得ればなり。われらを捕へて其國に拘留する者は我等より强し、されど神は我等を此の奴隷たるより救はんとの約束をあたへたまへり。たとへば太陽が光り輝きて微風吹き渡らんに、太陽にも其體と其性とあり、風にも其性と其體とあれども、もし獨一の神が風を止めて復た吹かざらしめずんば、誰も風を太陽より分離して區

別することあたはざるべし。かくの如く罪も靈魂と混せり、しかれども罪にも靈魂にも、各々其の特別の性あるなり。

三、ゆゑにもし神は靈魂にも又身體にも居る所の此の惡なる風を熄ましめず、且これを止めずんば靈魂を罪より分離して區別することあたはざるべし。又たとへば人あり、飛ぶ鳥を見て、自ら飛ばんと欲すれども、羽翼を有たずして、飛ぶあたはざるべし、かくの如く人にも潔き者となり、非難すべからざる者となり、汚れざる者となり、惡習を己に有せず常に神と共に居らんと欲するの望あり、しかれども人に其力はあらざるなり。人は神聖なる空氣に、聖神の自由に高く飛ばんを願ふ、しかれども羽翼をうけざらん間は、あたはざるべし。ゆゑに聖神の鳩の翼を我等に與へ給はんことを神に祈らん、我等神に飛び去りて安きを得んがためなり、(聖詠五十四の七)且惡なる風、即靈魂と身體の諸部に居る所の罪を我が靈魂と身體とより離してこれを我等に斷絶せんが爲なり。けだし神は獨り此をなすことを得べし。言ふあり、『視よや世の罪を負ふ神の羔』(イオアン一の廿九)。彼は獨り彼を信ずる人々に此憐みを施して、彼等を罪より救ひ給へり、此の言ひ盡されざる救を常に待ち且望みて、不斷にこれを尋ぬる者に彼はこれを遂げしむるなり。

四、たとへば暗黑なる深夜に烈風吹き荒みて、あらゆる植物と種子とを動亂震撼せしむることあらん、かくの如く人も暗黑の夜なる魔鬼の權に落ち、夜間暗中に在りて、恐るべく吹き荒める罪の風に動搖震撼せられん、されば人のすべての性は靈魂も思慮も才智も擾亂の中にありて、身體のあらゆる部分は震撼せん。靈魂と身體の一部一肢も自由を得るあらずして、我等に居る罪の爲に苦まざること能はざるべし。これと同じく光の日と聖神の神聖なる風のあるありて、彼は神聖なる光の日中に居る靈魂を吹き、これを快活ならしめて、靈魂の全體に透徹し、諸の思念と、凡ての實質と、身體の諸部を涼うし、神聖なる得もいはれざる安息を以て安んせしめん。使徒はこれをあらはして、次の如くいへり、曰く『夜の子、暗の子にあらずして汝等は光の子、晝の子なり』と(テサロニカ前五の七)。されば かしこに於ては誘惑の中にありて、舊き人は完全なる人を己より脫して、暗國の衣を服し、即誹謗、不信、無忌憚、虛誇、驕傲、貪利、肉慾の衣を服すべく、同じく亦他の暗國の衣なる不潔汚穢なる弊衣を服せん、かくの如く此處に於ては地に屬する舊き人を己より脫し、イイススが暗國の衣を脫せしめたる彼等は、再び新し、き天に屬するの人なるイイススハリストスを衣ん、而して彼等は亦再び目に相應して其目を有し、耳に相應して其耳を有し、頭に相

應して其頭を有し、全人潔きものとなりて、天の狀を己に被むるを致さん。

五、ゆゑに主が彼等に着せるに得もいはれざる光國の衣を以てし、信望愛喜悅平安、憐憫仁慈の衣を以てし、同じく亦凡そ其他の神聖にして快活なる光と、生命と、得もいはれざる安息の衣とを以てするは、これ神は愛たり、喜たり、和平たり、仁慈たり、憐憫たる如く、新しき人も恩寵によりてかくの如き者とならんが爲なり。それ暗國と罪とは復活の日に至る迄は靈魂にかくるゝありて、罪人の身體も今日靈魂に隱るゝ所の暗にて藏はれん、かくの如く光の國と天の狀即ちイエスハリストスも今は奥密に諸聖人の靈魂を照して靈魂に主たらん、しかれども此は人々の目には秘密に見えざるものとして存し、復活の日に至る迄はたゞ一の心靈の目を以てのみハリストスは實に見らるべくして、身體も今猶人の靈魂に居る所の主の光を以ておははれ、且頌揚せられん、これ彼の時は身體も今日猶ハリストスの國を己に受け、これに安んじて永遠の光を以て照さるゝ所の靈魂と共に王たらんがためなり。光榮は彼の洪恩と仁心とに歸す。彼は其諸僕をあはれみ、これを照らして、これを暗國より救ひ、これに其光と其國とをあたへ給はん。彼に光榮と權柄は世々に歸す。アミン。

第三　講話

兄弟は正直と愛と和平とにより、互に誠實を以て生存して、内部の思念と戰ふべし。

一、兄弟は互に大なる愛を守らんことを要す。彼等は祈禱せんか、或は聖書を讀まんか、或は何の工作にか從事せんも、互に愛を基となすべし、かくの如くならば、彼等が自由なる任意は神の惠みをうくるを得ん。それ或者は祈禱し、或者は讀み、或者は工作せんに、互に實意と正直とに居るあらば、彼等は皆此を爲して益あらん。けだし如何にしるされしかを見よ『汝の旨は天におこなはるゝ如く地にも行はれん』『マトフェイ六の十』。天使等は天に於て平和と愛とにより生存して、たがひに大なる一致に居り、かしこには高慢或は猜忌のあるあらずして、互の愛と誠實とのみなる如く、兄弟等も互にかくの如くにして居らんことを要するなり。それ三十人にして一事を爲したらんには彼等終日終夜此を爲しつゞくることあたはざるべし、却て彼等の中或者は祈禱に六時間を送り、好んで讀むべく、或者は熱心に役事すべく、又他の者

は何の工作にか從事すべし。

二、故に兄弟よ、もし何か爲す所あらば、互の愛と喜びとに居らんこと肝要なり。工作する者は祈禱する者を左の如くいふべし『わが兄弟の傾する實は共同のものなり、ゆゑに我もこれを領す』と。また祈禱する者は讀經する者を次の如くいふべし『彼が讀經に於て益する者は我が爲にも益にならん』と。また工作する者は更に左の如くいふべし『わが盡す勤勞には共同の益あり』と。たとへば身の肢は多けれど、彼等一體を成して互に相助け、肢々おの〳〵自己の職分を盡すが如し、然のみならず、目は全身の爲に監視すべく、手もすべての肢體の爲に働くべく、足も身體の諸部を自ら戴せて行くべくして、他の肢は又外の肢と艱苦を共にせん、兄弟も互に如此なるべし。されば祈禱する者は工作する者を非難して、彼は祈禱せずといふこと無るべし。工作する者も祈禱する者を非難して『彼は祈禱をつゞくれど我は工作す』といふことなかるべし、又役事する者も他を非難せざるべし。反ておの〳〵何をなすとも、神の榮のために爲すべし。讀經する者は祈禱する者を愛と喜びとを以て視て、左の如く思ふべし『彼は我が爲にも祈禱す』と。しかして祈禱する者は工作する者を次の如く思ふべし『彼が爲す所の事は共同の益の爲になす』と。

三、かくの如くなれば、大なる一致と平和と同心とは、衆人に平和の同盟を互に保たしむるを得べし、されば神の恩惠をおのれに誘引して、互に實意と正直とに居るを得ん。されどもすべての中に於て最重要なるは、時に隨ひて祈禱を務むるにあること明なり。しかのみならず求むる所の目的は唯一なるべし、即實と生命とを靈魂に有する、即主を心に有することなり。誰か工作せんか、或は祈禱せんか、或は讀經せんか、彼の暫時に移らざる所得を有すべし、即聖神を有すべし。或人いへり、主は人〻より一の顯然なる結果を促すのみにして、隱然なるものは神自らこれを成し給ふと。しかれども實際はかくの如くならず、これと相反して、誰か外部の人に依り己を防守する程は、いよ〳〵思念と角逐して奮鬪せんことを要す、何となれば主は汝の自ら己を怒り、己の智と戰を作し、惡なる思念に同意せずして、これを以て樂まざらんことを汝より要求すればなり。

四、さりながら罪と我等に居る所の惡を根絶せんことは、これたゞ神の力を以てのみ成就せらるべし。けだし自己の力を以て罪を根絶せんことは、人にあたへられず、且は能はざればなり。罪とたゝかひ、抵抗して傷を負はせ、或はこれを受くるは、これ汝の力にあり、しかれども根絶するは神に屬す。もし汝は自らこれを爲すを能く

せば、何の要ありて主は來り給はんやたとへば目は光なくして視るあたはざらん、或は舌なくして言ひ、或は耳なくして聞き、或は足なくして行き、或は手なくして工作することはあたはざらん、かくの如くイイススなくんば救はるゝこともあたはざるなり。されどもし汝は左の如く言ふならば『見らるゝ如く我は放蕩者に非ず姦淫者に非ず、貪利者に非ず、ゆゑに義人なり』といふならば、これ汝は最早一切を成全せりと思ふて、誘はるゝなり。人の自ら防禦すべき罪の部分は三のみにあらず、其數千々なり。高慢、無忌憚、不信、猜疑、嫉妬、狡猾、僞善の如き何處より來るか。汝はこれらと竊に思念の中に於て角逐奮鬪せざるべからざるに非ずや。汝の家に賊あらば、彼はやがて汝を打倒さん、然らばこは汝をして安然ならしめざるのみならず、汝自ら彼を突擊して、かれに傷を被むらしめ、或は傷を受けん、かくの如く靈魂も抵抗敵對防禦せざるべからざるなり。

五、汝の自由なる任意は敵抗して勞苦と憂愁とに居りつゝ終に勝つを始めん、任意は倒れて又起き、罪は新にかれを貶せん、十次二十次戰に勝ちて、靈魂を貶せん、しかれども靈魂も亦漸々或一事に於て罪に勝たん、ゆゑにもし靈魂が堅く立ちて何事に於ても弱らざらんときは、優勢を取り、決戰して、罪に勝つを始めん。しかれども

もし此の時に注意して己を省みるならば『成全の人となり成長の量に達して』『エフェス四の十三』充分死に克つに至る迄は、罪は猶全く人に勝たん。けだし錄して言ふあり、『最後に滅さるゝ敵は死なり』『コリンヲ前十五の廿六』かくて人々は罪を負かして、其勝利者とならん。しかれども前文にいひし如く、もし誰か『我は放蕩者にあらず、姦淫者に非ず、貪利者に非ず、我が爲にこれを以て足れり』と言ふ者あらば、これ斯の如き場合に於て彼は三の部分と戰へども、他の二十と戰はず、即罪が同じく靈魂と戰はんとする二十とはたゝかはずして、反つて彼等に勝たるゝなり。ゆゑにすべてに於て戰ひ、且格鬪せんことを要す、何となれば我等がしばしば言ひし如く、智は角力者にして、罪と競爭し、思ひに抵抗せんが爲に同等の力を有すればなり。

六、されどもし反對の力は更に強うして、惡習は人に全く王たりといふならば、これサタナに從ひしが爲に人間を罰する神を罪して不當となすなりサタナの有力にして或る强制の力を以て已に從はしむるときは、汝の意にサタナは靈魂より更に上にして、更に有力なりとなさん。しかれども終に我が言をきくべし。たとへば青年と童子と戰ふて童子が負かされんに、其負けたるが爲に童子を非難するならば、これ大なる不當ならん。ゆゑに余は斷定す、智は角力者にして、かつ同等の力ある

角力者なりと。ゆゑに彼と戰ふ所の靈魂は、救援と防禦とを求め、これを得て救を受けん、けだし戰と苦行とは同等の力あるによりて爲し得らるればなり。我等父と子と聖神を世々に讃揚す。アミン。

第四　講話

「ハリステアニン」たる者は神と天使等より、天の頌讃をうけんとせば、謹慎と勤勉とを以て此世を進行せざるべからず。

一、「ハリステアニン」の生活を大に著實にみちびきて、完全に至らしめんと欲する者は、先づ靈魂の常識の爲め、及び理性の爲に極力慮らざるべからず、これ我等善と惡とを正確に區別する才能を求め得て、純潔なる本性にこれと相應せざる者の入來る所以を竟に辨識し、正しく且錯らずして生活せんが爲なり、また理性を益用すること目の如くして、惡習の暗示と親まず、これと同意せずして、これにより神聖なる賜をうけて主に適應するものとならんが爲なり。されど我等は見ゆるものより例證を取らん、何となれば身體と靈魂と、身體に屬する者と靈魂に屬する者と、見ゆる者と隱れて見えざる者との間に類似の點あればなり。

二、身は目を以て嚮導者となす、されば目は見て、全身を緊要なる途にみちびかん。然るに人あり、樹木叢蔚として、荊棘叢生し、泥濘深うして、かしこに火の途を塞ぎて劒の刺込まれたるあれば、こゝには懸崖と水の滿々たるある其場所を行くと想ふべし。もし旅客にして機智あり、注意深くして、恐れざる者たらんときは、目を嚮導者となし、大なる注意を以て此の困難なる場所を通過し、手を以ても足を以てもその裏衣を百方保ち全うし、樹間又は荊棘の中にありて破られず、泥に汚されず、劒に刺されざるを致さん、且目は全身の爲に光となりて、これに途を示し、これをして懸崖に打碎かれ、或は水に溺るゝをまぬかれしめ、或はいかなる困難の場所にも害をうくるを免れしめん。かくの如く機智ある敏捷なる旅客は目の指示にしたがひて直行し、全く用心して其裏衣を揭ぐ、されば自己も傷はれずして守られ、衣る所の裏衣も燒かれず、壞られずして守られん。されど怠惰等閑、不注意、緩慢、不精なる旅人が同所を通過するならば、百方力めて衣を揭げんとの堅き決心の足らざるにより、其裏衣はこゝかしこに飜りて、小枝や荊棘の爲に破られ、或は火に燒かれ、或は刺込まれ

たる劒に截割かれ、或は泥に汚されん、一言にてこれを言へば、美にして新らしき裏衣は、己が不注意と不精と緩慢との爲に、暫時にして壞られん。且や旅客は目の指示に充分當然なる注意を爲すあらずんば、自身も溝に陷り、或は水に溺れん。

三、靈魂もこれと同樣なり、彼は身體の衣を己に着ること、美なる裏衣を着る如くし、すべて靈魂と身體とに方向を示すべき理性をおのれに有しつゝ、樹木森々として荊棘叢生せる生命の逕路を辿り、泥と火と懸崖との間を經行するときは、清醒と勇氣と勤勉と注意とを以て到る處に己を保ち且守らんことを要するなり。しかれども身の裏衣をして此世の樹木森々として荊棘叢生せる途に於て何の處にか憂愁と繁忙と世の誘惑との爲に破られ、又は慾火の爲に燒かるゝを免れしめんとせば、これを衣る靈魂は目を背けてあしきを視ざるべく、耳を背けて風評を聽かざるべく、舌を無益なる談話より、手と足とをあしき業事より止むべし、何となれば靈魂には身の諸肢を背けてあしき觀玩と惡しくして愧づべきものをきくと、不適當なる言說と、世の惡事とに入らざらしむべき自由を與へられたればなり。

四、靈魂は自らも其思を此世に轉廻せざらしめんが爲に、心を防ぎ守りて、惡なる轉廻より遠ざかるべし。さてかくの如く苦鬪して、全く勉勵し、如何なる場合にも、大なる注意を以て身の諸肢を惡よりとゞめて、最美はしき身の裏衣を破られず、燒かれず、汚されずして守るべし。しかれども彼は自らも智を好ひと思慮と意志の分別とにより、力に應じて己を操持し、世のもろ〳〵の欲望より遠ざかる程は、殊に主の力を以て保護せらるべくして、これが爲に前文にかゞへたる惡より己を眞實に護るが爲に主より助をうけんがだし主は人が勇氣にして浮世の快樂より、物質上の欝散、及び心配より、此世の械繫より、及び無益なる思の轉廻より遠ざかるを見るときは、かくの如き者に其恩寵の助を與へて、惡なる現世を殊勝に進行する此靈魂を錯まらずして守らしめん。それ此の如くならば、靈魂は世の惡くの欲望より遠ざかりて、自己をも、身の裏衣をも、出來る丈殊勝に保護し、神の助を得つゝ、此の娑婆に於るの進行を殊勝に遂成したるが爲に、神よりも天使等よりも天の頌讃を賜はらん。

五、しかれどももし誰か不精と不注意とによりて、不謹愼に此生涯を送り、自己の自由にしたがひて、世のもろ〳〵の欲望より遠ざからず、惡くの願望を以て獨一の主を尋ねずんば、其身の裏衣は此世の荊棘と樹木とに破られ、欲望の火に燒かれ、遂に樂の泥を以て汚されん、ゆゑに靈魂は審判の日に勇氣を有たざる者としてあらはれん、何となればその衣物を汚されずに守るあたはずして、此世の誘惑の間にこれ

を敗壞せしめたればなり。これが爲に彼は天國より躍けられん。けだし自己の自由にしたがひて、己を世に委し、世の快樂に惑はされ、或は物體的快樂の中を轉々して迷ふ所の者に神は何をか爲し給ふべき。物質上の快樂と蕩染の習慣とより遠ざかり、力を盡して思を主に常に向はしめ、自ら己を棄てゝ、獨一の主をたづぬる者に神は其助をあたへ給はん。此世の狹谷に於ていづれの場合にも羅網を用心し、『恐懼戰慄』を以て己の救を成し『フィリッピ二の十二』悉くの注意を以て此世の羅網と色慾と懊を廻避し、主の助を尋ね、主の憐みにより、恩寵を以て救はれんを希望する者を神は守り給はん

六、視よ智なる五人の童女は自ら儆醒し、自己の天性の爲に非常なるものに急ぎて、其心の器に膏を取れり、即上よりあたへらるゝ神の恩寵を取りて、新郎と共に天の室に入るを得たり。しかるに自己の天性と共に止まりたる他の愚なる童女は儆醒せず、猶肉體に居る間に『歡の膏』『雲詠四十四の八』を己の器に取るに盡力せず、却て怠慢、不精、不注意、無知により、或は己の義に自負するにより、さながら睡眠に耽りたるがごとくなりし、ゆゑにこれが爲に天國の室に入るをゆるされず、天の新郎を喜ばすことあたはざりき。彼等は世の械繫と地上の或る愛とに支へられ、其のすべての愛と服從とを天の新郎にさゝげずして、己れに膏を携へざりき。然れども天性の爲に非常なるもの、即神の聖賜を尋ねたる靈魂はそのすべての愛を以て主に結び付けられ、主と共に行き、すべてより離れ遠ざかりて、祈禱と思とを主に向はしむ、ゆゑにこれが爲に彼等は天の恩寵の膏をうくるを賜はりぬ、されば此後彼等はすべてに於て神的新郎を全く喜ばしめ、錯まらずして其進行を積くるを得ん。しかるに己が天性に止まりたる靈魂は、思を以て地に跂行し、地の爲に慮りて、其智は地に住所を有す。彼等は自ら己を新郎に屬すと思ひ、肉に屬する稱義を以て飾らるゝしかれども歡の膏をうけずして、上より神を以て更生せざりき。

七、聰明なる靈魂の五感は、もし上より恩寵と神の聖賜とを己に受くるならば、實に上より恩寵の智慧を己にうけたる智なる童女とならん。しかれどももし彼等はたゞ一の天性と共に止まるならば、愚者となり、世の諸子としてあらはれん、何となればかれらは或る推考により、又皮想により、自ら己を以て新郎の新婦たる如く思ふといへども、世の精神を脫せざればなり。主に全く附きたる靈魂は思を以て彼に居り、彼に祈禱をさゝげ、彼と共に行きて、主の愛を懇願せん、かくの如くこれと相反して世の爲の愛に耽り、其住所を地に有せんと欲する靈魂は、かしこに行き、思を以て

てかしこに止まり、其智はかしこに居らん。故に其靈魂は神の善なる智慧に變化せざること、我が天性の爲に或る非常なるものに變化せざるが如くなるべし、天性の爲に非常なるものとは、是即われら主と共に天國の室に入りて永遠の救を捉ふるを得んが爲に、我等の組織に入りて、天性と合一するに缺くべからざる天の恩寵をいふなり。

八、初人の悖逆の結果によりて我等は天性の爲に奇怪なるものを己にうけたり、即有害なる諸慾を受けたり、然るに習慣により、長久の間を以て、これを我が有となしたるにより、變じて己の爲に天性の如くなれり、されば再び我等が天性の爲に非常なるものを以て、即神の天上の賜を以て、此奇怪なるものを我等より逐ふて、我等を原始の潔淨に復興せしめんこと肝要なり。ゆゑにもし今日大なる祈願と請求とを以て、信と祈禱とを以て、世に遠ざかるにより、彼の天に屬する神の愛をうけず、また惡習に汚されたる我等が天性は愛に、即主に附かずして、彼の神の愛を以て聖にせられず、主の誡命にしたがひ、全く若實に生活して、終に至る迄錯まらざるものとなりて存せずんば、天國を捉ふるあたはざるなり。

九、余は己の力に應じ精微にして意味深長なる或る言を述べんと欲す。ゆゑに聽明を以て聽くべし。無限にして近づくべからず且は造られざる神は其無限にして測るべからざる仁慈により、己を肉身となし給へり、いはゞ近づくべからざる己の榮光を自ら抑損せし如くなるは、これ其の見ゆる造物、即もろ〳〵の聖なる靈魂及び天使等と合致するを得て、彼等も神性の生命に與かるものとなるを得んためなり。さりながら恐くの造物は天使も靈魂も魔鬼も其の己の天性によれば即體なり。

是れ絶對的に理會せずして、相對的に解すべし。イオアンダマスキン（二書三章正教の精確なる說明を見よ）いふ『天使は無形體なる實在なり……然れども我等と比して天使は無形體非物質なるものと名づけらる。げだし獨一無比なる神に比するときは、萬物は粗大物質的なるものと認めらるゝなり。だゝ一の神性は嚴正の意味に於て非物質なり、且は無形體なり。

何となればたとへ彼等は幾微なるものと雖其本體に於ては、其特質によるも、又其狀態によるも、其天性の幾微なるに應じて幾微なる體なり、然りといへども此の我等が身體は其實在に於て粗大なり。かくの如く靈魂も幾微なるものなれど、見る目と、聞く耳とを被むり、同く亦言ふ舌と手とを被むれり、一言にてこれをいへば、靈魂は凡の體と肢とを被むりて、身體と融合し、これによりて凡の生活官能は完備せら

るゝなり。

十、かくの如く無限にして測るべからざる神は其の仁慈により、おのれを抑損し、此肢體をかうむりて、近づくべからざる光榮を自ら隱したまへり。彼は寛容と人を愛するとにより、變化して己を肉身となし、入りて合一して、聖なる神の悅ぶ所となれる信誠なる靈魂を受け、パウェルのいふ如く彼と一神となること、(コリンフ前六の十七)たとへば靈魂が靈魂と、實在が實在と合一する如くなれるは、これ神に適當して主悅ぶ所と本れる靈魂が革新して生活し、不死の生命を感ずるを得て、不朽の光榮に與かるものとならん爲なり。げだし神は此の有形なる造物をも無より有となし、或る大なる異種多樣と許多の參差たるものとになしたまひしが、其有とせられざる間は、造物はあらざりき。されど欲するあるや、粗にして硬なる實體を無より容易に造り給へり、例へば山と木との如き是なり(汝は彼等の性のいかに硬固なるを見よ)、其後中間なるもの、即水を造りて、水より鳥の生るゝを命じ給へり、而して更に最幾微なるもの、即火と風とを造りて、幾微なるにより、肉眼にて見えざるものをさへ造り給へり。

十一、さりながら神の多種多樣なる睿智の無限にして思議すべからざる意匠は、神の意によりて現實となれる粗き精しき柔なる諸體を無よりつくり給ひし如く、いかに欲し何を欲するも、自由なる常在者は、殊に自ら言ふ可らざる仁慈と悟るべからざる善意とにより、肉身となりて、己を變化し、抑損し、聖なる、適當なる、且信實なる靈魂に己を擬して、彼等が容れ易きに從ふは、これ其の見るべからざる者が彼等の爲に見ゆるものとなり、觸るゝあたはざる者が靈魂の幾微の性質に應じて觸るゝを得べきものとならん爲なり、又其の靈魂が彼の仁慈と甘美とを感じて、言ふ可らざる樂の光を實驗して樂しまん爲なり。又欲するときは、彼は我等に輸入せるもろ〳〵の不良なる靈魂の病を燬き盡す火とならん。げだしいふあり『我等の神は燬き盡す火なり』(エウレイ十二の二十九)。然れども又欲するときは、得もいはれざる且は説明し得ざる慰となならん、靈魂が神性の平和を以て安んぜんためなり。且欲するときは、喜となり、平安となりて、靈魂をあたゝめ且護らん。

十二、しかれどもし靈界造物の喜びと樂とに充てんが爲に、己を造物の一に擬せんと欲するならば、例へば光の城なるイエルサリムに、或は山なる天のシオンに擬せんと欲するならば、すべて其意の欲する如くなるべし、錄していへる如し、汝等の『就きし所はシオンの山、及び活くる神の城、天のイエルサリムなり』(エウレイ十二

の廿二)彼に適當する信誠なる靈魂の爲に變化し給へる彼のためには、何を欲するもすべて難きことならうして、容易に爲し得るなり、たゞ人は彼に納れられて、其の悅ぶ所とならんことを勉むべし、さらば天の福と名狀すべからざる樂と神性の無限の富とを實に試みて、適切にこれを見ん、實に『目未だ見ず、耳未だきかず、人の心に未だ入らざる』(コリンフ前二の九)ものを見るべく、適當なる靈魂の慰安となり、喜びとなり、樂となり、永遠の生命となり給ひし主の神を見ん。けだし主は食の爲、又飲の爲に己を肉身となし給ひしこと、福音經にしるされし如し、曰く『此の餅を食ふ者は世々に活きん』(イオアン六の五十一)。これ靈魂を得もいはれず安んぜしめて、靈界の樂みを彼に充たさんが爲なり。げだしいへり『我は生命の餅なり』と(イオアン六の三十五)。しかれどもこれと同樣天の流れを飲ましめんが爲にも、己を肉身となし給ひしこと、錄していへる如し『我が彼にあたへんとする水は其中に於て永遠の生命に湧く水の泉とならん』(イオアン四の十四)。またいへり『皆おなじく屬神の飲を飲めり』(コリンフ前十の四)。

十三、かくの如くなれば彼は自ら善んずるあり、又は有益なるあるや、聖なる列祖におの〳〵現れ、或はアウラアムに、或はイサアクに、或はイアコフに、或はノイに現れ、又聖なる各預言者にはダニイル、ダヴィド、ソロモン、イサイヤに現れ、或はイリヤに或はモイセイに現れたまへり。故に余思ふにモイセイが四十日禁食の全時に當り、山上に在りし間は、彼の靈食に就き、これを以て自から慰め且樂みたりしならん。此に由りて觀るに自ら善みんずるあるや、各聖人に現れたまひしは、彼等を慰安し且救ひて、神を識るの認識に至らしめんためなり。げだし何を欲するも、彼の爲には全く容易なり、されば其の欲する如く己を抑損して、己を肉身となし、且變化して彼を愛する者の爲に瞭然として見ゆる者となり、大なる得もいはれざる愛により、近づくべからざる光榮の中に在て、各人の力に應じ、これに適當なる者となりて現れん。しかれども大なる願望と期待とを以て、信と愛とを以て、上より彼の能力をおのれに受け天に屬する神の愛をうけて、不死なる生命の天の火を既に己に有する靈魂は實に世のもろ〳〵の愛より脫し、惡習のすべての械繫より免れて、自由を得ん。

十四、火中に置かれたる鐵、或は鉛或は金、或は銀は變じて軟なる物體となり、硬き性質をうしなひて、火中にある間は、火の溫煖の力により、鎔解して天然の硬質を變せん、かくの如く靈魂も世を棄てゝ獨一の主を愛し、中心より大に尋求むると共に、勞と苦行とにより、望と信とを以て、不斷に主を待ちて、彼の天に屬する神性の火と

神の愛とをおのれにうくるならば、最早其時は世の悪くの愛より實に解脱し、情慾のすべての害よりまぬかれ、一切を自ら抛棄し、その天然の性質とその有罪なる硬質を變じて、獨一なる天の新郎を己に受け、彼に對する熱ゆるが如くなる、言ふ可らざる愛を以て自ら安んじて、すべてを贅物と爲さんとす。

十五、されば爾に告げん、爾は其目前に最愛の兄弟を有するあらんに、もし彼等は此の天の新郎に於るの愛を阻止するならば、靈魂は彼等を嫌はん、何故なれば生命とその安息とは天の王と與にする奥密なる言ふ可らざる親與にあればなり。けだし肉體上の親與に於ける愛さへも父、母、兄弟と離れしめて、すべて彼等に關するものは、心に於て他人的とならん。ゆゑにもし人は彼等を愛するならば、他人の如く愛して、そのすべての愛情は其配偶者にあらん。けだし言ふあり『是故に人は其父母を離れ其妻に着きて、二の者一體とならん』〔エフェス五の三十一〕此によりて觀るに肉體の愛さへも悪くの愛より離れしむること此の如くならば、いはんや彼の大に願欲する天の聖神と與にする親與を實にたまはりし者は、世に對する悪くの愛より離れて、すべては彼等の爲に贅物の如くならん、何となれば彼等は天の願の勝つ所となりて、これと密なる關係をなせばなり。かしこには願望あり、かしこには彼等の思慮あり、かしこには彼等生活し、かしこには彼等の思往來して、神聖なる天の愛と靈界の望とに勝たれたる彼等の智はかしこに常に留在するなり。

十六、至愛なる兄弟よ、是後幸福はかくの如く吾人の前にあり、許約はかくの如く主を以て知らさるゝならば、我等はすべての妨礙を己より絶ち、此世の如何なる愛よりも遠ざかりて、彼の惟一の幸福を求め且願ふことに己を貢獻せん、得もいはれざる神の愛を受くるを得んためなり、福なるパウロは此愛を求むるに迷なるべきを我等に勸めて、曰く『愛を追求めよ』〔コリンフ前十四の一〕、また彼等剛愎の後に於て至上者の右の手を以て變化をうけ、神聖なる神の愛に感刺せられて、溫柔と心神の安きとに到り達せんためなり、何となれば、すべて反對なる者より己を奪ふて、全く主に歸するや、主は大なる仁心を以て我等を恤み給へばなり、然のみならずもし我等は大なる無智により生命より遠ざかり、眞實に悔ゆるを欲せずして自分にも多くの妨を置くといへども、もし改心し、主に就きて、我が内部の人を光らすや、我等に恒忍なる主は大なる善心をあらはし給はん、審判の日に於て我面の耻を被むるを免れん爲なり。

十七、しかれども道德の苦行の嚴しきにより、確言すれば反對者が納るゝ所の暗

示と勸誘とにより、此を爲すことの我等に難きが如く思はるゝならば、視よ、主は憐を垂れ、我等の改心を待ちて、更に寛忍し給ふなり、されば、もし罪を犯すならば、我等の悔改を期してこれを忍耐し、もし陷るならば、我等を新に受くるを耻ぢ給はざること、預言者のいひし如くならん、曰く、『人もし仆るれば起きかへるにあらずや、もし離るれば歸り來るにあらずや』(イエレミヤ八の四)我等はたゞ善なる意思を求め得て微醒し、主の助を尋ねて、速に且正しく彼に歸せん、而して彼は我等を救はんと欲す、何となればわれらの力に從ひ己の意志を彼に向はしむる熱ゆるが如くなる進向と、任意よりする善なる信仰と熱心とを待ちて、すべての非常なる進歩を彼は自ら我等に生せしめんとすればなり。ゆゑに至愛者よ、我等は神の子として、悉くの偏見、怠慢、及び懶惰を脫して、彼の跡に從ひ行くに勇氣ある者となり、準備したるものとならんことを盡力し、惡習の爲に誘ひ去られて日々にこれを遲延することあらざらんけだし我等が肉體より出で去るは何れの時なるを我等知らざればなり、パリスチアニン」の爲に約束は大にして、言ふ可らざるなり、其大なるは凡そ天地の光榮も、壯嚴も、其他の裝飾も、異種多樣も、富も、美麗も、有形上の樂みも、信仰及び一の靈魂の富に對すれば比較にもならざらんとす。

十八、さらば斯程なる主の奬勵と約束の中にありて、我等はまつたく主に就き、聖書經に言ふ如く己の生命をさへ棄てゝ、他のすべてをさゝぐるのみならず、自ら己を主にさゝげ、他の何物をも愛さずして彼獨りを最愛するを如何ぞ願はざるべけんや、視よ、此のすべては我等に賜はりぬ、さらば倘は何等の榮やあるべき、列祖及び預言者等の時より以來、我等に於る主の照看はいくばくなりしや、約束はいくばくなりしや、奬勵はいくばくなりしや最初より我等に對する主宰の慈善は如何知らされしや。然るに彼は終に自ら來りて、我等に對する得もいはれざる仁慈を證するなりしや。然るに彼は終に自ら來りて、我等に十字架に釘せられしを以てしたるは、我等改心せし者を生命にみちびき入れんが爲なり。しかれども我等は己の嗜好と世の爲の愛と、惡なる偏見及び習慣とを未だ絶たず、これによりて、小信なる者或は不信なる者とさへわらはるゝなり。しかれども視よ、此のすべてに對しても、主は見えずして我等を護り且安んせしめ、我等が罪の爲に我等を世の惡習と誘惑とに終に沈ましめず、大なる仁慈と寛忍とにより、我等が亡ぶるをゆるし給はず、何れの時か反歸し來らんと倘は注目して、我等に憐憫なる者として存し給ふなり。

十九、さりながら余は恐る、すべてを裁んとして生活し、偏見を以てみちびかるゝ我

等に使徒の言が漸次に應驗し來らんことを、曰く『抑爾は神の仁慈、寛容、恒忍の豐厚なるを藐して、其仁慈が爾を悔改に導くを知らざるか』〔ロマ二の四〕されば、もし神の恒忍と仁慈と寛容の中にありて罪の數を更に增加し、その怠慢と藐視とを以て最大なる定罪を己の爲に準備するならば、使徒の左の言は我等に應驗せん、曰く『然れども爾は剛愎と悔なき心とに循ひて、己の爲に神の怒の日、及び其義判の顯現の日に怒を積む』〔同上五〕。けだしもし我等は救を捉ふるを得るがために傾聽せんを願ひ、神に全く歸するに盡力するならば、神の仁慈は大にして思議すべからず、人間に對する神の恒忍は言盡し難からんとす。

二十、しかれどももし爾は神の恒忍と神の大なる仁慈とを認識せんを欲せば、神の默示に成れる書によりてこれを學ぶを得べし。『イズライリ人を觀よ、列祖は彼等の中より出で、許約は彼等の爲に定められ、彼等よりハリストスは肉體によりて出で、禮儀と許約とは彼等に屬したりしに』〔ロマ九の四、五〕、いかんして彼等は多く罪を犯したるか。幾回迷路に入りたるか。しかるに神は彼等を終に棄てたまはず、艱難を以て彼等の剛愎をやはらげんと欲し、彼等の釜とならんが爲に、暫時の間彼等を罰に付し、かれらを眷み且奬勵して、かれらに預言者をつかはし、彼等が罪を犯して神を愛ひしめたる時にも、彼等に對して恒忍なること幾時なりしや。改心する者を喜んでうけ、再び迷路に入りしときもこれを棄てず、預言者等を以て呼んで改心せしめ、彼等が神に背きて又神に歸せしことしば〳〵なりしといへども、何れの時にも深き慈悲をもつて迎へ、手を自己の主宰に擧げて大なる罪に陷るに未だ至らず、列祖と聖なる諸預言者との傳により、己の爲に贖罪主となし、救世主となし、王及び預言者となして彼を待ちし間は、仁愛を以て受けたまへり。けだし主の來るや、彼等は受けざるのみならず、剩へ大なる凌辱に付して、終に十字架に死刑に付せり。而して此の大なる凌辱と非常の犯罪とを以て大に增加せし彼等が罪惡は貫盈するに至れり。故に聖神が彼等を離れて殿幕の裂くるに至るや、彼等は終に棄てられたり。ゆゑに彼等の殿も異邦人にわたされ、破壞荒廢して主の定めし如く『一石も石上に遺らずして皆圮されき』〔マトフェイ廿四の二〕。かくて彼等は斷然異邦人に付され、當時彼等を捕虜としたる諸王の爲に全地に散らされて最早己の國に復るべからざるを命せられたり。

二十一、『我等各人に憐憫仁慈なる神は、今も如此その恒忍をあらはし給ふ、されば各人より幾回か凌辱をうくるにも拘らず、人の時を經て覺醒するあらざるか、自か

ら變化して、最早復び神を辱めざるやうになるあらざらんかとこれを待ちて沈默し、而して罪より改心する者を大なる愛と喜とを以てうくるなり。げだし言ふあり、「一の悔改むる罪人の爲に喜びあり」〔ルカ十五の十〕又いふあり、「此の小子の一の亡ぶるは我が父の旨にあらず」〔マトフェイ十八の十四〕さりながらもし誰か神の彼に對する大なる憐憫と恒忍との中にありて、おの〳〵隱れ顯れたる有罪なる蹉跌の爲に、神が彼を罰に付せずして、これを見るも沈默して悔改を待つ如くなるや、彼は自ら大にこれを藐忽して、罪に罪を添へ、不注意に不注意を加へ、一の犯罪に他の犯罪を作りて、罪の量を滿てんとするならば、終に出づる能はざる罪に陷りて破碎せられ、惡者に付されて全く亡びん。

二十二、ソドム人はかくの如くなりき。多く罪をおこなひしも改心せず、終に天使に對し惡謀を以て彼等と男色を行はんとの望を起し、悔改の爲に最早餘地あらざる程罪に陷りて、全く棄てられたり、げだし罪の量をみちみて〻其極に達したればなり。ゆゑに神の審判により、火を以てやかれたり。パイの時にもかくの如くなりき、じば〳〵罪に陷りしも、悔改の果を結ばず、罪惡蔓延して終に全地を腐敗せしむるに至りぬ。埃及人等もかくの如くなりき、彼等は多く神を辱めて、神の民に對し罪をおこなひしも、神は更に憐憫にして、彼等を終に殄滅する程の罰をば彼等に加へず、ただ瞭解して反省と悔改に至らしめんがために、輕き打擊をかうむらしめ、その恒忍をあらはして、彼等の悔改を待てり。しかれども彼等は神の民に對し、多く罪を犯して、或は改心せしも復たそれを悔恨し、惡なる任意の昔日の不信に固まりて、神の民を奴隷虐使し、終に神がモイセイを以て多くの奇跡により、民を埃及よりみちびき出したる時、神の民を追跡窘逐して、大なる罪を遂げたり。ゆゑに神聖なる審判は、終に彼等を殄滅し、現在の生命に堪へざるものと認めて、彼等を水に溺らしたりき。

二十三、これと同樣イズライリ人も前文に述べし如く、神が彼等の悔改を待ち、沈默して恒忍したまひし間に、神の預言者を殺し、又他の惡行を多く行ひ、しば〳〵蹉跌して罪を犯し、終に打碎かれて、最早起つ能はざる程蹉跌せり。何となれば主宰の尊威に手を擧げたればなり。ゆゑに神に棄てられたる彼等は全く擯斥せられ、彼等より預言と神品の職と奉神禮とを奪ひ、このすべてを以て篤く信じたる異邦人にあたへられしことは、主のいひ給ふ如し、曰く、「神の國は爾等より奪はれて其果を結ぶ民に與へられん」〔マトフェイ二十一の四十三〕。此時に至るまで神は彼等を忍耐して、

其の恒忍を絶たず、彼等に憐を垂れて休せざりき。さりながら主宰の尊威に手を擧げて、罪の量を充て、剩へこれを搖撼して、滿たしめたるにより、全く神に棄てられたり。

二十四、至愛者よ、我等聖書より汲み來れる意義により、此事を敷衍せしは、出來る丈我等は速に改心して主に急がざるべからざると、主は我等がもろ〳〵の惡行と惡なる偏見とより全く遠ざかるを待ちて、改心したる者を大なる喜びを以て受け給ふを證定せんが爲なり、我言ふ、此事を敷衍したるは我等輕慢の心を日々に長せしめず罪に陷ることの我等に增加せずして、これにより神の怒りを己に引かざらん爲なり。ゆゑに誠實の心を以て反省して神に就くことを努めん、失望は兇惡と詭計とにより徐々と沁入したるものなるにより、先に犯したる諸罪を想起するにより救に失望せざることを努めん、けだし人を失望と不精と怠慢と不注意とに至らしむるは、人をして改心して主に就き、人間に對する主の大なる憐みによりて救を受くるを得しめざらんが爲なればなり。

二十五、しかれども我等を預め占領したる罪の多きにより、改心することの我等に實行し易からざる如く、且は能はざる如く見ゆるならばかくの如きの思は我等すでにいひし如く兇惡を以て徐々と沁入したるものにして、我が救の爲に妨となるなり。主の如何なるを己の記憶に呼起して、深く注意するなくんばあるべからず、けだし主は其仁慈により我等に來りて、暫者には見るを賜ひ、難聾者を愈し、もろ〳〵の病を療し、最早腐爛しかゝれる死者を復活し、聾者の耳を開き、或者よりは魔鬼の全軍を逐出して、如是の魔鬼に苦めらるゝに至りし者に健全の智識を回復せしめたるによる。況や又改心して主に歸し、其憐を尋ねて其助を要求する所の靈魂を主は顧みて無慾の貞潔と諸の德行の建設と、心の作新とにみちびき、これに理解の健全と透明と思の平安とを賜ひ、無知不信及び無忌憚の替なると、聾なると、死人の如くなるとより擧げて德行の貞潔と心の清淨に昇すに於てをやけだし身體を造りし者は靈魂をもつくりたまへり。されば彼は其の仁慈により、地上に居り、善なる獨一の臂として、凡そ來りて彼に助けと愈しとを求むる者には其宏慈により必要なるものをあたへたまひし如く、靈神上の事に於ても彼は宏慈たるなり。

二十六、それ主は敗壞して死せざるべからざる身體にさへかくの如く憐を垂れて、凡そ求むる所の者には準備と仁慈とを以て此を爲し給ひしならば、矧や死せず、壞れず、腐らざる靈魂に於てをや、即無知、惡習、不信、無忌憚及び其他有罪なる情慾の

病に陷りしも、主に來りて其助を求め其憐みを仰ぎ望みて、もろ〳〵の惡習ともろ〳〵の情慾とより救はれて、自由を得んが爲に神の恩寵を彼より受けんを願ふる。靈魂には、全く速に且準備して、治療の助を與へたまふこと、次に言ふ如くならん。曰く矧や天にいます父は『日夜彼に顧ぶ所の者に援けざらんや』又これに加へていへり『爾等に語ぐ、速に彼等を援けん』〔ルカ十八の七、八〕主はまた他の所に於ても我等に勸諭していへり『求めよ、然らば爾等に與へられん、尋ねよ、然らば遇はん、門を叩けよ、然らば爾等の爲に啓かれん』〔マトフェイ七の七、八〕又更に加へていへり『況んや天に在ます父はこれに求むる者に聖神をあたへざらんや〔ルカ十一の十三〕誠に爾等に語ぐ、もし彼は友なるが故に起きて彼に與へざるも、其切迫に依り起きて其需むる如く彼に與へん』〔同上八〕

二十七、此のすべての言を以て、主は我等に退かず連綿として倦まず、恩寵の代保を願ふべきを說勸したまへり、何となれば主は罪人の彼に歸して彼を信ずる者等を愍さんが爲に來りたまへばなり。我等はたゞ我が力に能くする程は惡なる偏見を棄て、醜き所業と世の誘惑とを憎み、惡なる無益の思を棄て、己の力に準じて常に彼に附かん、彼は其助を我等にあらはさんことを準備し給ふ、何となれば彼は最憐憫なるにより、生活を施し、愈すべからざる情慾を醫し、彼を呼び、彼に向ふて、自己の自由により强ひずして世のもろ〳〵の愛より力に準じて遠ざかり、智を地より引出して其顧と求めとを彼に向はしむる者に救を施したまへばなり。されば、すべて貧物と爲し世に何も慰藉するものあらずして、安心の爲にはたゞ一を待つ即彼の仁慈を以て安んせしめられ且喜ばしめらるゝを待つ所の靈魂は、彼の助に適當するものとならん、ゆゑに靈魂は如此の信仰の爲に天の賜を受けん、即恩寵により確に其渴望を安んせしめて、適當相應なる施度を以て聖神につかへ、日々に善に進歩し、正義の途を離れずして、終に至るまで惡習に傾かず、これと親まずして、止まり、何を以ても恩寵を辱しめずんば、世に居りて效法したる諸聖人の同伴又は同行者とじて彼等と共に永遠の救をうけん。アミン。

第五　講話

「パリステアニン」と此世の人々との間の差異は大なり。

一は世の神を己れに有し、心に於ても、智に於ても、地上

の械繫に縛らるれど、一は天父の愛を希ひ、獨り彼を以て其悉くの願望の所歸と爲す。

一、「パリステアニン」には自己の世界と自己の生活の狀態とあり、才智も言語も己に屬するものあり、されど此世の人々は生活の狀態も才智も言語も活動も異なれり。一は「パリステアニン」にして、一は世に偏する者なり、彼と此との間の懸隔は大なりけだし地の住者、此世の諸子は此の地の篩中に撒入れられたる麥に似たるあり、されば浮世の事と欲望と大に紛紜錯雜なる物質的概念の絶えず激動するに方り、此世の轉變不定なる思の中にありて、簸はるゝなり。サタナは靈魂を震撼し、篩を以て、即浮世の事を以てす、べて罪ある人間を簸はんとす。アダムが墮落して誡命を破り、彼に對して權を取りたる惡王に屬せし以來、サタナは絶えず誘惑擾亂せる思を以て此世の諸子を簸ふて、地の篩中に衝突せしめんとす。

二、麥は篩中にありて、簸ふ者のために打たれ、絶えず打上げられて、振飄せん、かくの如く好惡の王は浮世の事を以てあらゆる人類を占領して、これを動搖擾亂狼狽せしめ、すべて有罪なるアダムの族を絶えず虜にし、これを擾し、これを捉へて、無益の思と、嫌はしき慾望と、地上世間の關係との爲に戰はしめんゆゑに主は將來使徒等に對し惡者の蜂起すべきを預言していへり、曰く『サタナは汝等を麥の如く簸はんことを求めたり、然れども我わが父に爾等の信の盡きざらんことを祈れり』(ルカ廿二の三十一、三十二)けだし造成者は明にカインにつげて、『地にさまよふ流離子となるべし』(創世記四の十二)といはれしが、此の言と決定とは、隱然としてあらゆる罪人の狀態又は像似となれり、何となれはアダムの族は誡命を破り罪人となりて、此の像似を隱然己れに受けたればなり。人類は畏懼と戰慄とすべての擾亂の轉變不定なる思の爲、又欲望と種々多樣なる快樂の爲に動搖せられん。此世の君は神より生れざるもろ〳〵の靈魂に波を起して、絶えず篩中に旋轉せらるゝ麥の如くし、人間の思を種々樣々に騷がし、すべてを動搖せしめ、世の誘惑と肉身の快樂と畏懼と擾亂とを以て捉へんとするなり。

三、されば主は惡者の誘惑とその欲する所とに從ふ者がカインの森惡に肖たるものを己れに有するを證し、彼等を責めていへり『汝等はなんぢらの父の慾を行はんと欲す、彼は始より殺人者にして眞實に立たざりき』(イオアン八の四十四)ゆゑにすべて有罪なるアダムの族はアダムの定罪を隱然己れに有し、呻吟戰慄して、汝等

を簸ふサタナの爲に地の篩中に動亂せん。一のアダムよりして全人間は地上に蔓延せり、かくの如く一の或情慾の腐敗はすべて有罪なる人間に透徹して、兇惡の王は獨り轉變不定なる、物質的なる、虛妄なる、擾亂なる思を以て、あらゆる人類を簸ふを得たり。たとへば一の風があらゆる草木と種子とを搖撼する如く、また一の夜の闇黑が全地にひろがる如し、かくの如く旋の王は罪と死との或る心中の闇黑となりて、或る晦蒙慘烈なる風を以て、地上すべての人間を動搖旋轉せしめん、轉變不定なる思と世の欲望とを以て人心を捉へ、すべて上より生れずして、「我等が居處は天にあり、」（フィリッピ三の二十）といへるごとく思を以ても智を以ても他の世に移らざる靈魂に無知、盲昧、遺忘の闇をみちみたしめんとす。

四、眞實なる「ハリステアニン」の一切人間に卓越するは、此點にこそあるなれ、されば我等已に前文にいひし如く「ハリステアニン」と他の人々との懸隔は大なり。けだし「ハリステアニン」の才智と理解とは天上の事を深く考ふるを以て常に占められ、聖神の親與とこれを享くるとにしたがひ、永遠の福を直視するにより、彼等は上より神によりて生るゝにより、又其實際と能力に於ては神の子となるを賜はり、多くの長久なる苦行と勤勞とを以て、恒久、堅固、平穩、安息に達するを得て、不定無益なる思の爲に散亂せず、又波を起さゝるにより、これを以て彼等は世より上にありて、世に勝越するなり、何となれば彼等が才智と心中の深き考とは「ハリストス」の平安と神の愛とに在ればなり、主もかくの如き者等に論及していひ給ひし如し、曰く彼等は「死より生命に移れり」と（イオアン五の二十四）。故に「ハリステアニン」の卓越するは外貌にあるにあらず、表面の狀態にあるにあらず、多くの人はすべての差異を此點にありとなし、「ハリステアニン」は外部の容貌と狀態とを以て其間に卓越すと思ふものゝ如し。然れども視よ、彼等は才智を以ても理解を以ても世に似同し、彼等にあるものは他の悉くの人類にも同じくこれあり、思の疑惑も紛亂も同じくこれあり、不信、擾動、攪亂、畏懼も同じくこれあるなり。外貌と、意見と、亦或る外部の功勞を以ても彼等世に卓越すといへども、心と智とは浮世の械繫に縛られ、神よりの慰安と天上靈界の平和とを其心に有せず、何となればこれを尋ねずして、これを神より賜はるを信せざればなり。

五、新しき造物たる「ハリステアニン」の世に於て悉くの人類に卓越するは、智を革新すると、思を平安にすると、愛と、主に對する天上の服從とにあるべし。主の來り給ひしも實に主を信じたる者に此等の靈界の幸福を賜はらんがためなり。「ハリステ

アニンに光榮と美麗と得もいはれざる天の富は屬せん、これ勞と汗と試誘と多くの苦行とを以て求め得らるゝなり、然れども他にあらず神の恩寵に由りてなり、それ地上の王の顏を視るはすべての人の願する所ならん。誰か帝都に來るあらば、或は衣服の粧飾、或は白斑紅石の美麗異樣なる眞珠の善美と、冕旒の殊飾と、王の記號の貴重なるに於て、たゞ其美麗を一見するのみなりともすべての人の願ふ所なるべし。たゞ神的に生活する者は此等を高く估價せざるなり、何となれば他の天に屬して肉身に關せざる光榮を實地に試み、他の得もいはれざる美の感に刺され、他の富に分前を有し、內部の人により生活し、他の神を受くればなり。しかれども世の神を己れに有する此世の人々の爲には、地上の王を見、特に其の全き殊飾と全き光榮とを見るは最願ふ所ならん。けだし王の國の榮々たる高貴が他のもろ〳〵の人の國より大に超越する程は唯彼を見るのみなりとも、すべての人の榮として願する所なり。されればすべての人は自から心にいはん「ア、誰か此榮と此美麗と此壯飾とを我にも與ふるあらば如何ぞや」と。かくの如く人は彼の己れと同じく地に屬する同情の者にして、死すべき者なるも、一時の壯麗と一時の光榮とを以て人の願望を起さしむる所の者を讃美せんとす。

六、しかれども地上の王の光榮は肉に屬する人々の爲にかくの如く大に願はしからんには彼の神聖なる生命の神の露が滴りて、天の王ハリストスに於ける神聖なる愛を以て心を感刺せられたる人々は彼の眞實信誠なる永遠の王ハリストスの美と、得もいはれざる光榮と、不朽なる壯麗と、人智の測るあたはざる富とを更に愈〳〵愛慕せん。彼等はハリストスに全く向ひつゝ、大なる願望と愛の爲に廢となり、心神にて直視する得もいはれざる幸福を捉へんを希ふ、ゆゑにこれを以て地上の如何なる美にも、光榮にも、壯麗にも、尊敬にも、王公の富にも易へざるなり。何となれば彼等は神妙なる美の感に刺されて、天上不死の生命は其靈に滴れば、ゆゑに彼等は天の王の獨一の愛を願ひ、大なる希望を以て彼獨りを目前に有して、彼の爲には世のもろ〳〵の愛より脫し、もろ〳〵地上の械繫より遠ざかるなり、たゞ此の一の願望を心に有するを得て、他の何物をもこれに混せしめざらんが爲なり。

七、しかれども善き終を善き始と合せしめ、蹉跌せずして目的に到り達し、獨一の神に於ける獨一の愛を有して、すべてを解脫したる者は甚僅少なり。多くの者は中心の悔悟を生じ、多くの者は天の恩寵に與かるものとなり、天の愛に感刺せらるれども、途上遇ふ所の種々なる戰と苦行と勞と惡者の試とに得堪へざるなり、けだし

人にはおの〳〵此世に於て何物をか愛して、其愛より全く離れざらんとの望あり、されば殊異多様なる浮世の欲望に立返りて、劣弱と不活動により、或は自己の意志の懦弱なるにより、或は地に屬する何物をか愛するにより、世に止まりて其深淵に沈めり。然れども終に至るまで善生活を送らんと實に志す所の者は、他の如何なる愛をも執着をも甘んじて己れに受けざるべく、又その累す所とならざるべし、これを以て靈界の事に妨げを置かざらんが爲、又後に逡巡して終に生命をうばゝれざらんが爲なり。神の約束の大にして得も言はれず、且説明する能はざる程は、われらの爲に信と望と勞と大なる苦行と長久の試みとを要するなり。天國を希ふ人が受けんと望む所の幸福は輕少なるにあらず。彼はハリストスと共に無窮の世に王たらんを願ふ、然るに此の生命の短き時日の間に於て死に至る迄戰と勞と試とを忍耐せんことを熱心と共に自から決せざるか。主は呼んでいへり『人もし我に從はんと欲せば己を捨て、其十字架を負ひて我に從へ』（マトフェイ十六の廿四）。またいへり、『人もし其父母、妻子、兄弟、妹、又己の生命をも憎まずば、我が門徒となるを得ず』（ルカ十四の廿六）。さりながら人々の中に天國をうけんを志し、永生を闘がんを願ふといへども、自己の欲するまゝに生活して、此の欲する所に從ふ者甚多し、確言すれば虚榮を撒く所の者に從ふを辭せざる者甚多し、然らば彼等己を捨てずして永生を闘がんと欲するはこれ能はざるなり。

八、主の言は眞實なり。主の誡命にしたがひて、己を全く捨て、およそ世の欲望と、束縛と、娯樂と、滿足及び鬱散を貶んじ、獨一の主を眼前に有して、その命を行はんことを大に希ふ所の者は蹉跌せずして進行せん。ゆゑにもし人は實に天國をうけ、己を捨てんとの望を起さずして彼を愛するとともに更に何物をか愛し、此世の或る滿足又は或る欲望を樂み、自由なる意旨と思欲の爲に能し得るだけ、主に全幅の愛を有せずんば、おの〳〵自己の自由によりて路を失はん。汝は左の一例によりて此のすべてを理會すべし。すべて人はそのなさんと欲する所の事の何とも不適合なるを時として理會力により察し知ることあらん。しかれども これに愛着して其愛を捨てざるが爲に、自から勝を讓るなり。先づ其人の心の内部に爭と戰とありて、或は神を愛し、或は世を愛するの平均と偏重と過量とを生せん。されば其時人は兄弟と爭論すべきや否やを思ひ始めて自から心に言はん『我彼に言はん、否言はざらん。彼と口を開かん、否開かざらん』と。彼は神を記憶すれども、己の名譽をも固く守りて己を捨てざるなり。しかれども もし世に對する愛と嗜好が心の秤量に於て少しく秤

り勝つならば、直に惡なる思は口をも動かしめん。次で智は內部より舌を以て近者を射ること、たとへば引滿つる矢を以てする如くし、己の名譽を守らんが爲に最早意旨には何等の强制も加へずして、不適當なる言の矢を放たん。其後罪が肢體に殺らざらん間は、不適當なる言を以て近者を刺すをつゞけん、されば時として惡なる强求は互に口を以て爭論する此の肢體をして打擊負傷に至らしむべく、時としては引て兇行にも至らしめ、死を速にせん。視よ、事は何を以て始まりて、世の名譽を愛するは、人の自己の望みにしたがひ、心の秤量に於て秤り勝ちて、如何なる終を遂ぐるかをけだし人は己を捨てずして、世に或物を愛するにより、それよりして此の悪くの不適合は生じ來らん。

九、同じく又各般の罪事と惡なる始計とを想ふべし。惡習は世の欲望と誘惑と肉體の樂みとを以て智の望に諂ひ、これに傾かしめんかくて諸の邪惡なる行爲、姦淫、偷盜、貪獲、酷酊、好貨、虛榮、嫉妬、貪欲、及び如何なる惡しき計畫なりとも預備せらるゝなり。或は一見したる所は美なる始計の如くなれど、名譽と人々の賞讃との爲に實行せらるゝことあり、しかれどもこは神の前には不義、偷盜、及び其他の諸罪とひとしかるべし。けだしいへり、「神は佞人の骨を散さん」（聖詠五十二の七）又一見したる所は善なる行爲の如くなれど、これに於て惡者は己の勸勢をあらはさんとす、彼は殊異多樣にして、世の諸〳〵の欲望を以て人を瞞着するなり人が自己の望にしたがひ、己を繫ぐ所の地上肉體の或愛によりて罪は人を捕ふ、されば彼は人の爲に械繫となり、鏈鎖となり、重軛となりて、人を惡世におぼらし、且壓して、人に其力を養ふて神に歸するを得しめざるなり。人が世に於て最愛する所のものは、人の智を苦しめ、これを占領じて、これに其力をやしなふをゆるさゞるなり。惡習の平均も偏重も過量もこれにかゝり、これによりてすべての人間は試みられ、凡そ城中に居り、或は山に、或は修道院に、或は田間に、或は曠野の地に居る所の「パリスチアニン」は試みらるゝなり、何となれば自己の望みの爲に捕へらるゝ人は、何なりとも愛し始むるや、其愛は其物に結び付られて、最早神に全く向はざればなり。例へば或者は財產を愛し、又或者は金と銀とを愛し、或者は人間の名譽の爲に浴博なる世の智慧を愛し、或者は權勢を愛し、或者は名譽と人爵とを愛し、或者は怒と憤激とを愛せり、然れどもこれ速に情に殉ふによりて愛するなり、或者は時ならざる集會を愛すれど、或者は妬忌を愛し、或者は排爵と娛樂とに全日を送り、或者は無益なる思慮の爲に誘はれ、或者は人間の名譽の爲に敎法師の如きものとならんを愛し、或者は無爲と懶惰とを樂み、

他者は衣服の爲、又は襤褸の爲に心を繫がれ、或者は此世の慮に耽り、或者は睡眠、戲言、或は猥褻の談を愛す。人は世に繫がるゝ程は大小に拘はらず、そは人を遮りて其力を養はしめざるなり。人は如何なる嗜好とも勇氣を以て戰はずんば、それを愛して、其は人を占領し、人を苦しめ、人のために械繫となり、其心を神に向けて神の意を悅ばすを妨げ、獨り神につかへて、天國の爲に大に要用のものとなり、永生を捉ふるに妨げん。

十、然れども實に主に向ふ所の靈魂はその凡ての愛を全く彼に及ぼし、力ある丈自己の自由なる任意を以て彼獨りに結び着けらるゝなり、されば之れにより恩寵の助を求め得て、自から己を捨て、其の智の欲する所にしたがはざるべし。何となれは我等と離れずしてわれらをいざなふ惡の爲に智は詭りて周旋すればなり。これに反して靈魂は己を主の言に全く從はしめ、意旨のために能くするだけ、もろ〳〵有形なる械繫より脫して、主に全く從はんとす。されば如ゝる場合に於ては彼は戰と勞と患難とを耐忍するを得ん。けだし靈魂は愛する所の其物に於て己の爲に助けをも又苦めをも見ん。もし世に於て愛する所あれは、其物は人の爲に下に曳去る所の重軛又は械繫となりて、上に神に登るをゆるさゞらん。しかれどももし主と、主の誡命とを愛するならば、これに於て己の爲に扶助をも輕蔑をも見ん。されば主に對する己の愛を全く守るによりて、主のすべての誡命は彼の爲に容易なるものとならん。これ人を善に埋むるなり、確言すれば之れは人を輕うして、悉くの戰と悉くの患難とを人の爲に堪へ難からざるものと爲すなり、人は神の力を以て世と惡習の力とを貶せん、これ種々樣々なる欲望の長き網を以て靈魂を世に網してこれを世の深潭に圍まんとするものなり、かゝの如くなればもし靈魂は主を愛するならば、直ちに自己の信仰と大なる勉勵とを以て彼の網より奪ひ取らるべく、并て上よりの助を以て永遠の國を賜はちん、されば自己の自由にしたがひ主の助によりて實にこれを愛して、永遠の生命は最早うばはれざるべし。

十一、さりながら多くの者が自己の自由によりて亡び、或は海に溺れ、或は捕虜として奪ひ去らるゝ所以を我等の爲に實事を以て明白に證せんとせば、まづ家の燒けんとするを想ふべし、一者は己を救はんと欲して、火事と知るや、直ちに奔りて外に出で、一切を捨て、たゞ己の生命を慮るを決心したるにより救はれたり、然るに他者は自身と共に或る家具又は他の何物をか取らんと欲してこれを取集めんが爲に家に入りしが、その取集むる間に火勢急燄になり、彼を家中に押籠めて燒けり。此

人の火に亡びたるは自己の自由に循ひ愛による、即自身の外に或物を暫時愛したるによる所以を見るか。次にこれと同樣人あり海に浮んで激浪の起るに際會するあらんに、一者は衣を脱ぎて裸體になり、たゞ自身を救はんとの意を以て水に投せん、視よ波に追はるゝ彼は、己が生命を慮るの外何を以ても繫がれざれば、波上に浮んで慘憺たる海より免るゝを得たり、しかれども他者はその或衣服を助けんと欲して心に思ふやう、もし自身と共にこれを取らば、これと共に浮んで海より免るゝを得んとされどその取りし衣服は彼を苦しめて、海の深處に溺らせり、視よ、彼は小なる欲心の爲に己の生命を慮らずして、亡びたり。自己の自由により死の犧牲となりしを認むるか。また異種人來襲の風説傳播せりと想ふべし、一者はこれを聞くや、直ちに逃奔して、少しも躊躇せず、取る物も取り敢へずして、途に出發せり、然るに他者は敵の來るを信せず、或は自身と共に或る物品を取らんと欲し、此事に決意して逃るゝを延引せり、されば視よ、敵來りて彼を捉へ、捕虜として異族人の地に曳き行き、かしこに於て強て奴隷にせられたり。これ亦自己の自由にしたがひ、緩慢の故により、且は勇氣に乏しきにより、又或物品を愛したるにより捕虜にせられたるを見るか。

十二、主の誡命にしたがはず、自から己を捨てず、獨一の主を至愛せずして、永遠の火の來らんとき、甘んじて浮世の械繫を以て己を縛る者もこれと同じかるべし、彼等は捕虜となりし者の如く、確言すれば善行の爲の罪人となりし者の如く、世に於るの愛に沈溺し、慘澹たる姦惡の海におぼれ、異種人の捕虜となり、即凶惡なる諸神の爲に捕へられて亡びん。しかれども主に對する完全の愛の正しきを神の啓示に成れる聖書によりて知らんと欲せば、イオッを見よ、彼はたとへば凡て己れに有したる子女、財産、家畜、諸僕、及び其他の所有物を脱したること如何なるか、また彼はすべてを脱し、奔りて己れを救ひ、且その長下衣をさへ棄てゝサタナに投げ與へ、主の前に言を以ても誹謗を發せず、心を以ても、口を以ても、不平を鳴さず、却て主を讃揚していへり、曰く『主はあたへ、主は取りたまふこと、主の欲する如くなるべし、主の名は讃揚らるべし』『イオッ一の廿二』人は彼を以て利を貪りし者と思ひき、しかれども主の彼を試みるに及び、イオッは獨一の主の外何も貪りしものゝあらざりしことあらはれたり。アウラアムもこれに同じ、主が彼に『國を出で、親族に別れ、汝の父の家を離れよ』『創世記十二の一』と命ずるや、彼はたとへば生國、土地、親族、父母をすべて直に脱して、主の言にしたがへり。其後彼は遭遇したる多くの試練と誘惑の中にあり

て、或は妻をうばはれし時もあり、或は他邦に侮辱を被むりしときもありたれど、此のすべての場合に於て獨一の神を殊に勝れて愛するを證せり。終に多くの年所を經たる後、曾て大に望みたる獨生の子を、許約の如く、最早己れに有したるに、神は彼に要求するに此子を献祭するの備をなさんことを以てするや、アウラアムは脱然としてこれを棄て、實に自から己れをも棄てたり。げだし獨生の子の此献祭を以て神の外他の何物をも愛さゞりしを證せり。されば彼はかくの如く準備して、子を棄てしならば、まして其他の財産を棄て、或はこれを一度に貧者に分たんことを命せらるゝも全くの準備と悉くの熱心とを以てこれを爲さん。今は主に對して完全なる且は任意なる愛の正しきを見るか。

十三、かくの如くこれらの義人と同嗣者たらんことを願ふ者は、神の外何物をも愛すべからず、試誘にかゝる時、主に對する愛を完全に守る所の有用なる者且は熟練なる者としてあらはれんがためなり。たゞ自己の自由にしたがひ、獨一の神を常に愛して、世のすべての愛より脱したる者は終に至るまで苦行を全うするを得ん。さりながら如此の愛を感得して、世の悪くの快樂と欲望とより遠ざかり、悪者の蜂起と試惑とを大量に忍耐する人のあらはるゝこと甚少なし。これ多くの者が河を徒渉するとき、水の爲に引去らるゝによるにあらずや、即世のもろ〳〵の欲望と凶悪なる諸神の種々なる試誘とをみちみてる此の渾濁なる河を幸に越す者のあらざるによるに非ずや。多くの大船の海に隱れて波に沒するによるにあらずや、即此の深潭を渡り、波のまに〳〵ゆきゆきて、平安の港に達する者のあるなきが爲にあらずや。これによるに大なる信仰と、大量と、奮闘と、忍耐と、苦勞と、すべての善に飢ゑ且渇すると、敏速と、不退と、細心と、善智とは常に要用なり。勞もなく、苦行もなく、汗を流すこともなくして、天國をうけんと欲する者甚多し。しかれどもこれあたはざるなり。

十四、世に人あり、富人の許に至り、收穫の時、又は他の有事の際に彼の爲に働きて、己が糊口の爲に須要なるものをうけんを欲す。然るに其中怠惰なる遊を好む者あり、他の人々の如くに勞せず、又當然に働かざるなり。しかれども彼は富者の家にありて己を勞せず、又疲らさゞるも、すべての事を己に仕終へたる者の如くして、他の忍耐と敏速とを以て力を盡して勞したる者等と等しく報酬をうけんを欲す。我等も之と同樣なり。聖書を讀で或は義人の事に至れば、その如何に神を喜ばしめ、如何に神の友又は會談者となりしかを見るべく、或はすべて列祖の事に至れば、その如

何に神の友となり又は同盟者となりしを見るべく、又艱難を幾許忍耐し、神のために幾許の苦をうけ、剛勇なる行と若行とを幾許成遂げたるを見るあらんに、其時彼等を尊崇讃美して、彼等と同等の賜と價値とをうけんと欲し、彼等の勞と苦行と憂愁艱難とはこれを束閣し、彼等の光榮なる賜を得んことを好んで願ひ、又彼等が神より受けたる名譽と尊貴とを獲んことを熟心に願へども、彼等の疲憊と勞苦と苦行とはこれを己れに任はざるなり。さりながら爾に告げん、凡の人は此のすべてを願ひ且懇願す、姦淫者も税吏も不義なる人々も勞と苦行となしにかく容易に天國を得んを欲するなり。されば誘惑と多くの試みと艱難と戰鬪と汗を流すことの前途に横たはるあるは、これが爲にして、すべて自由なる意旨により、全力を以て、死に至るまで獨一の主を實に愛して、主に對するかくの如きの愛により己の爲に他に何等の希ふ所のものも最早あらざることの顯然としてあらはれん爲なり。此により彼等は主の言ふ如く、己を捨て、己の呼吸よりも獨一の主を至愛して、實に天國に入らん、ゆゑにその高尚なる愛のために天の高尚なる賜を以て賞せらるべし。

十五、許約と光榮と天の幸福の設備は、憂愁と艱難と忍耐と信仰の中に隱るゝこと、たとへば結果が地に投せられたる麥粒の中にかくるゝ如くなるべく、或は傷つけられ、又は屈められて、或る方法に依り接がれたる樹の中にかくるゝ如くなるべし。時に衣服の美麗と光榮と百倍の果とを有する者のあらはるゝこと、使徒の言ふ如くなるべし、曰く『我等は多くの艱難を歷て天國に入るべし』〔行實十四の廿二〕、また主もいひ給ふ、『忍耐を以て汝等の靈を救へ』〔ルカ二十一の十九〕、またいふ、『世にありて汝等患難をうけん』〔イオアン十六の三十三〕、げだし勞苦と勉勵と微醒と大なる注意と敏速と主に求むるに倦まざるとを要するは、我等地上の或る欲望より救はれ、世の快樂と暴風雨の網と長網と凶惡なる諸神の蜂起を避くるを得んが爲、又諸聖人が猶此世に於て、信と愛の如何なる微醒と如何なる猛烈とを以て天の寶を獲たるを實に知るを得んが爲なり、即彼等の靈魂に於て天國の聘質となりたる靈神上の力を獲たるを知るを得んがためなり。げだし福なる使徒パウェルは此の天の寶なる神の恩寵を論じ、又艱難の非常なるをあらはし、併て人各々此世に於て尋ぬべきものと求めざるべからざるものとを示して、左の如くいへり、曰く『蓋我等知る我等の地上の幕屋やぶるゝ時は、我等に神より賜ふ所の居所あり、手にて造られざる屋、永遠にして天に在る者なり』〔コリンフ後五の一〕。

十六、故に人おの〳〵奮鬪し、悉くの德行に大に上達して、彼の幕屋を得んことを

盡力すべく、且彼の幕屋は此世に於ても得らるべきを確信すべし、けだしもし我等の形體の幕屋が破るゝならば、我等が靈魂の居るべき他の幕屋は我等にあらざればなり、いふあり、『第願くは衣たる後にも仍裸ならざらんことを』〔同上三〕と、これ言意は信誠なる靈魂が獨り安んじ居るべき聖神との體合一致を奉はれざらんことを願ふとなり。ゆゑにすべて實際に於ても、能力に於ても「ハリステアニン」たる者は、此の肉體より出でゝ、彼の『手にて造られしに非ざる幕屋』を有するを堅く希望して喜ばん、此の幕屋は是即彼等に居る神の能力をいふなり。されば もし形體的幕屋の破るゝあらんも、彼等は恐れざるべし、何となれば彼等は天上靈界の幕屋と彼の不朽なる光榮、即復活の日に於て形體の幕屋をも造りてこれを表揚せんとするものを有すること、使徒のいふ如くなればなり、曰く『ハリストスを死より復活せしめし者は我等の中に居る所の其神を以て我等の死すべき身をも生かさん』〔ロマ八の十一〕また言ふ『イイススの生命もわれらの死すべき肉體に顯れんためなり』〔コリンフ後四の十一〕『死の者は生命に呑まれんためなり』〔五の四〕。

十七、ゆゑに猶此世に於ても、信仰と道德の生活を以て、彼の衣服を已れに求め得ることを努めん、形體に衣被したる我等が裸體にしてあらはれざらん爲なり、もし裸體なる時は、彼の日に於て我等が肉體を表揚すべきものは一もあらざらんけだしおの〳〵信仰と勉勵とにより、聖神に與かる者となるを賜はるの量にしたがひ、彼の日に於て其體も表揚せらるればなり。今日靈魂が內部の寶庫に集めたるものは彼の時身體の外にあらはれ出づること、たとへば樹の冬を過ぎて太陽と風の見えざる力が彼をあたゝむるや、枝葉花實を內より外に發生開披して、衣服を衣る如くならん、又此の時に於てもろ〳〵の野花も地の內部の懷より發生して、地と草とこれを以て衣被せらるゝ如くならん、主のいひ給へる百合花の如くならん、曰く『ソロモンも其榮華の極に於て其衣猶此花の一に及ばざりき』〔マトフェイ六の二十九〕けだしこれ皆「ハリステアニン」が復活の日に於るの比喩となるべく、象樣肖似となるべし。

十八、かくの如く凡そ神を愛する靈魂の爲、即眞實なる「ハリステアニン」の爲には第一の月たる「クサンフィク」あり、これ今の所謂四月にして、即復活の日なり。是の日に於て、義の太陽の力により、諸聖者の體に衣被せしむべき聖神の光榮は內部より引出されん、これ彼等が靈中に秘藏したる光榮なり。けだし今日靈魂が已れに有するものは其時身體にあらはれん。我言ふ、此月は、即年の月の首にして〔出埃及記十二の

二、彼は萬物に歡喜を齎すべく、彼は地を啓きて裸體なる樹に衣被せしむべく、彼はもろ〳〵の動物に歡喜をもたらすべく、彼は衆人の間に和樂を播くべくして、彼は「ハリスチアニン」の爲に第一の月たる「クサンフィク」なり、是即復活の時にして、彼等の體は今日猶彼等の爲に秘密なる得もいはれざる光を以て、即神の能力を以て表揚せらるべくして、神は其時彼等の衣服、飲食となり、喜樂、平安となり、聖服となり、永遠の生命とならん。けだし今日彼等が己れに受くるを賜はりし神性の神は其時彼等の爲に天の光明と、美麗の全飾とならんとす。

十九、ゆゑに我等各人は信じ且戰ひ、すべての關係に於て善良なる生活を爲すを盡力し、今も猶その靈魂の內部に天より能力を受けて、聖神の光榮を賜はらんことを希望と大なる忍耐とを以て待つは幾ばく肝要なるか、彼の時、形體の破れし後、我等に衣せて我等を避生せしむるものを有せんが爲なり。錄して言ふ如し、『第顧はくは衣たる後にも仍裸ならざらんことを』、また言ふ、『我等の中に居る所の其神を以てわれらの死すべき體を生かさん』。福なるモイセイは彼の面を蔽ふて一人も彼を見る能はざる神の光榮を以てわれらに象を示せり、これ即義人の復活に於て聖者の體の表揚せらるゝは、聖にして信なる者の靈魂が猶此世に於ても其內部に、即內部の人に有するを賜はる所の光榮を以て表揚せらるべき所以を示せるなり。けだし言へり、『我等みな露はれたる面を以て(即內部の人を以て)主の光榮を觀て、其像に變せられ、光榮より光榮に進む』。コリンフ後三の十八)また錄していへる如く、モイセイは『四十日四十夜餅をも食はず、水をも飲まざりき』。出埃及記三十四の廿八)。しかれともし他の靈食をうけざりしならば、餅なくして此丈の時間存命することは身體の性の爲にあたはざるべくして、聖者の靈魂は此の靈食を今猶見えずして神よりうくるなり。

二十、ゆゑに福なるモイセイは眞實なる「ハリスチアニン」が復活に於て神の如何なる光榮と如何なる心神の樂とを有せんとするを二の象を以て我等に示せり、此等の光榮と樂とは今も猶秘密に賜はれども、彼の時には其體にもあらはれん。けだし先に既にいひし如く、諸聖人が今も猶靈魂に有する所の光榮を以てその裸體は衣被せられて天に取られん、さらば其時は最早體を以ても靈を以ても主と共に永く天國に安息せん。神はアダムを造りて、彼の爲に身體の羽翼を造ること鳥の如くし給はざりき、しかれども彼の爲に聖神の羽翼を備へ給へり、是即復活に於て神の欲する所に彼を舉げ、彼を取らんが爲に彼に與へんとする羽翼なり。此の羽翼は今

猶諸聖人の靈魂にこれを有するを賜はりて、彼等は天の智慧に智を以て飛揚せんとす。けだし「ハリスチアニン」には他の世界と他の食と他の衣と他の樂と他の親與と他の思想の有樣とあり、ゆゑに彼等は悉くの人類より勝れり。此のすべての能力を彼等は今も聖神によりてその靈魂の內部に受くるを賜はる、故に復活に於ては彼等の身體も彼の永遠なる靈界の幸福を賜はりて、その靈魂が今猶實驗を以て試みたる所の光榮にみちみたされん。

二十一、是故に我等各人は奮闘し、勉勵して、あらゆる德行を懇に練習し、信じてこれを主に求めざるべからず、內部の人が今も猶彼の光榮に與かる者となりて、靈魂は彼の神の聖德に親與するを得んため なり、又惡習の汚穢より潔まるを得て、復活したる我等の裸體が着て其醜さを蔽ひ、これを蘇生せしめて、永遠天國に安んせしむるものを我等復活に於て有せんため なり、何となれば聖書に據るにハリストスは天より來りて、凡そ此世を去りたるアダムの諸族を復活せしめ、これを二部に分ちて、その自己の記號、即神の印記を有する者を自己に屬する者となし、呼でこれを己の右に立たしめんとすればなり。けだしいふ『我が羊はわが聲をきかん』『イオアン十の二十七』『我に屬する者を識り、我に屬する者も亦我を知る』『同上十四』其時に彼等が體は善行の爲に神聖なる光榮を衣被せられて、彼等自からも今猶心中に有する靈界の光榮にみちみたされん、かくの如く神聖なる光を以て頌揚せられて、天に取去られたる者は、錄していへる如く『主を空中に迎へ、常に主と偕に居り』『フィサロニカ前四の十七』彼と共に無限無疆の世に王たらん。アミン。

第六　講話

神に悅ばれんと欲する者は、平安、沈默、温柔、及び睿智を以て祈禱を行ふべし、高聲に祈禱して衆人の誘惑とならざらん爲なり。此の講話には二問題を籠む、即寶座と榮冠は物質的製造なるか、イズライリの十二位とは如何なるものなるかとの二問題是なり。

一、主に就く者は沈默と平和と大なる安靜とを以て祈禱をおこなひて、不適當なる、且は錯亂したる高聲を發せず、心を碎くと、惺々たる思とを以て主に注目せんことを要するなり。病に苦しむあらんに、或者は腐蝕法又は他の手術を施さるゝや、大

に勇氣を勵まして、起る所の痛みを耐へ、擾亂狼狽せずして己を制せん。しかれども他者は同じ痛みを受くるも、腐蝕法及び手術を施さるゝにあたり、不適當たる叫聲を發す。それ痛みは兩者の爲に一樣なるも一は叫び一は叫ばず、一は擾亂するも、一は擾亂せず。かくの如く或者は憂心と痛苦の感とを有するも、その心意を制し、擾亂せずして、大量にこれを忍耐す、されど他者はおなじ憂心を有するも、忍耐し得ず、擾亂狼狽して祈禱をおこなひ、これによりて聞く者等誘はるゝなり、然るにまた他者は何等の痛苦をも感せずして、人に展示せんが爲め、又は氣儘により不相應なる高聲を發し、これを以て神を悅ばすを得んと思ふ。

二。神の僕は如此の擾亂不整に居らずして、全くの溫良と智慧とに居らんを要すること、預言者のいひし如し、曰く『我誰を顧みんや、唯謙遜靜默にして我が言に恐れをのゝくものを顧みるなり』〔イサイヤ六十六の二〕またモイセイの時及びイリヤの時に神の現はるゝや、大衆は角と軍勢とを以て主宰の尊前に奉事せり、しかれども主の來るはこれと異にして前文にかぞへしものを以て、即平和と沈默と安靜とを以てあらはれ給ひしは、我等の知る所なり、けだしいふあり『視よ、靜なる細微なる聲ありて主はかしこに居り給ふ』〔列王記上十九の十二〕と。主の安息する所は、平安と齊整とにあることはこれを以て知らるべし。さりながら人は基を置き始を爲す所のものに終りに至る迄止まらん。もし高聲に擾亂を以て祈禱を行ふを始むるならば、終に至る迄此習慣を留めん、けだし主は人を愛するものなるが故、或る場合にはかかる人にも助をわらはすことあり。ゆゑに此の如き人々は恩寵の作用に屬さされて、終に至るまでその習慣に止まらん。しかれども知るべし、こは無智の行なるを、何となれば他人をも誘ひ、自分も擾亂に於て祈禱をおこなへばなり。

三、祈禱の眞實なる基は左の如し、即思に深く注意して大なる沈默と和平とにより祈禱を行ふこと是なり、傍に居る者等の誘はれざらんためなり。此の如き人は、もし神の恩寵と完全とを受くるならば、終に至る迄沈默を以て祈禱をおこなふを得べくして、多くの人の德を建つるに更に益するわらん。けだし神は亂の神に非ず、平安の神なり』〔コリンツ前十四の三十三〕。高聲を以て祈禱する者は舟子を御する者に似たるあり、彼等は聖堂にも村里にも何處にも祈禱する能はずして、たゞ彼等の爲に全く自由なる曠野に於てのみ祈禱するを得ん。しかれども沈默を以て祈禱する者は何れの處に於ても他の德を建つるを得んこと疑なし。人はその全力を擧げて思に向はしむべく、惡念の爲に食物となるべきものはこれを截斷して、意思を神に

注ぎ思の欲する所はこれを遂げしめず、廻轉する所の思を處々方々より集中して一たらしめ、天然の思を惡なる思より區別せんこと肝要なり。罪下にある靈魂はこれを山上にある大なる林に譬ふべく、或は河中にある蘆葦、或は荊棘と雜木の叢生せる鬱林に譬ふべし。ゆゑに此場所を通過せんと欲する者は手を前に伸ばし、盡力と勞とを以て其目前にある所の枝葉を押分けざるべからず。反對の力を以て徐々と勸め入るゝ思の全林の靈魂を圍むもかくの如し。ゆゑに大なる勉勵と心の注意とは肝要なり。反對の力を以て勸め入るゝ他の思を人の辨別せん爲なり。

四、人あり、己の力に依頼し、其目前にある所の山を自分にて切開かんと欲す、しかれども他者は安靜にして思慮を以て己の才智を御す、ゆゑに勞せずして其事を成就すること前者より迷なり。かくの如く祈禱に於ても或者は身の强健に任して、思の奈ひ去らるゝを察せず。自己の力を以て完全に事を成就せんと欲するものゝ如く、不適當なる高聲に依頼す、然れども他者は思に注意するありて、すべての苦行を內部に於て行ふ。かくの如き者等は理解に於ても、思慮に於ても、大に上進し、紛起する所の思を拒ぎて、主の旨にしたがひ進行するを得ん。使徒が他の德を建つる者を大なる者と名づけしは我等の知る所なり。曰く『方言を言ふ者は己の德を建て、預言する者は敎會の德を建つ』預言する者は方言を言ふ者より勝るなり」（コリンツ前十四の四、五）ゆゑにおの〳〵他の德を建つるを重んずべし、さらば彼は天國を賜はらん。

五、問、人あり說を爲していふ、寶座と榮冠とは物質的製造にして、靈神的本質には非ずといふ、如何にこれを了解すべきか。

答、神性の寶座は即我等の智なり、されど裡返してこれを言へば智の寶座は即神性と神なり。しかれどもこれと同じく暗の力たり又君たるサタナも誠命を犯せし以來アダムの心と智と體とに坐すること、自己の寶座に坐するが如し。それゆゑ終に主は來りて己の爲に體を處女より受け玉へり、何となればもし彼は復はざる神性を以て來らんと欲するならば、誰かこれに堪ふるを得ん。これに反して彼は此の器械を以て、即體を以て間接に人と語りたまへり。而して終に主は體中に坐する凶惡の諸神を位より黜け、即彼等が統御する所の概念と思とより黜け、良心を清めて、智と思と體とを自己の爲に寶座となし、給へり。

六、問、「十二の位に坐してイスライリの十二支派を審判せん」（マトフェイ十九の二十八）といふ主の言は如何なる義か。

答、此言が主の天に昇り給ひし後、地上に應驗したることは我等の見る所なり、何となれば主は撫恤者たる神と聖なる能力を十二使徒に下し遣はし、其能力が降りて彼等を庇ひ、彼等の靈智の位に坐したればなり。されば前に立つ者等呼で『彼等は甜き酒に酔になれり』(行實二の十五)といふや、其時ペトルはイエスの事に言及ぼして、已に彼等を審判するを始めたり、曰く『言と休徴とを以て有能なる人を汝等は木に懸けて釘せり、視よ彼は此處に奇跡をおこなひ、墓石を引離して死者を復活せしむ、けだし錄していへり』末の日に於て我はわが神を以て凡の肉體に注ぎ、爾等の子女は預言せん』云々(行實二の十七)かくの如くして多くの者はペトルの爲に心を啓かれて、悔改に進み、これにより神に選ばれたる新世界は始まりぬ。

七、審判の始の顯はれたるを見るべし。かしこには新世界現れたり、けだし坐しゼ此世を審判する權をこゝに彼等にあたへられたり。主が來りて死者の復活する時、彼等は坐して審判を行ふこと無論なりといへども、こは此處にも行はるゝなり、何となれば聖神は彼等の靈智の位に坐するによる。然して「パリストファニン」が彼の世に於て受くるところの榮冠も物體的製造にはあらざるなり。此說を主張する者は非なり。これに反して、變容する神は己を此に於てあらはさん。使徒パウエルが天のイエルサリムに論及して『我等衆人の母なり』(ガラティヤ四の二十六)といひしものは我等も承認す。また「パリストファニン」が己れに衣んとする衣服に至ては父と子と聖神の名により神が自から彼等に世々に若せしむるものなること明なり。アミン。

第七　講話

パリストス人に寛容なる事。此講話にも若干の問答を含む。

一、想へよ、誰か王宮に入るあらば、かしこに畫かれたる歴史及壯飾を見るべく、他處には陳列せられたる寶物を見ん、然して又他の處には他の物ありて、王と共に食卓に坐せんに、尤も美なる食と飲とは其前に陳ねられて、彼は觀る所を以ても飾る所を以ても充分に樂しまん、しかれども此の後彼を其處より强て曳去るあらば、彼は惡臭の滿つる所に導かれん、或は又想へよ、處女あり、美と賢と富とを以て衆人に抽んづるも、まづしくいやしうして、襤褸を衣たる美ならざる人を己の夫に選定し、彼よりその不潔の衣を脱して、王の衣服を衣せ、彼に榮冠を加へて、その配偶となる

あらば、終に貧者は驚て言はん『不幸にしてまづしくいやしき辱しめられたる我は如何して如此の配偶をあたへられしや』と。神も不幸にして辱しめられたる人と此の如く行爲し給へり。彼に他の世と、他の最美なる食物を味ふをゆるし給へり。彼に光榮と王の言盡されざる天上の美とを示し給へり。されば人は彼の靈界の幸福を此世の幸福と既に比較したりければ、其後王と有權者と智者とを見るありとも、天の寶に注目して全くこれを棄てん、何となれば神は愛にして、人はハリストスの天に屬する神聖なる火を受け樂み且喜んでこれを慕へばなり。

二、問、サタナは空中に居るか、或は人々に居りて、神と共にするか、

答、それ此太陽は受造物にして、汚濁の處を照すも、それが爲に害を受けずんば、まして神性はサタナの居る處に在らんも、染まざるべく、汚されざるべし。彼は人々の練習の爲に惡に存在をゆるしたまへり。しかれども惡は暗うして盲目なり、ゆゑに神性の清潔と精微とを見るあたはざるべし。されば誰か某所はサタナに屬し、某所は神に屬すといはゝ、これ神は惡者の居る場所を以て限らるゝと思ふなり。されど我等はいふ、善なる者は限られず、圓まれず、萬物は彼により存在して、善なる者は惡なる者のために汚されずと、何ぞや、これ天も太陽も山々も神により存して、神の爲に成立つにより、彼等は自ら神によりて位せりとの義にあらずや。造物は自己の位に居ゐられて、萬有と共に居る所の造成者は、是則神なり。

三、問、罪は光明なる天使に變化して、殆んど恩寵に類するならば、如何して人は惡魔の姦計を曉り、これを區別して、恩寵よりする所のものをうくるを得るか。

答、恩寵よりするものには喜あり、平安あり、愛あり、眞實あり。而して其眞實は自から人を奬勵して、眞實を尋ねしむるなり。しかれども罪の種類はすべて驕擾にみてられて、神に對する愛と喜とあるなし。かくの如く滿公英は高貴に似たれども、一は苦く一は甘し。且恩寵には眞實に似たるものと眞實の本素とあり、例へば太陽の光線と太陽の圓體とある如し、光線は別にあらはれ、その圓體に含有する光は亦別にあらはるゝなり。又燈あり、家にかゝやかんに、これより四方を照す所の光線は別にして、その燈に於て更に燦爛としてかゝやく明亮なる光は亦別なり。かくの如くも人は或る異象の如きものを遠く認めて、此異象により自から喜ぶときは、これ恩寵よりするものなり。しかれども神の能力が人に入りてその肢體とその心を圍み、その智を神の愛に捕ふるは亦別事なり。ペトルを執へて獄に投ずるや、其時幽閉せられたる彼に天使來り、其械繫を解きて、彼を獄より曳出せしに、ペトル喜びに堪へ

ざるものゝ如く、『異象を見ると意へり』(使徒行實十二の九)。

四、問、神の恩寵の感發興起せしめたる者は如何して陷るか。

答、天性最清潔なる思も失脚して陷ることあり。人はやうやく高慢するを始め、他を議して『汝は罪人なり』といひ、自から己を認めて義人と爲さん。パウェルの言ふ所を知らざるか、曰く『我が肉體に一の刺は與へられたり、即サタナの使なり、我を擊たんため、我が高ぶらざらんためなり』(コリンツ後十二の七)。清潔なる天性にも高慢の生ずべき理由あるなり。

五、問、人は光の助により己が靈魂を見るを得べきか、けだし或者は天啓を斥けて、現象は知識と感應の結果によりてこれありといへばなり。

答、感應あり、現象あり、又照明あり。而して照明を有する者は感應を有する者の上にあり。彼に於て智は照明せられたり、これ即彼は感應を有する者に對して或る特典を受けたるなり。けだし彼は現象の疑ふべからざるを己れに認識したればなり。しかれども大事と神の奥秘とを靈魂に啓示せらるゝは、これ他の天啓なり。

六、問、人は天啓と神の光の助によりて靈魂を見るべきか。

答、形體の目の太陽を見る如く、神の光に照されたる者も靈魂の狀態を見んしかれどもこれを見るに到達するは少數の「パリスチニン」なり。

七、問、靈魂は形像を有するか。

答、天使に似たる狀態と形像とを有すけだし天使は狀態と形像とを有する如く、また外部の人は狀態を有する如く、內部の人も天使に似たる狀態と外部の人に似たる形像とを有するなり。

八、問、智は別物にして、靈魂はまた別物なるか。

答、身の肢は多くして、すべて一の人と名けらるゝ如く、靈魂にも多くの肢あり、即智と良心と、意旨と、或は貶め或は義とする思慮とあり、しかれども此のすべては一の思に結合せらるべく。此のすべてはたゞ靈魂の肢にして、靈魂は一なり、これ內部の人なり。さりながら外部の目が荊棘、懸崖、又は深淵を遠方より見る如く、智もその視力の敏捷により、反對の力の姦計と讒言とを預見し、且たとへば靈魂の目の如くにして靈魂を豫防するなり。ゆゑに我等は光榮を父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第八　講話

「ハリステアニン」は祈禱を行ふ時如何なるべきか、完全の程度、即「ハリステアニン」は完全なる程度に達し得べきか。

一、人あり、入りて膝を屈めんに、其心は神聖なる勢能にみちみたされて、靈魂は主と偕にたのしむと、新郎の新婦と共にする如くなることあり預言者イサイヤいへり、曰く『新郎の新婦を喜ぶ如く、主は汝をよろこびたまはん』〔イサイヤ六十二の五〕また或時には終日何事をか爲し居りし者が一時己を祈禱に捧げんに、その内部の人は祈禱の狀態に於て大なる悅びと共に彼世の無限なる深きに奪ひ去らるゝことあり、けだし燃えて大悅する心は全くかしこに取去られればなり、此の時に於ては地上の智慧を思忘るゝことあらん、何故なれば思は神聖なる、天なる、無限なる、悟るべからざる、人間の口にていひ得ざる奇異なるものを以て飽かしめらるればなり。此時人は祈りていはん『ア、我が靈魂は祈禱と共に終るならば、如何に幸なるか』と。

二、問、常に人は此狀態に入るを得べきか。

答、無論なり、恩寵は少年の時より不斷人と共に居り、根を張りて作用すること酵の如くならん、されば此人と共に居る所のものは天性なる分つあたはざるものゝ如くなるべく、人と同一體の如くなるべし、しかれども恩寵は其欲する如く人に於るの作用を種々に變化して、人の益をなすなり。或時には更に弱く更に靜になる如くなることあり、或時には此光は點火せられて、いよ〳〵光れども、或時には滅して暗くなることあり、また此燈は常に燃え且照せ其、或時には更に燦然として明に、神の愛に醉はしめらるゝにより更にいよ〳〵燃ゆることあり、されども又他時には其光耀を制限して發し、人と共に居る所の光が更に弱くなることあるなり。

三、然のみならず十字架の現象は或者には光の中にあらはれて、内部の人に釘せらるゝことあり、又或時には人は祈禱の時に當り、大悅の中にある如くなることあり、されば彼は聖堂に祭壇の前に立たんに、橄欖油と共に發酵したる如くなる三の餅の其前にそなへられて、これを味ふ程は其餅がいよ〳〵生長して服起る如く思はるゝことあり。或時には亦或る光を發する衣服の如くにして、地上此世にあるなく、人手を以てそなふる能はざるものゝ現はるゝことあり。けだし主がイオアンペト

ルと共に山に登り、其容を變じて電光の如くならしめたる如く、此の衣服も亦其の如くならん。されば之れを衣せられたる人は驚きて何の故たるを解せざるなり。然れども、他時に於てはこの光は心中に現はれて、最内部なる最深奥秘密なる光を發せん、故に此の甘美と此の直覺とに全く呑まれたる人は最早己を主治せずして、その大に富める愛と甘美とにより、及び思議すべからざる奥秘によりて、此世の爲には愚者の如く、野蕃人の如くならん、けだし人は是の時自由を受けて、完全の程度に達し、純潔になりて罪より免るゝものとなるなり。さりながら此後恩寵は減少して、反對なる力の覆は下らん、されば恩寵は一分あらはるゝ如くして、完全の或る下級にあらんとす。

四、人はたとへば十二の階段を歴て、其後完全に達するを要するものゝ如し。或時は人實に此程度に達して、完全に到らん。其後恩寵は更に驅く作用するを始むされば人は一段降りて、已に第十一の階段にあらん。しかれども他の恩寵に富める者は自由なる且は純潔なる者となりて、常に恩寵に捉へられ、又高められて、常に日夜最高尚なる程度にあらん。されば今彼の奇跡をあらはされて、實地にこれを試みたる人は、もし彼と常にかくの如くならんには、傳道の職務の事も、他の如何なる責任も、最早己れに負ふことと能はざるべく、自己の事及び明朝の事を平常の如く聽くことも慮ることも肯せざるべく、たゞ一隅に坐して大悦することと恰も醉酔の中にある者の如くならん。ゆゑに防禦の柵の最早破壊せられて、死の大に勝たるゝに至らざる間は、兄弟を慮ると傳道の勤を慮るに專なるを得しめんが爲に完全の程度は人に與へられざるなり。

五、されば實に左の如くなるべし、たとへば濃密なる空氣の如く、或暗黑なる力の掛りて容易く人をおほふ如くならん。燈は不斷に燃え且照らせども覆の掛りて光をかくす如くなるべし、ゆゑに人は猶不完全にして、罪より全く自由を得たるには あらざるを自認せん、ゆゑに防禦の柵は最早破られ、且毀たれしも、尚他の或物に於ては全く破られたるにあらず、又永遠に破られたるに非ずと謂ふべし。けだし恩寵が盛んに燃えて、人を慰め且安んせしひるの時あり、されどまた減少し暗くなりて、人を益せんが爲に恩寵が自から制限する如くなるの時あり。されば誰か暫時たりとも完全の程度に到達し、彼世を味へて實地にこれを試みたるものありや。今に至るまで余は完全なる或は自由なる「パリスチアニン」を一人も未だ知らざるなり。反つてもし誰か恩寵に安んじ、奥義と啓示と大なる恩寵の甘美を覺ゆるまでに到り

達すといへども、罪も其者の内部に猶其に存するあり。かくの如き人々は恩寵と光とに大に富めるにより、己を以て自由なる者且は完全なる者と思ふ、しかれども無經驗の故に彼等に作用する恩寵其物の爲に自から欺かれて、此罪を犯すなり。されば余は今に至るまで一の自由なる人をも見ず、却て他時人が自から彼の程度に一分到達したるにより、完全なる人の無き所以を實驗して知るなり。

六、問、我等に告げよ、汝は如何なる階段を示さんとするか。

答、今や十字架の現象の後恩寵作用して、悪くの肢體と心とを和げ、靈魂は大なる喜びにより無悪なる嬰兒の如くなるに至らん、故に人はエルリニ人をもイウデヤ人をも罪人をも俗人をも最早議せずして、内部の人は清き眼を以て衆人を見るべく、全世界の爲によろこびて、エルリニ人をもイウデヤ人をも敬ひ、且愛することを出來るだけ願はん。他時に於て彼即王の子は神の子に堅く依頼すること、父に依頼する如くならん。彼の前に門は開かれて、彼は多くの第宅の内に入るべく、其入るにしたがひて、彼の前に門は平均の數を以て新に開かるゝこと、譬へば百の第宅より他の百の第宅に入る如くして、彼は富まさるゝなり、而して其富まさるゝにしたがひ、彼の爲に新なる奇跡はあらはるゝなり。子たり世嗣たる彼には人間の性を以て言ひ得ざるもの、或は口舌を以て言顯すことの能はざるものを任されん。神に光榮は歸す。アメン。

第九　講話

神の約束と預言とは種々の試練と誘惑のときに應驗する事、及び獨一の神に服從する者は悪者の誘惑より救はるゝ事。

一、神の恩寵の靈魂における神的作用は人が大なる恒忍と、智慧と、智の神秘的看破とにより、多年の間大に忍耐して格闘するときに成らん。されば恩寵の行爲は人の自由なる意旨が多次の試練により、神に悅ばるゝものとなり、時を經ると共に實驗と忍耐とをあらはす時に、最早人に於て完全なるものとみとめられん。此の秩序の明白なる龜鑑を我等は天啓の書によりてあらはさん。

二、我が證定せんとするものはイオシフの遭遇したるものと同じかるべし。彼に關する神意の決定は若干の時を歴、幾多の年を過ぎし後に成就し、見たる所の夢は

應驗せり。然れども是より先、イオシフは辛勞、患難、及び困乏によりて試みられしこと幾何なるか。然るに勇氣を以てすべてを忍耐し、すべてに練達して、神に忠義なる僕と認められたる時に最早エキペトの王となりて、其親屬を養へり。されば見るあたはざるものに於ける預言も、またその久しき以前に大なる看破を以て預言したる神の旨も應驗して實となれり。

三、これに類したることはダヴィドにもこれありき。神は預言者サムエルを以て彼に傅膏して王となせり。しかれども彼が傅膏せられし時はサウルの爲に窘逐せられ、逃走を以て死を免れざるべからざる時なりき。然らば神の傅膏はいづくにありや。許約の速なる應驗は何處にありやゲだし傅膏せらるゝや、直ちに曠野に避け、日用の食だもあらずして、彼に對するサウルの惡謀により逃走して異邦人等に救はれ甚だしき艱難を嘗めたりき。されば神が傅膏して王となしたる者は如此の艱難に居れり。其後多年試みられ且誘はれて、艱難をうけしも、大量にこれを忍耐し、斷然神に信任し、自から己を保證して、『神が預言者の傅膏を以てわれに行ひて、是れ、我に成らんといひしものは必ず我に應驗すべし』といひしや、其時已に多くの恒忍の爲に神の旨は終に成り、多くの試練の後にダヴィドは王となり、神の言は其時顯然たるものとなりて、預言者の行ひし傅膏は確實眞正なるものとあらはれたりき。

四、又これに類したることはモイセイにもこれありき。神は彼を民の首長たると救者たるとに預知預定したりしにより、彼はファラオンの女の子となり、王の宮と榮と華美の中に育成せられて、エキペトのあらゆる智慧を學ぶを得たり。しかれども モイセイは壯年に及びて信の大なるを致すや、使徒のいひし如く、暫時の罪惡の樂を享けんよりは、『エゥレイ十一の二十七』寧ハリストスの艱難と凌辱とを願て、ずべて此を棄てたり。されば斯の如きの充足と王の榮華とに養はれたる此の王の子はエギペトより逃れて、幾多の年月を牧者の業に送れり。されど此後終に大なる恒忍の爲に、練達して神に忠義なるものとなり、多くの誘惑を忍耐したる彼は、イズライリの牧者となり、首長となり、王と爲りて、神より直ちにファラオンの神と名づけられたり（出埃及記七の一）。けだし神は彼を以て埃及を膺ち、彼によりファラオンに大なる奇跡を示して、終に埃及人を海に溺らせり。見るべし神の旨と神の企圖は幾多の年月を過ぎてあらはれ、幾多の試練と艱難との後に應驗したりしを。

五、これに類したることはアウラアムにもこれありき。幾時か以前に神は彼に子を賜はんとの許約を發したりしも、これを直ちに賜はらずして、これを賜ふに至る

迄はアウラアムに試練と誘惑の續きしこと幾年なるか、然るに彼はすべて遭遇したる所のものを大量に忍耐し、許約をあたへし者は疑らずして其の言を履むべしとの意思により、信を以て己を固めたり、かくの如くなれば篤信なる者となりて許約を捉へたりき。

六、ノイもまた同樣なりき、その生命の五百歲に至りし時、神は全世界の洪水を起さんことを告げて、方舟を作るを命じ、六百歲に於て洪水を起したりしが、其間に於て神は告げし所のものを爲し給ふべきか、或は爲さゞらんかとの念慮の爲に少しも動かされず、神が告げしなれば、此事は必ず成らんと、信を以て斷然己を固めて、大なる忍耐の中に百年を經過せり、されればかくの如く誠命を最深く守りて信と、忍耐と、大量とにより、其の自由なる任意の練達なる者となりし時、彼は獨り其一家と共に救はれたり。

七、これらの諸例を聖書より引用するは、神の恩寵の作用の人にあらはれて、篤信なる靈魂に與へられんとする聖神の賜を人のうくるは、たゞ長久なる戰鬪の後にあるべく、大なる忍耐と大量とを試みる實驗の後にあるべく、自由なる任意が種々なる患難を以てこゝろみらるゝ誘惑と試練との後にあるべきを證せんが爲なり。

任意は何に於ても神を辱しめずして、恩寵により誠命と全く融和するときは、情慾より免れて自由に達すべく、機密に於て言ひのべらるゝ神的の子となるの全きを受くるを賜はるべく、亦靈界の富と此世よりせずして一の眞實なる「パリスチアニン」のみ領せんとする通曉とを賜はらん。ゆゑにかくの如き人々は凡そ世の神を己に有する善智なる博識なる又は賢明なる人々に全く卓越するなり。

八、かくの如き者は錄して言ふ如く〔コリンツ前二の十四〕すべての人を度らん。彼は各人の事につきては、その何れの泉より言を取り、何處に止まり、如何なる階級にあるを知る、されど彼自身の事につきては、世の神を己れに有する人々の中誰も知る能はず、又度る能はざるべし。たゞ彼と同じく天に屬する神の神を己れに有する者は、己れに同じき者を知るなり、使徒の言ふ如し、曰く『神に屬する言を以て神に屬する事に當つるなり。靈に屬する人は神の神の事をうけず、其彼の爲に愚たるが故なり、然れども神に屬する人は度らざる所なし、而して己は何人にも度られず』〔コリンツ前二の十三、十四、十五〕。かくの如き人は凡て世の稱贊するもの、即富と華美と諸の歡樂又は知識に至ても、すべて此世にある所のものを厭ふべく嫌はしきものと思ふなり。

九、それ炎熱の中に居り、または熱病にをかさるゝ人は、最甘美なる食或は最甘美なる飲をあたへらるゝも、これを厭ふて、なげすてん、何となれば熱は彼を焼きて病は彼に甚熾なればなり、かくの如く天に屬する、聖なる、尊正なる霊界の望の爲に燃え、神の愛の熱心を以て感刺せられし者も、これと同じかるべし、主が地に投せんために來り、速に燃えんことを欲し給へる（ルカ十二の四十九）神聖なる天の火が彼等に熾に燃えて、パリストスに對する天の服從を以て彼等を焼くときは、前文に述べたる如く、凡そ此世に於て稱賛して高く價値せらるゝものを輕んじて、嫌ふべきものと爲すなり、何となればパリストスの愛の火は神に從ふと天に屬する愛の幸福とを以て彼等をかこみて、これを焼き、且これを燃して、凡そ天上地下及び幽冥界にある如何なるものも彼等を此愛より離すあたはざらんことは、使徒パウェルの證明したる如くなればなり、曰く『誰か我等をパリストスの愛より離さん』云々（ロマ八の卅五）。

十、さりながら己の靈魂を救ひ、天に屬する霊界の愛を求め得ることは、もし人は此世にあるすべてのものより遠ざかりて、パリストスの愛を尋ぬるに己をさゝぐるにあらずんば、能はざるべく、又その才智はすべて物質的なる此世の樂みの外に立つにあらずんば能はざるべし、これ人をしてすべての誡命にしたがひ、唯一の目的に進向して、これに達するに全く從事するを得しめん爲なり、すべて靈魂の慮る所と求むる所と樂む所と練習する所とは霊神的實體を研究するにあらん爲なり、即誡命に於て命せられたる善行と、天に屬する神の美麗と、パリストスの清潔及び聖德に親與するとを以て靈魂の飾らるべき所以を研究せん爲なり、又人一切を捨てゝ、すべて物質的なる地に屬する妨を自から截斷し、肉身上の愛或は父母親戚に對する偏愛を絶ち、其智は他の何物にも占領せられ或は牽引せらるゝをゆるさず、たとへば、權勢榮譽、尊敬及び世の肉身上の交親、或は其他地に屬するいかなる掛念の爲にも占領牽引せられずして、その智はすべて靈魂の霊神的實體を尋ねんが爲に配慮と憂愁とを全く己れに感受し、全く忍耐を以て神の臨格を待ち且望むに專らなることと、主のいひ給ひし如くならん爲なり、曰く『忍耐を以て汝等の靈を得よ』（ルカ二十一の十九）またいへり『神の國を求めよ、然らば此等の者皆汝等に加はらん』（マトフェイ六の三十三）。

十一、願くは此あらん、人の此の如く奮闘して、或は祈禱に於て、或は從順に於て、或は神によりて行はるゝ如何なる事に於ても不斷己れに注意して凶惡なる魔鬼の

暗黒を避くるを得んが爲なり、けだし不斷己れに深く注意して、主を尋ぬるの智は己の靈魂を得んとたとへ靈魂が慾の滅亡の中にありとも、もし主に向ふの熱心と熱心との爲に常に捕へられて、彼獨りに附くならば、救はるゝを得べし、いふゝ『凡の意思を擒にして、ハリストスに從はしむ』と〔コリンフ後十の五〕これ智が如此の苦行と願望と尋求との結果により主と一神となりて、ハリストスの賜と恩寵とを賜はり、すべての善行におのれを準備するを得て、自己の嗜好と此世の娛樂を以ても、或は榮譽と權勢の爲の慮を以ても、或は自分勝手の意見を以ても、或は肉身の快樂と惡なる人々に親交親與するを以ても主の神を憂へしめざる心靈の器中に安んずるを得んが爲なり。

十二、もし靈魂は己を全く主にさゝげ、獨り彼に附き、其誡命を忘れずして守り、靈魂を尋ねてこれを庇蔭するハリストスの神を當然に尊んで、ハリストスと一神となり、一に融和して、一となるを賜はることと使徒の言ふ如くならば、こは大に愛すべきなり、曰く『主に附く者は主と一神となる』〔コリンフ前六の十七〕されどもし誰か或は世慮に或は榮譽に或は好名に耽り、或は人爲の爲に奔勞し强てこれを求めて、その靈魂は浮世の思に攪亂せられて暗くなり、此世の何物にか耽りて、これに占領せらるゝならば、如此の靈魂はたとへ凶惡なる力が把持する所の慾の暗黒を渡らんと欲し、或はこれを避けて、これを己より放逐せんを願ふといへども、遂ぐるあたはざるべし、何となれば暗黒の旨を愛し、且これを行ひて邪惡なる企を憎むこと全からざればなり。

十三、ゆゑに我等は全くの任意により、全くの志望を以て主に從ひて、ハリストスの徒となるに準備せん、ハリストスの旨を成さんが爲及びハリストスの悉くの誡命を記憶して、これを守らんが爲なり、世に對するの愛より全く遠ざかりて、其靈魂を獨一のハリストスに委ねん、彼獨りに注目し、彼獨りの爲に慮り、彼れ獨りを尋ぬるの心を有せん。されどもし我等は身體の故に、誡命を行ふと神に從ふとに當然の注意を用ひざるありとも、少なくも我等が心は主に對するの愛より遠ざからざるべし、即彼を尋ねて彼に向ふより遠ざからざるべしさて斯の如きの智を以て奮鬪し、思を正しくして、義の途を進行し、常に己れに注意して、ハリストスの神の許約を捉ふべく、又恩寵により靈魂を占領する慾の暗中に亡ぶるより救はるべし、これにより我等は永遠の國に當るべきものとなり、父と子と聖神を永遠に讃揚して世々ハリストスと共に福を受くるを賜はらん、アミン。

第十　講話

神の恩寵の賜は謙遜と熱心とを以て守られて增殖すべく、高慢と怠惰とにより失はるべし。

一、大なる望と信とを以てハリストスを全く衣んことを懇願する義を愛し神を愛する靈魂は餘事を想出すの必要は起るわらざるべくして、主に對する天の願と愛とに如何なる減退も己れに感せざるべし、かへつてハリストスの十字架に己を全く釘して、靈神界の新郎を愛慕する靈神上大なる進歩の感を日々に自覺せん、されば天の願の刺す所となりて道德の義に渴し、靈神上の照明を强く且飽かずして懇願せん、しかれどもし其の信仰の爲に神聖なる奧義を識るの認識を賜はり、或は天の恩寵の樂みに與かる者とならん時も、何を以てか己を尊んで自から己に依賴せざるべし、かへつて靈神上の才能を賜はる程は、天の願の飽くなきにより、益努力してこれを尋ぬべく、靈神上の大なる進歩を己れに感ずる程は、恩寵をうけてこれを增殖するにいよ〳〵飢ゑ且渴きて、靈神上いよ〳〵富む程は、天の新郎に向ふ靈神上の願の飽かざるにより、己の存意に於て殊に乏しきを感ずること聖書にいふ如くなるべし、曰く『わが食はしむる者は更に飢ゑ、わが飲ましむる者は更に渴かんとす』(シラフ二十四の廿三)。

二、主に對して燃ゆるがごとくなる飽かざる愛を己れに有する斯の如きの靈魂が永生をうくるは當然なるべし、ゆゑに彼等は慾より救はれて恩寵の充滿により、聖神の照明と親與とを得もいはれざる奧妙なる體合とを完全に受けん。しかれども剛毅ならざる薄弱の靈魂は猶肉に居るが故に此世において忍耐と大量とにより、心の一部成聖をうくるにはあらずして、完全なる成聖をうけんことを盡力せず、また全くの感應と無疑とを以て撫恤者たる神と完全に體合せんことを希望せざるなり、されば彼等は有害なる慾より救はるゝを神よりうけずして、反つて神の恩寵を賜はりしも、惡のために誘はれて或る不注意と不活動とに己を委ねたり。

三、けだし彼等は神の恩寵をうけ、安息と希望と靈神上の甘美とにより己の爲に恩寵の慰藉を見るも、これに依賴して、自から高慢し、己の不注意に委して、心を苦しめず、思を遲らずして、無慾の完全なる域に達せず、すべての勉勵と信仰とにより恩寵に全く充たされんが爲にこれを受けずして、それを以て自から滿足し、安心して、

小なる恩寵の慰藉と共に止まるにより、如此の靈魂は謙遜に進歩せんよりも却て高慢に進歩して、たとへ或る賜を受けたりとも、その不注意なる怠慢の爲及びその自負心の徒らに高まるが爲にこれを奪はるゝなり。

四、眞に神を愛し、ハリストスを愛する靈魂は、義なる行を幾千成就したりとも、主に向ふ飽かざる志望により、己を以て何も未だなさゞるものゝ如く思ふべし、禁食と儆醒とを以て己の體を疲らしたりとも、德行の爲に勞するを未だ始めざる如き感情を以て存せん、種々なる靈神上の才能、或は啓示と天の奧義とに達するを賜はりたりとも、主に對する限りなき飽かざる愛により、自分に於ては何も未だ得ざる如く思ふべし、反つて日々に飢ゑ且渴き、信と愛とを以て常に祈禱に專にして、恩寵の奧義とすべての德行に己を建つるとに飽くあたはざるべし。彼は天の神の愛に感刺せられ、恩寵の助により天の新郎に向ふ燃ゆるが如くなる志望を不斷己に起すべく、彼と奧妙なる親與を爲すを神の聖德により全く賜はらんことを懇願すべく、靈魂の露はれたる面を以て、神妙なる得も言はれざる光により、天の新郎に對面して全く確實に彼と合一すべく、彼の死に擬すべく、大なる願望を以てハリストスの爲に不斷死を待つべく、罪と慾との暗黑より免るゝ完全なる救を神によりて受けんことを疑なく信ずべし、されば彼は神を以て清められ、靈に於ても體に於ても聖にせられて、天の聖膏を己れに受くるが爲に清き器となり、天の眞實なる王ハリストスの第宅となるを賜はらん。さらば其時には彼は猶此世に於ても、聖神の清き住所となりて、天の生活をうくるに適當なるものとならん。

五、さりながら靈魂が如此の域に到り達するは、俄に試練なくして能くすべきにあらず却て多くの勞と苦行とを以て、時の久しきに亘り、勉勵して、試練と種々なる誘惑の後に於て、彼は神的成長と大なる進歩とをうけて無慾の完然なる域に到り達するを得ん、其時は已に准備と勇氣とを以て罪よりするもろ〳〵の誘惑に堪ふるを得て、大なる尊敬と、靈神上の才能と、天の富とを賜はり、かくの如くして我等が主イイススハリストスにより天國を嗣ぐ者とならん。彼に光榮と權柄は世々に歸す。アミン。

第十一　講話

聖神の力は人心に於て火に似たる事、また心に生ずる

思念を區別するが爲に必要を有する者の事、モイセイが樹頭に釘してハリストスの象とせる死蛇の事。此講話には二の問答を含む、一はハリストスと惡なるサタナとの問答にして、一は罪人とサタナとの問答なり。

一、「ハリステアニン」が今も此世に於て己の心中內部に受くる所の天に屬する神性の火は、彼等の心に働きつゝあるも、身體の破るゝときは、外部より働きて肢體を新に結合し、破れたる肢體の復活を成さしめん。イエルサリムに於て祭壇の勤を爲したる火は、捕虜時代には坑中に埋められたれど、平和成りて虜にせられし者等の復歸したるときは、その同き火は新にせられしものゝ如く、以前の如く勤をなせり、かくの如く今も天の火は、此の我等が近者の破れて泥に歸したる體を再造してこれを新にすべく、彼は腐敗したる體を復活せしめん。而して今日心中に居る內部の火は、彼の時は外部より働きて體の復活を成さしめん。

二、ナウホドノルの時、爐中にありし火は神聖なるものにあらずして、物體の火なり。さりながら三人の童子は正義の爲に身は有形なる火中にありたれど、其心には天に屬する神聖なる火を有したり、即思念に勤めて、彼等に作用したるものを有したりき。而して此火は童子等の外部にもあらはれたり、けだし彼等の中にありて、有形なる火が義人を燒きて彼等を多少害せんとするを妨げたり。これに類したることは、イズヲイリ人等にもありき、彼等の智と思が活神より遠ざかりて、偶像崇拜に歸せんとする意向を有するや、アヽロンは已むを得ず、彼等に告げて、金器と裝飾とを持來らしめたりしに、其時火中に投せられたる金と器物とは偶像となりて、火は彼等の任意に傲ひしものゝ如くなりき。實に奇異なる事といふべし、けだし彼等は意向に於ても、又其思念に於ても、密に偶像に事ふるに決心したるにより、火はまたこれに投せられたる器物を偶像に變じて、イズヲイリ人等は最早公然と偶像に拜しかゝりぬ。ゆゑに三人の童子が正義を念ひ、神の火を己れにうけて、眞實に主を拜したる如く、今も篤信なる靈魂は、猶此世に於ても、彼の神聖なる天の火を內に己れにうけん、さらば此の同じき火は人間に於て天の狀態を生せしめん。

三、火は金器に狀態をあたへて、金器は偶像となれり、かくの如く、主も篤信善良なる靈魂の任意に準じ、其望に從つて、今も猶靈魂に狀態を生せしめん、即復活に於て靈魂の外に現れて、その體を內外交々表揚せんとするものを生せしめん。さりなが

ら其體は現時においては猶腐敗し、死して易すく敗壞する如く、或者の思念もサタナの爲に敗壞し、生命の爲に死して、泥土に葬むらる、何となればその靈魂は亡びたればなり。ゆゑにイエスライリ人が金器を火中に投じて、其器は偶像となりし如く、今も人は清潔にして至美しき思念を惡に委ねたれば、其思念は罪の泥中に埋むられて、偶像となりぬ。されば今日人は如何してこれを搜索し、これを區別して、これを自己の火中より救出すべきかゝに靈魂の爲に要用なるは神聖なる燈と此の暗まされたる家を大に整理する聖神なるべし、また心中に照りてこれを輝かす光明なる義の太陽も要用にして、戰に於て勝を制する器械も要用なり。

四、彼處に（ルカ十五の八）金錢をうしなひたる寡婦は、先づ燈を點し、次で室の順序を立てたり、而して室の順序立ちて燭の點されたる時、塵埃と汚穢と土中に埋まりたる金錢は發見せられたり、靈魂もかくの如く今は自己の思念を自から搜索して、互にこれを區別するあたはざるなり。さりながら神聖なる燈が燃えて、暗まされたる室に光の入り來らんときは、靈魂はその思念の罪なる汚穢と泥中に葬むられたるを認めん。太陽の光り始むるや、其時靈魂は自己の亡びを發見して、塵埃ともろもろの汚穢とに混じたる自己の思念を拾集するを始めん、何となれは靈魂は誠命を犯して、その形狀をうしなひたればなり。

五、王あり、財寶を有して、屬下たる從者等勤功を希ひたりしに、敵あり王を擒にして曳去れりと想ふべし。その囚はれて曳去らるゝや、其從者と併の製造者とは王に從はざるべからず。かくの如くアダムも神に奉事するが爲に神を以て純潔なる者に造られ、アダムに勤めしめんが爲に此造物をあたへ給へり、けだし彼は立てゝ惡くの造物の主人又王とせられたり。さりながら惡者が近づきて彼と言を交ふるや、アダムは最初外部の耳を以てうけたりしも、其後言はアダムに心中に透りて、彼の本體を全く包圍せり。かくの如く彼が囚はれし後、彼に勤めて彼に服從する造物も最早彼と共に囚はれたり、何となれば彼によりて死は惡くの靈魂に王となりたればなり、さればその叛逆によりアダムの形狀を全く抹殺し、人々をして變じて惡魔を崇拜するに至らしめたり。けだし視よ、神によりて至美しく造られたる地上の諸果も惡魔にさゝげられ、彼等の祭臺には、餅葡萄酒及び膏及び動物を供へしめ、且其の子女をさへ惡魔に献祭するに至らしめたり。

六、ゆゑに身體と靈魂を自から造りし者は、今日自から來りて惡者の爲に製造せられたる惡くの驅殼とすべて思念の中に行はるゝ惡魔の行爲とを破り、天の狀態

を革新改造して新なる靈魂を造るは、これアダムの再び死に王となりて造物の主人とならん爲なり。モイセイは法律の影に於て、イヱスイリの救者と名づけられたり、何となれば民を埃及より出したればなり。かくの如く今も眞の救贖者、ハリストスは靈魂の奥底に來りて、これを暗黑なる埃及より、その重軛と苦役とより引出さんとす。ゆゑに我等世を脫し、すべての有形なるものに貧しくなり、浮世の事の慮を有せず、晝夜門の側に立ちて、閉せる心を主が啓きて聖神の賜をそゝぎ給ふ時を待たんことを我等に命じ給ふなり。

七、ゆゑに主は金銀と親戚とを棄て、財產を賣りて貧者に分與し、此を寶庫に藏めて、これを天に求めんことを命じたまへり、曰く『けだし汝の財の在る所には爾の心もあらん』（マトフェイ六の二十一）主はサタナの此により思念に權を執りて、これを物質的なる地に屬するの慮に引き入れんとするを知れり。ゆゑに神が汝の靈魂を慮りて、すべてを棄つるを命じたまひしは、汝をして餘儀なく天の富をたづねて、其心を神に向はしめん爲なり。けだし汝は造物に歸らんと欲すとも、何等の有形物も有せざるを知る時は、欲すると欲せざるとに拘はらず、强て其心を天に向はしむべく、すべてを聚めて寶庫に納めたる所に向はしむべければなり『けだし汝の財のある所には汝の心もあればなり』。

八、律法に神はモイセイに銅蛇を作り、これを樹頭に上せて、これに釘するを命じ給ひしに、凡そ蛇に螫されたる者は銅蛇を見て愈をうけたりき。特別なる神の照覽によりて此事の成れるは浮世の慮りと偶像崇拜とサタナの快樂ともろ〳〵の不法とに打勝たるゝ者が此形像の爲に鼓舞せられて、少しなりとも其眼を上に擧げ、汚下にあるものより覺醒して、高上なるものに注意せん爲なり、且これより更によ〳〵高上なるものに向はんが爲にして、かくの如くならば漸々に高きもの、上なるものに向ふて、一切の造物より極めて高き者のあるを認識せん。かくの如く神は汝にも自から貧しくなり、一切を賣りて貧者に分つべきを命じたまひしは、たとへ汝は下に地に投せんと欲するも最早汝の爲に能はざらん爲なり。故に汝は己の心を訊問して、己の思と議するを始めよ、曰く『地に於て己れに何も有せざれば、天に向はん、彼處には我等の爲に寶あり、彼處に於て我等は寶易を爲さん』。然らば汝の智は始めて其眼を高きに擧げ、上にあるものを尋ねて、これに大に進歩せん。

九、樹頭に釘せられし死蛇が蛇に螫されたる者をいやしたるは如何なる義か。死蛇は生蛇に克てり、何となれば主の體の形像となりたればなり。けだし主はヤリヤ

よりうけたる己の體を十字架に擧げ、樹頭に引伸ばして、これに釘したりしが、其死せる體は生活し、心中に飼飼する蛇に克ちて、これを殺せり。これ大なる奇跡なり。如何して死蛇は生蛇を殺したるか。且モイセイは生蛇の形を作りて、新事を爲したる如く、主もマリヤにより新なる體を造りて〔イエレミヤ三十一の二十二〕、これを衣たり、されどこれ天より體を持來りしにはあらざるなり。彼はアダムに入りて、天の精神を作り、神性を以てこれを鎔解し、人間の肉體を母の胎内に於て形作りて、これを衣たり。ゆゑに主はモイセイに至る迄世に銅蛇のあるを命じ給はざりし如く、主の來る迄は新しき無罪の體は世に現はれざりき。何となれば初のアダムが誡命を犯せし後、死は其の惡くの子孫に王となりたればなり。ゆゑに死せる體は生くる蛇に克てり。

十、それ此の奇跡は『イウデヤ人の爲には碇にして、エルリン人の爲には愚なり』かれども使徒はこれを何といひしや『我等は十字架に釘せられしイイスハリストをつたふ、これイウデヤ人の爲には碇にして、エルリン人の爲には愚なり。されども我等救はるゝ者の爲には、ハリストは神の能及び神の智慧なり』〔コリンフ前一の二十三、二十四〕といへり。何となれば死せる體に生命あればなり。こゝには救あり、こゝには光あり、こゝに主は死に來りて、彼と談じ、靈魂を地獄と死とより逐ふて主に返還すべきを命じ給ふ。視よ、これが爲に狼狽したる死は、其僕に來りて、諸の力を集め、惡王は劵を持來りて告げていはん『視よ、此等は我が言に服從せり、視よ、人々は我等に如何に叩拜したるか』とし。しかれども義なる審判者たる神はこゝにも其義をあらはし、彼に告げていはん『アダムは汝に服從して汝は其心を全く占領し、人間は汝に服從せり。しかれども茲に我が體は如何なるか。彼は罪なし。第一のアダムの體は汝の爲に負債者たり、ゆゑに汝は權利に依て彼の劵を押ゆ。しかれども我が爲には衆皆我の罪を犯さゝりしを證す。汝に何の負ふ所もあるなし。衆皆我が爲に證して我は神の子なりといふ。聲は天の高きより地に來りて證せり、曰く『此は我の至愛の子なり、彼に聽け』〔マトフェイ十七の五〕。イオアンは證して『視よ、神の羔世の罪を任ふ者なり』といへり〔イオアン一の二十九〕。聖書も亦同じくいへり『彼は罪をおこなはず、其口に詭譎なかりき』〔ペトル前二の二十二〕。又いへり『此世の君は來る、彼は我の中に有つ所なし』〔イオアン十四の三十〕。されどサタナよ汝も自から我が爲に證していへり『我爾の誰なるを知る、神の子なり』〔マルコ一の二十四、三の十一〕。又いへり『ナザレトのイイスよ、我等と爾と何ぞ與らん、時未だ至らざる先に、爾我を苦めんために

此に來りしか』（マトフェイ八の二十九）と。我には三の證者あり、一は天の高きより降遣せられたる聲なり、次は地上に存在する者なり、三は汝自からなり。ゆゑに我は第一のアダムが汝に賣りたる體を償ひ、汝の劵を廢毀す、我は釘せられて地獄に下りしを以てアダムの負を返還せり。ゆゑに地獄と暗と死よ、汝に命ず、幽閉せるアダムの靈を放免せよ』と。かくて惡なる力は戰慄して、終に幽閉せるアダムの十一、左りながら汝は彼の時主が靈魂を地獄と暗とより救ひ、地獄に降りて光榮なる事を成し給ひしを聞くや、此のすべてを以て汝の靈魂より遠きことゝ思ふなかれ。人は惡者を受けてこれを己れに容るゝこと容易なり、何となれば死はアダムの靈魂を占領して、心の思は暗中に閉さるればなり。また墓の事を聞かんとき、たゞ有形の墓をのみ思に浮べざるべし、何となれば汝の爲に墓と塋穴は汝の心なればなり。かしこには惡王と其使と巢を作り、かしこには逕路の通ずるありて、サタナの力がこれに由りて汝の智と汝の思とを通り過ぐるときは、汝は地獄に非ずや、墓にあらずや、塋穴にあらずや、神の前に死者にあらずや。サタナはかしこに在りて未だ鍛錬せられざる銀に己の印を押せり、此の苦き種子を靈魂に下して、彼處には蕩き酵の發酵するあり、かしこには泥の泉の流るゝあり。ゆゑに主は彼の主を尋ぬる所の靈魂に、心の地獄の深きに來り、かしこに死に命じていはん『我を尋ぬれど汝が强てとゞめて幽閉せる靈魂を放免せよ』と。而して彼は靈魂に横たはる所の重き石を毀ち、墓を開き、眞實の死者を甦し、幽閉せられたる靈魂を暗獄より曳出さん。

十二、人あり、械繫を以て手足を縛られんに、誰か來りて其鎖を解くならば、彼をして公然たる場所を自由に往來せしめん、かくの如く死の械繫に縛られたる靈魂をも主は其鎖を解きて、これを放ち、智を自由にし、神聖なる空氣の中を易すく且安然として往來せしめん。又人あり河水の滿々たるに際し、河の中心に於て水に溺れて窒息し、死者の如くなりて恐るべき猛獸の間に横はり居れりと想ふべし、されど游泳に未熟なる人は、水に陷りし者を救はんと欲して、自分も窒息して亡びん。故にこゝに要用なるは、鍛錬して游泳に巧なる者なるべし、彼は水の中心に深く入り、かしこに沈みて、猛獸の間に横はれる者を其處より携出さん、其時水は游泳を能くする鍛錬なる人を見るや、自からも彼に助力して、彼を水面に出來らしむべし。かくの如く靈魂も、暗黑の淵と死の深き處に沈みて呼吸をうばゝれ、恐るべき猛獸の間にありて神の爲に死者となりて居るなり、しかれども身體を遺れる意匠者其者の外誰か能く此の潛伏所と地獄と死の深き處とに下るを得るか。彼は二つの範圍に來ら

ん、即地獄の深きに來るべく、又靈魂が思と共に死の爲に占領せらるゝ心の深き悔に來りて、死者の如くなれるアダムを暗黒なる深き淵より引出さん。されば死も自から人に敎へてこれに助くること、水の游泳者を助くる如くならん。

十三。死に降り、又心の深き懷に降りて、死者の如くなれるアダムを彼處より呼び出すは、神の爲に何の難きことのこれあらん。それ此の有形なる世には、人間の居るべき住所と家とあり、又野獸と獅子、或は蛇及び其他の有毒なる生物の住むべき住所あり。此によりて觀るに、もし彼の受造物たる太陽さへも、窓により或は戸により て何處にも入るべく、獅子の窟にも入り、又爬蟲類の穴にも入りて、かしこより出で來らんに、これが爲に害を受けずんば、まして萬物の主宰たる神は死の居る處の巢窟又は住所に入り、靈魂に入りて、アダムを其處より自由にするも死の爲に辱をうけざるべし。雨も天より降りて、卑下なる地層に透り、彼處に乾燥したる根を濕し、且新にして、かしこに新しき種類を生せん。

十四、人あり、サタナよりする戰爭と患難とに於て彼と戰を交へんに、此戰に於てその靈魂が挫折せらるれば、彼は憂慮し、泣て涙を流さん。かくの如き者は己れに於て二の人格をあらはすものゝ如し。何ぞや、もし此の如きの戰鬪に於て堅く立つならば、主は彼と與に戰に臨みて彼を守らん。何となれば彼は熱心に主を尋ね、門を叩きて、己の爲に主の開き給ふ時を待てばなり。しかれども亦兄弟あり、此戰鬪に於て剛勇なる者としてあらはるゝならば、これ彼は恩寵を以て固めらるゝなり。これに反して誰か基を置かず、かくの如くなる敬神の心を有せずして、其心は悲嘆せず、戰戰兢々たらず、その心とその諸肢とを警固せずして、ほしいまゝに去來せしむるならば、彼の靈魂は猶此において亡ぼされたるなり。何となればいまだ格鬪せざりしによる。故に或者は戰爭と患難の中に居れども、或者は戰の如何なるをさへ知らず。けだし種子も地に投せらるゝときは、霜と冬と嚴寒の爲に苦しまん。しかれども來要の時に至りて芽を發するなり。

十五、されどもサタナは汝と心中に於て談判を開きて言はん『視よ汝は幾ばく惡事をなしゝか、視よ汝の靈魂は如何なる狂暴にみちみたさるゝか、汝は最早救はる能はざる程罪の軛を負はされたり』と。しかれども かく言ふは汝を絶望に陷れん爲なり、何となれば汝の悔改は彼の悅ばざる所なればなり。けだし破誡によりて罪の入りしや、サタナは靈魂と日々談話すること、人の人と談話するが如し。ゆゑに汝も彼に答へて左の如くいふべし『我は聖書に於て主の明證を有す、いへらく罪人の

死を欲せず悔改して、惡者の途より轉じて生きんことを欲すと（イエゼキリ三十三の十一）。けだし彼は罪人を救ひ、死者を復活し、殺されし者を蘇生し、暗に居る者を光り輝すがために來りたればなり」と、されば もし我等は其の始に善良なる終を與へ、貧しき旅行と患難とに居り、不退にして門を叩き、神に願ふを休めざらんには、主は實に來りて、我等を子たる位置に聖なる平安の都に、永く死せざる生命に、不朽なる光榮に呼び給はん。體の壁に近き如く、主も我等に近し、されば來りて閉されたる心の門を啓き、我等に天の富を賜はんと欲す。彼は善にして人を愛する者なり、ゆゑに忍耐して終に至る迄彼を尋ぬるならば、彼の約束は誠らざるなり。光榮は父と子と聖神の宏恩に世々に歸す。アミン。

第十二　講話

アダムが神誡を犯し、以前の情況、及び其後彼は自己の形像をも天に屬する形像をもうしなひし事。此講話には最も有益なる問答若干を含有す。

一、アダムは誡命を犯して二樣に亡びたり、けだし第一彼は神の像と肖とにより造られたる清く美はしき己の性の固有を失へり、然して第二は許約によりて天の相續のすべてが成立つ眞の形像をうしなへり。たとへば王の肖像をしるしたる貨幣あらんに、もし其緣を削るならば、金も消亡すべく肖像も其貨幣に價を付せざらん、かくの如くこれと同樣の大事はアダムにも起れり。それ大なる富と大なる相續とは彼にそなへられたりき。たとへば大なる村ありて許多の收入を有すと想ふべし、かしこには盛なる葡萄園あり、かしこには果實の豐饒なる田あり、かしこには群あり、かしこには金と銀とあらん。かくの如くアダムの此器も悖逆以前には高價なる村なりき。さりながらアダムがあしき意念と思想とを有するや、彼は神のためにはろびたり。

二、人はすべてをうしなひ、廢滅して死せりとはいはざらん、人は神の爲に死したれども、自己の天性にて活くるなり。けだし視よ全世界は運轉して、地に在てはおのゝ己の事に從事す、然れども、神の眼は才智と思慮とに臨み、これを視るも認めざる如く、これと親與をなさゞるべし、何となればかれらは神に喜ばるゝことを一も思考せざればなり。たとへば放蕩淫事の行はるゝ場所たる客舍、又は淫家を想ふべ

し、敬虔なる者は匆々に通り過ぎて、汚さるゝを免るべく、彼等は見て見ず、此の場所は彼等の爲に死せるものゝ如くなるべし。かくのごとく神もその言と誡命とに背き離れたる者等を見るといへども、認めざるものゝ如く、かしこにありて親與をなさずして、主は彼等の思に止まらざらん。

三、問、人が變化し大に進歩して、先に有たざる知識と通曉とに到り達したるを特に己れに感ずる時は如何して神の貧しきものとならず答、人のこれを得ずして大に進歩せざる間は、人は未だ神の貧しきものとならずして、己を高く思はん。しかれども此の通曉と大なる進歩とに到達するときは、恩寵はみづから彼ををしへて、神のまづしきものとならしめん、されば、たとへ彼は義人たりとも、神の選者たりとも、何事の爲にも己を尊視せずして、己の靈魂を低價なるものとなし、いやしきものとなし、知り又は有するありといへども、何も知らず有せざるものと思ふべし。而してかくのごときの思想は人智に賦與せられて根を張りしものゝ如くならん。我等が元祖アウラアムを見ずや、神の選者となりしも、己を土及び灰と名づけたり（創世記十八の廿七）。また傳道を受けて王とせられたるダワイドも神を其前に有して、何といひしや、「唯我は蟲にして人にあらず、人の辱しむるところ

ろ、民の蔑する所なり」（聖詠廿一の七）といへり。

四、ゆゑに彼等と同嗣者となり、天の都に於て同市民となり、彼等と同じく表揚せられんを願ふ者は、彼等と同じく謙遜を有し、己を以て何か價値あるものゝ如く思はずして、傷める心を有せざるべからざるなり。恩寵は各「パリスティアコン」に種々なる作用をなして、かれらを種々なる部員と爲すといへども、彼等は皆一の都に屬し、みな一心一舌にして、互に相了解するなり。たとへば身に肢は多くあれど、これを動作せしむる靈魂は衆人に於て一なり、かくの如く一の神は衆人に種々なる作用をなすといへども、皆一の都に屬し、一の途によりてゆかん。けだし悉くの義人は窄く小なる路を進行し、患難を受け、窘逐せられ、辱められ「皮を衣て」巖穴と地窟に居りたり（エウレイ十一の三十七）。使徒等も同樣己の事をいへり、曰く「今に至るまで我等は飢ゑ渴き、裸程になり、辱を忍び、定り居る處なし」（コリンツ前四の十一）。彼等の一は斬首せられ、次は十字架に釘せられ、其他は種々の患難をうけたりき。而して預言者及び使徒等の主宰も自から神聖なる光榮を忘れたるものゝ如く、如何なる途を進行し給ひしか。彼はわれらの爲に標準となりて、屬世の中に荊冠を首に戴き、唾と耳を批つと十字架とを受けたまへり。

五、神は地に於て斯の如きの途を進行せしならば、汝も彼に倣ふものとならんこと肝要なり。使徒等も預言者等もかくの如く進行したりき、われらも主と使徒等の基上に建設せらるゝものとならんと欲せば、かれらに倣ふ者とならざるべからず。けだし使徒は聖神を以ていへり『我に倣ひて我のハリストスにおける如くせよ』(コリンフ前四の十六)。しかれどももし汝は人間の榮を愛し、人々の汝に叩拜せんことを欲し、おのれの爲に安きを求むるならば、汝は途より離れたるなり。汝は釘せられし者と同じく釘せられ、苦を受けし者と共に苦を受け、然して後榮に入りし者と共に榮に入らんことを要す(ロマ八の十七)。けだし新婦は新郎と共に苦をうけ、これによりてハリストスの同伴となり同嗣者とならんこと緊要なり。されば苦難もなく、又平坦ならずして窄く小なる途にも由らずして諸聖人の都に入り、安んじて王と共に限りなき世に王とならんことは何人にもゆるされざるなり。

六、問、けだしアダムは自己の形像も天の形像もうしなひしが、もし彼は天の形像に與かる者となりしならば、己れに聖神を有すること此より生ずべきか。

答、アダムに神の言と誡命の存したる間は、彼は萬物を有したりき。けだし言はみづから彼の爲に相續となれり、言はかれの衣服となり、彼をおほふ榮となり、言は教訓となりき。アダムは萬物に如何に命名すべきを暗示せられたり『或物を天と稱すべく、或物を日、或物を月、或物を地、或物を鳥、或物を獸、或物を樹と稱すべき』を暗示せられ、而して訓示せられし如く名を命じたりき。

七、問、アダムは神の感應と親與とを有したるか。

答、彼に居るところの言は自から彼のために萬事となれり、知識ともなり、感應ともなり、相續ともなり、教訓ともなれり。されば『イオアン』は言に論及して、如何にいひしや、『太初に言あり』(イオアン一の一)といへり。見るべし言は萬事となれり、しかれども榮はアダムに外部にも存したりしも、これがために誘はれざるべし、けだし言ふあり、『裸程にして』(創世記二の廿五)互に相知らざりきと、たゞ誡命を犯したる後に彼等は裸程なるを認めて愧ぢたり。

八、問、これによるに人は犯誡に至る迄は被覆に代へて神の榮を衣たるか。

答、神が預言者に感徹して彼等を教へ、その內部にありて、外部より彼等にあらはれし如く、アダムにも神は欲するときは彼と共に居りて、彼ををしへ、且暗に示して『是の如くいふべく又名づくべし』といひたりき。けだし言は彼の爲に萬事となれり。しかれども聖神にみてられし者等もおのれに天然の思慮を有して、これに同意す

るの自由を有するならば、アダムがかくの如きの情況にありて誡命を犯したるは、何の怪しきことのこれあらん。かくの如くアダムは神と共に樂園に居りて自己の自由により誡命を犯して惡者にしたがへり。さりながら犯誡の後も彼は認識を有したりき。

九、問、しかれども彼はいかなる認識を有したるか。

答、強賊を裁判所にとらへて、裁判し始むるや君主は彼を訊問して『汝惡を爲すとき捕縛せられて死に付さるべきを知らざりしや』といはんに、強賊は知らざりきと言ふを敢てせざらん、何故なればこれ彼の明に知るところにして、刑に服する者はすべてを記憶し且認識すればなり。また姦淫者も惡を爲すを豈知らざらんや。盜賊も罪を犯すを豈知らざらんや。かくの如く人々は聖書なくしても天然の常識に依り神あることを豈知らざらんや。彼の日に於て『神あることを我等知らざりき』と彼等はいふあたはざるべし。けだし天より大聲に電を以て彼等に報じて『萬物を統治する神あることを汝は知らざるか』といへばなり。ゆゑに魔鬼等は如何に呼びたるか。『汝は神の子なり』(マルコ三の十一)『時いまだ至らざるに先だち爾我等を苦しめんが爲に此に來りしか』(マトフェイ八の廿九)といへり。今も致命者の堂に於て彼等はいはん『燒く、汝は我を燒く』と。此によるに人類は善惡を認識するの樹のみは知らざりしをアダムの犯罪は彼等に此の認識をおたへたり。

十、すべての人は問はん、アダムは如何なる情況に居りて何をなしたるかと。アダムは自から善と惡とを識るの認識を有せり。且彼は聖正と清潔とに居りしも誡命を破りて地堂より逐はれ神の怒を己れに蒙むりしことは我等聖書によりて知るなり。然のみならず彼は善なるものをも自から研究し又惡なるものをも研究して、更に罪をかさいらんが爲及び死の審判におちいらざらんが爲に自から警戒す。されども神の一切の造物は神の照看の下にあることも我等は知るなり。神は天地、生物、爬蟲、野獸を造りて、我等はこれを見るといへども其數を知らず。けだし萬物の中に居り、且生物の胎兒の中にさへ居る所の獨一の神の外此事は誰に知らるゝか。地の下又は天より上にあるものを知るは彼獨りにあらずや。

十一、ゆゑに我等は一切をすてゝ、天の嗣業と我等が靈魂に益あるものを獲んことを力むること善良なる商賈の如くして、彼等よりも尙善くつとめん。我等に永く止まるべき所得を有することをまなばん。もし人は神の睿智を考究するを始めて『我は發見せり、或事を理會せり』といはゝ、これ人智を以て神の睿智より秀づる如く

思ふものにして、迷の甚しきなり。認識を以ていよ〳〵考究洞察せんと欲する程は、いよ〳〵深きに降り、一も理會する所あらざるべし。且や汝に日々生出する出來事の爲めに汝に起る所の思想に關しても、是れ亦汝は言ひ得ざるべく、曉り得ざるべくして、たゞ此のすべてを感謝と信とを以てうくるのみならん。けだし汝の生るゝ日より今に至るまで汝は己の靈魂を認識するを得たるか。實に朝より夕に至る迄汝に起るところの思慮を我に傳へよ。三日の間に生ずる所の念頭をわれに告げよ。しかれども汝はこれを爲すを能くせざるべし。それ汝は己が靈魂の思念をさへ知了する能はずんば、いかにして神の思慮と神の智とを悟るを得ん。

十二、さりながら汝は獲るに循ひて餅を食ふべく、全地を楽つべく、河濱をゆくべく、要用なる程飲みて、他に行くべし、河の何處より來り、或はいかに流るゝを搜索するなかれ。足と眼の病を療するを力めよ。太陽の光を見んためなり。太陽の發ばく光を有し、或はいかなる表示を以て昇るを詮識するなかれ。使用の爲に汝にあたへらるべきものを取れ。何故山に行きてかしこに野驢或は野獸のいくばく牧せらるゝを搜索するか。嬰兒は母の乳頭に近づくときは乳を嘗めてやしなはる。然れども乳が何處より斯程ゆたかに流れ來るか、その根原を考究する能はざるべし。彼は乳を吸ふて、其所貯を全く盡さん。然れども時を經て乳頭は復びみちみたさるべし。乳が母の全體より出づるは最も著るきことなりといへども、兒も其母もこれを知らざるなり。ゆゑにもし主を深きに尋ぬるならば、主はかしこに奇徴を行ひたまふを發見せん。もし主を坑にたづぬるならば、かしこにも主は義なるダニイルを二獅子の間に保護したまふを發見せん。もし主を火中にたづぬるならば、かしこにも主は其僕に助ぐるを見ん。もし主を山にたづぬるならば、かしこにも主はイリヤ及びモイセイと共にするを見ん。主は處々方々何處にもあらざるなく、地下にも、天上にも、我等の中にも到處にあらざるなし。かくの如く靈魂も汝に近し、彼は汝の內にもあり、また汝の外にもあり、いかなる遠き方位を望まむか、東を望まむか、天を望まむか、彼はかしこに在らん。

十三、されば主の記號と印象とをおのれに有することを力めん。何となれば審判の時にあたり神が區分を爲したまはんとするや、地の諸族は集められん。即全アダムはあつめらるべくして、牧者が其群を呼ぶ時、記號を己れに有する者は皆己の牧者を認識すべく、牧者もその牧者に屬する印象を己れに有する者を認識して、かれらを盡くの民中より集めん。されば彼に屬する者は彼の聲をきゝて、其跡にしたが

はん、世界は二部に分たるゝなり、一部は永遠の火におもむく暗黒の群にして、他は天の國に登せらるゝ光をみちみてる牧群なるべし。今日我等が靈魂に得たるところのものは其時に光り始め、顯露して身體は榮をかうむらん。

十四、「クサンフィク」の月には土におほはれたる根は背芽を發し、花咲き且飾られて、實をむすばん、其時に善なる諸根は顯露し來るべくして荊棘に屬するものも顯然としてあらはるゝなり、かくの如く彼の日に於ても、すべての人は、自己の身體の助によりて爲したる善なるものをも惡なるものをも示しあらはさん。けだしかしこに一般の審判と報酬はおこなはるればなり。有形なる食の外に他の食あり。されば

モイセイは山に登りしとき四十日禁食せり。彼は人として登りたれど、神をおのれに有して降りぬ。それ身體は食物を以てかためられずば、數日の間に解體せんことは我等の知る所なり。さりながらモイセイは四十日禁食して、すべての人より更に有力なるものとして降れり、何となれば神にやしなはれて、其體は他の天の食を給せられたればなり。彼の爲に神の言は食物となりて、彼は面に光榮をあらはせり。さりながらモイセイにありし所のものは只象のみなり、けだし彼の光榮は今日は內部に「ハリスチアニン」の心に輝くなり。されば復活したる體は復活によりて他の神聖なる衣服におほはれて、天の食物を以てやしなはれん。

十五、問、女子が首を露はして祈禱するは如何なる義か（コリンフ前十一の五）

答、けだし使徒等の時にあたり、女子は帕に代へて髮を生したるにより、主も使徒等も人間に來りて女子を清潔にするなり。さりながら女子はこゝに敎會の象としてあらはさるゝなり。されば彼の時に於て女子は帕の代りに長生せる髮を有して民にあらはれし如く、敎會も其子に神聖なる表揚せられたる衣を服せしむるなり。且往古にもイズライリの敎會には一の行堂ありて、神に覆はれたり、ゆゑにイズライリ人等はたとへ神にみちびかれずといへども、神を衣て光榮に昜へたり。此によるに敎會といふ言は多くの靈魂のことをも又一の靈魂のことをも言ふべし、けだし靈魂はみづからあらゆる思慮を一に集めて神の前に敎會を成す、何となれば靈魂は天の新郎と親與するが爲に彼と配合し、天に屬するものを以て融解せらるればなり。しかれどもこは多くの靈魂につきても一の靈魂につきても言ふを得ると無論なるべし。けだし預言者もイエルサリムに論及して我は汝を案てられたるものの裸體にせられたるものと思ふ云々と一の女子の事を論ずるものゝ如くいへばなり（イエセキリ十六の八十三）。

十六、問、マルファがマリヤのことを主につげて我は多く勞すれども、彼は汝の側に坐すといひしは、いかなる義か。

答、マリヤがマルファに答ふべきところの者を主は先んじてマルファに答へ、即マリヤが一切を棄て主の足下に坐して、終日神を讃揚すといへるもの是なり。足下に坐する愛の最勝れたるを見るかさりながら神の言のいよ〳〵明亮に光りかゞやかんが爲に更にきくべし。誰か當然にイエスを愛して、勉めて彼に聽き、且たゞに勉めて聽くのみならず、愛にとゞまるならば、神も此愛の爲に其靈魂に何をか報いんことを既に欲するなり(たとへ人が何をうけ、或は神がいかなる量を以て靈魂に賜ふを人は知らずといへども)げだし主を愛して其の足下に坐したるマリヤにも主はたゞに賞をあたへしのみならず、己の實體より或る知るべからざる能力をあたへ賜へり。神が安和にしてマリヤに語りたる言は神なり、又或る能力なりき。これらの言は心に入りて靈中の靈となり、神中の神となりて神聖なる能力は彼の心にみちみてり、何となればその能力は何處に止まるも、必然其處にとゞまりて、泰ふべからざる所得の如くなるべければなり。ゆゑに主も彼に何をたまひしを知りていへり『マリヤは善き分を擇べり』(ルカ十の四十二)さりながらマルファが熱心により

て勤事したる所のものも漸々彼に歸して、同じく亦彼の賜となれり。何となれば彼も其靈魂に神聖なる能力をうけたればなり。

十七、されば主に來りて親炙する所の者等か具體的に能力をうけたるも、何の怪しきことのこれあらん。或時には使徒等語りて聖神は信者等に降りたりき(行實十の四十四)。コルニリイはきくところの言により能力をうけたり。殊に主がマリヤ或はザクヘイ或は髮を解きて主の足を拭ひたる淫婦或はサマリヤの婦人或は盜賊と語りしときは、能力あらはれて、聖神は彼等の靈と合一になれり。今も主を愛し一切をすてゝ常に祈禱に止まる者は、知らざる所のものを窃に學び得ん。眞實は自から彼等の任意にしたがひ、彼等にあらはれて、かれらをしへん。曰く『我は眞實なり』(イオアン十四の六)。使徒等は自から十字架以前には主と共に居りて、癒者のきよめられ、死者の復活したる如き大なる休徵を見たりしも、神聖なる能力の如何に心に止まりて作用を爲す所以を知らざりき。彼等自から神的に更生し、天の靈と合一して新なる人間となる所以を知らざりき。彼等は主のおこなひ給ひし休徵のために主を愛せり。終に主は彼等につげていへり『何ぞ休徵に驚くか。我は汝等に全世界が有せざる大なる働業をあたへん』と。

十八、主が死より復活せずして、我等の爲に體を天にあげざりし間は、主の言は、彼等のために猶奇怪なりしが、其時撫慰者たる神はかれらに降りて、其靈魂と合一したりき。眞實は自から己を信者の靈魂にあらはして、天の人は人なる汝に來りて、その間に合一の親與は成らん。ゆゑに信により神を愛するよりして勤を專にし、ずべてを熱心に行ふときは、こは漸々其者を導きて眞實其ものを認識せしめん、何となれば主は彼等の靈魂にあらはれて、聖神と共に居るに彼等を導けばなり。光榮と叩拜とは父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第十三　講話

神は「ハリステアニン」よりいかなる結果を要求するか。

神はすべての有形物を造り、これを人々にあたへて、安んじ且樂しましめたり、然れども亦義の法をもあたへたまへり。されば神はハリストスの來りし時より他の結果と他の義と心の清潔と善なる良心と有益なる言論と尊正善良なる思慮、及びすべて諸聖人が大に進歩する所のものを要求するなり。げだし主はいへり「若し汝等の義は學士及びファリセイ等の義に勝らずば、爾等天國に入るを得ず」(マトフェイ五の二十)。律法に錄していへり、淫を行ふなかれと、然れども、我は汝等につぐ願ふなかれ、怒るなかれと。げだし神の友とならんと志す者は、己を罪惡の汚れと我等が中に融くる所の永遠の火とより守らんことを要す。こは我等を天國をうくるに堪ふる者と爲すなり。光榮は彼の善心と父と子と聖神の最完備せる慈惠とに歸す。アミン。

第十四　講話

思と智とを神にさゝぐる者は心の目を照されんとの望と、神が此の如き者等を聖德と大なる清潔とにより機密に進ましめて、これに其恩寵を分與し給はんことの望みにより此を爲す事、又或る天の幸福をうけんを願ふ所の我等は何を爲さんを要する事、終に使徒及び預言者等は窓に入る太陽の光線に似たる事、且此講話

はサタナの地と天使の地の如何なるものなるかを敎ふ、即二者は觸るゝ能はざるもの、又見るべからざるものなることを敎ふるなり。

一、凡そ世に於て見ゆる所の事は勞により益をうけんとの望みによりて成る。さればもし誰か勞を以て樂を得るを全く確信するあらずんば、勞も彼の爲に無益なるべし、農夫も果を收めんとの望によりて耕し、これを期して勞を忍耐せん、『言ふあり、『耕す者は望ありて耕すべし』(コリンツ前九の十一)。妻を娶る者も子を有たんとの望によりて娶る。商賈も海上に出發し、死生の測る可らざるに己を委するは、利益の爲なり。天國に於てもかくの如し、人は心の目を照されんとの望みにより、自ら己を委して浮世の事に遠ざかり、祈禱と願求とに時を送り、主の來りて己を彼にあらはし、その在る所の罪より清めんとする時を待つなり。

二、さりながら望むところのものをうけず、主も來らずして、その悉くの感觸と行爲とに神の在さゝらん間は己の勞と生活とに依賴せざるべし。然れども彼は主の恩寵を味ひ、靈火を以て樂み、暗黑の被の取外されてハリストスの光が照らし始め、得もいはれざる喜びを感ずる時は、自ら主を有して、大なる愛により保證せられんたとへばかしこに利益を得たる商賈の如し、彼は自から喜ばん、然れども之れと共に盜賊と惡神とよりする禍を憂ひ且懼れん、天國と上なるイエルサリムに入るを賜はらざる間に弱りて或る勞を滅さゝらんが爲なり。

三、ゆゑに我等も神に祈り、舊人を我等より脫して、今も猶我等に天のハリストスを衣せしむることを願はん、かくの如くして主にみちびかるゝ者は喜で大なる安靜に居らん。げだし主は我等が天國を充分に味へんことを欲していへり『爾等我なくしては何事をも行ふあたはず』(イオアン十五の五)。しかれども主は使徒等に由りても多くの者を敎化したまへり。使徒等はみづから神の造物たるも己と同樣なる僕を敎育しておのゝ〳〵ハリストスの兄弟となり子となるを得しめ、他の人々の前に或る卓越なる事を成したり、即其心と其智とを聖にして思を神に向はしめたり。されば かくの如く神は奧密に生活と助力とを心にあたへて、これに自己をも委かし給ふなり。げだし人が其神秘なるもの、即智と思とを神に托して、他の何物にも占有せられず、又引誘せられずして、全力を以て己を保つ時は、主は彼に聖德と多くの清潔とにより機密に就くを賜ひ、自己をも彼に與へて、天の食物となさしめ、及び神

的飲料となさしめんとす。

四、大なる財産を有する人あり、僕と子供とあらんに、僕には他の食物をあたへて、わが種子より生れたる己の子供には他の食物をあたふ、何故なれば小供は父を相續して、父と同樣なれば、父と共に食するなり、かくの如くハリストス、眞實の主宰もみづから萬物をつくりて、惡者と恩を知らざる者等をもやしなふ、しかれども己の種子より生み、己の恩寵を分ち與へて、主の自から形つくりたまひし子供は、これを他の人々に對して特に自己の安息と自己の食物と自己の飲料とを以てやしなひ、父と親與せんとする彼等に自己をも與ふること、主のいひ給ふ如し、曰く『我が體を食ひ我が血を飲む者は我に居り、我も彼に居る』〔イオアン六の五十六〕ゆゑに彼等は死を見ざらん、何となれば子として眞の相續權を有する者は、天の父より生れて、その父の家に居ること、主のいひ給ふごとくなればなり『奴隸は永く家に居らず、子は永く居るなり』〔イオアン八の三十五〕。

五、ゆゑにわれらも天の父より生るゝ者とならんと欲せば、特に他の人々に對して勉勵と盡力と熱心と愛と善なる行とをあらはし、信と長れとに居らんを要すること、如此の幸福を得て神の相續者とならんを願ふ者の如くすべし。けだし『主は我が嗣業と我が爵との分なり』〔聖詠十五の五〕されば、かくの如き場合に於て主は善なる任意と忍耐とを見、天の言を以て我等を清めて、死したる敗壞したる思を使徒の美なる生活と教とを以て避し、且これを起して、其憐を施したまはん。一の造物は他の造物をやしなひ且これを避すること、たとへば麥又は大麥の苗の如し、彼等は命せらるゝや同じ造物なる雲、雨及び太陽を以てやしなはれて避生するなり。さりながら窓によりて入る光もわれども、太陽は全世界に光線をみなぎらす、かくの如く預言者はたゞ自己の家の爲、即イズライリのためにのみ光となりたれど、使徒等は世界全部に於てあらゆるものを照す所の太陽となれり。

六、四足動物の居る所の地あり、空中にあり、而しても彼等は起たんを欲し、或は此地を來往せんと欲するときは、これを捕獲する所の獵師あり。又魚の爲にも地あり、海水是なり。而して各動物は或は地に、或は空氣に、何の處に生るゝも、其處に止まりて、食と安息とを有するなり。かくの如くサタナの地と國もこれありて、かしこには暗黑の力と惡なる諸神の居るありて、來往し且は休止す、又光を發する神性の地ありて、かしこには天使と聖なる諸神の隊は來往し且安息するなり。さて暗黑なる地は此の身體の目を以て見るを得ず、或は觸るゝ

あたはざる如く、光を發する神性の地も、肉眼を以て觸るゝことも見ることも能はざるなり、されども神的人々の爲には、サタナの暗黑の地も光を發する神性の地も其心中の目に見ゆるなり。

七、さりながら世の博識の傳ふる所によれば、火山あり、其中に火燃えて、かしこには羊に似たる動物の居るあり、然るにこれを捕獲せんが爲には鐵匣を作り、釣針を投じて火中に放下するなり。げだし此の動物の爲に食と飲と安息と成長と生命とを送りて一切に換ふるものは火なるにより、もしこれを他の空氣に引出すならば、彼等はほろびん。而して彼等が衣の汚さるゝときは、水に於てせず、火にて洗ふて、更に清く更に白くなるを致すといふ。かくの如く「ハリストアニン」も己の爲に彼の天の火を以て食と爲す、火は彼等の爲に安息なり、火は洗ひ、且淨めて彼等の心を聖にし、火は彼等を成長せしめ、火は彼等の爲に空氣なり、又生命なり。もし彼處より出づるならば、彼等は惡なる諸神によりてはほろびん。されば かしこの動物は火より出でゝ死する如く、又水より引出されたる魚の亡ぶる如く、海に投せられたる四足獸の窒息する如く、羽族の地にしたがひ來往して、捕者の手に獲らるゝ如く、かくの如く彼の地に止まらざる靈魂も絶息して亡びん。されば もし彼の神聖なる火を以て食と飲と衣と心の淸きと靈魂の成聖とに換へずんば、惡神の爲に捕へられて害されん。されば われらも果して彼の見えざる地に種かれたるや、或は天の葡萄園に植ゑられたるや否やを仔細に銓議せん。光榮は神の宏恩に歸す。アミン。

第十五　講話

此の講話にはいかんせば靈魂が成聖と無玷と淸潔とを以て其新郎の前に、即イエスハリストスの前に居るべきかといふに關する詳細なる敎旨を包含す、また或る最敎訓となるべき若干の問題を含有す、例へば復活に於て盡くの肢體は起るかといふに關する問題、及び他の多くの問題、即惡の事、恩寵の事、自由なる任意の事、及び人間の價値に關する問題是なり。

一、富んで最高名なる主あり、不幸なる處女の身外一物もあらざるものに恩惠を

注ぎて、その愛人となり、納れて彼を新婦となし、同住者となさんことを欲す。されば もし彼は終に夫に對して親切をあらはすならば、不幸にして一物も己に有せざる 此のまづしき處女は、夫が有する一切財産の女主となならん。されどもし本分と義務 とに戻る行を爲し、夫の家に於て醜き擧動を爲すならば、其時彼は不面目と汚辱と を以て逐はれ、兩手を頭上に加へて出て行かんこと、夫に順はざる不孝の妻をモイ セイの法律にいへる如くなるべし(復傳律令廿四の二)。其時最早彼は自己の無分別 のために汚辱をかうむりて、いかなる富をうしなひ、いかなる名譽をうばゝれしか を思ひ苦しんで痛く泣かん。

二、天の新郎たるハリストスが奥妙神聖なる親與をなさしめんが爲に聘して新 婦となして、天の富を玩味せしむる靈魂もかくの如くなるべし、彼は大に勉勵して、 其聘せられたるハリストスの意を眞實に悅ばし、己れにまかせられたる神的勤務 を適當當然に行ひて、すべてに神意を悅ばし、何を以ても神を辱かしめずしてハリ ストスに對する完全なる貞潔と愛とを緊要に守り、天の王の家に於て己を善く導 きて、賜はりたる恩寵に忠順ならんことを要するなり。視よ、如此の靈魂は立てゝ主 の悉くの幸福の主人とせられて、その身體もハリストスの神性より頌揚をうけん。

さりながらもし彼は何に於てか罪をおこなひ、その勤務に於ても本分に戻りて行 爲し、ハリストスに悅ばるゝことをなさずして、その旨に從はず、己れに存する所の 恩寵の助成者とならずんば、汚辱と共に耻づべき不名譽をかうむり、生命より絶た れて、天の王と親與を爲すに不似合なる、且は無用なる者となるべし。されば此の靈 魂の爲には凡そ聖にして聰明なる諸神に於て最早悲哀と憂愁と哭泣の生するわ るべく、諸天使、諸天軍、使徒、預言者、致命者等は彼の爲に慨嘆せん。

三、主の言ふ所に據るに『天には一の悔改むる罪人の爲に喜あらん』(ルカ十五の七) といへり。かくの如く永遠の生命より落ちたる一の靈魂の爲にも天に於ては大な る哀みと哭とあらん。たとへば此世に富める人あり、死するときは、其兄弟、親戚、朋友、 知己は歌と涙と嘆息とを以て彼を此生涯より送らん。かくの如く彼の靈魂の爲に も凡の聖者は涙と歌とを以て哭泣をなさん。げだし聖書は他篇に於ても此事を了 解せしむるなり。いへらく『松樹よ號べ、柏香樹は踏れたり』(ザハリヤ十一、の二)。イズラ イリは一見したる所主宰を喜ばしたる如くなるときは(彼は決して當然に喜ばし たるにはあらずといへども)彼をおはふ雲柱と彼を照す火柱とを有して、其前に海 の分るゝと、清き水の石より流れ出づるとを認めたり、されどもイズライリ人の智

とその任意とが神より離れ背きしや、蛇と其敵に付され、重き虜として曳去られ、苦役を以て責められたり、かくの如く我等が靈魂も殆どこれに同じきものあるなり。

神は預言者イエゼキリによりてかくの如きの靈魂を奥密に示し、イエルサリムに論及して左の如くいへり、曰く、「我れ汝の野に於て赤體なるを見て、汝の不潔を水に洗ひて衣服を汝に着せ、腕環を汝の手にはめ、汝の鼻には鼻環、汝の耳には耳環をほどこせり。されば汝は我が爲に諸國に高名になれり、麥粉と蜜と油とを食へり。然るに其後汝は我が恩を忘れ、汝の愛する者にしたがひて姦淫をおこなへり」（イエゼキリ十六の八十五）

四、恩寵によりて神を認識したる靈魂をも神はかくの如く勦滅せん、けだし靈魂は以前の罪より潔まるを得て、聖神の器を以てかざられ、神聖なる天の食物をうけたりしも、多くの認識に由り當然に己をみちびかず、天の新郎たるハリストスに對し當然なる深切と愛とを適當にまもらずして、棄てらるゝ者となり、曾てうけたる生命をうばはるればなり。何となればサタナはかくの如き恩寵の量を有する者に對しても傲然として自負すべく、又恩寵と能力とにより神を認識したる者に向つて兇惡は更に自負して彼等を勦くるに盡力するによる。これにより我等は奮闘してあらゆる智慧を用ひ、謹んで己をみちびかざるべからず、錄する所の如し、曰く、「恐懼戰慄をもて己の救を成せ」（フィリッピ二の十二）ゆゑに凡てハリストスの神をうけたる汝等は、小なる事に於ても、大なる事に於ても、何に於ても、輕忽に擧動するなかれ、神の恩寵をはづかしむるなかれ、すでにうけたる生命を奪はれざらん爲なり。

五、また他の人物に於ても同じくこれを顯はさん、たとへば僕あり、王の室に入り、囑托せられたるものを進めて王に事ふるならば、これを王の家貲の中より取るべく、自らは何も携へずして入り、王の器物を以て王につとめん。さりながらこゝには最早分別と思慮とを多く要するあり、勤務の時に方りて、不適當の事を爲さゃらん爲又甲の食を乙に代へて王の卓上に出さず、すべての食物を始より終に至るまで順序によりて陳設せん爲なり。されればもし無智により、又は無分別によりて、王に事ふべき如くに事へずんば、危きと死とに服せん。かくの如く靈魂も恩寵により又神によりて神に事へんには、大なる思慮と認識とを要するなり、神の器に關し、即神的勤務に關して、おのれの任意を恩寵と合致せしめ、何に於ても罪を犯さゃらん爲なり。けだし靈魂は內部の人と自己の器とにより、即內部の人の神によりて窃に行はるゝ神的勤務を以て主につかふるを得ん、然れども主の器なく、即恩寵なくしては、

誰も神につかふる能はざるべし、即すべてに神の旨を行ひて神を悅ばすこと能はざるべし。

六、されば靈魂が恩寵をうくるときは、彼の爲に多くの思慮と分別とは要用なり。神が自から此のすべてを顧ふ所の靈魂にあたふるは、受くる所の神を以て慇懃に神につかへて、何に於ても惡に勝たれざるを得しめん爲なり、又無智と無忌憚と怠慢とにより路を失ひ、職分に對しても主宰の旨に戻りて罪を犯すを免るを得しめん爲なり、けだしかくの如き靈魂の爲には罰として死と哀みとあらん、これが爲に聖なる使徒もいへり、曰く『他人を救へて自から棄てらるゝ者とならざらん爲なり』

〔コリンフ前九の廿七〕神の使徒となりしも如何なる畏懼を有したりしを見るか。故に神に祈禱せん、神の恩寵をうけたる我等皆特に神の旨にしたがひて、靈界の勤を奉じ、衆人を輕侮する思に慣染せざらんためなり、かくの如くなれば神の前に慇懃に日を消し、その旨にしたがひ神的勤務を以て神に仕へて、永生を圖がん。

七、病に冒さるゝ者に於ても或る肢體は健全なり、例へば視る器械たる目、或は他の或る肢體は健全なるが如し、しかれども外の肢體は傷はるゝなり。靈神上の事に關してもこれと同じきあり。或者には三の神的肢體は健全なるを有するを得べし、然れどもこれによりて人はいまだ完全なるにあらず。靈神上の階級と程度は若干ありて各別なるを見るべし、然して、惡は俄に潔められて微々となるにあらざるなり。主の照管と攝理とはすべてにこれあり、太陽の昇りてあらゆる造物の造成せらるゝは彼選者等の嗣がんとする國の爲なり、平和にして同心一意なる國の組織せられん爲なり。

八、ゆゑにパリスチアニンはみづからすべての勉勵を用ひて、何人をも全く議せず、顯然たる淫婦をも、罪人をも、或は放肆なる人々をも議せずして、衆人を視るに純乎として僞らざる任意と清き目とを以てせんことを要するなり、人に接することは或る天然にして變らざるものに接する如くせん爲なり、即誰をもいやしめず、非難せず、誰をも嫌はずして、人々の間に差別を立てざらん爲なり。一眼の者を見るか、己の心に彼を議するなかれ、彼を見ること健全なる者を見る如くせよ、枯れたる手を有する者を見ること枯れざる手を有する者を見る如くせよ、跛者を見ること正しく行く者を見る如くし、癱瘋者を見ること健全なるものを見る如くせよ。けだし心の清きは罪人或は劣弱者を見て、これに同情を表し、憐憫なる者となるにあり、されば主の諸聖人も世の觀場に坐して、世の誘惑物を見ることあり、さりながら外部の

人に於ては世に生ずる所のものの眼に映ずるに拘はらず、内部の人に於ては彼等は神と談話す。

九、世の人々は他の詐誤の鬼の勢力に屬して、地上の事を慮る、然れども「パリスチアニン」には他の自由なる任意と他の才智のあるあり、彼等は他の世と他の都會の人なり、けだし神の神止まりて、彼等の靈魂と親與す、されば彼等は敵を蹂躙するなり、けだし錄していへるあり『最後にはろぼさるゝ敵は死なり』『コリンフ前十五の廿六』されば敬虔なる者はあらゆる物に君たる如く、信の弱き者と罪人とはまつたく僕にして火も彼等を燒くべく、石と劒もかれらを殺して、終に魔鬼は彼等に主人たらん。

十、問　復活に於ては悉くの肢體復活するか。

答　神にはすべて難きものあるなし。神の約束もかくの如し。たゞ人間の劣弱と人間の理性の爲に此事はわたはざる如く見ゆるなり。神は塵と土とを取りて、或る他の性の如きものを造りたまへり、即土と相似ざる身體の性をつくり、又その性の多くの種類を造りたまへり、たとへば毛髮、皮、骨、脈絡の類の如し、それ火に投せられたる針は如何樣に變色し、化して火の如くになれども、鐵の性はほろぼされずして、同じく存せん、かくの如く復活に於ても悉くの肢體は復活して、錄する所の如く『首髮の一もほろびざらん』『ルカ廿一の十八』而してすべては光の如きものとなるべく、すべては光と火の中に沒して變化せん、然れども或者が主張する如く從前の性の最早存在せざる程には解體せず、又火とならざるなり。けだしペトルはペトルパウエルはパウエルフィリップはフィリップとして存し、おの〳〵神にみちみてられて自己の性と實體とを以て存在するなり。然れども性の解體するを主張するならば、ペトル或はパウエルは既にあるなくして、すべてに何處にもあるものは神ならば、地獄に去る者も罰を感せざるべく、天國に行く者も恩惠を覺えざるべし。

十一、苑あり、種々の豐盛なる樹を植ゑられ、かしこには梨子、林檎、及び葡萄は果實枝葉と共にこれあらん、然るに苑もすべての樹も枝葉も變化して他の性質となり、すべて以前のものは光の如くになれりと想ふべし。かくの如く人々も復活に於て變化して、其肢體は聖なるもの、光の如きものとならん。ゆゑに神の人々は己を戰と苦行とに準備せんこと肝要なり。勇氣なる青年は格闘を得支へて、打たるゝ打擊に酬ゆるに打擊を以てせん、かくの如く、パリスチアニンも患難と外部と内部の戰を忍耐せんことを要す、おのれに打擊をうけて、忍耐を以て勝たん爲なり。パリストス

教の行路はかくのごとし。聖神の居る所には窘逐と戰とあらんこと影の形にしたがふ如し。預言者等の如何なりしかを見よ、神は彼等に作用せりいとへども、彼等は常に同種族の爲に窘逐せられたり。路たり眞實たる主の如何なりしかを見よ、他民の爲に窘逐せられしに非ずして、己れに屬する民の爲に窘逐せられたり。己れに屬する族即イズヲイリ民は彼を窘逐して、十字架に釘せり。また己れと同樣なることは使徒等にもこれありき、けだし十字架の時以來撫恤者なる神の來りて、ハリストアニンに居りたるにより、イウデヤ人の中誰も窘逐せられざれど、一の「ハリストアニン」は致命者となりぬ。ゆゑに此事に驚くべからず、窘逐せらるゝものとなるは眞理の爲に必ず免れざるものとす。

十二、問　人ありいふ、惡は外より來ると、然らば人は欲するときは、これを己れにうけずして、逐去ることを得るか。

答　エヲと語りし蛇は、エヲが聽從したるにより、エヲの壁に入りぬ、かくの如く今も人の聽從するによりて、人の外部にある罪は人の內部に入らん、何となれば罪は心に入るの權と自由とを有するによる、けだし惡念は人の外部にあらず、內部にありて、心より出づればなり。『我望む男は怒なく惡しき念なくして祈禱せんことを』（テモフェイ前二の八）、けだし福音經によるに惡念は心より出づ（マトフェイ十五の十五）。ゆゑに祈禱に着手せよ、己の心と智とに注意せよ、潔き祈禱を神に捧げんことを願ふべし、特に汝は此時に於て祈禱に妨ぐるものあらざるか、祈禱は潔きか、汝の智は主の爲に占領せらるゝこと農夫が農事の爲、夫が妻の爲、商賈が貿易の爲に占領せらるゝ如くなるや否やを檢せよ、而して祈禱に己の膝を屈むるときは、他者あり汝の思をうばひさらざるや否を檢せよ。

十三、さりながら汝はいはん、主は來りて十字架にて罪を罰したれば、人の內部には最早罪あらじと。然れどもこれと相反して、たとへば兵士は誰が家にか其車を置くあらば、欲するにしたがひて此家に入り、又これより出づるの權を有する如く、罪も心中に於て語談する權を有するなり、けだし錄していへり、サタナはイウダの心に入れりと（ルカ廿二の三）。然れども、ハリストスの來りしにより罪は罰せられ、洗禮によりて惡は心中に於て語談する運命を最早己れに有せずといふといへども、主の來りしより今に至る迄、多くの者は洗禮をうけしも或時には惡事を思ふを知らざるか。且彼等の中或者は虛榮に、或者は淫行に、或者は饗宴に迷ひ入りしにあらずや。然して教會に居る所の俗人も盡く間然すべからざる清潔の心を有するか、或は

洗禮の後に多くの罪生じて、多くの者が罪をかすを見ざるか。此故に洗禮の後にも賊は入りて欲する所のことを爲し得る力を有するなり。錄していへるあり、「汝の心を盡してなんぢの主神を愛せよ」(復傳律令六の五)。然るに汝はいはん、我は聖神を愛し且これを有すと。しかれども主を念ふの記憶と主に對する愛と熱心とは確に汝にこれあるか。汝は晝夜主を慕ふか。もしかくの如きの愛を有するならば、汝は潔し。されどもしこれを有せずんば地に屬する愛慮と汚されたる惡しき念慮の生じ來らん時、詮議せよ、實に汝はこれに傾かざるか、汝の靈魂は常に神の愛に引かれて、神に服從するかと。けだし世の思念は地に屬する敗壞せるものを以て心を浮かれしめて、神を愛し或は主を記憶するをゆるさゞればなり。無智なる人も祈禱に若手し、膝を屈めて、その智は安息に入ること稀なりとせず、而して彼に反抗する所の惡の城壁を根本より覆して、その下底に深く入る程は、城壁はいよ〳〵やぶられて、人は現象と智慧とに到達せん、これ强者或は智者或は辨士等の到達し得ざるものにて、此人の智の精微なるを彼等は曉り或は認識するあたはざるべし、けだし此人は神聖なる奧義に占有せらるゝなり。眞珠の品位を見分くるに不鍛錬なる者はその不鍛錬の故にこれを估價することも能はざるべし。ゆゑに「パリスチアニン」は地上に於て光榮なかとするものを嫌ひ、これを以て彼等に作用する所の高尙なるものに比して醜なりと爲すなり。

十四　問、人は恩寵の賜を有するも陷ることあるべきか。

答、もし漸く怠慢せばおちいらん、何となれば敵は決して無爲にして居らず、怠らずして作戰を講ずればなり。神の前に尋ぬることを汝はいよ〳〵廢すべからず。けだし汝は怠慢にふけるならば、一見したる所恩寵の奧義を試みたるものゝ如くなりといへども、汝の爲に害多からん。

十五　問、人のおちいりし後、恩寵は猶人に存するか。

答、人を新に生命にみちびきいるゝは、神の欲する所にして、神は人に新に泣て悔い改めむことを勸ふなり。ゆゑにもし人はこれを續行するならば、神は以前の罪惡を悔ゆる者を勸誘し、新に泣て悔改の果を結ばしめん。

十六、問、完全なる者にも憂愁或は戰はあるべきか。

答、敵が攻擊するを休めんとする人はあるなし。サタナは殘忍にして人を憎む者、故に如何なる人をも攻擊するに怠らざらん、しかれども一見したる所彼は衆人を襲ふに一樣の盡力を以てせざるものゝ如し。それ郡國の長官或は理事は王に租稅

を貢せん、しかれども かくの如き人は己の富と金銀とに敢て依賴して、さながら自己の有餘の中より年貢を納るものゝ如くなるべく、これを以て己の爲に損毛と思はざること、施與を出す者の少しもこれを以て損毛と思はざる如くなるべし。かくの如くサタナも此を以て餘事の如く思ふなり。或者は赤貧にして日用の糧をおのれに有せざるに、かれを鞭ち且苦しめん、租稅を完濟するあたはざるによる。又或者をば殘酷に惱まし、且苦めん、されど彼は死せざらん、又他者をば一言の下に斬首するを命じて、彼は亡びん。かくの如く、ハリステアニンの間にも或者は烈しき戰を受け、罪の爲に惱まさる、されども反對の力をかろんじ戰によりて強くなり、且智慧を增さん、されば此の關係に於ては彼等の爲に危きことあらじ、何となれば動搖せられずして、己の救に堅く信を置けばなり、けだし惡との戰により頻りに己を練習し、實驗を有せしにより、神は自から彼等と共にすればなり、彼等は神にみちびかれて安んせしめらるゝなり。

十七、しかれども或者はいまだ練習せずして、もしたゞ一の患難が落ち來り、彼に對して戰の起るあらば、直ちに不幸に陷りて亡びん。たとへば其の愛する所の者又は知る所の者を見んと欲して、市を行く者あらんに市場に於て多くの人々に遇ふといへども、彼等の爲に引留められず、何となれば朋友に面會せんとの意志を信ずるによる。而して外より門を叩きて其名を呼ぶや、愛する所の者は彼の爲に喜んで開かん、しかれども もし市場に足を止めて笑談し、或は遇ふ所の者に引留められるゝならば、門は依然として閉されて、誰も彼の爲に開かざらん、かくの如く眞に愛する所の我等が主宰ハリストスに至らんことを急ぐ者も餘事を全く輕んじ且いやしめんこと肝要なり、たとへば王宮に參內する郡國の理事、或は長官等は王に答をなすべきことゝ答を誤りて謎と罰とに服せんことを恐れて、大に戰々兢々たらん、しかれども未だ曾て君主を見たることなき田夫野人は懸念せずに己を行はん、かくの如く凡そ此の普天の下にある世界も王より貧者に至るまで、皆ハリストスの光榮を認識せず、浮世の事に營々として、審判の日の事を疾く想出す者あるなし、然れどもハリストスの寶坐のあるハリストスの審判所に思入て、常にハリストスの前に立つ所の者は、彼の聖なる誡命に對し、何に於てか罪を犯さゝらんかと不斷に恐懼戰慄するなり。

十八、世の金滿家は所產を其倉に多く積むときは、いよ〳〵これを豐にして、乏しきを告げざらしめんが爲に、更にいよ〳〵毎日働くことを新に始めん、されども倉

に在る所の富を頼にして、鈍慢し、新なるものを加へずして、積む所のものを費すときは、迷に不幸と赤貧とに陥らん。ゆゑに彼等は利益をあつめて倉に納むるも、乏しきに至らざらしめんが爲に、勞して新に聚めんこと肝要なり。パリストス敬に於ても、人は神の恩寵をかくの如く味ふを得べし、けだしいへり、「味へよ、主のいかに仁慈なるを見ん」(聖詠三十三の九)しかれども、これを玩味するは心中に勤を成さしむる神の有能の力なること疑なし。けだし光の子として、聖神により新約に勤むる者は、神に敬へらるゝ者として、人々よりは何も敬へられざるべし。恩寵は自から神の法を彼等の心に書さん。ゆゑに彼等は己の爲に保證を見るにたゞ墨汁を以てしるされたる聖書に於てすべきに非ずして、神の恩寵は神の法と天の奥義とを心の石版に書さん、何となれば、心は全體の聯絡に於て主人たり、又王たればなり。されば恩寵が心の牧野を領するときは、すべての肢體と思慮とに王たらん。けだし智とすべての思慮と靈魂の希望とは彼處にあればなり。ゆゑに恩寵は身の悉くの肢體に透徹するなり。

十九、これと相反して暗の子たる者に於ても此の如く、罪は心に王となりて悉くの部分に透徹するなり、曰く「惡念は心より出づ」(マトフェイ十五の十九)かくの如く罪は汎濫して人を暗まさん。然るに人と共に發はれて共に成長する惡は人にわるなし、と主張する者等は明日の事を慮らざるべく、又欲望を有せざるべし。或る時には惡は何の欲望をか徐々と入るゝにより、彼等を驚かすことは息まん。故に人は誓を以て斷定して、「かくの如きの情慾は最早我に起らず」といふ、しかれども數時間を過ぎて、彼は欲望に燃ゆるのみならず、且更に誓を破る者としてあらはれん。水の管中を流るゝ如く、罪も心と思念の中をながるゝなり。されば此說を主張する者等は罪が彼等に撓ちて蹶旋するとき其罪の爲に證責せられ、且嘲けられん。何となれば惡は人の意思に潛まり匿るればなり。

二十、ゆゑにもし誰か神を愛するならば、神も彼に己の愛をあたへ給ふ、一たび神を確信したる者にはこれに天の信仰を添へん。されば人は二倍なる者となるなり。ゆゑに汝が己の肢體によりて禮物を彼にさゝぐる如く、彼もこれと同じく、自己の肢體によりて汝の靈魂に分ち與へ汝をしてすべてを潔く爲し、且愛し、且新鮮せしむるなり。けだし人の價値は高尙なり。視よ天と地と日と月は如何なるか、然るに主は彼等に安んじ止まらずして、たゞ人に安んじ止まり給ふ、故に人は悉くの造物より貴し、且我敢ていはん、たゞに見ゆる造物より貴きのみならず、見えざる造物より

も即奉事の諸神よりも貴し。けだし神は首天使ミハイル及びガウリイルのことを『我等の像と肖によりて造れり』(創世記一の廿六)といはずして、聰明なる人間の本質即不死なる靈魂のことをかく言ひたまへばなり。錄していへるわり、天使の隊は彼を畏るゝ者を環る(聖詠三十三の八)然れども見ゆる萬物は或る不動不變なる性を以て縛らるゝなり。

二十一、天と日と月と地は一たび構造せられて、主は彼等を憐みたまはざりき。反てかれらは其の造られたる狀態より脫するあたはずして、自由を有せざるなり。然れども汝は神の像と肖とによりてつくられたり。何となれば神は自由なる者にして欲するところを行ふ如く(もし彼は欲するならば己の權により義人を地獄に、罪人を天國につかはすことをもなさん。されどもこれを擇び給はず又これに同意せず、けだし神は義なるものなればなり)汝も自由なる者なり。ゆゑにもし亡びんことを欲するならば汝の天性はたやすく變せられん。もし惡言を吐き、毒を制し人を殺さんと欲するならば、誰も汝にさからはざるべく、又禁せざるべし。欲する者は神に從順し、義の途をゆきて、欲望を制せん。何となれば智は敵抗する者なり。ゆゑに思念を以て邪惡なる意向と醜き欲望とに大に勝つを得ればなり。

廿二、大厦あり、かしこの壁と頂格とは金銀を以ておほはれ、かしこには種々の衣服及び金銀あらんに、其居る所の諸僕諸婢は(我等が天性は其存する所の罪により凡てを渴望すといへども)其才智を制し、主人の前にありて人を畏るゝの畏れにより慾の發するをとゞむるならば、娼んや神をおそるゝ畏のあるところに於ては才智は人に存する所の惡に敵對抵抗せんことを要す。何となれば神は汝の爲に能ふべきものを汝に誡命したればなり。それ無言なる動物の天性は束縛せらる。例へば蛇は天性惡にして有毒なり。ゆゑに惡ぐの蛇は此の如し。狼は掠奪を爲すに慣れて惡くの狼は其性同じ。羊仔は質朴の故に掠奪せらる。而して彼等は皆同性なり。鳩は狡猾ならずして無惡なり。惡くの鳩は其性同じ。しかれども人は然らざるなり。一は狡猾なる狼の如くなれども、他は奪取せらるゝこと羊仔の如し。而して兩つながら同一の人間より出づるなり。

廿三、或者は自己の妻に滿足せずして放蕩に生活す。しかれども他者は其心に慾の崩すことをさへゆるさず。一は人の家財を掠奪すれども、他は敬虔によりて自己の所有をも分ち與ふ。同一の性の變化し易くして、或は惡なるものに傾き或はこれに反して美なるものにかたむき、彼と此との結果によりて欲する所の事に許諾す

る能力を有するを見ん。故に我等が天性は善の爲にも、惡の爲にも、神の恩寵の爲にも、反對の力の爲にも、これをうくるに便なるものとす。さりながら天性は强らるゝこと能はざるなり。アダムは最初自から清潔に存在して、己の思念を主治したり、しかれども誠命をやぶるや、彼の智に荷ひ易からざる苦みは掛りて、これに混入し來れる邪惡なる思念は盡く彼の固有なるものゝ如くなれり。さりながら一も彼の固有なるものにあらず、何となれば彼等は惡習の爲めに支持せらるゝものなるによる。

廿四、終に燈を搜し求めんことは、汝に肝要なり、これを以て清潔なる思念を見出さんがためなり。何となれば彼の思念は汝に天然なるものにして、主はこれを清潔に造りたればなり。海濱に成長したる者は游泳するを學ぶゆゑに暴風怒濤の起るときにも懼かざるなり。ハリステアニン」もかくの如し。三歲の童子の智慧は成全せる詭辨者の思想を容れ、或は曉ること能はざらん何となれば彼等が年齡は大に懸隔すればなり、かくの如く、ハリステアニン」も哺乳の兒の如く、恩寵の量にしたがひて世を了解せん。彼等は此世の爲に遠ざかり、彼等には他の都と他の慰安とあり。ハリステアニン」は神の慰籍と涙と哀みと嘆息をおのれに有して、其涙は彼等のために樂みを成す。彼等は喜び樂みと共に畏れをも有す、かくの如くなれば彼等はおのれの血を自分に保護する人に似たり、自から己を頼まず、己を以て何か價値あるものと思はず、惡くの人に賤しめ棄てられし者の如く己を行ふなり。

廿五、王あり己の寶を以て或る貧者に托せんに、受けてこれを保護する者は此寶を己の所有と思はず、何處にも己の貧なるを認めて、他人の寶をつひやすを敢てせざらん、何となれば彼はつねに自から思へり『此寶はたゞわが有にあらざるのみならず、有力なる王を以て我に托せられたり、されば彼は欲するときはこれを我よりとらん』と。神の恩寵を有する者も己を彼と同じく思ひ、謙遜なる者となりて己の貧しきを表認せざるべからず。もし貧者は王より托せられたる寶をうけて、此の他人の寶に依賴し、これを以て漸く高ぶることを自己の富の如くして、其心に高慢をみちみてるならば、王は其寶を彼よりとりかへさん、然らば保護の爲にこれを有せしものは以前の如くなる貧者とならん。かくの如く恩寵を有する者も高慢して其心に自負するならば、主は恩寵を彼よりうばふて、彼は主より恩寵をうくる以前の如きものとならん

廿六、さりながら恩寵が己に存するあるも、罪のために惡み去らるゝを知らざる

者多し。たとへば何の家にからら若き男子とうら若き女子と居るあらんに、女子は男子にいざなはれ、終に彼と同意して姦通せば、賤しむべき者とならん、かくの如く恐るべき罪の蛇も靈魂と共に居りて、かれをいざなひ、且説勸めん。されば、もし靈魂はこれに同意するならば、無形なる靈魂は神の無形なる惡と合す、即神は神と合すべくして、惡者の思をおのれにうけてこれに同意する者は、其心に於て姦通せん。故に汝の苦行の方法は意念に於て姦通せず、才智を以て抵抗して、内部に戰を交へ、邪惡とたゝかふてこれに從はず、思に於て彼と共に樂まざるにあるなり。さらば主は汝に此心懸あるを見るときは、後日汝を其國にうけん。

廿七、主は或者を攝理して、その神聖なる恩寵と其召命とが證明せられざるものとなりて存せしめざるを致す。しかれども或者をば放任的に攝理して、人を試驗と練習とに引入れ、人の自由なる任意の顯然としてあらはるゝを爲す。けだし患難と試誘とにかゝる者は、もしこれに堪ふるならば、天國を奪はれざらん。ゆゑに、ハリスチアニンは艱難なる境遇に於ても悲まず、嘆かざるべし。もし不幸或は艱苦を以て試みらるゝときは、これに懲かず、却て貧を樂みて、これを以て富に易へ、禁食を樂みに易へ、讒謗と汚名とを榮譽に易へんことを要す。これに反して彼等はもし此生活に於て或る名譽と爲すものに遇ひ、及び肉體の安樂或は富或は榮譽或は奢侈に引誘するものに遇ふあるときは、此のすべてを樂ますして、これを避くること火を避くる如くせんことを要するなり。

廿八、有形世界に於て少數の民の蜂起して王と戰はんとするあらば、王は自から出軍するを難んせざるべきも、兵士と諸將をつかはして、彼等は戰を交へん。されど多數の民蜂起して、その國を荒さんとするときは、王は自から廷臣及び己の軍隊と共に出でゝ軍事を指揮するの已むを得ざるあらん。ゆゑに己の價値に意を留めよ、神は其軍隊と共に即天使等及び聖なる諸神と共に動きて自ら來り、汝の爲に防護者となりて、汝を死より救ひたまへり。されば汝は堅く立ちて、汝の爲に照管の如何なるを想ふべし。我等は猶此生活に在る者として浮世の事より譽を取らん。王あり、貧にして病める人を見て、彼を耻とせず、醫員を以て彼の疵を療せしめて、彼を己の宮に移し、王衣王冠をかうむらしめて、彼と晩餐を共にしたりとせん、天の王ハリストもかくの如く病人に來り彼をいやして、王たる晩餐を彼と同うし給へり。加之彼の意を强ふることをせず、たゞ勸諭を彼に施して、かれを如此の尊榮に昇せたまへり。

廿九、福音經に錄していへり、王は欲する者等を召ばん爲に其僕をつかはし、これにつげていひけるは『視よわが筵はそなはれり』（マトフェイ廿二の四）と、然れども召はれたる者等は自からこれを辭し、一人はいへり、『我牛五耦を買へり』、他者はいへり、『妻を要れり』（ルカ十四の十九、廿）召びし者は支度したれど召ばれたる者等はこれを拒みて、實にみづから有罪者となりしを見るか。ハリスチアニンの價値もかくの如きものあり。主はかれらの爲に國をそなへ、彼等を召びて入らしむれど、彼等の欲せざるを見んしかれども、ハリスチアニンが闘がんとする場につきては、左の如く言ふを當然とすべし、即各人はアダムの造られし以來世の終に至るまでサタナと戰ふて患難を忍耐したりとせんも、これを以てその闘ぐべき所の榮に比ぶれば彼は何も大なる事をなしたるにあらざるべし。何となればハリストスと與に無窮の世に王たらんとすればなり。光榮はかくの如く靈魂を至愛して、自己と其恩寵をこれに與へて之に信任し給ひし者に歸し光榮は彼の大なるに歸す。

三十、視よ、こゝに坐する所の兄弟よ、外見によれば我等は皆一の形像と一のアダムの顏面とを有す。しかれども隱に其内部に於てはみな〳〵一の任意と一の心となるか、我等は皆一皆善にして、且敬虔なるか、或は我等の中或者のみ此の如くなるか、何となればたとへ皆相共に坐し、一人の如き狀をあらはして、皆一のアダムの顏面を有すといへども、一はハリストス及び其使等と親與して、他はサタナ及び魔鬼等と共にすればなり。聰明なる本質即内部の人の外部の人と別物なるを見るかげだし皆一人の如きの狀を自からあはらすも、一はハリストス及び天使等と共に居り他はサタナ及び汚鬼等と共に居るなり。故に心には或る無限なる深處のあるわり、かしこには宴會の場所もあり、寢室もあり、門も、玄關も、多くの用部屋も、出口もあり、かしこには義と不義との行を働く室もあり、かしこには死もあり、かしこには生命もあり、かしこには善なる賣買と又これに反對なる賣買もあるなり。

三十一、廣やかなる室あらんに、荒廢して種々なる惡臭と死體の多きとをみちみてりと想ふべし。かくの如く心もハリストスの室なり、しかれども彼は悉くの不潔と惡鬼の群とにみちみたさる。故にこれを新にし、且改造して、内部の客館と寢室とを備へんこと肝要なり。げだし王たるハリストスは天使及び聖なる諸神と共に來りて、かしこに安んじ、かしこに居り、かしこに來往して其國を基すべければなり。我又言はん、大なる船あらんに全く裝鋼し丁るときは、船長は船上にありて指揮統御し、一を譴責して他には爲すべき所を指示さん、かくの如く心も能師たる智と責む

る良心と或は貶め或は義とする思慮とを有するなり、けだし使徒はいへり、互に貶め、或は褒むる思慮』と〔ロマ二の十五〕。

三十二、良心は罪にしたがふ思慮には同意をあたへずして、直にこれを責むるを見んけだし良心は、譃らざるなり、ゆゑにつねに責めて、審判の日に神の面前に於て言はんとするところのものを證するなり。それ車と勒轡と動物とすべての入用なるものが一の御者の手にあらば、最早かれは欲するときは全速力をもて車に乗りて疾く馳すべく、また欲するときは、車をとゞむべく、而して更にこれを轉せんと欲するときは、車は彼方に過ぎ行かん、ゆゑにすべて車は御者の權中にあるなり。かくの如く心もこれと密着聯合する天然の思慮を多く有す、されど智と良心は心に瞭解せしめ、これに方向を示して、心中に起る所の天然の思慮を眠らしめん、けだし靈魂は一なれど、多くの成分あるなり。

三十三、アダムの誡命を破るや、蛇は入りて家の命令者となれり、されは彼は靈魂の側にありて他の靈魂の如くなりき。ゆゑに主はいへり、凡そ自から己を棄てず己の生命を憎まざる者は我が門徒にあらずと〔ルカ十四の廿六〕、またいへり、『己の生命を愛する者は之を喪はん』〔イオアン十二の廿五〕、けだし罪は靈魂に入りて、その肢となれり、彼は外部の人にさへ膠着して、心には多くの不潔なる思慮湧出でん、ゆゑにその靈魂の欲する所を行ふ者は、心の欲する所を行ふなり、何となれば靈魂は彼と聯合一致すればなり。是故に己の靈魂を征服して、自から己を怒り、その居るところの欲望を怒る者は恰も敵の都を征服する者の如く、神の善良なる程度に到り達するを賜はり、而して神聖なる力を以て清潔なる人を己れにうけて、己れ自から更に大なる者とならん、何となればかくの如き者は天の印章を己の靈魂にうけ、最早神尊せられて神の子となればなり。けだし神に選ばれたる者は聖にする膏を傳けられて、高貴なる人となり、王となればなり。

三十四、人は左の如き天性を有するなり、惡習の深きにありて罪に役する所の者も、善に變ずるを得べく、また聖神を以て結合せられ、天に屬するものを以て酔はしめらるゝ者も、惡に變ずるの權を有するなり。たとへば弊衣をかうむり、飢ゑ疲れて、不潔におはるゝ處女ありと想ふべし、もし彼は多くの辛酸を嘗めし後、王たる爵位を得て王衣王冠を被らせられ、王の新婦とならば、己が以前の不潔を想起し、最初の狀態に立戻るの自由を有するも、以前の汚辱までなりさがらんことを決心せざるべし、何となればこは無分別なればなり。さりながら神の恩寵を味ふて最早神に

興かるを得たる者等も、もし戒慎するあらずんば、有る所のものを消滅し、世に生活して、更にいよ〳〵惡しくならん。されどこは神の變じて無力になれる爲にあらず、或は神の消滅する爲にもあらずして、人々自から恩寵と和せざるによる、故に迷ふて千百の惡におちいるなり。けだし彼の賜を味ひし者等もおのれに彼と此とを有せん、即善と慰とを有する如く、畏と戰慄とをも有し、快樂を有する如く、悲哀をも有せん、彼は自己を哭すべく、又全アダムを哭すべし、何となれば人々に於て性は一なればなり、而してかくの如き者等の涙は即餅にして、彼等の哀みは即樂みと慰安なり。

三十五、然れどももし人あり、恩寵に與かる者となれるに高慢して自負するを認むるあらんに、たとへ彼は休徴を行ひ、死者を復活せしめたりとも、己の靈魂を認めて汚辱なるもの、及び卑賤なるものと爲さずして、己を神に貧しき者、及び厭ふべき者と爲さゞるならば、彼は惡に窃み去られて自からそれを知らざるなり。もし彼は休徴を行ふとも信ずべからず、何となればハリストス教の徴候は、神の前に練達なるものといへども、力めてこれを人々に隱すにあればなり、ゆゑに彼は王の悉くの寶を己れに有するも、これをかくして、つねにいはん『これわが寶にあらずして他人はこれを我に托せり、我は貧者なり、托したる者はもし欲するときはこれを我より取らん』と。されどもし誰か『我は富めり、有せし所のものを以て我に充分なり、更に復た入用あらず』といふならば、かくの如き者は「ハリストアニン」にあらずして、諂諛と惡魔の器械なり。けだし神を以て樂むの樂みは飽かざるものにして、人はこれを味ひこれをうくる程はいよ〳〵飢ゑんとすればなり。かくの如き人々は神に對して熱心と止むべからざる愛とを有す、彼等は大に進歩して得るあらんことをいよ〳〵盡力する程はますます己を認めてまづしき者と爲すことと、すべてに乏しくして何も有せざる者の如くなるべし。彼等はいはん『我は此の太陽のわれを照すにも當らざるなり』と。これぞ「ハリストアニン」の徴候なる、これぞ謙遜なる。

三十六、じかれどももし誰か『我は充分なり、豐富なり』といはゞこれ彼は誘惑の中にありて、妄語するなり。主が山に登りし時其體は讃榮せられて、神の光榮と無限なる光とに變化せり、かくの如く諸聖人の體も讃榮せられて、光りかゞやく者とならん。けだしハリストスの內部の光榮が如此の量を以てハリストスの體に及びて光り始めたる如く、諸聖人に於てもこれと同じく內部に存するハリストスの力は彼の日に於て外面に溢れ出でん、即其體に溢れ出でん、何となれば彼等は今も猶ハリ

ストスの本質とハリストスの性とを己の智にてうくればなり、けだし錄していへるあり『聖にする者と聖にせらるゝ者とは一の者より出づ』（エウレイ二の十一）又いふ『爾が我にあたへし榮を我は彼等にあたへたり』（イオアン十七の廿二）多くの燈は一の火にて燃ゆ、かくの如く諸聖人の體の爲にも即此のハリストスの肢體の爲にもハリストス自己と同一なる者とならんこと緊要なり。

三十七、問、「ハリストファニン」は第一のアダムより上なる者となるは如何なる義か、けだしアダムは體に於ても靈に於ても不死不朽なる者なりしが「ハリストファニン」は死して朽つるなり。

答、眞實の死は內部に即心中にあり、ゆゑに神秘にして測られざるなり、內部の人はこれを以て死せん、ゆゑにもし誰か死より神秘なる生命にうつりしならば、彼は實に永遠に生活して死せざらん。且かくの如き者の體は一時は破るゝも、新に光榮に復活せしめられん、何となれば聖にせらるればなり、故に「ハリストファニン」の死は眠と名づけられ、寢と名づけらるゝなり。しかれどももし人は體に於て不死不朽なるを得ば全世界は非常のことを見て即「ハリストファニン」の體の朽ちざるを見て或は緊要により善に傾くことはあり得可らんも、自由なる心情より出づるにはあらざるべし。

三十八、さりながら神は人に最初にあたへたる自由をして、明にあらはれて、人に存するあらしめんが爲に、此事に於ける特別の照看を以て、すべてを建設す、ゆゑに身體のやぶるゝは、人の自由なる望によりて、或は善に轉じ或は惡に轉ずるあらしめんが爲なり。けだし完全なる者は或る緊要によりて善に繫がれざる如く、これと相反して罪に沈溺して己を惡魔の器械となし、これによりて世も罪せらるゝ其者も、惡に繫がれずして、選器となり、生命の器となるの自由を有するなり、然れどもこれと同じく神性を以て醉はしめられたる者も、たとひ聖神にみてられ、且結合せらるゝといへども、何等の緊要を以ても遏められず、轉じて此世に欲する所のものを爲すの自由を有するなり。

三十九、問　惡は漸々に細り、根絕せられて、人は恩寵に大に進歩するか、或は大なる進歩の始まるや、直ちに惡は根絕せらるゝか。

答、胎兒は母の腹中にありて、俄に人となるにあらず、漸々に人の體形をうけて生れん、さりながら猶成年の人とはならずして、先づ多年の間を以て成長し、其後成人とならん、又大麥の種子或は麥種も地に投せらるゝや、直ちに根を發するにあらず、

寒氣と風とを經て、もはや適當の時季に至り、みづから莖を生せん、又梨子をうゝる者もこれより直ちに果を摘むにあらず、かくの如く智慧と精微とを要する靈界の事に於ても人は漸々に成長して、「成全の人、成長の量」（エフェス四の十三）に達するを得べく、或人が主張する如く脱ぎ且衣ると同樣なるにはあらず。

四十、詞章の學をまなばんと欲する者は、往て文字を習ひ始めん、而してかしこに於て第一となるときは羅甸學校に入り、かしこに於て衆中の最後者とならん。されど彼所に於ても再び第一となるときは、文法の學校に入りて、再び衆中の最後者、新進者とならん、其後煩瑣學者となるときは、凡の法學生の新進者及び最後者とならん、されどかしこにおゐても復た第一となるときは、政治家となるべし、而して最早司長となるときは、同友を拔擢して己の補助者となさん。ゆゑに有形界に於ても進歩に階級のある此の如くならば、いはんや天の奥義は多くの階級により進歩して成長せん。されば たゞ長久なる練習の後多くの試驗を逃れたる者は完全なる者となるべし。げだし恩寵を實に味へて、十字架の休徵を智と心とに有する「パリスチアニン」は領主より貧者に至るすべてのものを以て膿腥惡臭となすべくして。凡そ地上の世界は王の寶も富も榮も智慧の言もこれみな或る妄想にして、堅き基を有せざる過ぎ去る者なることを彼等は獨り瞭解するを得ん。されば天の下に如何なる物ありとも、彼等の爲には盡く賤むべきものとならん。

四十一、これ何故なるか。天より上にありて、王の寶にも智慧の言にも世の光榮にもある無き所のものは奇異にして驚嘆すべきものなるによる。されば彼等がおのれに求め得たる所の價値或は富、即主と萬有の造成者を深く内部の人に有するは、是れ過去るものにあらずして永遠に存するの所得なり。げだし「パリスチアニン」は靈魂のあらゆる造物よりも實なるを知る。何となれば獨り人は神の像と肖とによりて造られたればなり。見よ天と地は如何に包圍すべからずして、其間にある造物はいかに貴く、彼等に屬するものはいかに高尚なるか。しかれども人は此のすべてのものより貴し。何となれば海中の巨魚と山と野獸とは見たる所人より大なりといへども、主は獨り人を惠みたまへばなり。ゆゑに汝はいかに貴重なるか、己の價値を檢せよ、神は地上に於て汝の爲に代求者となり、又汝の救贖者とならん爲に自から人格によりて來るや、汝を諸天使より上に立てたまへり。

四十二、天使等は汝の救の爲に何の時に來りしや。王、王の子は其父と議りて、言はつかはされたり、されば言は同じきものを以て同じき者をすくはんが爲に肉を被

むり、其の神性をかくして、其生命を十字架に奠へたまへり。神の人に於ける愛はかくの如く大なり。不死なる者は汝の爲に釘せられたまへり。ゆゑに見よ、神は世を愛して其獨生の子を賜ふに至れり』（イオアン三の十六）。豈彼と共に一切を我等に賜はざらんや』（ロマ八の三十二）。また聖書の他篇にはいへり、曰く、『誠に汝等につぐ、彼を立てゝ其一切の所有を督らしめん』（マトフェイ廿四の四十七）。また他の所には證して天使等は諸聖人の役者なりといふ。イリヤの山にあるや、異族人等來りて彼につきしに童子はいへり、『多くの人々我等に來りたれど、我等は獨なり』と。時にイリヤ答ていへり、『我等を扶くる天使の隊と多數とは我等をめぐる』と。主宰自からも又多くの天使等も其僕の側に居るを見るか。これによりて見るに靈魂は如何なる尊敬を得て、神の爲に如何に高く價値せらるゝか。神も天使も彼を尊ぬるは、彼を自己の親與にうけて、天國を有せしめん爲なり、されどもサタナとその軍とが彼を捜し求むるは彼を己の方に引寄せんためなり。

四十三、見ゆる世界に於て王が選んで其職に昇す所の者は牧者にあらずして、有名なる且善く教育せられたる人なる如く、天の宮に於ても天の王に仕ふる者は、瑕瑾なく、間然する所無く、心の清き者なるべし。又王の宮に於て王と交際する者は何等の惡癖もあらざる最有名にして美麗なる處女なる如く、靈界に於ても天の王と親與するを賜はるものはたゞ凡ての善良なる品性を以て飾られたる靈魂なるべし。見ゆる世界に於て何處か王の駐在に適するあらんに、もし其家に何か不潔物のあるあらば、家を修繕して、これに多くの裝飾を施し、芳香を散ずるならん。まして主が安息せんとする靈魂の家は多くの裝飾を必要とす、最潔淨にして至て完全なる者がかしこに入りて、其處に安息するを得ん爲なり。げだし神とすべて天の敬會は如此の心に安息するなり。

四十四、見ゆる世界に於て父に財産あり、また晃旒と寶石とあらば、これを庫中に藏め、その至愛なる子のために守りて、これを彼にゆづらん。かくの如く神もその所有と自己の貴重なるものとを靈魂に托し給へり。又見ゆる世界に戰起りて、王は軍隊と共に來り戰はんに、王の方寡弱なるときは、直ちに使を發して和を請はん。しかれども、し強き民と強き民、王と王と其力相等しきこと、例へば波斯とロマの軍の如くなるときは、其の惡くの軍隊と共に行動するは兩王の爲に全く必要なるべし。これによりて見るべし、汝の價値の如何なるを、何となれば、神は自己の軍隊と共に、天使及び諸神と共に汝を死より救はん爲に進んで敵と戰ひたまへばなり。神が汝

の爲に來りしは此によるなり。

四十五、王あり、或る貧者の全身に癩を發したるを見てこれを醜とせず、其疵に治療を施し、其痂をいやして、終に彼を王の晩餐に引き入れ、かれに紫衣を被むらしめて、王と爲せりと想ふべし。神も人間とかくの如く行爲し、人々の疵を洗ひ、彼等をいやして、天の婚姻の室に引き入れたまへり。故に「ハリストアニン」の價値の大なるは比ふるに物なしされどもし誰か放心して惡の爲に窃み去らるゝならば、彼は城壁のなき都府に類するあり、されば賊は障礙なく欲する處に入りて、これを荒し且燒かん。かくの如く汝も怠慢にして自己に注意せずんば、惡神等來りて、思を此世に散らし、才智を荒して空しきに歸せしめん。

四十六、多くの者は嚴に外部に注目し學問を練習し、正しき生活の爲に苦慮して、如此の人を以て完全と思ふも、心を吟味せず、かしこに靈魂を占領する邪惡のあるを認めず、しかれども肢體には內部の邪惡なる意思と比例する邪惡の根のあるありて、家に盜賊の潛み匿るゝあり、即反對なる力の潛み匿れて抵抗すると共に謀るあるなり。故に人は罪と戰はずんば、內部の邪惡は漸々に溢れて增加すると共に人を顯然たる罪に引去りて實地に罪を行はしむるに至らん、何となれば惡は泉竅の如く、內より流を常に湧出せばなり。ゆゑに邪惡の流れを止むるに盡力せん、千百の惡におちいり、驚絕して痳痺せざらんが爲なり、彼は貴族にして富める人の爲すなく慮る無くして生活するに比ぶべし、王の從者及び官吏あり、俄に彼を執へて王の前に曳き至りてつげていはん『汝は犯罪によりて訴へられ死の判決に屬す』と、如此の告知に驚かされたる彼はもはや如何なる思慮をも失ひ、驚絕して痳痺せん。

四十七、故に凶惡なる諸神のことをも同じく思ふべし。けだし此の見ゆる世界は、王より貧者に至る迄すべてのものは混亂、紛擾、格鬪の中にあれど、彼等の中誰もこれが源因を知る者無し、即アダムの犯罪の結果によりて輸入せる此の明白なる惡と此の死の刺との源因を知る者無し、何となれば罪を入れたる者はサタナの或る伶俐なる力と實體にして、彼は諸の罪を播きたるによる、彼は內部の人と智とに隱に行動して、思を以てこれとたゝかふ、されども他の或力に激せらるゝ人々はこれを如何に處すべきを知らず、却てこれを以て天然なるものと思ひ、自己の思慮によりてこれを處せんと思ふ。しかれども「ハリストス」の平安と「ハリストス」の照明とを其智に有する者は此のすべてのものゝ何れより起るを知る。

四十八、世は邪惡の病にくるしみてこれを知らず。心に燃着く所の不潔なる火あ

り、あらゆる肢體を走り過ぎて、人々を放蕩と千百の惡行に煽動す。されぼこれに挑撥せられて、其にこれを悅ぶ者は內部に心中に於て淫を行ふ、しかれども惡は此の如く自から食を見着るあらば、顯然たる淫行にもおちいらん、貪欲、虛榮、高慢、嫉妬、怒怒の事につきても亦同じかるべし。たとへば誰か饗宴にまねかるゝならば、多くの食物を供せられん、かくの如く、罪もすべてを營みんことを徐々に勸むるなり、されば其時にこれを悅ぶ靈魂は重軛に苦しめられん。情慾は擔ひ易からざる山にして、彼處には蛇と有毒なる動物と爬蟲の川々あり。鯨の人を其腹に呑むを想ふべし、かくの如く罪も靈魂を呑むなり。情慾は炎々としてもゆる火焰、惡敵の火箭なり、けだし使徒はいへり『惡敵の悪くの火箭を滅すを得んに』（エフェス六の十六）何となれば惡はやしなはれて靈魂に基を据うればなり。

四十九、さりながら賢者は情慾の起るあるもこれにしたがはず、惡なる欲望に向ひ、怒を發して、自からこれが敵とならん、何となれば サタナは其居室と廣さとを靈魂に於て得んことを甚だ願へども、靈魂が之に從はざるときは、憂ひ且困めばなり。或者は神聖なる力に占領せらる、されぼもし少年を處女と共に見るあらんに、縱ひ何か思ふありといへども其智はけがされずして、內部に罪を犯さゝるなり。さりながらかくの如き者もまた敢て己に依賴すべからず。また色慾のまつたく止み、消滅凋衰したる者あり、しかれども此程度に達するは一の大なる者のみなり。商賈の裸體になりて、海の深きに身を投じ、死する程水底に沈むは、王の榮冠の爲又紫衰衣の爲に用立つる眞珠を彼處より搜さん爲なり、かくの如く修道士も一切を脫し、世より出でゝ、惡海の深きと暗黑の淵に身を投ずるは、ハリストスの榮冠と、天の敎會と、新なる世界と、光る都と、天使の集會とに入るべき寶石を深處より取りて携來らん爲なり。

五十、たとへば多くの魚類の網に入るあらんに、その無益なる者は直ちに再び海に投せん、かくの如く恩寵の長き網も衆人に及びて、衆人のために慰安をさがさん、しかれども人々はしたがはず、ゆゑに亦再び暗黑の深きに投せらるゝなり。金は多量の砂の中より洗ひ出されて、黍の如くなる最小き粒とならん。かくの如く精錬なるものも多くの中より少しくのこらん。けだし天國の爲に勞するものは顯然なり、天國の言を飾る者は瞭然なり、同く亦天の鹽を以て溶解せられ、神の寶より借りて語る者も瞭然なり。神が憐を垂れて其恩寵を與ふるの器は瞭然なり。然れども他者は主の多樣なる恩惠により聖にするの力を大なる忍耐を以ておのれにうけん。ゆ

爲に口には言へども、天の光と睿智とにみちびかれざる者は、其心に何等の自信をも住ましむること能はざるべし、何となれば任意は多くして或は不和を起し或は又平安に居るによる。

五十一、荒廢したる市あらんに、誰かこれを新に造營せんと欲すと想ふべし、その落ちて倒れんとするを直ちに全く毀ち、其後これを掘起し、坑に基を据えて造築せん、然れども市に家は未だあらざるなり。又誰か荒廢したる臭氣を發するの地に園を開かんと欲せば、まづ其地を掃清し、柵を繞らし、溝渠を疏し、其後既に植ゑて、植ゑたるものは成長せん、かくて多時を經過して園は果實を產せん、かくの如く人間の任意も犯罪の後、荒廢空虛になりて荊棘を生せり、けだし神は人につげていへり「土は汝のために荊棘と薊とを生せん」(創世記三の十八)ゆゑに勞と苦行とは多く要用なり。人の心に火の降りて、荊棘を除き清むるに至るまでは、人のこれを搜して基を置かんためなり、其時は人々父と子と聖神を世々に讃美して潔められん。アミン。

第十六　講話

神に屬する人々も原罪より流るゝ試惑と患難とに屬する事。

一、すべて靈智ある實體即天使と靈魂と魔鬼とを造成者は清潔なる者及び最酌なるものにつくり給へり。しかれども彼等の中或者が迷ふて惡に入りしは、これその自擅によりて生せり、何となれば彼等は自巳の自由により當然の思慮より離れたればなり。されどもし造成者は彼等を惡なる者に造れりといはゝ、これ即サタナを火に遣すの神を以て不義の審判者と名づくるなり。さりながら異端者あり、斷定していふ、物質は始なきものにして、彼は根なり、根本の力なり、されば神と等しき力あるものなりといふ。これに對しては正く論破して言ふべし、如何なる力は終に勝を制するかと。神の力なりと答へざるを得ざるべし。然れどもかゝる場合に於て勝たれたる者は最早勝ちし者と同時なる、或は同力なるにあらざるべし。惡の獨立自存なるを斷定する者は何も知らざるなり。けだし神の無欲なると神の性とによる

に、神には何等の獨立自存の惡あるなし。然れども我等に於ては惡はあらゆる不潔の欲望を浸潤して、すべての力と感じ易きとを以て行爲す、さりながら我等と共に溶解するは或人が酒と水との混合にたとへていふ如くなるにあらず。一の田中に麥も自から成長し、莠も自から成長する如く、或は一家の中に賊も別に離れて居り家主も別に離れて居るが如くなるべし。

二、泉は清水を注ぎ出だせども、其底に泥土のあるあり。もし誰か泥土をかきみだすときは、泉はすべて濁らん。かくの如く靈魂もかきみださるゝときは、邪惡と共に溶解するなり。ゆゑにサタナは靈魂と或は一なるとのとなるべく、二つの神は淫行或は殺人の時にあたりて或は一たるを成さん。ゆゑにいふ「淫婦に合ふ者はこれと一體となる」〔コリンフ前六の十六〕。然れども他時には獨立なる靈魂は自から行爲して己の行を悔い、涕泣祈禱してみづから神を記憶せん。さりながらもし靈魂は常に惡に沒するならば、いかんぞこれを爲すを得ん、けだしサタナは殘忍なれば人々の翻然として悔悟することをいかんしても欲せざるなり。女子も男子と配耦したる後、彼と一たらん、しかれども他時には彼等互に相離るゝなり、何となれば其一は死して他は生存することしば〳〵これあればなり。靈魂の聖神と親與するもこれと同じかるべし、靈魂は彼と一神とならん」〔主に合ふ者は主と一神となる〕〔コリンフ前六の十七〕。然れども人が恩寵を以て呑まるゝの時にあるべし。

三、人あり、神の甘味を既に味へて、猶反對者の勢力に屬す、されば彼等は無經驗により、神の惠の下りし後ハリストスの機密の時にも思念が勢力をあらはすに驚かんとす。さりながら此の狀態に老いたる者はこれに驚かざるべし、これ猶久しく練習したる老農の如し、彼等は豐饒なる時にも、全然掛意せざるものとなり居らずして、飢饉と窮乏とを待つ、しかれども、これに反して飢饉或は窮乏の至るあらんときも、時の變遷するを知りて望を全くは失はざるなり。靈界に於てもかくの如し、靈魂が種々の誘惑に遭遇するときも、驚かず又失望せざるべし、けだし神の放任により惡に靈魂を試み且罰するを許すを知ればなり、これに反して大なる富と平安との時にも、掛意せざる者とならずして改變を待つ。太陽は物體なり、受造物なり、さりながら汚泥と不潔をみちみてる惡臭を發する場所を照らして、少しも害をうけず、或は汚されずんば、況んや清潔にして聖なる神は惡者の勢力の下に在る所の靈魂に止まるも、これより何の關係もうけざるべし、けだし「光は暗に照り、暗はこれを滅はさざればなり」〔イオアシ一の五〕。

四、故に人が恩寵の深きにありて、これに富まさるゝや、其時にも邪惡の毒は猶人に存するあり、しかれども人に助くる保護者も亦人に存するあるなり。ゆゑに誰か患難或は情慾の大擾亂の中にあるときも望を失ふべからず、何となれば失望により罪はいよいよ靈魂に入りて、これを肥太らすればなり。しかれども誰か神に不斷の望を有するときは、惡はさながら微々として人に居るものゝ如し。もし人あり衰弱し、傷れたる肢體を有し、劇症の熱に苦しみて煩ふあらば、これ罪より生ずるなり。何となれば罪は萬惡の根にして、心の欲望と惡しき思慮とはこれより起れればなり。泉のながるゝや、これに圍まるゝ地は濕氣ありて潤されん。されども炎熱の至るあるや、泉もその附近にある土地も直に乾燥せん。恩寵の大に餘ある神の諸僕もかくの如し、恩寵は惡者の爲に起さるゝ欲望をも天然の欲望をも乾かさん、何となれば今日神の人々は第一のアダムより上にあればなり。

五、神は劃られざる且圍まれざるものにして、何處にも己をあらはさゞるなし、天使の天より地に降る如く、甲處より乙處に移るにはあらずして、山にも、海にも、下は地獄にもあり、彼は天にもあり、彼は此處にもあるなり。さりながら汝は問はんいかんして神は地獄にあるを得べきか、或はいかんして彼は暗黑に、或はサタナ或は惡

奥のある所にあるを得べきかと。汝に答へん。神は無慾なる者にしてすべてを圍まざるなし、何となれば劃られざるものなればなり。神の造物たるサタナは神を以て縛らる、しかれども善なる者は汚されざるべく、暗まされざるべし。もし神は地獄をもサタナをもすべて圍まざるなしと斷定せずんば、彼は惡者の居る所の場所を以て劃らるゝ者と歸結せられて、彼より更に上なる他の神を尋ねざるを得ざるべし、けだし神は何處にも一切の上にあらざるべからざればなり。さりながら神性の奥妙なると精微なるとによるに彼に圍まるゝ暗は彼を圍まざるなり。惡は神にある所の清潔に與かるものとなる能はず。ゆゑに神の爲には獨立自存の惡あるなし、何となれば彼は何よりも害を受けざればなり。

六、然れども我等の爲には惡あり、何となれば彼は惡なる不潔なる思を暗に勸め入れ、心に居て働き、智を此世の俘虜となして、我等が潔き祈禱を献ぐるを妨ぐればなり。彼は靈魂を衣て骨の組織に觸感す。たとへばサタナは空中に居らんに、神もかしこに共に在りて、これがために少しも煩はされざる如く、罪も靈中に居れど、神の恩寵はまた少しも煩はされずして共に同く居るなり。僕は主人の側に居るならば、すべてその側に居る間は戰々兢々として主人によらずしては何もなさゞるべし。

かくの如く我等も主宰と心を識るハリストスの前に俯伏して、その思を呈露し、彼に向つて依賴と希望とを有せんことを要す、何となれば彼は我が榮なり、彼は我が父なり、彼は我が富なればなり。ゆゑに汝は配慮と畏懼とを常に良心に有すべし。されどもし人は己の中に植られて確立せる神の恩寵を未だ有せずんば、時々己を誘導し、且儆醒して善に向はしむる所のものに日夜靈魂を以て附かんこと、或る天然なるものに附くがごとくせざるべからず。少なくも人には配慮と畏懼と、悲痛と、常に己れに確立せる悔悟の心とを存すること、或る天然なる變らざるものゝ如くならしむべし。

七、さりながらたとへば蜂は物に蜜房を屋隅に造る如く、恩寵も其愛を物に心中に作りて、苦きを甘きに變じ、殘心を慈心に變ずるなり。またたとへば銀工及び彫刻師あり、盂に其部分に循ひて彫刻を施さんに、種々の動物を刻出して、これに被せん、されば其工竣るときは、盂は全く燦然として光をあらはさん、かくの如く眞實の意匠者たる主も我等が體より移去らざる間に彫刻を以て我等の心を飾りて、奥妙にこれを新にし給ふ、されば其時靈魂の美は現然たるものとならん。器具を製してこれに動物を畫かんと欲する者は、先づ蠟製の寫影を作り、其模型により器を鑄造し、それによりて製造品は終に形を爲さん。かくの如く罪も神的性質を有すれば、己の狀態を有して、多くの形狀に變化するなり。これと同じく內部の人も自己の狀態と自己の形狀を有する或る生活物なり、何となれば內部の人は外部の人の肖似なればなり。これ重要にして貴ぶべき器なり、何となれば神はすべての造物よりも更にこれを惠みたまひしによる。されば靈魂の善なる思念は寶石又は眞珠に似たる如く、不潔なる思念は死骸ともろ〳〵の不淨と惡臭とにみちみたさるゝなり。

八、ゆゑに「ハリステアニン」は新なる世界に屬し、天のアダムの子にして、新なる生出なり、聖神の子なり、ハリストスの光を發する兄弟にして、靈神界の父と光を發するアダムとに肖んとす、彼等は彼の都と彼の種屬とより彼の能力を受け、此の世に屬せずして他の世に屬するなり。げだし主は自からいへり、汝等は此の世に屬せざること我の世に屬せざる如し」（イオアン十七の十六）商賈の遠方より歸るや、其都度其購求を增して、これを家人に送り遣すは、家人をして家屋、庭園及び緊要なる衣服を得しめんが爲なり、されば故鄕に到着し、大なる富を自から持來るや、家人と親戚は大なる喜びを以て彼を迎へん、靈神界に於てもかくの如し。もし或者は天の富を自から購求するならば、同市者たる聖人及び天使の靈は此を聞知し、驚ていはん、「地

上に居る我等が兄弟は大なる富を得たり』と。かくの如き者等は世を去るときは、おのれに主を有し、大なる喜を以て上に登るべくして、主と共に在る者等はかしこに第宅、苑囿及ひ照り輝く高價なる衣服をそなへて、彼等を迎へん。

九、故に儆醒は全く要用なり、現に所有する幸福が轉じて我等の害とならざらんためなり。けだし天性の善なる人ももし戒慎せずんば、漸々其善性質の爲に誘はるべく、智慧を有する者も其智慧の爲に窃み去らるればなり。故に人はすべてに於て節制者とならんことを要す、慈善は嚴重を以て溶解すべく、智慧は小心を以て、言は行を以て溶解し、一切の希望を主に托して、自己に依頼せざらんことを要するなり。けだし德行は多くのものを以て調味せらるべし、これ猶或る緊要なる食物は調味のために芳ばしき葡萄酒又は他の或者を要するありて、たゞに蜜のみにあらず、却椒をも要して、たゞかくの如くなれば用に適するものとなるが如し。

十、人に罪なしと斷定する者はたとへば人々洪水の時にあたりて滿水に溺れんとするも、これを認めず、却て『我等は水の鳴る音をきけり』といふに似たるあり。かくの如く惡習の波の深きに沈沒する此者等もその智と思とに罪なしと斷定するなり。然れども或者は言論を理め、演說を爲すも、天の鹽に調味せられず、故に王の晩餐の事を論評すれども、自からはこれを嘗めず、されば彼等は何の得る所あらざるなり。然れども又或者は直ちに王を見て、王の寶の開かるゝや、入りて嗣業をうけて、彼の高價なる食物を嘗め且飲まんとす。

十一、たとへば母に獨一の子あらんに、容顏うるはしく、聰明にして、すべての幸福を以て飾られ、母の希望は擧げて此の子にあらんに、もしこれを難りしなば、母には最早たゞ一の斷えざる憂と一の慰めざる哀とのみ殘らん。かくの如く智も神の爲に死したる靈魂を哀み、涙を流して、不斷の憂に沈み、中心より傷み哀み、畏懼と費心との中にありて、つねに幸福に飢ゑ且渴せんことを要するなり。かくの如き者には終に神の恩寵と希望と來りて、彼には最早哀あるなく、反つて彼は寶を發見したる者の如く喜ぶべく、これをうしなはざらんが爲に更に戰々兢々たらん、何となれば賊の襲ふことあるべければなり。且や度々、賊難にかゝりたる者はこれが爲に喪失の禍をかうむり、大なる辛苦を以てこれを避けたれど、其後廣大なる財產と多くの寶物とを有するに及んでは、增殖したる富の故に破產は最早恐れざらん、かくの如く最初多くの誘惑と懼るべき場所とを經過したる靈神界の人々も、其後恩寵にみてられ、幸福に餘りあるや、これを掠奪せんと欲する者等を已に恐れざらん、何とな

れば彼等が富は少小にあらざればなり。さりながち彼等はまた畏懼を有す、これ惡なる諸神に驚かされたる人々の畏懼にはあらずして、己れに托せられたる靈神界の恩賜を如何に處理せんかとの畏懼と費心となり。

十二、かくの如き人は己を以てすべての罪人より尚いやしびべきものと思ふべく、かくの如き思の彼に植付らるゝは天性の如くなるべし、されば彼は神を識るの認識にいよ〳〵深く入る程はいよ〳〵己を以て無知者と思ふべく、いよ〳〵學ぶ程はいよ〳〵己を以て何も知らざる者と認めん。且進歩を助くる恩寵はこれを心の中に造ること、或る天然なるものゝ如くせん。それ嬰兒は少年の手にあるならば、彼を手に持する者は欲する所に彼を抱き去らん、かくの如く深く感微する所の恩寵も智を手に持して、天に、完全なる世界に、永遠の慰安にのぼせん、しかれども其恩寵にも程度と階級のあるありて、或者は王の前に勇氣を有する軍隊の分隊長の如くなれども、或者は全軍の將の如くなるべし。家にみちみてる烟は溢れて外氣に注ぎ入る如く邪惡も靈魂に充ち滿ちて外部にそゝぎ、果を產せん。郡國の重き管理を任せられたる者、或は王の寶物を托せられし者は何を以てか王を辱しむるあらざらんかと何れの時にも費心せん、かくの如く靈神界の事を信任せられし者も、つねに費心して、平安を有するも有せざる如くなるべし、何となれば都城たる靈魂に侵入したる暗黑の國と靈魂の牧野を占領したる野蠻人の國とを靈魂より更に逐拂はんとすればなり。

十三、王たるパリストスは此の都府に復讐者をつかはし、これを苦むる者を縛して、かしてに天の軍隊と聖なる諸神の聯隊とを移住せしむること、その本國に移住せしむる如くせん。終に太陽は心中にも光り始め、その光線は悉くの肢體に透徹して、深き平安は最早彼處に王たらん。しかれども人間の靈力と苦行と練達と神に從ふ心服とは、恩寵の離れんとするに方り人が堅く支へて神に呼ばんとする其時に顯然としてあらはれん。然れども汝は蛇の川と獅子の口と天地の間にある暗黑なる力と地上にあるなくして肢體の中に沸騰する火焰のあるを聞き知るも、汝が體より出つるとき聖神の聘質をうけずんば、彼等は汝の天に昇るを許さずして、汝の靈魂を遮止せんとするを知るか。これと同じく靈魂の價値の事、此の聰明なる本體の貴重なる事を聞くも、神が「我等の像と肖によりてつくらん」(創世記一の廿六)といひしは天使の事にあらずして人性の事なると、天と地とは過ぎ去れど、汝は王の子たると兄弟たると新婦たるとに召されたる所以を理會するか。現世に於て新郎に

屬するものはすべて新婦にも屬す、かくの如く主に屬するものはすべて汝にも信任せられん。けだし彼は汝を代保せんがために自から來りて汝を呼びたまへり。しかれども汝はおのれに何も思浮ぶ所なくして己の貴きを識らず。故に神通をうけたる人が汝の墮落をかなしむは當然なり、曰く『人は己の尊敬にありて知らず、無智なる畜類のごとし』(聖詠四十八の十二)。光榮は父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第十七　講話

「ハリステアニン」の靈神的傳膏と光榮の事、ハリストスなくんば救はれて、永生に與かる者となる能はざる事。

一、完全の域に入りて、王に親近する者となるを賜はりし完全なる「ハリステアニン」は、つねに己をハリストスの十字架に禮物に獻ぐるなり。預言者等の時に當り、傳膏は最貴ぶべきものなりき、何となれば諸の王及び預言者は膏を傳けられたれば なり、かくの如く今も天の傳膏を以て膏つけらるゝ靈神的人々が恩寵によりて「ハリステアニン」となるは、天の奥義をうくるの王となり預言者とならん爲なり。彼等は縛られ、虜にして曳去られ、突落され、釘せられ、禮物に獻げらるゝの子なり、君主なり、諸神なり。それ地上の植物と有形の樹より取る所の膏を傳くるは如此の能力を有して、膏を傳けられしものは、無論位をうけしならば(けだし彼等が王に立てられしは衆の認むる所にして、ダヴィドも膏を傳けらるゝや、直ちに窘逐と患難に遇ひたれど七年を過ぎて王となれり)知や智と內部の人にこれを聖にしこれに喜を起さしむる天上靈界の喜の膏を傳けらるゝ者は、彼の不朽なる國及び永遠なる力の印と、神の聘賢と聖神及び撫恤者を受けん(知るべし撫恤者は憂愁に居る者を慰めて喜びを滿たすを)。

二、天の植物たり、生命の樹たるイイススハリストスの膏を傳けらるゝ此人々は、完全の域に入るを賜はらん、卽國と子たるとを賜はらん、何となれは彼等は猶此世にあるも、最早天の王の機密の參與者なれば、全能者の前に勇を有し、彼の天使と聖なる諸神とが居る所の室に入らんとするによる。けだし彼等の爲に彼の世に於て備へられたる完全の嗣業を彼等は未だうけざれども、今うけたる聘賢により、最早加冠せられて王となる者の如く、己を固めたり、されば彼等は神の豐なると勇みとにより、ハリストスと共に王たらんとするを己のために奇怪とは思はざるべし。何

故なるか。彼等は猶肉體にあるも、彼の甘味を感じ、彼の能力の作用を己れに有するによる。

三、王の友となりて、常にその宮中に居り、王の機密を知り、王の紫袞衣を目擊する者は、自から王となりて榮冠を被むらんときも、これがために驚愕恐怖せざるべし。何となれば王宮の機密に永く參與したればなり。されば老練にして教育ある人々の外、王の機密を親しく識らざる牧者と平民とは、誰も來りて王となるあたはざるべし。かくの如く「ハリステアニン」も來世に王たらんとするに驚かざるべし、何となれば恩寵の機密を既にあらかじめ認識したればなり。人の誠命を破るや、魔鬼は暗黒の幕を以てその靈魂を全くおはへり。此により終に恩寵は來りて、其覆をすべて徹せしむ、ゆゑに靈魂は最早清潔になりて、自己の本來の天性と此の間然すべからざる清潔なる造成とを受け、既に常に清潔にして、其心中に光り始むる眞實なる光と眞實なる義の太陽とを清潔の眼を以て視ん。

四、世の終に臨み、此穹蒼の一變するや、義人等は最早國と光と光榮との中に居りて、ハリストスの常に光榮にして父の右に居るを見るの外、他の何物も見ざる如く、今も此人々は奪ひ去られて、彼の世の捕虜となり、すべて彼處にある美麗と奇跡とを直視せん。けだし我等は未だ地上にあるも、智と內部の人とは彼の世界の住者とし、國民として、天に住所を有すればなり。此の有形の眼は清潔なるものとなれば清くして常に太陽を見る如く、智も全く潔められて常に光榮を見ん。即ハリストスを見ん。されば日夜主と共に居ること、主の體の神性と合して、つねに聖神と共に居るが如くなるべし。さりながら人々は俄に此域に達するにあらずして、たゞ辛苦と憂愁と大なる苦行とを以てせん。けだし彼等が內部に作用して彼等に止まる恩寵は彼等と共に居るありといへども、邪惡も亦存するあり、されば一心に二種の生命は有力なり、即光の生命と暗の生命是なり。

五、しかれども汝は我に告げて言ふならん『光と暗と何の交ることのあらん』、神聖なる光は安くにか暗まされ又は擾さるゝあらん、汚されざる清潔なるものは安くにか汚さるゝあらん。錄して言へるあり『光は暗に照りて暗はこれをおははず』（イオアン一の五）。しかれども物は一樣一片に理會すべからざるなり。或人は其存する所の邪惡よりも更に剛强なるにより隨つて神の前に祈願と大なる安靜とを有しつゝあるも、他時奸惡なる思念の作用に遇ふや、神の恩寵に猶止まり居ると雖、罪の爲に物み去らるゝなり。さりながら輕率にして無識なる者は恩寵の少しく感する

あるや、思へらく我等には既に罪無しと、然れども能く思慮する善智なる者は敢て罪を認めずんばあらず、神の恩寵をおのれに有するも恥づべき不潔なる思念の作用に屬せざらんが爲なり。

六、我等は兄弟の間に於て屢見るあり、或者は大なる喜びと恩寵を有して、五年六年の久しきが間己を左の如くいへり、曰く『肉慾は我等に凋落せり』と、しかるに其後己を以て色慾より全く免れたりと思ひしとき、彼等に潜伏したる惡習は動き來りて彼等は肉慾に燒かるゝよりて彼等は自から驚きていへり、『かく久しきを經たる後かくの如きの惡は何れの處より我等に起りしや』と、故に健全に思慮する者は一人も『恩寵の我に居るにより我は罪より全く自由になれり』といふを敢てせざるなり。これに反して心に作用する者は二あるなり。事に經驗あらざるものは少しにても恩寵の感ずるあるや、思へらく最早我等は勝を得て完全の「パリステアニン」となれりと。然れども我意ふに事は左の如くなるべし、空氣清く澄みて太陽の天に輝くわらんに、雲起りてこれをおほひて、空氣の凝結する時も太陽は雲後にありて、その光にもその實體にも何等の毀損もうけざらん。完全なる清潔に未だ達せざる者等に於てもかくの如くなるべし。されば神の恩寵に止まり居らんも心の深きに於ては猶罪に占領せらるゝ彼等は天然の發動をも己れに有すべく、又善に全く確立するには非れども、彼等を神に向ふに堅むる思念をも有するなり。

七、これと相反して心の深きに於て善なる一方を持する者、即恩寵に主治せらるゝ者等もかくの如く、猶奸惡なる思念の僕となり、捕虜となりて、惡習の一方にあるなり。ゆゑに事の我等に於て如何なるを人が實驗して知らん爲には多くの考を要するなり。ゆゑに汝につげん、使徒等も撫恤者を己れに有しつゝ、全く閑散無事にして居らざりき、彼等には喜びと樂みの中に恩寵の作用によりて恐れと戰慄もこれありき、しかれども惡習の爲にあらず、恩寵が自から彼等を用心せしむるものにして、彼等いかなる小事にも迷ひ入らざらん爲なり。石片を壁に投せし者は少しも壁を傷はざらん、否その位置を動かさゞらん、或は鎧冑を被る者に矢を放ちし者は鐵をも身體をも害せざらん、何となれば鎧冑は矢を拒げばなり、かくの如くもし使徒等に惡習の一部が近づくことありとも彼等をそこなはざりき。何となれば彼等は「パリストス」の完全なる力を衣せられ自から完全なる者となりて、義なる行を爲すの自由を有したればなり。

八、或者等斷定して、靈魂は恩寵の前にありて最早心配するの故なしといふ、ゆゑ

に神は完全なる者にも神に事ふるに於ける中心の望を促すは恩寵と合致して行爲せしめんためなり。げだし使徒はいへり『神を怒すなかれ』〔フェサロニカ前五の十九〕或者は他に難儀を掛けんことを欲せず、他者は自から己れに奉承す、されど又他者は世の人々より取りて貧者に施す。これ極めて善なり。一者は恩寵を有してたゞ自己を慮る、しかれども他者は他の靈魂に益を施さんを力む。後者は前者に對して大に卓越す。されど或者は恩寵を有して、神の名の爲に己の身を焚焼と若難とに付す。而してこれ又前者より更に高上なり。或者は德行を練習して、人々の己を賞讃尊敬せんことを願ひ、己を左の如くいへり『我等は「ハリステアニン」にして聖神に與かる者なり』と、然れども又他者は人々と面會することをさへ勉めて自から避けんとす。後者は前者に對して大に卓越す。最完全の時にも神に對する熱心は天然の自由により、いよ〳〵高くいよ〳〵卓越なるを致す所以を見るか。

九、貧衣に覆はるゝ者はもし己が金滿家たるを夢に見るわらは眠より起きて再び己の貧者にして裸體なるを見ん、靈界の事を論ずる者もかくの如し、一見したる所は次弟順序を立てゝ言ふが如しといへども、言ふ所のものは或る實驗と能力と確信とを以て心に固められしにあらざるにより、或る妄想に止まらん、或は絹布と眞珠とに全く覆はるゝ處女の娼家に現はれたる如く、同じ人類の中にも其心は不潔なる神の淫所たるものあり、彼等は行を顧みずしてたゞ義しきを言はんを欲するなり。

十、魚は水なくして活くる能はざるべく、或は人は足なくしてゆき、或は眼なくして光を見、或は舌なくして言ひ、或は耳なくして聞くあたはざるべし、かくの如く主イエスなく、神の力の作用なくんば、神の奥義と睿智とを認識する能はざるべく、或は人は富んで「ハリステアニン」となる能はざるべし。げだし眞の賢者と兵士と剛勇なる人と神の哲人とは內部の人は神の能力を以てみちびき治めらるゝなり。ニルニの哲學者は言を治むるを學ぶ、しかれども他の哲學者あり、言に於ては無知なれども神の恩寵を喜び且樂む、これ敬虔なる人士なり。今彼等の中いづれか更に勝れるを評せん。いふあり『神の國は行と能とにありて言にあらず』〔コリンツ前四の廿〕

十一、此の麵包は麥より製造せらるるとは誰も言ふを難んせざるべし、しかれども麵包の如何樣に支度せられ、いかやうに燒かるゝ所以を詳細に說明せんこと肝要なり。無欲と完全とのことを論ずるは數言にて能くすべし。福音經はこれを簡短に言ひあらはして、怒るなかれ、願ふなかれといひ『人爾の右の頰を批たば、他の頰をも之

に向けよ。爾を誣へて爾の裏衣を取らんと欲する者には、外服をも取ることをゆるせ』といへり(マトフェイ五の三十九、四十)。しかれども使徒は潔白の行を成すには漸々に忍耐と大量とを以てすべき所以を更に説弘めて、まづ嬰兒の如く乳を以てやしなひ、其後成長と完全とに昇すべきを廣く教ふ。福音經は衣服の剪毛より成るをいひ、使徒はその準備の詳細を説明せり。

十二、靈界の事を自から味へずして演説する者は、たとへば人が日中炎熱の燥なる時に當り、空野を行きて、渴になやみ、水を尋出する泉を書きて、己をこれを飲む者に擬するに似たるあり、其口と舌とは燒く所の渴の爲に乾上らん、或は人が蜜の甘きを言ふといへども、自からこれを味へずして、その甘味を知らざるに類するあるなり。かくのごとくもし完全の事、喜の事或は無欲の事を論ずるも、その効力とその此等に於る確信とを己れに感せずんば、實際に於てはすべて言ふ所の如くならざるべし。げだし此の如き人はたとへ少しなりとも實行に着手するを漸々に賜はるならば、其時彼は自から考へて言はん『我が預想したる如くならず。我は別に考へたれど、神は別に作用す』と。

十三、ハリストス教は食なり、又飲なり、されば人のこれを味ふ程は、智は甘き趣味に興奮せられて禁むべからざるものとなり、飽く能はざるものとなりて、いよ〳〵要求しいよ〳〵味へん。或は人誰か渴して甘き飲をあたへらるゝならば、これを味へて、いよ〳〵烈しく渴を起し、いよ〳〵切に飲に近づかん、神を味ふこともかくの如く、殆んど堪ふべからざる渴を生せん、されば此の如きの人を渴者に比するは當然なり。而してこは一の言のみにあらずして、智の進歩を奥密に助成する聖神の作用なり。或人は妻と與にすると凡そ有形なるものとを節制して、すでに聖にせられたりと思ふ、然れども實際は然らず、何となれば惡習は智に留まり、心に居りて、自から高ぶればなり。されば內部の人の清められ、聖にせられたる者は是れ聖者なり。眞實の倚る處には迷はこれを暗ましこれを援さんを盡力して、これと共に戰はん。

十四、イウデヤ人が祭司の職をおのれに有するや、此の民族の或者は窘逐せられ凌辱せられたり、何となれば眞實を堅く守りたればなり。例へばエレアザル及びマッカヒェイの如き是なり。しかれども今日、十字架と殿幕が裂けし以來、神はイウデヤ人を離れて、最早此處に眞實があらはれて作用するや此の民族の或者は再び窘逐をうけんさりながら其時此の民族の或者等の窘逐凌辱せらるゝは、眞實を愛する者の致命者とならんためなり。げだし反對者なく、眞實に逆つて起る所の僞人等あ

るなくんば、いかんして眞實はあらはれん。しかれども兄弟の間にも苦難と憂愁とを己れに負はんとする者あり。彼等は大に戒愼を要す。陷らざらんためなり。兄弟中他と共に祈禱し、神聖なる能力の爲に捕へて奪ひ去らるゝ者あり、彼は天の都なるイエルサリムと光を發する形狀と無限なる光とを見て、言ふ所の聲をきけり、曰く『これ義人の安息の所なり』と。されど其後幾もなく彼は自負し、自から己れの爲に現象を有せりと思ふて、罪の淵と深きと千百の惡に陷うき。

十五、故に內部に生活せる高尙なる人も陷りしならば、『我は禁食し、旅行の生活をなし、己の所有を散ず、ゆゑにすでに聖なり』とは誰か言ひ得る者ありやゞけだし惡事を節制するは未だ眞の完全にあらず、これたゝ汝は屈辱せられたるに思付きて、蛇を打殺したるのみなり、けだし蛇は智の裏面に思の深處に潛み居りて、巢を作り、いはゆる靈魂の潛伏所と貯藏所とに於て汝を殺さんとす、何となれば心は淵なればなり、ゆゑに汝は彼を殺して、汝の中に居る所の惡くの不潔を逐ひ去りしのみなり。凡て哲學を修むる者と律法と使徒等とハリストスの來るとは洗淨を以て自的と爲す。すべての人はイウデヤ人もエルリニ人も清潔を愛すれども、清潔なる者となるあたはず。ゆゑに如何なる方法を以て心の清きに達し得らるゝかこれを搜索すること肝要なり。こは我等の爲に釘せられし者の助を以てするにあらずんば能はず。彼は路なり、生命なり、眞實なり、門なり、眞珠なり、生活する天の餅なり。此の眞實なくんば何人も眞實を認めて救はるゝあたはざるべし。ゆゑに外部の人と有形物體とに關しては、汝はすべてを棄てゝ、己の所有を分施したる如く、もし世の智慧に於ても智識と言論の力とを有するならば、すべてこれを棄て、すべてを無に付せんこと肝要なり。たゞ其時に『傳道の愚』(コリンフ前一の廿一)を以て己を立つるを得んこれ眞實の智慧にして、言論の美にあるにあらず、聖なる十字架を以て働く力にあるなり。光榮は一體なる三者に世々に歸す。アミン。

講話　第十八

「ハリステアニン」の寶の事、即種々の方法をもて「ハリステアニン」を完全に達せしむるハリストスの事及び聖神の事。

一、もし誰か世に於て大に富み、隱れたる寶を己れに有するならば、此の寶とこれ

を有するとにより、凡そ欲する所のものを己れに求め得べく、其意に適して世に求めんとするものは、己の寶に依賴して、易すく手に入るゝことを得ん、けだし人のたゞに有せんと欲する惡くの物を彼には易すく求め得らるゝなり。かくの如く天に屬する神の寶と心に光り始むる主其者とを先づ神に求め得て、これを有する者も、此寶と彼等に存するハリストスとを以て德行の惡くの義と主の誡命の仁慈とを惡く領有することを得べく、同じく亦此の寶を以ていよ〳〵大なる天の富をおのれに增加せん。けだし天の寶の賜により、靈界の富の豐なるに堅く依賴して、義の惡くの德行を成すべく、彼等に存する恩寵の見えざる富の力によりて主の惡くの義と誡命とを易すく遂げん。ゆゑに使徒はいふ『此の寶を土器』に有す（コリンフ後四の七）言意は未だ肉體に居るも、彼の寶即ち神の聖にする力を己れに有するを賜はれりとなり。またいへり『けだしハリストスは我等の爲に神に由る智慧となり、義及び成聖となり、贖となれり』（コリンフ前一の三十）。

二、ゆゑに此の天に屬する神の寶を得て、これをおのれに有する者は、これを以て誡命に依る惡くの義と道德の惡くの行とを最早强ふることなく、又難んずることなく、正しく純全に成就せん。ゆゑに我等も神に祈願して、尋ね且求めん、我等にも聖神の寶を賜はらん爲なり。かくの如くなれば我等は責むべきなく、純然に主の惡くの誡命にとゞまりて、天の寶なるハリストスの助けに由り、神の惡くの義を純全に成遂るを得ん。貧しく不幸にして飢餓の爲に衰弱する者は、貧困の故に世に何も得るあたはざるべし。然れども寶を有する者は既に前文にいひし如くたゞ其の欲し求むる所のものを勞も病もなく惡く求むるを得ん。かくの如く裸體にして神の親與をうばゝれ、罪の恐るべき貧困に居る所の靈魂も神をうけざる間はたとへ願ふと雖も、義の靈果を實際に結ぶあたはざるべし。

三、然れども主に求むるにおの〳〵己を强ひることを要す、天に屬する神の寶を發見して、これをうけんが爲なり、また先にすべての盡力を以ても成すあたはざりし主の惡くの誡命を正しく純然に勞なくして易すく遂ぐるを得んが爲なり。けだし神との親與なく、まづしく裸體にして、靈界の寶と富とをおのれに有せずんば、いかんして此の如き靈界の所得をうくるを得んや。然れども神を尋ぬるにより、信仰と多くの忍耐とによりて、主を得たる靈魂、即此の眞の寶を得たる靈魂は、先にもいひし如く易すく神の果を產せん、然らば神を以て誡命せられたる主の惡くの義とすべての誡命を純全に責むべきなく、みづから成遂げん。

四、或は我等また他の比喩を利用せん。もし誰か富みて高價の晩餐を支度するならば、其富とその所有する寶の中より使費せん、されば大なる富の故に何物にも缺くるあらんことを恐れざるべし、かくの如くして其の招待したる客に種々の珍物を供し、華美と壯麗とを以て彼等を樂ましめん、然れども貧にして富を有せざる者は、もし誰が爲にか晩餐を備へんと欲するならば、器物も衣服も其他の物品に至るまですべてを借り來らん、而して招待せられたる者等が僅に晩餐を喫するは貧者の常にして、其後借り來れる銀器或は衣服或は其他の物品はおの〳〵これを返却せん。さればかくの如くすべて各人に屬するものを返却するや、その樂まんとする自己の富をおのれに有せずして、自ら貧しく裸體なる者として存せん。

五、かくの如く聖神を以て富める者も、天の富と神の親與とを實に己れに有すれば、もし人に眞理の言を語り、或は人に靈神上の說話を傳へて、靈魂を樂ましめんと欲するときは、己れに領有する自分の寶と自分の寶とより言を出し、これを以て靈話を聞く者の心を樂ましめん、されば自己には乏しくなるを恐れざるべし、何となれば恩惠の天の寶を已れに領有し、これにより食を供して、靈界の饗應をうくる者等を樂ましむればなり。然れども貧にしてパリストスの富を己れに有せざる者は、言と行と、神聖なる思慮と、得もいはれざる奧義の諸恩を流し出さんとする靈神上の富を心に有せざれば、もし眞理の言を演じて、聽衆の或者を樂ましめんと欲するも、實際に於ては神の言を實に己に所有せず、たゞ想出して、聖書の各卷より言を借り、或は靈界の人より聞きしものを復說して授くるのみなれば、見たる所他人を喜ばして他人も其の言を樂むが如くなれど、其演說を終るや、彼の言はおの〳〵その取來れる自分の場所に歸りて、彼は自から再び裸體なる貧しき者となりて存せん、何となれば彼の私有にあらざればなり、されば彼が供するを得たる所の靈界の寶は他人を益し、且樂ましむるも、第一の自己は神を以て樂ましめられず又喜ばしめられざるなり。

六、これによりまづ第一に衷心の悲痛と信仰とを以て神に求むべし、神の能力と作用とにより神の富とパリストスの眞の寶とを我等の心に得るわらしめん爲なり、かくの如くなれば主の益と救と永生とを先づ自己に得て其後最早我等の力に能くするだけ他人をも益して、パリストスの內部の寶より靈界の說話の諸〳〵の恩惠を授け、天の奧義を傳達するを得んけだし父の旨の仁慈は凡そ信じて父に求むる者に居住せんことをかくの如く欲し給へり。『主はいへり我を愛する者はわが父に

愛せられん我も彼を愛し且己を彼にあらはさん〔イオアン十四の廿一〕又いふ『我とわが父は來りて彼に住居を爲さん〔イオアン十四の二十三〕』無限なる父の善心はかくの如く欲し、思ふこともあたはざるハリストスの愛はかくの如く約したまへり。

七、神の子となり、上より聖神によりて生るゝを賜はりし者はこれを照明し、これを慰安するハリストスを己れに有すれば種々樣々の方法により神を以て導かるべく、恩寵は靈神上の慰藉により彼等の心に見えずして作用せん。さりながら恩寵はかくの如き者等の心にいかに作用するを少しく比喩を以て示し、世の有形上の樂みによりこれを形容せん。或時には彼等は快活に樂ましめらるゝこと恰も王の晩餐にあるものゝ如くにして、得もいはれざる喜びと樂みとを以て歡喜することあらん。又或る時には新婦の新郎と共にし、神聖なる安息を以て慰められるゝ如くなることあらん。されど或時には無形なる天使の如く、なほ身體の中に居れども天使と同樣の輕快と活潑とを己れに感ずることあらん。また或時には彼等は飲みて酩酊の中にある如く神聖なる靈界の奧義の銘酊に居りて神を以て樂ましめられ且慰められるゝことあらん。

八、さりながら或時には人類の爲に哀み且嘆くものゝ如し、彼等は人間に對する靈界の愛を以て燃されて、全アダムの爲に祈禱し、涙を流して哀しまん。或時には神は喜びと愛とを以て彼等を燒きて、彼等はもし能くし得べくんば惡者を善者と區別せずして、惡くの人を其心に容れんとするに至る。或時には心神の謙遜により、何等の人の前にも己を卑うし、己を以て衆人の中の最後なる且は最小なる者と爲すに至る。或時には神は彼等をして得もいはれざる喜びを常に保たしむるなり。或時には勇猛なる兵士が王の鎧冑を被て出でゝ敵と戰ひ、これに勝たんが爲に健鬪するに似たるあり。けだし靈界の人はかくの如く、天に屬する神の武器を被、敵中に攻入りて、これと戰ひ、これを其足下に從はしめんとす。

九、或時には靈魂は一の靈神上の愉快と得もいはれざる慰安と幸福とに居りて、或る大なる沈默と穩靜と平和とに安息するなり。或時には恩寵を以て智慧付られて、或事を悟り、得もいはれざる聰慧を得、舌と口とにて語る能はざる試びべからざるの神を認識せん。或時には人は尋常なる者の一たる如くならん。かくの如く恩寵が人に於て種々樣々に作用し、神の旨に循ひ、靈魂を慰安しつゝ、多方を以てこれをみちびきて、種々にこれを練習せしむるは、完全正直にして且清潔なる靈を以て天

の父に見えしめん爲なり。

十、さて此の我等が數へ來れる神の作用は、完全に近き者に於て大なる量に達せんけだし已に數へたる多種多樣なる恩寵の慰安は種々に言明すを得べくして、人々に不斷行はるゝなり、一の作用は他の作用にしたがふによる。靈魂が悉くの情慾より全く潔きを得て、得もいはれざる親與により、搖恤者たる神と合一して神の完全に昇らんに、神を以て融和せらるゝ彼が自から神となるを賜はる時は、彼はすべて光となり、すべて目となり、すべて神となり、すべて喜となり、すべて慰安となり、すべて快樂となり、すべて愛となり、すべて憐憫となり、すべて仁慈となるべく、又善良とならん。石は海底にありて八方水に圍まるゝ如く、聖神を以て全く融和せらるゝ此人々も必ず無形なる力の德行を己れに有し、內部に於ては正直、無玷、潔白なる者となりて、ハリストスに肖んけだし神を以て、革新せられたる者はいかんして外部に惡癖の果を生せんや。反て神の果は常にすべてに於て彼等に輝かん。

十一、ゆゑに我等も神に祈願し、愛と大なる希望とを以て、彼を信認せん、彼は靈神上の賜の天に屬する恩寵を我等にもわたへ給ふべし、神が自から我等を治め導きて、神のすべての旨を成さしめ、その慰安の多樣なる方法を以て我等を安せしめん爲なり、又此の如き恩寵の統治と練習とにより、及ひ靈神上の進歩によりて、ハリストスの充滿の完全に到り達するを賜はらん爲なり、使徒のいふ如し、曰く「ハリストスの凡の充滿にみてられん爲なり」（エフェス三の十九）又いふ「成全の人となるにハリストスの全き成長の量に至るに迫ふ」（同上四の十三）凡そ主を實に信じて彼に求むる所の者には得も言はれざる靈神上の親與の奧義を賜はらんことを主は約したまへり。ゆゑに我等も己を全く主に從はしめ、前に記せる幸福を捉ふるに急き、靈魂をも身體をも彼にさゝげて、ハリストスの十字架に釘し、父と子と聖神を世々に讃榮して、永遠の國を受くるに堪ふる者とならん。アミン。

第十九　講話

大に進歩して成長せんと欲する「ハリステアニン」は己を凡の善に强ふべし、その在る所の罪より救はれて、聖神に滿てられん爲なり。

一、主に就きて、永生を賜はり、ハリストスの第宅となり、聖神に充てられて、神の果

を結び純然にして責むべきなく、パリストスの誡命を成すを得んと欲する者は、先づ第一に主を堅く信じて、其誡命の勧めに全く己を委ね、すべてに世を離るゝを以て始めざるべからず、智はすべて如何なる有形物にも占有せられざらん爲なり。また彼は信を以て主を希望して、主の恵と助とを常に待ち、いかなる時にも此の一事を其智の目的となして、不断祈禱に專ならんことを要す。其後彼はその居る所の罪の故に、もろ〳〵の舊行と主の悉くの誡命を行ふに己を強ひんことを要するなり。例へばいかなる人の前にも謙るに己を強ひ、おのれを何人よりも劣悪なる者と思ふて、人々の中誰よりも尊敬或は賞讃或は名譽を求めざること、福音經にしるせる如くして、唯一の主と其誡命とを常に眼前に有し、心の温柔を以て獨り彼に喜ばれんことを願ふべし、主の言ふ如し、曰く『我に學べ、我は心温柔にして謙遜なればなり、汝等は其靈に安息を得ん』〔マトテエイ十一の廿九〕。

二、これと同じく出來るだけ慈悲なる者となり、善良なる者となり、仁心なる者となり、善なる者となるに己れを慣らすこと主のいふ如くすべし、曰く善にして且慈なること『爾等の天の父の慈憐なるごとくすべし』〔ルカ六の三十六〕。またいふ『爾等もし我を愛さば、我が誡を守れ』〔イオアン十四の十五〕、また『力を竭して窄き門より入れ』〔ルカ十三の廿四〕。殊に主の謙遜と生活と温柔と人々と交はりしことを以て範鑑となし、これを記憶に保ちて忘れざるべし、常に信じ且求めて、祈禱を專ら務むべし、これ主の來りて彼に居りて、彼を其の悉くの誡命を行ふに全備せしめ、且これを堅めんが爲にして、主も自から彼の靈魂の住所とならん爲なり、かくの如くならば、今日任意ならざる心を強て爲す所のものは、早晩任意に爲し得べくして、堅固にして己を善に慣らし、常に主を記憶し、不断大なる愛を以て主を待たん。其時主は彼の此の如き任意と善なる勉勵とを見、又主を記憶するに己を強ふると、意に反するも己の心を善と謙遜と温柔と愛とに不断導びき、能くするだけ全く盡力してこれをみちびくを見ば、我言ふ、其時主は其恩惠を彼に施し、聖神を彼にみたして、彼を其敵と彼に居る所の罪より救ひ給はん。其時彼は最早盡力も勞もなくして主の悉くの誡命を實におこなはん、確言すれば主は自から其誡命を彼に於て行ひて、彼も其時神の果を純美に結ばん。

三、さりながら主に就く者はかくの如く先づ第一に心の望に反するも己を善に強ひ、常に疑なき信仰を以て主の憐を待つべし、もし誰か愛を有せずんば己を愛に強ふべく、もし温柔を有せずんば己を温柔に強ふべく、輕侮を忍耐すると、輕侮せら

るゝときは、大量なる者となると、脅しめ或は讒せらるゝときは、怒らざらんことに己を強ふべし、言ふあり、曰く『至愛の者よ、己の讎を復すなかれ』と（ロマ十二の十九）もし誰か靈神的祈禱を有せずんば、己を祈禱に強ふべし。かゝる場合に於ては、神は人のかくの如く奮闘し、心の望に反するも盡力して己を制馭するを見て、人に眞實なる靈神的の祈禱をわたへ、眞實なる愛と眞實なる温柔と寛大の心と、眞實なる善心とをわたへん、一言にていはゞ人の靈神上の果を充實せしめ給はん。

四、もし誰か祈禱を有せずして、祈禱の恩寵を有せんが爲にたゞ一の祈禱に己を強ふるも、温柔と、謙遜と、愛と、其他の誡命を成すに己を強ひず、これらの諸德に進歩するを慮らず、勞と盡力とを加へずんば、其任意と自由なる望とにしたがひ、其願に準じて祈禱の恩寵を或は一分與へられ、心神の慰安と喜樂を得るありといへども、品性に於ては依然として舊の如く存せん。彼は温柔を有せず、何となれば勞を尋ねず、温柔なる者となるに己れを準備せざればなり、謙遜を有せず、何となればこれを求めずして、これに己を強ひざればなり、衆人に愛を有せず、何となれば祈禱を願ふも、これが爲に自から慮らずして、盡力をあらはさゞればなり。事を勤むるにあたり神に對して信と希望を有せず、何となれば彼は己を知れり、然れども己れにこれを有せざる所以を認めず、ゆゑに主に於けるの堅き信仰と、主に對する眞實の希望とを主に索めんが爲に憂ひて勞せざればなり。

五、人はおの〳〵心の欲する所に反するも、祈禱に己を強ひ且責めんことを要する如く、希望にも、謙遜にも、愛にも、温柔、誠實及び正直にも、悉くの忍耐にも、且耐久にも己を強ふべく、錄する所の如く、喜んで（フェサロニカ前五の十六）己を強ひんことを要す、又自から己を卑うして己を以てまづしき者となし、及び末なる者と爲すに己を強ひ、また無益なる談話を一もなさずして默想し、心を以ても口を以ても常に神に屬する所のことを言ふに己を強ひ、激せず、號ばざることに己を強ふること錄していふ如くすべし、曰く『凡の苦很、悲慼、忿怒、館課、謗讟は凡の毒惡と共に汝等の中より去らるべし』（エフェス四の三十一）又品性に於てはすべて主に似ることに己れを強ひ、凡の德業と苦行と善にして美なる生活と凡そ交際に於けるの善良と凡ての温柔、謙遜と、誘らず、高ぶらず、自貧せずして、誰の事も惡しく言はざるに己れを強ひんことを要するなり。

六、大に練達なる者となりて、ハリストスに喜ばれんを願ふ者は、此のすべてのものに己を強ひんことを要す、主が此の時に於て彼の如何なる熱心と任意とを以て

凡の善良と正直と慈憐と謙遜と愛とに己を強ひ、力を出して己を奬勵するを見て、彼に己を全く賜はらん爲なり、また主が自からこれより先彼に居る所の罪の故に彼が盡力すといへども守るあたはざる所のすべてを勞と盡力となしに全く清潔眞實に成さしめん爲なり。其時德行に於けるすべての練習は、彼の爲に天性の如くなるべく、終に主は來りて彼に居り、彼も主に居りて、主は自から彼の靈果を成さしめつゝ、自己の誡命を彼に於て易すく行はしめん。されどもし人は神より賜をうけざる間己を一の祈禱に强ふるも、これと同樣前文に揭げたる他の諸の德行に己を强ひず、强て行はしめず、且慣らさゝるときは、これらの德行を純然に間然するなく、實に成就せしむるあたはざるべし。これに反して出來るだけ己れを善に準備することは祈禱と同じく肝要なり。けだし時として神の恩寵は彼の願と懇求とにより、彼に來ることあらん、何となれば神は善にして憐憫なるにより、神に願ふ者に其願ふ所のものを賜はればなり。しかれども人は前に述べたる德行を有せず、己をこれに習はさず、且準備せずんば、たとへ恩寵を受くるあらんも、受けし後これをうしなひ、高慢によりて失墜すべく、或は其與へられたる恩寵に於て進歩せず、又成長せざらん、何となれば全くの任意を以て主の誡命を行ふに己を委ねざればなり。けだし謙遜と愛と溫柔と其他の主の誡命は神の爲に居所となり、安息となるなり。

七、ゆゑに實に神を喜ばして、神より天に屬する神の恩寵を受け、聖神により成長して、成全ならんことを欲する者は、主の惡くの誡命をおこなふに己を責め且强ひて、其意に反するも、心をこれに從はしめんことを要す。言ふあり、曰く、「我爾が惡くの命を承け認めて皆之を正しと爲し、惡くの詭の途を疾む」（詩篇百十八の百二十八）或者は祈禱に大に進歩せざる間は、これを務むるに己を强ひ且責めん、これと同樣も し德行をすべて練習するに己を强ひ且責めんと欲するならば、善なる習慣に己を習はさん、かくの如くならば不斷主に願ひ、且祈りて、願ふところのものを受け、神の甘味を嘗め、聖神に與かる者となるを得て、聖神は彼の謙遜と愛と溫柔とに安息して彼にあたへたる賜を長せしめ、且花を開かしめん。

八、神は自からこれらのものを彼に賜ふて、彼に眞實なる愛と眞實なる溫柔とを敎へん。先に彼は己をこれに强ひ、これを尋ね、これが爲に苦心し且思慮したりしが、終に彼にあたへらるゝなり。かくの如くなれば彼は神に於て成長し成全なるを得て、天國の嗣となるを賜はらん、何となれば謙遜なる者は決して陷らざればなり。すべての者より下に居る者は何處にか陷るべき。高慢は大なる屈辱なり。然れども謙

は大なる卓越なり、尊敬なり、且高貴なり。ゆゑに我等も心意に反すと雖も、謙遜と温柔と愛とに己を責め且強ひ、信と望と愛とを以て不斷神に願ひ且祈りて其神を我等の心につかはし給はんことを待ち、且これを熟思せん、然る時は神と眞實とを以て神に祈り且拜することを得ん。

九、されば神はみづから我等に今盡力すといへども成す能はざる眞實の祈禱を敎へ、また寬大の心と善良とを敎へ、主の惡くの誡命を哀みなく、強ふるなうして實に行はしめ、神の自から知る如く其果を以て我等に滿たしむる所のものを敎へ給はん。かくの如く我等は獨り主の旨を知る神の神を以て神の惡くの誡命を行ひ、神が自から己に於て我等を成全にし、すべての汚穢と罪なる不潔とより清められたる我等に於て其意を達する時は、神は我等が靈魂を美なる新婦の如く、清潔にして間然するところなき者として、ハリストスにさゝげん、しからば我等も神と神の國に安息するを得て、神も我等に世々限りなく安んじ給はん。光榮は彼の宏恩と慈憐と愛とに歸す、けだし人間に如此の尊敬と榮譽とをたまひ、人々に天の父の子となるを賜ふて、彼等を己の兄弟と名づけ給へばなり。光榮は彼に世々に歸す。アミン。

第二十　講話

内部の人の眞醫たるハリストスは獨り靈魂を愈し、恩寵の衣を以てこれを飾るを得るなり。

一、もし人は神聖なる天の衣服を己れに有たず、即神の能力を己れに有たずして、いはゆる『人はハリストスの神を有たずばハリストスに屬せず』(ロマ八の九)といふ如くならば、哀んで主に祈るべし、天より與へらるゝ此の靈界の衣服を受け、これを以て神聖なる靈能をうばゝれたる靈魂に衣せんためなり、何となれば神の衣服を服せざる者は、汚辱の慾の大なる耻を以ておほはるればなり。此世に於て裸體なる者は、大なる耻と汚辱を被むるべく、裸體ならば、友は其友を避け、親戚は其親戚を避けん、子も父の裸體なるを知り、其裸體を見ざらんが爲に其目を轉せり、其目を轉じて後向に前みて父をおほへり(創世記九の廿三)、かくの如く神の衣服を充分の信認を以て服せず、主イイスハリストスを力に應じて實に衣ざる靈魂を神も避け給はん。

二、原人はおのれの裸體なるを認めて、自から耻ちたり。裸體の汚辱たることかくの如し。されば身の裸體は如此の耻に服するならば、矧んや神聖なる力を剝がれて、これをおのれに有せず、得もいはれざる不朽なる靈界の衣服、主イエスハリストを全く實に衣ざる靈魂は、更にいよ〳〵大なる耻と情慾の汚辱とを以ておほはれん。されば凡そ彼の神聖なる光榮を剝がれたる者は、アダムが裸體にありて耻ちたる如く、自から己を耻ぢて、己の汚辱を自覺せんこと肝要なり、彼は自から無花果樹の葉を編みて衣服をつくれり、しかれども己のまづしきと裸體とを自覺して耻を着たりき。ゆゑにかくの如きの靈魂はこれに衣服をあたへて、得もいはれざる光により、榮をかうむらしむるハリストに顧ふべし、而してむなしき思想によりて自から衣服を作らざるべく、又自己の正しきに眩惑せられて、おのれに救の衣ありと思はざるべし。

三、たゞに自己の正しきに礙へられて、自から己を救はんと思ふ者は、無益に徒らに勞せん。けだし自己の正しきに誇るすべての自負は、後日に至り「汚れたる衣の如くあらはるゝこと、預言者イサイヤのいふ如くならん、曰く「我等の義はことゝ〳〵く汚れたる衣のごとし」〔イサイヤ六十四の六〕。ゆゑに我等は救の衣と我等が主イエスハリストとを得もいはれざる光とを衣たる靈魂は永く脱がざらん。反つて復活に於ては眞實尊貴なる靈魂が今日猶衣る所の此光の榮を以て、彼等の身體も讃美せられん、使徒のいふ如し、曰く「ハリストを死より復活せしめし者は、爾等の中に居る所の其神を以て爾等の死すべき身をも生かさん」〔ロマ八の十一〕。光榮は彼の得もいはれざる仁心と、言ひがたき慈憐とに歸す。

四、また血漏の婦は眞に信じ、主の衣の裾に捫りて、直に愈され、不潔なる血の泉の流を涸らしたる如く、凡の靈魂も愈すべからざる罪の疵と、不潔にして惡なる意念の泉とを有しつゝ、もしハリストに來り、眞に信じて願ふならば、愈すべからざる情慾の流より救はれて、愈をうけ、彼の不潔なる意念を流す所の泉は衰へて、一のイエスの力により涸れん。さりながら此の疵をいやさんことは、他の何人にもあたはざるなり。けだし敵はアダムの犯罪により、內部の人、即神を見る所の主宰たる智を傷つけ、且暗まさんことを切に願へり。されば天の幸福の彼に到り得ざるや、敵の目は惡習と情慾との爲に既に窺ふ所あり。

五、故に人は唯一の主の外何人も愈すことの能はざる程傷はれたり。此故に主は

來りて世の罪を取れり、即心中の思の不潔なる泉を涸らせり。彼の血漏の婦は、彼を醫さんとする者等の爲に全財産を傾けて、誰よりも益をうけざりしが、其際實に主を信じて、彼に近づき、其衣の裾に捫るや、これにより直に愈を成して、血の流れは止れり。かくの如く有害なる情慾の癒すべからざる傷の爲に最初傷はれたる靈魂を、義人、列祖、預言者、族長等の中誰も能くいやす者あらざりき。

六、モイセイ來れり、しかれども完全なる愈をあたふる能はざりき。祭司、進獻什一の稅、安息日の祭、新月、洗淨、祭禮、全燔祭あり、其他悪くの義も律法によりて執行せられたり、然れども靈魂は悪念の不潔の流れよりいやし潔めらるゝあたはずして、その悪くの義は人を醫すの能力あらざりき。斯る事情の際に救世主、眞實の醫即無報にて醫し、人間に代りて贖罪の價に己を付與する者は來り給へり。彼は獨り大なる救贖と靈魂の愈を成し給へり、彼は靈魂を奴隷より脫し、自己の光を以てこれを表揚して、これを暗より引出せり、彼は靈魂において不潔なる意念の泉を涸らせり。けだしいふあり『視よや神の羔、世の罪を負ふ者』〔イオアン一の二十九〕。

七、地より取り來れる自己の療方即たゝ自己の義の行は、かくの如く見えざる靈魂の疵を療してこれをいやすあたはざるなり、たゞ天に屬する神性の力と聖神の賜とを以て、即たゝ此の一の療方を以て、人は心を聖神により清められて愈をうけ、生命に達するを得べし。さりながら彼處に於て婦はいやさるゝあたはず、傷つけられし者となりて存したれど、主に來るが爲來りて愈をうくるがために足を有したりき。これと同じく彼の誓者も見えざる故に主に來り就くあたはざりしといへども、報知者よりもなほ速に傳達すべき聲を送れり、けだしいへり『ダヴィドの子我を憐め』〔マルコ十の四十七〕と、かくの如く信せしにより、主が來りて視力を得しむるや、彼は愈をうけたり。かくの如く靈魂も耻づべき情慾の疵の爲に傷はれしと雖も、罪の暗黑の爲に盲まされしといへども、イイスの來りて靈魂に永遠の救を施さんが爲に、彼に呼んで其助を請ふの自由を有するなり。

八、かの替者はもし呼ばざりしならば、また彼の血漏の婦ももし主に來り就かざりしならば、愈をうけざりしならん、かくの如く人も自己の自由により、まつたくの任意を以て主に就かず、疑なき信を以て彼に懇求するあらずんば、愈をうけざらん。けだし彼等は信じて直に愈されたれど、我等は未だ實に視覺を得ずして、暗黑の慾よりいやされざるは何故なるか。然れども主は身體よりも不死なる靈魂の爲には多く慮るを爲す。もし靈魂は視覺を得ること『我が目を啓き給へ』〔聖詠百十八の十八〕

といひし者の言の如くなるを得ば、最早生涯盲目となることあらざるべく、すでに愈されてふたゝび偽つけらるゝことあらざらん。もし主は地上に來りて、朽つべき身體のために慮りしならば、矧んや己の像によりて造り給ひし不死なる靈魂の爲に慮らざらんや。さりながら我等が不信のため、我等が意見の異なるため、全心より彼を愛せずして、實に彼を信せざるために、我等は靈神上の愈と救とを未だうけざるなり。ゆゑに我等は彼を信じて、實に彼に就かん、眞實なる愈を速に我等に成し給はんが爲なり。けだし『求むる者に聖神』を與へ（ルカ十一の十三）叩く者に門を啓き、尋ぬる者に遇はんことを約し（マトフェイ七の七）而して約し給ひし者は誠なきなり（ティト一の二）彼に光榮と權柄は世々に歸す。アミン。

第二十一　講話

「ハリステアニン」には二樣の戰あり、即內部と外部の戰ありて、外部なる者は世の欝散より己を遠ざくるにあり、されど內部の戰は凶惡の諸神を以て暗に入れらる

る意念と心中に於て戰ふにあり。

一、眞に神の意を悅ばして、これと反對なる凶惡の一方を誠に憎まんと欲する者は、二樣の苦行と奮鬪とを以て戰をなさんことを要す、即此世の見ゆる事に於ては、地に屬するの欝散と、浮世の關係に對する愛情と罪なる情慾とより離れ遠ざかるにありて、神秘にして知るべからざる事に於ては、凶惡の諸神と鬪ふにあり、此の事を使徒は左の如くいへり、曰く『我等が戰は血肉に於てするに非ずして、首領に於て、權柄に於てし、此世の暗昧の世君に於てし、天空にある凶惡の諸神に於てするなり』（エフェス、六の十二）。

二、人は誡命を破りて、樂園より逐はれたれば、二樣の狀態と二種の鎖鎖を以て縛らる、即此世に於ては浮世の事物と世に對するの愛情を以て縛らる、即肉體の快樂及び情慾と、富及び榮譽と財產と妻と子と親戚と鄉國と、土地及び衣服とに於るの愛を以て、一言にていへば、すべて有形物に於けるの愛を以て縛らるゝなり。神の言が自己の自由なる任意により（けだしおの〳〵自願によりてすべての有形物の爲に縛らるればなり）これより脫すべきを命ずるは、人此のすべてのものより己を脫し、自由になりて、誡命の完全なる執行者となるを得んためなり、しかして凶惡の諸

神は靈魂を窮に圍み、溝を繞らし、壓迫し、暗黒の鎖を以てこれを縛す、故に我等は幾ばく願へども、主を愛するあたはず、幾ばく願へども、信ずる能はず、幾ばく願へども、祈禱するあたはず、何となれば初人の犯罪より以來、抵抗は陽にも陰にもすべてに於て我等を占領すればなり。

三、故に人は神の言をきゝて苦行に着手し、浮世の事物と世間の關係を己より斥け、もろ〳〵肉體の快樂を避けて、これより脱するときは、堅固にして意を主に向はしめて、心中に他の爭鬪と他の秘密なる抵抗と他の凶惡の諸神よりする意念の戰のあるを探知するを得べく、他の苦行の來りて其前にあるを探知するを得べし。かくの如くして疑なき信仰と、大なる忍耐とを以て、不斷主を呼んで、主より助を待たば、猶此世に於ても凶惡の諸神の鎖と網と障碍と暗黒とより、即秘密なる情慾の働より免れて、内部の自由をうくるを得ん。

四、たゞ此戰は神の恩寵と能力とを以て滅せらるべし、何となれば人は自から己を抵抗と、意念の飄蕩と、見えざる情慾と惡者の奸計とより救ふ能はざればなり。もし誰か此世に於て有形物體につながれ、種々樣々なる地上の鎖を以て己を縛り、惡害なる情慾を以て誘はるゝならば、彼は己の内部に他の戰と打擊と評論のある

を認識せざるべし。ゆゑにもし人は盡力して此等の有形なる世の鏈鎖と、物質的煩慮と、肉體の快樂とより己をうばふて、自由ならしめ、己を此世より遠ざけて、主に堅く附くを、始め、後に至りても内部に感起する情慾の戰と、内部の爭と、奸惡なる意念とを認識するを得るあらば、幸なる哉、然れども、もし我等が先にいひし如く、力を盡して世を避けず、心を盡して地上の欲望より脱せず、主に全く附くを願はずんば、秘密なる凶惡の諸神と隱晦惡毒なる情慾の欺騙とを認めずして、こは自己には關係なきものとして存せん、何となればその諸の傷は彼の爲に知られずして、有形物に繋がれ、此世の諸慮に膠着すればなり。

五、然れども誰か實に世を避け、苦戰して、地上の軛を己より振落し、空しき慾望と肉體の快樂と榮譽と、人に長たるとより脱して、己を自由にし、心を盡して、これより遠ざかる者あらんには、主は此の顯然たる苦行に於て世に意を絶つに準じ、隱に彼に助くるあり、彼も自から體を以ても靈を以ても全く確立し、堅固にして主に勤むるに專なる時は、彼は抵抗と、隱晦なる情慾と、見えざる鏈鎖と、神秘なる戰と、隱晦なる格鬪と、隱晦なる苦行とを自己の中に發見せん。かくの如くなれば主に願ふて、福なる使徒が數へたる靈界の武器即義の鎧、救の冑、信の盾及び神の劒

（エフェス六の十四―十七）を天よりうけ、これを以て己を具ふ、惡魔の設くる奸計秘策に抵抗するを得ん、又祈禱と忍耐と請願と禁食とを以て、殊に信仰を以て、此等の武器をおのれに求め得て、首領權柄及び世君と交戰格鬪するを得ん。かくの如くなれば神の助けにより、又すべての德行に於ける自己の勉勵により、反對の力に克ちて、父と子と聖神を讃頌し、永生をうくるに堪ふる者とならん、彼に光榮と權柄は世々に歸す。アミン。

第二十二　講話

此の生命を去る者の二樣の狀態。

人の靈魂の體より出るや、此の時に或る大なる秘事は成らん。けだしもし靈魂は罪を犯せしならば、魔鬼の群來り、不善の使と暗黑の力とは彼をうけて、自己の權中に取去らん。誰もこれを怪む可らず、何となれば靈魂は此の生命に於て此世にありてさへ彼等に屬し、從順にして彼等の僕となりたれば、まして世を逝るときは、彼等の爲に止められて、其權中に在らん。しかれども善なるものに至りては、事は左の如くなりと想ふべし。神の聖なる諸僕の傍には、今もなほ天使等居りて、其聖なる諸神はこれを繞り且護る。されば體より出去るときは、天使の諸隊は靈魂を自己の權中に清き世にうけ、かくて彼等をみちびきて主に至らん。

第二十三　講話

高價なる王の眞珠は王種より生れたる者のみ戴くを得る如く、天の眞珠も神の子にのみ戴かしむるを得べし。

一、王冠に箱入らるゝ大粒にして高價なる王の眞珠は、たゞ王にのみ屬す、ゆゑに王は獨り此眞珠を戴くを得れども、他人には如此の眞珠を戴くをゆるされざるなり。かくの如くもし誰か王たる神の神によりて生れず、天に屬する王の族とならず、『かれを受くる者には神の子となる權を賜へり』（イオアン一の十二）といへる如く、神の子とならずんば、彼は王の子とならざるにより、天に屬する高價なる眞珠と此の光の狀と得もいはれざる光とを戴く能はず、即主を戴くあたはざるべし、何となれ

ば此眞珠を領有して、これを戴く者は生きてハリストスと共に居りて、永遠に王たらんとすればなり。此故に使徒は左の如くいへり、曰く「我等は土に屬する者の狀を衣たる如く、亦天に屬する者の狀を衣ん」（コリンフ前十五の四十九）。

二、馬は野獸と共に林中に牧せらるゝ間は、人に順はざらん。然れども彼は捕へらるゝや、順序正しく眞直に行くを習ふに至る迄は、かれを鎭むる爲に重き勒轡を彼に掛けん。其後老練なる騎士は戰に堪ふるものとなさん爲に彼を練習せしむべし。其時彼に馬具、即胸甲と面頰とを被せん、然れども直に彼の目前に於て以前の勒轡を掛けて、震慄せしむるは、彼れの慣れて驚かざらん爲なり。されば、かくの如く騎士を以て教へらるゝ彼は、もし馴熟するあらずんば、戰爭に臨む能はざるべし。されども馴熟して戰に慣るゝならば、寢ねて戰聲をきくや、直に敵に向つて馳突せんとす。ゆゑに其嘶聲は敵をして戰慄せしむるなり。

三、靈魂もこれにおなじ、犯罪の時より以來荒れて從順ならざるものとなり、世の曠野に於て猛獸と親近し、即凶惡の諸神と親近して、罪に助くるを續けつゝあるなり。然れども神の言をきゝて、確信する時は神を以て勒され、騎士たるハリストスを以て御さるゝ彼は、荒き品性と凶惡の智慧とを除かん。其後彼を試んが爲に必要なる憂愁と鎭壓と困乏とを生せしむるは。彼に於て罪の漸々衰へ且滅ぶるに乘じて神は漸々に彼を和げん爲なり。かくの如くして、義の甲と救の冑と信の盾とを衣せられたる靈魂は、これと併て靈神上の劒をもうけて、敵と戰を作すを學ぶべく、而して神の神を以て武裝せられたる彼は、凶惡の諸神と戰ふて、惡敵の火箭を熄さんしかれども靈神上の武器なくんば、開戰せざるなり、されども主の武器を有するならば、烈しき戰を僅に開き且感ずるや、直に躍り且嘶きて出づること、イオフの言ふ如くならん（イオフ三十九の二十五）けだしその祈禱の聲によりて諸敵は倒れん。されば如此の苦行を成し、神の助を以て戰に勝を占め、大なる勇氣を以て勝利の冠をうけて、天の王と共に安息するを得ん、彼に光榮と權柄は世々に。アミン。

第二十四　講話

「ハリステアニン」の狀態は賣買と醱酵に似たるあり。商賈は地上の利益を集むる如く「ハリステアニン」も此世に散亂したる思念を集めん。また醱酵はすべての混合

物を酸氣あるものとする如く、罪なる酸酵もアダムの全族に透る、然れどもハリストスは天に屬する恩寵の酸酵を篤信なる靈魂に入るゝなり。

一、「ハリステアニン」は貿易によりて多大の利益を獲る商賈に似たるあり。商賈は地上の利益を地より集むる如く、「ハリステアニン」も此世に散亂したる心の思念を悉くの德行と神の力とを以て全地よりあつめむとす。こは最重要にして眞實なる貿易なり、何となれば此の世界は上なる世界に反對し、此世は上なる世に抵抗すればなり。ゆゑに「ハリステアニン」は聖書に言ふ如く世を避けて、アダムの犯罪より以來、智が溺沒して捕捉せらるゝ此世より智を以て他の世に移住し、思を以て上なる神性の世界に居らんことを要するなり、錄していふ如し、『我等の居處は天に在り』（フィリピ三の二十）

二、然れどもし靈魂は此世を棄て、心を盡して主に信任せず、神の神の力は全地に散亂したる心を主を愛するに集中して、思を永遠の世界に移住せしめずんば、如何なる方法を以ても此事に進歩を見るあたはざるべし、何となればアダムの犯罪の時より心の思念は、神を愛するより引裂かれて、此の世に散亂し、物質的なる地上の思念と混じたればなり。さりながら誡命を犯したるアダムは大害なる情慾の酸酵を己にうけし如く、アダムより生れたる者も、又其全族も、遺傳によりて此の酸酵に分ある者となれり、然して漸々の進歩と成長とにより、罪なる情慾は最早人類に增殖蔓延して、姦淫、放蕩、拜偶像、殺人、又は其他の旨味なる行を爲して、全人類を惡習を以て酸化する迄に至れり。惡は人類に成長して、神なしと思はしめ、不活無靈の石を拜して、神の概念を己れに組織するさへ全くあたはざるに至らしめたり。毒惡なる情慾の酸酵は舊きアダムの族を酸化して、如此の度に至らしめたり。

三、さりながら主はみづから來りて、萬民の爲に苦をうけ、己の血を以て萬民を贖ひて、罪に辱しめられたる篤信なる靈魂に天に屬する仁慈の酸酵を入るゝをよみんじ、かくの如くして彼等の進歩と成長とにより、誡命の悉くの義と悉くの德行を最早彼等に於て成就せしめ、彼等一となりて善に酸酵し、パウェルのいふ如く、『主と一神となる』に至れり（コリンフ前六の十七）。されば惡癖と詭詐とは神の神を以て全く酸酵せられたる靈魂の思にさへ最早生ずるあたはざること、錄していへる如くなるべし、曰く『愛は惡を念はず云々』（コリンフ前十三の六）。然れども天の酸酵なく、即神

の神の力なくんば、靈魂は主の仁慈をうけて生命に達することあたはざるべし、これ猶アダムの族にも、もし豫め惡習の酸酵、即罪が入らざりしならば、即此の慈點にして妄想なるサタナの力が入らざりしならば、惡習と詭詐とに迷入りて如此の度迄に至るあたはざる如し。

四、もし誰か粉を鎔解すれども、酵を入れずんば、見たる所は生粉を煉るにいくばく盡力し、いくばく勞すとも、酸酵せずして、食用とならざらん、然れども酵を入るゝときは、粉のすべて混和したるものを自から誘引して、すべては酸酵せん、されば主はこれを天國に擬へていへり『天國は酵の如し、婦これを取りて三斗の粉の中に納れしに、惡く酸酵するに至れり』（マトフェイ十三の三十三）或は又肉の如し、もし誰かこれにすべての注意を加ふるも、蟲を殺し臭氣を消すべき鹽をこれに撒らずんば、惡臭を發し、腐敗して、人々の食用とならざらん、これと同樣すべての人間も肉又は酸酵せざる生粉に彷彿たるを想ふべし、他の世よりする鹽及び酵は是即聖神の神聖なる性なりと知るべし。ゆゑにもし辱められたる人性にも、彼の世と彼の生國よりする天に屬する神の酵と同く亦神性の善にして聖なる鹽とを入れてこれを混和するあらずんば、靈魂は惡習の氣を脫せずして、姦詐の重きと無酵との故に酸酵せざらんとす。

五、然れども靈魂はたゞ自己の力に依賴し、神の共助なしに自から事を完全に至らしむるを得べしと思ふて、見たる所は、自から何事をか爲し、自から何事をか企てゝ、これを成すに勉勵を加ふるならば、大に誤れり、何となれば神なくしてたゞ自から己の力を以て、完全なる清潔に大に進歩せんと欲する靈魂は、天の第宅の爲に要なく、天國の爲に要なきものなればなり。それ情慾の勢力の下に居る人は、世を棄つるも、神に就かず、己の性の爲に或る非常の幸福たる聖神の力をうくべきを希望と忍耐とを以て信用せず、神聖なる生命を上より主によりて靈魂に注がれずんば、彼は眞實の生命を感ぜざるべく、物質的の醉より醒めざるべく、神の光輝は昏まされたる靈魂に光り始めざるべく聖なる日は彼に照らずして、彼は神の力と恩寵の働きを以て實に神を認識せんが爲に甚深なる無知の眠より覺醒するあらざらん。

六、けだし人は信仰によりて恩寵をうくるを賜はらずんば、神の國のために要なく、且はこれに堪へざるなり。これに反して誰か神の恩寵をうけて、何事にもいざなはれず、怠慢と惡行とを以て恩寵をはづかしめず、かくて久しく力戰して、神を大に怒らしめずんば、彼は永生を捉ふるを得ん。或者は情慾に於る凶惡の働を己れに覺

ゆるあらん、例へば忿激、肉慾、嫉妬、苦悶、奸惡なる意念及び其他の不相當を己れに覺ゆるあらん、かくの如く人は德行に於るの恩寵と、神聖なる力とを感せんを要す、即愛と寛忍と仁慈と喜悅と快活と神聖なる喜びに於る恩寵と神聖なる力とを感せんこと肝要なり、善にして神聖なる性に匹似するを得て、善にして聖なる恩寵の作用を以て銘解せらるゝを得んためなり。されば時と年とを經ると共に進歩と成長とに準じて、練達なるものと認めらるゝ自由なる任意は、もし常に恩寵と合一して、その悅ぶ所とならば、進歩にしたがひて全く神的なるものとならん、されば神がこれを以て聖なる清潔なるものと爲すときは、天國をうくるに當るものとならん、光榮と叩拜は至淨なる父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第二十五　講話

此講話は、ハリストスを以て固められずんば、一人も惡者の誘に勝ち得べからざるを敎へ、神聖なる光榮を願ふ者の爲すべき所を示す、またアダムの破誡により肉慾の奴隷に陷りし我等は洗禮の機密を以て救はるべきを敎へ、終に涙と神聖なる火の力の大なるを示す。

一、神聖なる法を墨汁と文字を以て描さるゝにあらずして、肉に包まれたる心にこれを植付られたる者は、光照せられたる智慧の眼を有すべし、五感に屬する有形物の爲に勵まさるゝにあらず、無形なる心中の希望を以てはげまされて、惡者の誘惑に勝つを得ん、しかれどもたゝ勝たれざる力を以てするなり。これに反して神の言を以て飾られず、神聖なる法を以て敎習せられざる者は、徒に高慢し、十字架の唯一の機密を以てのみ罰せらるべき罪の緣由を自己固有の自由を以て己より除かんを思ふ。人の爲に能くする自由は、惡魔に抵抗するが爲に伸びん、然れどもこれを能くするにより必ず情慾の上にも權を有するには非るなり。けだしいふあり『もし主は家を造らずば造る者徒に勞す』(聖詠百二十六の一)。

二、人の爲に能くする丈預め己を潔めず、又使徒等に左の如く告げし者を以て强固にせられざる者は、毒蛇と蜥蜴とを踏み、獅子と大蛇とを蹂躪するあたはざるべし、曰く『視よ我爾等に蛇蠍及び惡くの敵の能を踐む權を與ふ』(ルカ十の十九)これに

反して、もし人性は聖神の全き武備なくしても魔鬼の姦計に抗するを得ば、使徒は左の如くいはざりしならん『平安の神は速にサタナを汝等の足下に倒さん』〔ロマ十六の二十〕またいふ『主は己の口の氣を以て彼を殺さん』〔フェサロニカ後二の八〕ゆゑに左の如く主に願ふべきを我等に命せられたり、曰く『我等を誘に導びかず、猶我等を凶惡より救ひ給へ』〔マトフェイ六の十三〕けだし至上なる助を以て惡者の火箭より救はれて、子となることを賜はらずんば、神の能力より遠く離るゝものとして徒に勞せん。

三、ゆゑに神聖なる光榮に分あるものとなり、ハリストスの狀を己が靈魂の主宰力によりて見ること、鏡によりて見る如くならんを欲する者は、飽かざる愛と、滿たざる望とを以て、心を盡し、力を盡して、晝夜神の全能の助を求めんことを要す、されども人は、先にいひし如く、世の嗜慾と、反對なる力を望むの慾望とを預め制止せずんば、此を受くる能はざるべし、この反對なる力は光に遠ざかるものにして、善良なる働に敵對し、これより全く離れたる姦惡なる働き是なり。故に貪婪に造られて樂園に移住せしめられたる我等が後に至り大に清潔なる光榮をうばゝれて、無言なる畜類に並べられ、これと比せられたるの何故なるを探知せんと欲せば、知るべし

我等は不順悖逆によりて肉慾の奴隷となり、生命ある者の福樂の方位より自から己を放逐し、囚虜となりて、ワビロンの河邊に猶坐することを、又我等は埃及に猶抑留せらるゝにより、乳と蜜との流るゝ約地を闕かず、貞潔の酵を以て未だ鎔解せられずして、今に至るまで姦惡の酵の中に在留することを。我等が心は未だ神の血を以て洒がれず、何となれば地獄の底も〔箴言八の十九〕刺込まれたる凶惡の釣針も猶存するによるなり。

四、ハリストスの救なる喜びを我等はいまだ感受せず、何となれば死の刺は我等の中に猶深く入りたればなり『神に循ひて造られし新なる人』を我等は未だ衣ず、何となれば『惑を爲す慾の中に朽つる舊き人』を脱がざれはなり〔エフェス四の廿二、廿四〕。天に在る者の狀をいまだ己れに着ずして、其光榮に相應する者とならざるなり。我等はいまだ神と眞とを以て神を拜せず、何となれば罪は我等の死すべき體に王たればなり、我等は不朽なる者の光榮を未だ見ず、何となればいまだ夜の暗黑の勢力の下に在ればなり。我等は光の武器をいまだ着ず、何となれば暗黑の武器と矢と行とを己より脱がざればなり。我等はいまだ智を新にして變化せず、何となれば智の浮誇によりて此世に準ずればなり。我等はいまだハリストスと同じく頌讃せられ

す、何となれば彼と共に苦をうけざればなり。我等はハリストスの十字架の機密に居りてはハリストスの傷を己の體に未だかうむらず、何となれば肉情と肉慾の中にあればなり、我等はいまだハリストスと同じく闘ぐ者とならず、何となれば我等に猶居るは、奴たる神にして、子たる神にあらざればなり。我等はいまだ神の殿又は聖神の第宅とならず、何となれば今に至る迄情慾に赴くにより、我等は偶像の殿たり、凶悪なる諸神の居所たればなり。

五、實に我等は品性の正直と才智の光明とを未だ有せざるなり、詐らずして辨才ある乳と思想の成長とを未だ賜はらざるなり。日はいまだ我等を照さずして、晨星は我等の心に光り始めざるなり。我等は義の太陽に未だ透徹せられずして、其光線は我等を輝かさゞるなり、我等は主の像似を未だ己にうけずして、神聖なる性に分あるものとならざるなり。我等は未だ擬製ならざる王の紫袞衣とならず、眞實なる神の狀とならざるなり。我等は未だ神聖なる服從の感に刺されず、新郎に對する神的の愛に打たれざるなり。我等は未だ得もいはれざる親與を認識せず、聖物に於て能力と平安とを瞭解せざるなり。此をすべて合併して言顯さんに、我等は選ばれたる族にあらず、王たる司祭班にあらず、聖なる民にあらず、維新の人にあらず（ペトロ

前二の九）何となれば我等は蛇たり、蝮の類たればなり（マトフェイ三の七）。

六、我等は神に從順なる者とならずして、蛇に暗示せられたる悖逆に居るときは、いかんして我等は蛇にあらざるか。ゆゑに此の時に於て我が爲に不幸をいかに哭すべきか、余は未だこれを發見せざるなり。我に定住する所の誘惑を我より逐ふを能くする者に我は涙を以て如何に呼ぶべきか、未だこれを知らざるなり。異邦の地にありていかんして主の歌を歌はん（聖詠百三十六の四）いかんしてイエルサリムを哭せん。いかんしてファラオンの苦役を逃れん。いかんして耻づべき移住地を棄てん。いかんして背虐を避けん。いかんして埃及の地より出でん。いかんして紅海を渡らん。いかんして大なる曠野を過ぎん。蛇に嚙まれたる我はいかんして亡びざらん。いかんして異族人に勝たん。いかんして異邦民を己れの中に殘さん。いかんして神聖なる法律の言を己の石版にうけん。いかんして眞實なる光柱と聖神の雲柱とを見ん。いかんして永遠なる慰安の「マンナ」を以て樂しまん。いかんして生活を施す石より水を飲まん。いかんして聖なる約地に入りて、イオルダンを渡らん。いかして

イイスス　ナワィンが見て、瞬間に面を俯して拜したる（イイスス　ナワィン五の十四）主の軍將を仰ぎ觀ん。

七、もし此のすべての時に異邦民を己の中に殘さずんば、入りて神の聖所に安息せじ、王の光榮に與かる者とならざらん。ゆゑに非難し得ざる神の子となりて、「ハリストスが我等の爲に前驅として入りたまへる」（エウレイ六の二十）彼の平安の處に入らんことを盡力すべし。汝は至上者の威稜の右に居るを得ん爲に、家子等と共に天の教會にしるさるゝ者とならんことを盡力すべし。聖なる都城、平安なる天のエルサリムに入らんことを盡力すべし、彼處には樂園ありけだし此等の慰くべき有福の觀玩を賜はるは、他にあらず、たゞ晝夜涙を流すこと左の如く言ひし者の如くするにあり、曰く『毎夜我が榻を漂ひ、我が涙にて我の褥を濡す』と（聖詠六の七）又汝が知らずんばあるべからざるものは『涙を以て播く者は喜を以て穫らん』といふことなり（聖詠百二十五の五）。故に預言者は敢ていふ、『我が涙に默すなかれ』と（聖詠三十八の十三）、また いふ、『我が涙を汝の器に納れよ、是れ爾の書に錄せるに非ずや』（同五十五の九）、又他の所にもいふ、『我が飲物に涙を和ふ』（同上百〇一の十八）。

八、眞實を認識するにより、內部の燃ゆると共に、大なる憂と中心の切なるより實に淋ぎ來れる涙は、是れ天の餅によりてあたへらるゝ靈魂の食物にして、マリヤが主の足下に坐し、泣て特別にうけし所のものなることは、救世主の證する如し。けだし主はいへり、『マリヤは善き分を擇びたり、是は彼より奪ふべからず』（ルカ十の四十二）。汝これ有福の涙を注ぎたるいかなる高價の眞珠なるか、吁、これいかに正しく且從順なる耳なるか。いかに勇氣なる且賢明なる智なるか。主の神を以ていかに貫徹せられて、至潔なる新郎にかくの如く强く引かるゝ、何等の愛なるか。神言に心の進む向するいかなる銳利の刀なるか。新婦と天の新郎の共にする如何なる密着の親與なるか。

九、子よ、マリヤに法るべし、他の何物にも目を注けず、たゞ左の如くいひし者を望見て彼に法るべし、曰く『我火を地に投せん爲に來れり、此の火の已に燃えんことを我望むこと幾何ぞ』（ルカ十二の四十九）。けだし神の燃ゆるは心を復活するなり。非物體なる神聖なる火の靈魂を照して、これを試むるは、純金の坩堝の中にある如し、されど惡習を燒滅すは荊棘と稿の如くならん、何となれば『神は燬き盡す火なればなり』（エウレイ十二の廿九）、彼は火篠を以て、彼を識らざる者、及び彼の福音に服はざる者に報を與ふ』（フェサロニカ後一の八）。此火は使徒等が火の如き舌を以て言ひ始むるや、彼等に於て働けり。此火は聲を以てパウェルを衰照して、其智力を回復したれど、其視覺を暗ませりけだし彼は此光の勢力を肉體によらずして見たるにあらざり

き。此火をモイセイは荊棘の中に見たり。此火は車輪の狀を以て、イリヤを地より取り去れり。此火の靈驗ならんことを求めて、福なるダワイドはいへり、曰く『主よ我を試み我を驗せ、我が腹と我が心とを融し給へ』(聖詠廿五の二)。

十、此火は救世主が復活したる後クレオパ及び其同道者と言ひし時は彼等の心を煖めたり。天使等も奉事の神も此火の光明にあづかること、錄していへる如し。『爾は其使者を以て風となし、其役者を以て火燄と爲す』(エウレイ一の七)。此火が內部の目にある物質を燒きて、才智を淸潔なるものと爲すは、其天性の聰明を回復して不斷に神の奇跡を見ること錄して言へる如くならん爲なり、曰く『我が目を啓き給へ、然せば我爾が法律の奇蹟を視ん』(聖詠百十八の十八)。故に此火は魔鬼を逐ひ、罪を滅す、彼は復活の力なり、不死の勢力なり、聖なる靈魂を光照し、聰明なる力を固む。此火の我等にも觸るゝことを祈らん、其時は不斷光の中を行くべく、小なる事にも其足は石に躓かずして、世界に現れたる發光體の如く、永生の言をおのれに保有せん、されば神の幸福を樂み、父と子と聖神を讃揚して主と共に生命に安息せん。彼に光榮は世々に歸す。アミン。

第二十六　講話

不死なる靈魂の價値、貴重、能力及び作用の事、彼がサタナに試みられ誘惑より救はるゝこと。此講話には最敎訓となるべき若干の問答を添へたり。

一、至愛者よ、靈魂の聰明なる本質を研鑽せよ、淺からず研鑽せよ。不死の靈魂は貴重なる器なり。視よ、天と地は大なるも、神が憐を垂れ給ひしは、彼等にあらずしてたゞ汝にあり。己の價値と尊貴とを見よ、何となれば主が使者をつかはさず、汝の爲に仲保者となりて自から來り給ひしは、亡びたる者、傷けられたる者を呼び、淸潔なるアダムの元始の狀態を汝に恢復せん爲なるにより。人は天より始めて下にある所の者に至る迄、一切のものゝ主人たり、情慾を辨ふるを能くし、魔鬼に遠ざかり、罪又は惡習より潔まりて、神に肖たるものなりしが、犯罪の爲に亡び、傷つけられて死する者となりき。サタナは人の才智を昧ませり。されば或點に於ては人は實に死せり、しかれども他の點に於て生活し、思慮し、自由を有するなり。

二、問、聖神の來るにより罪と共に天然の肉慾も根を絶たるゝか。

答、罪も根を絶たれ人も清潔なるアダムの元始の狀態を受くべきことを余は先にいへり。人は神の力を以て靈神上更生の結果により、第一のアダムの域に達すべく、彼より上にも立たん、何故なれば神尊せらるゝ者となればなり。

三、問、サタナに我等を攻擊するを許さるゝは或る程度までなるか、又は其欲する丈なるか。

答、サタナの志望はたゞハリストアニンにのみあるにあらず、偶像崇拜者にも、全世界にもあり。故にもし欲するだけ攻擊するを彼にゆるすならば、彼はあらゆるものを絶滅せん。何故なるかこれ彼の行にして、彼の望はかくの如くなるによる。しかれども陶工の器を火中に置くや、適度に爐を燃して、あまり強くせざるは、緊要の時を過ぎて燒く所の器の裂罅を生せざらん爲なり、またあまり弱くせざるは、燒透らずして無益にならざらんためなり、また金銀の器を製する者も、火を相應に置かん、されどもし火を強くするときは、金及び銀を鎔解し、流動體となりて、消え失せん、且それ人間の才智は重量の物を以て荷を負ふ家畜或は駱駝或は其の他の動物の力と平均せしむるを識りて、重きを運搬せしむべし、まして人間の堅さを知る神は反對なる力に種々の度に於て働くを許容するなり。

四、一地は同一なれども、硬き所あり、肥たる所あり、或地所は葡萄を植うるに適すれど、或る地所は麥及び大麥を播くに適せん、かくの如く人の心も、任意も種々樣々なれば、それに應じて才能も上より與へらるゝなり、一者には傳道の勤をあたへられ、他者には思考する才能をあたへられ、また或者には病を愈す才能をあたへらるゝなり。神はその與ふる所のものを人のいかに使用し得べきを知り、それに應じて種々の才能をあたへ給ふ。然して戰に於てもこれに同じ、反對の力には人のうけて戰に堪へ得る丈人々に働くことを許さるゝなり。

五、問、神聖なる力をおのれにうけて、變化したる者も、其天性の幾分は殘るか。

答、恩寵をうけし後、自由がいづれに傾き、何と融合するを試みられん爲に、天性は同じく存し置かるゝなり。されば粗き人には其粗きを存し置かれ、輕き人には其輕きを存し置かるゝなり。また或る愚者も靈智が神的に更生せられ、變じて聰明なる者となりてかくれたる奥義が彼の爲に明顯なるを致すことあり、然れども天性によれば彼は愚者なり。或者は天性によれば粗き者たるも、己の自由を敬虔に附與して神はこれをうけ給ふ、然して天性は其粗きを存すれど、神はかれを憐み給ふ。或者

は温厚、謙遜、善良にして己を神にさゝぐされば主はかれをうけ給ふ。然れども善なる行に止まらずんば、主はかれを憐みたまはざらん、何となればすべてアメムの天性は善にも惡にも傾き易くして惡に感ずれども、欲するならば、惡を爲さゞることを得べければなり。

六、不忘小冊は種々に背き滿たされ、汝が欲する所のものをこれに書き留めて、其後再び拭ひ去らん、何となれば不忘小冊はすべて書留むるものをおのれにうくればなり、かくの如く粗き人も己の意旨を神に附し、善に變ずれば、神にうけられん、何となれば神は其憐みをあらはさんと欲して、惡くの人とすべての任意とをうくればなり。使徒等は何の邑に入りしも、其處に若干の時日を送りて、或る苦む者を愈したれど、他をばいやさゞりき。使徒等はみづから惡くの死者を活かし、惡くの苦む者を健全なる者となさんことを願へり、然れども其願は充分に成らざりき。けだし願ふ所のものをすべて爲すことを彼等にあたへられざればなり。これと同じくパウルも邑宰の爲に拘留せらるゝや、もし彼と共にしたる恩寵が彼を憐みしならば、彼は己れの撫恤者を有せる人なるにより、邑宰をも城壁をも挫折せしならん、然れども使徒は『筐を以て縋り下されたりき』『コリンフ後十一の三十二』然らば彼と共に居る所の神聖なる力は何處にあるか。これ神の照覽により成りしにて、或時には使徒等休徵と奇跡とをおこなひしかど、或時には無力なる者とあらはれたるは、これ此に因りて信者と不信者とに於ける信仰の區別の明亮とならん爲、人の自由の試みられん爲、及び使徒等の無力によりて或者は誘はるゝにあらざるか顯然としてあらはれん爲なり。これに反してもし使徒等は願ふ所のものをすべて爲したらんには、其休徵と任意とを以て人々を敬神に固むること、或る强制力を以てする如くにして、信の爲にも不信の爲にも最早餘地あらざるべし。されば ハリストスの教は礎石にして又躓の石なり。

七、サタナはイオフを與へられんことを如何樣に願ひたるか、イオフの事につきて記せる所のものは單純にあらず、何となれば許可なくしては自から何も爲すあたはざりしによる。さて魔鬼は主に何事をいひしや。彼を我手にあたへよ、然らば汝の面にむかひて汝を祝せんやといへり（イオフ一の十一）かくの如く今もイオフは同じく、神も同じく、魔鬼も同じ。イオフが己れに神の助のあるを知り、恩寵によりて熱心なる燃ゆるが如くなるものとなれる時にサタナは彼をおのれに願ひ主につげていへり、汝彼に助け、彼を防護するにより、汝に事ふるなり。彼をすべて我に與へ

よ』『然らば汝の面にむかひて祝せんや』といへり。終に靈魂が自ずから安慰し、恩寵がかれより離るゝによりて、靈魂は試惑にわたさるゝものゝ如し。ゆゑに魔鬼は來りて、これに千百の災難を被らしめ、失望、落膽、惡念を以て靈魂を挫折するは彼を弱らして、神を望むより遠ざからしめんためなり。

八、しかれども善智なる靈魂は艱難においても、憂愁においても、望を失はず、領する所のものを主治し、如何なる事をかうむらんも、千百の試惑の中にありて、すべてを忍耐していはん『たとへ死すとも彼を楽てず』と。さらば其時に人は終に至る迄忍耐するならば、主はサタナと爭論していはん『視よ汝は幾ばくの惡害憂愁を彼にかうむらしむるも、彼は汝にしたがはずして、我に事へ、我を畏る』と。其時魔鬼は辱しめられて、最早何も言ふことあたはざるべし。けだしもしサタナはイオブの事を知りしならば、彼をおのれに願はざりしならん。辱をうけざらんためなり。かくの如く今もサタナは患難と誘惑とを忍耐する者のために辱しめられ、何に於ても成功せざりしを悔いん。けだし主は彼に左の如く告げんとす『視よ彼を汝の望にまかせたり、彼を誘ふを汝にゆるせり、されど汝何を爲し得たるか、彼は何に於て汝にしたがひしか』と。

九、問、サタナは人の惡くの思念と意向とを知るか。

答、人は人と交際して、人に關係するところのものを知り、汝も二十年生活して、汝の近者に關係するところのものを知るならば、汝が生れし以來、汝の側にあるサタナは最早六千年を經たるものなるに、豈汝等の思念を知らざらんや。彼は人を試むる先に人の何を爲さんとするを知るとは我等言はざらん。誘惑者は誘惑すれども、靈魂が己の自由を奴役に服せしむるに至る迄は、したがふか或はしたがはざるかを彼は知らざるなり。また魔鬼は惡くの思念と心の願とを知るとは我等いはざらん。それ樹は多くの枝と多くの節とを有す、かくの如くサタナが統御する思念と意向の枝も若干あれども、サタナが占領せざる他の思念と意向もこれあり。

十、或時には意念を煽動するにより、凶惡の一方は更に強きを加ふ。しかれども或時には人の意念は再び勝を奏す、即神よりの助と救とをうけて凶惡に抵抗しつゝあるなり、或時には人は勝たるれども、或時には自己の自由を有す。時として人は熱心を以て神に就くことあり、サタナは此を知り、人のサタナに反抗して動作するを見るも、人を占領するあたはざるべし。何故なるか。人が神に呼ぶの自由を有し、神を至愛し、神を信じ、神を尋ねたる自然の結果を有して、神に就くによるなり。けゞし有

形界に於ても農夫は地を耕す。かくの如く靈神界に於ても事は二の形狀に於てあらはるゝなり。ゆゑに人は自己の任意により、その心の地を耕して勞せんことを要す、何となれば、神は勞と盡力と行爲とを人より促せばなり。さりながらもし天の雲と恩寵の雨が上よりあらはるゝあらずんば、勞する農夫は何に於ても成功せざるべし。

十一、視よ、ハリストス教の特異は左の如し、汝は幾ばく勞すとも、幾ばく義なる行を爲すとも、何も爲さずとの意見を以て存すること是なり、齋しつゝいはん、「齋せず」と、祈禱しつゝいはん、「祈禱せず」と、祈禱を專ら務めつゝいはん、「專ら務めず、たゞ苦行と勞との始を置くのみなり」と。たとへ汝は神の前に義なる者なりとも、左の如くいはんことを要す、「我は義人にあらず、勞せず、たゞ毎日始むるのみなり」と。しかれども亦「ハリスヂアニン」はいかなる日も希望と喜悅と未來の國及び救を待つの期待とを有して、左の如くいはんことを要す、「もし我今日救はれずば、明朝救はれん」と。それみづから葡萄園を植うる者は、勞に就くに先だちて、喜びと望みとを己れに有し、葡萄酒は未だある無きも、酒搾を心に活現し、入金を計算し、而してかくの如きの意を以て勞に着手せん、されば希望と期待とは彼をして熱心に勞せしめ、家に多くの費用を支出するに至らん。然れども之れと同樣家宰と農夫も、未來の利益を望みて、最初に己の所有を多く費さん。かくの如く此所に於ても救と生命とをうくるの喜びと望みが人の目前にあるなくんば、患難を忍耐し、身に軛を負ふて、窄き路を進行するあたはざるべし。しかれども彼に伴ふ希望と喜悅とは彼をして自から勞し、患難を忍耐し、身に軛を負ふて、窄き路をゆかしむるなり。

十二、燃ゆる木は火より逃るゝことの難き如く、靈魂も大なる勞を以てするにあらずんば、死の火をのがれざるなり。されどもサタナは善慮を裝ひ、これを以て神なの意を喜ばすを得る如き狀をなし徐々と靈魂を勸めて、巧なる實らしき企謀に引き入るゝことしば〳〵これあり、ゆゑに引入らるゝものは辨識する能はずして、これがために惡魔の網と亡びとにおちいらんとす。格鬪者と苦行者の爲に重要なる武器は心に入りて、サタナと戰を作し、自己を嫌ひ、己の生命を忌み、これを怒り、これを詰り、習慣となれる自己の欲望に抵抗し、意念と爭ひ、自己と戰ふにあるなり。

十三、然れども汝は外見上己の體を敗壞と放蕩とより守れども、內部には己の意念に於て姦淫を爲し、放蕩を行はゝ、汝は神の前に姦淫者たり、然らば汝の體の貞潔を守るは汝に益を來さゝらん。たとへば青年が詭計を以て處女を誘ひ、これを

して腐敗せしむるならば、處女は姦淫の爲に新郎に嫌はるゝものとならん、かくの如く內部に居るところの蛇即凶惡の神と交る無形なる靈魂も神の前に淫行を爲すなり。錄していへるあり、『凡そ慾を懷きて婦を見る者は心の中已に之と淫せしなり』（マトフェイ五の二十八）けだし身體の上に行はるゝ淫行あり、また、サタナと交る靈魂の淫行あり。同一の靈魂は或は魔鬼或は神及び天使の同類となり、姉妹とならん、而して惡魔と淫すれば、天の新郎のためには最早要なきものとなるなり。

十四、問、サタナは何時自から休息して、人は戰を免るゝか、或は生くる間戰を作さざるべからざるか。

答、サタナは其侵襲に於て暫時も休せざるなり、されば人は此世に生きて肉體を猶害を爲すかもしサタナの來り攻むるあらば、或者は王の友として敵と爭はん。ゆゑに王が此人の味方となり、彼と親しんで自から彼に助くるときは、彼は少しも害をうくるあらざらん、けだしすべての秩序と階級を經て王の友となりし者は誰より如何なる害をうくべきか。此世に於て或る市は王より諸賜と生活の糧とをうく、ゆゑに少しの稅を負ふありとも、かくの如く受くる所ありて、王の惠を被むれば、幾ばくも損失を感せざらん。かくの如く「ハリスチアニン」ももし敵の襲ふあらんも、己の爲に避所を神性に於て有す、彼等は能力と慰安とを上より衣たり、ゆゑに戰は彼等を少しも驚かさざらん。

十五、主はことゝくの權威と權とを脫して、身體を衣たる如く「ハリスチアニン」も聖神を衣て慰安に居るなり。されば外より戰至りて、サタナの打擊するあらんも、內部に於て彼等は主の力を以て防ぎ守らるれば、サタナの侵襲によりて驚かざるべし。彼が主を曠野に四十日試みたる時、外より主の體に就きて幾ばくなりとも害したりしや。此體には神は居りき。かくの如く「ハリスチアニン」ももし外より試みらるゝも、內部には神性の力をみてらる、されば何等の侮もうけざらん、さりながら人はかゝる度に達せしならば、これ彼はハリストスの完全なる愛に達して、神性にみてらるゝなり。然れどもかくの如くならざる者は內部に於て猶戰を交へん、彼は或時には祈禱に慰安すれども、或時には憂愁と戰とに在り。けだしかくの如きは主の欲する所なり、けだし人は猶幼稚なるにより、主は戰を以て彼を練習せしむるなり。されば內部に於ては兩人の如く、光と暗と慰安と憂愁とあらはるゝなり、或時には安然として祈禱すれども、或時には擾亂の中にあるなり。

十六、パウェルの言ふ所を聞かざるか。もし我は悉くの賜を有し、『我が軀を焚くに委ぬとも、天使等の言を悟るとも、もし愛なくば我無きが如し』といへり（コリンフ前十三の一―三）。けだし此等の賜はたゞ完全にみちびくのみなれば、これに達し得たる者は光に居るといへども、猶幼稚なり。兄弟の中此階段に昇りて、病を愈す賜と默示と預言とを有せし者多かりき、しかれども完備の總綱（コロサイ三の十四）たる完全なる愛に未だ到達せざりしにより、戰は彼等の中に起り、彼等油斷して陷りぬ。さりながら完全なる愛に達する者はもはや恩寵の捕虜となり、囚人とならん、しかれども愛の完全なる域に漸々近づき來れども、愛の囚人となるまでに未だ達せざる者は、猶畏懼の下に居り、戰と滅亡は彼に來らんとす、されば もし己を防守せずんば、サタナは彼に打勝たん。

十七、かくの如く多くの者は彼等に働く恩寵の作用の爲に迷に引入れられたり、彼等は完全に達せりと思ふていへり、『我等の爲に充分なり、何に於ても乏きを有せず』と。さりながら主は無限にして人智の及ばざるものなり。ゆゑに「ハリステアニン」は既に達せりといふを敢てせずして、晝に夜に自から謙遜するなり。此世に於て言語の學問は盡し難きものとす、されば當然にこれを研究したる學者の外これを知る者あらず。かくの如くこゝにも神は其者より受けし所のものを味へて己の弱きを自認する者の外、何人の爲にも神は曉られず、又測られざるなり。それ僅に學識を有する所の學者が無學なる人々の居る田舍に來るあらば、かれらの爲に頌讃せられん、何となれば村の住者は全く彼を度るあたはざればなり。然れども此の最淺學少識なる者が辯論學者又は博學者等の居る城中に至るならば、彼等の前に現はれて演說するを敢てせざらん、何となれば學者等の彼を度ること、彼が村の住民を度る如くなるべければなり。

十八、問、もし人が猶戰爭中に在りて、其心に罪も恩寵も共に働くときに、此世を去らば、この彼と此とに占有せらるゝ者は何れに入るか。

答、智が其目的とその愛するものとを有する處に入らん。もし憂患或は戰が汝に及ぶあらば、汝はたゞ抵抗してこれを憎むべし。けだし戰の至るはこれ汝に屬せず、然れどもこれを憎むことは汝に屬す。されば其時主は汝の奮鬪して全靈より主を愛するにより、汝の智を見て、一時に死を汝の靈より遠ざけ（これ主の爲に難からず）汝を其懷に光の中にうけ、瞬間に汝を暗の門よりうばふて、直ちに其國に移さん。すべてを瞬間に成すは神の爲に容易なり、たゞ汝は主に愛を有すべし。神は人よりこ

の行爲を要求す、何となれば靈魂は神性と親與すべきものなればなり。

十九、我等は農夫の譬を引用したることたゞ一回のみにあらず、彼は勞して種子を土中に入置かんも、更に上より雨を待たざるべからず。されどもし雲あらはれず、風吹かずんば、農夫の勞は何等の益も產せずして、種子は皆無とならん。これ靈界の事に比ふべし。もし人はたゞ自己の所爲に限を立て、天性の爲に非常なるものをうけずんば主に適當の果をさゝぐるあたはざるべし。人の所爲は何にあるか。世より離れ遠ざかり、祈禱と儆醒に止まり、神と兄弟を愛するにあり、人の自己本來の行事は此のすべてに存す。さりながらもし人は己の所爲に限を立てゝ、或る他のものを希望せず、聖神の風は心中に吹起らず、天の雲はあらはれず、天より雨は降らずして、靈魂をうるほさずんば、人は主に當然の果をさゝぐるあたはざるべし。

二十、錄していへるあり、園師は『實を結ぶ枝を見るときは、これを潔むなり〳〵繁く實を結ばん爲なり、然れども實を結ばざる枝』は根こそげ取りて火に付されん〳〵

オアン十五の二。人は或は禁食するか、或は儆醒するか、或は祈禱するか、或は何か善なることを爲さんも、すべて主に歸して、左の如くいはんことを要す。『もし神は我を堅めずば禁食することも祈禱することも、世を棄つることも我はあたはざりしならん』と。然らば神は汝の善良なる任意を見て、汝が天性の力を以て爲したる自己に屬するものをも神に歸するにより、自らも最早其の己れに屬する靈界神聖なる天に屬するものを汝に賜はん。何を謂ふか。これ即神の果實と、喜びと、樂みなり。

二十一、問、さりながら天性自然の果實たる愛と信と祈禱をも亦同じく靈神的果實と名づくるは何故なるか、其區別を我等に示したまへ。

答、汝が自から爲すところの本來汝に屬するものはたとへ善にして神に喜ばるゝといへども然も不潔なり。例へば汝は神を愛す、然れども不完全なり、されば主は來りて易はらざる天に屬する愛を汝に與ふ。汝は祈禱せんに、これと同時に汝の意念は自然に旋轉して空想を起さん、しかれども神は神と眞とを以てする純全なる祈禱を汝にあたふるなり。此世に於て地はみづから屢々荊棘を產し、農夫は地を掘り、勉めて耕して蒔附をなす、しかれども荊棘は蒔かざるに生長して、繁殖すゞけだし犯罪の後アダムにつげていへり、『地は荊棘と薊とを汝のために生ずべし』(創世記三の十八)農夫は新に拮据勉勵し、荊棘を發掘すれども、彼はいよ〳〵繁殖せんとす。これを靈神的に了解せよ、犯罪の後地は其心より荊棘と薊とを出し、人は地を耕して、拮据勉勵すれども、惡鬼の荊棘は全くなほ生ず。其後聖神はみづから人の弱きに助

け、主は此の心の地に天の種子を挿入して、これを耕す。されども主が種子を下すときも、荊棘と蘊とは全く猶生ず。主と人は自から靈魂の地を新に耕す、されども夏至りて恩寵増殖し、太陽の熱によりて荊棘を枯らすに至る迄は、七の惡鬼と荊棘とは彼處に芽を出して、再生せん。

二十二、惡癖は性に存すといへども、たゞその己の爲に牧地を發見する處に於て權を弄せん。やはらかなる麥の莖は莠に荒さるべし。しかれども夏至りて植物の枯るゝ時は、莠は麥を少しも害せざらん。三斗の純粹なる麥ありとせよ、さりながらこれに莠も混入するあらん、例へば幾掬の莠のあらはるゝ如し、たゞ麥の多きにより て莠は認められざるなり。恩寵に於てもかくの如し、神の賜と恩寵の人に增殖して、人が主に於て富むときは、たとへ惡僻は人に少しく殘存するありといへども、人を害するあたはずして、人に對し何等の勢力もあらず、或は人に何等の關係も有たざるなり。けだし主の來臨も照管も惡癖の奴隷となりてこれに服從附屬する我等を自由にして、死と罪の勝者となさん爲なり。ゆゑに兄弟等はもし凌辱を人よりうくるあらば、驚くべからず、これによりて惡癖より自由なるを得ん。

二十三、舊約に於てもモイセイとアヽロンは祭司の職を有して苦を多くうけたり。これに反してカイアファは彼等が位に坐し、自から主を窘逐して罪に定めたり。さりながら主は祭司の職を尊敬すべきををしへて、其職に居らんことを許したまへり。預言者等も同樣イウデヤ民に逐はれたり。終にペトルはパリストスの新なる教會と眞實なる祭司職を托せらるゝや、モイセイの後嗣者となりぬ。今は我等に火と神とを以てする洗禮あり、又心中におこなはるゝ割禮あり、何となれば神聖なる天の神は智に住ひ給へばなり、さりながら此等の完全なる者等も、肉體に居る間は、自由の故に費心を免れずして、畏懼の下にあり、何故なれば誘惑はかれらに入るを許さるればなり。然れども靈魂が彼の諸聖者の都に入るあらば、たゞ其時には憂も誘もなくして居るを得べし、何となれば、しかしこには費心も憂愁も辛勞も衰老もナ或は戰もあるなうして、かしこにあるものは安息と喜悅と平和と救となればなり。かしこには彼等の間に主の居るありて、彼は救世主と名づけらる、何故なれば捕はれし者を救ひたまへばなり、又醫と名づけらる、何故なれば天に屬する神聖なる療方をあたへて、或る度を以て人に主たる心中の情慾をひやしたまへばなり。一言にてこれを言へばイエスは王にして神なり、されどサタナは虛主なり、惡なる君なり。

二十四、しかのみならず、神と其使等は人の彼等と共に天國にあらんことを欲す、されどもこれと同じく魔鬼と其使等も人の彼等と共にあらんことを欲するなり。故に靈魂は二者の中間に在りて、心意は何れに傾かんも人は其方の子とならんとす。父は其子を途中猛獸に遇ふの恐ある遠地につかはすときは、これに毒と消毒藥とをあたへん、猛獸及び蛇が彼を襲はんとき、毒をあたへて彼等を救さんためなり。かくの如く汝等も靈魂のために痊愈ともなり、消毒藥ともなるべき天の療方をうけんことを力むべし、これを以て毒獸たる汚鬼を殺さんがためなりけだし清き心を獲るは容易の業にあらず、良心と心の清きものとなり、惡をおのれに全く根絶せんとせば、戰と勢とを大に要するなり。

二十五、或者には恩寵あれども、心はなほ不潔なることあり陷りし者等の陷りしはこれが爲なり。彼等は恩寵と共に烟と罪も己れにあるを信せざりきされどもろもろの義人は窄く苦しき途をゆきて終に至るまで神を喜ばしめたり（ヴァラアム）は神により富有なりき、しかれども世に對して己を塵灰と名づけたり（創世記十八の三十七）又（ダヴィド）も己のことを『我は蟲にして人に非ず、人の辱しむる所民の藐んする所なり』といへり（聖詠廿一の七）これと同く使徒及び預言者等も皆惡害を忍び、

呵責をうけたりき。路たり又神たる主の自から來りしは己の爲にあらずして、汝の爲なり、汝の爲に凡そ善なるものゝ標準とならんためなりき、視よ如何なる卑辱の狀態を以て來り給ひしか、神、神の子、王及び王の子は僕の狀をうけたまひき、彼は愈すべき療方をあたへて傷つけられし者をいやす、されども外見によれば傷つけられし者の一たる如くあらはれ給ふなり。

二十六、さりながら外見によればいやしうして、我等の中の一人の如くなるを見るや、神の尊威をかろんずることなかれ、彼が此の如くあらはれしは我等の爲にして、己の爲に非ず、彼を釘せよ釘せよ釘せよとさけんで民の群集せしや、當時に於て彼はわらゆる者より更に卑しかりしにあらずや、思ふべきなり、世に惡者あり、王より判決を下されしならば、全民は彼を蔑如し、彼をいやしめん、かくの如く主も死すべきに定罪せられたる人として、十字架にかゝる時に當りては、ファリセイ等の爲に無き者の中に數へられたり、而して彼の面に唾し、彼に荊冠を加へ、彼の頰をうつに及んでは、これあらゆる侮辱の量をみちみてしにあらずや。けだし錄していへるあり、『われを撻つものにわが背をまかせ、わが顎をぬく者にわが頰をまかせ、辱と唾とをさくるために面をおほふことをせざりき』（イサイヤ五十の六）じかれども神はかばかり

罵詈と苦と辱とをうけしならば、生れながら泥土にして天性に死すべき者たる汝は幾ばく己を卑しめたりとも、汝の主宰に何も似たる所のものを爲し給にあらざるなり。神は汝の爲めに己を卑うしたれども、汝は己の爲にさへ自から謙遜せず、却て傲然として自から高うするなり。彼は憂と重きとをおのれに取りて、其安息をば汝にあたへんがために來りたれど、汝は汝の傷を愈すを得んがために勞を攜ひ苦をうくるを欲せざるなり。光榮は彼の苦みと而久に世々に歸す。アミン。

第二十七　講話

此講話は前の講話に於て「ハリステアニン」たる人の價値と位置とにつきて說始めたる詳細の論說を終ふるなり、此講話は自由なる望に關して多くの最有益なることを敎へて、これに神聖なる智慧をみちみてる若干の問題を添ふ。

一、人よ、己の貴族たること、己の價値とを認識せよ。ハリストスの兄弟たり、王の友たり、天の新郎の新婦たる汝はいかに貴きか。己の靈魂の價値を認識し得たる者は、神性の力と秘義とを認識して、それによりいよ〳〵謙遜するを得ん。何となれば人は神の力の助によりて己の墮落を發見すべければなり。さりながらハリストスばみづから苦難と十字架とを忍耐せしも、其後頌讃せられて、父の右に坐せしごとく、汝も其の如く彼と共に苦をうけ、共に釘せられ、其後昇りて共に坐し、ハリストスの體と配合して、ハリストスと共に彼の世に常に王たらんことを要するなり。「此れもし我等彼と共に苦まば亦彼と共に榮せられん爲なり。」（ロマ八の十七）

二、凡そ勝利を得て、罪の障碍を越ゆるを能せし者は、義なる諸神の安息する天の都の平安にして多くの幸福をみちみてる處に入らん。然れども、これがためには大に辛苦して戰はんことを要するなり。然らずんば、汝の爲に來り給ひし新郎は、苦をうけて十字架に釘せられたれど、新婦に在ては新郎の來りて苦をうけしは我が爲なるにも拘はらず、嬉々として徘徊するは不當ならん。此世に於て放蕩の婦は獵りに身を惡くの人に委す如く、靈魂も己をもろ〳〵の惡鬼にまかせて、邪神のために腐敗せしめらるゝなり。げだし或者は任意によりて罪と惡事とをおこなへども、或者は任意によらずして行ふ。何ぞや、任意によりて惡事をなす者は己の意旨を惡習

にまかせ、これをたのしみて、これと交親し、サタナと共に和して己の意念に於て魔鬼と戰をなさず、然れども任意によらずして惡を爲す者は使徒のいふ如く、其肢體の中に於て戰ふ所の〔ロマ七の二十三〕罪をおのれに有し、その任意の前に暗黑なる力ありてこれを覆へども、彼等は意念に於てこれと同意せず、これを樂まず、これにしたがはず却て反抗敵對して自から己を怒るなり。後者は前者に比すれば神の前にありて特に勝れて且貴し、前者は自己の任意によりて其意旨を惡習にまかしてこれを以て樂むなり。

三、王あり、弊衣を衣たるまづしき貴女を見て、これを耻ぢ給はず、不潔の衣を彼より脫して、其汚穢をあらひ、鮮麗なる外袍を衣せて、これを飾り、王の晩餐と宴席には王の相伴者となして、これにあづからしめたりと想ふべし。主もかくの如し、傷つけられ打碎かれたる靈魂を見て、これに療方をあたへ、けがれたる衣服と惡癖の汚辱とを彼より脫して、これに王たる天に屬する神聖なる煌々としてひかりかゞやく名譽ある外袍をかうむらしめ、かれに榮冠を加へ、かれを王の晩餐にあづからしめて喜び樂ましめたりき。また園を想ふべし、かしこには豐盛なる樹のあるありて、悉く香氣を薫じ、かしこには愉快にして全く美麗なる芳香と安慰とにみちみてる場所の多くありて、誰なりともかしこに入らん者はまつたく樂みて、己のために安息を得ん。天國に於る靈魂もかくの如し、彼等は喜と樂と平安とをまつたく味ひ、かれらは彼處に於て王たり、主人たり、又諸神たるなりげだし錄していへるあり「諸王の王、諸主の主」と〔ティモフェイ前六の十五〕。

四、ゆゑにハリストス教は或る不緊要なるものに非ず、彼は大なる秘義なりゆゑに己の貴族たることを認識せよ、即汝は王の尊位に召されたるものにして、汝は「選ばれたる族、聖なる人民」〔ペトル前二の九〕なるを認識せよ。ハリストス教の秘義は此世の爲には稀有なるもの、非常なるものなり。眼に見ゆる王の榮と富とは地に屬する腐敗すべきものにして、暫時に過去らん、然れども彼の國と彼の富とは神聖なる天に屬する、光榮なるものにして、未だ曾て過去らず、決して廢絶せざるなりげだし天の教會に於て、天の王と共に王たらんとすればなり、且彼は自から「死の中より首めて生れたる者」〔コロサイ一の十八〕なる如く、彼と共に王たる者等も首めて生れたる者なり。さりながら神の前に選ばれたる大に練達なる者はかくの如くなりといへども、彼等は自から己を認めて小なるものとなし、極めて練達ならざるものとなすべくして、己を劣等なるものと思ひ、或は何もなきものとさへ思ふことは彼等の

爲に天性自然なる必然の行となりぬ。

五、問、かくの如き者等は其有せざるものを添へられ己の天性の爲に或る非常なるものを得たりしを知らざるか。

答、汝につぐ、彼等はおのれを認めて、大に練達なる、大に進歩したるものとなさず、有せざるものを得たりしを知らざるなり。且かくの如き者等に降る恩寵は自から彼等ををしへて、進歩しつゝある己の靈魂を貴きものと思はしめず、却て自然に己を認めて何も價値なきものとなさしむるなり。ゆゑに神の前に貴きものたるも、彼等は自から己の爲にかくは思はず、大に進歩して神を識ると共に、己をば何も知らざるものゝ如く認め、神の前に富める者も、自から己の爲にはまづしき者の如く見ゆるなり。パリストスが僕の狀をうけ、謙遜を以て魔鬼に勝ちし如く、蛇は最初高慢と自負とを以てアダムを貶したりき。今も此蛇は心中に住ふて、パリストス教を率するの族を自負により貶し、且滅さんとす。

六、世に自由なる貴族の人を想ふべし、大なる富を有して、更に歳入を得、果實を積まんに、彼は己を忘れて自負し、衆人のために堪へられざるものとなりて、すべての人を足にて蹴、且頬を打たん、或者等に於てもかくの如し、彼等は思慮分別を有せず、少しの安心と祈禱の賜とを得るあれば、傲然として自負し、己を忘れて他を非難するを始めたり、かくの如くにして幽暗の地におとされたりき。それ神の如くならんといひて、高慢によりアダムを逐出したる蛇もこれに同じ、今も彼は心に高慢を入れていへり、『汝は完全なり、汝の爲に足れり、すでに富みたれば復た乏しきことあらず、幸福なり』と。さりながら世に人あり、富を有して、これが爲に多く集まる果實の歳入を得んも、思慮分別を持して、自から誇らず、自から高ぶらずして、大量なり、けだし利益の後に空乏の生ずべきを知ればなり。されば彼と此とを一回ならず實驗して、驚惶を來さず、利益と富有との爲に自負せずして、損耗をかうむらんとするときも驚かざるなり。

七、これに由りて見るに、パリストス教の行は左のごとし、即眞實を味ふにあり、眞實を食とし又飲とするにあり、且能力と勤勉との量にしたがひて、これを味ひ、これを飲むにあり。泉を想ふべし、或る渴する者はかしこに飲み始めんに、其後彼飲まんとするや、人あり、彼を引去りて、其欲するたけを飲ましめざる時は、彼は最早水を味へたれば、いよ〳〵渴を生じて、更に強く飲むを求めん。靈神界に於てもかくの如し、或者はすでに天の食を味ひ、これをうけんに、これと同時に俄に彼をさへぎりとゝ

めて、誰も彼に飽かしめざることあるべし。

八、問、何故天の食に飽くを許さいるか。

答、主は人が速に自負せんとする人間の弱點を知るゆゑにこれをさへぎりとゞめて、彼を不斷の練習と波瀾の中に居らしむるなり。けだし小なるものをうくるときにさへ、衆人のために堪へられざるものとなりて、高慢するならば、矧んや汝をして一時に飽かしめば、堪ふる能はざる者とならん。さりながら神は汝の弱點を知り、其照鑑によりて汝に憂患をつかはし、汝をして謙遜なるものとなりて、いよ〳〵熱心に神を尋ねしむるなり。世に一貧者あり、金袋と金とを拾ひ、輕卒にも宣言し始めていへり、『我拾へり、金袋を拾へり、我は富めり』と。時に流傳したる風說により、金袋をうしなひし者は此事をきゝて、これを取戻せり。また他に富者あり、己を忘れて衆人を踏着け、衆人を侮辱し、他に對して大に高慢したりしかば、王は此事をきゝて其財產を沒收せり。靈神界に於てもかくの如し、人あり、多少の慰安を味へしならば、これを以て己を益するを能くせずして、其得たるところのものをもうしなはん、何となれば罪は彼等を試みて彼等の智を暗ませばなり。

九、問、何故或者は恩寵の惠をうけし後陷るか。サタナは彼等にいよ〳〵弱く動作するにあらずやけだし如何して日のある處に夜があり得べきか。

答、彼等の陷るは恩寵の消え、或は弱くなれるために非ず、神が凶惡に許して働をなさしむるは、汝の自由なる望と、汝の自由のいづれにかたむくを試みんためなり。さらば汝は更に己の意志を以て主に近づきて、おのれに恩寵の降らんことを新に呼ばんけだし神の消えずして煌々と光を發するときに『神を怨すなかれ』（コロサイ前五の十九）としるさるゝは、何故なるか。汝が神をおろそかにし、己の意志を以て彼と融合せずして、神の爲にこれを怨すによるなり。またこれと同樣聖書にいふあり、『贖の日に印せられし聖神を憂ひしむるなかれ』と（エフェス四の三十）見るべし、聖神を尊び、彼をして憂ひしめざるは、汝の意志と、又汝自己の自由なる望とにあるを。然れども我汝にいふ、善なるものに捉へられ且これに醉はしめられたる完全なる、パリスチアニン」にさへも自由なる望のあるあり、それゆゑ千百の惡に試みられたる彼等は善に變ずるなり。

十、位高く富んで貴き人を想ふべし、視よ、彼等は己の意志により、みづから甘んじて富と貴きと位とを棄てゝ、遠く離れ、不潔にしてまづしき衣服を衣、光榮に易ふるに不名譽を以てして、まづしきといやしきとに居らんとす、これ其の自己の自由に

じだがふなり。然れども我汝につぐ、恩寵によりて完全なるを得たる使徒等にさへ其欲する所を爲すを恩寵は妨げずして、たとへ恩寵の喜ばざることを爲さんを願ふとも、妨げざるなり、何となれば我等が天性は善にも惡にも感じ得るものなればなり、ゆゑに反對なる力はなさしむることを得れども、强ふることを得べからざるなり。終に汝はその欲する所のものに傾くの自由なる望を有するなり。ペトルが辱められて（ガラティヤ二の十一）パウェルの彼を詰り責めたるを見ざるか。アヽかくの如きの人も辱めらるゝものとなり得るか。しかれども靈神的の人たるパウェルさへも其自己の意志によりてワルナワと爭ひ、爭論の結果によりて彼等は互に相別れたりき（行實十五の三十九）されば『パウェルはまたいふ、『汝等靈神的の者はこれを規し且自から省るべし、恐らくは汝も亦誘はれん』と（ガラティヤ六の一）視よ、靈神的の人々も試をうくるなり、何となれば彼等にも尙自由なる望のあるありて、彼等が此世にある間は、敵はかれらを襲へばなり。

十一、問、使徒等もし欲せしならば、罪をかすことを得たりしや、或は恩寵は其意志よりも更に强かりしや。

答、罪をかすことは彼等能はざりき、何となれば光に居りて、かくの如き恩寵の前に自から高慢せざればなり、さりながら恩寵は彼等に於て薄弱なりしとは我等いはざらん、されど恩寵は完全なる靈神的人々にも其意願とその欲する所を爲し得るの力とを有せしめ、其意に適する所に傾くを許容すと斷定するなり。ゆゑに人の天性は薄弱なるも、これと共に存する所の善より離るゝを得べき力を有するなり。全備の武裝をなし、鎧冑及び其他の武器を着する者は、內部に於ては最早安全にして、敵は彼等を襲はざるべし、或はたとへ襲ふといへども武器を實地に使用して、敵に抵抗し、彼と開戰して、かれに勝たんことも、或は武器をおのれに有しつゝ敵と戰はず、却て彼等と共に樂み、平和にして居らんことも、これすでに彼等の自由にあり、かゞの如く、『パリスチア、ニン』も、完全なる能力を衣て、おのれに天の武器を有するも、もし欲するならば、『サタナ』と共に樂み、かれと平和に居りて、戰はざるべし、何となれば天性は變じ易きものなれば、人はおのれに存する自由なる望の故に、欲するときは、神の子となるべく、或はまた亡びの子ともなるべければなり。

十二、あるひは餅のことを品評すると、或は餅を食し、其滋養質をおのれにうけて、すべての肢體のかためらるゝとは、おの〳〵別事なり。甘美なる飲料のことを言にて話すと、行きて其泉を汲み、甘美なる飲を味ふて滿足するとは、お

の〳〵別事なり。戰の事、勇氣なる格鬪者及び兵士の事を論評すると、人が軍隊と共に出陣し、敵と格鬪し、一進一退打擊を己れにうけ、或は彼に加へて勝を占むるとは、おの〳〵別事なり。靈神界に於てもかくの如し。言ふ所のものを一の知識と智慧とにて自から説明すると、聖神の賓と恩寵と趣味と作用とを內部の人と智とに於て眞實實際に疑なく有するとは別事なり。たゞ一の言のみを以て演述する者は妄想して已の智に高慢せん。しかれどもすでにのべし如く、我等が言ふ所と我等が傳ふる所は、人の智慧の感動せしむる言を以てせずして、神と能との顯示を以てするなり。〔コリンフ前二の四〕また他の所において使徒はいへり、〔誠の目的とする所は愛なり、乃潔き心と玷なき良心と、僞なき信とに由る者なり〕と〔テモテイ前一の五〕かくの如き者は陷らざるなり。けだし神を尋ねたる多くの者の爲に門は啓かれ、彼等は賓を見付て、かれに入りたりき。然れども喜んで『我等は賓を見付たり』といふや、神はかれらの前に門を閉しぬ。されば彼等は始めて號び哀み、遺憾に思ふていへり『我等は賓を見付て失へり』と。特別の照覽によりて恩寵の我等より離るゝは、我等いよ〳〵盡力してこれを尋ねんが爲なり。尋ぬるの量にしたがひて賓はあらはるゝなり。

十三、問、けだし或者はいふ、恩寵をうけたる後人は死より生に移らんと、然らば誰か光の中に在りて不潔なる思を有するを得るか。

答、錄していへるあり『神を以て始めて今肉を以て終るか』〔ガラテヤ三の三〕使徒はまたいへり『神の全備の武具を衣よ、惡魔の奸計を汝等禦ぐを得んためなり』〔エフェス六の十一〕此言によるに、人は武具を衣ると、首領及び權柄と戰を爲すとの二の立場に居る。即或は光に居り或は暗に居るなり。又いふ『惡敵の惡くの火箭を滅すを得んと』〔エフェス六の十六〕また いふ『神の聖神を愛ひしむるなかれ』〔エフェス四の三十〕且又いふ『一たび照されて天の賜を味ひ、聖神に與かるものとなりて、墮落せし者を新にする能はず』〔ヘブレイ六の四―六〕とこれ照されて味ひし者等の墮落するなり。見るべし人は神と融合する自由をも有し、又彼を愛ひしむる自由をも有するを。されば武具を衣るは戰にのぞみて敵と格鬪せんが爲なることと疑なし。

十四、問、使徒が我諸〳〵の知識と諸〳〵の預言を有し、〔天使等の言を語るとも我無きが如し〕〔コリンフ前十三の一、二〕といへるはいかなる義か。

答、我等は此言によりて使徒を無きが如き者なりとは理會すべからず、さりながら完全なる所の愛と比ぶれば、此等の賜は猶小なり、されば此階段に立つ者は陷るべし、しかれども愛を有する者はおちいるあたはざるなり。汝につげん、諸の賜を有

し、神をうけたりしも、完全なる愛に得達せずして陷りし人々を我は目擊せり。貴族の人あり、世を避けて己が財產を賣り、僕には自由をあたへて放免せり、されば善智なる且は伶俐なる者としてすでに尊敬すべき生活を以て稱讃せられたり、しかれども自負と高慢とに任じて終に放蕩と千百の惡とにおちいりき。

十五、また人あり窘逐の時己の身を付して、裝信者となりぬ、其後平和到りしにより、彼は自由の身となりて、尊敬をうけたりしが、强き烟に苦められしにより瞼を傷はれたりき。しかるに稱讃せられたる彼は祈禱に招かれ、餅を取りてこれを其童子にあたへて、彼の才智は神の言を冒てきゝしことのあらざる如き狀態に至りぬ。また人あり、窘逐の時にあたり、己の身を苦みに付し、吊され又は劍られて、其後獄に投ぜられたり。一の修女あり信仰の故に彼につかへたりしが、彼は獄にある間に其女と親しくなりて、遂に淫行におちいりき。見よ、此の己の財產を賣りたる富者も、また此の己の身を苦みに付したる者も陷りしは何故なるか。

十六、しかるに又他の善智なる苦行者あり、我と一家屋に居り、我と共に祈禱しけるが、我が側に祈禱して、感動に堪へざる程恩寵に富まされたり、何となれば恩寵は彼に沸騰したればなり。彼は病を癒す賜を與へられたり、されば、たゞ魔を逐ひしのみならず、酷虐なる病を有して手と足とを縛られし者をも、手を按していやしたりき。其後世に稱讃せらるゝ彼は漸く油斷して、自から喜樂し、高慢して遂に甚深の罪におちいりたり。見るべし病を癒す賜を有する者もおちいりしを、愛の尺度に達せざりし者の如何に陷るを見るか。しかれども愛に到達し、これを以て縛られ且これに醉はしめらるゝ者は、戴せて他の世界に捉へ去られて、恰も自家本來の生れを覺えざるが如くならん。

十七、問、『目未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心に未だ入らず』（コリンツ前二の九）といふ言は何を謂ふか。

答、彼の時に於て大なる、義なる諸王及び預言者は、贖罪主の來らんとするを知れり、しかれども彼が苦をうけて釘せられんとすること、十字架の上に血を流すこと、火と聖神とを以て洗せんとすること、敎會に於て彼の肉と血に代へて象らるゝ餅と葡萄酒をさゝげらるべきこと、有形なる餅を領くる者は主の肉を靈神的に味へんとすること、使徒及び「パリズテアニン」等が撫恤者をうけ、上より能力を衣せられて、神性にみてらるゝこと、靈魂と聖神と一たるを賜はるべきことゝは知らざりき、聞かざりき、又其心にも入らざりき。預言者及び諸王はこれを知らず

じて、こは彼等の心にも入らざりき。然れども今日、ハリスチアニン等はこれと異なり、神性に於るの愛を以て富まされ、且これに滿てらるゝなり、さりながらかくの如きの喜びと慰とを有して、彼等は畏懼と戰慄とに居るなり。

十八、問、「ハリスチアニンはいかんして畏懼と戰慄とに居るか。

答、何事にか失脚するをまぬかれて、恩寵と融和合致せん爲なり。人あり、おのれに財寶を有して、賊の居る所の地方に出發すと想ふべし、彼は己の富と財とをすでに喜べども、賊の襲ふて掠奪せんことをも畏れ、自己の身體を自から保護せんとする狀態に在るなり。げだし視よ、外見によれば我等は皆世を避け、旅客にして無欲者たり、肉體上の交際を自ら絶てり、終に又視よ身體は祈禱に專ら服從せり、しかれども兄弟よ、我等は才智と身體と果して融和合致するや否やを討究せんことを要す。世に意匠者及び工藝者あり、彼等は往々身體をも才智をもひとしく日夜藝術に委ぬなり、かくの如く汝も身體が此世を避けたる時は、汝の才智も實に此世より離れて最早世に徘徊せざるや否やを終に自から省察すべし。げだし凡の世人は兵士たると商賈たるとに論なく、其身體のある處には其才智もつながれ、彼處には財も彼と共にあるなり、げだし錄していへるあり『財のある處には心もあらん』『マトフェイ六の二十一』

十九、終に汝の才智はいかなる實に向ふか。すべてを全く神に任すか、或は然らざるか。もし然らずんば、汝等は我に告ぐべし。これに妨ぐるは何物なるか。げだし惡鬼、サタナ及び魔鬼は才智を阻へ、靈魂を占領するならん。門と三の門ありて、詭計百出せる狡猾なる惡魔は、靈中の牧野と意念とを占領し、正しく祈禱して神に近づくをゆるさゞるなり。何となれば天性は魔鬼及び凶惡なる諸神と體合すると、天使及び聖神と體合する如くなるべくして、サタナの殿ともなるべく、又聖神の殿ともなるべければなり。故に兄弟よ、汝等の智に注意すべし。彼は何者と體合するか、天使等と體合するか、或は魔鬼等と體合するか、彼は誰の殿たるか、神の住所たるか、或は惡魔の住所たるか。いかなる實を以て心はみてらるゝか、思寵に屬するものを以てか、或はサタナに屬するものを以てか。ゆゑに惡臭と不潔とにみちみてる家の如く、心もろ〳〵の芳香と實とを以て全くこれをきよめ、これを飾り、且これをみたしめんことを要す。サタナの代りに聖神來りてハリスチアニンの靈に止まらんがためなり。

二十、さりながら人は神の言をきくや、直ちに最早善業に堪ふるものとなれるに

はあらず。もし聽くとゝもに善業に堪ふるものとならんには、苦行も或は戰の爲の機會も、或は格鬪の爲の道場もあらざるべくして、すべての人は聽くや否や苦なしに安心と完全の域とに達せん。されど實際に於てはかくの如くならず。汝は反對說を主張して、人より自由をうばひ、智に抵敵する反對の力の存在するを否定す。しかれども我等はいふ、言を聽く者は悲嘆を生ずべくして、其後恩寵は神の照覽により、人を益せんがために人より遠ざかるにより、始めて人は練習して戰を學び、サタナに向つて戰ひ且奮鬪せん、而して久しく爭ひ戰ひし後、勝を占めて、「ハリストアニン」となるなり。されどもし誰かたゞ聽くのみにして、苦なしに善業に達すべくんば、俳優もすべての放蕩者も天國に又生命に入らん。さりながら誰も彼等に勞と苦行となしに生命を與へざるべし、何となれば路は細くして窄ければなり（マトフェイ七の十四）。此の平坦ならざる路に由りて進行し、忍耐し、且憂愁し、かくの如くにして生命に入らんこと肝要なり。

二十一、もし苦なしに發達することが出來るならば、ハリストス救はもはや礎石にあらざるべく、また躓の石にもあらずして、信も不信もあるなかるべし。然のみならず、汝は人を善にも惡にも傾かざる不自由なる者とするなり、何となれば律法は彼方にも此方にも傾くべき者と、反對の力と戰ふ自己の自由なる意志を有する者にあたへられたればなり。されど不自由なる性のために律法は定められざるなり、太陽も天も地も律法にて束縛せられず、何となれば此等の造物は不自由なる天性を有す、故に尊敬にもあたらず、罰にも服せざればなり。けだし名譽と尊敬とは善に傾き易きものゝ爲にそなへられ、また地獄と罰とは惡を避けて善に右方に傾くの能ある變すべき性の爲にそなへられたり。然れども視よ、汝は人は不自由なる性を有すと主張す、隨て善なる人を賞讃に當るべき者と認めざるなり。けだし天性に善なる且作善なる者は愛をうくるに當るべしといへども賞讃にはいまだ當らざるなり。自由なる望によるにあらずして善なるは願はしかるべしといへども、譽むべきにあらず。されど自己の勉勵を以て、盡力と格鬪とを以て、自由なる意志により善をえらびし者は、賞讃に當るものとす。

二十二、ペルシヤの軍營とロマの軍營とを想ふべし、視よ、彼等の中より勇氣盛にして力の均しき二青年を出して、格鬪せしめん。かくの如く、反對の力と智とは互に平均して、一樣なる力を有し、サタナが靈魂をおのれの意志に傾かしめ、詭計を以て引入れんとする如く、靈魂もまた彼に逆ふて、何に於ても順はざらんとす、何となれ

ば二の力はたい善に又悪に勵ますことを得れども、強ふることあたはざればなり。かくの如き自由なる意志に神の助は與へらるゝなり、されば自由なる意志は戰に於て天より武器を求め得、これを以て罪に勝ちて、根絶することを得べし、何となれば靈魂は罪に抵抗するを得れども、神なくして惡に勝ち、或は根絶することあたはざればなり。これに反して罪は強き巨人に似たれども、靈魂は童子の如しと稱道する者は言ふ所非なり。けだしもし差異はかくの如く、罪は巨人に似たれども、靈魂は童子の如くならば、人に律法をあたへて、サタナと戰を作さしむる立法者は不當ならん。

二十三、視よ、神にゆく路の發端は大なる忍耐と希望と謙遜とを以て、神のまづしきにより、温柔にして生命の路を進行するにあり、これを以て人は自からおのれに稱義を求むるを得べし、稱義とは主自からをいふ。此を命ずる所の誡命はたとへば進行する者を天都にみちびく王道の行程儀又は柴折の如し。けだし主はいへり、「神のまづしき者は福なり、温柔なる者は福なり、憐ある者は福なり、和平を行ふ者は福なり」（マトフェイ五の三―九）。然れども、もし誰か此の路に出りてゆかずんば、十字街頭に彷徨せん、彼はあしき基を置きたるなり、光榮は父と子と聖神の鴻恩に世々に歸す。アミン。

第二十八　講話

此講話に於ては靈魂の不幸を說きあらはして、これを哭す、即罪の故に主が靈魂に居らざること是なり、また婦の生む所の者の中彼より大なるものあらずといはれたる授洗イオアンの事を言ふ。

一、神は冒てイウデヤ人等を怒り、イエルサリムを敵の凌辱にわたしゝかば、彼等を憎む者が彼等を管轄して、祭日も奉獻も最早彼處にはあらざりき、かくの如く誡命を破りしために靈魂をも怒りて、これを敵にわたし、魔鬼と諸慾とにわたし給へり、されば彼等は靈魂をいざなふて、これを全く賤め辱しめたれば、靈魂を神に捧ぐる祭日も香も奉獻も最早かしこにはあらざりき、何となれば彼に於て最非常なる者に至るべき路は野獸にみちみてられて爬蟲即惡なる諸鬼は彼に於て巢を作りたればなり。それ家は主人の居るあらずんば、暗と不名譽と汚辱とをかうむり、不潔

と腐敗とにみちみてられん、かくの如く靈魂も其主人たる者が彼に於て天使等と共に祝するなくんば、罪なる闇黑と、耻づべき諸慾ともろ〳〵の不名譽とにみちみてらるゝなり。

二、路はもし誰もこれに由りて往來せず、彼に於て人聲をきかずんば、禍なり、何となれば彼は猛獸の潛匿所となりたればなり。靈魂も主の進行するなく、其聲を以て彼より、姦惡なる無形の野獸を逐はざるときは、禍なり。家は主人の居らざるときは禍なり。地はこれを耕す農夫のなきときは禍なり。船は船長なきときは禍なり。何となれば彼は波濤と海中の颶風に漂はされて亡ぶればなり。靈魂も眞實なる船長即ハリストスを己れに有せざるときは、禍なり、何となれば慘憺たる暗黑の海中にありて、諸慾の暴風に攪亂せられ、姦惡なる諸鬼に漂はされて終に滅亡に至るべければなり。靈魂は善なる靈神上の効果をさゝぐるを得んが爲に、勉めてこれを耕作するハリストスを己れに有せざるときは禍なり、何となれば荒廢し、荊棘と蘇とにみちみてられて、終に燒滅の結果に至るべければなり。靈魂は其主人たるハリストスの居るあらざるときは禍なり、何となれば荒廢し、慾の惡臭にみちみてられて、惡辯の隱所となればなり。

三、農夫は行きて、地を耕さんとするときは、耕作のために適當なる器械と衣服とを取らんこと肝要なり、かくの如くハリストス、天の王、眞實なる當事者も諸惡によりて荒廢たる人間に來り給ひしときは、肉體をかうむり、器械の代りに十字架を負ふて、荒廢たる靈魂を耕し、惡鬼の荊棘と蒭とをこれより除き、罪の莠を拔きて、其罪惡のくさ〳〵をすべて火にて燒きたまへり。かくの如く十字架の木を以て靈魂を耕して、最美はしき神苑を其中にまうけ、種々の甘美なる且大に望ましき果實を主宰たる神にさゝげしめんとす。

四、それ埃及に於て三日の間闇黑の打續くや、子は父を見ず、兄弟は兄弟を見ず、友は其親しき友を見ざりき、何となれば、闇黑は彼等をおはひたればなり、かくの如くアダムが誡命を破りて、以前の光榮より墮落し、世の神に屬して闇黑の覆の其靈に下りし後、即彼よりして最後のアダムに至る迄、即主に至るまでは、人は眞實なる天の父と、仁心にして善良なる母、即神の恩寵と、最甘美にして大に望ましき兄弟即主と、其友と其親しき者、即曾て喜んで共に祝し、共に樂みたる聖なる天使等とを見ざりき。而してたゝ後のアダムに至るまでこれを見ざるのみならず、今もなほ戒者の爲には義の太陽たるハリストスは照ずして、眞實の光を以て明かされたる靈魂の

目は或者には開かれざりき、彼等はみな同じく罪の闇黒におほはれ、同じく好色の勢力を己れに有し、おなじく罰に屬して、父を見るを得べきところの目は彼等にこれあらざるなり。

五、けだしすべての人は此目よりも更に內部なる耳のあることを知らずんばあるべからざるなり。此耳よりも更に內部なる目のあることと、此耳よりも更に內部なる耳のあることを知らずんばあるべからざるなり。此目は友又は北愛する所の者の容顏を有形上に見て、これを識別する如く、神聖なる光に照されたる適當信實なる靈魂の目も、大に崇拜すべき神を以て靈魂を照らさるゝときは、眞實なる友と最甘美にして大に願ふたる新郎、即主を精神上に見ん。かくのごとくなれば、靈魂は大に慕はしき得もいはれざる美麗を思を以て直視して、神聖なる愛の感に刺され、すべて靈界の德行の爲に建設せらるべくして、これにより靈魂のために大に願ふたる主に對するのかぎりなく盡きざる愛を得ん。これによりて見るにイオアンが我等に主を目前に紹介して『視よ神の羔世の罪を負ふ者』〔イオアン一の廿九〕といへる永遠の聲より福なるものあるべけんや。

六、實に婦の生みし者の中、授洗イオアンより大なる者はあらざるなり。何となれば彼は悉くの預言者の完備充滿なればなり。悉くの預言者は主の來らんとするを遠く示して、主の事を預言せり、しかれどもイオアンは救世主の事を預言して、彼を衆の目前に紹介し、呼んでいへり、『視よ神の羔』と。其傳ふるところの者を直ちに指示す者の聲はいかに愉快にして、且美なるや。婦の生みし者の中、授洗イオアンより大なる者は起らざりき、然れども『天國に於て至小き者は彼より大なり』〔マトフェイ十一の十一〕。是れ、即上より神によりて生まれ、撫恤者たる神の初實の果をうけたる使徒等なり、けだし彼等はハリストスと共に審判し、ハリストスと共に寶座に坐するを賜はり。人々の救者となれり。然して又彼等は姦惡なる力の海を分ちて、もろ〳〵信實なる靈魂を移すは汝の見る所なり、彼等は新郎の友にして、諸〳〵の靈魂をハリストスに聘定する者たることは汝の見る所なり、けだしいふあり、『汝等を一の夫に聘定す』〔コリンフ後十一の二〕。彼等が人々に生命をあたふるは汝の見る所なり、一言にてこれをいへば、彼等が多次多樣に神につかへたるは汝の見る所なり、これぞ此の小き者は授洗イオアンより大なる所以なり。

七、農夫は一對の牛を自から牽きて地を耕さん、かくの如く此の完全眞實の當事者たる主イイススも使徒等を二人つゝ耦して遣し〔ルカ十の一〕、自から彼等と共に聽て信ずる者等の地を耕し給へり。さりながら神の國と使徒の傳道とはたゝよく

言ひてこれを他に傳ふるのみなる一の聽得べき言にあるにあらずして、反つて神の國は神の能と働きとにあることは、これ亦認むべきなり。イズライリ人等はこれをおのれの上に實驗せり。常に聖書に於て學びつゝ、主のことの思に占領せられしは、疑なしといへども、彼等は眞實をうけずして、己の嗣業を他人に讓れり。神の言を他人に傳ふるも、自分は其言の趣旨を領有せずして、嗣業を他人に讓る者等も亦かくの如し。光榮は父と子と聖神に世々に。アミン。

第二十九　講話

神は人間に恩寵の分配を成すに二樣の方法を以てし、

て、義なる審判において結果を促す。

一、無限にして測られざる神の睿智が測られず究められざる方法を以て、人間に恩寵の分配を種々樣々に成すは、自由なる意志を試みん爲にして、全心を以て神を愛する者及び神の爲にもろ〳〵の危難ともろ〳〵の苦勞を忍耐する者がこれによりてあらはれんためなり。けだし或者はなほ世に居る間に勞も汗も疲れもあるならうして、信仰と祈禱とを以て前進するや、其勞と汗と疲れとを待たずして聖神の賜と恩賜は彼等に先だつあり。此の時にあたりて神が恩寵をあたふるは理由なくんばあらず、時ならざるにあらず、又偶然なるにもあらず、乃ち得もいはれざる人智の測る可らざる或る睿智に出づるものにして、神の恩寵を速にうくる者の任意と自由なる意志の大に熟練してあらはれん爲なり。即かれらは自己の勞なくしてあたへられたる恩寵に準じて、其の恩惠と其の彼等にあらはされたる神の憐と甘味とを感ずべくして、彼等はすでにこれをうけて、己の意志により、又己の任意により、勉勵と倦まざる盡力と愛の結果とをあらはして恩賜に報いざるを得ず。即全く己をすて、主を愛するの愛にさゝげたゝ主の旨をおこなひて、もろ〳〵肉體の慾望より全然遠ざからざるを得ざるなり。

二、さりながら又或者の爲にはたとへ世より遠ざかり、福音經にいふ如く此世をすて、大なる忍耐を以て祈禱と禁食と、勉勵及び其他の諸の德行に大に進歩すといへども、神は彼等に恩寵と安心と靈神界の恩賜とをあたふるを速にせず、延期して賜を控へんとす。しかれども亦これ理由なくんばあらず、時ならざるに非ず、又偶然なるにも非ずして、得もいはれざる或る叡智により、自由なる意志を試みんため

にして願ふ者にはあたへ、叩く者には門を啓かんことを約したまひし神を果して信誠眞實に尊ぶや否やを見ん爲なり、神の言を眞實に信じたるか、終に至る迄疑なき信仰にとゞまるか、全くの勉勵を以て願ひ且尋ぬるか、災害と疾病との爲に神より離れざるか、時を遷延すると、其意志と任意とを試みるの故により、不信と絶望とにおちいり、終に至るまで忍耐せずして、怠慢に陥らざるや否やを見んためなり。

三、けだし速にうけざる者は、もし神が延期遷延し給ふ時は、更にいよ〳〵熱心して天の幸福をいよ〳〵強く懇願し、大なる希望と勉勵と、倦まざると、盡力と、すべての德行と、たゞ幸福を得んとの飢と渴とを日にます〳〵加ふるのみにして、靈底に留在する邪念のために弱らざるべく、怠慢と不勤忍と失望とにおちいらざるべし、或は又『神の恩寵をうくるは何の時なるか』との意念にみちびかれ、これによりて惡者のために怠慢に引入れられ、遷延に托て弱らざるべし。これに反して主が自から彼の自由の信と愛とを試みて、延期遷延する程は、彼もいよ〳〵猛烈にいよ〳〵勉勵し、弱らず、倦まずして、信と終に至る迄すべての忍耐とを以て、願ふ者に其恩寵をあたふるを約したる神の誠らずして、眞實なるを一たび確信し、自から固く信じて、神の賜を尋ねんこと肝要なり。

四、信誠なる靈魂は神を信誠眞實に尊びて、眞實なる言の如く『神は眞なり』と斷定するなり（イオアン三の三十三）然れども、これと相準じて、先にいひし如く、信の事につきて多少おのれに係る所のものに於ては自から己を試みるなり、即己れに於て缺乏する者は勢にあるか、或は盡力にあるか、或は勉勵にあるか、或は信にあるか、或は愛にあるか、或は其他の德行にあるかを試みるなり。而して全く精細確實に己れを試みて、もし終に至るまで全く勉勵して主の前に奉事し、忍耐にとゞまるならば、眞者たる神はその靈界の恩賜をうばゝざるべきことゝ、いまだ肉體に在るも天の恩寵をうけ、永遠の生命を捉へ得べきことゝを既に一たび確信して、力のある限り主の意を悅ばすことに己を强ひんとす。

五、かくの如くなれば彼等は一切をすてゝ、すべての愛を主に向はしむるなり、强き願望と飢と渴とを以て彼獨りを待ち、恩寵の安息と慰藉とを常におのれに望みて、此世に於て何を以ても己を慰めず、自から安んぜず、甘んじて己を束縛して、物質的意念に不斷抵抗しつゝ、たゞ神の助けと神の代贖とを待つなり、また自由なる任意と勉勵と忍耐とをうけたる如此の靈魂に主が自から窃に臨みて、これに助け、其德行のすべての結果を保護扶殖せんとする時を待つなり、たとへ彼等は勢と憂愁

に居るといへども、たとへ眞理の認識と心の啓發に於ては神の恩寵と天の賜を以てあたへらるゝ安息をいまだうけず、これを疑なく感せずといへども、信ずる靈魂を種々に試みて、意志と自由なる任意より生ずる愛に注目する神の言ふべからざる睿智と言ひ盡されざる裁判との故にこれを待つなり。けだし自由なる任意と自由なる愛とすべて主の聖なる誡命にむかふ力に準ずる心情には界限と尺度と秤量のあるなり。かくの如くなれば愛と己の本分の尺度を滿つる靈魂は天國と永生とを賜はらん。

六、神は義にして其裁判は正し、されば神には偏頗あるなし、然れども肉體上及び靈神上の恩惠に準じ、或は認識、或は理解、或は思慮、神が人間の天性に種々に賦與したるにしたがひ、各人を審判して、德行の結果を索め、各人の行により適當の量を以て報いんとす。されば『强き者は强く鞭かれ、小なる者は憐れまるべし』（智慧書六の六）『其主の旨を知りて備へず、其旨に順ひて行はざりし僕は、多く打たれん、知らずして罰に當る事を行ひし者は少しく打たれん。凡そ多く與へられし者は多く促されん、多く托せられし者は更に多く索められん』（ルカ十二の四十七、四十八）しかれども認識と理解とは、種々に了解すべし、或は神の恩寵により天に屬する賜によりて與へらるゝものもあり、或は理解し、或は思慮し、或は神の書を學びたる自然の結果なるものもあるなり。けだし各人より德行の結果を要求するは神より彼にあらはされたる恩惠による、即或は天然なる或は神の恩寵を以てたまはりたる恩惠の量に準ずるなり。故に審判の日に於てすべての人は神の前に辯解すべきなし、何となれば人はおの〳〵神を言をさゝ、或は未だ曾てきかざるに拘はらず、信と愛とすべてこれに準ずる德行の結果を要求せらるゝは、自由なる望と意志とによるの報酬として要求せらるれはなり。

七、篤く信じて實に愛する靈魂は、義人等の爲に備へられたる永遠の幸福と、まさに降らんとする神の恩寵の言ふ可らざる恩惠とに注目して、自己と自己の勉勵と自己の勞と苦行とは得もいはれざる神の約束に當らざるものと認むるなり。主が福なりとし給へる神のまづしき者はかくの如し。義に飢え渴く者はかくの如し。心を傷ましむる者はかくの如し。如此の自由なる任意と勉勵と勞と德行に對する愛とを自得し、終に至る迄かくの如くして存する者は、實に生命と永遠の國とを捉ふるを得ん。ゆゑに兄弟の中誰も兄弟に對して自から誇らざるべし、又惡者にいざなはるゝ者は『視よ我すでに神的恩賜を有す』といひて、自負心を長せしめざるべし。け

だしかくの如く思ふは「ハリンヂアコン」に當らざるなり。明日は兄弟と何を爲すかは汝に知られず、汝と彼との終りはいかなるべきか、汝は知らざるなり。これに反してすべての人は己を省みて、不斷に己の良心を分析すべく、智はいかなる勉勵と盡力とを以て神に向ふか、おのれの心事を試むべし、而して完全なる目的即自由と無慾と心神の安きとに着眼し、いかなる才能或は表義にも必ず依賴せず、斷えず懈らずして進行すべし。光榮と叩拜は父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第三十　講話

靈魂は神の國に入らんには聖神によりて生れざるべからずして、其狀態は如何なるか。

一、言を聽く者は其心に於て言が行とならんことを要す、何となれば神の言は空言にあらずして、心中におこなはるゝ行を有すればなり、行と名づくるは聽く者に於て行となりてあらはれんためなり。ゆゑに主は言が我等に於て果を結ぶものとならんために聽く者に眞實の行をあらはさしむべし。影は體をあらはす、然れども

たゞ體の表示者となるのみにて、其實物は即體なり、これとおなじく言も眞實の影即ハリストスの影ともいふべき者にして、言は眞實を代表するなり。父が己の性と己の身と己の靈によりて世に子を生まんに、其生れたる己の子の成人となり、相續者及び嗣業者となるに至るまでは、すべての掛慮を以て慇懃に訓導せん、何となれば子を生みて嗣業者を有せんとの目的と慮りとは最初父にありたればなり、ゆゑにもし生まずんば、父に大なる哀みと憂とあらん、これと相反して生めばこれを喜ぶべく、親戚と近隣とにもよろこびあらん。

二、かくの如く我等が主イイスス ハリストスも人の救における配慮をおのれに引受けて、一切の攝理を成し、列祖と族長とにより、律法と預言者とによりて、最初より掛慮したりしが、終に自から來り、十字架の辱をかろんじて、死を忍耐したまへり。されば彼のすべての勞とすべての掛慮とは自己と其性とにより、神を以て子を生まんためにして、子が上より其神性によりて生まれんことは彼の嘉みし給ふ所なりき。それ此世の父は子を生まざるときは、哀まん、かくの如く主も其の自己の像たる人間を愛して、これを其神聖なる種子より生まんことを欲し給へり、されば もし或はかくの如きの生出をうけ神の神の腰より生るゝものとならんことを欲せざ

る者あらば、かれらを救はんが爲に、かれらに代り、苦をうけてこれを忍耐したまひしハリストスには大なる哀あらん。

三、主は悉くの人類が如此の生出をうくるを得んことを欲す、けだし衆人のために死して衆人を生命にまねきたればなり。命とは上より神によりて生るゝことなり。けだし此の生出なくんば、靈魂は生活するあたはざること、主のいへるごとし、「人もし上より生れずば神の國を見るを得ず」（イオアン三の三）ゆゑにすべて主を信じ、主につきて、此の生出をうくるを賜はりし者は天上の喜びと大なる樂みとを其所生者にあたへん。すべての天使と聖なる天軍とは、神により生れて神となれる靈魂の爲に喜び祝せん。けだし此身は靈の肖似にして、靈は神の像なり、されば身は靈なくんば、死物にして、何事も爲すあたはざるごとく、靈も天に屬するの靈なく神の神なくんば、天國のために死物にして、神なくんば、神に屬するところのものを爲すあたはざるなり。

四、畫工は王の面に向ひ、注目熟視して、其形像を畫かんに、もし王の面が畫工と眞直に相對してこれに向ふとき、畫工のために其形像を畫くに便利にして、宜しきを得んしかれども王が面をそむけるときは、畫工は描くとあたはず、何となれば面は描く者に向はざればなり、かくの如く最勝の畫工たるハリストスも、彼を信じて不斷彼に向ふ所の靈魂には、直ちに己の形像によりて天に屬する人を畫きて、其神により、又其の消滅すべからざる光の實在により、天に屬する形像を描きて、靈魂に美にして且善なる新郎をあたへ給はん。然れどももし誰か不斷彼にむかはずして、他のすべてをかろんぜざらん時は、主は其光を以ておのれの形像を彼に描かざるなり。ゆゑに我等は彼を信じ、彼を至愛し、すべてをすて、彼れ獨りに注意し、彼に對して眼光を凝さんことを要するなり、これその天に屬する形像を描きて、これを我等が靈魂に降しつかはさん爲にして、かくの如くなれば我等はハリストスをおのれに負ふて、永遠の生命をうけ、これを確信して、なほ此世に在りても安息するを得ん。

五、金貨はもし王の形像を己れにうけずして、これをおのれに印せざるときは、賣易に適用せられず、王庫に納められずして、人皆これを投棄てん、かくの如く靈魂も得もいはれざる光によりて、天に屬する神の形像を有せず、即これに印せられたるハリストスの形像を有せずんば在上の實の爲には不要にして、天國の商人たる善なる使徒等のために投棄てられん。けだし召ばれたれども婚禮の服をおのれに有

せざる者は、これと關係なき他人として、外の幽暗に投げられん、けだし天の形像をおのれに有せざればなり。これ即靈魂に印せられたる主の徴象と記號となり。これ即得もいはれざる光の神なり。それ死者は生者の爲に絶て要なく、何の爲にも全く益あらず、故にこれを外に搬出して、市外に置かん、かくの如く神聖なる光の天に屬する形像をおのれに有せざる靈魂、即靈魂の生命を有せざるものも、價値を有せずして、全く投棄てられん、何となれば光りかゞやく神聖なる光をおのれに有せざる死したる靈魂は諸聖者の都のために大に不要なればなり。此世に於て身體の生命は靈魂なるごとく、永遠なる天の世界においても靈魂の生命は神の神なり。

六、故に信じて主に至らんことを努力する者はなほ此世においても、神の神をうけんために祈禱すること肝要なり、何となれば彼は靈魂の生命にして、主の來りしは猶此世に於て靈魂に生命、即己の光をあたへんが爲なればなり、けだし錄していへり、『光のある間に光を信せよ』(同九の四)ゆゑにもし人は此世に於て靈魂のために生命、即神聖なる神の光を尋ねず、又これをうけずんば、彼は體より出去る時に於て天國に入らず、魔鬼及び其使等と共にゲエンナに終を有して、左方なる幽暗の國に退けられん。たとへば金又は銀の如し、彼は火に投せらるゝときは、いよ〳〵純潔に、いよ〳〵良品となりて、樹も草も何物も彼を變ずることあたはざるべし、何となれば自から火の如くなりて、凡そ彼に近づくところのものを喰ひ盡せばなり、かくの如く靈魂も靈神なる火と神聖なる光の中に在りて、惡神の一よりも如何なる害もうけざるべし、もし何物か彼に近づくあらば、神の天火を以て滅されん。あるひは又鳥のごとし、高きに飛ぶときは、掛念する所あるなく、捕者をも狡猾なる獸をも恐れず、高く飛揚して、すべてを笑はん、かくの如く靈魂も神の羽翼をうけて、天の高きに騰上すれば、すべての上にありて、すべてを笑はん。

七、肉身的なるイズライリはモイセイが海を分ちしとき、海底を經行せり、然れども「ハリステアニン」は神の子となりて、姦惡なる力の慘憺たる海の上を進行するなり、何となれば、彼等が身も靈も神の家となりたればなり。アダムのおちいりし日にあたり、神が來りて樂園を逍遙し、アダムを見て哀惜せるは、たとへば左の如くいひしものゝごとくなりき、『かくの如き幸福の際に汝は如何して惡をえらびたるかの如き榮譽の後にいかんして耻をおのれに負ひたる、汝は何故今かくの如く暗きされ、かくの如く醜うせられ、かくの如く弱くなれる。かくのごとき光の後にいかんして闇黑は汝をおほひたる』と。アダムが陷りて神のために死したるとき、造物主は

彼の爲に哀惜し、天使と諸の天軍と天と地と悉くの造物は、彼の死と墮落とを嘆息せり、けだし造物はおのれに王として與へられし者が敵たる姦惡の力の奴隷となりしを見たればなり。ゆゑに彼は、暗黑を以て、慘憺たる姦惡なる闇黑を以て其靈魂を掩へり、何となれば闇黑の君は彼に王となりたればなり。彼は則イエルサリムよりイエリホンに下るとき、賊に傷つけられて、半ば死したる者の如くなりたりき〔ルカ十の三十八〕。

八、それ主の復活せしめたまひしラザリは、大なる惡臭をみちみて、誰も其墓に近づくことのあたはざりし此ラザリは、大なる惡臭を其靈魂にうけて、汚穢と暗黑とをみちみてるアダムの狀態なり。さりながら汝はアダムの事、賊に傷つけられし者の事、及びラザリの事をきかんとき、汝の智が山にしたがひて放浪する如きを許すなかれ、これを其靈魂の內部に深く閉ざすべし、何となれば汝も彼と同樣なる傷を負ひ、同樣なる惡臭と同樣なる闇黑とを有すればなり。我等は皆此の暗まされたる種族の子にして、皆其惡臭に分ある者なり。アダムの種子より生れたる我等は皆アダムが苦みたる病症を以て彼と同く苦めり。けだし如此の病症はイサイヤのいふ如く我等にも及びたり、曰く『たゞ創痍と打傷と腫物のみにして、これを合すものなく、包むものなく、亦油にて軟ぐるものもなし』〔イサイヤ一の六〕。我等はかくの如きの治すべからざる打傷を以て傷つけられしが、獨り主はこれを療することを得べし。故に彼は自から來れり、けだし舊約に屬する者は律法も預言者も誰も此傷をいやすあたはざりしに、彼は獨り來りて此のいやすべからざる心靈の腫物を療したり。

九、故に眞實の醫たる神及び主をうけん、即來りて我等がために大に苦をうけて、獨り我等の靈魂をいやすを得る者をうけん。けだし彼が我等の心の門を不斷叩き給ふは、われら彼の爲にこれを開きて、彼は入りて我等の靈にとゞまり、我等彼の足を洗ひ且膏ぬりて、彼は我等に住所を作らんためなり。されば、かしこに主の足を洗はざりし者を主は譴め給ふ〔ルカ七の四十四〕。また他の所にもいふ『視よ我門の外に立つ、もし人我の聲を聞きて門を開かば我彼の處に入らん』〔默示錄三の二十〕。彼が其體を死に付し、我等を奴隸の位置よりあがなひて、多くの苦をうけたまひしは、我等の靈魂に來りて其中に住所をつくらんためなり。ゆゑに彼の審判に於て左に立てられ、魔鬼と共に地獄につかはされんとする者等にも、主はつげていへり『我が旅せし時我を宿らせず、飢ゑしとき我に食はせず、渴きしとき我に飲ませず』〔マトフェイ二十五の四十三、三〕。けだし彼の食も飲も衣も被覆も安息も我等が靈魂に於てす。ゆゑ

にわれらに入らんと欲して不斷門を叩き給ふなり。されば我等は彼をうけて己の內にみちびき入れん、何となれば彼は我等の爲にも食たり生命たり飲たり永遠の生命たればなり。ゆゑに今彼をおのれにうけず、おのれに安息せしめざるもろ〳〵の靈魂、否確言すれば自から彼れに安息せざる靈魂は、諸聖者と共に天國に於て相續權を有せずして、天の都に入るあたはざるなり。主イエスハリストスよ、汝は自から父と聖神と共に世々汝の名を讃揚する我等を彼にみちびき入れ給へアミン。

第三十一　講話

信者は己の智を變化し、悉くの思を神に集中せんを要す、神に對するすべての勤は實にこれにあり。

一、信者は苦きより甘きに變する心の變化によりてその自由なる意志の變せられんことを神に願はざるべからず。信者は背者のいやされしこと、血漏の婦の癒をうけしこと、獅子の性の鎮められしこと、火の性の作用をとゞめられしことを記憶すべし、何となれば神は最高尚なる美麗なればなり。汝は智と思を神にあげて、神を見んことを望むの外他の何物をも意に存せざらんことを要するなり。

二、ゆゑに靈魂は好走戲なる兒童の如く、罪によりて散亂したる思を集中して、これを鎭むべし、これを其體の家にみちびき入れ、不斷に禁食し愛を以て主を待ち、主が來りて實に靈魂を一に集中するの時を待つべし、けだし未來は知るべからざるにより、殊勝にもおのれの希望を舵師に托して、いよ〳〵彼に依賴すべく、又ファリサイが異種族人と共に生活せしも、イズライリ人に信を置きて彼等と共に生活するをたはりしことゝ、イズライリ人が己の希望を以て埃及に歸りしことを記憶すべし、異族人と共に居りしはファリサイに少しも害あらず、却て信仰は彼をイズライリ人の一員に加へたりし如く、罪も望と信とを以て贖罪主を待つ者に害あらず贖罪主は來りて心の思を變化して、これを神聖なる、天に屬する、善良なるものとなし、靈魂を眞實なる、浮戲れざる、散亂せざる祈禱に練習せしむるなり。言ふあり、長るゝなかれ『われ汝の前にゆきて崎嶇を平にし銅の門をこぼち、くろがねの關木をたちきる』（イサヤ四十五の二）また言ふあり『己を省みよ、恐らくは汝の心中にひそかに惡念を起していはん』（申命記十五の九）又『己の心にいふなかれ』此の民は繁くして强七』（同上の二十一）。

三、もしわれらは自から懈らず、猥りがはしき邪なる意念の爲に自から牧野をあたへず、思を主に强て向はしめて、己が自由を以て智をみちびくならば、主は己の自由を以て我等に來りて、われらを實におのれに集中し給はんこと疑なし、何となればすべて主を喜ばすことゝ、主に勤むることゝは、思にかゝればなり。ゆゑにつねに內部に於て主を待ち、思に於て彼を尋ね、己の意志を起しはげまして、その自由なる任意を不斷に彼に向はしめ、其意を喜ばせんことを努むべし。見よ主はいかやうに汝に來りて、汝の中に居所をまうけんとするかをけだし汝は其智を彼を尋ぬるにいよ〳〵集中すれば、いよ〳〵彼もそれに應じて、其善心と其仁慈とを以て汝に來りて汝を休ぜしめん。彼は立ちて汝の智と思と意の發動とを檢し、汝の如何やうに彼を尋ぬるか、汝の全靈よりするか、怠慢を以てせざるか、等閑を以てせざるかを監視せん。

四、而じて汝の彼を尋ぬるに勉勵するを認むるときは汝に公然とあらはれて、其助をあたへ、汝を其敵より救ひて、汝のために勝利をそなへん。けだし彼は先づ汝が彼に對する意向と汝がすべての待望を彼に向はしむるの如何とを檢し、汝を敎へそ汝に眞實なる祈禱と眞實なる愛とをあたへ給はん、これ即汝に於てすべてとなる彼自からにして、彼は汝の爲に樂園なり、生命の樹なり、眞珠なり、冠なり、家宰なり、農夫なり、苦をうくるものなり、無慾なる人なり、神なり、葡萄酒なり、活水なり、羊なり、新郎なり、戰士なり、武器なり、即ハリストスはすべてに於てすべてなるなり。たとへば嬰兒は自から己を助け、或は己の事を慮るを能くせず、母が憐みてかれを取るに至る迄は、たゞ母を見て泣くのみならん。篤信なる靈魂もかくの如く惡くの義を主に歸して、つねに獨一の主に依賴するなり。葡萄の幹より離されたる枝は枯れん、ハリストスなしに義と稱せられんを願ふ者もかくの如し。正しき入口より入らずして他の處より踰ゆる者は竊盜なり强盜なり〔イオアン十の一〕義と稱する者なしに自から己を義と稱するものもかくの如し。

五、ゆゑに我等は此の身體を舉げ、祭壇をきづき、我等が惡くの思を其上にそなへて、主に祈らん。天より見えざる大なる火を降さんためなり。彼は祭壇をも、すべて其上にあるものをも燒盡すべし。然らばヲアルの惡くの司祭即反對なる力は倒れん。其時天の雨が人手の如く〔列主記上十八の四十四〕靈魂に降るを見ん。これ預言者を以ていひし如く、神の約束の我等に應驗するなり。曰く〔我ダヴィドの倒れたる幕屋を興し、その破壞を修繕ひ、その傾圮をおさん〕〔アモス九の十一〕主が其仁慈によりて、

夜間暗中に無智の酣酔を貪る靈魂を照し給はんことを祈らん、然らば靈魂は覺醒して白晝の行、生命の行を成し、最早躓かずして來往せん。げだし靈魂は或は此世により、或は神の神によりて背むる所のものを以てやしなはれん、而して神もかしこに存在し、安息して留まり給はんとするなり。

六、さりながらおの〳〵もし欲するならば、おの〳〵何を以てやしなはるゝか、何處に生活するか、何に從事するか、自から己を試むべし、かくの如くにして、精確に辨別するの能力を悟り、且これを獲て善に向ふに己を全く付與せんためなり。しかのみならず祈禱を行ひて、意念と行爲が何れよりするか、神よりするか、或は反對者よりするかを察し、心に食を與ふるは主なるか、或は反對者なる此世の君なるかを察して、おのれを省みるべし。然らばおのれを試みて認識したる靈魂よ、汝は勢により愛を以て天の食とハリストスの育成及び行爲を主に願ふべし、いふあり「我等の居處は天にあり」〔フィリッピ三の二十〕と、然れどもこれ或者等の思ふ如く外形と狀態とにあるにあらざるなり。げだし視よ、たゞ敬虔の狀態のみを有する者の智と理解とは世に肖んかれらには自由なる任意の動搖と擾亂と恒ならざる思想と畏懼と戰慄とあるなり、いふあり「地に吟行ふ流離子となるべし」〔創世記四の十二〕恒ならざる意念の不信と錯亂とにより幾時か動搖せらるゝこと他の悪くの人々と同樣なる彼等の世と異なるは、一の外形と外部の人の外見上の發達とを以てして、思想を以てするにあらず、されば心と智とは世と地に屬する愛情の爲にいざなひ去られ、無益の煩慮に縛られて、使徒のいふ如くなる天の平安を心に得ざるなり、いへらく「神の平安は汝等の心の中に宰たるべし」〔コロサイ三の十五〕、これ即力とすべての兄弟を愛する愛とにより、信者の心を主宰して、これを新にする平安なり。光榮と叩拜とは父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第三十二　講話

「ハリステアニン」の光榮は今は其靈魂にあり、されど復活の時には恩寵の量に準じ、外にあらはれて、身體を表揚せん

一、此世界には種々の言語あり、何となればもろ〳〵の民に各己の言語あればなり。然れども、「ハリステアニン」は今も一の言語を學び、みな〳〵教訓を一の叡智より

即神の叡智より取りて、此世界と暫時にして過去る世の智慧とよりは取らざるなり、且「ハリスチアニン」は同じ造物の中に居るにより、己の爲に端緒を有形物體より借り來りて、新なる天の直覺と光榮と奥義とに登らん。動物の温良なる種類は例へば馬と牛との如し、かれらにはおの〳〵己の體の構造と己の聲とあり。野獸に於ても同じさを認めん、獅子には己の體の構造と己の聲とあり、鹿もまたおなじ。爬蟲類の間にも大なる差異あり、鳥にも其體の構造に多くの區別あり、然には其體の他に異なる構造と他に異なる聲とあり、また鶴にも異なる構造と異なる聲とあり。海に於てもこれとおなじさを見ん、彼此相似ざる多くの體あり。陸に於ても種子はおの〳〵己の果實を有す、樹は多けれども、大樹あり、小樹あり。野菜にも大なる差異あり、彼等はおの〳〵己の味を有するなり。草あり、彼等の間にも大なる差異あり、一は健康のために益し、他はたゞ芳香を發す。然れども樹はおの〳〵己の內部より其外部の衣を生じ、枝葉及び果實を產す、また種子も己の內部に其外飾の衣を能むるなり、百合は其內部より其衣を生じ、綠葉を以てこれを飾る。

二、かくの如く「ハリスチアニン」の中誰か猶此世に於て天の衣服を有するを賜はりしならば、其衣服は彼等の靈魂に止まらん。それ此の造物の破壞して、天と地の過去らんことは、神を以て預定せられたるにより、今猶靈魂に衣せてこれを表揚したる天の衣服は、彼等が復活の日に至り、墓より裸體にして起きる後は、其心に有せる狀態を以てこれを身體に衣せん。されば、「ハリスチアニン」が今も猶己れに得たる見えざる賜と、天の衣服とは、彼等に光榮を被らしめんこと明けし。羊或は駱駝は青草を尋ねて食料をむさぼり、直にこれを呑食して食物を內にたくはひ、飢餓の時に至れば此のたくはひしものを腹より翻嚼々爛するなり、されば彼等が先におのれにうけたるものはかれらを飽かしめん、かくの如く今なほ天國をうばひ、神を以て生活し天の糧食を味ひし者等も、復活の時に至れば、同じく此物は彼等がすべての肢體をおほひ且煖めん。

三、我等は種子の差異あることをいへり、即一の地面に多くの種子を蒔きて、彼此相同じからざる種々の果實を產することをいへり、樹の事もこれに同じ、もろ〳〵の樹の根は同一の地面にありといへども、其中一は大にして、一は小なり、天の教會もかくの如し、彼は唯一なれども、數へ盡されざる程多くして、各々天に於て神の光榮を以て特別に飾らるゝなり。たとへば鳥の如し、彼は其體より己の衣服を生ず、即羽翼を生ずれども、彼等の間に大なる差異ありて、一は殆んど地について飛ぶとい

へども、他は高く空中に騰らん、或は又天の如し、天は一なれども、衆くの星ありて、或星はいよ〳〵光り、或星はいよ〳〵大に、或星はいよ〳〵小なり、しかれども皆確定して一の天上にあらん、かくの如く諸聖人も神性の嚆一なる天にあり、見えざる地にありて、種々様々に飾らるゝなり。然れどもこれと同じく同一のアダムの智に生ずる所の思も種々同じからずといへども、心に來るところの神は一の思と一の心とを生せん、何となれば下にあるものも上にあるものも一の神を以て統治せらるればなり。

四、二に岐れたる蹄を有する動物は何を意味するか。けだし彼等は二の蹄を以て更に自由に行くにより、律法によりて正しく行く者の象となるべし。たとへば體の影は體其物によりて生ず、然れども其動に於ては自から人身に代はることあたはず、影は創痍を包み、食物をあたへ或はものいふことあたはず、然れども彼は體其物の生出する所にして體の存在をあらかじめ示す、かくの如く舊約の律法も新約の影なり。さりながら影は眞實を預示したれども、自から神に代はらざりき、何となれは肉身に包まれたるモイセイはもし神よりする神火よりする火が惡なる闇黑の力を破るあらずんば、心に入りて闇黑の不潔なる衣を脱せしむることあたはざれ

ばなり。それ法下の影にある割禮は將に近づかんとする眞實なる心の割禮を指示して、律法上の洗浄は即眞實の影なり。かしこに體は洗はれたり、然れどもこゝに洗禮はけがされたる心を火と神とを以て潔め且洗ふ。

五、かしこに往弱を以て覆はれたる司祭は己の爲、又民の爲に祭をさゝげんとして、聖所に入りき、しかれどもこゝには眞實なる司祭長即ハリストスは手にて造られしにあらざる幕屋に天の祭壇に一たび入りて、けがれたる良心を潔めんことを願ふ者の爲に準備をなし給へり、けだしいへり汝等と共に『世の終に至らん』(マトフェイ廿八の三十)。司祭長は十二の『パトリアルフ』の名をしるせる二の貴重なる寶石を胸間にかけたりき。かしこにありしものは象なり、かくの如く主も十二使徒を任命じ、かれらを福音者及び傳道者として全世界につかはしたまへり。見るべし近づく所の影は眞實をあらはすを。影は實務を行はず、病弱をいやさいるごとく、舊約の律法も靈魂の創痍と病弱とを醫するあたはざりき、何となれば生命を有たざればなり。

六、二の者の相配置する面は完全なるものなり、兩約もかくの如し。人は神の像と肖とによりつくられて、兩目、兩眉、兩手、兩足を有す、しかるにもしたゝ〳〵一目或は

一手或は一足の者あらば、これ彼の爲に非難すべきものとならん。或は鳥の如し、もし彼は一翼のみならば、一翼の爲に飛ぶこともあたはざるべし、かくの如く、人性ももし自己にある所のまゝ裸體にして存して、天の性の融和と體合とをおのれにうけずんば、一も善なるものを成すあたはざるべくして、自己の性のまゝ裸體にして存し、大なる不潔の爲に非難をうくべきものたらん。けだし靈魂は神の殿及び住所、又は王の新婦と名づけられたり。神はいふ、『我彼等の中に居り、彼等の中を行かん』(コリンフ後六の十六)。神は聖なる天より降りて、靈智ある汝の性をおのれにうけし程汝を憐みて、地に屬する肉體を其神聖なる神を以て融和し給へり、これ汝塵に屬する者も自から天の靈魂をうけんためなり。されば汝の靈魂が神と體合して、天の靈魂が爾の靈魂に入るときは、神に於て完全なる汝人は後嗣たり且は子たるなり。

七、さりながら神の大なると、神の奥妙にして測る可らざるとは、天上の世界も地下の世界もこれをおのれに容れざるなり、かくの如くこれと相反して、神が己を抑損して、いやしめ且小にする神の自卑をも、天上の世界も地下の世界も曉るあたはざるなり。けだし神の大なるも神の自卑も測る能はざるものとす。されば汝は神の攝理により、憂愁苦難の中にありて、創傷をうくるあらんも、此の己の爲に逆境なる如く思はるゝものは、汝の靈魂を益するにたすけん。それ世にありて富まんを欲するときは、種々の不幸は汝を迎へて、汝はみづから思ひ始めん、曰く『我世にありて不幸なり、いでや世を辭して神につかへん』と。終に此の考にまで達して、汝は誡命をきかん、曰く『汝の所有を賣れ』(マトフェイ十九の二十七)肉體上の關係を絶ちて神につかふべしと。其時汝は世にありて不幸なるため、又此によりてハリストスの誡命に從ふ者となるがために感謝するを始めん。終に汝は有形上に關しても己の思想を少しく變へて、世と肉體上の交際とより遠ざかりし、ならば、汝は亦智に於ても自から變じ、肉體上の僞智を天に屬するの深慮に更換せんことを要するなり。其時汝はきゝし所の誡命を考へ始めて、更に心の安きを得す、たゞ其のきゝし所のものを有せんとの配慮と勞とをおのれに攜はん。

八、汝が世を辭して、すべてを仕遂げたりと思ふ時、主は汝に向つていはん、『如何して誇るか。我は汝の體と靈とをつくりしにあらずや。汝は何を仕遂げたるか』と。しからば靈魂は主を信認し、主に願ふて言ひ始めん、『みな、汝のものなり、居る所の家は汝のものなり、わが衣服も汝に屬す、汝は我を發ひ、汝はすべての要用なるものを我に給す』と。其時主はこれに對して言はん、『我は、汝に憐を施す、此の所有は汝に屬す、此の

善良なる意志も汝に屬す。汝が我を愛したる爲汝が我に扱を求めたるにより、視よ汝が今に至る迄有せざるものと、人々が地上に於て有せざるものとを汝にあたふ、汝の靈魂と共に我主をもうけよ、汝常に我と與に喜び樂まんためなり」と。

九、人に聘定せらるゝ女は己がすべての財産と、己がすべての持參物とを大なる愛を以て夫にさゝげ、これを其手に付していはん「一も我自已に屬するものなし、此のわが財産は汝の財産にして、此の持參物は汝に屬す、我が靈魂も我が身體も汝に屬せん」と。謙遜なる靈魂もかくの如し、彼は主の聖なる神と體合する主の處女なり、ゆゑに主は地に來りて、苦をうけ釘せられしにより、汝も彼と共に苦をうけんこと肝要なり。けだし世に遠ざかりて神をたづね、神の事を思ひ始むるや、最早汝は己の天性と從前の品行と、又汝の生來の習慣とたゝかはざるべからず。然れども此の習慣とたゝかふ時にあたり、汝に反抗して、汝の智とたゝかふ意念を發見せん、而してこれらの意念は汝を曳去りて、汝が逃れ避けたる有形物の中に汝を徘徊せしめん。其時汝は意念を意念に對立せしめ、靈魂を靈魂に、神を神に對立せしめて、戰を始めん、さらば此處には最早永遠の靈あらん。

十、けだし心に存する或る暗黑の力の神秘にして且鋭利なるものゝあらはるゝ、あらん、故に主は汝の靈と體との近きに在て、汝の戰を照覽し、不可思議なる天に屬する意念を汝に入れて、窃に汝の心を安せしめん。さりながら姑く猶汝を教習の下に留め置きて、其患難により恩寵は汝を照管するなり。しかれども安然に到り達するときは、汝をして神自からを認識せしむべく、汝を益するが爲に汝を放棄して、戰にあらしめたる所以を汝に示さん。たとへば保育者の下に在る富人の子の如し、教誨者が彼を懲戒する間は、教導も創傷も鞭撻も重く苦しき如く思はれて、壯者となるに至る迄はこはかくの如くなるべけれども、壯者となるに及んでは、最早保育者に感謝するを始めん、かくの如く恩寵も成人に到り達せざる間は照管的に教習せしむるなり。

十一、農夫は何處にも種子を投じ、葡萄の樹を植うる者はみな〳〵果を結ばんを願ふ、然れども其後鎌を持來りて、果を見ざるときは、哀まん。かくの如く主も其言を人心に種かんことを欲す。さりながら農夫が不毛なる田地のためにかなしむ如く、主も不毛にして果を產せざる心の爲に憂ひ給はん。風は何處にもすべての造物に吹きわたる如く、又太陽は全世界をあたゝむる如く、神性も何處にもあらざるなうして、到處に彼を看得べし。もし天上にこれを尋ぬるならば、かしこにも天使等の思

に於て得らるべし、もし地上にこれをたづぬるならば、こゝにも人々の心に於て得らるゝなりざりながら神の意に適する「ハリスチアニン」としてあらはるゝものは、多くの者の中僅々なり。光榮と美麗は父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第三十三　講話

不斷熱心に神に祈るべし。

一、われらは祈禱するに身の練習により又習慣によりて叫び或は默し、或は膝を屈むることをなさず、肅然として智に注意し、神が來りて、靈魂のすべての出發と運路と又そのすべての感覺に於て、これを點視するを待たんことを要す。かくの如くなれば或時は默すべく、或時は叫びて聲を擧げ祈禱すべし、たゞ智は神に確定せんことを要するなり。げだし身體は作工する所ある時は、事に勉勵し、全くこれに從事して、すべての肢體は互に相助けん。かくの如く靈魂も意念にいざなはれず、徘徊顧望せず、すべての待望をハリストスに托して、祈禱と主を愛するの愛とに全くおのれをさゝぐべし。

二、されば、かくの如くなれば主はみづから眞實なる願を敎へ、神に應ずる清くして神なる祈禱と、神と眞を以てする叩拜とをあたへて、靈魂を光照せん。さりながら貿易に從事せんと決心せし者は、利益を得んがために、たゞ一の企業のみを狙ふにあらず、一の企業より他の企業に移り、此よりして更に新なる利源に急ぎつゝ、潤益を大に增加せんことに百方盡力し、利益を產せざる企業はこれをすてゝ、つねに最有利なるものに向はん、かくの如く、我等も眞實にして大なる利益を得んがため、即眞實を以て祈禱するを我等に敎ふるの神を得んがために、種々の方法を以て、己の靈魂を巧みに支度せん。げだしかくの如くなるときは、主は靈魂の善なる任意にといはりて、これを光榮の寶座となし、これに坐して、これに安んじ給はん。かくの如く我等は預言者イエゼキリの書に於て主宰の車を駕せる靈物の事をきけり。かしこに彼の生物は至つて清潔なるものとしてあらはされたり、神をおのれに抱ける靈魂確言すれば神に抱かるゝ靈魂もかくの如し、何となれば彼はすべて目となるべければなり。

三、所有者が自から現住する家屋はもろ〳〵の裝飾と美麗と莊嚴とにみちみてられん、かくの如く主宰を己れに有して、主宰の駐在する靈魂も、もろ〳〵の美麗と

莊嚴とにみちみてらるゝなり、何となれば主はその靈界の寶と共に彼の住者たり、又駕御者たればなり。所有者が居らずして主人の無き家は禍なり、何となれば彼は破壞荒廢して、もろ〳〵の不潔と紛亂とにみちみてらるればなり、かしこには預言者のいふ如く、『怪鴟と惡魔と』(イサイヤ十三の二十一)居らん、何となれば野猫、野犬及びもろ〳〵の不潔物は荒廢せし家屋に於て己が居所を得んとすればなり。重き墜落より起きざる靈魂は禍なり、彼は其の內部に己をハリストスより遠ざけて、新郎と仇たらんことを勸誘し、强ひて其意を敗壞せしめんと欲する者を有すればなり。

四、しかれども主は靈魂が己の力に應じて、己を一に集中し、日夜主を尋ねて、主に呼ぶこと、すべての爲に不斷祈禱すべきを誡命せし、(ルカ十八の七)彼を其の有るところの惡るを見るときは、既に約せし如く彼を援け。(フェサロニカ前五の十七)如くなる習より潔めて、無玷清潔なる新婦の如く、自からこれを己の前に立たしめんされば汝は此事の眞實にして、實際眞實なるを信ずるならば、己れに注意すべし、汝の靈魂が己を誘導する光と、眞實なる食と、眞實なる飲とを得たるや否や、即主を得たるや否やを檢せよ。もしこれを得ざりしならば、これをうけんが爲に日夜尋ねよ。ゆゑに太陽を見るときは、眞の太陽を尋ねよ。けだし汝は旨なればなり。光を覩るときは汝は、眞實善良なる光を得たるや否や、己の靈魂を省みるべし。すべて見ゆる者は心中にありて見えざる者の影なり、見ゆる人の外に他の內部の人あり、即サタナが旨ならしめたる他の目と、又彼が聾ならしめたる他の耳とあり、しかれども、イイスは此の內部の人を健全なる者とならしめんが爲に來り給へり。彼に光榮と權柄は父及び聖神と共に世々に歸す。アミン。

第三十四　講話

復活に於て「ハリステアニン」の身體が靈魂と共に照されて、受くる所の光榮の事。

一、身體の目はすべてを明に見る如く、諸聖人の靈魂にも神の性の莊嚴は明々亮亮としてあらはれん、これ「ハリステアニン」がこれと共に融和せられ、これが爲に思想する所のものなり。さりながら彼の光榮は身體の眼にはかくれて見えざれども、信ずる者の靈魂には明にあらはるゝなり、信ずる者の靈魂は罪により死して、主はこれを復活せしむること、死せし身體を復活せしむる如くし、これが爲に新天新地

と義の太陽とを備へて、其神性よりすべてをこれにあたへ給ふなり。それ眞實なる世界あり、生ける者の地あり、豐盛なる葡萄樹と生命の餅と活水とあることは、錄していへるげとし、曰く『我信ず、わが主の仁慈を生ける者の地に見るを得んことを』〔墓詠二十六の十三〕またいふ『主をおそるゝ者には義の日出でゝ昇らん。その翼には醫す力をそなへん』〔マラヒヤ四の二〕また主はいへり『我は生命の餅なり』〔同六の三十五〕又いへり『然れどもわがあたへんとする水を飲む者は世々に渴かざらん。我が彼に與へんとする水は其中に於て永遠の生命に湧く水の泉とならん』〔同上四の十四〕。

二、すべて主の來り給ひしは、暗黑と罪と不潔なる神と凶惡なる力の墓に死者となりて横ぬる所の人の爲なり、これ主が今此世に於て此人を復活再生せしめ、これをもろ〳〵の汚穢より潔め、其光を以て照し、其神性の天に屬する衣服をこれに着せしめん爲なり。しかれども身體の復活に於ては、これに先んじ靈魂は復活して榮をうくべくして、今猶光照せられて榮をうけたる靈魂により、此身體も榮をうけて光照せらるべし、何となれば主はかれらの爲に家たり、幕屋たり、又都城たればなり。かれらは手造にあらざる天の住所に於て神聖なる光の榮を衣ること、光の子となりし者の如くならん。互に惡しき目を以て見ざらん、何となれば惡謀をうばゝれたればなり、かしこには『男性も女性も奴隸も自主もあるなし』〔ガラヂヤ三の二十八〕何となればみな〳〵神聖なる性に變化して善なるものとなり、諸神となり、神の子となりたればなり。かしこに於ては其時兄弟は姉妹を耻づるなうして、平安をのべん、何となればみな〳〵

ハリストスに於て一となりて、みな〳〵一の光に安んずれば

なり。彼等は互に注意せん、而して彼此相注意する間に直ちに眞實を以て、得もいはれざる光の眞實なる直覺を以て照らされん。

三、かくの如く彼等は互に多くの景狀を見、多くして且同じからざる神聖なる光榮を見て、おの〳〵驚嘆し、他の光榮を看望して、得もいはれざる喜を以てよろこびたのしまん。神の光榮の言ひあらはす能はざると思議すべからざるとを見ん、何となれば其光榮は得もいはれざる光、永遠の秘義數へ盡されざる幸福なればなり。けだし有形世界に於て、凡て地上にある多種多樣なる植物と種子と花とは何人もかぞへつくす能はざるべく、すべて地上の富みは誰もこれを量り或はこれを認むるあたはざるべし、或はすべて海中にある生物或は其數、或は種類、或は區別、或は其水の分量、或は海の廣さは一人も智慧にて包容するあたはざるべく、或は空中を飛ぶ鳥の數、或は其種類、或は其殊異多樣なるを認むる能はざるべく、或は天の大さ、或は

星の位置、或は其運行を曉り得るの力はあらざるべし、かくの如く無量無限にして思議すべからざる「ハリスチャニン」の富も、これを言ひあらはし、或は書きしるすことあたはざるなり。けだしこれらの造物は人々の爲に此の如く包容する能はず、又思議すべからずんば、刱んやこれを造り且これをそなへ給ひし者をいかんして思議すべけんや。ゆゑに人はかくの如く誰も言ひあらはすことも書きしるすことも且あたはざるの富と闘業とを「ハリスチャニン」の爲にそなへられしを見て、大に喜び苦行に着手して、此富をうけんこと肝要なり、何となれば「ハリスチャニン」の闘業と其分とは神自からなればなり。けだしいふあり、「主は我が闘業とわが富との分なり」〔聖詠十五の五〕光榮は彼の自から己れをあたへて、其聖なる性を「ハリスチャニン」の靈と一たらしむる者に世々に歸す。アミン。

第三十五　講話

舊「スポタ」と新「スポタ」の事

一、神はモイヒイをもてあたへたる法律の影に於て「スポタ」におの〳〵安息して、一事も爲すなからんことを命じ給へり。しかれどもこは主の靈魂にあたへらるゝ眞實なる「スポタ」の象たり、影たるなり。けだし恥づべき不潔の意念より救はるゝを賜はりたる靈魂は、すべて暗黑なる行を空うし、これより自由を得て、眞實なる「スポタ」を祝し、眞實なる安息をもて休せんとするなり。けだしかしこには預象的「スポタ」において身體は休息したれども、靈魂は奸計と惡癖とにつながれたり、しかれども此の眞實なる「スポタ」はよこしまなるサタナの意念を空うし、これより潔まりて、主の永遠の安息と喜びとに於て安息せんとする靈魂の眞實なる安息なり。

二、當時神は無言なる動物も「スポタ」に於て休息せんことを命じて、牛をば必要の重きを負はせて曳かず、驢には軛を怒せざりき、けだし動物も苦役をまぬかれて休息したり、かくの如く主は來りて眞實永遠なる「スポタ」を賜ひて無法と不潔なる意念の軛を負ふて苦み、不義の行を强て行ふ所の靈魂を安息せしめたり、何となれば靈魂は殘忍なる虐主の奴隷となりて、彼に事へたるによる、ゆゑにかれを其任ひ易からざる軛とむなしき不潔なる意念とより免れしめ、不義の行の重軛をかれより脫し、不潔なる意念に苦められたる彼を安んせしめたり。

三、けだし主は人を安息にまねきていへり、『凡そ勞苦する者及び重きを任ふ者は我に來れ、我爾等を安んせじめん』（マトフェイ十一の廿八）。されば從順にして來る所の靈魂を彼は此の重く苦しむる不潔なる意念より安んせしむべくして、靈魂はもろ〳〵の不法を空うし、眞實にして愉快なる且聖なる「スポタ」を祝し、得もいはれざる喜びと樂みの靈神的祭を祝し、純潔なる心を以て純潔にして神に悅ばるゝ奉事をおこなはん。これ眞實にして且聖なる「スポタ」なり。ゆゑにわれらも此安息に入り、耻づべくして惡なる且徒らなる意念を空うせられんことを神に祈らん、かくの如くなれば純潔なる心により神につかふまつりて、聖神の祭を祝するを得ん。されば此安息に入る者は福なるかな、光榮はかくの如く憐を垂れたまひし父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第三十六　講話

靈魂と身體と二樣の復活、及び復活せし者の光榮の不同なる事。

一、滅されたる靈魂の復活は今も猶これあれども、身體の復活は彼の日にこそあるなれ。さりながら天に奠められたる星はみな〳〵一樣にあらずして、光明を以ても大さを以てもたがひに異なるあり。かくの如く同一の神を以てする靈神的進歩を爲すに於ても、信の量にしたがひ、一は他に比すれば更に富みてあらはるゝなり。聖書にいべり、『方言を言ふ者は神の神を以て言ふ』と（コリンツ前十四の二）。されば彼は神と語りて、神に屬するなり。然れども『預言する者は敎會の德を建つ』（同上四）。これ餘分の恩寵を有するなり。けだし前者はたゞ自ら己の德を建つるのみなれども、後者は己をも人をも建つ。是れ即地にまかれたる麥粒の如く、一の中心より多くの同じからざる粒を出だすなり。且其穗も一は大にして、一は小なれども、みな一の納屋と一の穀倉に納めらるべくして、おの〳〵同じからずといへども、これによりて一の餅は製造せらるゝなり。

二、あるひは市に多くの人民あるがごとし、其中一は小なる兒童にして、他は壯者たり、又は青年たらん、しかれども皆一の泉より水を飲み、一の餅を食ひて、一の空氣をおのれに有するなり、あるひは燈火を想ふべし、一は二燭を有して他は七燭を有するならば、こは其光更に盛にして彼は別に照らん、かくの如く火と光の中に在る

者等も暗中に在るあたはずといへども、彼等の間には大なる差異あり。もし誰か父として二人の子を有せんに、一は幼者にして、他は青年ならば、青年はこれを市又は郡につかはせども、兒童をば何處にも自から伴はん、何となればいまだ何も爲すわたはざればなり。神に光榮は歸す。アミン。

第三十七　講話

樂園の事、及び神的律法の事。

一、錄していへるあり『世の友たるは神に仇たり』(イアコフ四の四)ゆゑに聖書はこれ人が樂園の如く言を守りて、恩寵を樂み、內部に匿卿して逸樂の資となるものを勸むる蛇にしたがはざらん爲なり、けだし兄弟を殺すの怒はこれより生ずべくして、これを生ずる靈魂は死せん、されば主の言ふ所に意を留めて、信と望とを慮るべし、けだし永生にみちびく所の神を愛し人を愛するの愛はこれより生ずるなり。

ノイは誡命を守り且行ひて、此樂園に入り、愛の爲に怒より救はれたり。アウラアム

はこれを守りて、神の聲をきけり。モイセイはこれを守りて、顯面に榮をうけたり、これとおなじくダヴィドもこれを守りて耕耘せり、故に敵に對して主權を執れり、然れどもサウルは心を守りし間は善き進歩をなしたれど、終に至りて誡命を破るや、全く棄てられたりき。けだし神の言は各人の才能にしたがひ、それに比例して、人に理會せしむるものなれば、人のこれを領するだけは領するを得べく、守るだけは守らるゝなり。

二、ゆゑにすべて聖なる預言者と使徒と致命者の全隊は其心に言を守りて、他の慮を有せず、地に屬するものを輕んじて、聖神の誡命に心を專にし、神に悅ばるゝものと善なるものとをすべてのものより重んじて、たゞに言語と一片の認識とを以てするのみならず、言を以ても行を以ても、實際富に代へて貧しきをえらび、榮譽に代へて汚辱をえらび、快樂にかへて苦難をえらび、且これにより激怒にかへて愛をえらびたりき。けだし浮世の歡喜をきらひ、これをうばふものを殊に愛して、己の目的に助くる者の如くし、以て善者と惡者との認識を制限したりき。惡くの人を認めて主宰の攝理につとむる責任ある勤務者となして、善なる者を否まず、惡なる者を咎めず。ゆゑに惡くの人に對して善なる心情を有したりき。けだし『人を忍せ、然らば

汝等恕されん」〔ルカ六の三十七〕との言を主よりきくや、其時侮辱者を以て恩惠者と思ひ、侮辱をゆるす機會をあたふる者となせり。また『人の汝等に行はんと欲する所の者は汝等も是の如くこれを人に行へ』〔マトフェイ七の十二〕との言をきくや、其時善なる者を良心によりて愛したりき。けだし彼等は己の義を舍きて、神の義をたづねたれば、自然にこれにかくるゝ所の愛を發見し得たるは當然なりとす。

三、主は愛のことに關する多くの誡命をあたへて、神の義を尋ぬべきを命せり、けだし義は愛の母たるを知りたればなり。たゞ近者を以てするの外に救を得るあたはざるべし、これぞ恕せよ汝等も恕されんと誡命したる所以なる。これ即借者の心に銘せられたる神的律法にして、こは第一の律法を成すなり。けだし主はいへり、『我が來るは律法を毀たんが爲に非ず、乃ちこれを成さんためなり』〔マトフェイ五の十七〕。しかれどもいかにして律法は成就せらるべきか、よろしく聽くべし。第一の律法に罪を犯したる者よりも辱をうけたる者を重く罪したるは、充分の理由によれり、けだしいふあり、『他人を譏するは適に之を以て己を罪するなり』。しかれども恕す者は恕されん〔ロマ二の一、シラフ二十八の二〕。けだし律法の言によるにいふ、裁判の中に裁判あり、疵の中に疵あり〔復傳律令十七の八四〕。

四、故に罪を恕すは律法を成すなり。されども我等は第一の律法のことをいひしは神が人々に二の律法をあたへたるによるにあらず、これに反して、律法は一なり、性に關係しては律法は神的なれども、窘逐に關係しては各人を至當の窘逐に服せしむるなり、彼は恕すものに恕せども、窘逐するものを窘逐す、けだしいへり、『潔き者には潔きを以て、邪なる者には其邪を以て施す』〔詩篇十七の二十七〕。ゆゑに律法を神的に成し且これに準じて恩寵にあづかる者は恩惠者を愛するのみならず、誹謗者及び窘逐者をも愛して、此の善の爲の報酬として神的の愛を待つなり。しかれども我がこれを善と名づくるは侮辱を宥すによるにあらず、侮辱したる者の靈魂に恩惠を施すによる、彼等は其者の爲に神に祈禱すること其者によりて幸福をうけたる如くせん、いふあり、曰く、『人我が爲に爾等を訴へ、窘逐し、爾等の事を謗りて諸の惡しき言を言はんときは爾等福なり』〔マトフェイ五の十一〕。

五、さりながら彼等は神的律法の下にありて、かくの如く深慮するをまなべり。けだし彼等は忍耐して靈神上の温柔を守りしにより、主は戰ふ者の心の忍耐と勝たれざる愛とを見て、防禦の壁を毀ち給へり、されば彼等は全くの怨敵を棄て、最早努力を以てせず、神の助によりて愛を有したりき。終に主は自ら舞旋する劍〔創世記三

の二十四)起る所の意念を止めん、されば彼等は『主が我等の爲に前驅として入り給ひし慢の内に』(エウレイ六の二十)入りて、神の果を以て樂まん、而して心の堅固を以て未來を洞觀しつゝ、察するに鏡を以てせずして、使徒と同じくいはん、曰く『神が彼を愛せし者の爲に備へし事は目未だ見ず耳未だ聞かず、人の心に未だ入らず』と(コリンフ前二の九)。さりながら余は此の奇異なる事につきて問はんとす。

六、問、もし人の心に入らずんば、いかんして汝等は此を知るか、矧や汝等も我等と同情の人なりと、使徒行實(十四の十五)に自から認めたるに於てをや。

答、さりながらパウェルのこれに答ふるを聽くべし。彼はいへり『惟我等には神己の神を以て之を顯せり、蓋神は察せざる所なし神の深きをも察するなり』(コリンフ前二の十)。然れども人誰かいはん、彼等使徒たる者には神を與へられたれど、我等には本性に於てこれを容るゝ能はざるべし、といふ者あらん。ゆゑにパウェルは別所に祈禱をさゝげて、次の如くいへり、曰く『願くは彼は其光榮の富に循ひ、其神を以て、爾等に、内なる人に於て強く堅められ、信に由りてハリストスの爾等の心に居るを賜はんことを』(エフェス三の十六、十七)、またいへり『主は神なり、主の神のある所には自由あり』(コリンフ後三の十七)、またいへり『もし人ハリストスの神を有たずば、ハリストスに屬せず』(ロマ八の九)。

七、ゆゑにわれらも篤く信じ、深く感じて、祈禱せん、我等にも聖神を賜はりて、我等が出で來りたる其處に入らん爲なり、靈魂を亡す蛇と、高慢なる慫慂者と、煩悶及び大酒の神が終に我等より遠ざからんためなり、ゆゑに堅く信じて、主の誡命を守り、これにより長じて成全の人となり、齡の量を達せん、然らば此世の誘惑は最早我等を主宰せざるべくして、神にて保證せちるゝ我等は神の恩寵が悔ゆる罪人に憐みを垂れ給ふを信ずる信念をうしなはざらん。けだし恩寵によりて賜はるものは、これに先だつ所の劣弱とは比較にもならず、然らずんば恩寵は恩寵にあらざるなり。さりながら全能の神を確信し、純一にして好事的に非ざる心を以て、神を受くるを賜ふ者に就くは信に由る、行を信に當るに由るにあらざるなり。けだしいふあり『神をうけしは律法の行に由るにあらずして、聽きて信せしによる』(ガラティヤ三の二)。

八、問、汝は言ふ、すべてのものは靈魂に神秘に隱るゝありと『教會の中に在りては我が智を以て五言を言はんを欲す』(コリンフ前十四の十九)とは何を謂ふか。

答、教會は二の種類に解するを得べし、或はこれを信者の集合として解すべく、或は心の組織として解すべし。ゆゑに教會を靈神的に、即人の意味に取るときは教會

は人の全組織なり、然れども五言とは多く、の種類に分れて全人の德を建つる五の公なる德行を示す。主の事を言ふ者は五言を以て凡ての智慧を包括する如く、主に從ふ者も五の德行を以て大なる敬虔を建てん、何となれば此の德行は五なれども、他のあらゆるものを自から包括すればなり。第一は祈禱、次は節制、次は施與、次は貧、次は寛忍にして、此等は皆願望と任意とにより成りて、主を以て語り心を以て聽く靈中の言なり、けだし主は行爲して、神は其時心中に於て言ふ、而して心の懇願するにしたがひ顯然として行ふなり。

九、しかれども此等の德行は衆人のために一般のものなるにより、他の德行に對して密着に關係するなり。けだし第一者の在らざると共にすべては消滅せん、されどもこれと同樣第二者と共にこれに次ぐ所のもの及び其他も包括せらるゝなり。けだし神が人を感せしめずんば、いかんして人は祈禱すべきか。聖書はわが爲に證者たり、いへらく『聖神に由らざれば、一人もイエスを主と稱ふることあたはず』（コリンフ前十二の三）。然れども祈禱なしに節制する者は、いかんして此の助なしに堅く立たんや。またすべてに節制せざる者はいかんして飢ゑたる者又は辱められし者に對して憐憫なる者となるべけんや。然して無慈悲なる者は任意に貪しくなるを甘心せざらん。かへつて激怒し易きは人の金を有ち有たざるに拘はらず之を貪る心と共に在るなり。さりながら豪雄なる靈がかく聖堂に建增するは、これ爲したるによるにあらずして、望を起したるによる。けだし人を救ふは人の自己の行にあらずして力を賜ふ者の行なり。ゆゑにもし誰か主宰の旋をさへ忍受するならば、たとへ何事を爲したりとも、またたゞ何事をか愛して行爲を預め始めたりとも、自から己の爲に自負する心を有せざるべし。故に何の時か德行に於て主に先んせんと思ふなかれ、使徒のいふ所の如し、曰く『神は其善旨を以て爾等の裏に望む事をも行ふ事をも爲すなり』（フィリッピ二の十三）。

十、問、聖書は人に何を爲すを命ずるか。

答、人が天性自然に行爲を預め始むる心を有して、神がこれを促し給ふことは我等先に既にいへり。故に人の先づ理會し、理會して愛し、而して自由の望により預め始めんことを命ずるなり。しかれども意を行にみちびき、或は勞を忍耐し、或は事を成就するは、これ即主の恩寵は望を起したる且確信したる者にあたふるなり。ゆゑに人の自由の望は至要なる條件といふべし。もし自由の望なくんば、神は己の自由により爲し得るといへども、自から何も爲し給はざるべし。ゆゑに神を以て事を成

就するは、繫る所人の自由の望にあり。又我等は己が十分なる自由の望をあらはすならば、すべてに奇異にして全く思議す可らざる神はすべての行爲を我等に歸せん。我等人々は神の奇蹟の或る部分を或は聖書に基づき、或は確言すれば聖書にをしへられて語らんを思ふ。げだしいふあり、『誰か主の智慧を知るを得ん』と〔コリンフ前二の十六〕。而して神もみづからひひ給ふ、曰く『幾次か汝の諸子を集めんことを欲したれども汝等は欲せざりき』〔ルカ十三の三十四〕。ゆゑに神は自から我等を集めて、われらよりたゞ自由の望を促すを信ずべし。然して自由の望の顯れとなるものは善意的勞苦にあらずして何ぞや。

十一、　鐵は或は切り、或は割り、或は地を耕し、或は植付するときは、壓搾せられて、自から深く入らん、さりながら他に人ありてこれを動かし、これを當て、もし折るゝときは、火に燒てこれを新にせん、かくの如く人も善を爲して傷心疲勞したりといへども、主は見えずして、其人の中に行爲し、疲勞傷心の時には心を慰めて、これを新にするなり、預言者もいへり、『斧はこれを用ひて伐るものに向つて自から誇るべけんや、鋸はこれを執る者に對して自から高ぶるべけんや』〔イサイヤ十の十五〕。惡に於てもこれと同じきあり、人が從順にして支度するときは、サタナは彼を勵まし、彼を鋭くすること、賊の劒を鋭くする如くせん。我等心を鐵に比したるは其無感覺と其大なる殘忍とによる。さりながら我等はおのれを統治する所の者を知らざること無感覺なる鐵の如くなるべからず。反つて牛及び驢馬の如く、我等を勵まし、わが悟性によりて我等をみちびく者の誰なるを知らんことを要するなり。げだしいへり、『牛はその主を知り、驢馬はその主人の厩を知る、されどイズライリは識らず』〔イサイヤ一の三―五〕。ゆゑに祈禱せん、われら神を識るの認識を得、父と子と聖神を世々に讃榮し、其聖誡を實行するがために神的律法をまなばんことを。アミン。

第三十八　講話

眞の「ハリステアニン」と眞の「ハリステアニン」の如何なるとを試み知らんには、われらに多くの注意と瞭解とを要す。

一、一見したる所正しきが如くなる多くの者は、「ハリステアニン」と認めらるゝなり、さりながらかくの如き者等は、王の印と像とを實におのれに有するか、或は意匠

者の業事に偽印を押して、それが爲に意匠者は或は慾き或は谷むるをなさゞるかを試み知らんことは練達にして實驗ある人々の行爲なり。練達なる人にあらずんば、當事者、即欺騙者を試み知るあたはざるべし、何となればかれらも僞道士或は「ハリステアニン」の像をおのれに負へばなり。けだし僞使徒もハリストスのために苦をうけ、彼等も天國の事を福音したればなり。ゆゑに使徒はいへり『我勞に服せしこと較多く、鞭うたれしこと過度、獄に繫がれしこと更に多し』（コリンフ後十一の二十三）と、これを以て使徒は自から彼等よりも多く苦をうけたるをあらはさんと欲す。

二、金はたやすく搜索せらるべし、しかれども王冠の爲に適當なる眞珠と寶石とは、稀に發見せらるゝのみにて、彼等の中にも用に適するものとならざる者の多きことしば〳〵これあり。かくのごとく、ハリストスの榮冠のために他の靈魂を建つる所の「ハリステアニン」も、其靈魂が聖者の同伴となりしを見るは稀なりとす。光榮はかくの如く此靈魂を愛して、これがために苦をうけ、これを死より復活せしめたる者に歸す。さりながらモイセイの面に怕ありて、民は其面を見るあたはざりし如く、今も爾の心に怕ありて、神の榮の見えざるを致す。しかれども怕を脫するときは、神は自からあらはれて「ハリステアニン」と神を愛して實に神を尋ぬる者に己をあらはし給ふこと、主の自ら言ふ所の如くならん、曰く『彼に己を顯はして彼に居住をなさん』（イオアン十四の二十一、二十三）。

三、されば許約と新しき約束をうけんが爲に謹らざるハリストスに至ることを努めん、けだし十字架と死とをもて地獄と罪の門戸をやぶりて、篤信なる靈魂を引出し、其內部に撫恤者をあたへて、これを其國にみちびき入れ、以て約束を新にしたればなり。ゆゑに我等は彼の都なるイエルサリムと、天の教會と、聖なる天使の集合に於て彼と共に王たるべし。然して兄弟の中久しく練習して實驗を經たる者は實驗なき者に助けて彼等を憐むを得ん。

四、或者は己を防守して、神の恩寵の强くおのれに作用する時にあたり、己が肢體の聖にせられたるを發見し、自から己の事を決定して思へらくハリストス教には最早肉慾の餘地あるなく、謙遜清潔なる智は自から求め得らるべくして、內部の人は最早神聖なる天に屬するものに高飛せんとす。ゆゑにかくの如き人は完全の度に達すること疑なしと思ふ、しかるに己を以て安然の港に入りし者と思ふや、彼に對して波は起り、彼は再び身の海中にありて、たゞ水と天とのみなる處に引去られ、まさに死せんとするを覺らん。かくて我等に入り來れる罪は種々に惡慾を作生

せん。さりながらかくの如き者は、或る恩寵を新に賜はることゝたとへば全海の深きより一小點滴をうくる如くして、これに於て毎時毎日おこなはるゝ所の奇跡を見んゆゑにかくの如く非常にして且新なる神妙なる行爲に遭遇したる者は、欺騙せられし者の如くおどろき且あやしまん。終に神妙にして天に屬する恩寵は彼を照し、彼を導き、彼を和げて、すべてを善良ならしめんゆゑに諸王及び有權者、智者及び高名なる者は彼に比すれば小なる者、卑き者の如く思はれん。然れども漸次時來りて事情は一變す、ゆゑにかくの如き人は實に己をあらゆる人類よりも更に罪あるものと思ふ。而して又他時には己を見てさながら偉大非常なる王の如く、或は王の有力なる友の如く思ふべし。而してまた他時には己を無力にして貧なる者と思ふべし。終に智は困難するなり、故に或はかくの如く思ひ、或はまた然らざらん、何となれば善の嫉妬者たるサタナは德行に大に發達するものに惡をすゝめ入れて、彼等を敗壞せしめんと力むればなり。事情はかくの如し。

五、しかれども汝は內部の人におこなはるゝ所の義を爲して、彼に降伏するなかれ、彼處にハリストスの祭臺は汚れざる聖所と共に立てらるゝなり、汝の良心を死せる行よりきよむるハリストスの十字架を以て誇るべし、しからば汝は己の神を以て神に勤め、拜する所の誰なるを識ること、錄して言ふ如くならん、曰く『我等は拜する所を知る』『イオアン四の二十二』。汝をみちびく神にまかせよ、汝の靈魂は神と體合すること、新婚の新郎と與にする如くなるべし。けだしいふあり『此の奧義は大なり、我ハリストスと無玷なる靈魂とに於てこれを言ふ』『エフェス五の三十二』。主に光榮は世々に歸す。アミン。

第三十九　講話

神が我等に神聖なる書を與へたるは何の爲か。

一、王あり、其詔敕と其賜とをあたへんと欲する者に文書を遣し、衆に知らしめていはん、『速に我に來りて王の賜を我よりうけんことを努めよ』と、しかるにもし來りてこれをうけずんば、文書を讀むは其者に利益を與へざるのみならず、來りて王の手より榮譽をうけんことを望まざる爲に、直に死に罰せらるゝものとならん。神の書もかくの如し、王たる神が文書としてこれを告示し、人々の前にあらはしたるは、神を呼び且信じたる者が天の賜を願ふて、これを其神性の實在よりうけんためな

りげだし錄していへるあり『神の性に與る者とならん爲なり』(ペトル後一の四)されども、もし人は來らず、願はず、受けずんば、聖書をよむも、彼に益する所あらざるべし、反つて天の王より生命の賜をうけんことを望まざるために、死に閉せらるゝものとならん、けだし此の賜なくんば、不死の生命なるハリストスを求め得るあたはざればなり、彼に光榮は世々に。アミン。

第四十　講話

すべての德行も又すべての惡行も互に關連すること、環の鎖に於ける如くして、一は他に係る事。

一、至愛者よ、外部に屬する苦行的生活と、生活の有樣の高尚にして第一なる者につきては左の如くなりと知るべし、すべての德行は互に相關連すること、靈神的鎖における環の如くにして、一は他に係るなり、即祈禱は愛に係り、愛は喜に、喜は溫柔に、溫柔は謙遜に、謙遜は勤勉に、勤勉は望に、望は信に、信は從順に、從順は正直に係るなり。かくの如くこれと反對なる側にありても、惡行は一は他に係るなり、怨恨は怨怒に係り、怨怒は驕傲に、驕傲は虛誇に、虛誇は不信に、不信は殘忍に、殘忍は緩慢に、緩慢は懶惰に、懶惰は煩悶に、煩悶は不勤忍に、不勤忍は奢侈に係るなり、其他諸の惡習も亦互に關連すること、猶善なる側にありて德行の互に相關連して一は他に係るが如し。

二、すべて善なる勉勵の中に於て首要なるもの一と功勞の頂上とは、勉焉として祈禱に專なるにあり。祈禱を以て神にねがひて他の德行を日々に求むることを得べし。祈禱の賜を得たる者に於て神の聖德と靈神上の力に親與することも、聰明なる心情が主に對する得もいはれざる愛に連合一致することも、此より生せん。けだし日々に己を强ひて祈禱を務むる者は、神に對する靈神的愛を以て神聖なる心服と火焰の如くなる願望との爲に燃え人を聖にする靈神的完全の恩寵をうけん。

三、問、人あり財產を賣り、奴隸を放ち、誠命を遂行すれども、此世に於て神をうくるを力めざるにより、彼等はかくの如く生活するも天國に入らざるか。

答、これ精考を要するの件なりげだし或者は主張していふ、國も一、地獄も一なりと、しかれども我等はいはん、同一の國と又同一の地獄に多くの階段と差異と程度のあるありと。それすべての肢體に於て靈魂は一なれども、上にありては彼は大腦

の中に働き、下にありては彼は足を動かさしむ、神性もかくの如し、彼は天にあるものをも下は淵にあるものをも悉くの造物を包括して、其測るべからざると圍む能はざるとにより、造物の外にも居れども、何處にもすべて造物の中に在り。ゆゑに神性はみづから人々に注意してすべてを睿智を以て攝理するなり。それ或者は求むるところを知らずして祈禱し、他は禁食し、又他は役事に專なるにより、義なる審判者たる神は信仰の量にしたがひて各人を賞するなり。けだし彼等が爲すところのものは、神を畏るゝの寅畏によりて爲せども、彼等はみな悪く子たり、王たり、嗣業者たるにあらざるなり。

四、一は世に於て殺人者たり、他は姦淫者たり、或者は搶奪者たれど、或者等は、亦己の財産を貧者に分ち施さんに、主は彼と此とを見て、善を爲す者には慰安と賞とをあたふべし、而して餘り有るの分量もあり、又些少なる分量もありて、其光と其榮とに於ては種々同じからざるなり。地獄と罰とに於ても毒殺者あり、盜賊あり、又他の小事に於て罪を犯しゝ者あらん。されば天國は一、地獄も一にして、階級あらずと、斷定する者は悪しく說を爲すなり。今日觀玩に耽り、其他の放蕩に溺るゝ世の人類は幾許あるか。また祈禱して神を畏るゝ者は幾許あるか。神は彼と此とを見、義なる審判者として、一者には慰安をそなへ、他者には罰をそなふるなり。

五、人々車に駕し、馬を御して、互に突進し、おの〳〵敵を衝落して、勝を奏せんを努む。かくの如く苦行者等の心はみづから觀場をあらはして、かしこに凶悪の諸神は靈魂とたゝかひて、神と天使等は苦行を諦視せん。然のみならず、多くの新なる意念は時々靈魂を以て生せらるべく、亦悪者を以て入れらるゝなり。けだし靈魂は隱れたる意念を多く有するありて、時にこれを生出せしむべく、また悪者にも多くの意念と目算とありて、時々靈魂に向つて新なる意念を生せしめん、何となれば智は騎士なり、彼は靈車に駕し、意念の轡を執りて、サタナの車に向つて突進す、けだしサタナも靈魂に向つて車を準備すればなり。

六、問、祈禱は即慰安なるに、或者等『祈禱するあたはず』といひて、祈禱を務めざるは何故か。

答、慰安は其有餘を以て矜恤又は他の勤に及ぼさん、たとへば兄弟を訪問し、傳道を勤むる如き是なり。又天性も往て兄弟と遇ふて言を述ぶるを促す。火に投せらるるものは其天性のまゝにて存するあたはず、必ず自ら火とならん。かくの如く、もし細末なる石を火に投せば、それよりしてそこばくの石灰は成らん。もし人は餘りに

深く海中に沈みて、其中心に至らば、溺死せん、されど漸々水中に入る者は再び出で來り、浮んで岸に達して、陸上の人を見んと欲す。靈神界に於てもかくの如し、或者は恩寵の深きに入りて更に其友の事を記憶すべく、又天性も行て兄弟に至り、愛の本分を盡し、言を以て彼等を堅めんことを促す。

七、問、恩寵と罪とは同時に心中に居るを得るか。

答、火は銅器の外にあれど、次で薪を添ふるときは、器は熱して、器の内にあるものは器の外に燃ゆる火の爲に煮られて沸騰せん。されどもし人は怠りて薪をそへずんば、熱は漸々滅じて消滅せん、かくの如く恩寵も汝の内部にある天の火なり。もし汝は祈禱して其意念をハリストスを愛するの愛に付するならば、さながら薪をそふる如く、汝の意念は神を愛するの愛に浸されん。それ神は遠ざかりて汝の外にあるが如しといへども、彼は汝の内にも居りて、汝の外にあらはるゝなり。されどもし誰か聊たりとも或は世事に或は放心に自から己を委して、漸く怠慢なるときは、罪は再び來り、靈魂を衣て、人を窘逐するを始めん。靈魂は以前の安息を思出し、憂愁して、しきりに苦しむを始めん。

八、智は新に神に向ひ、以前の慰安は新にかれに近づき來り神をいよ〳〵切に尋ぬるを、新に始めていはん、曰く『主よ汝に切願す』と。靈魂を燃してこれを安んせしむる火は漸々加はり來ること、恰も釣針を以て魚を少しづゝ深處より引出す如くならん。しかれどももしこれあらずして、靈魂は苦きと死とを味ふならば、いかんぞ苦きを甘きより、死を生より區別して、生活を施すの父と子と聖神を世々に感謝するを得ん。アミン。

第四十一　講話

恩寵にも又惡習にも漸々生長する靈魂の奥底は甚だ深し。

一、靈魂の貴重なる器は大なる深處に存在すること錄していへる如し、曰く其淵と心とを試みんと（シラフ四十二の十八）人が誡命に背きて怒を被りし後、罪は人をとらへて、己の屬下となし、透徹して深遠なる苦き淵の如く、自から内部に入りて、靈魂の牧野を其最深き奥底に至る迄占領したりき。かくの如くなれば靈魂とこれに混淆したる罪は多くの枝葉ありて地の深き處に根ざしたる大なる樹に比ぶべし。

かくの如く靈魂に入りたる罪は其牧野を最深き奥所に至る迄占領して慣習となり蔽錮となり、幼時より各人に生長し、養成せられて人に惡を敎へんとす。

二、ゆゑに神聖なる恩寵の作用が各人の信仰に準じ、靈魂を庇蔭して、靈魂が上より助をうくるときも、恩寵は靈魂を猶唯一部おほふのみなり。されば何人も靈魂は全く照明せられたりと思ふなかれ、其内部には惡習の爲に大なる牧野の猶存するありて、人にはたらく恩寵と融和するの大なる勢と盡力は人の爲に要用なり。ゆゑに瞬間に人を淨めて完全なる者となすを得る神聖なる恩寵が漸々靈魂を防問するを始むるは、人の自由なる意志の何に於ても惡者と親まず、己を恩寵に全く委ねて、神に對する全き愛を守るや否やを試みんが爲なり。かくの如くなれば靈魂は時と多くの年所を經る間に練達なるものとなり、何を以ても恩寵を怒らしめず、又愛ひしめずして漸々己のために助を見ん。然らば恩寵も亦自から靈魂に於て牧野を占領し、靈魂が多年練達して恩寵と融和するものとなるに準じ、その最深き組織と意念に至る迄根を放つべくして、靈魂は全く此器中に最早王たる所の天の恩寵を以て圍まるゝに至らん。

三、しかれども人は大なる謙遜をまもらずんば、己をサタナに委し、既にあたへられたる神聖なる恩寵を剝ぎて裸體にせらるべくして、其時彼の自誇は霧はれん、何となれば彼は裸體にしてまづしくなればなり。ゆゑに神の恩寵に富まざるゝものは大なる謙遜と中心の悲傷とに居り、己を以て一物も有たざるまづしきものと爲して、左の如く思はんこと肝要なり、曰く『おのれに有するものはすべて他に屬するものにして、他人が我にあたへたるなり、されば欲するときは我よりとらん』と。かくの如く神と人々の前に己を謙る者は其あたへられたる恩寵をまもるを得ん、言ふあり『自から卑うする者は高うせられん』（マトフェイ廿三の十二）人は神の被選者となりて自から己を罰すべし、また忠義なる者となりて己を當らざる者と思ふべし。かくの如き靈魂は神の意を悅ばしてハリストスを以て活かされん。彼に光榮と權柄は世々に歸す。アミン

第四十二　講話

人を完全にみちびき、或はこれを害ふ者は、外部に屬するものにあらずして、內部に屬するものなり、即或は恩

寵の神なり、或は凶悪の神なり。

一、大なる市は城垣の破壊により敵の爲に略取して荒らさるゝならば、北廣きは市の爲に何の益もあらざるべし。故に市に要用なるは其大なると共に堅固なる城垣を有するにあり、敵のこれに侵入せざらんがためなり。かくの如く知識と通曉と最鋭利なる智力とを以てかざられたる靈魂はこれを大なる市に比ぶべし。さりながら試に問はん、彼は敵の入りて荒らさゞらんが爲に神の力を以て堅められしや否やと。けだし此世の賢哲たるアリストテリ或はプラトン或はソクラトの如きは其確實なる知識により、これを大なる市に比ぶべし、然れども敵の爲に荒らされたり、何となれば彼等には神の神の在さゞりしによる。

二、これに反して無學なる人々は恩寵に與かる者となり、十字架の力を以て堅められたる小市に似たるあり。しかれども彼等が恩寵をうばゝれて亡ぶるは二の理由による、或は患難に遇ふて大量に忍耐せざるにより、或は邪なる快樂を喜びたのしみてこれに耽るによるなり。彼等は誘惑なしに旅行を終ふることあたはざるべし。それ子を產するときは、まづしき者も王后もひとしく苦を感せん、これと同じく地も力めて耕さずんば、富める者の爲にもまづしき者の爲にも美果を產せざらん、心靈上の行爲に於てもかくの如し、智者及び富者が恩寵を以て王となるは、他にあらず、忍耐と憂患と多くの辛勞とに由る、何となれば、「パリスチアニン」の生活はかくあるべきものなればなり。蜜は甘きものなれば苦き或は毒あるものを一もおのれにうけざらん、「パリスチアニン」もかくの如し、すべて善なる、或は惡なる、如何なることに遭遇するありとも、慈憐なる者として存すること、主のいひ給ひし如くなるべし、曰く『慈憐なること汝等の父の慈憐なる如くなるべし』（ルカ六の三十六）しかれども人を害ふものと汚す者とは人の內部にあること主のいひ給ふ如し、曰く『童心より出づる者は惡念なり』と（マトフェイ十五の十九）けだし人の內部にある者は人を汚さん。

三、ゆゑに凶惡の神は內部に心中を徊徊來往す、これ靈智ある煽動者即闇黑の帝、舊き人にして、すべて神に趨り就く者が脫せざるべからざる所のものたり、天に屬する新しき人即パリストスを衣んがためなり。是故に外部にあるものは一も人を害ふあたはずして害ふものはたゞ活潑にして有勢なる、心中に居住する闇黑の神なり、故に人はおの〳〵意念に於て戰はざるべからず、パリストスの其心を照さんためなり。彼に光榮は世々に歸す。アミン。

第四十三　講話

「ハリステアニン」たる人の進歩と其進歩のすべての力とは心に關係するを種々に描寫す。

一、多くの燈と光り耀く蠟燭は火にて點されん、されればすべて蠟燭と燈は性に於て同一のものを以て點されて照る如く、「ハリステアニン」も性に於て同一なる神の子の神聖なる火を以て燃者せられて光り照らさん、而して彼等は其心に光りかゝやく蠟燭を有すれば、猶地に在るも主の前に光ること、主の自から光り給ふ如くならん。けだし言ふあり、『神よ、汝の神は歡の膏を傳けしこと汝の侶に勝れり』(聖詠四十四の八)。これによりて見るに彼がハリストスと稱さるゝも、彼が傳けられたる膏を我等も同く傳けられて、傳膏者とならんためにして、いはゆる彼と一性一體の如くならん爲なることは更にいふ所の如し、曰く、『聖にする者も聖にせらるゝ者も皆一の者より出づ』(ヱウレイ二の十一)。

二、ゆゑに「ハリステアニン」はおのれに膏を有する燈即義の果を有するものと稱々似たるあり。されどもし燈は彼等に於て神性の燈を以て點火せられずんば、彼等は無に歸せん。主は神性の神により光り耀く燈にして、人性によれば神は實に彼に存在して其心を燃せり。たとへば眞珠をみちみてる朽敗せる袋の如く、外部の人によればいやしめかろんせらるゝを免れざる「ハリステアニン」も自己に於て、內部の人に於ては貴重なる眞珠を有するなり、されども他の人々は粉堊を施したる墓に比ふべし、彼等は外見に於ては彩られ且飾らるれども、內部には死骸と大なる惡臭と不潔なる神とを充滿し、神の前に死せるものにして、もろ〳〵の汚辱と不潔と反對者の闇黑とにおほはるゝなり。

三、使徒はいへり、小兒はいまだ幼稚なる間は、『受托者及び家宰の下にあり』とガラティヤ四の一)即惡神の下にあるなり。しかれども此等の神は小兒の成長を欲せず、然らずんば成全なる者となりて其家事に注意し、主權を强請せんとするによる。「ハリステアニン」は神を念ふの記憶をつねに有せざるべからず、けだし錄していへり、『爾の心を盡して爾の主神を愛せよ』(復傳律令六の五)云意はたゝ祈禱の室に入るとき神を愛する心を有するのみならず、路にあらんか、談話せんか、食を嘗めんか、神を念ふの記憶と神に對するの愛と服從の心とを有すべし。けだし彼はいへり、

汝の心のある所には爾の財もあらんと（マトフェイ六の二十一）人の心のつながれ人の望の引かるゝ其物は、其人の爲に神とならん。もし心はつねに神を願望するならば、神は其者の心の主なり。世を棄て、無欲者となり、家無き者となり、禁食者となりし者といへども、なほ或は自己につながれ、或は世の物體に、或は家に、或は父母の愛につながるゝなり。しかれども其心のつながれ其智の虜にせらるゝ其物は、即彼の神なり。されば彼は潤き門によりて世より出でたれども、狭き門により世に入りて陷ることあらはるゝなり。火に投せられたる枯枝は火力に抵抗するあたはずして、直ちに焼かれん、かくの如く魔鬼も神の賜をうけし人を襲はんと欲するときは、神聖なる火の力を以て焼き滅されん、たゞ人は自からつねに主に附きて、希望を以て主に信任せんことを要す。然らば魔鬼は不拔なる山の如く堅からんも、祈禱を以て焼かるゝこと、蠟の火に焼かゝる如くなるべし。さりながら靈魂には其際大なる戰と爭のあるありて彼と角逐せん。かしこには蛇の川あり、獅子の口あり、及び靈魂を焼く所の火あるべし。惡に成熟したる者は誘惑の神の爲に醉はしめられて、或は人を殺し、或は姦淫する、惡行に於て飽くことを知らざらん。聖神を以て洗せられたるハリステアニンの惡に未熟なるもかくの如し。恩寵を有するも猶罪につながるゝ者は戰々兢々として恐るべき路を行かん。

四。航海する商人は順風靜海の中にありといへども、港に入らざらん間は、つねに畏懼の下にありて、逆風俄に起り、海波掀飜して船の危きに瀕するあらんことを思ふ、かくの如く「ハリステアニン」も聖神の快適なる風の吹渡るを自から覺ゆといへども、なほ畏懼の下にありて、反對なる力の風の起るあらざるか、吹くあらざるか、其靈魂にいかなる騷擾と動亂の起るあらざらんかを思ふなり。ゆゑに安然の港と、完全なる世界と、永遠の生命と、永遠の樂と、諸聖者の都と、天のイエルサリムと、累子の教會（エウレイ十二の廿三）に入らんには、大なる勉勵を要するなり。されども此等の段階を未だ經ざる者の爲には、是の經行の時にあたりて、惡なる力は如何なる陷穽をか設けざらんかと戰々兢々するの理由多くあるべし。

五、姙娠したる婦は兒を其胎内に暗き所に抱かん、いはゞ不潔なる所に抱かん。されど終に緊要の時至りて、兒が胎より出るあらば、婦は天の爲、地の爲及び太陽の爲に曾て見ざる所の新造物を見るべくして、知人親戚は直ちに欣々たる喜色を以て兒を取りてこれを抱かん。されども或る不規則により兒が胎内に於て死するあらば、既にこれが爲に定められたる醫に趨り就きて、鋭利の器械を用ひざるべからず

して、其の時兒は死より死に、暗より暗にうつらん。靈神界に於てもこれと同じきを認むべし。神性の種子をおのれに受けたる者は、見えずしてこれをおのれに有するも、其在る所の罪の故に、暗黒にして恐るべき所に消え失せんゆゑに己を保護して種子を守るならば、緊要の時に至り公然とこれを生むべく、而して終に分娩して體と離れし後は、天使等及び天の集合體は欣々たる喜色を以てこれをうけん。されど勇氣にして戰はんが爲に自己に對してハリストスの器械を擧げたる者が、もし弱るならば、直に彼は敵に付さるべく、而して體と離るゝときは目下彼を圍む所の暗黒より他の更に恐るべき暗黒と亡滅とにおもむかん。

六、繁盛なる樹と芳香馥郁たる他の植物のある園を想ふべし。園はすべて美麗につくりあげられ、且飾られて保護の爲には塀に代へて小垣をめぐらさる、されど意外にも茲に急流なる川の過て流るゝあらん。水は輕しといへども、垣を打つならば其基を傷つけ、自から通路を求めて、漸々に基を全く打碎き、園に入りて、あらゆる植物を損じ、且これを根絶にし、悉くの勞を空しからしめて、園は無結果なるものとならん。人心に於てもかくの如きあり。彼には美はしき意念のあるあり、しかれども己れを衝落して、これを己の方に引去らんとする罪の流れも斷えず心に近づかん。ゆゑにもし智は少しにても輕騷にして不潔なる意念にわたさるゝならば、視よ、最早詛誤の神はかしこに自から牧野を見付け、悉くの美觀を破壞顚倒し、善なる意念を無に歸せしめて、靈魂を荒らさん。

七、目は他のすべての肢體に比すれば小にして、其瞳子は更に最小なるに拘はらず、甚だ重要なる器械なり、何となれば天や星や太陽や月や市や及び其他の萬物を即時に見るべくして、其即時に見ゆる所の物は悉く眼の小なる瞳子に一樣に映すればなり、かくの如く智も心中にありてこれと同じきものあり。心は自から小なる器械なり、さりながらかしこには蛇あり、かしこには獅子あり、かしこには毒獸あり、かしこには邪惡のすべての隱伏所あり、かしこには平坦ならざる屈曲する路あり、かしこには淵あり、しかれどもかしこにはまた神もあり、かしこには天使等もあり、かしこには生命と國もあり、かしこには光と使徒等もあり、かしこには恩寵の寶藏もあり、かしこには一切あるなり。げだし雲霧が全宇宙に彌漫するあらば、人は人を見ざらん、かくの如く破誡の時以來、此世の雲霧は掛りて一切の受造物と、すべての人性の上にあり、故に此の暗黒におほはれたる人類は夜間に恐るべき所に生活を爲す。それ或家に烟の大に充滿する如く、罪と罪とにけがされたる意念と魔鬼の無數

の多きとは心の意念に窃に入りて、彼處に坐するなり。

入、世に戰の布告せらるゝや、才ある人々、及び貴人等はかしこに出張せず、死を畏れて家に留まれども、新に現はれる貧しき平民等は召集せられて、戰にのぞむんに、彼等は敵に勝を奏して、これを國より追拂ふならば、これがために王より賞と榮冠とを受けて、名譽と勳位とを得ん、然して彼の大なる人々は彼等の後に瞠若たらん、靈神界にもかくの如きあり。無學者は最初言をきくや、義を好ひの念慮と共にこれを實際に遂行して、神より神的恩寵をうけん、しかれども智者及び言を細に考究する者等は戰をのがれて進まず、却て戰にあづかりて勝を奏せし者等の後に瞠若たらん。

九、つよく吹く所の風は一天の下にある一切の造物をうごかして大なる喧噪を起さん、かくの如く仇敵の力も意念を煽動剽掠し、心の深處を搖動して、己が意にしたがはしめ、己れに勤めしめんが爲に思を散せしめん。又税官はせまき入口に坐し、入り來る所の者を留めて、これを詰責せん、かくの如く魔鬼等も靈魂に注目してこれを引留むるなり、されば、もし靈魂は全く清められしにあらずんば身體より出づるにあたり、天の第宅に入りて主宰に謁見するの許可を得ず、空中の魔鬼の爲に下に持ち去られん。さりながら肉體の中に在る者等は勞と大なる盡力とによりて、上より主の恩寵を猶受くることを得ん、されば、かれらは德行の生活の爲に慰安を得達したる者等と共に去りて主に至らんこと、主の自から約束し給ひし如くなるべし曰く『我が在る所は我に事ふる者も亦彼處にあらん』（イオアン十二の廿六）而して彼等は又及び子及び聖神と共に限り無き世を主治せん、今も何時も世々に。アメン。

第四十四　講話

心の慾と病とを療するハリストスは「ハリステアニン」たる人に如何なる變化革新を成し給ふか。

一、神に來りて、ハリストスの徒とならんことを實に願ふ者は、己が從前の性狀及び品行を更改變化し、己を最勝れたる新しき人としてあらはし、齎き人に屬するものは一もおのれにとゞめざらんとの目的を以て來らんことを要するなり。けだしいへり『人もしハリストスに在らば、新なる受造物なり』（コリンフ後五の十七）我等が主イイスス、ハリストスの來りしは、本性を變化更造してこれを新にせんがために

して、犯罪の結果により慾の爲に貶せられたる此靈魂を神聖なる神を以て銘解して、これを新に造らんがためなり。彼が來りしは、彼を信ずる者等を新しき智となし、新しき靈となし、新しき目となし、新しき耳となし、靈神的なる新しき舌となさんがためなり、一言を以ていへば彼等を新しき人となさんがためなり、或は其智識の光を以て彼等に膏ぬり、彼等を新しき甕となして、これに新しき酒、即其神を注ぎ入れんがためなりけだしいへり、新しき酒は新しき甕に盛るべしと（マトフェイ九の十七）。

二、敵は其從はしめたる人を取りて、これを己の爲に新しき者となし、有害なる情慾を以て圍み、罪の神を以て浮ぬりて、之にもろ〳〵の不法とあしき教の酒を盛れり、かくの如く主も人を敵より救ひて、これを新しき者となし、神を以て浮ぬりて、これに生命の酒と、神の新しき教を注入し給へり。五、餅の滋養質を變じて許多の餅の滋養質となし、天性無言なる驢に聲をあたへ、淫婦を貞潔に歸せしめ、天性燒き盡す所の火をして爐に投せられたる者を潤さしめ、ダニイルの爲に猛獸、即獅子の性を鎖めたる者は、罪の爲に荒れて暴くなれる靈魂をも聖善なる許約の神を以て慈養温柔、和平に變せしむるを得べし。

三、牧者は狂癲を發したる羊を醫して、これを狼より守るを得ん、かくの如く眞實の牧者たるハリストスはたゞ獨り來りて、亡びたる、痂におはれたる羊、即人を罪なる不潔と瀨とより醫して、これをハリストス、彼自己に歸らしむるを得たり。蓋往昔の司祭たる、レヴィト及び教師等は禮物と祭とを献ずるを以ても、血を灌ぐを以ても、靈魂を醫すあたはざるのみならず、自己をも醫す力あらざりき、何となれば自かも劣弱に圍まれたればなり、錄していへる如し、『蓋牡牛と牡山羊との血は罪を除くあたはず』（エウレイ十の四）。主は當時の醫の劣弱を示していへり、『爾等必ず我に諺を引きていはん醫師よ己を醫せ』（ルカ四の廿三）と、此諺を以て主は左の意味を言ひあらはす、曰く『我は彼の無能にして自己を醫すあたはざる者の如きにあらず、我は眞實なる醫、良善なる牧者なり、我は羊の爲に己の生を棄て、もろ〳〵の靈魂の病と劣弱とを醫すを得たり、我は一次祭にさゝげられたる無玷なる羊にして、我に來る者を醫すを得たり』と、眞實なる醫愈は獨一の主を以て靈魂にあたへらるべし、けだしいへり、『視よや神の羔、世の罪を任ふ者』（イオアン一の廿九）、これ言意は彼を信じて全心より彼を愛したる靈魂の罪を任ふ者なりとなり。

四、ゆゑに善き牧者は痂におはれたる羊を醫せども羊は羊を醫すことあたはざるべし。されば有言の羊たる人はもし醫されずんば、天に屬する主の教會に入ら

ざらん。律法に於ても影と象とを以てかくの如くいへり。けだし癩者と身の殘缺を有する者とのことを布告して神は此を了解せしむるなり。言ふあり、癩を患ふる者と身體の殘缺を有する者とは、主の教會に入らざるべしと〔レヴィト二十一の十七、二十五〕。さりながら癩を患ひし者に行きて祭司に至りて嘆願すべきを命せられしは、祭司に其幕屋に來り、癩に、即癩に犯されたる箇所に手を按してこれを醫さしめんがためなりき〔レヴィト十三章〕。これと同じくハリストス、將來の福の眞實なる司祭長は、罪なる癩を患へたる靈魂に降りて、其身の幕屋に入り、情慾を醫治し給ふ、さらば其時に靈魂は最早眞のイズライリなる諸聖者の在天の教會に入るを得べし。けだし情慾の罪なる癩をおのれに負へるすべての靈魂は、もし眞實の司祭長に就かずして、今も猶彼を以ていやされずんば、諸聖者の營と、天の教會に入らざらん。此の教會は無玷清潔なるものとして、無玷清潔なる靈魂を要するなり。けだしいへり〔心の清き者は、禍なり、彼等は神を見んとすればなり〕〔マトフェイ五の八〕。

五、實にハリストスを信ずる靈魂は、目下の邪惡なる狀態より他の善良なる狀態に移り、目下の卑辱せられたる本性を他の神聖なる本性に變じ、聖神の助力と共に新なる本性とならんことを要するなり、さらば其時に靈魂は天國の爲に要用なるものとなるを得ん。しかれどもこれたゞ彼を信じ、實に彼を愛して、其惡くの聖誡を遂行する我等のみ此を達するを得べし。それエリセイの時、天性輕くして水に浮ぶ所の樹が、水に投せられ、天性重き所の鐵を自から負ふて出でしならば、まして主はなほ此處に於ても輕くして動かし易き善なる天の神をつかはし、彼をして凶惡の水中に沈める靈魂を輕くし、羽翼を生せしめて、天の高きに移し、其本來の性を變化改造せしめんとするなり。

六、それ水より造られて水上に浮ぶべき輕快にして動かし易き大なる船なくんば、此世に誰も自から海を渡り過ぐることあたはざらん、何となれば海を歩む者は溺れて亡ぶればなり、かくの如く靈魂も惡くの惡を蹂躙して行過ぐるハリストスの神の動かし易き、天に屬する輕翼なる者をおのれに受くるなくんば、慘憺たる罪の海を自から渡り、姦惡なる力と闇黑なる慾の過ぐる能はざる淵に勝ちて、これを越ゆることあたはざるべし。聖神に由り、靈魂は正しく進んで、眞直に天に屬する安息の港に着し、王城に入るを得るなり。さりながら大船を浮ぶる者は海より汲みて飲まず、衣と食とを海より取らずして、これを外より船にもたらさん、かくの如くハリステアニンの靈魂も天の食と靈界の衣とを此世よりうけず、上より天よりこれ

をうけ、これを以て善なる生活を施す神の大船に座して、首領及び權柄の反對凶惡なる力を超ゆるなり。すべて人々が乘りて慘憺たる海を渡る所の船は一の木質よりつくられん、かくの如く「パリステアニン」のすべての靈魂も天の光と獨一なる神の種々なる賜の獨一なる神性を以て堅められて凶惡の全海を過渡らん。

七、さりながら大船のよく航海せんが爲には、船長は要用にして、これと同じく温和快適なる風も要用ならん、かくの如く主も信者の靈魂に於て、此の凡てのものとなるべし。彼は靈魂に力をあたへ天候險惡にして罪の暴風の吹起るときは、荒立つ濁惡の波を游渡らしむるなり。彼れ自から能力と迅速と熟練とを以て波の動亂を鎮むるはこれ彼の知る所なり。これに反して天の船長たるパリストスなくんば、雖も暗黑なる力の濁惡なる海と慘憺たる誘惑の起あがる波とを渡ることあたはざるべし。けだしいへり『天に昇り淵に降る』(聖詠百六の二十六)。すべて船を御し戰を作し、誘惑を支へ得るの熟練は激浪を歩みたる者の知る所なりけだしいへり、『彼親ら試みられて難をうけし、ゆゑ試みらるゝ者にも能く助くるを爲す』(エウレイ二の十八)。

八、ゆゑに我等が靈魂は現在の狀態より他の狀態にうつり、神聖なる性に變化し、舊き者より新しき者となり、即無益にして不信なるものより、善良なる尊敬すべき及び篤信なる者となり、かくの如くして天の教會のために最要用なるものとなりて、善聖に到り達せんことを要するなり。されば禍なるパウエルは自己の變化したる事と主の爲に捕へられしことを書して次の如くいへり、『惟我追ふ或はこれを獲ん、パリストスイエスの我を獲たるが如し』(フィリッピ三の十二)。彼はいかやうに神の獲る所となりしやたとへば人あり叛逆者の爲に捕虜となりて奪ひ去られんとするを其後自から眞實なる王の爲に捉へらるゝ如く、パウエルも亦然るなり。叛逆の神の彼に働くや、彼は教會を苦逐奪掠せり。しかれども、これを爲しゝは無知による、神に敵對する心より出でしには非ずして、たとへば眞理の爲に苦闘しつゝある者の如くなりしにより、主は彼を輕んせずして、捕へ給へり。天の眞實なる王は得ざれば、れず彼を照しかゝやかし、其聲を聞くを賜ひ、僕の如く其面を撲ちて、彼に自由をあたへ賜へり。汝は主宰の仁慈を見んに、惡に固着して殘忍になりし靈魂を主が瞬間に變化して、其仁慈と平安とを彼にあたふるの如何なるを見ん。

九、神の爲にすべて能くせざる所なきは、盜賊に於てもこれを見る如し。彼は信仰により瞬間に變化して、樂園にみちびき入れられたり。主の來り給ひしは、我等が靈

魂を變化し、これを再造して錄する所の如く神聖なる性に與かる者となさん爲なり（ペトル後一の四）又我等の靈魂に天の靈魂を入れんためなり、即我等永生を以て活くるを得んが爲にわれらを諸の德行にみちびく神聖なる神を入れん爲なり。ゆゑに我等は主の測るべからざる約束を心を盡して信ぜざるべからず、けだし約せし者は誠ちざればなり。我等は主を愛し、すべての德行に上進するを出來るだけ努め、主の神の約束をすべて全くうくるが爲に倦まずして不斷に願はんことを要す、我等猶肉體にある間に我等が靈魂は生活を施されんためなり。けだし靈魂はなほ此世に於て多くの信仰の爲及び祈禱の爲に神の聖賜をおのれにうくるなく、恩寵を以て融和して、其助によりすべての誡命を無玷潔白に行ふを得べからしむる神聖なる性に與かる者とならずんば、天の敎會のために無益ならん。誰か此世に於て善なるものを得れば、其は彼の日に於て其者の爲に父と子と聖神の恩寵により生命となりて世々に至らん。アミン。

第四十五　講話

人を醫すを得るは或る藝術にあらず、又此世の富にも非ずして、たゞハリストスの來ることは是なり。此講話に於ては人と神との最大關係を示す。

一、獨居の生活をえらびたる者は、此世界に如何なる事の成るありとも、すべて己の爲に疎遠なる且は局外なるものとなさゞるべからざるなり。けだしハリストスの十字架に眞實從ふ者は、すべてを棄て、自己の生命をさへ棄てゝハリストスの愛に釘せられたる心智を有すべし。即主を父母、兄弟、妻子、親戚、朋友、財產の上に貴ぶべし。けだし主は此意をあらはしていへり、凡そ父或は母、或は兄弟或は妻、或は子、或は田地をすてゝ我に從はざる者は我に宜しからず（マトフェイヤの三十七）。アダムの族より王の現はれしこと幾何なるか、彼等は全地を領して北王たる管轄の爲に多く慮れり。しかるに如此の富有により、一人もよく初人の犯罪の爲に靈魂に生じてこれを暗ませる損傷を認識する者あらざりき、ゆゑに靈魂は其生出したる改變を認

めず、即原始にいさぎよき智は其位に居りて己の主宰を直觀したりしが、今は墮落のために耻を衣て、心の眼のくらみしにより、我等の元祖アダムが悖逆に至る以前に見たる所の光榮を見ざるなり。

二、世に種々の賢哲あり、一は哲學に秀づるをあらはし、他は詭辯學を練習して人を惑かし、或者は能辯學に力をあらはし、或者は文法家及び詩人となりて、受けたる規則により歴史をあらはせり。さりながらまた世の藝術を練習する種々の技藝者あり、一は魚鳥及び人類の體形を木に刻し、これを以て己の優秀を示さんを努め、他は偶像又は他の或物を銅にて製造せんを企て、また他者は廣大美麗なる屋宇を建築し、或者は地を掘りて敗壞すべき金銀或は寶石をこれより引出す、しかれども其他者は身體の美を有し、面貌の艶なるに誇りて、更にいよ〳〵サタナの捕ふる所となりて罪におちいりぬ。されば此等の技藝者は、すべて其内部に住む所の蛇に占領せられ、其居る所の罪を自覺せずして、凶惡なる力の捕虜奴隷となり、自己の知識と藝術とより何等の益もうけざりき。

三、もろ〳〵の殊異多樣なるものをみちみてる世界はこれを富人に比ぶべし、富人は大に美麗廣大なる家を有し、金銀又は種々なる所得ともろ〳〵の從者とに富むも、一朝病と衰弱との爲に圍まるれば、すべての親屬其前に立ち、一切の富によるも、彼を其病より救ふあたはざるべし。故に世のいかなる勉勵も、兄弟も、富も、前に歓へたる他のいかなる物も、罪に溺沒して明に見るあたはざる靈魂を罪より救ひ出す能はざるべくして、たゞハリストスの來れる一事は靈魂と身體とを清むるを得るなり。故にもろ〳〵の雜慮を脱し、日夜主を呼んで己を彼に委托せよ。此の見ゆる世界と世に於て味ふ所の安息とは一見したる所、身體に愉快なる程は、靈魂の慾を奮興して、其苦みを增大にするなり。

四、一の聰明なる人士あり、全く勉勵盡力して尋ねんとの望を起し、凡そ此世に於て交際する所の者を試みんことを勉めたり、何人よりか益をうけんと希望したるによる。彼は王にも、有權者にも、公にも至りしが、かしこに於て靈魂に適用すべき救濟の療法を見出さず、彼等と久しく交際せしに何も益する所あらざりき。其後世の賢哲と能辯者とに至りけるに、何等の得る所もあらざりき。ゆゑに同じく亦彼等をすてたり。富家と、地より金銀を取る者と、もろ〳〵の技藝者とにゆきけるが、其創痍の爲に何等の療法も求むるあたはざりき。終に彼等を離れて、靈魂の慾と病とを醫す所の神をみづから呼べり、彼は自からおのれを省察して、此事を沈思冥想するや

その才智は其既に嫌ひ憎みて現に遠ざかり居る所の物の周圍を廻轉することあらはれたり。

五、また世に富める處女あり、多くの貨財と大に美麗なる家とあるも、保護となるべきものなしに居りければ、多くの者來りて彼に害を爲し、其居住を荒らしけり、されば彼は侮に堪へず、ゆきてみづからすべてに才能ありて教育ある有力の夫を尋ねたるに、多くの靈力の後如此の人を搜し得るや、其喜はいかならん、彼はこれを有して堅城鐵壁にかへたり、靈魂もかくのごとし、犯罪の後反對なる力のために最多く苦められ、大に荒され、誡命を破りしために寡居孤立となりて、天の夫にすてられ、もろ〳〵反對なる力の玩弄する所となりぬ。彼等は靈魂の天に屬する了解を腥潮して、これを忘れしめたり、故に彼は敵のおのれに何をなしゝを知らずして却て最初よりかくの如きものと思へり。其後己が寡居孤立の身なるを風聞により探知し、己が荒されたることを神の仁慈の前に痛哭して、遂に生命と救とを得たり。これ何によるか、其同族に立歸りたるによるなり、けだし靈魂が神と共にし神も靈魂と共にする如くなる互に親密なる關係は他にあるなし。神は種々の鳥をつくりたまへり、二者をば陸に接みて、こゝにみづから食と安息とを求めしめ、他者をば水に接みてかしこに生を送らしめたり。神はまた二の世界を造れり、一は奉事の神の爲に上にありて、彼等にかしこに居住を有するを命せり、また二は下に此の天空の下にありて、人類のためなり。また天と地と、日と月と、水と、豐盛なる樹と、もろ〳〵の生物とを造りたまへり。さりながらこれらの造物の一にも主は止りたまはず。悪くの造物は其權中にあり、されども彼等に於て寶座を定め給はず、かれらと親與をなしたまはず、たゞ一の人と親與し、これにとゞまりてこれに惠を垂れ給へり。神の人と共に人の神と與にする此の如き親密なる關係を見るかゆゑに聰明にして善智なる靈魂はあらゆる造物をへめぐりて、何處にもおのれに安息を看出さず、たゞ獨り主に於て看出すべく、主も亦誰にも惠を垂れずして、たゞ獨り人に惠を垂れたまへり。

六、目をあげて太陽に向へば、太陽の圓體の天に中して、其光と其光線の地に下降するを見るべく、其光のすべての勢力と其光輝の地にそゝぐを見ん。かくの如く主も父の右に坐して、もろもろ首領權柄の上に居るといへども、其目は地に居る所の人々の心にそゝぐ、彼の助を待つ者等を其自から居る所に昇せんが爲なり。けだしいふ、『我が在る所は我に事ふる者も亦彼處にあらん』〔イオ・アン十二の廿六〕また『ヱルはいへり、『復活せしめて天に己の右に坐せしめたり』〔エフェス二の六〕さりなが

ら無言なる動物は我等よりも多く伶俐なり、何となれば彼等はおの〳〵己の屬類と合すればなり、野獸は野獸と共にし、羊はまた其類と共にするなり。しかれども汝は天の同族たる主に歸せず却て其思を惡者の思と和して、これにしたがひ、罪の助成者となりて、これと一たらんが爲に自己に向つてたゝかひかくて己を敵の食料に委すること恰も鷹に攫まれたる鳥の貪食せらるゝ如く、或は羊の獄に於る如く、或は手を蛇にのばして、彼の爲に螫されたる童子の死するに似たるあり。これらの同形類似は恰も靈神上の事を面りあらはすに似たるあり。

七、婚姻を約する富める處女は、婚姻の前にいかなる贈物をうくるあらんも、或は裝飾品、或は衣服、或は貴重なる器物をうくるあらんも、婚姻の時至らずして、婚姻の契約のいまだ成らざる間は、これによりて安心せざるなり、かくの如くおのれを天の新郎の新婦たるに準備したる靈魂も、神の聘質をうけ、或は審査の賜、或は認識の賜、或は默示の賜をうくるといへども、完全の親與に、即愛に達せざらん間は、これを以て安心せざるなり、けだし愛は變らず且蹉跌せざるものにして、これを欲願したる者を無欲なる者及び動搖せざる者となせばなり。或は眞珠と貴重なる衣服とを着たる嬰兒の如し、彼もし飢うるときは、いかなる物をあたふるも彼はすべてかへりみずして、すべての注意を己をやしなふ所の乳房に向け、乳を吞めんが爲なり、靈神的なる神の賜のこともかくの如く思ふべし。神に光榮は世々に歸す。アーメン。

第四十六　講話

神の言と世の言と、神の子と此世の子との間の差別。

一、神の言は即神にして、世の言は即世なりさりながら神の言と世の言と、神の子と世の子との間に大なる差別と距離のあるあり。けだしすべての種子は其所生に肖んぬゆゑにもし神の種子が世の言と地上の物體と此世の榮とに己を付與せんをねがふならば、彼は生命の眞實なる慰安を見るを得ずして、死し且亡びん。何となれば彼の慰安は其生れたる所にあればなり。主のいひ給ふ如く（マタイ十三の廿二）浮世の諸慮の爲に勝たれ、地の械繫につながるゝ者は、壓せられて、神の榮の爲に無結果なる者とならん。しかれどもこれとひとしく肉に屬する自由なる意志の爲に勝たるゝ者、即世に屬する人も、もし神の言をきくを願ふといへども壓せられて、或る無言なる者の如くならん、惡習の欺きに慣れたる者等は神のことを聞くときは、

不愉快なる談話に援されし者の如く、心に煩悶せん。

二、且又パウエルもいへり、『靈に屬する人は神の神の事をうけず、其彼の爲に愚たるが故なり』（コリンフ前二の十四）。また預言者もいへり、神の言は彼等の爲に嘔吐したる食物の如しと（イサイヤ廿八の十三、フェオドテオンの譯に依る）おの〳〵己の生れたる所の法に依りて生活するの外別に生活するあたはざるを見ん。然れどもまた他の一方よりもこれに注意せんこと肝要なり。もし肉に屬する人は決心して自から己を變化するに着手するならば、最初にまづ彼は死して、以前の惡なる生活の爲に無結果なる者とならん。然のみならず病に冒さるゝ者、たとへば熱病にかゝる者の如きも、其身は床上に横りて世の何事をも修むる能はずといへども、工作の爲の配慮に引かれて心は自から安んせず、其友をつかはして醫を尋ねん、かくの如く誡命を破りて己れを情慾の病におとしいれ、無力なるものとなれる靈魂も主に就て彼を信ずるときは、彼より代保をうけん、されば從前の最惡なる生活を棄て、舊き病の爲に衰弱する靈魂は、なほ横臥して、生命のいかなる行をも眞實に成し遂ぐる力あらずといへども、しかれども生命の爲に專ら力めて慮り、主に懇願し、眞實の醫を尋ねざるを得ざるべく且これを爲し得るなり。

三、僞教師の爲に詭計に引入られたる或者等主張して、人は必ず死すれば何等の善も全く爲すあたはじといふは誤れり。嬰兒は何も爲すの力あらず、或は其足にて母に至るあたはずといへども、母を尋ねて自から身を動かし呱々として泣かんされば母はこれをあはれみ、兒の聲を勵まし、高く叫んで母を尋ぬるをよろこび、兒の來りて母に就くあたはざるがために、兒を愛するの情に勝つ能はざる母は其久しく尋ぬるがために、みづから彼に近づきて、大なる慈心を以て彼を取り、撫愛してこれに乳せんとす。人を愛する神の來りて神を尋ぬる靈魂と爲す所もこれに同じ。然のみならず其固有の愛と其の本來の慈心とに動かさるゝ彼は更にいよ〳〵自から靈魂の明悟に附きて、使徒のいへる如く靈魂と一神とならん（コリンフ前六の十七）けだし靈魂が主に附き、主も靈魂を憐み且愛しつゝ來りて彼に附きて、靈魂の明悟は主の恩寵に最早不斷に止居るときは、靈魂と主とは同一の神となり、同一の融和、同一の智とならん。靈魂の體は地に棄てらるゝものとなりて存すれども、其の智は第三重の天に昇り、主に附きて、かしこに主につかふまつりつゝ、天のイエルサレムに全く生存せん。

四、天の都に高く尊嚴の位に坐し給ふ者は、自から靈魂と共にその體に全く居ら

ん、何となれば彼は靈魂の象を高く諸聖者の天の都なるイエルサリムに置けども、其神性の得もいはれざる光の自已の象をその體に置きたればなり。彼は體の都に於て靈魂につとめて、靈魂は天の都に於て彼につかへん。靈魂は天に於て彼の闘業者となりたれど、彼は地に於て靈魂を闘業にうけ給へり。けだし主は靈魂の闘業となりて、靈魂は主の闘業となるなり。くらまされたる罪人といへども、其思と智とは體より極めて遠く離るゝを得べく、大なる距離を瞬間に走りて、懸隔せる方面にうつる力を有するなり、されば體はしば〳〵地に棄てらるれども、思は至愛する者と共に他の方面に居るべく或は至愛する者と共にして、自己を見ること彼處に居る者の如くならん。しかれども罪人の靈魂さへかくの如く銳敏に疾く翔りて、其智は懸隔せる方面に在るを妨ぐるあらずんば、いはんや聖神の力を以て暗黑の覆を脱したる靈魂に於ては、その智慧の眼は天の光に照されて、靈魂は汚辱の慾より全く救はれ、恩寵により潔きものとなるときは、天に於て全く神を以て主につかふべく、また體を以ても全く彼につかへて、其思は何處にも在らざる迄も程濶くなり、欲する所に隨ひ、欲するときにハリストスにつかうまつらん。

五、使徒は此事をいへり、曰く『衆聖徒と偕に濶さと長さと深さと高さとの何なるを悟り、及びハリストスの測り難き愛を知るを得んため、爾等が神の凡の充滿に滿てられんためなり』（エフェス三の十八十九）得もいはれざる靈魂の奥秘を察せよ、主はこれにかゝれる暗黑をこれより排除け、これを開きて、自からこれに現はれ給ふ。其智の思を廣濶にして、凡そ見ゆると見えざる萬物の濶さと長さと深さと高さとに至らしむることいかばかりなるや。されば靈魂は實に大業、神の業にして、奇異なる業なり。これを造るに當りて神は其本性に惡癖を入れずしてつくり給へり、却て神の道德の像によりてこれを造り、これに道偽の法と理性と、認識と善智と信と愛と其他の德行とを神の像によりて賦與し給へり。

六、今も主は認識と善智と愛と信とに於て彼を搜し求めて、かれに現はれん。主は明悟と意念と自由と主宰する智とを彼に賦し、又或る大なる優美を彼に王たらしめ、かれを動かし易きもの、輕翼なる者、及び倦まざるものとなし、瞬間に去來して、神が欲するときは、思を以て主につとむべき才能を彼にあたへ給へり。一言を以てこれをいへば彼をして主の新婦となり隨伴者とならしめんがため、又主も彼と合併して彼も主と一神とならんがために彼をつくりたまへり、いふあり「主に附く者は主と一神となる」（コリンフ前六の十七）彼に光榮は世々に歸す。アミン。

第四十七　講話

法下にありし事の譬解。

一、モイセイの面にあらはれし光榮は眞實なる光榮の象なりき。かしこにイウデヤ人はモイセイの面を仰ぎ見るあたはざりし如く、今も「パリスチアニン」が彼の光榮を靈魂にうくるときは、暗黒は此光耀に得堪へずして、眩まされたるものは逃走せん。且イウデヤ人は割禮によりて自分は神の民たるを示せり。しかれどもこゝに神に選ばれたる民は(デイト二の十四)其心の內部に割禮の表示をうく。何となれば天の劍は智の餘を裁割す、即罪の不潔なる餘を裁割すればなり。彼等には肉身を潔にするの洗禮ありたれど、我等には聖神と火とを以てするの洗禮あり。けだしイオアンはこれを傳へて言へり、『彼は聖神と火とを以て汝等に洗を授けん』(マトフェイ三の十一)。

二、かしこには內部の幕と外部の幕とありて、『第一の幕には司祭等恒に入りて奉事を行ひ、第二の幕には獨り司祭長のみ一年に一度血を携へずんばあらずして入り、此を以て聖神は、先の幕の猶存する時は、聖所に入る途の未だ啓かれざるを示す』(ユウレイ九の六、八)。しかれどもこゝに入るを賜はる所の者は手の造る所にあらざる幕に入る、即『パリストスが我等のために先驅として入りし所』(ユウレイ六の二十)の幕に入るなり。律法に於ては司祭に二の鳩を取るを命せられ、一を屠りて他の生者をば其血をそゝぎて、自由に飛ばしめたり。しかれども此行爲も眞實の象と影となりきゝけだしパリストスが屠られて我等にそゝぎたまひし血は、羽翼を生せしむればなり、何となれば神性の大氣に自由に飛揚する聖神の羽翼を我等にあたへ給へばなり。

三、イウデヤ人には石版にしるしたる律法をあたへられたれども、我等には心の肉版にしるさるゝ神的律法をあたへられたり。けだしいふあり、『我が律法を彼等の心に置き、其思にしるさん』(イエレミヤ三十一の三十三)。されば彼はすべて廢止せらるべき一時的の者にてありたれど、今は實にすべては內部の人に行はるゝなり、何となれば許約は內部にあればなり、一言にてこれをいへば『此の諸事は彼等に遇ひて象となれり。此等の錄されしは我等の警とならんためなり』(コリンフ前十の十一)。神はアウラアムに未來を預言していへり『爾の子孫他人の國に旅人となりて其人

々に事へん、彼等四百年の間之を惱ますん。(創世記十五の十三)これまた影の象たりき。民は移されて埃及人等に奴使せられ、粘土と磚とを以て苦められたり。ファラオンはイズライリ人に作事の看守者と監査とを附して、其事を必ず爲さゝるを得ざらしめたり。しかれどもイズライリの諸子が苦役の中にあり、神の前に嘆息するや、神はモイセイによりて彼等に憐を垂れ給へり。されば多くの訓を以てエヂプト人を驚かし、もはや嚴冬を過ぎて春のあらはるゝや、花の月に於て彼等を埃及より引出し給へり。

四、神はモイセイに疵なき羔を取り、これを屠りて、其血を閾と門とに塗るを命じたまへり。埃及の冢子を亡す者のこれに觸れざらんためなり。けだしつかはされたる天使は血の表示を遙に見て、自からこれを避け、表示のあらざる家に入りて、あらゆる冢子を殺したればなり。然のみならず何れの家よりも發酵する物を除かんことを命じ、屠られたる羔を無酵麵包と苦き草と併て食ふべきを誡命し給へり。而してイズライリ人はこれを食ふに腰に束帶し、足に履はき、手に杖を有せざるべからざりき。かくの如くして主に「パスカ」を晩餐に於て全く謹みて食し、羔の骨を折るべからざるを命せられたりき。

五、また彼等にはおの〳〵その隣の埃及人より金銀器物を借るを命じて、許多の金銀と共に彼等を引出せり。而して彼等は埃及人が其冢子を葬るとき、埃及より出でたり。一方には苦役より救はれたる爲の喜ありて、又一方には兒を亡ひたるの哭泣と嘆息とありき。ゆゑにモイセイは言へり、これ神が我等をすくはんことを約し給ひし夜なりと。しかれども此のすべてはまたハリストスの來るによりて救はれたる靈魂の奥秘なりき。けだしイズライリといふ言は譯すれば神を見る智慧といふ義にして、彼は闇黑の苦役と埃及の諸神とより免れて自由を得たればなり。

六、けだし人は悖逆により恐るべき靈魂の死を以て死して、詛を受く、言ふあり、『地は汝のために荊棘と蒺藜とを生ずべし』(創世記三の十八)とまた言ふあり、地を耕すべし、汝の爲に其果を生せざらんと、ゆゑに其心の地に荊棘と蒺藜と生じて成長せり。敵は詭計を以て彼の桒をうばひ、耻を以て彼にかうむらしめたり。彼の光はうばはれて彼は暗を衣たり。彼の靈魂を殺し、彼の意思を散亂滅裂し、彼の智を高きより落して、人即イズライリは眞のファラオンの奴隷となれり。ゆゑに彼れファラオンは人の爲に看守者と監査、即惡なる諸神を置き、人をして自由と不自由とに關はらず、惡なる行事を強て爲さしめ、粘土にて磚を作らしむるなり。人を想想の天の狀態より

遠ざけたる者は人を姦惡なる、物質的なる地と泥土的なる行爲に引落し徒らなる言と思と慮とに引落せり、何となれば靈魂は高きより墮落して、人を增惡するの國と殘忍なる君とを迎へたれば、彼等は靈魂をして强て罪惡の城市を築かしめんとす。

七、しかれどももし靈魂は慨嘆して神に號ふならば、埃及の苦役より救はんとする靈界のモイセイを彼に降し賜はん。さりながら先づ呼んで嘆息すべし、さらば其時に救の始を見ん。されば靈魂は新なる花の月、良春の候、心の田が美しき花を產する義の嫩枝を發生する時に當りて、昏まされたる無智と大なる盲昧の嚴冬がすでに過ぎたる後に救をうけん、即耻づべき行爲と罪の結果の過ぎたる後に救を受けん。然のみならず其時神は各人の家より一切の舊酵を除き、腐敗せる舊き人の行と智と惡念と不潔なる考とを出來るだけ棄つるを命じ給はん。

八、羔を屠りて祭に獻じ、其血を以て閾を塗らんこと肝要なり、何となればハリストス眞實良善なる疵なき羔が屠られて、其血を以て心の閾を塗らるゝによる、これ十字架の上にそゝがれたるハリストスの血が靈魂の爲に生命となり、救となりて、埃及人即魔鬼の爲には哀となり又死となるを致さん爲なり。けだし疵なき羔の血は彼等のために實に哀みなれども、靈魂のためには喜びなり、又樂みなり、次にこれを塗りたる後、神は命じて腰に帶し、履を穿ち、手に杖を持ちて、羔と無酵麵包とを苦き草と共に晩餐に食せしむ。けだしもし靈魂は先づ百方盡力して出來るだけ善行を以て備ふるあらずんば、羔を食ふをゆるされざるなり。しかれども羔は旨く、無酵麵包は味好しといへども、草は苦くして澁し、何となれば靈魂は其居る所の罪の故に哀み、多くの憂愁と悲痛とを以て羔と善良なる無酵麵包とを味ふによる。

九、また晩餐に羔を食ふを命せられて、晩餐の時は光と暗との中間をなす。かくのごとく靈魂も此の救の先には光と暗との中間にあり、何となれば當時神の力は彼と共にありて、暗黑をして靈魂に入りて彼を呑むをゆるさざればなり。されば モイセイがこれ神の約束の夜なりといひし如く、ハリストスも會堂に於て惡をわたべられし時、これを名づけて、主の禧年といひ、救の日といひしことは錄する所の如し〔ルカ四の十八〕。かしこに於て報復の夜は此處に於ては救の日なること是れ當然なり、何となればかしこに於てはすべては眞實の象と影とにして、奧密に豫象を以て靈魂の救を預め錄されたればなり、けだし靈魂は暗中に幽せられ、縛して地獄の坑に囚はれ、銅門を以て閉されたれば、ハリストスによりて救はるゝなくんば免るあ

たはざりしなり。

十、ゆゑに埃及の家子を殺して出づる時に於て、靈魂を埃及より、又埃及の苦役より引出さん、何となれば眞のファラオンの力の或部分は既に衰へたればなり。囚虜の救はるゝを哀みたる埃及人は泣て嘆息せん。神は埃及人より金銀の器物を借りこれを携へて埃及より出るを命じ給ふ、何となれば靈魂は暗黑より出で來りつゝ金銀の器物、即七倍を以て燒かれたる自己の善良なる意念を自から携ふべくして、神はこれを其奉事に用ふるをゆるして、これに安んじたまふによる、しかれども先きに靈魂の隣たりし魔鬼は彼の意念を散亂し、彼を占領し、彼を費したりき。暗黑より逃ぬかれて自由を得たる靈魂は禍なり。されど彼の殘忍酷薄なる監督者より救ふを能くする者に向つて慨嘆せず號泣せざる靈魂は禍なる哉。

十一、イズライリの諸子はパスハをおこなひて、途に出發したりしが、靈魂は聖神の生命をうけ羔を食ひ、其血を塗りて、眞實の餅、即生活の言を以てやしなはれて、大に發達するなり。火柱と雲柱はイズライリ人を護衛して、かれらに先たちしが、聖神は靈魂を扶持し、これを悟覺せしめて「パリステアニン」を堅ひるなり。ファラオンと埃及人は民の逃走し、イズライリ人の工作をうしなひしを聞知して、家子を殺したる後、敢て彼等を追跡せり。ファラオンは直ちに其車に駕し、衆民と共に彼等を殄滅せんと、急ぎて彼等の中間にすでに突進せんとするや、雲あり其中間にかゝりて、一を遮り暗ましして、他を照し且護りたりき。さて余は歴史を反復して說話の長くならんことを恐る、ゆゑにこれを靈界の事に應用することはすべて自から見出すべし。

十二、靈魂の埃及より走るや、神の力は來り助けて、これを眞理にみちびかん。靈界のファラオン、罪なる暗黑の王は靈魂の背きて其國を逃れ、その久しく占領したる意念、即その所有物を奪ひ去るを偵知す、しかれども虐者は靈魂の再び歸り來らんを預想し且希望せん。されど家子を殺し、意念を奪ひ去りたるにより、靈魂が己の管轄を全く遁るを推知し、もし靈魂が遁るゝならば己の旨と行事とをおこなふ者は全く一人もあらざるべきを恐れ、いよ〳〵傲慢にして突進せん、故に彼は憂愁と誘惑と見えざる戰とを以て靈魂を窘逐せん、茲に於てか誘惑せらるべく、茲に於てか試みらるべく、茲に於てか靈魂を埃及より引出せし者に對する靈魂の愛は顯然明白となるべし、何となれば彼は種々の試と誘とに付さるればなり。

十三、靈魂は敵の力が襲ふて己を殺さんとすれども、その力を有するにはあらざるを看破す、何となれば靈魂と埃及諸神との間に主は立ち給へばなり。また其己の

目前に憂愁と思難と失望の海のあるを看破す。しかれども既に備をなせる敵を見て、後に退かんことも前に進まんことも能はざるべし、何となれば死の畏懼と四方を圍繞する種々の恐ろしき患難とは其目前に死を見せしむればなり。故に靈魂は四方を圍める惡者の蜂起の故に自己に依頼せざるべし。されば神は靈魂の死を恐れて落膽すると敵の彼を呑まんとするとを認むるや、其時靈魂に降りて、果して信仰に堅く立つか、神に愛を有するかを試みて、かれに小なる助をあたへん。けだし生命に入るの途はかくの如く、憂愁と困迫と多くの試練と最慘憺たる誘惑とを以てすることは、神の定むる所なり。ゆゑにもし靈魂は猶此世に於ても死を目前に有し、限りなき憂愁の中に此旅行を成すならば、最早其時は強き手と、高き臂と、聖神の照明とを以て暗黑の力を破るべく、恐るべき場所を通過すべく、暗黑の海とすべて焼盡さゞる所なき火の海とを渡らん。

十四、眞實に人に行はるゝ心靈上の奥秘はかくの如きものにして、人は生命の約束に入らんを盡力し、死の國より救はれ神より聘質をうけて、聖神に與るものとならん。其後靈魂は敵より免れ、神の力を以て慘憺たる海を渡り、これより先に事へたる諸敵が其目前に於て亡ぶるを見て、得もいはれざる喜びを以てよろこばん、而して神の頌揚慰撫する所となりて、主に於て安息せん。其時靈魂が己れにうけたる神は竭蹶を以て、即體を以て、線琴を以て、即靈魂を以て、その有言の絃により、即最精緻なる意念により、神の恩寵の鳴響を以て新なる歌を神に歌ひ、生活を施すハリストスに讃美をさゝげん。けだし呼吸は笛管を通り聲を發する如く、聖神も聖にして神通を得たる人の清き心に於て讃頌々美し、神に祈禱していはん、曰く「光榮は靈魂をファラオンの苦役より救ひ給ひし者に歸し、かれを猶此世にある間に永生の國にみちびき給ふ者に歸す」と。

十五、無言なる動物は律法により祭に献げられしかど、もし彼は屠られざるときは、其献納は善くうけられざりき。今ももし罪は屠られずんば、献納は神によろこばれずして、眞實なる献納とならざるなり。民のメルラに來りしや、かしこにありし泉は苦くして、飲に適せざる水を生せり。ゆゑに神は惑へるモイセイに命じて、苦き水に木を投せしめたるに、その投するや、水は直に甘くなり、苦味をうしなひ、神の民の爲に飲に適する甘美なるものとなりき。蛇の酒を飲み、蛇の苦き性をうけて罪あるものとなりたる靈魂もかくの如く苦し。ゆゑに神はその苦き心の泉に生命の水を入れ給ふ。されば靈魂は其苦味を脱し、ハリストスの神を以て鎔解せられて樂しま

ん、かくの如くして主宰に事ふる爲に大に必要なるものとなりて、使用せられん、何となれば肉身を被むりたる神となるによる。光榮は我等が苦きを甘きに變じ、神の善良に變じ給ひし者に歸す。生命の樹を入れられざる者は禍なる哉。彼は何等の清良なる變化もおのれに受くるあたはざるべし。

十六、モイセイの杖は二樣にあらはれたり、敵のためには噛み殺す蛇の如くあらはれたれど、イズライリ人の爲には凭るべき杖としてあらはれたり。かくの如く眞實なる十字架の木即ハリストスは諸敵の爲、又凶惡の諸神の爲には死なれども、我等の靈魂のためには杖たり倚賴すべき柱石たり、又生命たり、而して靈魂はこれに安んずるなり。此等の眞實なる實體の象と影とはいにしへのすべてのものにこれありきけだし舊約の奉神禮も今の奉神禮の影と象となればなり。されば割禮も幕屋も、約櫃も、器物も、「マンナ」も、神位も、香も、洗淨も、すべてイズライリ人とモイセイの律法と諸預言者とにありし所のものは皆此の靈魂の爲にして、神の像により造られしも、苦役の軛下におちいり、慘たる暗黑の國に投せられたるものゝ爲なりき。

十七、神は靈魂と親與を爲さんを欲し、王の新婦たらしめんが爲に自からかれを支度し、かれを汚穢より清め、其汚名と恥辱とを洗ひ雪きて清明なるものとなし、死より蘇生し、挫折を醫し、其敵を滅絶して、和睦を行ひ給ふ。彼は受造物たるも王の子の新婦たるに備へらるゝなり。神は彼をして其の自己の齡に成長せしめ、これを廣濶にし、これを高尚にして、無限無量の成長に達せしめ、無玷にして神に應する新婦となるに至らしめざらん間は、その自己の力を以て漸々に變化して彼をうけんとす。彼が神に對する愛の完全なる量をうくるに至らざらん間は、先づ自から彼を生みて、自から彼を成長せしむ、何となれば彼は自から完全なる新郎として、彼れ完全なる新婦をも婚姻の聖なる奧密なる、及び清潔なる親與にうけんとすればなり。其時彼は新郎と共に限りなき世に王たらん。アミン。

第四十八　講話

神における完全なる信仰。

一、主は其門徒を完全なる信仰に上せんと欲して、福音經に左の如くいへり、少なき事に於て忠ならざる者は多き事に於ても忠ならず、されども少なき事に於て忠なる者は多き事に於ても忠なり」（ルカ十六の十）少なき事とは何を謂ふか。また多き

事とは何を謂ふか。少なき事とはこれ即此世の約束にして、主を信ずる者に給せんことを主の約し給ひしすべてのものを謂ふ、例へば食物、衣服及び其他身體の安息の爲、或は健康の爲になるもの、及びこれに類するものにして、此事に就ては主に希望依賴して全く虛るべからざるを命じたまひき、何故なれば主に助を乞ふ者を主はすべてに於て虛り給へばなり。さて多き者とはこれ即永遠不朽なる世の賜物にして、こは主を信ずる者にあたへんことを約したまひしものなれば、信者は不斷に此等の爲に虛りて、これを主に願はざるべからず、何となれば左の如く誡命し給へばなり、曰く『汝等は先づ神の國と其義とを求めよ、然らば此等の者は皆爾等に加はらん』（マトフェイ六の三十三）。さてかくの如く誡命したまひしは、我等もし此の少なきものに懸念せずして、來世永遠なるものを虛るならば、此の少なきものをも給したまはんことを約したる神を信ずるや否は此の少なき暫時なるものを以て試みらるゝによる。

二、もし上に言ふ所のものに關して健全の信仰を保つならば、其時人が不朽なるものを信じて、永遠の幸福を實に尋ぬることは明白なるべし。けだし眞理の言に服從する者はいかやうに神を信じて己を神に托するか、果して神の言と眞實に合致するか、或は己の稱義と己の信仰に自負するにより、たゞ自から己を信者と思ふのみなるかを或は自から試みて己れを審議し、或は神的人々の審議と試みとに付することと肝要なり。人はおの〳〵少なき事に於て、即此世暫時のものに於て忠なるや否を自から試み且證するを得るなり。如何に試み且證するか。宜しく聽くべし。汝が己を信者と名づくるは天國を賜はるによるか、上より生れて神の子となり、パリストスの同闘者となるによるか、パリストスと共に永世王となり得もいはれざる光の中にありて、無限にして數ふべからざる世に福樂を受ること神自からの如くならんとするによるか。汝は必ずいはん『然り、これか爲の故に我は世に遠ざかりて己を主に托せり』と。

三、然らば汝は己を試みよ、地上の虛と身體の食と衣と其他の必要物の事及び居室の事に關する大なる費心は汝を占領せざるか、また己を全く虛るなかれと汝に命ぜられたる其己の爲に汝は自己の力を以て強て求めざるか、且虛らざるか。けだしもし不死なる、永遠なる、恒存充足するものを受くべきを信ずるならば、神が不信なる人々にも、野獸にも、禽鳥にもわたへ給ふ暫時なる、地に屬するものにつきては、主は此を汝に給することはいよ〳〵信ずべきにあらずや。けだし此事を全く虛る

べからざるを誡命していへり、汝等何を食ひ或は何を飲み或は何を衣んと慮るなかれ『蓋これみな異邦人の求むる所なり』と（マトフェイ六の三十一、三十二）されどもし汝に猶此事の慮ありて、汝は己を主の言に全く托せずんば、知るべし汝は今に至るまで永遠の幸福、即天國をうくるを信せざるのみならず、少なきものと朽つるものとにさへ猶忠ならざるをあらはして、たゞ己を信者と思ふのみなるを。且それ身體は衣服より貴き如く、靈魂は身體より貴し。故に汝の靈魂は永久にして人々の癒すあたはざる創痍、即耻づべき情慾の癒をハリストスより受くべきを汝は信ずるか、けだし主の此世に來りたまひしは、忠なる靈魂が獨一眞實の醫と癒者とにより、難治の情慾をいやして、罪なる癩の汚穢を清めんがためなるによる。

四、汝は言はん『疑なく信ず、ゆゑに此事に堅く立たん、我が希望は、かくの如し』と。然らば己を試みて察すべし、肉體の苦みは時として汝を此世の醫に引誘して、汝が確信したるハリストスをば汝をいやすあたはざる者の如く思ふことあらざるか、見よ汝はいまだ眞實當然に信せず、自から己を欺きて、己をたゞ信者と思ふのみなるをしかれどもし汝は不死なる靈魂の永久にしていやすべきハリストスを以ていやさるゝを信ずるならば、身體の一時の薄弱と病とをもハリストスはいやすの力あるを確信すべく、醫の助と勤勞とをかろんじて、獨り彼に趨り就かん。けだし靈魂をつくりし者は身體をも造りて、不死なる靈魂をいやす者は身體をも一時の苦みと病とよりいやすべければなり。

五、さりながら顧ふに汝は我につげて左の如くいはん『神は身體をいやすが爲に地の草と藥物とをあたへ、身體の病の爲には醫の助をそなへて、地より取られたる身體が地に屬する種々の生產物を以ていやされんやうによく處理したまへり』と。是れ如此なることは我も同意なり。さりながら善く愼思して確知すべし、神はその大なる無限の仁愛と仁慈とにより、誰に此をわたへ、誰が爲に特別なる照看を爲すか、人はそのあたへられたる誡命に背き、譴怒に觸れて、樂園の樂みより此世に放逐せられしこと、さながら囚虜となりて不名譽をかうむりし如く、又は或る採鑛場に入れられし如くにして、闇黑の權に服從し、情慾の誘により不信者となりて、先には苦難も疾病も知らざりしに拘らず、終に肉體の苦難と疾病とにおちいりき。されば彼より生れたる惡くの人類も彼と同じく苦難におちいりしことは顯然たるなり。

六、ゆゑに神は病弱なる者と不信者とに於ける己の照看を此事に於てあらはし、大なる仁慈により、罪ある人間の全く亡びんことを欲し給はざりき。身體を撫恤し

且これを療する爲又其必要に充つる爲に、世の人々とすべて外部に屬する者に醫療の方法をあたへて、彼等に此方法を益用するをゆるし給へり。何となれば彼等は己を未だ全く神にまかす能はざればなり。然れども修士よ、汝はパリストスに來りし者、神の子となりて、上より神によりて生れんとの望を起し、元始の無慾の人よりも更に高尚に更に大なる約束、即主の來ることの許可をうけて、世の爲に遠ざかりし者は信仰も概念も生活も世の悪くの人に對して或る新しき非常なるものを求めざるべからざるなり。光榮は父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第四十九　講話

人もし他の世の福樂に與かるを得ずんば、此の世の快樂を辞する充分の理由あらず。

一、もし誰か主のために自己に屬するものを棄て、此世を絶ち、世の快樂と財産と父と母とを辭し、自から己を十字架に釘して、旅人となり、貧うして一物も有せざる者となれども、世の安寧に代へて神聖なる慰安をおのれに得ず、一時の喜樂に代へて精神上の樂みを己の心に感せず、腐るべき衣服に代へて神聖なる光の衣服を内部の人に衣ず、先の肉體の親與に代へて天に屬する者との親與を己の心に疑なく認識せず、此世の見ゆる喜びに代へて神の喜びと天の恩寵の慰めとを己の内部に有するあらずして、錄する所の如く『主の榮のあらはるゝとき』(聖詠十六の十五)神聖なる滿足を心にうけずんば、一言にてこれを言はゞ、此の暫時の喜樂に代へて、望む所の不朽なる樂みを今も猶己の心に得ずんば、彼は味を失ひし鹽たり、彼は悪くの人類よりも更に憐むべきものにして、此處にあるものをも棄はれ、神聖なるものをも樂まずして、その内部の人は神の作用によりて神聖なる奥義を認識せざらん。

二、人の世に遠ざかるは使徒の言へる如く、其靈魂が他の世界と世とに思を以て移住せん爲なり、けだしいへり『我等の居處は天にあり』(フィリッピ三の二十)、またいへり、『肉にありて行へども、肉に循ひて戰はず』(コリンフ後十の三)。ゆゑに此世を辭したる者は、今も猶神の助けにより、思を以て他の世にうつり、彼處に居住して、靈界の幸福をよろこびたのしみ、内部の人に於ては神により生るゝの緊要なるを堅く信せざるべからざるなり。主のいひし如し、曰く『我を信せし者は死より生命に移れり』(イオアン五の廿四)。けだし顯然たる死の外に他の死あり、また顯然たる生命の外に他

の生命あり。聖書にいへり、「樂を縱にする者は生くるとも死せるなり」（テモテ前五の六）、またいへり、『死者に其死者を葬むるを任せよ』（ルカ九の六十）、『主よ汝を讃め揚ぐるは死者に非ず、我等生ける者は汝を崇め讃む』（聖詠百十三の二十五、二十六）。

三、太陽は地の上に昇るならば、その悉くの光線は地の上にあらん、されど彼は西にあるときは、其家に退きて其悉くの光線を後に集中せん、かくの如く上より神を以て更生せられざる靈魂も其意念はすべて地の上にありて、其思は地の境界に及ぶのみなれども、もし天より生れて神によるの親與をうくるを賜はるときは、その悉くの意念を一に集中して、これをおのれに保留しつゝ、主に手造にあらざる天の住所に達し、そのすべての意念は神聖なる大氣に入りて、天に屬する清く聖なるものとならん、何となれば靈魂は惡君、即世の神の暗黑なる獄舍を脫して、清く神聖なる意念をうくればなり、けだし神は人を神聖なる性に與かる者と爲し給ふなり。

四、ゆゑにすべて浮世の事に遠ざかり、熱心に祈禱を務むるならば、此勞は速に安心に滿たさるゝを認むべく、小なる憂愁と勞苦とは至大の喜びと慰めとにみちみたさるを認識せん。況や汝の體も靈も畢生の間毎時毎刻如此の善のために費さるゝならば、これを何とかいはん。吁、得もいはれざる神の仁心なる哉。神は報酬なしに己を信者に賜ひ、須臾の間に人は神の副業者となり、神は人の體に居りて、主は美なる住所を、即人を己れに有するなり。神が人の居住の爲に天と地とを造りし如く、己の居住の爲に人の體と靈とをつくりしは、其體中に住みてこれに安んずること、其家に在る如くして、其像によりて造りし至愛なる靈魂を美なる新婦として有せん爲なり。使徒はいへり、『蓋我爾等を一の夫に聘定せり、淨き處女としてハリストスに獻げん爲なり』（コリンフ後十一の二）、またいへり、『我等は彼の家たるなり』（エウレイ三の六）。それ夫は勉勵してもろ〳〵の幸福を其家に集めん、かくの如く主も其家に、即靈と體とに天に屬する神の富を集め、かつ積まん。智者は其智を以てするも聰明なる者は其聰明を以てするも、心中の幾微を悟ることあたはず、或は靈魂の如何なるものたるを言ふこと能はざりき。靈魂に於けるの理解と確たる認識とはたゞ聖神の助によりて開かるべく、且求め得らるゝなり。さりながら此の時に於て其如何なるを研究し、思考し、且理會すべく、而して聽くべし。主は神なれども靈魂は神に非ず。彼は主なれども靈魂は僕なり、彼は造物主なれども、靈魂は受造物なり、彼は造成者なれども、靈魂は造成物なり。彼の性と靈魂の性とに何等の通有なるものもあるなうして、たゞ其の無限なる得もいはれざる及び悟るあたはざる愛により、且その

善心によりて、彼は此の造成物に、此の聰明なる受造物に、此の自から選びたる尊敬すべき己の業に居らんことを善みんせり、これ聖書にいふ如く、「我等其の造りし物の初實の果とならんためなり」（イアコフ一の十八）我等彼の智となり、親與となり、彼自己の居住となり、彼自己の淨き新婦とならんためなり。

五、けだし我等に如此の幸福をそなへられ、如此の約束をあたへられて、かくの如き主の恩惠は我等にこれあるにより、子よ、永生に急ぎて、主に悅ばるゝことに己を全く捧ぐるを怠らざるべく、又遷延せざるべし、ゆゑに主に祈願せん、その神聖なる力を以て我等を耻づべき情慾の暗獄より救ひ、其自己の像の爲、又其造成のために償をなし、これに光明を回復して、靈魂を健全潔淨なるものとなさんためなり、かくの如くして我等は父と子と聖神を世々に讃揚して、神の親與をうけん。アミン。

第五十　講話

神はその諸聖人に於て奇跡を行ふ。

一、誰か天門を閉ざしたるか、イリヤか、或はイリヤの中に居りて雨に命じたまひし神か。思ふに天の有權者は當時自からイリヤの靈に坐して、神の言は彼の舌を以て雨に地に降るを禁せしなるべし、然るに彼は再び言を發するや、天門開けて雨降れり。モイセイもかくの如し、杖を置きしに、杖は蛇となりしが、再び言を發するや、蛇は杖となれり。彼は爐より灰を取りてこれを散せしに、痂となれり。更にこれに命せしに、蝨と蟾蜍とあらはれたり。さりながら人性は此を成し得るか。モイセイ海につげたるに、海は兩分し、川につげたるに川は血に變せり。天の能力がモイセイの心に居り、彼を以て此の休徵を行ひしこと顯然たるなり。

二、いかんしてダヴィドは武器なしに彼の巨人と戰ふを得たりしか。ダヴィドの石を異族人に投せしは、ダヴィドの手を借りて神の手は石を發し、神の力は自から勝を奏して敵を慴かしたるなり、けだし身體の無力なるダヴィドはこれを爲す能はざりしなり。イエスス、ナヴィンはイエリホンに近づきて城を圍むこと七日なりしも、己の力を以ては如何ともするあたはざりき、さりながら神が命じ給ひしや、城壁はおのづから陷落せり。また彼の約地に入りしとき、主は彼に告げていへり、行きて戰に臨めと。さりながらイエススは對ていへり、主は活く、汝なくんば我行かずと。また戰の時に當り太陽に二時間止まるを命じたるは誰なるか、彼の一天性なるか或は彼に居

る力なるか。またモイセイがアマリクと戰ひしとき、手を天に神に擧ぐるや、アマリクを蹂躙したれども、手を垂るゝや、アマリク勝を得たりき。

三、さて汝は此をきゝて其智を遠きに行かしむるなかれ。これ眞實なる事件の象たり、又影子たるにより、これをおのれに應用すべし。汝も其智の貢と意念とを天に擧げて、主に附くを願ふときは、サタナは汝の意念によりて眩惑せらるべし。されば

イエリホンの城壘が神の力により破壞せられし如く、今も汝の智の爲に途を杜絶する惡習の城壘とサタナの都と汝の敵とは神の力を以て滅さるべし。かくの如く神の力は法下の影に於てさへ不斷義人等に存在して、顯然たる奇跡を行はしめ、神の恩寵は彼等の內部に居れり。且神は預言者等にも作用し、彼等が心中に於て預言し且語るに助けて、要用のありしときは世に大事を告げしめたり。げだし預言者は常に語りしにあらずして、彼等に居る神がこれを欲したるとき語れり、さりながら力は常に彼等に存在せり。

四、しかれども律法の影に於てさへ聖神は如此の量を以て注がるゝならば、いはんや新約に於て、十字架の後、パリストスの來りし後に於てをや、神を注がるゝと神を以て醉はしめらるゝとは彼處にも成りぬ。げだしいふあり『われ我が神を一切の人に注がん』『イオイリ二の二十八』これ主の自からいひ給ひしものと同じきを意味す、曰く『我汝等と偕にして世の終まで在るなり』『マトフェイ二十八の二十』『蓋凡そ求むる者は得ん』。またいふあり『然らば汝等惡しき者なるも尙善き賜を其子に與ふるを知る、況や天に在す汝等の父は之に求むる者に聖神を與へざらんや』『ルカ十一の十三』使徒の言によるに『能に於てし、多くの保證に於てするなり』『フェサロニカ前一の五』といふ。ゆゑに適當にこれを得んには勞と大なる盡力と忍耐と神を愛するとを以てすべくして、錄していふ如く靈の感覺が『善惡を辨ふるを』『ヱウレイ五の十四』最早習ひたる時に得らるゝなり、即凶惡の狡猾、奸計、多樣の攻擊と埋伏とに就ても、又神の働と力とにより種々の賜と種々樣々なる助とに就ても、これを辨ふるを習ひたるときに得らるゝなり。げだし內部の人を汚すに情慾を以てする有罪なる痂をおのれに認識すれども、人の弱きを堅め、中心の喜を以て靈魂を新にする眞實の聖神よりする助をおのれに認識せざる者は、神の恩寵と神の平安との種々多樣なる攝理を知るの認識を有せず、辨別の能力をうけずして存せん。されど又一方より見れば主の助をかうむりて、すでに心神の喜びと天上の賜を有する者も、もし己を以て最早罪に屬せずと思ふならば、これ欺瞞におちいりて、惡習の巧緻なるを辨へ

す、嬰兒の齡の成長するとハリストスに於て成全するを得るとは漸を以て成るべきを理解せずして、自から誘はるゝなり、何となれば聖なる神聖なる神を以てあたへらるゝ助あるときは、これと共に信仰も成長して、大に上進するに至るべく、すべて惡なる思念の支柱は漸々に傾き始めて全滅に至るべければなり。

五、ゆゑに我等はおの〳〵寶を此の死器の中に見付けたるか、神の紫衣を衣たるか、王を見たるか、王に近侍する者となりて安んじたるか、或は猶外部の室に於て勤事するかを研究せざるべからざるなり。けだし靈魂には肢多く、其深さも大にして、これに輸入せる罪は其の悪くの組織と心の牧野とを最早占領したればなり。其後人が恩寵を尋ぬるとき、恩寵は人に來りて或は靈魂の二の組織を占領するあらん。然れども恩寵を以て慰めらるゝ無經驗なる者はその來りし恩寵が靈魂のすべての組織を占領して罪は根絶せられたりと思ふ。さりながら靈魂は太半罪の權中にありて、恩寵の下にあるものは一部分のみなり。然るに人は欺かれて此を知らず。

六、余は汝等の誠實なる愛によりて書すべき所のものを多く有すれども、怜悧の人々たる汝等に此の少許のものを以て端緒を與ふるは、汝等實行して言の旨趣を研究し、更にいよ〳〵主に於て智なる者となりて、其心の正直を主の恩寵と眞理の力とを以て增加せんためなり、また全く恐るゝなうして己の救を捉へ、すべての好奇心と敵の悪くの詭計とより免れて、我等が主イイススハリストスの審判の日に躓かざる者、及ひ定罪せられざる者としてあらはるゝを賜はらん爲なり。彼に光榮と權柄は父、及び生活を施す彼の神と共に今も何時も世々限り無きに歸す。アミン。

克肖なる我等が父埃及マカリイの書翰

完全にして聖にせられたる人の爲に要用なるはたゞ自から神に居らんことのみならず神も彼に居らんことなるは汝が善智の明に知る所なるべし主のいひ給ふごとし曰く『我に居り我も彼に居る』(イオアン十五の五)されば神の人は神聖なる幕屋に居り此の幕屋を至淨なる神性の聖なる山に建てざるべからず、これ暗黒なる情慾の力の占領するをゆるさゞる者の光榮を曉るのみならず其擁する所となんためなり。けだし適當なる者には其成聖とその彼等に屬する無慾との爲に救世主は住み給ふ、これ主の自から無慾なる如く主をうけたる者等をも無慾なる者となして如何なる風にも最早動亂漂蕩せられざる者となさん爲なり

しかれども或者は自からパリストスの機密に遠ざかるのみならず『濁れる敗壞を以て其親友を誘ひ』(アバクム二の十五)『神を識るべきものゝ彼等に明にあらはるゝ』にも拘はらず神の眞理を不義の中に隱さんとす。けだし『其思念は虛しくなり』其無智の心は昧みしにより(ロマ一の十八至二十二)彼等は說を爲していへり、耻づべき

情慾は天性自然にして神より我等に賦與せられたるものなりと、是れ即敗壞の樂み、不正なる忿怒神の爲に發するに非ざる不適當なる怒及び凡そ此に類するものをいふなり。

ゆゑに彼等と其の言ふ所とは眞理に違ふものとしてこれを棄て、我等を造りし者を以て我等にあたへられたる自由自主の權を承認めん、善きことに進むも惡きことを止むるも我等に係らんためなり。けだし眞實なる審判者は、もし自から情慾の造物主ならば、これに占領せらるゝ我等を問せざるべし。祈る此敬に離れ遠ざかりて、これを思にも生せしめざらんことを。けだし此の曖昧にして愚なる意見は、凡の敬虔なる裁智の爲に忌み嫌ふべきものとす。神は清くして最美しき天地萬物の造成者なることは、世界創造の際に聖神の告げ給ひし如し、けだしいへり、『神は其造りたる諸の物を見たまへるに甚だ善かりき』(創世記一の三十一)されば(イエレミヤは恥づべき情慾のために哀み、かつ惑ふていへり、『主の命じ給ふにあらずば、誰か事を述べんに、その事すなはち成らんや、禍も福も至高者の口より出づるにあらずや』(イエレミヤ哀歌三の三十六―三十八)。故に福音經に聰明なる天軍は主に問ふていへり、『主よ爾は美種を爾の田に播きたるに非ずや、然らば何に由りて此の稗あるか』(マトフェイ十三の二十七)。また他の所に救世主は自から彼等の事をいへり、『凡そ我が天の父の植ざりし植物は其根絶されん』と(マトフェイ十五の十三)。しかれどもすべて神の植ゑしものゝ美なることは、パリストスこれをいひ、パウェルもこれを證せり、曰く『蓋神の悉くの造物は善なり』(テモフェイ前四の四)。故に知るべし我等の中にかくるゝ情慾は本來我等に屬するに非ずして、他に屬するものなるをけだし言ふあり、『我が隱なる咎より我を淨め給へ、故犯より爾の僕を止めよ』(聖詠十八の十三、十四)。またいふあり、『外人は起ちて我を攻め、强き者は我が靈を覓む』(同上五十三の五)。またいふあり、『主よ我と爭ふ者と爭ひ、我と戰ふ者と戰ひ給へ』(同上三十四の一)。それ此の隱なるもの或は此の爭ふ者或は戰ふ者或は此の故犯とはこれパリストスの德行に逆ふ凶惡なる諸神を示すにあらずして何ぞや。

律法も內部の人の潔淨のことを公然と呼ぶを精密に吟味せよ。いふあり、『汝の主神の名を妄に口にあぐべからず、けだし主は己の名を妄りに口にあぐる者の心を清めざるべし』(復傳律令五の十一)。ゆゑに使徒も勸めて明かにいへり、『己を凡の肉と神との汚より潔くせよ』(コリンフ後七の一)。また他の處にもいふ、『心は濁がれて惡しき意念を去れ』(エゥレイ十の廿二)。又いふ、『汝等の神と靈と體とは全うし護られて疵な

からん』〔ソルン前五の廿三〕又いふ『疵なき神の子とならん爲なり』〔フィリッピ二の十五〕ゆゑに凡て子たる位地を賜はらんことを願ふ者は疵なき體を有するのみならず疵なき靈をも有すること、左の如くいひし者の如くならざるべからず『願くは我が心爾の律に玷なからん、我が羞を得ざらん爲なり』〔聖詠百十八の八十〕けだし律法の下に居る者は、たゞ肉體の稱義を遂げて、外部の潔淨を守れども、恩寵の下に居る者は、成聖により內部の平安を願ふて、左の如くいひし者にしたがふなり、曰く『もし汝等の義は學士及びファリセイ等の義に勝らずば爾等天國に入るを得ず』〔マトフェイ五の二十〕何となればファリセイ等は智を旨まして、杯と皿の外を潔むればなり〔マトフェイ二十三の二十五〕今も彼等に似たる新ファリセイは、未熟なる才智を以て外部の人を粉飾し、自から己を義とせんとす、しかれども聖神は彼等の神と共に彼等が神の子たるを證すること、使徒と共に證する如くせざるべし、言ふあり『此の神自から我等の神と共に我等が神の子たるを證す』〔ロマ八の十六〕彼等は內部の人の聖德に成長するを自己にあらはさんことを欲せずして、たゞ肉體上の功勞に信任し『王の女の光榮は皆內部にある』〔聖詠四十四の十四〕を知らざるなり、我等各人は恰も心中の無花果樹の如し、主の尋ぬるは內部の果にありて、枝葉の飾にあるにあらざるなり〔マトフェイ二十一の十九〕、故に恥づべき情慾を辨護して、天然自然なるものとし、偶然に人に入りしにあらずといふ者は『神の眞實を己の僞に』易ふるなり〔ロマ一の二十五〕何となれば我が先にいひし如く無玷純潔なる者は其像を己に肖たるものとなしたりしが『惡鬼の猜みにより死は世に入りたればなり』〔智慧書二の廿四〕ゆゑに人間は不法によりて孕まれ、罪に於て生れて〔聖詠五十の七〕母腹より離れ遠ざかる者となり、母胎より迷に居りて、アダムより以後ハリストスの來るに至るまで罪が王となりしにより神の羔は憐を垂れて來り給へり、これ先づ强き者を縛し、其後鹵獲せられたる器物を奪ひ回して、己の力を以て世の罪を取らん爲なり、言ふあり『擄者を擄にす』と、又いふ『獻物をうく』と〔聖詠六十七の十九〕。

我等は俘虜たるをまぬかれ『土に屬する者の狀を衣たる如く、天に屬する者の狀』〔コリンフ前十五の四十九〕を衣『我等の肢體を義の僕となして、成聖に委ぬること罪に委ねし如くせんことを』〔ロマ六の十九〕。我等は信ず、われら躓づかずして光の中を行く者は、神の奇跡を認めんを要するを、錄して言ふ所の如し、曰く『我が目を啓き給へ、然せば我爾が律法の奇跡を覩ん』〔聖詠百十八の十九〕。けだし光の

中を行く者は五感に躓きを來さゞる如く、完全なる成聖に居る者も心に奸計を思はず、惡しく慮らざるなり。けだし『光は暗と何の交ることのあらん、神の殿は偶像と何の同じきことのあらん』〔コリンフ後六の十五、十六〕、故に己を神の殿と認むべく、思の偶像を心中に畫かざらんことを力めよ。けだし靈魂の中に動作する凡ての情慾は偶像なり、故に『勝たるゝ者は勝つ者の奴隷たり』とは最善く言へるなり〔ペトル後二の十九〕。もし我等は肉體の慾に勤むるならば、聖にして無慾なる神につとめざらんこと明なり、何となれば人は『二人の主に事ふるあたはず、神と財とに兼事ふること能はざればなり』〔マトフェイ六の廿四〕。神の殿は聖にして『汚或は皺或は此の如きものの』を有せず〔エフェス五の廿七〕、『けだし聖神は諂媚を避け、無智者の思念より遠ざかり、教は奸猾なる靈に入らざるなり』〔智慧書一の四五〕。

ゆゑに我等が律法はすべて神の指を以て心にしるさるゝものにて、墨を以てするにあらず、神の神を以てするなり〔コリンフ後三の三〕。ものなるを確信して、『我は眞實なり』〔イオアン十四の七〕との給ひし立法者の眞實をうけん、彼は心の割禮を行ひ、適當なる者の裁智に其仁慈の法をしるすこと、預言者のいへる如し、曰く『われ我が律法を彼等の心に置き、彼等の思にしるさん』〔イエレミヤ三十一の三十三〕。凡そ選ばれたる族と、王たる祭司班と、聖なる人民と、選ばれたる人〔ペトル前二の九〕の中に入らんことを苦心する者は、生活を施す神の効力を便利に己れにうけん。

故にハリストスに於る生活のハリストスと同形なる公正に進むを、縱ひ久しからずと雖も、我等にも賜はらんことを願ひ且祈るべし。けだし如此の靈魂は面の耻〔聖詠四十三の十六〕を脫し、最早汚れたる思に占領せられず、惡者と姦通せずして、疑なく天の新郎と親與をなさん、何となれば自から彼と同形なればなり。彼に對するの愛を以て刺戟せられたる靈魂は望みて絕入らん〔聖詠八十三の一〕。我敢ていふ、成聖を享ることの不朽なる契約により、彼とかくの如く美なる心中秘密の體合を爲すを望まん。如此の靈魂は實に幸福なり、彼は靈神上の愛に勝たれたるものとして、神言に嫁すること當然なり。故に彼は敢て言ふべし、左の如く言ふべし、曰く『我が靈はわが神をたのしまん、そは我に救の衣をきせ、義の外服をまとはせて、新郎が冠をいたゞき、新婦が玉こがねの飾をつくるが如くしたまへばなり』〔イサイヤ六十一の十〕。けだし王は彼の善良を望みて〔聖詠四十四の十二〕、彼をたゞ神の殿と名づくるのみならず、王の女及び皇后と名づくるを賜へり、神の殿と名づくるは聖神の爲に領有せられたるによる、王の女と名づくるは父より光の子たることをうけたるによる、

又皇后と名づくるは獨生者の光榮の神性と配合せしによるなり。けだし本性に於て一たる主は、いかんして人間の救の攝理の爲に多くの名を比喩的に己にうけしか。何故甲處には石（コリンフ前十の四）及び門（イオアン十の七）と名づけ、他處には斧（ルカ十五の一）及び餅と名づけしか（同六の三十五）。石と名づけしは其勢力の動かすべからざると近づくべからざるとによる、門と名づけしは彼によりて永生に入るによる、斧とは彼は惡習の根を絶つによる路とは適當なる者を眞實を識るにみちびくによる、荊蒺の幹とは、人心をたのしましむる酒が彼によりて產せらるゝによる、また餅とは有言なる造物の心を堅むるによるなり。しかれどもこれと同じく神言の爲に領有せられたる非難すべからざる靈魂も、固より單純なるものなれど、神的道德に多くの進歩をなすにしたがひて、賜をもうけん。我が此事をいふは新婦の名稱も勿論たゞ三のみにあらずして、更に多かるべきによるなり。

ゆゑに神の聖所に入りて『我等が年少を樂ましむる神に』（聖詠四十二の四、希臘譯文）就かざらん間は、此の勞は我等の面前にあるを知るべし、けだし我等なほ肉體にあるも、主の無欲をたまはり、成聖を遂げんことは、救世主の悅ぶ所にして、其時には敢て左の如くいふを得ん、曰く『我等は肉に在りて行へども、肉に循ひて戰はず、我等が戰の器は肉に屬せず、乃神に由りて壘を破る能あり、我等此を以て諸〳〵の謀と凡そ神の知識に逆ふ高慢とを破る』（コリンフ後十の三至五）故に尙此處に於ても我等は罪なる慾を十字架に釘すること、預言者の祈禱の如くすべし、曰く『我が肉體を爾を畏るゝの畏れに釘す』（聖詠百十八の百二十）けだし使徒のいはゆる『神の國を嗣ぐあたはざる』（コリンフ前十五の五十）肉と血とは、此の見ゆる體をいふにあらずして、（彼は神の造る所なり）悖逆の子（エフェス二の二）の中に行爲する兇惡の神によりて起さるゝ肉體の念慮を指す、何となれば、ハリストスに於ける完全なる苦行者のために『戰は血肉に於てするに非ず、此の暗昧の世君に於てし、兇惡の諸神に於てすればなり』（エフェス六の十二）。

故にもし此の行爲は天性自然の行爲にあらずして、反對なる力の行爲なるを認むるならば、彼等に對してハリストスの全き軍備をおのれにうけ『其の奸計を禦ぐを得べし』（エフェス六の十一）何となれば救世主は『蛇蝎及び悉くの敵の力を踏む』の權を我等に賜ふによる（ルカ十の十九）我等尙肉體に居るも敢て左の如く言ふを得んが爲なり、曰く『もしわが心に不法のあるを見しならば主はわれに聽かざらん』（聖詠六十五の十八）また曰く『我尤なしといへども、彼等は趨せ集まりて武具をそなへ』（同上

五十八の五)と、これ言意は我等は志す所に進行し、即上より召す所の褒賞に迎向しつゝ、如何なる肉體の慾もあるならして、天に生涯を送ること易からん、げだし諸の慾に遠ざかりて敢て左の如く言ふことを得ればなり、曰くたゞに信を守るのみならず、馳すべき程を盡せり(テモフェイ後四の七)。

たゞハリストスを信ずるのみならず、彼と共に苦をうくることも肝要なり、錄していへる如し、『汝等に賜はりしはたゞ彼を信ずるのみならず、亦彼の爲に苦をうくることなり』(フィリッピ一の廿九)。たゞ神を信ずるのみは地上の事を念ふ者に相應するのみならず、不潔の神にさへ相應するは我が言を俟たざるべし、いへらく『我爾が誰なるを知る、乃ち神の子なり』(マルコ一の廿四、マトフェイ八の廿九)。げだし彼も此もハリストスの十字架の敵なり、彼等が終は滅亡なり、彼等が神は腹なり、彼等が榮とする所は辱なり、彼等は地上の事を念ふ』(フィリッピ三の十八、十九)と、見るか十字架の敵はたゞ背教者の力のみにあらず、地上の事を念ふ者も亦然るを。しかれども、ハリストスと共に苦みをうけて共に榮せらるゝことはたゞ此世に於て己を十字架に釘して主の疵を己の體に負ふ者のみ能し得るなり。

哲學を正しく攷究して、靈魂を惡の汚穢より救ふ者は、哲學の目的を精確に知らんこと肝要なり、進行の勞と經過の終とを確知して、高慢と功勞のことを思ふ意思とを全く斥け、聖書の誡命にしたがひ、己の靈魂と生命をすてゝ一の富に注目せん爲なり、即神が凡そ甘んじて苦行を自から任はんと決心したる者を呼びて、其愛する所の者にハリストスを愛したる爲の報賞として定め給ひしものに注目せん爲なり、此の如き苦行の經過に於て彼等に充分の路用を給するはハリストスの十字架なり、されば彼等は此を負ふて、樂みと善なる希望とを以て救世主ハリストスの跡にしたがひ、其攝理を己の爲に生命の法となし、路となさんこと肝要なり、使徒の自から言へる如し、曰く『爾等我に效ふ者となれ、我がハリストスに效ふが如し』(コリンフ前十一の一)又いふ『忍耐を以て我等の前にある馳場を趨りて、我等の信の首及び成全者なるイイスを仰ぎ望むべし、彼は其前に在る喜に易へて辱を意とせず、十字架を忍びて神の寶座の右に坐せり』(ヱウレイ十二の一、二)。

われらは神の賜を以て自から高ぶり、道德に進むの或る進歩を己の爲に高慢と稱賛の爲の緣由となして、望む所の終りに達せざる先に己の志の撓まざらんが爲、高慢により先になせる勤勞を己の爲に無益となさゞらんが爲及び神の恩寵の我等を引誘する成全に堪へざるものとならざらんが爲に戰々兢々たらざるべからざ

るなり。故に勤勞に於るの盡力を決して弱むべからず、眼前にある所の苦行を辭すべからず、もし先に何が遂げし所あらんには、それを以て熱心を劃るべからず、乃使徒の如く後を忘れて前に進み（フィリッピ三の十三）成全を求むる者が飽くを知らずして獨り飢渴する所の義の願を有し、勤勞の爲に慮りて心肝を摧かんこと肝要なり。彼等は許約せられたる幸福を距ること猶遠くして、パリストスの完全なる愛に多く達せざる者なるにより、謙遜なる者となり、恐れに滿てる者とならざるべからず。けだし此愛を切願して、天の約束を仰望する者は、禁食するか、儆醒するか、或は他のいかなる德行に熱心するも、以前の功勞を以て自ら高ぶらざるべく、却て神聖なる望にみたさるゝ彼は己を呼ぶ所の者に間斷なく眼を注ぎて、いくばく奮鬪するも其志す所のものに比ぶれば全く小なりと思ふべし、されば其行により己を神の前に尊敬すべき者とあらはさゞらん間は、勞に勞を加へ、德行に德行を重ぬるも、神の前に適當なる者となれりとの意思を心に懷かずして、此の生命の終に至るまで悉くの盡力を用ひん。けだし行に於て大なる者は神を畏るゝを以て自負を地に擲ちて、心を謙遜し、生活の爲に己を罪し、信じて愛するの度により許約を樂みて、自から勞するの如何を以てせざるは、これぞ哲學の最卓越せる功勞なる。けだし賜は大なるにより、これに相應する勤勞を見出すことあたはざればなり、さりながら信と望とは大ならざるべからずして、これを以て報酬を測るべく、勤勞を以てすべからざるなり。然して信の根本は心神の貧しきと神に對する無量の愛とにあり。

希望の目的に應じ、哲學によりて、生活せんと決心したる者の爲に余は充分にのべたりと思ふ。今又これに加ふるにかくの如き者はいかに互に交際して如何なる勞を愛するを要するかを示すべし、天都に達するに至る迄其進行を協力して成さん爲なり。

此世に於て尊敬すべきと認めらるゝものを斷じて尊ばず、親族を棄て、もろ〳〵地下の榮を棄てゝたゞ天上の尊榮に着眼し、神による兄弟と心神にて結合する者は、世と共に己の靈魂をも棄つること肝要なり。靈魂を棄つとは何に於ても己の旨を求めずして、反つて己の旨を矯正し、院長を以て己の爲に神の言となして、これを益用すること、善良なる舵師の如くし、兄弟社會のすべてを擧げて、同心協力して神の旨の湊に向はしむるにあり。

身體を蔽ふ衣服の外共同より別ちて何も得る所あるべからず、或は己の私有物と名づくべからず。けだしもし誰か何も己に有せずして、自己に關する慮を脫するな

ちば、共同の需用の爲に慮る者となるべく、監督者より命せらるゝものは樂みと希望とを以て熱心に遂行すること、仁心正直なるハリストスの僕の如くなるべくして、兄弟共同の需要の爲にするものに身を委ねんとす。主は此を促し、且此を勸めていへり、汝等の中に首たり大たらんと欲する者は衆人の爲に僕となるべし（マトテオ二十の廿七、廿八）。

故に役事するは人々より報酬をうけんが爲にあらざることゝ、又役事する者に何等の尊敬も榮譽も歸せざることゝ、錄じていへる如く伴りてたゞ目前に於てのみ働く諂媚者の如くならず、人々の爲に働くにあらずして主の爲に働くことゝ、狹き路に由りて行くことは肝要なり。主の獨一の軛を甘んじて己の頸に擔ひ、終りに至る迄此を忍耐する者は、樂んで善なる希望を以て終りに赴むかん。ゆゑに己を衆人の屬下たらしめ、兄弟に勤むること負財ある債務者の如くし、衆人の爲の照慮を心に任ひて、愛の本分を遂ぐること肝要なり。

さりながら靈神上の隊に監督たる所の者も己に任せられたる照慮の重きに目在し、信仰に對して害意を懷く凶惡の詭計を論辨し、其監督に適當なる方法を以て闘ふべく、專權のことを想出すべからず。けだし危きは此點にあり。人あり、他を監督して、彼等を天の生活に向はしめんと欲するも、自から此點に注意せず、己を高く思ふて己を滅せり、ゆゑに院長たる者は監督の事に於て他よりも多く勞し、他よりも己を卑く思ひ、己の生活に於て役事の標準を兄弟にあらはし、己に任せられたる監督の權を視て神の委托物の如くせざるべからず、けだし此の如く行爲し親切を以て聖なる隊を形作り、各人に適當なる順序を守らしめんが爲に、各人の需要にしたがひて公に教訓を施すも、私に意中に於ては恩を感ずる僕の當然に守るべき如く、謙遜と信仰とを守るならば、此の如き生活を以ておのれに大なる賞を獲ん。彼等は屬下たる者の爲に慮ること、父より托されたる幼兒に對する善良なる教育者の如くせざるべからず。教育者は兒童の性質に注目して、或者をば打ち、或者をば諭し、或者をば譽め、又或者には他の何事をか施さんも、此を爲すは彼に對する恩愛の爲にあらず、又嫌惡のためにもあらずして、乃ち事に適當なる如くし、小兒の實質の然らしむる如くするは、兒童をして此の生活に於て尊敬すべきものとならしめん爲なり。かくの如く我等も兄弟に對して凡の嫉惡と凡の强情とを脱し、言ふ所を各人の力と傾きとに應せしめんことを要するなり。各人の要求に準じ、良醫の模範に效ひ、療法を用ひて、一者のためには譴責を爲すべく、他者には勸諭を用ふべく、或者をば慰

むべし。げだし醫は病者の苦みにより、或は輕き或は劇しき藥劑を用ひ、治療を要する如何なる者にも難儀と思はしめずして、技術を身體の疵と強さとに適應せしむるなり。しかれども汝を仰望する門徒の靈魂を汝は善く訓導して、其德行を父の前に光るものとしてあらはし、靈魂を父の賜をうくるに堪ふる當然の嗣業者となさんが爲に事を要求に適應せしむべし。もし院長も院長を己が師と認むる者も互に此の如く行爲し、一は喜んで命令に順ひ、他は樂んで兄弟を完全に進歩せしめ『互に禮儀を以て相讓るならば』(ロマ十二の十)地に在りて天使の生活を以て生活せん。汝等の中に如何なる高慢も認められずして、純直と一致と互に偽らざる敬愛とは汝等群集を結合すべし。おの〳〵共に居る所の兄弟より劣るのみならず、悉くの人よりも劣ると自から固く信ずべし。此を知る者は實にハリストスの門徒とならん。げだし『自ら高うする者は卑うせられ、自から卑うする者は高うせられん』(ルカ十八の十四)、またいふ『爾等の中先たらんと欲する者は衆の後となり、衆の役者となるべし』(マルコ九の三十五)。蓋人の子の來りしは人を役はんが爲にあらず、乃人に役はれ、且己の生命を與へて衆くの者を贖はんが爲なり』(マトフェイ二十の廿八)。また使徒もいへり『蓋我等の傳ふる所は己に非ず、乃ハリストスイイスス主なり、我等はイイスに縁りて爾等の僕なり』(コリンフ後四の五)。ゆゑに謙遜の効果をも高慢の損害をも知りて、主宰に法るべし。

互の善の爲に互に相愛して、死もいかなる罰も恐るゝことなかれ、乃ち救世主が爾等の中を行きたまひし路に由りて汝等も同く救世主に行き、神を愛し互に相愛して、恰も一體一靈を以てする如く、上よりの召に急ぐべし。何となれば主を愛し且畏るゝは律法の第一、遂成なればなり。ゆゑに爾等各人は或る動かす可らざる堅牢なる基礎の如く、畏と愛とを己の心中に置きて、善良なる行と長久なる祈禱とを以て靈魂を鎖着すること肝要なり。何となれば神に對するの愛は我等に常に單純に生じ、又は自然に生ずるに非ずして、多くの勞と大なる費心の後にハリストスの助けによりて生ずることは智者のいひし如くなればなり。げだしいへるあり『銀の如くこれを探り、秘れたる寶の如くこれを尋ねば、汝は主を畏るゝことを曉り、神を知ることを得べし』(箴言二の四、五)。

然るに神を識るの認識を得て、神を畏るゝの畏を曉りしならば、次者即近者を愛するに進歩せんことは容易かるべし。第一の大なる勞の益々加はる時は、第二は小なるものとして、容易すき勞を以て第一に從はん。しかれども第一の者なくんば、第二

の者も純然なるあたはざるべし。けだし靈を全うし、心を全うして神を愛さゝる者は、兄弟を愛するに心を用ひしむる所以のものに對して愛を遂げざれば、正しく諂媚なくして兄弟を愛するに心を用ふるを得べけんや。かくの如く全靈を神に從はしめず、神を愛するに未だ進ましめざる者は、武裝せざる者として、罪の創製者は惡なる意思を以て彼を礙へて、聖書の誡命は彼の爲に難澁にして、兄弟に勤むるは堪へ難き事の如く思はしめ、或は彼をして己とひとしき僕に役事すとの高慢驕傲に至らしめ、彼をして主の誡命を行ふにより天に大なる者なりと自信せしめて、彼をたやすく占領せん。

しかれども是れ小なる過にあらず、何となれば忠順勵精なる僕は其忠順のことの審判を主宰に信任すること肝要にして、主宰に代り、己を以て自己の行の稱讃を審定むる審判者と爲すべきにあらざればなり。けだしもし眞實なる審判者をしりぞけて、自から審判者となり、彼の審判に先だち稱讃を己に歸して、自負に充ち滿たさるゝならば、彼處に於て賞を有すべからざらん。パウエルの言ふ所によるに、神の神が『我等の神と共に證して』〔ロマ八の十六〕我等の行は我等の審判にて估價せられざらんこと要用なりけだし言ふあり、『自から譽むる者は嘉しとせらるゝにあらず、即ち主の譽むる所の者なり』〔コリンフ後十の十八〕しかれども神の審判を待たずして、反つてこれに先んずる者は、是れその自己の勢を以て兄弟より尊敬を求め、不信者に屬する所のことを爲して、人間の榮譽を切願するなり。けだし天上の榮譽に代へて人間の榮譽を追ふ者は不信者なり、或處に於て主が自らの給へるごとし、曰く『爾等互に榮を相受け獨一の神よりする榮を求めずして豈信ずるを得んや』〔イオアン五の四十四〕思ふに彼等は杯皿の外を潔めて、內は滿つるにもろ〳〵の惡を以てする者に類するなり〔マトフェイ二十三の廿五〕。

ゆゑに慎めよ、汝等には此の如きの事あらずして、靈魂を上に向け、主の意を悅ばせんとの一念を有して、天のことの記憶をうしなはず、此世の尊敬をうけざらん爲なり。かくの如く道德上に於ける己の苦行を聲言さずして進行すべし、これ彼の地上の尊敬を希ふ望を暗に勸め入れ、小なるものを尋出して、此を以て我等が才智を捉へ、人をして眞實なるものに從事するより虛妄にして諂媚をみつるものに貶めんとする所の者が向上に專らなる靈魂を捉ふるの時も近づくの便利も全く尋得ずして、滅亡し、死者となりて終らん爲なり。けだし邪惡の成遂げずして休止するは魔鬼の爲に死なるによる。

されば汝等に神を愛するの愛あるときは、其他のことも必ずこれに從はんたとへば兄弟の愛と、温柔と、僞善ならざること、祈禱の續くこと、及びこれに盡力すること、一言を以てこれを言へばすべての德行は必ずこれに從はん。しかれども此等の德は大なるにより、これを求むる爲には亦大なる勤勞なかるべからずして、其勤勞は表示の爲にあらずして、秘密を知る主を悅ばしめんが爲、及び我等が常に注目する主を悅ばしめんが爲に企つる所のものなるべし。靈魂の內部を研究し、敬虔なる思を以てこれを保護せんこと要用なり、敵がこれに近づくの徑路を得、或は惡を謀るの機會を求めざらん爲なり。衰弱せる靈魂の成分を練習して、善者と惡者とを識別するに昇らしむること要用なり。しかれども靈魂を練ることは神に從ひて行く才智の能くする所にして、彼は己と共に凡の靈魂を神に移し、神を愛すると、道德の神秘なる通曉と、誡命の實行とを以て腐敗せるものを療して、勇敢なるものと配合せしむべし。

けだし靈魂の爲に唯一の保護と療法とは、是即ち愛を以て神を記憶し、善なる意見を常に持するにあるにより、如此の勉强を放下すべからず、或は食ふか、或は飲むか、或は何事を爲すか、或は言ふか、すべて我等にかゝる所のものは神の榮の爲にこれを爲して、我等自己の榮の爲にせざるべく、我等が生活はいかなる汚穢或は惡者の奸計によるの不潔を有せざるべし。然のみならず誡命を行ふの勞は神を愛する者には便利にして樂しかるべし、何となれば神を愛するは苦行を容易ならしめて、大に希望せしむればなり。

故に惡者は主を畏るゝの畏を心に殄滅し、無法なる樂みと甘美なる餌とを以て主を愛するの愛を弱めんことを百方盡力し、神的武具を着ずして、自己を保護せざらん時、不意に靈魂を襲ふて、我等が勞を敗壞せんことを勉勵し、天の榮に昇へて地の榮を暗に我等にすゝめて、妄想に誘はるゝ者の爲に善好なるが如く見ゆるものを以て實に美なるものに換へんとするなり。けだし番兵の油斷を見るや、彼はよく德行の勞に立入り、麥と共に己の稗を播くべき時を選出するなり、即惡言、高慢、虛誇、榮譽の望、爭論及び其他惡の製造物を播くべき時を選出するなり。ゆゑに儆醒して何處にも敵を監視せんこと肝要なり、これその耻づべき奸計を用ふるや、靈魂に觸れざる先にこれを反拒せん爲なり。

アヴェリは初生の羊と其脂肪を神に献祭し、カインは地の諸果を献せり、しかれども其果は初實に非ざりしを常に記憶すべし、言ふあり、アヴェリの献祭を神は眷みたま

ひしかど、カインの禮物をばかへりみざりきと〔創世記四の五〕此の傳記は何の益するあるか。これ神の意を悅ばしむるものは、すべて畏と信とを以て爲す所のものにありて、愛なくして爲したる或る高價なるものにあるにあらざるを敎ふるなり。それアウラアムがメルヒセデクより祝福をうけしも他にあらず、初實の果と所有中の首なるものとを神の司祭に獻じたるによるなり。しかれども所有中の首なるもの、及び最善きものと稱するは靈魂と才智とにして、これを以て神に讃榮と祈禱とを乏しからずさゝぐべきを我等に命せらるゝなり、されば主宰に禮物として供ふべきは或る尋常のものにあるに非ずして、心中の最善きものを全幅の愛と熱心とを以て獻ぐるにあり、確言すれば靈魂を全く獻ぐるにあるなり、これ我等は神の恩寵に常にやしなはれ、パリストスの力をうけて救の進行を便利に遂成し、義の要求のいよ〳〵擴廣する時にも己の爲に容易なる且はたのしきものとなさん爲なり、何となれば神は自から我等の熱心なる勞を助け、我等によりて義の行を成就したまへばなり。さて此事につきては我等こゝに言を終へんとす。

されども德行の部分に關係しては、其中何れを最高尙なるものと爲すべきか、他よりも先に何を練習すべきか、又其中何れは第二にして、他の部分はいかに相伴ふか、此事につきては言ふの必要あらず、何となれば彼等は皆互に同敬にして、一は他に依て其練習する所のものを最高顚に昇すによる。されば正直は從順に反響し、從順は信に、信は望に、望は勤に、勤は謙遜に反響して、謙遜は溫柔をおのれにうけてこれを喜悅にみちびき、喜悅は愛に、愛は祈禱にみちびかん。かくの如く一は他にかゝり、彼此互に關係結合して、これを有する者を望む所の最高顚に昇せんとす、これと同じく反對の一方に於ても姦惡は自己の黨與に依て其友を極至の惡に陷せん。されば汝等は常に祈禱に專ならんこと大に肝要なり、何となれば彼は道德の隊に於る隊長の如きものなればなり。祈禱〕により他の諸の德行を神に請願せん。祈禱を常に務むる者は恰も神と交通する如く、奧密なる聖德と、或る神的効力と、得もいはれざる心情とを以て神と配合せん。けだし彼は尙此世に於ても神をうけて案內者となし、及び救援者となして、主を愛するを以て奮熱するなり、されば祈禱に飽くことを知らずして、至善者を愛するを以て不斷に燃え、熱心を以て靈魂を醉はしめて、願望を以て燒くこと、錄していへる如くなるべし、曰く『我を食ふ者は更に飢ゑ我を飲む者は更に渴す』〔シラフ二十四の二十五〕又他の處にいふ『我が心に樂を滿たせり』聖詠四の八〕且主もいひ給ふ『天國は汝等の裏にあり』〔ルカ十七の二十一〕。

さて我等が裏にありと主のいひ給ひしは如何なる國を指すか。これ實に上より神を以て靈魂にあたへらるゝ樂みをいふにあらずや。げだし此樂みはいはゞ諸聖人の靈魂が待つ所の世に於て嘗みんとする永遠の喜の指示となるべく、聘賀となるべし。ゆゑに主は我等を救ふて、靈神上の幸福と其賜とを我等に授け給はんが爲に、神の効力を以て我等をその諸の患難に於て慰むるなり。げだしいふあり『我等の凡の苦難に於て我等を慰む、我等が自から神より慰めらるゝ慰を以て凡の苦難にあるものを慰むるを得ん爲なり』(コリンフ後一の四)またいふ『我が心と我が身は生活の神に馳す』(聖詠八十三の三)。またいふ『我が靈の飽かさるゝこと脂肪を以てするが如し』(聖詠六十二の六)。これみな神を以てあたへらるべき樂みと慰めとを推し量りて形容するなり。

げだし神を愛するの生活を送らんと決心したる者は、己の爲に敬虔のいかなる目的を預想すべきか、彼は即心靈上の清潔と、己を善行に勵ますを以て己に神を住ましむることを預想すべきことは明なるにより、汝等はおの〳〵此の目的に準じて、靈魂を預備し、神を愛するを他よりも尤も重んじて、神の旨にしたがひ祈禱と禁食とに己をさゝげ、不斷に祈禱するを勸る者の誰なるを記憶し(コロサイ五の十七)祈禱と主の許約とを守るべし、錄して言へ、ふ如し、曰く刎や神は晝夜彼に呼ぶところのものを援けざらんや』(ルカ十八の七)。げだしいふあり『譬を設けて恒に祈禱して倦むべからざることをいへり』と(一)。しかれども熱心なる祈禱は我等に多くのものを賜ふて、神其者をも靈中に住ましむることを、使徒は明に證し、我等を勵まして言へること左の如し、曰く『常に凡の祈禱と祈願とに於て神を以て禱れ、凡の儆醒忍耐を以て此を務めよ』(エフェス六の十八)。

もし此の兄弟の中己を此部分に献ぐる者あらば、即ち祈禱に献ぐる者あらば、これ彼は最美なる寶の爲に慮るなり、されば彼はたゞ光り輝く榮冠を愛する者に適當なる正しき良心に從ひ、決して意念を以て恣に罪を犯さゞるべく、又已むを得ず意に反する如くして負を返すにあらざるべく、たゞ愛と心靈上の願とに滿足せしめて、その祈禱に常なるの善果を衆人のために明白ならしむるなり。さりながら他の人々もかくの如き者に時間をあたへて、其の祈禱に常なるを喜ばんこと肝要なり、彼等自己に於ても善果に與かる者となり、如此の生活を共に樂むを以てこれが同伴者とならん爲なり。主は自ら祈禱する力を願ふ者に當然にこれをさづけ給ふことと、錄する所のごとし、祈禱する者に祈禱をあたふと(イオフ廿二の二)。

ゆゑにかくの如き重要の事たる祈禱を常に務むる者は、更に大に勉勵し、全力を盡して奮闘せんことを主に願ふべく、且これを知らんこと肝要なり、何となれば大なる勝利の賞は大なる勞をも要求して、凶惡はかくの如き苦行者の爲に殊に何處にも詭計を搆へて、勉勵より遠ざからしめんことを盡力し、焦慮してこれを求むればなり、これにより身體には睡眠と疲勞とを生じ、靈魂の衰弱憂愁、怠慢不勤忍及び其の他の劣弱と惡癖の結果とあらはれて、これがために靈魂は漸々に奪ひ去られ、敵の權中にわたされて亡びん。故に思念は智なる能師の如く祈禱に注意することと肝要にして凶惡の神の攪亂するには少しも意を傾けず、その波の爲に漂はされず、天の湊を直ちに望見して、其無玷なる靈魂をばこれを汝に托して更にこれを汝より要求する神に返還せざるべからず。

聖書に依るに祈禱の時に當りて俯伏する他の人々の例に倣ひ、膝を屈め、地に平伏するをなせども、思は遠く神より離れて漂泊するは宜しきにあらず、又喜ばしきにあらず、意志の如何なる緩慢をも如何なる不眞實の意見をも自から己より遠ざけて身體と共に靈魂を全く祈禱に付與せんことを要するなり。

ゆゑに長老は全く勉勵して、此の如き者に教訓を以て助け、祈禱する者にその預定の目的を達し、靈魂を勉めて潔うするの願を蓄へしめんこと肝要なり。かくの如くならば、心痛する所の者に示さるゝ德行の果は、たゞ大に進歩したる者に益あるのみならず、いまだ幼稚にして學習に必要を有する者にも益ありて、彼等を慰めて目擊する所に倣はしめん。眞誠なる祈禱の果は正直なり、愛なり、謙遜なり、堅固なり、温厚なり、及び凡そ此に類するものにして、祈禱に熱心なる者の勞は、永遠の果に先だち、茲に此の生活の間に於て芽を發せん。祈禱はかくの如きの果を以て飾らるゝなり。しかれどもし此等を有せずんば、勞は無益に歸せん。

されば たゞ祈禱のみならず、凡て哲學の途も、もし前文にいふ所のものを增々長せしむるならば、これ實に義の途にして、正しき終りにみちびかん。しかれどもし、誰か此等の果をうばゝるゝならば、彼に殘るものはたゞ空名のみにして、彼は婚姻の室に於て必要の時に油をたゝさへざる愚女の如くならん、何となれば靈魂に光を有せず、即德行の果と靈神上の燈とを心に有せざればなり。ゆゑに新郎の來るに先だち德行をうしなひたるために、聖書は彼等を愚者と名づくること、當然にして、それが爲に此の不幸なる者の爲に天上の室の戸も閉されたり。聖書は童貞に於る勉勵を彼等の功に歸せず、何となれば神の効力は彼等にあらはれざればなり、これ最

適當なり、けだし農夫は葡萄園を耕し、果を獲んが爲に勞苦を忍耐するも、結果のあらはれざらんときは、何の益あらん。聖なる使徒が敗へたる平安と愛と其他靈神上恩寵の効果のあらざる時は、禁食と祈禱と儆醒とにより何の得る所あらん。けだし天上の國を愛する者は此等の結果の爲にすべての勞を忍耐し、これを以て神を誘引し、恩寵はこれに加はりて實を結ばしむべし、されば彼は神的恩寵が彼の讓遜と事に費心するとに於て成就せしめたる行爲を欣然として樂しまん。

ゆゑに祈禱、禁食及び其他の諸行の勤勞は大なる愉快と善なる希望とを以て忍耐して、其勤勞の花と實とは認めて神の行爲と爲さんこと肝要なり。けだしもし誰かこれらを己に屬して、すべてを己の勤勞に歸するならば、その清潔なる結果に易へて彼には高慢と或る僞智とを生長せん。しかれども此等の情は或る腐敗物の如く輕騷なる者の心に生じ、其勤勞を敗壞して、これを亡ぼさん。然らば神の爲に神を望むの望により生活する者は、如何に爲すべきか、道德の苦行を樂しんで務むれども、靈魂を情慾より救ふことと道德の最高尚なる階段に昇りて完全に達するの望みとは、これを神に委賴して、其の仁慈に信任するにあるなり。

かくの如く己を善く理め、箇樣に信任して、恩寵を味ひし者は、敵の凶惡を輕んじ、苦

無しに進行を遂ぐること、恰も情慾より既に離れ、ハリストスの恩寵によりてこれより救はれしものゝ如くなるべし。それ善なる生活を汗漫にするにより、己の天性に惡なる情慾を入れ、喜んで生命を慾中に送り、たやすくこれに滿足せしむることと恰も或る賦與せられたるもの、又は己の爲に固有なる色慾に滿足せしむる如くする者は、貪慾、嫉妬、詐僞及び其他の反對なる凶惡に屬するものを產出せん。かくの如くハリストスの眞實なる行爲者も信仰と道德に於るの勤勞と得もいはれざる愉快とを以て、神の恩寵の結果により、彼等の爲に超性的なる幸福を刈り諂はずして變らざる信仰と、動かす可らざる平安と、眞實なる仁慈と、凡そ其他のものとをたやすく己に成就すべくして、これにより靈魂はます〳〵己を善くし、敵の凶惡よりも更に强くなりて、崇拜すべき聖なる神の爲に清き住所を己の中に準備し、ハリストスの不死なる平安を彼よりうけ、これにより主と配して、主に附かん。しかれども神の恩寵をうけ、神に附きて、彼と一神となるときは、靈魂は敵の讒誣に勝つがために彼と戰ふことを爲すなくして自己の道德の行を易すく成就するのみならず、救世主の苦を己に感じて、これを樂むこと、世を愛する者が人々よりうくる尊敬と地下の榮譽と權威とをたのしむの比にあらざるは、これ最重要の事なりとす。けだし善

なる生活と、神の賜にしたがひ、其の己に與へられたる恩寵の神的成長の量に達したる「ハリステアニン」の爲に光榮と、慰撫と、如何なる快樂にもまさる最高尚なる樂みとは、これ即ハリストスの爲に嫉まれ、窘逐せらるゝものとなりて、神を信するが爲に諸の侮慢と凌辱の苦をうくるにあり。かくの如き者の爲には、復活と未來の幸福とに分をうけんとする完全なる希望により、凡の凌辱、鞭撻、窘逐及び其他のあらゆる苦みは、たとへ十字架の苦といへども、慰撫、安心となるべく、天の寶の聘賈となるべし。げだしいふあり、『人我が爲に爾等を詬り、窘逐し、爾等の事を僞りて諸の惡しき言をいはん時は、爾等福なり、喜び樂めよ、天には爾等の賞多ければなり』（マトフェイ五の十一、十二）。また使徒もいへり、『故に我寧甘んじて我が弱きを誇らん、ハリストスの能の我の内に寓らん爲なり、是を以て我獄に在りて（柔弱、凌辱、窮乏を以て喜びと爲す、蓋我が弱き時に於て我強し』（コリンフ後十二の九、十）。また云へり、『多の忍耐に於て己を神の役者と爲す』（コリンフ後六の四）。神の恩寵は自から靈魂を全く圍みて、樂みと力とを住所に滿たし、現在の苦痛の感觸は未來の希望を以て奪去りて、主の苦難を靈魂の爲に甘美なるものと爲すなり。

ゆゑに神の助によりて、かくの如き高尚なる力と榮とに達せんと欲する者は、神が汝等に來りてハリストスと共に嗣ぐに適當なる者とならん爲にすべての勞と苦行とを喜んでうけ、自らも陷らずして、他の爲にも罪の原由者とならざらん爲に、決して怠惰に依り弱らず衰へずして生存すべし。しかれどももし或者は最高尚なる祈禱の効方と事情の要求する勉勵と能力とをいまだ己に有せずして此德行に缺乏するならば、他に從順の德を以てこれを補ふべし、即力に應じて熱心に勤め、勉强して働き、樂んで他の意を喜ばしむるも、報酬として尊敬を得んが爲にあらず、人間の榮譽の爲にあらず、柔弱或は怠慢の爲に勤勞に倦まず、他の身體と他の靈魂につとむる如くせずして、ハリストスの僕につとむる如くし、及び自分の腹につとむる如くして、汝等の行は神の前に純潔にして諂はざるものと認められんことを要するなり。

善行に勉勵することに關しては、靈魂を救ふの行を遂ぐる力あらず、と誰も伴り言ふべからず、なんとなれば神は其僕に或る能はざることを命じ給はず、却て各人に其の望に從ひて或る善なることを爲し得る力を與ふる程、神性の非常に富める愛と仁慈とをあらはせばなり、されば勉勵する者は誰も救はるゝことを能くするな

くして存せざるなり。いふあり、『門徒の名によりて此の小子の一に惟冷水一杯を飲ましめん者は、我誠に汝等に語ぐ、其賞を失はざらん』〔マトフェイ十の四十二〕。此の誡命よりも行ひ易きものあるかや。一杯の冷水に天の賞は從ふ。視よ何等の無量なる仁愛なるか。いふあり、『此の至小き兄弟の一人に行ひしは、即我に行ひしなり』〔マトフェイ二十五の四十〕。命せらるゝものは輕少なれども、これに從ふによりて得る所のものは大にして、豊に神を以て報いらるゝなり。ゆゑに神は力に過ぐることを促さず、却て爲す所の事の小なる或は大なるに拘はらず、汝の合意に準じて賞は汝に從ふ。もし神の名により、神を畏るゝ心よりして爲すならば、賜は光り輝きてうばゝるゝことあらざらん、しかれども表示の爲又は人間の榮譽の爲になすならば、主の自から誓て言ふところのものをきくべし、曰く『誠に汝等に語ぐ、彼等は已に其賞を受く』〔マトフェイ六の二〕。ゆゑに汝等にも同くこれあらざらんが爲に其門徒に語げ、門徒により汝等にもつげていへり、『慎みて汝等の施濟又は祈禱、又は汝等の禁食を人の前に爲すなかれ、然らずば天に在す汝等の父より賞を獲ざらん』〔マトフェイ六の一〕。かくの如く此の死すべくして死すべき者を以て報いらるゝ稱贊と、此の凋衰して我等より去る所の榮譽とを嫌ひ避けて、彼の一の榮譽を尋ぬるを命じ給ふ、これ我等其美を言ひ得るも其界限を知るあたはざるものにして、これによりて我等は主イエスハリストスに於ける得もいはれざる奥義を賜はるを得るなり。彼に光榮は世々に。アミン。

克肖なる我等が父埃及マカリイの説教

第一　説教

心を守る事

第一章

『我は禁食し、旅行の生活をなし、己の所有を頒つによりて、我は聖なり』と誰にても言ひ得る者ありや。内部の人を淨めずして誰か聖なる。けだし淨むるとはたゞ惡しき行爲を制するを謂ふにあらずして、完全なる清潔、良心に清潔を求め得ることなり。人よ、汝の思慮を伸ばして、罪の俘囚たり又奴隷たる此の汝の智に入りて、汝の智の奥處と、意念の深きと、所謂汝の靈魂の潛伏所とに匍匐して巢を作れる蛇を觀察せよ、彼は汝の靈の重なる部分を擊破して汝を殺せり、けだし心は測るべからざる淵なり。ゆゑにもし此蛇を殺すときは、神の前に清潔を以て誇るべし。しかれどももしこれ無んば、汝は窮乏者たり、又有罪者たるにより、謙遜して汝の隱なる者のために

神に懇求すべし。

第二章

眞實の死は內部に心中に隱れて、人は裡面に於て殺さるゝなり。ゆゑにもし誰か窃に死より生に移る（イオアン五の二十四）ならば、實に彼は永遠に生きて死せざらん。且かくの如き者等の體は或時には破るゝも、聖にせられしものなるにより、光榮を以て起きん。ゆゑに諸聖者の死は眠と名づけらるゝなり。

第三章

すべて反對者の盡力は、我等が智を神を念ふの記憶と神を愛するの愛より誘ひ去らんとするにありて、これが爲に浮世の餌をもちひ、實に美なるものより虛にして實に美ならざるものに振向かしむるなり。けだしすべて善なる行は、もし人これを爲すときは、惡者は汚し辱しめんと欲して、つとめて自己の虛誇或は自尊の心を蒔きて、誡命に混じ、爲すところの善をして神のために成るにあらざらしめ、たゞ善なる熱心より出づるにあらざらしめんとするなり。

第四章

ゆゑに未だ曾て心に入りて研究をなさゞる我等は、何事を如何に始むべきか、我は起ちて禁食と祈禱とを以て叩くこと、主の命じ給ひし如くせん、曰く『叩けよ、汝等に啓かれん』（マトフェイ七の八）。けだし主の言と、赤貧と、謙遜と、すべて誡命を以て要求せらるゝ德行とに居りて、主の靈門を日夜叩くときは、等ぬるところのものを求むるを得ん、何となればすべて暗黑を逃れんと欲する者は此門に依りて救を得べければなり。彼は靈魂の自由を彼處に於て看破すべく、天の王ハリストスを求むるの思と其力とをうけん。

第五章

智は靈神的敬虔なる愛を忘るゝときは、誡命をも忘れんぞれゆゑ前進せんと欲して、平坦なる道をうしなひ、屈曲せる小徑によりて行き、隨て野獸を迎へん。もし我等は祈禱と希望とに專なる此勞を絕たずんば、迷に陷らざるべし。けだし心に愛ふる者のことを聖書は左の如くいへばなり『神は信なり、爾等が誘はるゝこと爾等の能

く、する所に過ぐるを容さず』『コリンフ前十の十三』『然れども悟らざる者に惡者は追及ん』『復傳律令三十一の廿九』。

第六章

外部の眼は荊棘と懸崖とを遠くより見認めん、かくの如く透明なる智も敏捷なれば、反對なる力の姦計と預備とを先見し、靈魂のために眼となりて、これを警戒するなり。

第七章

意念を試みて、我等が弱りたる感覺を『善と惡とを別つことに』『エウレイ五の十四』久しく教習せしめんとせば、隱れて見えざる戰と勞とを多く要するなり。神の爲に智を不斷醒起して、靈魂の弱れる部分を厲ますべし、何となれば我等の智が此事の爲に呼ばるゝは、パウェルの言ふ如く、常に『主と一神とならん』『コリンフ前七の十七』ためなるによる。しかれども此の隱れたる戰と、主を默想すると、此の勞とは、誠命を實行するにあたりて我等は日夜これを有せんことを要す、我等は祈禱するか、或は食ふか、或は役事するか、或は飲むか、或は他のいかなる事をなさんも、すべて我等が爲す所の始業は神の光榮の爲に成就せんためなりけだしすべて誠命と適準する我等が行爲は、神を不斷に記憶すると神に對するの畏と愛とを以て聖にせられて、我等に清潔に成就せらるゝなり、そのときは神の誠命に依りて爲すところのものは、最早これを汚す者の影響の外にあるべし。

第八章

族祖アウラアムは捕獲物の最良のものを神の司祭メルヒセデクに獻じて、彼より祝福をうけたりされども此によりて神は他のいかなることを推察せしめ給ふか。これ高尚なる思辨を指示し、これを以て我が天性のすべての融合より成れる最勝眞實なる骨子となすにあらずや、即其智と其良心と其心情と其意念と、其靈魂に於ける愛の力と、何れの時にも神に於る同一の記憶と默想とに己をさゝぐる我等全人の初實の果とを、我等は先づ常に神に獻じ、これを以て心の聖なる祭壇となし、善なる意念の貴重極善なるものとなさんことを要するにあらずや、されば かゝる場合に於て神の恩寵に助けらるゝ者は日々に成長發達するを得べくして誠命を以て

要求せらるゝ正義の軛は我等が爲に輕くなるべし、何となればすべての誡命は、主の助けにより、主を信ずる我等の信仰を以て純全に間然する所なく實行せらればなり。しかれども有形的苦行と高尚第一なる善なる始業とに至りては、至愛者よ悉くの德行は彼此相持たれて、互に關係することゝ、或る聖なる靈鎖によりて彼此互に係屬するが如くなるを知るべし、即ち祈禱は愛に係り、愛は喜に係り、喜は溫柔に係り、溫柔は謙遜に係り、謙遜は役事に係り、役事は希望に係り、希望は信仰に係り、信仰は從順に係り、從順は正直に係るなり。さてこれと反對なる一方をいへば惡習も彼此互に生せらるゝなり。怨恨は激怒を以て生せられ、激怒は驕傲を以て、驕傲は虛誇を以て、虛誇は不信を以て、不信は剛愎を以て、剛愎は怠慢を以て、怠慢は懶惰を以て、懶惰は等閑を以て、等閑は煩悶を以て、煩悶は不堪忍を以て、不堪忍は奢侈を以て生せられて、其他の惡習も彼此互に相係るなり、かくの如く善なる一方に於てもすべての德行は互に係屬するなり。されどもすべての德行の首たり、善なる行の最巓たるものは、常に祈禱に專らなるにあり、祈禱により神に顧ふて、他の德行をも日々に求むることを得べし。

第九章

それ謙遜と正直と慈悲を以て我等を飾るあらずんば、祈禱の外儀はわれらに何の益も產せざるべし。我等がこれを言ふはたゞ祈禱の爲のみに非ずして、すべての苦行の爲或は功勞、或は童貞或ば祈禱の爲にも、或は又德行の爲におこなはるゝいかなる苦行と行爲との爲にも言ふなり。もし愛と平安と喜悅と謙遜と正直と誠實と信仰及び寬忍の豐なる果をおのれに見るあらずんば、我等が苦行はすべて徒然無益なるべし、何となればすべて如此の行爲と、此の惡くの苦行とは、結果の爲に成就せらるべければなり。もし愛と平安の結果が我等にあらはるゝあらずんば、すべての行爲は空しく徒らに行はるゝなり。結果なくして爲すものは審判の日において五人の愚女の如くわらはれん、彼等は心の器に靈油を取らず、即ち上文に數へたる德行を此處より携へず、ゆゑに愚者と名づけられて、天國の靈室に入るをゆるされざるなり。德行の缺乏の爲、神の顯然たる住所をおのれに有せざるために、童貞の苦行は無に歸せん。葡萄園を耕すにあたりてすべての配慮を加ふるは結果を樂まんためなり。されどもし葡萄園に結果のあらはるゝあらずんば、耕耘の勞はすべて徒

然無益となるべし、かくの如く神の作用するときにあたり、愛と平安と喜悦と謙遜と其他使徒が教へたる徳行（ガラティヤ五の二十二）の結果を心神の感覺を以て全く疑なくおのれに認識するあらずんば、童貞の苦行は徒然なるべくして、祈禱と唱詩と禁食と儆醒との勞は何の益にも立たざるべし、何となれば此等の靈と形との勞は靈果を望むの希望によりて成るべければなり。然して徳行に於て神の果を結ぶは、靈神上の樂なると共に、神が作用する信者の心の爲に不朽なる滿足なり、信と希望とにより、適當なるものに聖神を以て行はるゝ行爲と勞とすべて天然の苦行は大なる瞭解と辨別とを以て價を定めらるべし。禁食と儆醒と旅行の生活は最美しき行にして、併て善なる生活の花なり。さりながら「ハリステアニン」の最内部なる職分のあるあり、されば何人もたゞ此の一事に依頼すべからざるなり。人あり恩寵に與かる者となるあらんに、彼に居る所の悪習は狡猾にして、隨意に地位を譲りて働かず、人をして其智は清潔になれりと思はしめて、彼を最早自負にみちびき入れん、ゆゑに彼はいへり『我は完全なる「ハリステアニン」なり』と。しかれどもその後人が己のことを『我はすでに自由なる者なり』と密に思ふて、己を等閑に委するや、其時潛伏するところの悪習は強賊のごとく人を襲ひ、これを誘ふて、幽暗の地に落さん。しばしば賊を働き、或は兵人となりし者は敵に對して能く詭り、伏を設け、身を潛めて敵の背後に廻り、俄に圍みてこれを殺すならば、まして、かくの如く靈魂をぬろぼさんとする凶悪は能く心中に隠れ、時を待ちて働かず、靈魂を自負にみちびき入れて、その完全に誇らしめん。

第十章

ハリストス教のために基礎となるべきものは左の如し。人はたとへ義の行を成就すとも、これに安心せず、己を大なる者と思はずして、神の貧しからんこと是なり、またたとへ恩寵をうくるものとなるとも、己を以て得る所ありしものゝ如く思はず、己を或る重要なるものと認めず、人を教ふるを始めずして、善なる旅行と宜しき生活とを以て多く禁食し、旅行し、祈禱しつゝ、恩寵をうくる者となりて、己の靈魂を高く値せざらんこと是なり、特に恩寵の初實を委托せらるゝ時は勞と渴とに止まりて、飽滿したる者の如く己を義なる者或は恩寵に富みしものと認識せず、哀みて涙を流さんこと是なり。たとへば母あり、獨生の子を有して、これに學問をなさしめたらんに、成人に至り不意に死せしならば、幾人の慰問者ありて、母を慰むるとも、みな

みな彼を愈々悲ましむるのみにして、母は慰なきものとして存せん、かくの如くルツテアニンも己の墮落を哭して、不斷に涙を流すべく、殊に傷める心を有すべし。

第十一章

それ帝王の家は多くの居所と、種々なる第宅と、許多の前庭及び內部の室を有するありて、かしこに王はみづから居り、彼處には王の紫袞衣と財寶の守らるゝあらんに、外庭に入りしものは、最早王の光榮と紫袞衣と財寶のある處なる內部の室に入りたりとは思はざらん。靈神界に於てもかくの如し。禁食して儆醒と歌頌と祈禱とを務むる者は、己を以ですでに慰安に入りたりとは思はざるべし。何となればたゞ前庭と第宅に入りたるのみにて、紫袞衣と財寶のある處に入りしにはあらざればなり。ゆゑに兄弟は生活の外部の狀態に多く依賴し、己を以て「我は或る價値を有す」と謂ふべきにあらずたとへ誰か恩寵に與かる者となれりといへども己を以て最早目的を達せりとか、又は王に最昵近なる者となれりと思ふべからず。何となれば外部の院に止れば、おの〳〵彼は寶を瓦器の中に發見したるか、神の紫袞衣を被たるか、王の物を得て自ら慰安したるかと穿鑿すべからず。何となれば靈きとを明白に認識するにあるのみ。もし靈魂は己に有する疵と情慾の痂とをたのしまず、己の有罪なるを恕するなくんば、主はこれを不具ならしめざるべく、來りてこれを痊し、これを療じて、これに無欲と不朽なる美とを恢復せしめん。たゞ彼はすでにいひし如く情慾が促す所のものと任意に交るをなさず、情慾によりて生ずるものに同意をなさずして、善なる神によりあらゆる情慾より免るの自由をたまはちんが爲に全力を以て主に呼ぶならば可なり。故にかかる靈魂は福なり。しかれども己の疵を自覺せずして、大なる限りなき惡習の故に、何等の惡習を有することをも思はざる靈魂は禍なり。善なる醫師は彼を眷みざるべく、又療せざるべし。何となれば彼は己を以て傷はれざる健全なるものと思ふて、己の疵を慮らざればなり。いふあり「康强なる者は醫師を需めず、病を負ふ者はこれを需む」（マトフェイ九の十二）。

第十七章

凡そ德行に對する熱心なる愛にみちびかれて、天に屬する神の秘義を識るの認識を實驗により聰敏に求得て、己の住處を天に有する者は、生活に於ても、超性の業に於ても、實に福にして驚嘆すべきものなり。これぞ彼等が悉くの人類に超越する明

白の證左なる。有力なる、或は有智なる、或は善智なる人類中誰か倘地に居りて天に登り、彼處に神的なる行を成し、神の美麗を直觀したる者ありや。しかれども今や、外貌によれば或る貧しき者、極めて貧しく賤しくして、鄙人にさへ全く知られざる者は、主の前に其面を俯伏し、神にみちびかれて天に昇り、其心に疑なき信を有して、彼處の奇跡をたのしみ、彼處に行動し、彼處に居處を有すること神聖なる使徒の言へる如くならん。けだしいふあり、『我等の居處は天に在り』〔フィリッピ三の二十〕またいふあり、『神が彼を愛せし者の爲に備へし事は目未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心にいまだ入らず』〔コリンフ前二の九〕其後使徒は又加へていへり、『たゞ我等には神己の神を以て之を顯はせり』〔同上十〕彼等こそは實に有智にして有力なる人なれ、彼等こそは尊貴にして善智なる人なれ。

第十八章

さりながら彼の天に屬するものによらずして、現在の賜に依り聖者を度らんも、彼等は悉くの人類より一層上なりと言ふを訝るなかれ。此事は左の如く考ふべし。ソロモンに王たりしナウホドノソルは曾て其彫刻したる偶像を拜せしめん爲に屬を以て自から誇らんとす。又或者は五「オンス」の罪をおのれに有すれど、これを半「オンス」と爲すことしばゝこれあり。彼等に此事あるは或は無知による、何となれば恩寵に關係し自から欺かれて、事理を辨へざるによる、或は虚誇により、彼等に惡の働くを言ふを耻づるによる、何となれば彼等は既に己を完全なる者と宣言したるによる。人は眞實を爲し且言ふべく、恩寵の賜をも罪の行爲をもおのれに承認むべし。清き心を有すと言ふ者は僞るなり。恩寵の降るや、即時に人が最早清潔なる者となるやうのことは實際之あるに非ず。人が練習と教訓との爲に敵と誘惑とに付さるゝは、イオブも曾て誘惑の中にありし如し、何となれば惡者もたとへ善意に出づるにあらずといへども、善なるものに助ぐればなり。しかれども、ハリステアヤンは五「オンス」の罪を有するも、言ふべし、『二十「オンス」を有して、惡に溢る』と。また例へば二十「オンス」の善をおのれに有するも、言ふべし、『我にはたゞ半「オンス」あるのみなり』と。さりながらもし虚誇により此を言ふを耻づるならば、眞實をいふべし、恩寵の靈驗なるを承認むべく、尚一方には罪をも承認むべし。しかれども我が前にいひし如く、靈魂は深きものなるにより、比喩の助を借りて其組織をあらはさん。彼はたとへば太陽の如く、これより光線を多く發す、或は喬木の如く、多くの枝あり、或は大なる市

の如く境を接する多くの方面を以て環らさるゝかくの如く聰明なる本質、不死なる靈魂もあらゆる造物よりも更に尊敬すべき美にして、神の像たり、又肖似たるなり。今來るところの恩寵が二の光線を以て靈魂に輝き始まるは、或は全樹の中二枝を照す如く、或は全市の中境を接する二の方面に輝く如くにして、靈魂の最多なる部分はなほ罪に占領せらるゝなり、しかれども靈魂はすべて全く善なる部分に屬して、全く恩寵と光明の中にありと思ふ、これ例へば誰か金五斤を得たらんに、己を安想して百斤を得たりと思ふが如し。豈胎兒は母腹に於て最早成人となりしや。或は一石を基礎に置きし者は、最早建築を竣りしや。或は土中に埋まりたる種子は、最早穂となりしや。豈商人は僅に貿易し始めて、直に其庫を滿たしたりしや。かくの如く恩寵の小部分をうけし者も、最早これによりて「パリスチアニン」となりしや。第一偉大なる者といへども、完全に關係すれば、下等の官吏の首長に對する如く、或は小川のエウフラト河に於ると同樣なり。三十里程を隔つる市にゆかんと志す者は、二三里をゆきすぎんとき、最早市に到着せりと思はざるべし。けだし反對の力はたゞ慫慂するのみにて、强て爲さしめざる如く、神の恩寵も天性の自由と愛憎との爲に奬勵するなり。もし今サタナに慫慂せられたる人が惡を爲すあらんも、人の爲にサタナが罪せらるゝにあらず、自己の自由にしたがひ、惡習に從屬したる者として、人は自から拷鞫と罰とをうけん。これと同樣、もし人が善に歸して、神の恩寵の勝を奏するあらんも、恩寵は善を己れに歸せず、却てこれがために人に報いて、人を稱揚せん、何となれば人はみづから己の爲に善の起原者にして、人の天性はかくの如し。人に來る恩寵は强制する力を以て人の自由を少しも束縛せず、人をして欲する欲せざるに拘はらず、善にありて變せざるものとなさしめざればなり。これに反して人に存する神の力は自由に餘地をあたへて、人が靈魂を貴重するか、或は貴重せざるか、恩寵と合致するか、或は合致せざるか、其自由の顯露せしむるを致すなり。多くの者は貴重と合致とをあらはせども、或者は背離せり、けだし使徒はいへり「神を以て始め、肉を以て終るか」（ガラティヤ三の三）律法は天性の爲に置かるゝにあらずして、善にも惡にも離れ去るべき自由なる意志の爲に置かるゝなり。ゆゑに主はいへり「我火を地に投せんために來れり、此の火の已に燃えんことを我望むこと幾何ぞ」（ルカ十二の四十九）主は人の心に天の火の燃えんことを望み給ふといへども、或者はこれを望み、或者は望まざるなり。主は亦同くいへり、曰く「我幾次か母鷄が其雛を翼の下に集むる如く爾の諸子を集めんと欲したれども、爾等は欲せざりき」（マトフェイ廿

三の三十七、主は望み給へども、人々は尙主に近づきて憐を得んことを望まざるを見るか。

第十三章

主に就きて永生を蒙ひり、神の住所となりて、聖神を賜はらんと欲する者は、主の誡命にしたがひ、正直清潔にして果を結ぶを得んがために、左の如く始を置かざるべからず。第一、人は主を堅く信じ、主の誡命の言に己を全く献げ、すべてに世を棄てゝ、智はいかなる有形物にも全く占有せられざらんこと肝要なり、また人は主の恵みと助とを不斷に待ち、何れの時にもこれを其才智の目的となして、常に祈禱に居り、失望せざらんことを要するなり。次に人は其存する所の罪の故に、たとへ心は願はずとも、すべての善と主の悪くの誡命を守るとに常に己を強ふべし、例へば悪くの人の前に謙遜なるものとなり、尊敬或は稱讃或は榮譽を何人よりも求めずして、己を衆人より劣等なるもの、且は悪しきものと思ふこと、福音經にしるさるゝが如くし〔イオアン五の四十四〕、獨一の主と其の誡命を常に目前に有して、彼れ獨りに容ばれんを願ふことに己を強ふる是なり。これと同樣たとへ心は望まずといへども、温柔に己を強ふること、主の言ふごとくすべし、曰く〔我に學べ、我は心温柔にして謙遜なればなり、汝等は其靈に安息を獲ん〕〔マトフェイ十一の二十九〕且又力に準じて憐憫なる者となり、寛容なる者となり、仁愛なる者とならんことに強て己を習はすこと、主のいふ如くすべし、曰く善良寛容なること〔爾等の天の父の慈憐なる如くすべし〕〔ルカ六の三十六〕、又言ふ〔我を愛する者は我が誡を守れ〕〔イオアン十四の十五〕、また己を強て力を用ふべし、何となれば〔力を用ふるものは天國を奪へばなり〕〔マトフェイ十一の十二〕、またいふ〔力を竭して窄き門より入れ〕〔ルカ十三の二十四〕、然れども人は主の謙遜と生活と人々と交際したることを常に目前に有し、忘れざる鑑となして、常にこれを記憶すべし。而して力のあるだけ己を強て常に祈禱に居りて、主が來りて人に居り、人を成全にして、その悪くの誡命に固め給はんことゝ、又己の靈魂がイエスキリストの住所とならんことを何れの時にも信仰を以て願ふべしされば、かくの如く何れの時にも己を善に習はし、つねに主を記憶して、時々刻々主の大なる慈悲と愛とを待つを盡力しつゝ、今は心の願に反するも、強て爲すわらば、主はその如此の任意と善良なる勉勵とを以て主を記憶すると、すべての善行と謙遜と温柔と愛とに不斷己を強ふるを見、又欲せざるの心を苦しめて、力のあるだけ前進

するに己を强ふるとを見ば、人に其憐を施し、これをその敵とその居るところの罪より救ふて、聖神を滿たしめ給はん。かくの如くなれば最早强ふることなく、又何等の勞もなくして、常に人は主の誡命を實に成すを得ん、確言すればもし人が清潔に果を結ぶならば、主は自から人に於てその誡命と神の果とを成し給はん。さりながら主に就く者は常に、疑なき信仰を以て主の憐を待ち、心の願に反すと雖、先づ善に己を强ふることと肝要なり、憐憫なるものとなり、慈悲の心を有することに己を强ひ、侮辱を忍耐し、大量なる者となり、卑しめ或は辱めらるゝ事は、怒らずして、錄するところの如く『己の讎を報いざる』(ロマ十二の十九)ことに己を强ひ、靈神上の祈禱をいまだ有せずんば、祈禱に己を强ふること肝要なり。かくの如くなる時は、神は人のかく盡力して鬪ひ、心の望に反してさへ己を善に向はしむるを見て、人に眞實なるハリストスの祈禱をあたへ、宏慈の心と眞の善心とをあたへ給はん。十言にていへば人の爲に靈神上の果を守り給はん。しかれどもし誰か祈禱を有せずして、恩寵の祈禱をうけんが爲に、たゞ己を祈禱に强ふるのみにて、謙遜と愛と其他主の誡命を守ることに己を强ひずんば、時としてその願のごとく恩寵の祈禱をあたへらるゝことあり、かつ稍々慰安と喜樂とに居るありといへども、品性に於ては依然として蓄

の如く異なる所なからん。けだし彼は溫柔を有せざるべし、何となれば勞してこれを求めず、溫柔なる者となるに己を習はざゝればなり、又謙遜を有せざるべし、何となればこれを願はずして、これに已を强ひざればなり、衆人に愛を有せざるべし、何となれば此を慮らず、盡力して祈禱の願を以てこれを尋ねざればなり。けだし心の願に反すといへども、無理にも己を祈禱に强ひ、これに力を用ふる者は、おの〳〵亦愛にも溫柔にもすべての忍耐及び大量にも、錄する所の如く喜んで己を强ふることと肝要なり、しかしてまたかくの如き卑遜に己を强ふべく、己を衆人より惡なる劣等なる者と爲し、無益なることを談せずして常に主の言を學び、口を以ても心を以ても、これをいひのぶることに己を强ふること肝要なり。また激怒せざることに己を强ぶべし、錄していへるごとし、曰く『凡の苦很、瞋恚、誼譟は凡の毒惡と共に汝曹の中より去らるべし』(エフェス四の三十一)此の如くなれば、主は人の自由なる意志を見てこれより先存する所の罪の故に强ひて力を用ひて、僅に守るを得たるところのものをすべて勞することもなく强ふることもならして成就せしめ給はん。然ちばすべて此の德行の企始は人の爲に天性の如くなるべし、何となれば主は終に人に來り給ふべく人に來り止まりて、その靈神上の果を實現せしめつゝ、自から其誡命

を容易く人に行はしめ給へばなり。

第十四章

もし誰か神より賜をうけざる間は、祈禱に己を強ふれども、此徳行に、即謙遜と、愛と、温柔及び其他の徳行に同じき分量を以て己を強ひず、これに力を用ひざるときは、時として神の恩寵はその祈禱と願求の如く彼に在ることあらん、何となれば神は善良にして慈悲なれば願ふ者にその願ふところのものをあたへ給へばなり。さりながら前文に數へたる徳行に己を備へず、又習はさずんば、或は恩寵を失ふべく、或は受けて而して陥るべく、或は高慢の故に進歩せざらん、何となれば全くの任意により主の誡命に己を委ねざればなり。神の居る處、或は安んずる處は、謙遜と愛と温柔と其他主の誡命なり。ゆゑに實に神の意を悦ばしめ、神より天の恩寵をうけ、成長して聖神に於て成全ならんことを欲するものは、先づ心の望に反すといへども、悉くの徳行を守るに己を強ひざるべからず、錄していへるごとし、「我爾が悉くの命を承認めて皆之を正しと爲す」（聖詠百十八の百廿八）。或者は祈禱に上進せざる間は、祈禱を常に務むるに己を強ひて、これに力を致さん、かくの如く徳行の悉くの企業に

も己を強ひて、これに力を致すべく、善良なる習慣に己を習はすべし。さればかくの如く堅固にして主に願ひ、懇求して願ふところのものをうくるならば、聖神上の賜は成長して彼に花咲くべくして、彼にあたへられたる此賜はその謙遜と他の徳行とに止まりて、彼に眞實なる謙遜と眞實なる愛と眞實なる温柔とを教へん。即先に己を強ひて切願したる所のものを教へん。かくの如く成長し、神に於て成全を得る時は天國の嗣者となるを賜はらん。けだし謙遜なる者は永く墮ちず、然り彼はすべてより下からば、何處にか墮つべき。大なる高きは謙遜なり、尊敬と價値は謙徳なり。ゆゑに我等も信と望と愛とを以て神に願ひ、懇求して其神を我等が心に道はし給はんことを不斷待望し、心の願に反すといへども、己を謙徳に習はして、これに力を致さん、又神を以て父に祈り、且拜せん、然らば神は自から我等の中に在りて祈禱すべく、神は自から我等に眞實の祈禱と謙遜と温柔と愛と、今日力を用ふるも爲すあたはざる所のものと、憐憫と慈悲とを教へ、主の悉くの誡命を勢せず強ひずして、實に遂ぐることを我等に教へん、即神が自から知り給ふ如く其果を我等に滿たしめて教へ給はん。さればかくの如く主の誡命が獨りハリストスの旨を知る神を以て我等に遂成せられて、我等を罪の汚れより潔ひるときは、彼は我等を最美はしき清

潔無玷なる新婦となして、パリストスに顯はさん、然らば我等は神に慰安すべくしてパリストスも我等に止まりて無窮の世にあらん。

光榮は彼の我等を兄弟と名づけ、天の父の子と爲して、かくの如き尊敬を人間に賜ひし鴻恩と憐憫と愛とに歸す。光榮は父と子と聖神に世々に歸す。アミン。

第二　說教

靈神上の完全

第一章

我等各人は神の恩寵と神聖なる賜によりて救を受く、然れども又た信と愛とを以て、自由なる意志の盡方により、德行の完全なる域に達するを得べし、これ恩寵による程は、義によりても、永生を闘がんが爲にして、充分なる上進を賜はるは、自己の勞を添へずしてたゞ一の神聖なる力と恩寵とを以てするにあらざる如く、自由と清潔の完全なる域に達するも上より神の手の助なくして、たゞ自己の勉勵と力とを以てするにはあらざるによる、何となれば『若し主は家を造らずば、造るもの徒に勞し、若し主は城を守らずば、守る者徒に儆醒すればなり』〔聖詠百二十六の一〕。

第二章

問、使徒が我等各人を呼び且勸めて認識せしめんとする神の旨は如何なるものか〔ロマ十二の二〕。

答、罪より全く清潔になり、耻づべき情慾より免れて、高上なる德行を求め得ることとなり、即完全なる神の神をうくるによりて必ず成就せらるべき心の清潔と聖にすることなりけだし言ふあり『心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり』〔マトフェイ五の八〕又いふ『汝等純全なること、爾等の天の父の純全なるが如くなるべし』〔同上四十八〕。又言ふ『願くは我が心は爾の律に玷なからん、我が羞を得ざらんためなり』〔聖詠百十八の八十〕又いふ『其時我爾が惡くの誠を視て羞ぢざらん』〔同上〕。また『誰か能く主の山に陟る』との問に答へていへり『唯罪なきの手と潔き心あるもの』〔聖詠二十三の三、四〕これ行に於ても思に於ても罪の全滅を示すなり。

第三章

聖神は顯然ならざる隱なる情慾より救はるゝの難きと、情慾が靈魂に固着して根

を張る如くなるとを知りて、これより清潔になることの肝要なる所以をダワイドにより證示すゞけだしいへり、『我が隱なる咎より我を淨め給へ』(聖詠十八の十三)これ即多くの祈願と信仰と神に全く向ふの助を以て、神の協力により、我等これを成すを得べく、かつ我等はこれに力を併ばし、すべての守りを以て其心を守るならば、成すを得べしとなり。

第四章

福たるモイセイは靈魂が善と惡の二の意見に從はずして、一の善なる意見に從ふべきこと、善と惡との二樣の種子を播かずして、一の善なる種子を播くを要することを比喩により示して、左の如くいへり、即爾の納屋に異種なる動物を共に繫ぐなかれ、例へば牛と驢馬とを共につなぐ勿れ、同種類のものを繫ぎて爾の刈穗を打つべしといふ(復傳律令二十二の十)、これ我等が心の納屋に德行と惡習と二の行爲の共に居るあらずして、一の德行の行爲のみならんことを要するなり。また毛と麻とをまじへ織りたる衣服を着るべからずといひ(十二)、一の地區に二の種子を播くべからずといひ(九)、異類の家畜を異類のものと交らしむべからず、同類のものを同類のものと交尾せしむべしといふ(利未記十九の十九)、これ皆すでに述べし如く、我等は德行と惡習とを共に己れに播かずして、一の德行の果のみを產すべきことと、靈魂が二神、即神の神と世の神とに親與すべからざることゝを奧密に了解せしむるなり。げだしいへり、『我爾がことゝくの命を承認めて、皆これを正しとなし、悉くの詭の途を疾む』(聖詠百十八の百二十八)。

第五章

神と配合せんとの望を起す處女たる靈魂は、たゞ顯然たる罪より、即淫行、殺人、偷盜、嗜甘、誹謗、貪銀、貪慾及びこれに類するものより清潔にならんことを要するのみならず、我等が前に述べし如く、隱然たる罪より、即肉慾、虛誇、容悅、僞善、貪欲、讒謗、惡性、怨恨、不信、嫉妬、自愛、高慢及び其他のこれに類するものよりは特に清潔にならんことを要するなり。げだし聖書にいふ如く、主は此等の隱然たる靈魂の罪を以て外面にあらはれたる諸罪と同等にすればなり。いふあり、曰く、『爾を攻むるものゝ骨を散さん』(聖詠五十二の六)、またいふあり、『殘忍詭譎の者は主之を惡む』(同上五の七)、これ神は諂諛と殺人とを同等に惡むをあらはすなり。またいふ、『其隣と和平を語り』(云々

〔聖詠二十七の三〕、またいふ、『爾等心の中に不法を地に設く』〔聖詠五十七の二〕、またいふ、『人々爾等に善を言ふ時は爾等禍なり』と、これ即汝等自己のことにつきて人々より善なることをきかんとの望ありて、名譽と人の稱讃とにつながるゝ時は禍なりとなり。けだし善をなすものは全く隱るゝを得べきか。且主も自からいひ給ふ、汝等の光を人々の前に輝すべしと。さりながらすでに述べし如く神の光榮のために善をなすを力めて、自己の名譽の爲にせざるべく、又人の稱讃を好む者とならざるべし、けだし主はかくの如きものを不信者と名づけて、左の如くいひ給ふ、曰く『爾等互に榮を相受け獨一の神よりする榮を求めずして豈信ずるを得んや』〔イオアン五の四十四〕。見よ、使徒も食ひ且飲むことをさへすべて神の光榮のために行ふべきを命ずるなり、けだしいへり、『或は食ひ或は飲み或は何事を行ふに論なく皆神の光榮の爲に行へ』〔コリンツ前十の三十一〕、然して神聖なるイオアンは憎惡を殺人と一樣に並べていへり、『其兄弟を憎むものは殺人者なり』〔イオアン一、三の十五〕。

第六章

『愛はすべてを庇ひ、すべてを忍ぶ。愛は永く墮ちず』〔コリンツ前十三の七、八〕。永く墮ちず』とはこれ即前文にいへる如くなる神の賜をうけたれど、充分靈活なる靈神上の愛の爲に情慾よりまぬかるゝ高き自由を賜はらざる者は、未だ安然の地位に到り達せず、反つて其行はなほ危險の中にあり、凶惡の諸神よりする畏懼の下に立つを意味するなり。しかれども愛の尺度は使徒の示す如く最早墜落に屬せずして、他にかくの如くなる狀態はあらざるなり、ゆゑに天使の舌も預言も惡くの知識も病を癒すことも愛に比ぶれば何も無きなり。

第七章

此を以て使徒は完全の標的を示せり、これ人おの〳〵己を如此の富より極貧になりし者と自覺し、熱心と張膽とを以て此の最終なる尺度に急ぎ、且かくの如くしてこれに達せざる間は靈界の道場を經過し去らんためなり、錄していへる如し、『得んの事を期して趨れ』〔コリンツ前九の廿四〕。

第八章

知るべし、己を捨つるとはすべてに己を兄弟社會に付し、何に於ても己の意旨の爲

に導かれず、一の衣服の外いかなる事にもその主人とならざるの謂なるを、これ人は全く獨立なる者となりて、たゞその命せらるゝ所を喜んで守持し、衆人に對し、殊に長老に對しては、僕のごとくに己をみちびき『爾等の中に首たり大たらんと欲する者は』衆人の役者となるべく、最後者及び僕となるべしとの給ひしハリストスに從ひ〔マトフェイ二十の二十六、二十七〕尊敬も榮譽も稱讃も強て求めず『人の悅を取るものゝ如くたゞ目前に於て』のみ働かず、すべてに於て愛と正直により兄弟につとむるの義務ある者と己を思惟するを得んが爲なり〔コロサイ三の二十二〕。

第九章

兄弟社會の長老は大なる事に附置かれたる者として、反對詭譎なる凶惡の姦計を倒さんことを要す、けだし高慢の情により、兄弟の上に權を執ること屬下に於る如くし、大なる益に易へて己を害せざらん爲なり。これに反して彼は慈悲深き父として、神の爲に己を以て靈形共兄弟社會の勤に献げて、兄弟の爲に盧り、何れの時にも注意を加へ、彼等を神の子となして、必要あれば何處にも規責すべく、當然なれば慰諭すべし、長老と屬下との間の緊要なる秩序を守らず、謙遜と温柔とを口實にして、修道院を亂脈に至らしめざらんためなり。しかれども心の奥底に於ては長老たる者は己を衆兄弟の不當なる僕と思ふべく、又神子を托せられたる保育者として、すべての善意と敬神の心とを以て各人を凡の善に向はしめんことを盡力すべくして、大にして奪ふべからざる、何等の勞にも超越する所の賞がかれらの爲めに守らるゝことを知らずんばあるべからざるなり。

第十章

少年の保育者たり、又或る時には自己の主人の爲にさへ保育者たる責任を負ふ者は、教育のため、及び品行の監督の爲に、全くの自由を以て彼等に鞭撻を加ふるを憚らざるべし、かくの如く長老等も怒と高慢との故にあらず、又己の爲に復讐するにもあらずして、或る瞹解を爲さしむるに必要有る兄弟を罰せざるべからざるなり、たゞ全くの善心により、彼等を導きて改善に至らしむる靈神上の益を目的とすべし。

第十一章

大なる勉勵と辛勞と專心致意と苦行的生活とは我等の中に形づくられたるハリ

ストスの恩寵と賜によりて我等に神に對する愛を得しむべし。此の誡命の後には、第二の誡命、即近者に對する愛の誡命を實行すること難きにあらざるなり。第一の誡命を他のすべての誡命よりも特に尚ぶべし、此を他よりも尚勉むべし、然る場合には第二も第一に隨はん。しかれどもし誰か此の大なる第一誡命、神に對する愛の誡命、即我等が内部の心情と善なる良心と神に於ける健全なる記憶とを以て、神の助力と救援とにより成立つべき誡命を疎にして、たゞ第二の誡命、即外部の勤を慮ることにのみ己を献ぐるならば、彼は此の誡命をも健全清潔に實行するあたはざるべし。けだし狡猾なる凶惡は、もし智が神を念ふの記憶と神に對するの愛と志望とを奪はるゝを見るや、或は神の命令を以て實行し易からざる至難なるものゝ如く想はしむべく、兄弟に對する勤に向つて不平と怨訴とを心に起さしむべく、或は己を義とするの自負自尊を以て人を誘ひ、己を以て尊敬すべき者大なる者、及び誡命を全く實行する者と思はしめん。

第十二章

人が自から己を以て誡命の勉勵者と爲すときは、顯然として罪を行ひ、誡命を誠實に守らざるべし、何となれば自から己れに審判を下して、眞の審判を與ふる者を待たざればなり。〔ハワエルの言ふ如く〔ロマ八の十二〕神の神は我等の神と偕に殿する〕なら、たゞ其時には眞實にハリストスに應ずる者となるべく、神の子となるべけれども、自己自尊によりて己を義とせんとする時はこれあるべからざるなり。けだしいへり、『自から譽むる者は嘉しとせらるゝにあらず、即主の譽むる所の者なり』〔コリンフ後十の十八〕。神を念ふの記憶も敬神の心も人にこれあらざる時は、人の爲に名譽を好み、承奉する者の稱讃を捉へんとする大なる必要は近づき來らん。主はかくの如き者を不信者と名づけしこと、すでに説明せしごとし、けだし言へり、曰く『爾等互に榮を相受け、獨一の神よりする榮を求めずして豈に信ずるを得んや』と〔イオアン五の四十四〕。

第十三章

智の大なる戒と勞苦との時に際し、聖なる默想とすべて美なることに於ける不斷の專心致意とに由り、神の愛に大に進歩するを得るはすでにいひしごとし、何となれば敵は我等の智に妨げ、すべて美なることを記憶するにより神聖なる愛を守ら

んことを許さず、此世の欲望を以て、智覺を誘へばなり。惡者のために死或は絞殺ともいふべきは、智が神を愛すると神を記憶するとに留まりて、引誘せられざらん時にあるべし。これより兄弟に對する眞誠なる愛と眞の正直とは流れ出づべく、同じく亦溫柔、謙遜、誠實、慈悲、眞實なる祈禱、及びすべて大に飾られたる德行の冠は、一ありて二あらざる神に對する愛の第一、誠命によりて完全をうくるなり。ゆゑに大なる戰と隱れて顯はれざる勞苦と意念の試練と我等が靈魂の弱れる感覺を善と惡とを分つに習はすと、靈魂の疲れたる部分を堅め、智を神に勉めて向はしむるを以てこれを活潑にすることは要用なり。けだしかぐの如くして常に神に附く我等が智はパウエルの言ふごとく主と一神となるべし。

第十四章

此の隱然なる戰と勞苦と默想とは、德行を愛するものに於て不斷にこれを有すべし、すべて誠命の實行に着手して、或は祈禱するか、或は役事するか、或は食ふか、或は飲むか、いかなる善の成るありとも、すべて神の榮の爲にして、我等の榮のためにあちざるを致すべし。すべて誠命の實行は、神を愛するの愛がこれを助けて凡ての困難を解くときに、我等の爲に便利にかつ容易なるべし。

第十五章

すべて敵の爲に能くし得るものにおける靈力と勉勵とは、此世の誘惑と餌とを以て智を眞に善なるものより空しく美なるものに離れしめて、神の記憶と敬神の心と神を愛するの愛とより誘ひ去るにあることは、すでに說明したる如し。

第十六章

德行は彼此互に相關係して、互に相持たるゝこと、或る聖なる鏈鎖の一の環が他の環にかゝると同じ。例へば祈禱は愛に持たれ、愛は喜に、喜は溫柔に、溫柔は謙遜に謙遜は役事に役事は希望に、希望は信仰に、信仰は從順に、從順は正直に持たるゝ是なり。これ猶これと反對なる惡習も彼此互に關係するが如し、例へば怨恨は激怒に關係し、激怒は驕傲に、驕傲は虛誇に、虛誇は不信に、不信は剛愎に、剛愎は怠慢に、怠慢は懶惰に、懶惰は等閑に、等閑は煩悶に、煩悶は不勘忍に、不勘忍は奢侈に關係する是なり。かくのごとく惡習の他の部分もまた彼此互に相持たるゝなり。

第十七章

すべて人はいかなる善き行を爲すとも、惡者はこれに己の種子を混じて黑め且汚さんと欲するなり、たとへば虛誇自負を混じ、又或時は不平又はこれに類するものを混ずるは、其爲すところの善をして或は神のために成るにあらず、或は熱心より出づるにあらざらしめん爲なりけだし錄していへり、アヘリは『羊の肥たるものと初生』とを携へ來りて供物となし、カインも同樣『地の諸果』を携へ來りて禮物となしたれど、初實なるものを以てせざりき、故に神はアヘリの供物を眷みたまひしかど、カインのをば眷みたまはざりき（創世記四の三、五）これによりて知るべし、他の善きものも善からずしてこれを成し得べきをたとへば或は怠忽を以てし、或は輕侮を以てし、或は何か他の爲にして、一の神の爲にするにあらざるの類是なり、されば善き行も神にうけられざることはこれより生ずるなり。

第三　說教

祈禱の事

第一章

凡そ善なる勵精の中に於て首要なるものと進步の頂上とは、祈禱に沮勉なるにあり、我等が祈禱に於て呼ぶ所の者が手を伸ばして我等に助くるときは、他のすべてのものをも求むるを得べし、何となれば不可思議なる能力の親與は、これを賜はる者に祈禱を以て成るべく、神の前にありて聖事に於る心情と才智との配合は、主に對する言ひ難き愛に賴りて成ればなり。けだし言ふあり、『我が心に樂みを滿つ』（聖詠四の八）また主は自からいへり、『神の國は爾等の裏にあり』（ルカ十七の二十一）『國は汝等の裏にあり』とは天に屬する神の樂みが適當なる者の心に顯然とあらはるゝを謂ふにあらずして何ぞや。けだし適當なる靈魂は、神の靈驗なる親與により、諸聖人がハリストスの國に於て永遠の世に受けんとする其樂みと、其喜びと、其靈神上の愉快の聘質及び初實を倘此世に於てうけん。言ふあり、『我が心と我が肉は生け

る神に馳す』(聖詠八十三の三)また『我が靈の飽かさるゝこと脂油を以てするが如し』(聖詠六十二の六)といひ、及び其他これと符合する訓言もこれと同意義にして、神を以てあたへらるゝ靈驗なる樂みと慰めとを謂ふなり。

第二章

祈禱の行爲は他の行爲より一層上なる如く、祈禱に勉勵する者に於ても配慮の大ならんことを要す、凶惡が見えずして竊み去らざらん爲なり。げだし大なる善事の爲に配慮する者を惡者は大なる誘惑に服せしむればなり、ゆゑに覺醒は大に要用なり、愛と謙遜と正直と仁慈と明斷の諸結果が祈禱を務むる者に日々に成長せんため、及び神聖なる事に於る顯然たる進歩と成長とが彼自己に生せし如く他人をも呼んで等しく熱心に至らしめん爲なり。

第三章

輟めずして祈り常に祈禱を務むべきことは、神聖なる使徒自からも(フェサロニカ前五の十七)又主の言ふところのものも、我等に敎ふるなり、いへらく、『嗣んや』『神は晝夜彼に顧ぶところのものを援けざらんや』(ルカ十八の七)又いふ『儆醒せよ、祈禱せよ』と(マトフェイ二十六の四十一)ゆゑに『祈禱して倦むべからざるなり』(ルカ十八の一)ながら常に祈禱に居る者は自己の爲にあらゆる行爲中の首要なるものを選びし如く、彼は大なる苦行と弱らざる努力とに居らんことを要す、何となれば祈禱に勉勵するを凶惡を以て阻せんとする妨礙を多く見んとすればなり、たとへば睡眠、煩悶、身體の重さ、思の擅なる、智の定らざる、衰弱及び其他兇惡の企計の類の如し、次は憂愁及び惡神の蜂起なり、此等は吾人と頑强に戰ひ、吾人に抵抗して、眞に連綿として神を呼祈する靈魂をハリストスに近づかざらしめんとするなり。

第四章

祈禱の爲に配慮する者は悉くの勵精と、覺醒と、忍耐と、心中の戰と、身體の勞とを以て踏堪へんを要す、これその思の散亂、或は長眠、或は鬱閉、衰弱及び擾亂に己を委して、喧嘈不適當なる言を弄し、或はかくの如きものに意を轉じ、一の堅く立ちて膝を屈るのみに滿足し、心を外形に行はるゝ所のものより遠く何處にか漂はしめて、精神を弱めざらんためなり。げだしもし、誰か無用なる思念の多きに抵抗して、おの〳〵

これを試驗と分析とに付し、常に主に懇願し、嚴なる覺醒を以て己を預備せざるときは、或は惡が種々なる手段を以て見えずして彼を捉へんも、或は彼れ自ら祈禱に常に專なるあたはざる者に對して高慢せんも、これを禁むるものは絶てあらざらん。然してかくの如くなる惡の狡計により、人は美なる行爲を敗壞して、これを凶惡なる魔鬼に付さん。

第五章

もし謙遜と愛と正直と仁慈が我等に於て祈禱と密に連合するあらずんば、其祈禱は、否確言すれば祈禱の此假面は、われらを益すること甚少なかるべし。而してこはたゞ一の祈禱の爲にかく證定すべきのみならず、すべての苦行、勤勞、童貞或は禁食、或は儆醒、或は唱詩、或は役事、或は德行のために行はるゝ如何なる行爲の爲にもこれを證定すべし。もし我等は己れに於て愛と平安と喜悅と溫柔の結果を見ず、加ふるに謙遜と正直と誠實と信仰の結果を見ずして、當然に大量と友誼の結果を見ざるならば、我等は勞して益なし、何となれば結果を益せんが爲に勤勞をも企つれば なゞしかれども我等に愛の結果のあらはれざるときは、疑なく行爲は徒然なり。故にかくの如き者等は五人の愚女と何も擇ぶところあらず、彼等は尙此世に於て靈神上の油を心に有せざるが爲、即前文に數へたる德義の靈神上の能を有せざる爲に、愚者と名づけらるべくして、童貞の苦行により何も益する所なく、王の婚姻の室の外に悶むべく棄てられん。たとへば葡萄園を耕すにあたり、すべての配慮とすべての勤勞とは結果を望むの希望と相合せん、されどもし結果のあらざるときは行爲は徒然ならん。かくの如く、もし神の作用により愛と平安と喜悅と凡て其他使徒が數へたるもの（ガラティヤ五の二十二）を己れに見ずして、靈神上の感覺に於ても此等を己れに全く疑なく認むる能はずんば、童貞と祈禱と唱詩と禁食と儆醒の苦行は無用なるものとならん。けだし此等の勤勞と靈形の苦行は、我等すでにいひし如く、靈神的結果を望むの希望によりて成就せらるべし、然して德行の豐なる結果は篤信謙遜なる者の心に神を以て言ひ難く生せられ、不朽の滿足を以て樂む靈神上の樂なり。ゆゑに勤勞と苦行は實際如何なるも勤勞及び苦行と認めらるべく、結果は結果と認めらるべし。さりながらもし誰か知識の足らざるにより己の行爲と苦行を神の果と思ふならば、これ彼は自から己を欺き、かくの如くなる己の意見を以て實に大なる神の果を自から奪ひて、顯然と誘惑せらるゝものなることを見るべし。

第六章

樂み且喜んで己を全く罪に委ねたる者は、天性に悖る恥づべき情慾、たとへば放蕩、邪淫、貪欲、嫉妬、詐譎及び其他のよこしまなる始計を己れに有すること、天性と融合するものゝ如くならん、かくの如く實に完全に「ハリストアニン」たる者も大なる樂みと心神の愉快を以て、すべての德行とすべて超性的なる靈果、たとへば愛、平安、忍耐、信仰、謙遜及びその他の實に貴重なる凡百の德行を最早勞せずしてたやすく求め得ること、天性自然なるものゝ如くなるべくして、有害なる情慾の爲に最早勝たれざらん、何となれば彼はこれらより主を以て全く救はれて、善なる神によりハリストスの充分なる平安と喜とを心に受くればなり。彼は主に附きて、主と一神になれり。

第七章

靈神上の幼稚により、靈神上の愛に己を全く献ぐる能はざるものは、虔恭と信仰と敬神の心とを以て、兄弟に對する役事を己に擔當すべく、而してこれを勤むること、神の誡命の如く、又神的行爲の如くして、報酬或は尊敬、或は感謝を人々より己れに期待せず、不平或は高慢或は等閑と怠惰との爲に餘地を全くあたへざらんことを要するなり、此の普なる行爲の汚されず、傷はれずして、我等の虔恭と寅畏と喜びとによりいよ〳〵神を悅ばしめん爲なり。

第八章

かゝる仁愛と慈悲とを以て(神の憐みは實に大なり)主は誰をも善行の爲に賞なくして遺さず、凡の人を小なる德行より大なる德行に昇せ、一杯の冷水の爲にも報賞を失はせざらんことを虛りて、人々を寛恕し給ふなり。けだしいふあり『門徒の名によりて此の小子の一に惟一杯の冷水を飲ましめし者は我誠に爾等に語ぐ其賞を失はざらん』(マトフェイ十の四十二)、またいふあり『此の至と小き兄弟の一に行ひしは即我に行ひしなり』(マトフェイ廿五の四十)たゝ爲す所のものを神の爲にして、名譽の爲にあらざらしめよ、けだしこれに加へて『門徒の名によりて』といへるは、これ即敬神の心をもてハリストスを愛するによりてとなり。しかれども表示のために善を爲す者を主は詰責し、斷然たる宣告を以て其言を確定し、これに添へていへり『誠に

汝等に語ぐ、彼等は既に其賞をうく』〔マトフェイ六の五〕。

第九章

まづ第一に正直と誠實と相愛と喜悅と謙遜とは凡その方法により、兄弟の間に沉かるゝこと、或る基礎の如くなるべし、我等互に相誇り、互に不平を鳴して、苦行を無益なるものとなさゞらんためなり。不斷に祈禱を務むる者は、いまだ同くこれを爲すあたはざる者等に對して自から誇らざるべし。また己を役事に捧ぐる者も祈禱を務むる者に對して、不平を鳴さゞるべし。かくの如き正直とかくの如き心情を以て兄弟等互に相待つときは、祈禱を務むる者の有餘は役事する者の不足を償ふべく、これに反して役事する者の有餘は祈禱を務むる者の不足を補ふべし。かくの如くならば、平等均一は尤善く守らるべし、錄していへる如し、『多く欲めし者にも餘ることろなく、少く欲めし者にも足らぬところなかりき』〔出埃及記十六の十八〕。

第十章

すでにいひしごとく、我等は互に相誇らず、たゞに羨望するなきのみならず、正直と愛と平安と喜悅との交際により互に親和し、近者の進歩を以て當然に自己の進歩と思ひ、これを奪ふを以て自分の損失となす時は、神の旨は『天に行はるゝごとく地にも行はるべし』。祈禱と、兄弟に對する役事と、其他神のためにおこなはるゝ如何なる事にも怠りて、懶惰と等閑とに日を送る者を使徒は直ちに遊惰なる人と名づけて、麵麭を食ふにも當らざる者と宣言す、けだしいへり、遊惰なる者は食ふべからずと〔フェサロニカ後三の十〕。また他の所にもいへり、遊惰なる者を神は憎み給ふと、またいふ、遊惰なる者は信者ともなる能はずと。また智慧書にいへり、『遊惰は多くの惡を教へたり』〔シラフ三十三の廿八〕。ゆゑに神の爲に行はるゝものはいかなる事たりとも、おの〳〵果を結ばんことを要す、〔たとへ何か一の善事に傾きて熱心すといへども〕、然らずば全く無結果なる者となりて、永遠の幸福にすべて與からざる者となるべし。

第十一章

たとへ善なる神をうけてこれに滿たさるゝを賜はりしといへども、完全に到達して情慾より充分免るゝを得る能はざるべし、とかくの如く主張する者の爲には、神

の書より證據をあらはして、彼等が事を惡しく了解し、誤りて說を爲すと共に、彼等自己の爲にも危險なるを必ず證せざるべからず、主はいひ給ふ『故に爾等純全なること爾等の天の父の純全なるが如くなるべし』（マトフェイ五の四十八）と、これ即完全なる潔淨を示すなり。またいふ『我が居る所に我と偕に居らんことを望む、我の榮を見んが爲なり』（イオアン十七の廿四）。これ『天地は廢せん、然れども我が言は廢せざらん』（マトフェイ廿四の三十五）との給ひし者の言なり。また使徒のいひし左の言も其意これに同じ、曰く『凡の人をハリストスに於て完全なる者として立たしめんが爲なり』（コロサイ一の廿八）又いふ『我等皆信と神の子を識る知識の一なるに、成全の人となるに、ハリストスの全き成長の量に至るに迫ふ』（エフェス四の十三）。かくの如く完全を目ざす者は二の最美なる德を得ん、即彼等は盡力して間斷なき苦行を以て、此量に達せんとするの希望と、併て向上の希望により、終極に進行せん、されば高慢のために捉へられずして、己を謙遜し、己を小なる者と認めて、完全に未だ達せざる者とするなり。

第十二章

前文に言ふ所を主張する者は三の有樣を以て靈魂に最も大なる害を被らしめん、第一は神の書を信せざる者とあらはるゝなり。第二はハリストス教の高尙完全なる目的を自から豫想せずして、これに達するを盡力せず、勤勞と勉勵とを有して義に飢渴すること能はず、却て外部の狀態と、慣行と、或る小なる功勞とに滿足して、禍なる希望と完全と悉くの情慾より全く潔くなるとを奪はるゝなり。第三はすでにいひし如く、小なる德行に進歩したるを以て己を頂上に達せりと思ひ、完全に進向せずして、謙遜と神の貧しきと中心の悲傷とを有すること最少なきのみならず、既に目的を達したるものゝ如く自から己を義として、日々の進歩と成長との爲には無力ならんとす。

第十三章

人々に神を以て行はれ、清き心の新造物となるを得る此大なる進歩を以て不可能事と思ふ者等を使徒は明に夫の不信のために約地に入るあたはずして、其屍の野に仆れたる者等に比するなり（エウレイ三の十七）。けだしこに明々に約地といへるはこゝに情慾より救はるゝを奧密に示すものにして、使徒のいふ如くすべて

の誠命の終なり。これぞ眞の約地にして、このすべては比喩によりて授けられたるなり。ゆゑに神によりて智なるパウエルも門徒の安然を慮り、不信の意見の爲に捕へらるゝ者のあらざらん爲に左の如くいへり。『兄弟よ慎みて爾等の中に不信の惡しき心を懷く者なからしめよ、活ける神より離れざらんためなり』〔ヘウレイ三の十二〕。離るといふ言は拒否の義に用ひしに非ずして、神の約束を信せざるを意味す。これ即ちイウデヤ人の爲に前表なりしものを比喩的にあらはし、これを眞實に適用するものにして、言ひ續くること左の如し。『蓋聞きし者の中に怒を激せし者あり、然れども〇イセイに從ひてエヂプトより出でし者皆然せしに非ず、然らば彼は四十年間誰に向ひて憤りしか、罪を犯して其屍の野に仆れし者に非ずや、誰に向ひて彼の安息に入らざらんと誓ひしか、順はざる者にあらずや、是を以て我等は彼等が不信に由りて入るを得ざりしを觀るなり』〔ヘウレイ三の十六至十九〕。使徒は又これに加へていへり。『故に我等畏るべし彼の安息に入る許約の尙存する時に於て恐くは汝等の中に之に及ばざる者あらん蓋我等にも福音せられしこと彼等に於けるが如し、然れども彼等には聞きし所の言は益を爲さゞりき、聞きし者の信を和せざるに由りてなり、安息に入る者は我等信せし者なり』〔ヘウレイ四の一至三〕。而して少しく後に又いへり、曰く、『我等其安息に入らんことを勉むべし、何人も彼の例に倣ひて不順に陷らざらんが爲なり』〔同上十二〕。されども「ハリステアニン」の爲に罪なる惰慾より救はるゝと、潔き心に善なる神の充分靈驗に止居するとを除くの外他にいかなる慰安ありや。ゆゑに彼等を再び信仰に昇せていへり、曰く、『誠の心と全き信とを以て心は惡しき意念より灑がれ、身は清き水に洗はれて、近づくべし』〔ヘウレイ十の廿二〕。またいへり、『況んやイエスの血は汝等の良心を死の行より潔めて活ける眞の神に奉事せしむるをや』〔ヘウレイ九の十四〕。ゆゑに我等は恩を忘れざる僕の如く、神が人々に對しこれらの言を以て約せられたる限なき仁慈を信認し、此等の約束を以て眞實確固なるものとなさんを要す、蓋し我等はたとへ意志の不活潑と薄弱とにより己を造成者に全く獻げず、德行の高上完備なる階段に達するに汲々として進まずといへども、少なくも思想の正しくして不愛なる狀態にあるが爲、及び健全なる信仰の爲に或る憐といへどもうくるを得ん爲なり。

第十四章

適當におこなはるゝ祈禱と傳道の行爲はすべての德行と誠命とより一層上なり。

主は自からこれが證者たりけだしマルファとマリヤの家に來り給ひしや、マルファは役事に忙しかりしも、マリヤは主の足下に坐して、其の神妙なる口より出づる美言を樂めり、ゆゑにマルファが彼の己を助けざるを責め、パリストスに就きてこれを訴へしとき、主は第二者に對し第一者に特典をあたへて、左の如くの給へり、曰く『マルファよ、マルファよ、爾は多の事を慮りて、心を勞せり、然れども需むる所は一のみ、マリヤは善き分を擇びたり、是は彼より奪ふべからず』(ルカ十の四十一、四十二)しかれども主が此の如くの給ひしは我等すでに認めし如く、役事を非難したるにあらずして、小なる者に對し大なる者に特典をあたへしものなること疑なし。然らずんば何故に主は此役事をゆるし給ひしや。また何故に自からも門徒の足を洗ひて此事の實行者とあらはれ給ひしや。然のみならず、主が役事を禁せんとする意のなかりしことは門徒等にも互に同じく行爲すべきを命ずるにて知らるゝなり。しかれども最初食卓の事をつとめたる使徒等もみづから祈禱と傳道とを以て更に高上なる行となしたること亦見るべし、けだしいへり『我等神の言を舍きて食卓の事に務むるは宜しからず。故に兄弟よ爾等の中より善き證を得、聖神と智慧とに滿てられし者七人を擇べ、我等之を立てゝ此の事を司らしめ、我等は專ら祈禱と傳敎とを務めん』

(行實六の二―四)見るべし彼も此も二の善根より發する萌芽なるを知りたれど後者よりも前者を特に重んじたるを。

第四　說教

忍耐と細心

第一章

神の言に從はんと欲して善果を結ぶ者には、左の徵候を伴ふ、即嘆息なり、憂愁なり、俯視なり、默なり、俯首なり、祈禱なり、穩靜なり、一處に在留するなり、悲痛なり、敬虔の爲に苦心するなり、而して其行事は似醒なり、禁食なり、節制なり、溫柔なり、大量なり、不斷の祈禱なり、神の書を講習するなり、信仰なり、謙遜なり、兄弟の愛なり、從順なり、勞苦なり、艱難なり、愛情なり、慈悲なり、正直なり、及び完全なる光なり、即主なり。しかれども生命の果を結ばざる者の徵候は次の如し、閉塞なり、高慢なり、謬見なり、不謹愼なり、不平なり、愚昧なり、而して其行事は貪食なり、忿怒なり、憤激なり、好んで人を議するなり、高慢なり、時ならざる多言なり、不信なり、不定なり、遺忘なり、擾亂なり、

貪利なり、貪銀なり、嫉妬なり、奸計なり、侮慢なり、空談なり、時ならざる嗤笑なり、自恣なり、及び全くの闇黑なり、即「サタナ」なり。

第二章

神の照覽によりて惡者が嗣ぐ所の地獄に直に遣はされず、人を誘ひ且試みんが爲に殘さるゝは、これ彼の爲に欲せざるも、諸聖者をして、忍耐により、更に義なる者とならしめんが爲にして、彼等の爲には大なる光榮の原由者となり、彼自己の爲には惡に固執すると諸聖者に對する陰謀とを以ていよ〳〵義なる罰を備へんが爲なり、神の使徒のいふごとし、曰く『罪の極めて罪なる者とならんが爲なり』〔ロマ七の十三〕。

第三章

敵はアダムを誘惑して彼の主人となり、彼より權をうばひて自から此世の君と稱せり。しかれども最初に主は人を立てゝ此世の君となし有形物の主人となしたり。されば火も人に勝たず、水も溺らさず、猛獸も人を害せず、有毒なる動物も其勢力を人に加ふるわたはざりき。さりながら誘惑に一歩を讓りし後人は其主權を以て誘惑者に與へたり。ゆゑに巫者及び妖術者は反對なる力の働により、神の寛容に乘じて妖人となり、有毒なる動物に權を有して、火と水とを往來するを能くせしこと、モイセイに敵したるイアンニイ及びイアムブリイの如く、〔ティモフェイ後三の八〕又長坐たる使徒ペトルと爭ひしシモンの如くなりき。

第四章

思ふに敵はモイセイの面に輝ける光榮がアダムの最初の光榮に似たるを見て、これにより己の國の敗滅のことを推知し、少なからず驚かされしならん。されば『死はアダムよりモイセイに至るまでアダムの如き罪を犯さゞりし者にも王たり』〔ロマ五の十四〕といふ使徒の言をもこゝに關係して言ふは何も妨げざるなり。けだし我意ふに表揚せられたるモイセイの面は神の手を以て造られたる第一の人の像と肖とをおのれに留めしならん。されば死、即死の原因者たる魔鬼は當時此を見て最早己の國の滅亡を察したりし如く、此滅亡を實に主よりうけたりき。ゆゑに眞實なる「ハリステアニン」は今も猶此光榮を衣るべくして、神的光榮が適切に且全く疑な

く其靈魂に輝き始まるときは、死又は恥づべき情慾は彼等に對して最早力を有せずして、彼等の內部に於て活動せざるものとならん。

第五章

敵はアダムを誘惑するに婦を以てしたること、或る同じきものを以てしたる如くして、其衣たる所の光榮を彼よりうばへり。かくて人は裸體なる者とあらはれて、これより先に見ざりし己の醜狀を認めたり、何となれば人の意思は天の美麗を以て樂みたりしによる、けだし犯罪の後人の意念は地に屬するものとなり、地下に御飼するものとなりて、純善なる才智は人に於て肉に屬する邪惡なるものと混じたりき。しかれども樂園が閉されて、ヘルウィムに炎劍を以て人のこれに入るを禁ずるを命ぜられたることは、これ實に錄する所の如く顯然にこれありしを信ずると共に、各人の靈魂には此事の隱然に行はるゝを見るべし。けだし心は暗黑なる覆を以て周圍を包まる(暗黑とは世の神の火をいふ)されば心は才智に神の前に立つをゆるさいる如く、靈魂にも自己の意志により或は祈禱し、或は信じ、或は主を愛するをゆるさいるなり。此のすべてに於て經驗は夫の不斷祈禱を務むる時にも、又格鬪する所の敵に向つて猛進する時にも、實に己を主に從はしめたる者の爲に師とならんとす。

第六章

此世の君は卽教鞭にして、精神の幼稚なる者に傷を負はしむる笞とも云ふべし、彼は先にもいひし如く、此憂愁と試誘とを以て、大なる光榮といよ〳〵大なる尊敬とをそなへん、何となればこれにより人々は最完全なる者となるべくして、己の爲に愈大なる最苦しき教訓を備ふればなり。けだし總て彼によりて或る最大なる攝理は建設せらるべくして、或處に言ひし如く、惡者は己が不善なる意旨を以て善なるものに助くるなり、何となれば善にして善なる意旨を有する靈魂の爲には愛ふべき如くなるものも轉じて終に善なるものとなればなり。使徒が『神を愛する者には凡の事助けて善に進ましむ』(ロマ八の廿八)といひし言も亦此義を有するなり。

第七章

此の教鞭をゆるさるゝは、たとへば火爐の中に燒かるゝ器の如く、試錬に堪ふる者

は、これによりいよ〳〵堅固なる者となれども、堪へざる者は火の烈しく燒くを忍耐し得ざるにより、其弱質を證せられん爲なり。しかれども主宰の僕たり又造物たる魔鬼は其意の願ふだけ誘ふにあらず、又自から欲する量にしたがひ患難をかうむらしむるにあらずして、主宰の旨の寛容してこれをゆるすだけに止まるなり。神はすべての人の狀態と、各人に幾ばくの力あるを確に知り、其量にしたがひ放任して試誘にかゝらしむるは、使徒もこれに注意する如し、けだしいへり、「神は信なり爾等が誘はるゝこと爾等の能する所に過ぐるをゆるさず、乃試誘と共に逃るべき法を備へん爾等の堪ふるを得んためなり」〔コリンフ前十の十三〕。

第八章

主の言ふ如く尋ねて門を叩き、終に至る迄願ふ者は求むる所のものをうけん、たゞ彼は勇氣を有して、思を以ても口を以ても不斷に切願すべく、世事のためにつながれず、有害なる情慾を樂しまずして、身體の勤めに弱らず止まるべし。けだし「凡そ祈禱の時信じて求むる所は悉くこれを得ん」〔マトフェイ廿一の廿二〕といひし者は誠らざるなり。しかれども誰か誠命せられし所のものをすべて行へども期する所の恩寵をうけずんば、此世に於て何の益もあらざるべしと、かくの如く稱說する者は、事を惡く了解して、言ふ所は神の書と合はざるなり、何となれば神に不義なければなり、もし我等は當然なる事を成さばゝ、神よりする所のものを神は忽にし給はざるなり。たゞ汝の靈魂が此の不幸なる身體より脫する時に當りて、奮鬪する者、敏速なるもの、許約を待つ者、堅固なる者、篤く信ずる者、謹慎して尋ぬる者と認められんことを慮るべし、ゆゑに汝に告ぐ、確信すべし、喜んで逝くべし、勇氣を有すべし、さらば天國に堪ふる者とあらはるべしされば「我れ弱きに於て信と熱誠とにより言ふ、かくの如き者は最早神と親與せん。」凡そ慾を懷きて婚を見る者は心の中已に之と淫せしなり」〔マトフェイ五の廿八〕といふ、然らば彼はたとへ身をけがさずといへども、最早姦淫に罪せられん、かくの如く心にて惡者に遠ざかり、願ひ且尋ぬるを以て即懇切に止まると愛神の情とを以て主に附く者は、最早神と親與を爲すべくして、此の時より大なる賜を神よりうけん、即善なる勉勵と德行の生活を以て懇切に祈禱に止まるを得ん。それ一盃の冷水を與ふるさへ賞なくして存せずんば、まして神に忠順にして日夜願ふ所の者には、約する所のものを與へ給はざらんや。

第九章

『余は兄弟に對して怒を懷かざる、或は他の惡者の爲に時として不意に陷れらるゝを自覺せざらん日はあらず、これ何ぞや』とかく言ひて疑ひ惑ふ者には、左の如く告ぐべし、人に於てすべての苦行とすべての勉勵は惡者と惡なる意念とに抵抗せん爲なり。さりながら情慾の暗と肉體の念慮とにかくるゝ死は、陰に陽に其の或る結果をあらはさゞる能はず、即邪惡をあらはさゞる能はざるなり。たとへば身にうけたる疵は、全く愈されざる間は、これが爲にすべて注意し、これを療するが爲に必要なるものを少しも辭せざる時といへども、幾分か膿におはれざるあたはずして、不注意により放棄せられたる疵は時として全身に腐爛敗壞を生せん、心の情慾をも此の如く想ふべし。それ大なる勉勵の際にも情慾は內部の火を以て腐爛するを續けん、さりながら續て注意して懈らざるときは、パリストスの恩寵と助とにより完全なる愈をうくるなり、けだしアダムの犯罪により人の潔き天性に悖りて全人間に輸入したる情慾の或る秘密なる汚穢と、或る多大なる暗のあるありて、こは身體をも靈魂をも共に暗ましし且汚すなり。さりながら鐵は燒くと打鍛ふるとによりてきよめられ、或は銅或は鐵に混じたる金は一の火にて分析せらるゝ如く、救世主の至淨なる苦を以て燒かれ、善なる神を以て打碎かるゝ靈魂もすべての情慾とすべての罪より潔めらるゝなり。

第十章

一の油に滿たされ、一の火を點せられたる或る多くの燈は、火の光を一樣に發せざること屢なり、かくの如く恩賜も善なる行の差異により善なる神の種々なる照燿を有するなり。或は市に同一の餅と同一の水とを用ふる多くの住民あらんに、一は肥者にして一は嬰兒、一は童子にして一は老人、其間に大なる不同差異あらん、或は同一の田に蒔かれたる麥は自から種々の穗をあらはせども、其後一の物置にあつめて、一の倉に持込まるゝなり、かくの如く死者の復活に於ても、種々なる光榮を以て表揚せらるべくして功勞の價値により、尙此世に於て彼等に居りたる神の神をうくるにより、復活は種々に異なるを想ふべし『星と星と其榮を異にす』(コリンフ前十五の四十一)といふは亦此意を示す。

第十一章

それ此一事は人の聖神により更生して、人に居る所の罪より覺醒するがために注意の歸する所となるべし、何となれば聖神によりて生るゝ此更生も或る程度により成全の狀態を有するは、形狀と肢體とに於てして、能力或は智力或は勇氣に於てするに非ればなり。けだし成全の人となり成長の齡に達したる者は幼期に屬する事を息むるは常なり。『預言は息み方言は絶ゆ』〔コリンフ前十三の八〕と使徒のいひしも亦これを意味す。それ成人となりし者は童子に適當なる食物も言語もうくるに堪へずして、最早これを見て不快に思ふべし、何となれば生活の他の狀態に入りたればなり、かくの如く成長して福音の德行の成全に達せし者も、幼期に屬するものを成全に進めん、神の使徒はいへり『人と成りて後は童子の事を息めたり』〔コリンフ前十三の十一〕。

第十二章

神によりて生れし者は、我等がいひし如く、或る意味に於ては成全なり、是れ猶或る嬰兒をも成全なる者も名づくる如し、けだし惡くの肢體を完全に已れに存すればなり。且神が神と恩寵とをあたふるは、人の罪に陷らんが爲にあらず、かへつて人々はみづから恩寵にみちびかれず、隨て惡の爲に捉へられて、其惡行の原由者となるなり。人はもし懈怠し、或は侮慢し、或は自誇の爲にみちびかるゝならば自己天然の意念に依ても陷るべし、けだしパウロの言ふ所をきくべし、曰く『我が高ぶらざらん爲に一の刺は我が肉體にあたへられたり、即サタナの使なり』〔コリンフ後十二の七〕。見るべし如此の階段に達せし者も警戒に必要あるを。しかのみならず、もし人は自からサタナに手綱をあたへずんば、サタナは强て人を統御せざるべし。故に此行爲は人に於て神的生活を伴はざる、即善行を伴はざる神的生出ハリストスの部分にも反對者の部分にも數へ入れられず、たゞ終に至るまで恩寵に忠なる者となりて存する者はハリストスの部分に屬する者となるべし、されどもかくの如くならざる者は、たとへ神を以て生れたりとも、即聖神に與かる者となりたりとも、サタナの旨に從ふの權を已れに有するなり。しかれどももし主は自から已の權を强て執り、サタナも已の權を强て執るならば、人は自から已の爲に或は「ゲエンナ」に陷り、或は天國を受くるの原由者とならざらん。

第十三章

德行を愛する者は優勝なる思慮を有せんを心惡くると肝要なり、善と惡とを分つに誑されずして、惡者の多種多樣なる奸計を察せんためなり、けだし誠らしき表現を以て多くの者を誘惑し、少なくも全く安然有益なりと人に會得せしむるは惡者の慣手段なればなり。故に其誘惑と無形なる力の暗示とには、たとひ天使等の自から爲す所といへども、輕騷に且急遽に從ふなかれ、徐々としてこれを最詳細に試むべく、美なるものをば取りて己れに有し、惡なるものをば斥くべし。けだし恩寵の働は公明ならざるなし、然るに罪は善の假面を己れに被むるといへども、此働を生ずるあたはず。使徒の言ふ如く、サタナは人を誘惑する爲に光明の天使にさへ變化するを能くすれば、(コリンフ後十一の十四)彼は光明なる現象をもあらはさんしかれども、すでにいひし如く、善なる働を生ずるあたはざるなり、これ彼の確なる徵候と爲すべし。彼は神又は近者に對する愛も、溫柔も、謙遜も、喜悅も、平安も、思の齊整も、世に對するの嫌も、靈性の慰安も、天上の果を願ふことも、情慾及び奢侈を抑ふることも、生ずるあたはずして、此のすべては明に恩寵の生ずる所なり。けだしいへり、神の果は愛なり、喜悅なり、平安なり云々(カラティヤ五の廿二)、サタナは驕傲と高慢とを迅速に勸め入るゝに妙を得、且これを能くす。ゆゑに汝の靈魂に輝き始めたる神的の光は神よりするか、或はサタナよりするかを眞實に辨別すべし。さりながらもし靈魂は健全なる思慮を有するならば、神的感覺により此區別は直ちに明白となるべし。酢と酒とは形に於て一樣なれども、喉は味覺を以て彼を此との性質を分つ如く、靈魂も神的觸覺と作用とによりて、神の賜と他の空想とを區別するを得るなり。

第十四章

靈魂の爲に注目し且預覺することは大に肝要なり、反對者の力が甚だ暫時に靈魂を捕へざらんためなり。動物はその一肢體が網にかゝるならば、必ず全く自由を失ひて、捕者の手にわたされん、かくの如く靈魂もこれと同樣なる禍を常に敵よりうくるなり。されば預言者はこれを明にあらはしていへり、曰く『彼等は我が足のために網をまうけたり、我が靈は弱れり』(聖詠五十六の七)。

第十五章

狹き路によりて强者の家に入り、其器をうばはんと欲する者は、身體の强壯を以て

足れりとせず、左に言ふ所を記憶して、善なる神にて堅められんこと肝要なり、曰く『血肉は神の國を嗣がず』〔コリンツ前十五の五十〕しかれどもいかにせば神にて堅めらるべきか、使徒のいふところに注意すべし、曰く『神の智慧は人々愚と爲す』〔コリンツ前一の廿三〕また預言者もいへり、我人の子を見しに『其の貌はみにくく、すべての人の子より劣れり』〔イサヤ五十三の三〕故に神の子とならんと欲する者は、人見て愚者となし、不正者と爲す時は、まづ第一に主の如く謙遜し忍耐し、其面を唾汚より避けず、此世の榮譽美麗又はこれに類するものを捜さず、首を枕する所を有せず、辱めと卑めとを忍び、衆人に輕侮蹂躙せられ、陽に陰に攻擊をうくるも智を以てこれに抵抗せんこと肝要なり。然る時は『汝等の中に居り且行かん』〔コリンツ後六の十六〕と自からの給ひし神の子は、自から彼の心に現れん、されば彼は強者を縛りて、其器をうばひ、毒蛇と蜥蜴と蛇と蠍とを蹂躙するために力と強さとをうけん。

第十六章

死を挫折する大なる苦行は我等が前にありげだし言ふあり『神の國は汝等の中にあり』〔ルカ十七の廿一〕しかれども自から我等とたゝかひてわれらを虜にする者も、或る狀態を以て我等の中に居ること現然たり、ゆゑに靈魂を捕ふる者を死に定めざらん間はいかにしても靈魂を弱はらすべからず。しかるときは凡の病と哀と嘆息は逃れ去らん、何となれば『乾ける地に水は衝突し』荒野も變じて多水となればなり〔イサヤ三十五の六〕。

第十七章

煩悶の爲に易すく捕へらるゝ靈魂は不信にも勝たるゝこと明なり、ゆゑに救の言をうけすして、日々に遷延し、內部の戰をおのれに認めず、自負のために圍む所となりて、夢を見てさへ己を惑はすこと稀なりとせず、しかれども自負は靈魂を昏まし、如何しても己が弱きを認識せしめざるなり。

第十八章

新に生れたる嬰兒は成全なる人の像をおのれに存す。かくの如く靈魂もこれを造れる神の或る像なり。兒は漸々に成長して漸々に父を認識すべく、而して年齢に達するときは、父と子と、子と父との間の一致が定まりて、父の財寶は子に打明かさる

ゝなり、かくの如く靈魂も悖逆に至る迄は進歩して成全の人に達すべかりき。しかれども悖逆によりて靈魂は遺忘の海と迷謬の深きに沒して、地獄の門に居れり、されば大なる距離の隔たる如く、神より離れ遠ざかりたれば、神に近づきてこれを造りし者を全く識るあたはざりき。さらながら神は先づ第一に預言者によりて靈魂をおのれに歸せしめ、これを呼び、これを誘引して、神を認識せしめたり、終に彼は自から來りて、遺忘を除き、迷謬を去り、其後地獄の門を破りて、迷ひし靈魂に入り、其前に己を置て標準となし給ひしは、これにより靈魂をして年齢の量に神の完全に達するを得しめんためなり。ゆゑに神の言は攝理によりて惡者の爲に試みられ、其後讒毀侮蔑、凌辱をうけ、狂妄なる人々の手にて頰を打たれ、終に十字架の死をうけ、これを以て我等が既にいひし如く、我等を讒毀侮蔑し、或は死を以てさへ脅かす者に對していかなる心情を有すべきかを示し給ふ。はこれ彼の聲なる者等の爲に人は自から聲なき者となり、己の口を啓かざる者とならん爲なり、又惡謀の働きと巧なるを見ては、釘を以て十字架に貫かれし者の如く、大なる聲を以て彼を死より救ふを能くする者に呼んで、〔エゼキエル五の七〕我が隱なる咎より我を淨め給へ」といはん爲なり〔聖詠廿八の十三〕又「我を制せしむるなかれ、然せば我玷なからん」〔同十四〕といはん爲なり。其時には我等玷なき者となりて「萬有を彼に服せしめたる者」〔コリンプ前十五の廿七〕を有すべく、ハリストスと共に王となりて、安息せん。けだし悖逆の結果により物質的なる不潔の意念の爲に呑まれたる靈魂は無智なる者の如くなり、故に靈魂は無始なる智と融合するを得んがために、如此の物體より脫し、惡謀の巧なるを悟りて、これより自由にならんには少なからざる勞を要するなり。

第十九章

人よ、もし汝は自から思變へて、先きに汝が有したれど悖逆により失ひし榮譽を己れに挽回せんと欲せば、先に神の誡命を忽にして敵の命令と勸言とを勉めて聞きし如く、今はその服從する所の者を棄てゝ主に歸すべし。然れども知るべし、汝は大なる勞と共に、錄していへる如く、汝の面に汗するにより、己の富を求め得べきを、何となれば勞なくして幸福を得るは汝のために益なければなり。けだし勞なくして受れば、汝は受けたるものをうしなひて、其嗣業を敵にわたすべければなり。ゆゑに我等各人はいかなるものを何時うしなひしを認識して、預言者と共に大に哀んでいふべし、「われらの產業は外國人に歸し、我等の家屋は他國人の有となれり」〔エ

レミヤ哀歌五の二)何となれば我等は誡命に背き、己の欲望に輸け、不潔なる此世の意念を以て樂しめばなり、ゆゑに我等が靈魂は當時神より大に遠く離れて、われらは父を己れに有せざる孤子の如くになれり。これにより靈魂の爲に慮る者は力あるべし。努めて惡なる意念と『凡て神の知識に逆ふ高慢』とをしりぞけんを要す(コリンツ後十の五)されば如此の盡力を加へ、神の殿を汚さずして守る時は、許約せし者は我等の中に居り且行かん。其時靈魂は己の闘業をうけて、神の殿となるを得んけだし主は自から其軍を以て惡者を逐ふて、最早我等に王とならんとすればなり。

第二十章

造物主が直接明白にカインにつげて『汝は地に吟行ふ流離子となるべし』(創世記四の十二)といひし言は、神秘なる意義に於ては、悉くの罪人の或る前兆と狀態となりきけだしアダムの族も誡命にそむきて有罪者となり、かくの如くして翻覆不定なる意念のために動搖せられて、畏懼援亂にみちみたされ、これと同時に敵は自から神より更生せられざるすべての靈魂を欲望と種々なる快樂とを以て煽動して、これを振撼すること篩中にある麥の如くせんとす。ゆゑに主は自から惡者の望に從ふ者等につげて、彼等がカインの奸計の有樣を自から己れに存するを示し、彼等を責めていへること左の如し、曰く『汝等はなんぢらの父の慾を行はんと欲す、彼は始より殺人者にして眞實に立たざりき』(イオアン八の四十四)。

第二十一章

此世の王の顏を見るは人々の爲に幾何希望する所にして、いくばく其心を引くを思ふべし、されば凡て王の居る所の城市に來らん者は、少なくも貴重にして美麗なる王の衣服を見んを希ふ、たゞ神的に生活する者は此事に注意せずして、これを高く價値せざるべし、何となれば他の美の感に刺されて、他の光榮を希望すればなり。それ肉に屬する人々のために死すべき王の顏を見るをかくの如く希望するならば、矧んや善なる神の或る滴の注ぎて、神聖なる愛を以て其心を刺されたる者に於ては、不死なる王の顏を見るを特に大に愛すべきにあらずや。ゆゑに彼等がすべて此世に於るの愛情より脫するは、此の神聖なる愛を不斷心に有して、これよりも重んずべき他のいかなるものをも有せざらんためなり。さりながら善なる始にかくの如きの終を適用し、終に至るまで躓づかずして止まるものは甚だ少し。多くの者

は悔悟の情を發し、多くの者は天の恩寵をうけて、神聖なる愛の爲に刺さるれども、遇ふところの勞と惡者が種々樣々なる奸計を以て構造する試驗とを忍耐せず、精神の懦弱と無力との故により、或は地に屬するものに懇々たるにより、世に止まりて、世の深きに沒するなり。しかれども終りに至るまで危險なく進行を遂げんと志す者は、此の天上の愛に他の戀情と他の愛の混ずるを容忍せざるべし。

第二十二章

神が許約せられたる幸福の大にして測るべからざる程は望と信とにより行はるゝ多くの勞と苦行とを要するなり。こは左の言に依りて明かに見ゆ、曰く『人もし我に從はんと欲せば、己を捨て其の十字架を負ひて我に從へ』(マトフェイ十六の廿四)又いふ『人もし我に來りて其父、母、妻子、兄弟、姉妹、又己の生命を惜まずば、我が門徒となるを得ず』と(ルカ十四の廿六)。しかれども人は大概天國をうけ、永生を嗣ぎ、ハリストスと共に水遠に王たらんを願へども(こは尤高尚にして凡の觀念より一層上なり)、自己の望のまゝに生活して、これに從ふ程愚なり、確言すればかくの如く虛妄にして明に有害なる意思を播く所の者に從ふ程愚なり。

凡そ世の欲望と、自己と世のすべての歡散と快樂と世事の憧憬を全く嫌ふ者は終りに至るまで躓づかず進行を成し遂げん。けだしこれ卽己を捨つるなり。ゆゑに勞苦を寶に己れに任はずして、己を捨つれども、彼の神聖なる愛と共に世に何を以てか樂まんを願ひ、其意志の向ふ所を全く神に捧げさるにより、おの〳〵自己の意志の爲に天國より投出さるゝなり。我等が研究する事は一の例を以て說明せらるべし。凡そ人は其遂げんと欲する所の事の如何なるにせよ、何とも適應せざるを善く辨別すべくして、こは彼より隱れざるなり。けだし先づ彼の心中內部に疑は顯はれん。彼の良心に於て秤量と秤量の指針は、或は神を愛し、或は世を愛するの顯然たる重量を最初內部にあらはして、其後外部の事に關しても同く露出するなり、何となればすでに述べたる如く凡の人はこれを善く辨別するによる。例へば己の爲に反駁していはん『我れ言ふべきか、否、言はざらん、我を責むる所の此詰責に答ふべきか、否、默するに若かじ』と。神の誡命を操持すれど、自己の名譽をも側に置かず、己を全く捨つるを決意する者あらざるなり。もし世に對する愛の偏向はたとへ多からずと

いへども、心中に於て過重するあらば、直に惡言は口頭にも出で來らん。然して其後、智は內部に張る弓の如く、舌を以て近者を射て、惡は手に達し、或時は傷を負はせ、且は殺すにも至らん。此の暫時の間なる心の發動が何を以て始まりて、如何にも恐ろしきに至るは此により察するを得ん。ゆゑに知るべし各自の罪と企とにつきても、これと同じき場合のあるを。惡習は此世の慾望と肉體の快樂とを以て靈魂の意志に媚びてこれを誘はん。されば、かくの如くして姦淫は預備せられ、かくの如くして偸盜、かくの如くして貪利、かくの如くして虛誇、かくの如くして凡そいかなる惡しき所爲も預備せらるゝなり。

第二十四章

最美なる企業も虛榮の爲に成就せらるゝこと屢々これあり、神はこれを偸盜、頻闘及び他の大なる諸罪と同樣に罪するなり。げだしいふあり、「神は佞者の骨を散さん」〔聖詠五十二の六〕。かくの如く敵は最善なる行事を以ても人に媚びて其意を悅ばせんを欲す、何となれば彼は欺騙者にして、奸計において種々熟練すればなり。

第二十五章

人が現世に於て最愛する所のものは、人の意思を苦しむること、恰も引て下に推し、人をして躍起するをゆるさゞるが如し。かくの如き者等には心意の平稱もあり、偏向もあり、過重もありて、これに係屬するものゝ如し。而してこは、ハリスアニン」が或は市に、或は山に、或は修道院に、或は田間に、或は曠野に居るに拘はらず、全人間の爲に試となるべし、何となれば愛する所のものゝ爲に隨意に捉へらるゝ者は其愛をいまだ全く神にさゝげたるにあらざること明なればなり。例へば或者は財產を愛し、他者は金を愛し、或者は腹を滿たし、又は肉體の大欲を悅ばすを愛せん、されど或者は暫時にして亡ぶべき榮譽の爲に該博なる智慧を愛すれども、或者は權勢を愛し、或者は人々より尊敬をうくるを愛し、或者は怒と憤激するとを愛せん、其意謂へらくこれ其友に忠なるを證するものなりと。他者は無用なる談話を愛し、或者は たゞ 醉散し、又は空談を聞き、又は師となるを愛せん、これ人間の名譽の爲なり、或者は安樂と怠慢に耽り、或者は衣服の裝飾を喜ぶ、此は睡眠を喜び、彼は頓智をたのむ、或者は世に小なる或は大なる事のために繫がれて、それが爲に占領せらるゝ、其者を養休せしめざるなり。げだし人は如何なる情慾とも勇氣にして戰はず、凡ての方法を以て抵抗せずんば、其情慾は人を引て此を執ふること、或る械繫を以てす

る如くならん、されば屈服せられたる彼は其意思を神にあげて、彼獨りに事ふるあたはざるなり。さりながら己の志望を實に主に向はしめたる靈魂は、すべての願を主に向け、己を捨てゝ、自己の智の望む所に從はざるなり。

第二十六章

人が己の意志によりて亡ぶることは例を以てをしふるを得べし。けだし世には或物を愛するにより、火に投じ、海に溺れ、己を捕虜となすあり、人あり家或は里が偶然に燒けたりと想ふべし。これにより己を救はんと欲する者は失火と知るや、たゞ己の生命の外何も慮らず、裸體にして奔りぬ、しかれども他者は一家の或什物をも火より救はんとの意を生せしにより、これを取らんがために止まりしが、そのこれを取らんと欲したる時、火は最早全家を圍み、彼自身を捉へて、これを燒けり。見るべし彼は自己の意志にしたがひ、此世の物體に懇々して、現に自己よりも多く愛したるにより、火に亡びたるを。また人あり難船に遭ふあらんに、己を救はんと欲する者は、衣を脱し、裸體にして水に投せん、かくの如くして其生命を救ふことは彼の爲に能くし得らるゝなり、しかれども自身と共に或る衣服をも救はんを願ひし者は、水に溺れ、小なる利欲（いかなる災難ぞ）のために自から己を亡ぼせり。また敵の來襲せしことの風聞が傳はれりと想ふべし、一者はこれを聞くや、何も慮らず、直ちに足力にまかせて奔りぬ、しかれども他者は風說に信を置かず、自身と共に或る物件をも携へ去らんと欲し、其後躊躇して侵入したる敵の爲に執へられたり。見るべし人は自己の意志にしたがひ、油斷により、及び世に屬する或物に懇々たるにより、身體と靈魂と共に滅亡にかゝるを。

第二十七章

神に對する完全なる愛を全く求め得て、浮世の快樂と欲願とをすべて無視し、惡者の誘惑を大量に忍耐するは少數の人なり、さりながらこれがために落膽して怠慢と共に善なる希望を棄つべからざるなり。多くの船艦は難破の危きに遇ふありといへども、海を渡りて港に入るものも疑なくこれあり。ゆゑに信と忍耐と謹慎と苦行とは我等に多く要用なり、然のみならず大なる善智を以て、又大なる思慮を以て善に飢渴することも必要にして、熱心と願に切なることも亦同く要用なり、けだし我等が先にいひし如く、多くの人々は勞と汗となくして、天國をうけんと欲す。彼等

は諸聖人を讃美し、其の光榮と賜とを願へども、諸聖人と同樣なる艱難勞苦及び辛酸を共に與にするを欲せず。然のみならず、姦淫者も稅吏も如何なる人々もみなこれを希ふ。しかれども誘と試とのこれに先だつは、主宰を實に愛する者の顯然としてあらはれん爲なり。然らば彼等は當然に天國をうけん。

第二十八章

許約と榮譽と天の幸福をうくるとは艱難辛苦、忍耐、及び信仰の中に隱るゝを悟るべし。それ地に投せられたる麥粒或は絢接せらるゝ樹は必ず先づ腐敗と汚辱とをうけざるべからずして、其後彼は己の美麗なる衣服の果をしば〳〵受けん。しかれども、もし彼等は此の腐敗と此の汚辱ともいふべきものを經由せずんば、此の最後の美麗と此の美はしき形狀とを衣ざらん。使徒も此意味をいへり、けだし曰く『我等多くの艱難を歷て神の國に入るべし』(行實十四の二十二)また主もいひ給へり、曰く、『忍耐を以て汝等の靈を救へ』(ルカ二十一の十九)又いふ『世にありて艱難をうけん』(イオオン十六の三十三)。

第二十九章

我等各人は信仰と勉勵とにより聖神に與かる者となるを賜はりし量にしたがひ、身體も彼の日に於て表揚せられん。けだし今日內部に我が靈魂の中にあつめたる實は、外部に即其身體にあらはるゝなり。これが例證を我等は樹に於て見ん。冬過ぎて、太陽輝々として大なる勢力にて照し、適當に風吹き渡る時は、樹は其外部に萠芽を發して、枝葉花實を衣ること衣服の如くならん。これと同じく草花も此時に地の懷より生じて、地はこれに掩はれ、これを衣ること美麗なる覆を衣る如くならん。身體もかくの如く、今日其中に居る所の得も言はれざる光と神の力とを以て榮せられん。此等のものは其時に身體のために衣服となり、飲となり、食となり、樂となり、喜びとなり、平安となり、及びすべてとならん。即永遠の生活とならん。

第五　說教

智を高尙にする事

第一章

福たるモイセイは其面に照り輝きて、一人も見るあたはざりし神の光榮を以て、我

等に傚をあらはせり、即義人の復活に於て聖者の身體が今日尚聖者の信誠なる靈魂の内部の人に有するを賜はる所の光榮を以て表揚せられんとするものをあらはせりゞけだしいふあり『我等は露れたる面(即内部の人)を以て主の光榮を觀て、其像に變せられ光榮より光榮に進む』(コリンフ後三の十八)またモイセイの事をしるしていへり、彼は四十晝夜食をも飲をも思ひ出さゞりしと、しかれどもこれ人間の天性に屬するにあらずして、これたゞモイセイが神的食飲をうけたるに外ならず即聖なる靈魂が今日尚神よりうくゝる所の其物をうけたるなり。

第二章

諸聖人の靈魂が尚此世に於て己を富ます所の光榮は、復活に於ては裸なる身體をおほひ、且これに着せて、彼等を天上に取去らん、されば其時に彼等は相共に身體を以ても靈魂を以ても神の國に於て不斷に安息せん。神はアダムを造りしも鳥の如き有形なる羽翼は彼にあたへ給はざりき、何となれば復活の後、彼に神的羽翼をたまふて、これにより彼は騰上して、疑なく神が取去る所に取去られんとするによる。しかれども此の智なる羽翼は今日も尚諸聖人の靈魂にあたへられて、此羽翼は諸聖人を天の智慧に引上せん、けだし、ハリステアニンには他の世界と他の衣服と他の食卓と他の樂あればなり。けだしハリストスは神の書にをしふる如く世の始より死せし者を復活せしめむために天より來るべくして、ハリストスが復活せし者を二部に別つ等の事も我等の知る所なり。

第三章

「ハリステアニン」の生活に出來る丈愈完全に進歩せんとの慮を有するものは才智の事、理性の事、及び靈魂の主宰力の事を特に全く勉勵して慮らんことを要す、これ善と惡とを精確に辨へ、天性に逆ふて輸入したる情慾を潔き天性より區別し、理性を目の如く益用して躓かず生活し、惡の引誘に同意せざるを得んためなり。けだし靈魂には願あり、即身の肢體を五感の爲に壞られずして潔く守り、己を世の引誘より防ぎ、心を守らんとの願あり、これ其意念を世の廣きに散らさず、これを八方より集中して、此世の慮りと快樂とを遏めんためなり。ゆゑに主は人のかくの如く生活し、如此の嚴重を以て己をみちびき、恐懼戰慄して主に事へんと欲するを見る時は、彼に其恩寵の助をあたへ給はん。さりながら恋に己を世に委し、其快樂を追ふて行

く者には、神は何をか爲し給はんや。

第四章

己が天性の爲に非常の油なる神の恩寵を心の器に取りて覺醒したる彼の五人の童女は、新郎と共に婚姻の室に入るを得たりき。しかれども他の愚にして惡なる童女等は自己の天性に滿足し、覺醒せずして、其心に喜の油を同く取らんことを勉めず、却て不注意と怠慢と己の義に自負するとにより、睡眠に耽りし如くなりき、ゆゑに天國の室も彼等のために閉されたりけだし彼等は或る此世の械繫と此世の情誼とに引留められしこと明なり、ゆゑに其の完全なる愛と服從とを天の新郎にあらはさゞりき。しかれども天性の爲に非常なる此の神の聖物を尋ね、其全愛を以て主に附く靈魂は、すべて他より離れ遠ざかりて、彼處に祈禱し、彼處に審思し、彼處に默想せん。けだし靈魂の五感即明悟と認識と思慮と忍耐と憐憫とは上より神の恩寵と聖賜とをうくるならば、實に智なる童女とならん。しかれどももし己の天性と共に留まるならば、實に愚者となりて、世の子と認められん。

第五章

惡習は我等が天性の爲には奇怪なるものなり、即彼は初人の犯罪の結果により我等の中にひそみ、我等これを受けて、漸々に彼は我等のために天性の如くなりたりき、かくの如く我等も此の我が天性の爲に非常なるものを以て(即天の神の賜を以て)惡習を我等の本性より逐ふて、己を元始の潔きに恢復せんこと肝要なり。ゆゑにもし多くの祈禱と信仰と謹慎と世に屬するものより遠ざかるとを以て此目的を達せずして、惡習の爲に汚されたる我等が天性は、彼の愛を以て聖にせられず、即主を以て聖にせられずして、其神聖なる誡命を實行して、終に至る迄躓かざるものとならずんば、天國をうくるあたはざるべし。

第六章

微妙にして深遠なる或教旨を及ぶだけ講解せんと欲す。無限にして無形體なる主は、無限なる仁慈により、己を肉體と爲す、大にして常に萬物の先にある者が或人のいひし如く、自から己を抑損し給ふは、これ其の聰明の造物たる諸聖者及び天使の靈と一致融合するを得んがためにして、彼等の爲にも主の神性の不死なる生命に與かるを得る者とならん爲なり、何となればもろ〳〵の造物は天使も靈魂も魔鬼

も自己の天性によれば即體なるにより（第四講話第九條の注參看）げだし彼等は幾微なる者といへども、其實在に於ては、特質に依るも狀態によるも其天性の幾微なるに應じて幾微なる體なり、これに反して此の身體は其實在に於て粗大なるなり。かくの如く靈魂も微妙なる體にして、此身の肢體を以て掩はれ、且これを衣る、即視る所の目を衣、又此の聽く所の耳をも手をも鼻をも衣るなり。一言にてこれをいへば靈魂はすべて身の肢體を衣て、これと融合一致したるなり、而してこれにより生涯其前にある所の行動を悉く成さんとす。かくの如く言ふあたはず、思ふあたはざるハリストスの仁慈が己を抑損し、肉身となしてハリストスを愛する篤信なる靈魂と融合一致し、これをうけて、パウエルの言ふ如くこれと一神となる（コリンフ前六の十七）言はゞ靈魂は靈魂と實在は實在と一神となるは、これかくの如き靈魂が彼の神性を以て生活し、不死なる生命に達し、不朽なる快樂と得もいはれざる光榮を以て樂ひを得んが爲なり。

第七章

かくの如き靈魂の爲に、主は自から欲する時は、全く不用なるものと外より輸入したるものとを焚盡す火となるべし、預言者もいふ如し、曰く『神は燒盡す火なり』と（復傳律令四の廿四）。しかれどもある時には得もいはれざる安息とならんも、或時には又喜びと平安とを以て靈魂を温め、且圍まん、たゞ靈魂は彼を愛して善なる品性を以て彼の意を悅ばすを盡力せんこと肝要なり。しからば靈魂は實驗によりて、彼の『目未だ見ず耳未だ聞かず人の心に未だ入らざる』（コリンフ前二の九）得もいはれざる善福を感覺の爲に愈切に見んとす、これ主の神が主に適當なるものと認めたる靈魂の爲に或は安息となり、或は喜び樂みとなり、又生命となる所のものなり、何となれば神的糧食とならん爲にも、衣服及び言盡されざる美麗とならん爲にも、己を肉身となし給へるは、かくの如くして神的歡樂を靈魂に滿たしめん爲なるによる。けだしいへり『我は生ける餅なり』（イオアン六の五十一）。又いへり『我が與へんとする水は其中に於て永遠の生命に湧く水の泉とならん』（イオアン四の十四）。

第八章

神は各祭司及び聖人に其意の欲する如く、又其の見るを賜はりし者に有益なるにしたがひ現はれ給へり、例へばアウラアムには別にあらはれ、イサアクには別にあ

らはれ、イアコフノ、イダニイルモイセイダヤイド及び各預言者には別にあらはれて、既にいひし如く、己を抑損して肉身となし、變容して、其の彼等に對して有せる大にして思ふ能はざる愛により、此の神を愛する者等に己を見せしめたまへり、然れどもその自から己にある所のまゝを以てせざるは、神は容るゝ能はざるものなるにより、たゞ彼等が容るべきの量と能力とに適合するなり。

第九章

上より能力と彼の神聖なる火とを己に入るゝを賜はりし靈魂は、天の善なる神の融解したる愛を其肢體に有して、世のもろ〳〵の愛より全く脫し、惡習の鏈鎖をまぬかれて、自由を得ん。火中に置かれたる鐵或は鉛、或は金銀は鎔解して其性の剛きを變じて柔ならしむべく、火中にある間は、火力により其天然の堅さを自から脫し、頑强ならずして從順なるものとならん、靈魂もかくの如く、神的愛の天の火をおのれにうけて、世の神に對する凡の偏愛に遠ざかり、惡習の鏈鎖をまぬかれ、すべて世に屬するものを小なるもの、尊敬に足らざるものと爲して、其天性の罪なる剛愎を除き去らん。我いふ、もし彼に極めて愛する所の兄弟あらんに、彼の爲に此愛を妨げんとするならば、かくの如きの愛に捕へられたる靈魂は、彼等をも絶たん。けだし肉體の愛は婚姻の契約を結ぶ者をして父母兄弟を離れしむべくして、彼等の中誰を愛するも、少しく愛して、すべての心情とすべての愛慕とを其妻に注がん、されば肉體の愛情が凡そ世に屬する他の愛情より脫せしむることかくの如くならば、彼の無欲なる愛に己を捧げたる者は、或る世に屬するものゝために引き留めらるゝことあるべきにや。

第十章

神は善にして人を愛する者なれば、寬忍耐久して、罪を行ふ各人より悔改を甚待望し、悔者の反歸を以て天の祝賀たらしめんとす。けだし神はいふ『天には一の悔改むる罪人の爲に喜あらん』と（ルカ十五の七）。さりながらもし誰か此の仁慈と寬忍耐久とを見、我等の既にいひし如く、神が悔改を待ちて各自の罪を罰せざるを見て、誠命と其仁慈とを輕んずるならば、哀哉、罪に罪を添ひ、一の犯罪に他の犯罪を作り、怠惰に怠惰を加へ、これを以て侮慢に至るの因由とするならば、彼は罪の量を滿たし、既に罪の爲に捕ふる所となりて、起つ能はざるべし、悔心により徒らに免るゝも惡者

に全く己を委ねたる彼は亡びん。ソドム人もかくの如くなりき、彼等は罪の量を滿たし且超過せり、されば汝たとへば悔改の閃光が彼等に殘らざらんとき、神の審判により火の獲物となりぬ。ノイの時にも此の如し。惡に赴く止むべからざる趨勢に任じ、何等の悔改をも己にあらはさずして、人々は己の爲に全地を併せて全く敗壞せしむる程なる罪の重きを集めたりき。また多く罪を行ひて神の民を辱めたる埃及人に對しても神は善にして彼等を全滅に付さず、種々の罰を以て悔改にみちびけり。しかれども僅に神に歸して、再び惡に戻り、以前の不信に陷りて、終に引出されたる神の民を窮迫したる時、神の裁判は彼等を全く殄滅せり。イズライリが多く罪を行ひて神の預言者を殺したる時もかくの如し、即神は通常の如く寛忍耐久を守り給へり。しかれどもイズライリ人が惡に大に進歩して、主宰の尊貴に耻ぢず、彼に兇殺の手を加ふるに至りし時、彼等は永久に斥け且貶せられ、預言と神品と奉神禮とを彼等よりうばふて、確信したる異邦人にあたへられたりき。

第十一章

我等はパリストスを呼び、其前に心を注ぎて、熱心に趨り附くべく、頑固にして己の救に絶望せざるべし。けだし從前の罪を記憶して絶望に至らしむるはこれ惡者の姦策なればなり。さりながら我等は想ふべし、主は來りて瞽者、癱瘓者、及び聾者の醫となり、治愈者となり、すでに腐敗にかゝりたる死者を復活せしめしならば、矧んや才智の瞽と靈魂の癱瘓と怠慢なる心の聾とを癒し給はざらんや、何となれば身體をつくりし彼は自から靈魂をも造りて、他の何者も造りしにはあらざればなり。それ敗壞して死するものにさへ、かくの如く惠を垂れて憐み給ふならば、矧んや惡習と無知の病にをかされ、其後彼に趨り、就きて彼に願ふ不死なる靈魂を彼は仁愛を以て愈し給はざらんや。けだし我が天の父は『晝夜彼に顧ぶ者を終に援けざらんや』〔ルカ十八の七〕とは是れ彼の言なり。又いふ『求めよ、然らば汝等に與へられん』〔マトフェイ七の七〕また『もし彼は友なるが故に起きて彼に與へざれども其切迫に依りて起きて其需むる如く彼に與へん』〔ルカ十一の八〕といふ、これ彼は倦まずして堅固に願ふべきを勸むるなり、何となれば罪人の爲に來り給ひしは、彼等を己れに歸せしめんが爲なればなり。たゞ我等は從前の惡しき行より離れて主に從はん、しからば主はこれを輕んせずして、我等に助けを與へ給はん。

第十二章

病と衰弱の爲にをかさるゝ者に就ていはん、もし彼の身體は最早食と飲とをうくる狀態にあらざらんときは、人をして絶望せしむべくして、これ死の徵候たるなり、ゆゑに朋友及び親戚は此時に泣き始めん、かくの如く神と天使等も天の食をもて養はるゝ狀態にあらざる靈魂を大なる悲愁と涙とに當るべきものと認めん。ゆゑにもし汝は神の寶座となりて神が汝に坐し給ふならば、また汝の靈魂は全く屬神の目となり、全く光となり、彼の神の食を以て飽かしめられ、活ける水と心を樂ましむる屬神の酒とを飲ましめらるゝならば、また汝は得もいはれざる光の衣を靈魂に着せるならば、また此のすべてのものを汝の內部の人は實驗により疑なく確知するならば、最早汝は永遠の生命を以て生きて、現時にもハリストスに於て慰安しつゝあるべし。しかれどももし汝はこれをうけず、これを領有せずんば、熱涙をそゝぐべく、如此の富を未だ有せざるを嘆息すべくして、汝の貧しきが爲に、心配も不斷の祈願も汝に必ずこれあるべしアヽもしかゝる狀態にある者に於て己が貧しきを知るの感じと雖もあらはるゝあうて、神聖なる富を以て大に飽かしめられたる

者の如く、無事閑散に日を送るあらずんば幸ならん。けだしいふあり「尋ぬる者は遇ひ、叩く者は啓かれん」（マトフェイ七の八）。

第十三章

彼の合成したる齎さへこれを傳けられし者は既に王たる光榮に入るを得る程に力を有するならば、知んや智と內部の人にこれを聖にする喜びの齎を傳けられて、善なる神の聘質をうけし者等は、完全の域に登らざらんや、即王の意に適するときは、王の機密に參與する者となり、父の所に出入するの權利を有してハリストスの國と義子たるとに昇らん。けだし彼等は肉體の重きに尙包まれて、完全なる闘業をうけずといへども、神の聘質の故に、望む所のものは彼等のために疑なうして、ハリストスと共に王となりて、神の富と充滿とに居らんことは彼等これに疑を容れざるなり、何となれば尙肉體に居るも、最早彼の能力と彼の樂みを試みたればなり。けだし降る所の恩寵が內部の人と智とを潔うするにより、悖逆により人々に被らせたるサタナの覆を全く除き、凡の汚穢と凡の不潔なる意念とを靈魂より取り去るは、其意靈魂が清きものとなり、自己本來の性をうけて、眞實なる光の榮を明なる眼

にて自由に觀るを致さんがためなり。されば かくの如き者等は尙此處に在りて彼の世に取去られ、彼處の美と奇跡とを直觀せん。身體の目は何を以てもそこなはれずして、强壯なるときは、太陽の光線を敢て見んかくの如く彼等も光照せられたる清き智を有して、何れの時にも主の近づくべからざる光輝を直觀せん。さりながら如此の階段は人々易く達し得らるゝにあらずして、反つてこれが爲に長久の勞と數ふべからざる苦行と汗とを要するなり。けだし作用する恩寵は臨在すれど、隱るゝ惡習も亦毫も退却せずして、反つて二の神、即光の神と暗の神とが同一の心に作用する所の者多し。しかれども『光と暗と何の交ることのあらん』[コリンツ後六の十四]といひ『光は暗に照る』云々[イオアン一の五]といふ言は種々の關係によりて取用すべく、一樣一片に解すべからざるなり。或は己を制して、居る所の罪に勝を讓らざるを得る程神の恩寵に自から安んずる者あり、されど或時には熱心なる祈禱に在りて、自から安んずれども、其後不潔なる意念の作用するに遇ひ、恩寵の在止するに拘はらず、罪の爲に竊み去らるゝ場合あり。ゆゑに輕騷にして、神聖なる恩寵の幾ばく作用するを精密に理會せざる人は、罪は全滅せられたりと思ふ、しかれども熟慮と才智とを有する者は、神の恩寵の居るあるときも不潔にして不適當なる意念のために動搖せらるゝことを否定せざるなり。

第十四章

兄弟の或者等豐なる恩寵を受けて、五年或は六年の間肉慾の働は彼等に全く蓁微消失したりしが、其後港に着して安穩なりと思ひし時、惡習は恰も埋伏所よりわらはるゝ如く、遺恨と猛烈とを以て彼等を襲擊して、驚愕、疑惑せしむるは、我等の往々見る所なり。ゆゑに智識の透明なる人は誰も己を左の如く言ふを敢てせず、即『恩寵が我と共に居るにより、我は罪より既に自由になれり』といふを敢てせざるなり。何となれば前文にいひし如く同一の智に二の神の作用するによる。されば輕騷なる人及び無智なる者等は或る過敏なる神經を己に有して、最早『我等は勝てりと』言ふといへども、意ふに事の實際は次の如くなるべし。太陽が清く照す時といへども、その周圍に集まれる濃氣或は霧を以て太陽の美なる光を暗ますことあり。神の恩寵を賜はりしも、己を全く充分に潔うせずして、罪に尙深く占領せらるゝ者等も殆んどこれと同じき有樣にあり、ゆゑに最完全なる實驗を以て此を證せんには實に多くの思慮を要するなり。

第十五章

目や、舌や、耳及び足なくんば、視或は言ひ、聽き或は行くことあたはざるべし、かくの如く神と神よりあたへらるゝ能力なくんば、亦同樣神聖なる機密にあづかる者となりて、神の叡智を認識し、或は精神上富まさるゝことあたはざるなり。エルリニの智者等は詞章の學を研鑽し、勉勵して時を論辯に費す。然るに神の諸僕は詞章の學に不知なりといへども、神聖なる智識と神の恩寵にて成全せらるゝなり。

第十六章

善なる撫恤者に充ち滿たされし彼の使徒等も憂虞を全く免れしにはあらずして、恩寵により樂みと言ひ難き喜びとに或る畏懼を伴ひしことを余は同く信じて言はんとす、しかれどもこは彼等に惡の作用するを彼等が分疏したるによるにあらず、けだし恩寵は彼等を正しき路より少しく離れしむることさへあらざる危險なき地位に立たしめたり。それ小兒は小石を壁に投ずるも何の損ふ所あらざらん、或は弱き箭は堅甲を少しも傷けざらん、かくの如く惡習の或る部分も彼等を打擊して、無效なるもの及び徒然なるものと認められたり、何となればハリストスの力を以て善く防禦せられたればなり。しかれども全く完全なる際にも彼等には意志の自由のあるあり。されば恩寵の後に憂虞を脫して自由を得るありと或人が說を爲すは理に合はざるなり。主は完全なる者にも神に事ふる中心の所望を促すは互に同意するあらん爲なり。けげし使徒はいふ『神を熄すなかれ』（フェサロニカ前五の十九）。

第十七章

單純なる言を以て事を傳ふるは凡の人の能くする所にして、且易きなり。例を以ていはんに餅は麥より準備せらるゝものなりとは凡の人易すく言ひ得べし、さりながらこれを準備する所以を詳細に說きあらはさんことは、誰にも知識の足れるにあらずして、たゞ熟練なる人のみこれを爲し得るなり。これと同じく無慾と完全の事も、單に言ふは難からずして、易きなり、しかれども實驗を以て事情を審知するは、是れ即完全を得らるゝ所以を實際に且眞實に理會するに同じ。

第十八章

神的敎旨を實地に味へず、且嘗めずして述ぶる者等は、譬へば人夏日正午の時に方

り、荒漠たる水なき原野を行き、其後強く熱く所の熱により、其附近に清涼なる泉と甘くして且澄める水のあらんことを思ひ出し、何の妨もなく飽くまで水を飲んで樂まんことを想像するに似たり、或は人蜜を一滴も味へずして、其甘味の如何を他に說明せんと試むるに比せん。完全と聖德と無慾との如何なるを實際に且己の確信を以て審知せずして、これを他に說明せんと欲する者も實にかくの如し。げだし神は其論議する所の事に於ける少しの認識と雖も彼等に得しむるならば、眞實と實際とは其講する所と同からずして、甚多く異なるあるを確知せんこと疑なし。

第十九章

仁愛なる王の意に適する者とならん爲には、一を爲すべくして、他を爲すべからざるを、福音經は凡の人に確として命ず。げだし怒るなかれ、願ふなかれといひ、又『もし人爾の右頰を批たば他の頰をもこれに向けよ』といふ（マトフェイ五の三十九）然れども、使徒は誡命せられたるものを逐次に說明し、潔淨の行の漸々に成るべき所以のものを敎ふ、即忍耐と大量とを以て最初は嬰兒の如く乳を以て養ひ、其後成長して終に完全に達するを敎ふるなり。例を以て言はんに、福音經は命ず、完全なる長下衣は剪毛よりして作るべしと。しかれども使徒は剪毛を紡き且これを織りて長下衣を備ふべき所以を最好く說明せり。

第二十章

或者等は顯然たる姦淫、偷盜、貪食及びこれと同樣なる惡行を禁じ、これにより己を諸聖人の數に列せんとす、さりながら實際に且眞實に聖者とならん爲には彼等に多く足らざるあり、何となれば惡習は尙心中に隱れ、生活して徇匿することしばしばにして、全く彼等より遠ざからざればなり。聖人とは內部の人を聖にして、完全にこれを淸めたる者是なり。兄弟の或者は他の兄弟等と共に祈禱して、神聖なる力の捉ふる所となり、大悅して天都イエルサリムと、彼處の光明なる住所と、無限にして得もいはれざる光とを見て、言ふ所の聲をきけり、『視よや義人等の安息の處』と。其後彼は自から高慢し己を高しとする意見を懷抱して、罪の深きに陷り、終に大なる惡の獲る所となれり。しかれども彼にしてかくの如くならば、況んや常人は左の如く言ひ得べきか、曰く、『我は禁食し、旅行の生活をなし、所有を散じ、前記の惡行より己を守りしにより、我が爲に聖人とならんに最早殘る所あるなし』といひ得べきか。顯然ル

る惡行を禁ずるはいまだ所謂完全にあらず、心を清くするはこれぞ即完全なる。

第二十一章

此事を預想する汝は己の意念を儆醒して監視するに當り、汝の智が罪の囚虜たり及び僕たるを思ひ、其奥底に汝の意念の深きに何物あるを研究せよ。即汝の靈の所謂潛伏所なるものに巣を作りて、汝の靈の首なる部分に於て汝を殺さんとする此蛇を研究せよ。けだし心は實に圍むべからざる淵なり、ゆゑにもし汝は此蛇を殺すならば、もしすべての不法より己を清め、罪を己より斥くるならば、神の爲に清きを以て誇るべし、しかれどもこれと反對なる場合に於ては、汝は尙窮乏者たり、及び有罪者たるにより、自から謙遜して汝の隱なる罪の爲に祈り、ハリストスに就くべし。けだしすべて新舊約聖書は見たる所潔淨の事に論及し、又潔淨のことの言論は悉くの人に實効あるにあらずといへども、イウデヤ人の爲にもエルリン人の爲にも凡の人の爲に切に願ふ所なり、しかれども此に達する即心の潔淨に達するは唯一のイイスを以てするの外能はざるなり。けだし彼は實在眞正なる眞理にして、此の眞理なくんば、眞理を認識することも救を捉ふることも能はざるなり。

第六　說教

愛の事

第一章

此の有形なるものに關しては、汝は財產を分ち散じて、外部の人を棄てたり、かくの如く從前の品性をも、汝は棄てんことを要す。されば汝は肉體の智慧或は物體の知識を學びしならば、これをも棄つべし。もし肉體の義の行に依賴せしならば、謙遜し、己を卑うして此を絕念せよ。けだしかくの如くならば、傳道の愚を學ぶを得て「コリンフ前一の廿一」これと共に眞の智慧を獲ん、これ即艶言にあるに非ず、十字架の力にありて、此の力を受くるを賜はりし者は實にこれを所有するを得るなり、何となればパウエルのいふ如くハリストスの十字架は「イウデヤ人の爲には礙、エルリン人の爲には愚なれども、我等救はるゝ者の爲には神の能及び神の智慧なればなり」「コリンフ前一の十八、廿三」。

第二章

汝は天の趣味を得たりと雖彼の智慧を領する者となりて已に其心中に安息を有したりと雖、かゝる場合に於ても、一切の眞理を最早曉り且了解したる者の如く誇るなかれ、自負するなかれ、汝も左の言を聞かざらん爲なり、曰く『爾等は已に飽き足れり、爾等は已に富めり、爾等は我と偕にせずして王となれり、嗚呼願くは爾等の實に王たらんことを、我等も爾等と偕に王たらん爲なり』（コリンフ前四の八）これに反して、パリスト教を味ひしならば、己を以て未だこれに關係せざるものゝ如く思ふべし。而してこは汝に於て皮相の考にあらずして、恰も汝の智に常に植付られたる且は固められたる如きものとなるべし。

第三章

富を愛する者は幾千の財を積むといへども、これを以て足れりとせずして、其望はいよ〳〵飽かざらん、或は甘美なる飲を未だ飽かざる先に奪はれし者は更にます〳〵渇を起さん、かくの如く神の甘美を味ふは如何なる飽滿よりも高し。反つて人

は此富を以て富まさるゝ程はいよ〳〵己を貧なるものと思ふなり。かくの如き、パリスチアニンは自から己の靈魂を高く價値せずして、主の前に極めて卑微なるものと思ひ、己を悉くの人の僕と爲さん。かくの如き靈魂の事は其謙遜の故に主は大に喜びてこれを慰安し給ふなり。ゆゑにもし人は何物を有するあるもこれにより己を以て價値あり、或は何物をか有すると思はざるべし、何となれば自負は主の前に厭ふべきものなればなり。自負は最初に人が『神の如くならん』（創世記三の五）といへるをきゝて、此の空望に信任したるや、人を樂園より逐出せり。認識せよ、汝の神及び王、神の子はいかに『己を虛くして僕の貌をうけ』（フィリピ二の七）、いかに自から貧くなり、いかに不法なる者と共にせられ、いかに苦難をうけ給ひしを。然るに彼は神たるも、汝は血肉より成れる人、土及び塵なるに、哀哉、何の善にも全く關係せずして、眞の不潔なる汝は己を高く思ひて高慢するか。もし汝は裁智あるものならば、神よりうけたるものにつきては寧ろ左の如く言ふべし、曰く『これ我が所有にあらず、他よりうけてこれを有す、されば彼もし欲する時は、其與へしものを必ず我より取返さん』と。かくの如くすべて善なるものを主に歸して、惡なるものをば己の劣弱に歸すべし。

第四章

使徒がいはゆる土器に藏むる寶とは、(コリンフ後四の七)知るべしこれ人を聖にする神の能力にして、使徒が尙肉體にありて受くるを賜はりしものなることをけだし使徒は他の所においてもいへり、曰く『我等の爲に神に由る智慧となり、義及ひ成聖となり、贖となれり』(コリンフ前一の三十)。此の天に屬する神の寶を得て、これを己に有する者は、誠命にて要求せらるゝ凡の義を爲し、悉くの誠命を純全に聞然する所なく遂ぐるを得るのみならず、これより先勞なくしては成す能はざりしものをさへ、勞も疲倦もなくして遂ぐるを得るなり、何となればたとへ人は欲するにもせよ、善なる神をうけざる間は、靈神上の果を實に育成するあたざればなり。さりながら凡の人は忍耐と信仰とを以て進行を成して、恒に己を勉むべく、此の天の寶をうけんことを熱心を以てハリストスに祈るべし。さらば其時にハリストスにより、ハリストスを以て、凡の義を清潔に、完全に併て無碍且無難に遂ぐるを得るなり。

第五章

神聖なる神の富をおのれに有する者が靈神上の訓言を他人に傳ふる時は、自己の寶の中より、取出すものゝ如くにさづくるなり。じかれども神聖なる思想と奥義と最高尙なる言說の善を自己より流し出すべき此富を心の寶庫に集めざる者は、南約書中より若干の花を集めて、これを己の舌端に載せ、或は屬神の人の說をきゝて、其敎道を以て自から誇り、これを呈すること自分のものゝ如くして、他の製作を己に占有せんとす。されば彼等は其授くる所の他人には容易なる樂みを得しむれども、自分は其講話の後、貧者の如き者とあらはるゝなり、何となればその各言は恰もこれを借られたる者に歸りて、その所有となるが如く、彼等自分には先づ自から樂みて其後他人にも傳へて益せしむべき己の寶を有せざればなり。ゆゑに此の眞實なる富を己に有せんことを我等は先づ神に願ふべし、然る時は我等は他人にも益をあらはして、神秘奥妙なる敎旨を容易に授くるを得べし。けだし神の仁慈は凡の信ずる者に居住せんことを悅び給へり。主はいへり『我を愛する者は我が父に愛せられん、我も彼を愛し、且己を彼に顯はさん』(イオアン十四の廿一)。又他の所にもいへり『我と父とは來りて彼に住居をなさん』(イオアン十四の廿三)。

第六章

神の子となるを賜はりて、これを光照するハリストスを己に有する者を、神は種々多樣に統治し、其の心の秘密に於て恩寵は彼等を煖むるなり。さりながら此事を了解せん爲には世の或る見ゆる樂みを顯はし、これを以て靈魂に於ける恩寵の神聖なる慰藉に譬ふるに如くはなし。けだし此等の慰藉を賜はりし者は、或時には恰も王の或る晩餐にあるが如く樂みて、或る言盡されざる得もいはれざる喜を以て喜ばん、或は精神上僧に樂むこと新婦の新郎に於ける如くなるべく、又は或る無形體なる天使等の如く、自から己を形體に包まれたる者とは思はざらん程身の動かし易きと輕きとを感せん、或時には恰も或る飲料を飲むが如く樂みて、神秘なる奥義の言ひ難き醉を以て酣醉せん、然れども或時には悲嘆の中にありて、衆人の救のために涙を以て祈禱せん、何となれば衆人に於る神聖なる靈神上の愛を以て燃え、全アダムの哀みをおのれに感得すればなり、しかれども或時には言語にていひあらはされざる心神の樂みにより、もし能くするを得ば、善者と惡者との間に如何なる區別もなさじ、凡の人を憐みて自己の懷に隱さんとする程愛を以て燃始めん、或時は人の己より下からんことをさへ思浮ばず、己を以て衆中の末小なるものと爲す程己を卑しめん、或は神の得もいはれざる喜の爲に呑まるべく、或は王の全備なる武具を被たる勇士の出陣して敵を敗走せしむる如く、彼等も同樣神的鎧甲を以て己を防衛し、出でゝ見えざる敵に對して、これを其足下に貶せん、或時には大なる安靜と沈默とは彼等を繞り、平安ならしめて、彼等は奇異の樂に圍まれん、しかれども他時には明悟と、神聖なる智慧と、神の測るべからざる認識とを以て、ふリストスの恩寵により、いかなる舌を以ても言ふ能はざる程に智慧付られん、しかれども彼等は外形によれば如何んしても人類各自と異ならざるを見るの時あらん。かくの如く神聖なる恩寵が彼等に種々變化して、殊異多樣なる働を爲すは其意恰も靈魂を完全無玷清潔にして天の神に見えしめん爲にこれを養ひ、且練習せしむるに似たるなり。

第七章

こゝに數へ來れる神の作用は、高き階段に立ちて完全に最近き者にこれあり。此の殊異多樣なる恩寵の慰藉は神を以て彼等に生じ、種々同からざるありといへども、

間斷あらざるべし、けだし神の一の作用に次で他の作用生ずればなり。人がすべての情慾より充分己を潔めて、得も言はれざる親與により、撫恤者たる神と全く合一して靈神上の完全に達し、靈魂は恰も神を以て融和せられたる如く、神となるを賜はる時は、すべては彼に於て光となるべく、すべては愛となるべく、すべては慰安となるべく、すべては樂となるべく、すべては善良となるべし。されば靈魂は善なる神の能の德行に沈没すること、恰も海底に在て八方より水に圍まるゝ石の如くなるべし。かくの如くなれば彼等は神の神と全く合一して神の僞らざる德行を己れに有し、衆人にも此結果をあらはして、パリストスに似ん。神は彼等を内部に於て無玷清潔なる者となせり。故に彼等は惡習の結果を己の外に生ずるあたはざるべし、反つて神の結果は常にすべてに於て彼等に光らん。神的完全の非常なる進歩即使徒が我等に到り達せんことを勵む『パリストスの充滿』なるものはかくの如し、いへらく『すべてにパリストスの充滿にみてられん爲なり』（エフェス三の十九）又いへらく『成全の人となり、パリストスの全き成長の量にいたるに迄ぶ』（同上四の十三）。

第八章

時として人は入りて膝を屈めんに、其心は神聖なる能力に滿てられ、靈魂はすでに説明せし如く主と偕に樂むこと、新婚の新郎を喜ぶ如くなることあり。大なるイサイヤ此事をいふ、曰く『新郎の新婚をよろこぶ如く主は汝を喜ばん』（イサイヤ六十二の五）或は亦かくの如き者が終日何事にか從事して、一時祈禱に向はんに、其時内部の人は祈禱に奪ひ去られて、彼世の限なき深きに圍まれ、その高く飛で奪ひ去られたる智は全く狂喜する程得もいはれざる愉快を感じて、此世の念慮を思忘るゝことあらん、何となればすでにいひし如く、其思は祈禱にみちみてられて、恰も囚人の如く、無限にして測るべからざる處に引去らるればなり、ゆゑに此時に於ては彼の祈禱により祈禱と共に靈魂も出去らんとする情況の人に生ずることあらん。

第九章

しかれども常にかくの如きの情況に居らん爲に、其力は人に足れるか、との問を發する者には、左の如く答ふべし、恩寵が人と共に居らずして人に根付かざらん時は

あらざるなり、されば恩寵はその共に居る所の者に於て或る天然なる奉ふ可らざるものゝ如くなるべく、恩寵は人と合一して、其欲する如く種々に人を攝理して其益を致す。火は或時には更に強く人に燃ゆれど、或時には更に弱く燃ゆることあり、又光も或時には大に照せども、或時には減少して暗くなることあり、これ疑なく神聖なる照覽によるなり、又燈は消えずして燃ゆといへとも、或時には更に光明なることあり、其時人は祝賀して、恰も神の愛を以て大に醉ふ如くならん。しかれども或時には心中にあらはるゝ其光が更に最内部にして最深奥なる光の爲に戸を啓くことあり、因りて彼の甘美と直覺との爲に全く呑まれたる人は、最早自身の外に居るべく、愛と愉快とを以て新に心神を奪はるゝにより、及び其賜はりたる奥義の深きによりて、或は世の爲に愚なる者の如く、又は害ある者の如くなることあらん、而して人は彼の時に於て完全の量に達し、凡の罪より自由を得て、責むべき所なきものとなること屢これあり、しかれども其後恩寵は或は減少するありて、反對なる力の復は人に降らん。

第十章

恩寵の作用のことを左の如く思ふべし、たとへば第十二段に登る、即完全に登ると假定せよ、而して如此の程度は時あり達し得らるれども、恩寵は復び弱く行爲するを始めん、されば一段を下りて、譬へば第十一段に止る如くならん。此等の奇跡を人に示されて、人の實地にこれを試みるや、もし此事が常にかくのごとくして續かんには、人は傳道の職務と責任とを己れに負ふこと能はざるべく、何事を聞くことも言ふことも能はざるべく、甚だ暫時といへども何なりとも慮るの配慮を己に負擔せざるべく、たゞ一隅に伏して、大なる喜の園む所となり、高く飛んで、大に酩酊しつゝあらん、ゆゑに人に兄弟の事及び傳道に勤むるの事を慮りてこれに從事する時を有せしめん爲に完全なる程度は人にあたへられざるなり。

第十一章

天國の事の説話をきゝて涙を流すまでに至るも、此の己の涙に礙へらるべからず、又己の耳に於ても善く聞きし者の如く、己の目に於ても善く見し者の如く、己を以て十分なる者と爲すべからず、何となれば他の耳と他の目と他の涙と、同じく亦他の明悟と他の靈魂とあればなり、即此の神聖なる天の神のあるありて、彼は聡き且

哀み、且祈禱し、且認識して、實に神の旨を行へばなり。げだし主は使徒等にも神の至高なる賜を約して、次の如くいひ給へり、曰く、『撫恤者即聖神、父が我の名によりて遣はさんとする者は、彼凡の事を汝等に教へん』（イオアン十四の廿六）又いへり、『我尙多く汝等に言ふべき事あれども、爾等今容るゝあたはず。然れども彼即眞實の神來ら ん時、爾等を凡の眞實に導びかん』（同上十六の十二）。彼は祈禱すべく、彼は哀しまん。神聖なる使徒はいへり、『神も亦我等の弱きを助く、蓋我等は宜しきに合ひて何を求むべきを知らず、然れども神自から言ふべからざる嘆息を以て我等の爲に求む』（ロマ八の廿六）。何となれば神の旨はたゞ神にのみ顯然と知らるればなり。いふあり、『神の事は神の神の外之を知る者なし』（コリンフ前二の十一）。されば五旬節日に當り、約束の如く撫恤者降り來りて、善なる神の能力が使徒等の靈に止まり、罪の覆は彼等より全く取外され、情慾は止息して、彼等に心の目の啓かるゝや、其時には最早神を以て完全に昇せられたる彼等は睿智に滿てられて、此の彼等が靈魂に主宰となり王となりたる神に因りて神の旨を行ふを學び、神を以て凡の眞實にみちびかれたりき。ゆゑに我等も神の言を聽きて哀みを生ずるときは、疑なき信を以てハリストスに祈願せん、ハリストスの旨に從ひて聽き、且祈禱する神がこれを實に希望する我等にも來らんが爲なり。

第十二章

事情は左の如くなりと想ふべし、即或る能力は稀薄なる空氣の如く、輕き智に掛りて、これを掩はん。燈は先にいひし如く常に燃え且光るといへども、此光に或る覆の如きものゝ掛るあらん、ゆゑにかくの如き人は未だ不完全にして、罪より全く自由を得たる者には非ざるを打消すこと能はざるなり。されば彼は自由なる者とも不自由なる者ともいひ得べし。しかれどもこは神に拘はらざるに非ずして神の照覽によるものなること無論なり。或時には彼の防禦の中壁が破壞挫折せらるゝことあれども、或時には全く破壞せらるゝにあらざることあり。されば かくの如き祈禱の狀態は常に一樣なるにあらずして、或時には恩寵は大に燃えて慰め且安んぜしむることあれども、或時には少しく光り、弱くなりて、人を益する爲に恩寵が自から此を節限する如くなることあり。さりながら或時には余は完全なる程度に達し、彼世を味ひ且試みしことあり、しかれども完全なる或は自由なる一の「ハリスチアニン」をも未だ見ざるなり。或者は恩寵に安んじ、奧義と啓示とにあづかる者となり、大

なる恩寵の甘美を覺ゆる迄に到り達すといへども、しかれども彼にも罪は同ぐ存するなり。我いふ、かくの如き者等は大に豐なる恩寵と彼等を照す光の故に、無經驗によりて己を以て完全なる者及び自由なる者と思へり。ざりながらすでにいひし如く余は一の全く自由なる者を未だ見ざるなり。げだしすでにいひし如く、余も或時には彼の程度に稍到達したる場合ありしにより、經驗を以てをしへられたる我は完全なる人の如何なるを知るなり。

第十三章

汝は新郎と新婦の親與の事、喜悅と祝宴のことを聽かんときは、一も物體的なるもの或は地に屬するものを想像するなかれ、何となればこれ例の爲に取りて適用するものなるによる。げだしこれ皆得もいはれざる神的なるものにして、肉眼の爲に觸るゝあたはず、たゞ信にして聖なる靈魂の爲に曉り得べきものなるにより、聖神の親與も、天の寶も、聖なる天使等の喜悅と祝宴も、たゞこれを試みたる者には明に見ゆれども、聖にせられざる者には心に想像することだも全くあたはざるなり、ゆゑに信によりて如此の認識に達するを未だ賜はらざらん間は恭謹にして此事を聽くべし、さらば其時は實驗により心靈の眼を以て見るべく、これらの善を、ハリストゥアニンの靈は尙此世に於ても受るを得んげだし復活に於ては身體も如此の善にあづかるものとなるを得べく、身體が神に屬するものとなるときは、これを見るを得て恰もこれを領するが如くならん。

第十四章

自己の心靈上の美と善良なる結果、例へば祈禱、愛、信、儆醒、禁食、及び其他の德行の企業は神と合一親與するときは、火中に置かれたる香の如く、自らも盛なる芳香を發せん、然らば神の旨に遊ひて生活せんことは、最早我等の爲に容易なるべし、何となれば先にすでにいひし如く、聖神なくんば誰も神の旨を悟るあたはざればなり。げだし夫と結婚する婦の如し、配耦するに至る迄は自己の心情を以てみちびかれ、己の意のまゝに擧動をなせども、夫と合ずる時は、注意を自己に向くるをやめて、全く夫の指導の下に生活するを始めん、かくの如く靈魂も自己の意旨と自己の法と自己の行爲とを有すれども、もし天の夫なるハリストスと配合するに堪ふるものとなるときは、夫の法に屬すべくして、最早己の旨には從はず、新郎たるハリストスの

旨に從ふなり、

第十五章

婚姻の服とは、知るべし聖神の恩寵をいふなり。これを服するに當らざる者は、天の婚姻と神的の晩餐にあづからざるべし。此の神的神聖なる酒を背め、此の惶々なる醉を以て醉はしめらるゝことに力を用ひん、酒を飽くまで飲みし者は多辯になる如く、我等も此の神的なる酒に全く充ち滿たされて、神聖なる奥義に悟り徹せんためなり。げだしダヴィドはいへり、『我が爵は滿ち溢る』(聖詠廿二の五)。

第十六章

己の疵を認識し、己を圍繞する情慾の暗きを認識して、常に主に救助を願ひ、勞を忍耐して、此世のいかなる幸福をも喜ばず、ただ一の最良なる醫と其療法に依頼する靈魂は神の貧しきものなり。しかれども多くの疵を負へる此靈魂はいかにしてハリストスと共に同居するに堪ふべき最勝れたる美容なるものとなるを得べきか。これ他にあらず、靈魂が元始如何樣に造られたるに注目すると、己の疵と己の貧し

きとを明白に認識するにあるのみ。もし靈魂は己に有する疵と情慾の痂とをたのしまず、己の有罪なるを恕するなくんは、主はこれを不具ならしめざるべく、來りてこれを痊し、これを療して、これに無欲と不朽なる美とを恢復せしめん。たゞ彼はすでにいひし如く情慾が促す所のものと任意に交るをなさず、情慾によりて生ずるものに同意をなさずして、善なる神によりあらゆる情慾より免るの自由をたまはらんが爲に全力を以て主に呼ぶならば可なり。故にかかる靈魂は福なり。しかれども己の疵を自覺せずして、大なる限りなき惡習の故に、何等の惡習を有することをも思はざる靈魂は禍なり、善なる醫師は彼を眷みざるべく、又療せざるべし。何となれば彼は己を以て傷はれざる健全なるものと思ふて、己の疵を慮らざればなり。いふあり、『康强なる者は醫師を需めず、病を負ふ者はこれを需む』(マトフェイ九の十二)。

第十七章

凡そ德行に對する熱心なる愛にみちびかれて、天に屬する神の秘義を識るの認識を實驗により聰敏に求得て、己の住處を天に有する者は、生活に於ても、超性の樂に於ても、實に福にして驚嘆すべきものなり。これぞ彼等が惡くの人類に超越する明

白の證左なる有力なる或は有智なる、或は善智なる人類中誰か尙地に居りて天に登り、彼處に神的なる行を成し、神の美麗を直觀したる者ありや。しかれども今や外貌によれば或る貧しき者、極めて貧しく賤しくして、鄕人にさへ全く知られざる者は、主の前に其面を俯伏し、神にみちびかれて天に昇り、其心に疑なき信を有して、彼處の奇跡をたのしみ、彼處に行動し、彼處に居處を有すること神聖なる使徒の言へる如くならん。げだしいふあり、『我等の居處は天に在り』〔フィリピ三の二十〕またいふあり、『神が彼を愛せし者の爲に備へし事は目未だ見ず耳未だ聞かず、人の心にいまだ入らず』〔コリンフ前二の九〕其後使徒は又加へていへり、『たゞ我等には神己の神を以て之を顯はせり〔同上十〕彼等こそは實に有智にして、有力なる人なれ、彼等こそは貴にして善智なる人なれ。

第十八章

さりながら彼の天に屬するものによらずして、現在の賜に依り聖者を度らんも、彼等は惡くの人類より一層上なりと言ふを許るなかれ。此事は左の如く考ふべし、ヲピロンに王たりしナウホドノソルは曾て其點刻したる偶像を拜せしめん爲に屬下の民を惡くわつめたりしに、こは神の聖明なる感りにより、童子の德行が衆人に明かに知らるゝ緣由となりて、衆人は天に在す眞實の神の一なるを認識せり。捕虜として自由を奪はれたる三人の童子は、王の前に勇氣を有せり。されば人皆大なる恐れを以て偶像を拜し、いかんしても從はざるを敢てせずして、殆ど弊なき家畜の如く引去らるゝや、童子等は他の人々の如く行動するを甘んせざるのみならず、其敬度の知られずして己まんことをだに欲せず、其敬度の隱れてあらはれざるに得堪へずして、衆人の耳につげて左の如くいへり、『我等は汝の神々に事へず、また汝の建てたる金像を拜せず』と〔ダニイル三の十八〕彼の恐ろしき火爐は彼等を罰せん爲に彼等をうけたれども、彼等に其働をあらはさず、却て其前に崇拜するものゝ如く、彼等を守りて禍にかゝらざらしめたり。衆人及び王も自ら彼等によりて眞の神を認識せり。たゞ地に在る者のみならず、諸の天軍も彼等に驚嘆せり。しかれども天に在る者等も聖人の剛毅なる苦行のときにあたり、遠ざからずして、これに注目することは、神聖なる使徒もこれを我等に示す、げだしいへり、『天使等及び人々の爲に觀玩となれり』〔コリンフ前四の九〕これと同樣なることは、イリヤの例に於ても見るを得ん。彼は獨り天火を降して、最多數の者に打勝てり。またモイセイも全エギペトと

苦虐者ファラオンとに打勝てり。同じく亦ロトノイ及び其他多くの人々の例に於ても見るべし、現に彼等は人々より大なる輕侮をうけたれども、多くの有名なる且有力なる者に勝てり。

第十九章

凡そ有形なる物體は、もし他のこれと異なる天然物の來りてこれに助くるあらずんば、自から不活動なるものとなり、昏亂なるものとならん、けだし得もいはれざる神の睿智は有形物體に於て我等に秘義と狀とをあらはす、即人性はもし神の手のこれに助くるあらずんば、德行の完全なる美麗と聖德の神的莊嚴とを自からあらはすあたはざる所以を示す、例へば自然に任せられたる地は、もし農夫のこれに勉勵を用ふるなく、亦雨と太陽の助を添ふるあらずんば、何も利する所なうして、豐饒を致す力は最少なからん、また凡の家もこれと一樣の性にあらざる此の太陽の光に必要を有す、しかれども光なくんば、家は暗黑に滿てられて、住むに便ならざるべし。これと同く言ふべき他の物體をも汝は多く見んかくの如く人性も善行の果を完全に產し得べき力を自から有せずして、たゞ我等が靈魂の神的農夫たるハリストの神に必要を有するなり、彼は實に我等が天性の爲に非常なるものなり、何となれば我等は受造物にして、彼は造られしものにあらざればなり、而して彼は其熟練を以て心を耕す、即全くの所望により己を此當事者に托する信者の心を耕して、これに神の完全なる果を成長するの備をなさしめ、情慾の爲に暗まされたる我等が靈魂の家に其光を照し始めん。

第二十章

「ハリステアニン」には、二樣の戰と二樣の角逐の其前にありあり、第一は此目を以て見らるゝ物體と戰ふにあり、何となれば物體は靈魂を刺衝し、感動し、且呼起して、これに耽り且これを樂ましむればなり、而して第二は恐るべき世界統御者の首制及び權柄とたゝかふにあるなり。

第二十一章

モイセイの面にあらはれたる光榮は至聖なる神の眞實なる光榮の像なりき、彼處に於ては誰もモイセイの面を瞻るあたはざりし如く、今も情慾の暗は、ハリステア

ニン」の靈魂を輝かす此光榮に堪へ得ず、其光線の爲に逐はれて逃走せん。

第二十二章

義を愛する者と神を愛する者即天の甘美を味ふて、其靈魂には植付けられたる及び融解せられたる恩寵を有し、恩寵の旨に全く己を托したる者は、すべて此世に於て嫌はれん、何となれば彼は凡て世にある所のものより上に立てらるればなり。金或は銀、或は尊敬と光榮、或は讃美と名譽とを稱せんか、いかんしても彼はかくの如きものゝ爲に捉へらるゝあたはざるべし、何となれば他の富と他の尊敬と、他の光榮とを實地に試み、不朽なる樂を以て靈魂をやしなひ、神の親與によりて感應と充分の保證とを有すればなり。

第二十三章

彼は明悟を以ても、認識と思慮とを以ても、人々に異なること、靈智ある牧者の無智なる羊に異なるが如し、如何となれば彼は他の神と、他の才智と、他の明悟と、此世の智慧に異なる他の智慧をうくればなり。いふあり、『我等は智慧を練達者の中に語る、惟斯の世の智慧、亦此の世の過ぎ易き有司の智慧に非ず、乃神の奥妙にして秘密なる智慧を語る』（コリンヲ前二の六、七）ゆゑにかくの如き者は、すでにいひし如く、凡そ世の神を有する人又は聰明なる者又は智慧ある者とはすべての點に於て異なるありて、錄していふ如く、『度らざる所なきなり』（コリンヲ前二の十五）彼は各人の事を知り、其何くより取りて言ひ、何に止まりて、いづくに在るを知る、されば彼を認識し、彼の事を度ることは、世の神を有する者の中誰も能くする無しといへども、かくの如き神性の神を有する者はこれを能くするなり、神聖なる使徒の言によるに、曰く『神に屬する言を以て神に屬する事に當つるなり。靈に屬する人は神の神の事をうけず、其彼の爲に愚なるが故なり、然れども神に屬する人は度らざる所なし、而して己は何人にも度られず』（コリンヲ前二の十三、十五）。

第二十四章

しかれども此の至聖なる神をうくることは、人たゝ凡そ此世にある所のものより遠ざかりて、パリストスの愛を尋ぬるに、己を捧げ、才智は物質的のものを慮るの諸慮を脱し、たゝ此の一の目的に進向して、パリストスと一神となるを賜はるに、非ず

んば、能はざるなり、使徒の言ふ如し『主に附く者は主と一神となる』（コリンフ前六の十七）しかれども此世に於て或物の爲に全く繫がれて、これに耽りたる靈魂例へば富又は榮譽又は世の愛情に耽りたる靈魂は、凶惡なる力の暗を避けて、これを超ゆること能はざるべし。

第二十五章

義を愛し神を愛する靈魂は、主に對するの愛に些少の弱みもうけざるのみならず、すべてを全く主の十字架に釘して、靈魂に顯はるゝ靈神上進歩の感を自覺せん。ゆゑに此の愛に感刺せられたる靈魂は、いはゞ德行の義と、善なる神の照明とに飢ゑつゝありて、たとへ神聖なる奧義に堪ふる者となるといへども、天の樂と恩寵に與かる者となるといへども、自己に信任せず、又或る價値を有せりと思はず、靈神上の賜をうくる程は更に愈々飽かず、愈々盡力して天に屬するものを尋ぬべく、靈神上の進歩を己に感ずる程はいよ〳〵飢ゑて、此等の賜をうけんことを願ふなり、されば靈神上大に富める靈魂は、この賜に關係する程は恰も貧者に似たる、あること、神の書にいふ如くなるべし。けだし言へり『我を食ふ者は更に飢ゑ我を飲む者は更に渴かん』（シラフ廿四の廿三）。

第二十六章

かくの如くなる靈魂は、すべてに於て情慾より免るの自由をたまはり、恩寵の充滿により、神聖なる神の照明と親與とを完全にうけん。しかれども怠慢なる靈魂は、勞苦を忍耐せずして、尙體中に在るにより、心の成聖をこゝに一部うくるには非ずして全く受けんことを不易なる忍耐と大量とを以て盡力せず、ゆゑに充分なる感情と確信とを以て搖恤者たる神と親與して、彼に由り有害なる情慾より免れんことを希望せざるなり。神聖なる恩寵を賜はるといへども惡習の爲に竊去らるゝ彼等は、自己を慮るを全く罷むること、最早恩寵をうけてこれに慰められ、靈神上の甘美を以て樂むものゝ如くならん、故に自負に極めて偏りて、悔悟の心を有せず、其思想の狀態に於ては不遜にして渴を感せず、完全なる無欲の域に進向せずして、此の小なる恩寵の慰藉を以て自から足れりとし、驕傲には進歩すれど、謙遜に進歩せずして、其賜はりし恩寵をさへ最速に失ふこと往々これあり。けだし眞に神を愛する靈魂は、前に言ひあらはせし如く、義なる行を千百成就せりといへども、嚴なる儆醒を

以て身體をつからし、神の種々なる賜と啓示と奥義とを賜はりしといへども、謙遜を以て、己をみちびくこと、恰も神に依る生活を未だ始めざりし者の如く、善なるものを一も得ざりしものゝ如くなるべし、何となれば服從と飽かざる心とを以てハリストスを愛するに傾けばなり。

第二十七章

此域に達することは、誰が爲にも俄に能くすべきに非ず、又容易すきにあらざるべし、たゞこれに先だつ多くの辛勞と苦行との後、多年の勉勵により、試練と種々なる誘惑を歷るにしたがひて完全なる無欲の域に達するを得るなり。たゞかくの如くして悪くの勞と己を疲らすとを以て、試みられ、凶悪が引入れんとするあらゆる誘惑を大量に忍耐する人は、終に大なる尊敬と、神的恩賜と、神聖なる富とを受けて其後天國を嗣ぐ者となるべし。

第二十八章

しかれども生活に於ては前文にいひし如くなる嚴重を有せずして、成聖の感をいまだ心にうけざる靈魂は、泣て熱心に主に願ふべし、得もいはれざる直觀によりて心中にあらはるゝ神が此の幸福と能力とを賜はらん爲なり。教會の法に依るに肉體の罪に證定せられたる者は、先づ司祭を以て分離せられ、其後己の悔改を適當にあらはして、親與に入るをゆるさるゝなり、然れども躓づかずして潔く生活する者に至りては、彼は神品に昇るべく、外に立つ所の者により祭壇の内に入れられて位をうけん、聖務を行ひ主の前に立つ者とならん爲なり。かくの如く使徒が言ふ所の奥密なる神の親與の事もこれと同じく思ふべし、曰く『我等の主イイスハリストスの恩寵、神父の愛、及び聖神の親與』と（コリンフ後十三の十三）されば こゝには次第順序の守らるゝを認むべし。けだし神聖なる三者は、神聖なる仁慈の助によりて己を清潔に守る靈魂に居らんしかれども其居るは彼が自から己に有る如きを以て居るに非ず、何となればこは凡の造物の爲に容るゝ能はざるによる、乃ち人の才能と受け易きとにしたがひて居るなり。然るにもし人は神の旨に應ずるの生活より幾分なりともはなれて、神聖なる神を辱しむるならば、人の才智は靈界の樂より拋擲して退けられん何となれば神聖なる恩寵と愛と凡そ善なる神の作用は彼に滅少して、其靈魂が再び正しく行きて神の意を悅ばすを始むるに至る迄は彼自から

凌辱と誘惑と凶惡の諸神とに付されればなり。其後悉くの信認と謙遜とにより己の悔改をあらはして、終に恩寵の惠を新に賜はり、以前よりも更に多く天の樂をうけん、されど靈魂は凡の惡念に抵抗し、恒に主に附き、何を以ても神を辱しめずして、憂愁に生活するならば、かくのごときの靈魂は當然これと相準じて大に進歩し、得もいはれざる賜をうけ、光榮より光榮に、一の慰安より最完全なる慰安に進まん、然して其後ハリストスの完全なる量に達し、ハリストスの永遠の國に於てハリストスの完全なる當事者に數へ入れられて、間然すべからざる聖務執行者となるなり。

第二十九章

すべて此の見ゆるものに於て隱れて見えざるものゝ狀態と影とを想ふべし、即見ゆる殿に於て心の殿の狀態を想ひ、司祭に於てハリストスの恩寵の眞實なる祭の狀態を想ふべし。それ此の見ゆる聖堂に於て、もし最初に讀經唱詩及び其他聖堂の儀式と禮典のこれに先ずるあらずんば、司祭はハリストスの體と血との神聖なる機密を行ふべからず、またもしすべて聖堂の規則は實行せらるゝも、奥密なる聖體禮儀が司祭により成るあらずして、ハリストスの體を領するあらずんば、教會の規定の如く聖務は完成せずして、機密の勤も不充分なり。「ハリストアーニン」のことも此の如く了解すべし。もし彼は禁食と微醒と唱詩と凡の苦行と凡の德行に進歩したれど、其心の祭壇に於ては充分なる感情と心神の慰安とにより、恩寵を以て神の奥密なる作用の成るあらずんば、すべてかくの如き苦行の秩序は成るあらずして殆んど無益に歸せん、何となれば人は心中に奥密に生ずる所の神的の喜を有せざればなり。

第三十章

禁食は美なる行なり、微醒は美なる行なり、苦行と旅行の生活もこれと同じく美なる行なり、これ神を愛する者の生活の初實なり。さりながら獨り此の如きの行に敢て依賴するは全く無智なり。我等は或る恩寵をうくれども、我等が內部に潛伏し居る惡習も前文にいひし如く狡猾なり、されば隨意に位置を讓り、其の欲する如く働かず、反つて人をして其智を既に清潔に達したるものとなし、以て自己の完全に自負せしめて、其後强盜の如く人を襲ふて、幽暗の地に落すこと往々これあり。人は二十年賊を働き或は軍務に服するあらば、敵の爲に詭計を如何に設くべきを知り、身

を隠し、豫め謀りて伏兵を置き、敵の後に廻り、不意に圍んで殺すこと屢々これあるなり。矧や世に最早數千年を經たる罪は靈魂を殺すを以て己の爲に最重要なる事と爲し、よく豫め謀りて、かくの如きの伏兵を心の隠處に置き、暫時潜みて働かず、靈魂をみちびきて己が完全に自負せしむるに巧なり。ゆゑにパリストス教の主義根本は次の如し、もし誰か義の行を悪く實行するあらんも、これに安んせず、これに多く依頼せずして、或る大なる事を爲し遂げたりと思はざるにあり、またもし誰か恩寵をうくる者とならん時は、己を以て最早目的を達して飽足れる者と爲さず、其時にも飢ゑ且渇き、哀みて涙を流し、全く傷める心を有するにあるなり。

第三十一章

靈神上の情況を左の如く想ふべし。王の家ありと假定せよ、彼には種々の第宅も若干の玄關も、他の外部の住所もあらん、其より更に順序により内部の諸室あるべくして、其内には例の如く紫衣と財寶の藏せらるゝあり、其より更に最内部なる室ありて王の居住の爲にあらゆる裝飾の施しあらん、然るに誰か外部の第宅と住所とに入りて、内部の室に達したりと思ふならば誤りならん、かくの如く靈神上に於

ても此と同じきあり。もし誰か己の腹及び睡眠と戰ひ、唱詩と祈禱とを恒に務めんに、最早目的を達して、慰安を得たりとは彼等思はざるべし。何ぞや、尚玄關にあり、又外廷にありて、王の紫衣と財寶の藏せらるゝところにあるに非ざればなり。もし彼等は或る靈神上の恩寵を賜はりしならば、これ亦目的を達せりとの思を以て彼等を欺かざるべし。ゆゑに汝は寶を此瓦器の中に發見したるか、神の紫衣を衣たるか、王を見て慰安したるか、これを試みんこと肝要なり。けだし復想ふべし、即盆魂は或る深さと多くの部分とを有するあり、入り來りし罪は其の悪くの組織と心の意念とを占有すれども、其後人が神の恩寵を蒙ぬるときは、恩寵の來りて占有するは大概靈魂の二の部分なるを想ふべし。此により無經驗なる者は此恩寵の爲に慰められつゝ、靈魂のすべての部分が恩寵に占有せられ、罪は全く根絶せられたりとの思に陷る、しかれども靈魂の大部分が尚罪に占領せらるゝを彼は知らざるなり。けだししば〳〵説明せし如く、恩寵の不斷に作用するは目の身體に作用する如くなるべきも、才智を竊み去る悪習もこれと同じく作用すればなり。ゆゑに能く思慮せざる者は恰も或る大なるものを既にうけたる如く、己を高く思ふて、清潔の極點に達せし者の如く自から高慢す。さりながら此事に於て眞理が彼を義とせん爲

には更に多くの要するものあり。けだし先の說教にて示したる如く、これ亦サタナの詭計の一なるによる。即サタナが或る時に位置を隨意に讓りて、通常の働をやむるは、其意苦行者をして其完全に於るの自負心を起さしめんとするなり。さりながら葡萄園を作る者は同時に果實をも收むるには非ず。又種子を地に播く者は收穫を直ちに得るに非ず。何ぞや、新に生れたる嬰兒は豈直ちに完全に達するか。イエスを仰ぎ觀よ。ハリストス、神の子、及び神は如何なる光榮より降りて如何なる苦難といかなる罵詈と十字架とをうけ給ひしや。然るに此の謙遜の爲に更に稱揚せられて父の右に坐し給へり。されども姦惡なる蛇は神とならんとの望を最初アダムに播きたる爲に此の自負により彼を如何なる汚辱に落したりしや。ゆゑにこれを心に想ふて汝の能くするだけ自から己を防衛すべく、常に己を謙遜して、悔悟の心を有せんことを力むべし。

第七　說教

智の自由の事

第一章

ハリストスが地獄に下りて、かしこに抑留せられたる靈魂を救ひ給ひしをきくときは、これを以て目下行はるゝ所のものより遠き事と思ふなかれ。心は即墓にして、重く苦しき暗黑の爲に圍まれたる意念も才智もかしこに葬むられたるを想ふべし。ゆゑに主は地獄に於て主に呼ぶ所の靈魂に來り、即心の深きに來りて、かしこに於て死に命じていはん、『我を尋ねたる靈魂の繫がれたるを解くべし、我能く彼等を救はん』と。其後靈魂に横はれる重き石を突離して、墓を啓き、實に死せる靈魂を甦らし、惡くの光を奪はれて獄中に押籠められたるものを自由にしたまはん。

第二章

サタナは汝を慫慂し、汝の心中に於て談論すること屢々これあり、ひへちく、『汝は惡

事をなしゝこと幾ばくぞ、汝の靈魂は不法に滿てられ、多くして且最重き罪に苦しめらるゝを認識せよ』と。しかれども此の際かくの如く行動し、謙遜の狀に托して汝を絶望に落すに盡力するは何者なるを汝は知らずんばあるべからず。破誡により て汝に罪を入れたる以來サタナは日々に接近すること人の人と接近する如く、或る可く靈魂と談論してこれに盲昧なる意見を勸め入れんとす。故に汝も彼に答へて次の如くいふべし『我は聖書に於て自ら保證を有す、神はいへり、我は罪人の死するを欲せず、轉じて(悔改して)生に入らんことを欲すと』(イエゼキリ三の十一)。けだし彼の降るはいかなる目的を有するか、罪人を救ひ、暗黑に在る者を照し、殺されし者を復活せしむるにあらずして何ぞや。

第三章

反對の力も神の恩寵も勸誘するものとしてあらはるれど、強て使しむるものとしてあらはれざるは、自由と自由なる願の我等に全く守られん爲なり。ゆゑに人がサタナの煽動により爲すところの惡行の爲にも、罰に服するものは復サタナに非ずして、人なり、何となれば人は惡に强て引入らるゝにあらずして、自己の意志により引誘せらるればなり。しかれども これと同く善なる行爲に於ても、恩寵は爲しゝ所のものを自己に歸せずして人に歸す、故に人に榮を有せしめて、人は自から己のために善なる行爲の原由者となるなり。けだし恩寵はすでに述べし如く强て使しむる力を以て人の意志を束縛して變ず可らざるものと爲さず、乃ち人に止まりて其意志の善行に傾くか、或は惡習に傾くの明白なるものとならんために餘地と自由なる願とをあたふるなり。けだし律法は天性のためにあたへらるゝに非ずして、善にも又惡にも傾くを得べき意志の自由のためにあたへらるゝなり。

第四章

靈魂を守りて、これを汚穢なる且姦惡なる意念と暗談するより預誡せんこと肝要なり。身體は汚行をなさんために他の身體と相合して汚さるゝ如く、靈魂も姦惡汚穢なる意念と親み、これと相和して、たゞ其姦計に同意するのみならず、凡の惡習にも例へば不信、欺瞞、虛榮、忿怒、嫉妬、及び誹論にも同意して、敗壞せらるゝなり。凡の肉と神との汚より潔くすべし』(コリンフ後七の一)とは此を意味するなり。けだし鄙猥たる意念を以て心の秘密に行はるゝ敗壞と淫行のあるを思ふべし。されば大なる

使徒が『人もし神の殿(即體)を毀たば神は彼を毀たん』(コリンフ前三の十七)といへる如く、鄙猥なるものに同意して靈と智とを敗壞せしむる者も、罰に服せん。ゆゑに身體を見ゆる罪より守ることも、靈魂を鄙猥なる意念より守ることも、共に肝要なり、けだし彼はハリストスの新婦なればなり。『蓋我爾等を一の夫に聘定せり、淨き處女としてハリストスに献げんためなり』(コリンフ後十一の二)。聖書にいふ所をきくべし、曰く『凡の守を以て汝の心を守れ』(箴言四の廿三)。また神の書の教ふる所に注意すべし『蓋不正なる意念は神より離る』(智慧書一の三)。

第五章

凡の人は己の靈魂を審問し、且これを試みて、彼は何れに傾くか其答を促すべし。さればもし人は心が神の法と合致せざるを發見するあらんに、神が約束の如くその清潔なる靈魂に住み給はんことを欲するならば、身體をも靈魂をも守りて敗壞せしめず、惡なる意念に同意せしめざらんことを全力を盡してつとむべし。けだし『居り且行かん』(コリンフ後六の十七)といへるは、是れ神が清潔なる善を愛する靈魂に約したまひしものなることと疑なし。

第六章

自己の所有する土地の爲に心を用ふる農夫は、先づこれを新に起し、荊棘を除き去りて、其後これに種子を下さん、かくの如く神より恩寵の種子をうくるを期する所の者も先づその心の地を淨めて、これに落ちたる神の種子の完全豐盛なる果實を產せんことを要するなり。しかれども人は預め此事を爲さずして、肉と神との すべての汚より己を淨めずんば、彼は猶血肉に屬して、生命よりは遠く隔たらん。

第七章

欺瞞、狡猾、惡計は敵より何れの方面より來るわらざるかを全く慧眼を以て視察せんこと肝要なり。聖神はパウェルにより凡ての者を獲んとして凡ての爲に凡てとなれり、かくの如く惡者も凡ての者を亡びに落さんとして凡ての爲に凡てとならんことを務むるなり。即祈禱する者と偕に彼が伴りて祈禱するものとなるは、祈禱に託し自負に陷れて誘はんが爲なり、齋する者と共に齋するは、自負を以て彼等を欺瞞に引入れんと欲するなり、聖書の知識を有する者とも同く亦これを企つるは、知識

に託して彼等を迷に陷れんと欲するなり、啓示の光を賜はりし者にも自ら亦同様なる者としてあらはるゝけだしいふあり『サタナも自ら光明の天使の貌に變ず』〔コリンフ後十一の十四〕と、これかくの如き光の外貌を以て詐惑して己に引誘せん爲なり、一言を以てこれをいはんに、凡ての者の爲にすべての形狀をおのれに受るは、此形像を以て己に從はしめ、美なるに託して滅亡を備へん爲なり。いふあり『諸の謀と凡そ神の知識に逆ふ高慢とを破る』〔コリンフ後十の五〕見るべし此の高慢者は神を眞に認むる者を貶せんとする其意の大膽なるを何れまで及ぼさんとするかを、故に凡の守を以て其心を守り、多くの明悟を神に願ふべし、凶惡の奸計を暴露し得るの力を我等にあたへ給はん爲なり。また明悟と共に智と意念とを不斷練習開拓して、これを神の旨に應せしめんことを要す。此の如く高尚にして尊敬すべきの行爲は他にあるなし、けだしいふあり『其の所爲は光榮なり、美麗なり』〔聖詠百十の三〕。

第八章

神を愛する靈魂は、すべて善なることをなすならば、おの〳〵その行爲を常に己に歸せずして、神に歸するなり。ゆゑに神も亦自己の方より靈魂の健全公正なる理解と認識とを見て、凡の行爲を靈魂に歸し、恰も靈魂が自ら勞して自らすべてを作成せし如くして、報酬を平均するなり。しかれども、もし神は我等と裁判をなさんと欲するならば、眞寶に人に屬するものは何もあらざらん、何となれば財産も、すべて此世に於て人が善を爲すを得る空しき幸福も、地も、すべて地上にあるものも、身體も、靈魂も神に屬すればなり。されば他の一切の物のみならず、己の存在も人は憐によりて有するなり。是故に人が權利によりて自ら誇るべきもの、或は己を義とするを得べき如何なる私有物も人にあるなし。さりながら神は人々の獻ぐるものを受くること、大なる禮物の如くし給ふ、ゆゑにもし靈魂は物の關係を善く認識し、神の爲に勞して如何なる善をなし、何事を理解し、且認識するも、すべてこれを神に歸して、すべてを神に屬するならば、獻ぐるものによりても神に最悅ばるゝなり。

第九章

イズライリは主宰に對する健全の信仰を相當に有せしには非るも、一見したる所或る程度に於てこれを有し、主宰の意に適したる間は、火と雲の柱は彼に先ち、海は其前に退避して、他の奇蹟も多く彼の爲におこなはれたりき。しかれども神に對す

る忠義を破るや、敵にわたされて、苦役を負はされたり、靈魂をも此の如く想ふべし、彼は恩寵により神を認識して、最初は多くの汚穢より淨められ、其後恩寵の賜を當然にうくべきものとなりたれども、天の夫に對する當然の貞實を終に至るまで守らずして、既にうけたる生命をうばゝれたり。げだし敵は此の如き階段に達したる者にも起ちて抗するを得ればなり。ゆゑに恐懼と戰慄とを以て己の生命に注意を加ふるを出來るだけ盡力すべく、殊にハリストスの神をうけたる者は小なる事をも大なる事をも輕忽になすべからず、主の神を憂ひしめざらんためなり。眞實は自ら言ひ給へり、『一の悔改むる罪人のために天に於て喜あらん』と（ルカ十五の十）永生をうばゝるゝ一の靈魂の爲に悲もかくの如くならん。

第十章

靈魂が恩寵を賜はりしときは、認識と理解と分別とは靈魂の爲に殊に有益なり、しかれども神が靈魂に其願の如くこれを與ふるは、靈魂が怠惰に神に事へて彼をうくるを賜はり、怨惡の爲に竊み去られず、無智により躓かず、怠慢と神を畏れざる生活の爲に正路を失はずして、主宰の旨に逆ぶて何事もなさゝらんが爲なり。

第十一章

情慾の勢力、即詛詈と罪なる暗黑の此世の神は肉體の念慮に滿たされたる人に宿る如く、これと相反して、光を發する神の勢能と力とは聖にせられたる人に居ることを、聖書にいへるごとし、曰く『ハリストスが我の中に語る證を求むるによる』（コリンフ後十三の三）、またいふ『既に我生くるに非ず、即ハリストスは我の中に生くるなり』（ガラティヤ二の二十）また『ハリストスに於て洗をうけし者はハリストスを衣たり』（ガラティヤ三の廿七）而して主はいへり『我と我が父とは來りて彼に居住を爲さん』（イオアン十四の廿三）しかれども此事のこれを賜はりし者に成るは、隱然なるに非ず、又無勢力なるに非ずして、力と眞實とにより成るなり。げだし先に律法は實在にわらざる言を以て人々を教へ、撞ひ易からざる重軛を彼等に駕して、何の助も與ふるあたはざりき、即神の力を給するわたはざりしなり、げだし言ふあり『肉に據りて弱みたる律法は力なかりしが故に云々』（ロマ八の三）しかれども、ハリストスの來りし以來、恩寵の戸は、實に信ずる者の爲に啓かれて、神の力と神の勢能とを彼等にあたへらるゝなり。

第十二章

けだし第一天然の仁慈なるパリストスが神聖なる門徒に神の賜を降し遣はしたるにより、此時より彼の神聖なる力は悉くの信者を庇蔭し、其靈魂に居住して、彼等を罪の情慾よりいやし、暗黑と死者の如くなれるとより救へり。何となれば此時に至るまで靈魂は多くの疵を負ひ、獄に鎖されて、罪の曖昧に占有せられたればなり。主の居住すると善なる神の力が其全力と疑なきとを以て有効に庇蔭するとを未だ賜はらざる靈魂は今も暗中に在ることと無論なり。しかれども主は神聖なる神の恩寵の降りし者等に其智の深き處に定住することと、恰も靈魂の如くなるを致す、けだし神聖なる使徒はいへり、『主に附く者は主と一神とならん』(コリンツ前六の十七)また主も自らいへり、『我と汝と一なる如く彼等も我等に於て一とならん爲なり』(イオアン十七の廿一、二十二)これかくの如く惡習を以て低うせられたる人性に對する何等の仁慈なるか、何等の恩惠なるか。しかれども靈魂は放肆なる情慾に己を委して、恰もこれと一たる如くなり、自己の意志を有せりといへども、其欲する所を爲すあたはずして、パウェルもいふ如く、『我が欲せざる所は我之を行ふ』(ロマ七の十五)ならば、剣や神の力が既に聖にせられてそれに堪ふべきものとなれる靈魂に來り助くるときは、人の意志は神と一たらざらんやけだし靈魂は實に其時主の靈魂の如くならん、何となれば自由に且全くの心情を以て善なる神の力に己を任し、其力がこれに主たれば、最早自己の意志によりて行動せざるにより、いふあり、『誰か我を神の愛より離さん』(ロマ八の三十五)と、言意は靈魂が聖神と合一になるときは誰かこれを分離せんやとなり。

第十三章

ゆゑに神によりて生れたる神の子と稱せらるゝを得んが爲に、パリストスに背んと欲する者は或は身體の病或は人々よりの侮辱、罵詈、或は亦見えざる敵の詭計の如き遇ふ所の患難は特に大量と忍耐とを以て堪へ忍ばんことを要す。けだし神の照覽により種々なる患難を以て靈魂を試むるを許さるゝは、主を眞誠に愛したる靈魂の明白にして疑なきものとならんためなり。世の元始より、パトリアルフ等も、豫言者等も、使徒等も、致命者等も、誘惑と患難の來き路を通り、これを以て神の意を悅ばしめたるは以て證と爲すべし。けだし聖書にいふ、『子よ、前みて神につかうまつ

らんと欲せば、汝の靈を誘惑にそなへよ、汝の心を治めて堅固なるべし。〔シラ二の一〕。また他の處にもいふ、凡そ汝に蒙らせらるゝものは神なくんば何もあらざるべきを知りて甘じてうけよ〔四〕。ゆゑに神の意に適せんと欲する靈魂は、他の何物よりも殊に忍耐と希望とを蓄へんこと肝要なり。げだし凶惡の詭計は常に同一なり、即患難の時に當り、我等を失心に陷いれて主に對する希望をうばふにあるなり。しかれども神に依頼する靈魂を試誘の爲に崩りて失望に至らしめんことを神は決して許し給はず、げだし使徒はいへり、〔神は信なり爾等が誘はるゝこと爾等の能くする所に過るを容さず、乃試誘と共に逃るべき法をそなへん、爾等の堪ふるを得ん爲なり〕〔コリンツ前十の十五〕。されば惡者が靈魂を惱ますは、其欲するだけ惱ますにあらずして、神に容さるゝだけに止まるなり。丑つそれ如何なる戯貨は驢馬に擔ひ易かるべく、如何なるものは駱駝に擔ひ易かるべきかは人々の知る所にして、其力に叶ふものを彼等に懲せんとす、また土器も幾時間火中に堪ふべきは陶工の知る所にして、緊要の時より長く置きて裂罅を生せしめず、また充分に燒けざる先に取出して、用に適せざるものとならしめざるべし。我言ふ、人にこれだけの通識のあるあらば、いはんや各靈魂が天國の爲に大に練達して大に要用

なるものとならんために、これを幾ばく試誘に付すべきかは、神の智慧には限なく知らるゝにあらずや。

第十四章

それ大麻の莖はこれを打つ久しからずんば、これより最精緻なる絲を紡ぐに應用し得ざるべし、じかれどもいよ〳〵これを打ちて、いよ〳〵梳分くる程は、彼は純白になりて、事の用に立たん、又粘土より製作する器は、火中にあらずんば、人々の使用に適せざるべし、また嬰兒はいまだ世事に練達せざれば、作ることも、植附することも、播くことも、或る他の世事を遂成すことも能はざるべし、かくの如く靈魂もその幼稚の故に、主の仁慈により、神聖なる恩寵に與かるものとなりて、神の甘美と慰籍とに充たさるゝといへども、凶惡の諸神よりする種々の患難を以て誘はれず、又試みられずんば、尚幼稚にして居るべく、言はゞ天國の爲に要用にあらざることしば〳〵なり。げだし神聖なる使徒はいへり、〔爾等もし衆の與かる所の懲戒に遇はずば、乃私生の子にして、嫡子にあらず〕〔ヱウレイヤ十二の八〕。これによりて見るに試誘も忠難も人に其利益の爲につかはされ、靈魂をしていよ〳〵練達堅固なるものとなら

しむるなり。されば、もし靈魂は主に對する希望を以て終に至る迄忍耐するならば、神的許約と有害なる慾より免るゝ救とを捉へざる能はざるべし。

第十五章

多くの拷問に處せられたる致命者等は、死に至る迄己の堅固なるをあらはして、これにより榮冠をうくるに當るものとなり、最重き辛酸を嘗むる程はいよ〳〵神の前に大なる榮冠と大なる勇氣とをうけたりき、これと同じく種々の患難にわたされたる靈魂も或は人々より顯然と被むるもの、或は不適當の意念の爲に心中に起るもの、或は身體の病により生ずるものを終に至るまで耐忍するならば、致命者と同じき榮冠と同じき勇氣とを賜はらん。けだし致命者が人々より苦をうけし如く、此等の靈魂も惡神の作用の爲に患難の苦をうけん、彼等は敵より來る患難をいよいよ忍ぶ程は來世に於ていよ〳〵大なる榮冠を神よりうくるのみならず、此世に於ても善なる神の慰籍を賜はらん。

第十六章

けだし生命に入る路は窄くして苦しきこと此の如し、ゆゑに此路を進行する者の多からざらんことも疑なきにより、彼等は天にそなへられたる幸福を希望して、惡者の諸の試誘を堅固にして耐忍せざるべからざるなり。けだし我等は患難を幾ばく耐忍したりとも、これを以て彼の或は將來の約束と同價なるもの、或は猶此世に於ても善なる神を以て靈魂にわたへらるゝ慰籍と同價なるもの、或は有害なる情慾の暗黑より、或は負債より、即我等が罪の多きより救はるゝ救濟と同價なるものを報ゆるを得んや。言ふあり、『今の時の苦みは我等の中にあらはれんとする光榮に比ぶるに足らず』（ロマ八の十八）主の爲には堅固にしてすべてを大に忍耐すべし、所謂勇士の如く我等が王の爲に死を恐れざらんことを要するなり。けだし我等は世の爲及び浮世の事の爲に占有せられたる時は如此の凄慘に陷らざりしかど、今は來りて神に事へしにより、此の種々多樣なる試誘をうくるは何故なるか。見ずや此等の患難はハリストスの爲なるを、何となれば敵が我等の希ふ所の報賞の爲に我等を嫉み、我等の靈魂に懦弱と怠慢とを入れんを欲するは、神に悅ばるゝ生活により望む所のものをうくるを得しめざらん爲なればなり。凡そ我等に對する彼の詭計は我等を救援するハリストスを以て破らるゝなり、我等の防護者たり及び保佑

者たる彼が此世を如何に渡り給ひしかを思ふべし即誹謗せられ窘逐せられ終に罵詈せられたる彼は十字架の上に於て耻づべき死を以て一切を成したまへり。

第十七章

すべての患難と試誘とを易すく忍耐せんと欲せばハリストスの爲に死することが我等の爲に大に願はしきものとなるべく、我等が目前に常に像め錄さるゝものとなるべし。けだし十字架を取りて彼に從ふべし、即死に設備するものとなるべしとの誡命を我等に與へられたるもかくの如し。もし此の如く心が傾くならば、すでにいひし如く、凡の隱れ顯はれたる患難を耐忍するは最易かるべし。けだしハリストスの爲に死せんとの願を有する者は辛苦と患難とを見て傷心すべきにや。故に患難を以て苦しきと思ふは、ハリストスの爲に死することが我等の爲に未だ願はしからずして、我等の意がハリストスに固く附かざるによる。ハリストスの鬪者とならんを願ふ者は同じく亦ハリストスの苦難にも競はんことを大に願ふべし。故に己を固く證して主を愛すと爲す者は、主を希ふと共にすべて遇ふところの患難を勇氣にして耐忍するのみならず、甘んじてこれを耐忍するにより認識せらるゝなり。

第十八章

ハリストスに來りし者は、其心の望まざるにも拘はらず、まづ強ても己を善に誘引せんこと肝要なり。けだし謊らざる主はいへり、『天國は力を以て得らる、力を用ふる者はこれを奪ふ』（マトフェイ十一の二）また彼は『窄門に入る』に力を用ひんこと肝要なり（ルカ十三の廿四）。ゆゑにすでにのべし如く不本意にも己を德行に強ひんこと肝要なり、即愛を有せざる者は愛に強ふべく、温柔の足らざる者は温柔に強ふべく、慈悲仁愛の心を有し、耻辱輕蔑を忍耐し、人々が侮る時は寛忍なる者となるに己を強ひんこと肝要なり。然らば神は我等が祈禱に於ける能力を未だ有せず、神的祈禱を未だ獲ずして、此の如く奪鬪し、我等が心の抵抗するに拘はらず、力を用ひて己を善に誘引するを見給ふときは、眞實なる祈禱を與へ、憐憫と忍耐と大量とをあたへ給はん、一言にていへば神の諸の効果を我等に滿たしめ給はん。しかれどもし誰か他の諸德に乏しきも、祈禱の賜を得んが爲にたゞ一の祈禱にのみ己を強ひ、怠慢にして温柔の事、謙遜の事、愛の事、及びすべて此の尊貴なる德行の種類の事を慮らず、

更に又ハリストスを信ずると望むとに堅固なる者とならんことをも虞らずんば、かくの如き者は其願の如く善なる神を以て祈禱の恩寵を一部分與へられて、悅樂慰安すること往々これありといへども、他の悪くの善徳をうばゝるゝ者とならん、何となればすでにいひし如く己をこれを求むるに強ひずして、これが爲にハリストスに祈願せざればなり。けだし前文にいふごとく意に反してさへこれに己を強ひ、これを賜らんを神に願ふことの肝要なるのみならず、言論の無益且全く不用にして、舌に不適當なる所以を辨へ、口を以ても心を以ても神の言を常に學ぶに己を強ひんことも肝要なり、また激怒せず、高聲を發せざるに己を強ひんこと肝要なり、けだし言ふあり、〔凡の苦很、忿怒及び誼譏は汝等の中より去らるべし〕〔エフェス四の三十一〕しかして亦誰をも譏せず、罪せず、自ら高ぶらざるに己を強ひんこと肝要なり、然る時は主はすでにいひし如く人の己を操持し、強て己を導くを見て、これより先存する所の奸悪の故に強ふるといへども爲す能はざりしものを勞ならして便利に成すを賜はらんこと疑なし。其時は此等の諸徳は變化して人の爲に天性の如くなるべし、何となれば主は約せし如く來りて人に居り（人も亦主に居り）て、自ら大なる便利を以て人に誡命を遂げしめ給へばなり。

第十九章

先に説明したる如く祈禱に己を強ふるも、謙遜と愛と温柔と其他の徳行の凡の鍵鎖に己を習はさず、且之に己を強ひざる者は、左の終を得ん。時として神聖なる恩寵は願の如く其者に臨むことあり、何となれば神は善なれば、願ふ者に其願ふ所のものを仁慈を以てあたへ給へばなり、しかれども前にしるしたる諸徳を練磨するの習慣を求めず、これを以て己の爲に慣行となさずんば或は其受けたる恩寵をうばはれ、高慢によりて陷るべく、或は其恩寵に進歩成長せざるべし、何となれば謙遜と、愛と、温柔と、凡そ順序によりて示されたるハリストスの聖なる誡命は言はゝ善なる神の爲に住所ともなり、安息ともなる可ればなり。ゆゑに此の諸の徳行に成長して完全に到達せんと欲する者は、前に言ひし如く、己を強ふべく、又頑項にして背戻する己の心を謙譲なるもの及び神に從順なるものとなさんことに盡力すべし。けだし誰かかくの如く最初に己を強ひ、其靈魂の頑なるを善良なる品性を以て和げて、神に從順なる者となり、如此の心情を以て願ひ且祈るならば、神を以て其者に與へられたる祈禱の賜は其謙譲に安んじ止まりて、成長し、且花咲かん、これ彼が愛と

愛に富める溫柔の外別に己れに索めたるものなり。さらば其時神は此等をも彼に賜はん、即是より先彼が己を强ひて索めたる眞實なる謙遜と僞らざる愛と溫柔とをも敎へん。此の如くなれば主によりて成長し、完全なるを得て天國に當る者となちん、何となれば謙遜なる者は永く落ちざればなり。然り己をすべての者より卑く思ふ者は何の處にか落つべき。此によりて見るに高慢は大なる卑辱なる如く、これと相反して謙遜は大なる高尙、危險なき尊貴なり。

第二十章

眞に神を愛する者が天國の爲に神に事へんと自ら決心するは、賣買して利益を得んが爲にする如くなるに非ず、また罪人の爲にそなへられたる罰の故にも非ず、獨一の神及び己をつくれる造成者に心服して、主宰と造物主の意を悅ばしむるは僕の本分なるを本性の法によりて自認するによるなり。されば彼等は其遭遇する凡ての場合に於て、大なる善智を以て行動す、何となれば神の意に適せんことを願ふ者の爲に妨は多ければなり。たゞ貧と不名譽のみならず、富と尊敬も亦同じく靈魂の爲に試惑とならん、或は慰籍も又恩寵の力により靈魂を圍繞する此安息も、もし此を賜はりし靈魂がこれを自認せずして、大なる謙遜と善智とを以てみちびかれずんば、靈魂の爲に更に誘惑となり、妨げとなるは甚だ容易ならん、何となれば惡は恩寵に虛托して心靈の力を弱め、怠慢と油斷とを心中に生ぜしむるに巧なればなり。ゆゑに恩寵に與かる靈魂が虔恭にして善意なるものとならんこと、恩寵を尊んで適當なる効果を自らあらはさんことを恩寵は自ら要求するなり。ゆゑに靈魂はたゞ患難のみならず安息さへも彼の爲に誘惑とならんとするを恐るゝなり。けだし造物主が彼と此とを以て靈魂を試みるは、人の彼に對する愛が利益に基くには非ずして、たゞ彼獨りを實に大なる心服と尊敬とに當るべき者と認むるによることの明白にあらはれん爲なり。さりながら怠慢にして信仰に乏しく、智識の幼稚なる者の爲に永生の妨げとなるべきものは、左の如し、即悲哀なり、困難なり、疾病なり、貧窮なり、汚名なり、然して又一方よりは富と、名譽と、人々よりの頌讃、及び其外惡者が隱然と攻擊する戰なり、かくの如く此等のものは篤信なる、善智なる、及び勇氣なる者には反つて神の國に達する爲に特に助となるを見ん。けだし神聖なる使徒の言に依るに、「神を愛する者には凡の事助けて善に進ましむるなり」（ロマ八の廿八）。しかれども眞の愛神者がすべて世に於て妨碍と思はるゝものを破り、これに勝ち、

これを超えて、獨一神聖なる愛に抱かるゝは、これによりてあらはるゝなり。げだし神聖なる預言者はいへり『惡人の網我を圍みたれども、我爾の律法を忘れざりき』（聖詠百十八の六十一）。

第二十一章

ハリストス教の完全なる奧義が神聖なる勢能により、即神の啓示と能とを以て天の光に照明せらるゝにより、おの〳〵信ずる靈魂に實驗的に審知せらるゝ所以を神聖なる使徒パウェルは最詳細に且分明に象示せり。これ靈神上の光照はたゞ聰明なる認識を以てのみ得らるべしとの考を以て、或者の無知と怠慢により恩寵の完全なる奧義が悟り得べからざるものとなりて存する危きにかゝるを免れんが爲なり。ゆゑに認識を適當に象示せんが爲にモイセイの面を圍みたる神の光榮をあらはして例となせり、曰く『若し死の役事、文を以て石に書されたる者は光榮なる者にして、イズライリの諸子がモイセイの面を、其面の移ろふ光榮の爲に見ること能はざりしならば、況や神の役事は更に光榮なる者たらざらんや、蓋若し定罪の役事は光榮ならば、稱義の役事は光榮なること益盛なり、舊光榮ありとなしゝ者は其分に於て已に光榮ありとなさず、後の光榮の更に愈れるに緣りてなり、蓋若し移ろふ者光榮たらば長らふる者は益光榮たるなり』（コリンツ後三の七至十一）。さて移ろふ者と名づけしは死すべきモイセイの體を圍みたる光榮をいふなり。其後これに加へて『故に我等是の如き望ありて毅然として行ふ』（同上十二）といひ、而してそれより少しく下に啓示によりてあらはるゝ彼の神の不死なる光榮は、不死にして移ろはざる形狀を以て、今不死なる內部の人を適當に照し始むるを示す。故にいふ完全なる信仰に循ひ、神より生れたる『我等は皆露れたる面を以て主の光榮を鏡に於けるが如く觀て、其像に變せられ、光榮より光榮に進む主の神よりするが如し』（同上十八）。露れたる面を以て、即心靈の面を以て觀るべく、而してもし誰か主に向ふならば其怕は除かるゝなり。主は神なり（十六、十七）。これアダムの犯罪によりて人間に位置を占めたる暗黑の怕の靈上に掛るを明に示す。然れども今は神の照明により其怕は篤信にして實に適當なる者の靈魂より除かるゝなり。ハリストスの來りしも此理由による、何となれば實に信ずる者の此の如き聖域に到り達せんことを神は喜び給へばなり。

第二十二章

かくの如き靈神上の照明は、これたゞ思想の啓發と、又先に述べたる如く恩寵の光照なるのみにあらず、恒久にして斷えざる實在の光の心中に輝く照耀なり。けだしいふあり、『暗より光の照ることを命せし神は我等の心を照せり、パリストスの光榮を知る知識を以て我等を輝さん爲なり』(コリンフ後四の六)、またいふ、『我が目を明にして我を死の寐に寐ねざらしめ給へ』(聖詠十二の四)、これ即靈魂は身體と分離して、罪の死の帕に暗まさるべからずとなり、左の處もこれに同じ、曰く、『我が目を啓き給へ、然せば我爾が律法の奇蹟を觀ん』(聖詠百十八の十八)同じく亦いふ、『爾の光と爾の眞實とを遣し、其をして我を導きて爾の聖山、爾の住所に至らしめ給へ』(聖詠四十二の三)、またいふ、『爾が顏の光を我に顯し給へ』(聖詠四の七)、其他の處にも聖書はこれと同意義をあらはす。

第二十三章

福なるパウエルを途上に於て環照し行實九の三)、これによりパウエルが第三重の天に取去られ(コリンフ後十二の二)、得もいはれざる奧義を聽くを得たる彼の光は思想と認識の或光照には非ずして、善なる神の能力を以て靈魂を照す實在の照明なり、されば此の照明の餘光に得堪へずして、肉體の目は盲となりき。かゝる照明により凡の認識の啓發はあたへらるべくして、神は適當にして非意に適する靈魂の爲に實に認めらるゝなり。

第二十四章

勉勵と信仰の爲に猶此世に於ても恩寵の力と無疑とによりパリストスを完全に衣るを賜はり、不朽なる形像の天の光と合一したる靈魂は今も自ら天の悉くの奧義を認識するに實在をもて導き入れらるゝなり、しかれども復活の大なる日に於ては、彼の同じく天に屬する光榮の形像を以て表揚せられたる身體、錄する所の如く、神を以て天に取去られて、パリストスの光榮の體に應ずるものとなるを賜はりし身體もパリストスと同じく闘ぐべき永遠にして相續的にあらざる國を有せん。

第二十五章

誰か勉勵と信仰との爲に聖神の天の光榮をたまはり、善なる行を以て靈魂を飾る

ならば、其に循て彼の身體も其日に於て表揚に當るべきものとならん。げだし人が今日己の內部に集めたるものは、其時外形にあらはるゝこと、冬期に於て樹の內部にかくれたる果實の春に至りて外部にあらはるゝ如くなるべきは先にも說明せし如し。ゆゑに今猶恰も聖者の內部に印せられたる如くなる神の神に似たる形像は、其身體をも外見に於て神に似たるものとなし天に屬するものとなさん。しかれども汚されたる者と罪ある者の靈魂にかゝる所の世の神の帕は情慾の惛むべきものを以て其智を昏まされたる不具なるものとなして〔哀哉我〕身體をも外見上昏まされたるものとし惡くの耻を滿たされたるものとしてあらはさん。

第二十六章

アダムの罪惡により、神の仁慈が彼を死に定罪するや、彼は先づ靈魂に於て死に處せらたり、何となれば靈魂の聰明なる感覺は彼に於て消滅し、天に屬する靈神上の樂を奪はれて、死せるが如くなりたればなり、しかして其後九百三十年を過ぎて、身體の死もアダムに及びたりき、かくの如く今も救世主の十字架と死とを以て人間と復和したまひし神は、實に信じたる靈魂を猶肉體にある間に起して、天の光と機密とをうけてたのしましめ、亦其聰明なる感覺にも恩寵と光榮の神聖なる光を以て視覺を恢復するを得しめ給ふ、然して其後身體も不死不朽なる光榮を衣るなり。

第二十七章

此世に遠ざかり、尊正善良に生活すれども、初造者の悖逆のために我等は皆罪ありて、情慾の帕、即使徒が當然に名づけて死といへる〔ロマ八の六〕肉體の念慮を猶己に有するにより、恰も夜行く人の如く、星の光を以て照さる、即神の誡の光を以て照さるゝなり。彼等は暗より全く免れしにあらざるものとして、すべてを明丁に見るあたはず、故に許多の勞と大なる信とを以て德行の爲に慮り、義の太陽たるハリストスに其心中を照し始めんことを祈願すること肝要なり、然らば心中の獸の我等を襲ふ種々多樣なる襲擊をも、又不朽なる世界の美麗のたゞ冥見し得らるべくして言難く人を樂ましむるものをも、彼等は全く精確に見るを得べくして、德行の最上に達して聰明なる光が其心に有効に照し始めたる者の爲にこれ等は洞然明白なるものとならん。げだし福なるパワルのいふ如し、曰く〔堅き食は乃熟練を以て善惡を別つことに習ひたる感覺を具ふる成人の用ふる所なり〕〔ヱウレイ五の十四〕また

神聖なるペトルもいふ、『我等に更に確なる預言者の言あり、爾等がこれを暗き處に耀く燈として、天明け、晨星の爾等の心に出づるに至るまで顧みるは善し』（ペトル後一の十九）。然れども多くの人は夜行く所の者と全く異るあらずして、凡の光が減少したる時に當り、暫時の照耀をさへ益用せず、即其靈魂を照す力を有する神の言さへ益用せずして、殆ど群者に類するあり。物質上の束縛と浮世の械繫とにつながるゝ此人々は神を畏るゝの心を以て支持せられず、德行の一をも練習せざるなり。けだし世の人々の中にも、前にいひし如く、信と神を畏るゝ心とに注意して、聖なる誡命を以て照さるゝこと、恰も或星を以て照さるゝ如くなる者は、暗の爲に全くは圍まれず、ゆゑに救の希望を有するを得ん。

第二十八章

それ人々は種々なる方法と營業とを以て世に富を積まん、或者は市尹の位により、或者は貿易を以て、或者は勤勞、耕作或は他の方法を以てせん、かくの如く心靈上に於ても順序はこれと同じきを想ふべし。一は天の富を積むに種々なる賜を以てすること、使徒の言に見ゆる如し、曰く、『我等に與へられし神の恩寵によりて我等賜を獲ること齊しからず』（ロマ十二の六）、しかれども他は獨一の神の爲に遂行する種々なる苦行と種々樣々の義にして善なる行とを以てするなり。さりながら金を掘る者をも知らずんばあるべからず、即彼等は己を富まさんとの善き望を以て、暫くの間己を少しく慰めて、大膽と忍耐とを以て其進行を成すなり。又たとへば傭人の如く、奢侈懶惰にして、落來る所のすべてを直ちに貪食すれども、非手にあるものを忍耐して遂行するをなさず、常に裸體赤貧にして徘徊するものあり、これ亦知らずんばあるべからず。かくの如き人々は恩寵をうくるの大なる準備と熱心とを有すれども輕浮にして、僅にこれに觸るゝや、最早飽滿を覺ゆる如く、勞を厭へる緩慢なる者としてあらはるゝにより、既に賜はりし恩寵をもうばゝるゝなり、何となれば懶惰と不活動と不注意と我儘とは今も常に認められ、來世に於ては恩寵に副はざるもの、善なる行をうばゝれたるもの、神の前に練達ならずして不名譽なるものとしてあらはるればなり。

第二十九章

人は神の誡命を犯して樂園の生活を奪はるゝや、直ちにこれに次で二樣の鏈鎖を

以て繫がるゝものゝ如し、即浮世の事と、肉體の快樂と、富と、榮と、友誼と、妻子、親族、生國、財産に於るの愛慕、一言を以てこれをいへば神の言が我等に自己の任意により脫せんことを命じたまひし凡の有形なる物に於る愛慕の鏈鎖を以て繫がれ、また無形なる鏈鎖を以ても繫がる、けだし凶惡の諸神は暗黑の或る鏈鎖を以て靈魂を束縛するによる、ゆゑに靈魂は神を愛することも神を信ずることも祈禱を以て益することも願の如くなるわたはざるなり。けだし初人の犯罪の時より見ゆるものに於ても見えざるものに於ても凡すべての爲に抵抗は我等衆人に入り來れり。ゆゑに人は從順なる耳を以て神の言に注意するを始め、浮世の事より遠ざかりて、凡そ肉體の快樂を捨つる時は、退かずして神の前に立ち、不斷に神と共に居りて、他の意念の戰と他の爭とが心の秘密に匿るゝを認識する才能をうけん。されば如此の苦行に居り、ハリストスの鴻恩を請願して、忍耐に次ぐに大なる信仰を以てし、これに加へて神の指示もこれと相合するときは、人は彼の內部の鏈鎖と障碍とより、又凶惡の諸神の暗黑より、即隱れたる情慾の働きより免れて自由を得べし。しかれども此の戰はたゞ恩寵とハリストスの力とを以て燼滅するを得べくして、神なくして自らこれより救はるゝことは人の爲にわたはざるべく、又意念の戰より免るゝこともわたはざるべし、しかれども意念に抵抗しこれを以て樂まざらんことは能くし得るなり。

第三十章

もし誰か此世の慮と種々樣々なる鏈鎖の爲にさゝへられ、有害なる情慾を以てみちびかるゝならば、我等先にもいひし如く、他の戰と他の見えざる爭の有るをみとむる認識より遠ざからん。望むらくは人は凡そ有形なるものより脫し、肉體の快樂より遠ざかり、退かずして主の前に立つを始めて、內部に生ずる情慾の戰と我等に隱るゝ爭とを認むる狀態に達せんことを。けだし我等が既にいひし如く、もしこれを認めずして、人は神の前に立つを其心を擧げて全く愛せずんば、此の隱晦有害なる情慾と內部の鏈鎖とを認めずして、疵を己に有し隱晦なる情慾をおのれに畜ふるも己を以て健全なる者と思ふの危きに居らん。しかれども肉慾と名譽とを輕んせし者は先づ能く此を認むる者となるを得て、其後信仰を以てハリストスに切願するときは神的武器と義の鎧と救の冑と信の盾と神劍とを天よりうけて、此のすべてに打勝たん。

第三十一章

我等をハリストスに對するの愛より誘出さんと試むる敵は、我等に對して詭計百出するなり。彼は或は凶惡の神の助を以て、內部の憂を靈魂に生せしめ、或は汚れたる許すべからざる意念を預め備へて以前の罪を記憶せしむるは、其意恰も靈魂を衰弱に陷れ、これに失望の念慮を徐々と沁入せんとするものゝ如し。即救を捉ふるは靈魂の爲に能はずして、此等の意念を靈魂は全く自分より生じて、他の凶惡の神の播くにはあらざるものゝ如く思はしめて、竊に其意を遂げんことを盡力するなり。ゆゑに敵は或は前文にいふ所のものを生せしめ、或は身體の勞を被らしめ、或は人々よりの詰責と憂患を考出さしめん。さりながら惡者が此等の火箭を我等に發する程は、我等は神の旨の有る所なるを確に知りて、いよ〳〵神に對する希望を以て奮熱せんこと肝要なり。即神に對する愛を以て燃ゆる靈魂を試練に付して、實に神を愛するや否やを試みんこと肝要なり。

第三十二章

此世の千年を不朽なる世界と世とに比すれば、全海の砂の中より一の砂子を取ること同じかるべし。且此を左の如く觀察せんことを要す。汝は獨り全地の王となり、全世界のあらゆる財寶を獨り領有するを得べしとせよ。また人類の存在の始は同じく亦汝が王たるの始にして、その終りは凡そ有形なるものと全世界の變化と變態なるべしと假定せん、何ぞや。もし汝に選擇をまかされしならば、汝は此國を以て彼の何等の過去ることも破壞せらるゝことも全くおのれに有せざる眞實不易なる國と交換するか。もし汝は思慮分別して、汝の爲に何れか有益なるを宜く酌量するの才能を有するならば、必ず此を交換せざらん。けだし「ふわり」人もし全世界を獲るとも己の靈を損はば、何の益かあちん（マトフェイ十六の廿六）知るべし何物も靈魂に易ふるあたはざるを、何となれば靈魂は獨り自ら（余は最早天國のことを言はざるべし）全世界及び此世の國より大に貴ければなり。しかれども靈魂を最貴重なるものと名づくるは何故なるか、神が其自己の性の神と合一親與をなさしめ給ひしは他の或る物に非ず、即或は天、或は太陽、或は星、或は海、或は地、或は他の如何なる有形造物にもあらずして、たゞ其造物よりも殊に愛する所の一の人なるによるなり。ゆゑに世に於て最大なるもの、即前文にいひし如く、獨り人にまかせらるゝ富も、全

地の領有も正しく考ふればこれを以て永遠の國に易ふるあたはずんば、多くの者が此を以て何の益にもならざる尋常なる物と同價なるものと思ふは何の據る所ぞ、例へば或る欲望と小なる名譽と大ならざる利益及びそれに類するものゝ如し、けだし誰か此世に於て何か愛する所ありて、その爲に繫がるれば、必ずこれを以て天國に易へん、且最惡しきはこれを認めて神となすこと錄していへる如し、曰く『勝たるゝ者は勝つ者の奴隷となる』(ペトル後二の十九)ゆゑにその聖なるすべての誡命に從ひて行き、靈を以ても體を以ても全く神に趨り附きて、十字架に釘せんことは最も肝要なり。

第三十三章

しかれどももし此の如くならば、この敗壞すべき名譽と、一日の國と凡そ其他のこれに類する暫時なるものは、これを願ふ者に於て多くの勞と汗とを以て求め得れども、ハリストスと共に限りなく王たると彼の得もいはれざる幸福を得るとは此を願ふ者勞も盡力もなくしてこれに大に進捗するを得る程廉價に且容易なるを汝は當然なりと爲すか。

第三十四章

アヽハリストスの來れる攝理は如何なるか、アヽ元始の狀態に回復して、我等が天性を復興するは如何なるか。ハリストスは人性の爲に初造なるアダムの價値を回復したるのみならず、(吁善なる神の恩寵は實に神妙高大なり)天の嗣業をもこれに賜へり、我等が天性を暗黑の獄より引出して、生命に至るの途と門とを指示せり、さればこれを叩き、これによりて入る者は天國に在るを得べし、けだしいふあり『求めよ、然らば汝等にあたへられん、門を叩けよ、然らば汝等の爲に啓かれん』(マトフェイ七の七)さらば凡そ願ふ者は、此門より入りて其靈魂を自由に引出さんこと難からずして、靈魂は其本來の意念をうけ、ハリストスと同居するにより己を富まし、善なる神の親與により彼を己の新郎の如く有せんこと難からざるなり。見よ主宰が己の像によりて造りたる人に對する得もいはれざる愛は如何なるか。

克肖なる神父　埃及マカリイ全書　終

明治三十九年一月十三日印刷
明治三十九年一月十六日發行

飜譯兼發行者　堀江復　東京市本郷區森川町壹番地
印刷者　久米川治三郎　東京市京橋區弓町二十四番地
印刷所　三協合資會社　東京市京橋區弓町二十四番地
發行所　正教會編輯局　東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地